

# ポケットモンスター 侵食される現代世界

キヨ@ハーメルン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何故かポケモンだけが生まれなかった現代世界に転生した元男、現アルビノ美少女というTSロリ娘は、ポケモンのお絵描きしたり、それを配信したりしながら過ごしてた。しかしあるとき世界の異変、存在しないはずのポケモン達が現代世界に現れるという異変が発生。主人公はそれにいち早く気づき、様々な人々を巻き込みつつ対処し、なんかちよいちよ勘違いされ、ときに真つ黒な陰謀に巻き込まれ、やがては——そんな話。

## 『注意！』

※本作の主要TS要素は闇深勘違いにあります。通常のTSものとは趣旨が違うので、ご注意下さい。それと、TS闇深勘違いは作者の趣味です。深い意味はそれ程多くはありません。

※設定上、ポケモン世界の人間は基本的に登場しません。オリキャラ注意。

※現代世界の混乱や近代兵器との対比等を主軸としている為、ポケモンバトルやゲットシーンが少なくなっています。かなり好き勝手やってる——安全の為にアンチ・ヘイト付けとくレベル——ので、人を選びます。ご注意下さい。

※作者はブラック、ホワイトまでの知識しかありません。また廃人でもないのご理解下さい。

※この物語はフィクションです。登場する人物・団体・土地・出来事・名称等は全て架空であり、実在のものとは関係ありません。いか

なる類似、あるいは一致も、全くの偶然であり意図しないものであり、  
実在のものとは全く関係ありません。

挿し絵紹介。

海鷹様より。

『不知火 白』

『シログラ』

ころんぶす様より。

『シロちゃん』

この場を借りてお礼を。

絵師様方、いつも有り難うございます。

## 目次

### プロローグ

ポケモンが無い私の世界

1

### 第一章 侵食は始まった

第1話 最初の異変

4

第2話 配信、疑念の『きのみ』

10

掲示板 シロ民達の雑談

17

第3話 検証、オレンの実

26

第4話 きのみ、ニュースにて語られる？

32

掲示板 植物学者、現る

39

第5話 関東へ向かうべきはいつか？

50

第6話 お爺ちゃんはS A T U M A 人

58

第7話 お嬢様は人使いが荒い

66

第8話 見えない変化、見える変化

74

第9話 配信、序盤ポケモン達とモンスターボール

81

第10話 夜の海に浮かぶ城

89

第11話 お嬢様の手は広い

98

掲示板 一般？ネット民の対応

109

第12話 集い始める力

123

第13話 最初のポケモン

129

第14話 政界への第一撃

137

エイプリルフル企画 I F崩れた日常

145

第15話 加速する前進

153

掲示板 やせいのポケモンがあらわれた！

161

第16話 政界への第二撃

177

第17話 配信、全国放送！ ～裏方の親衛隊～ | 186

第18話 配信、全国放送！ ～キヤタピーゲツト～ | 194

第19話 配信、全国放送！ ～初めてのポケモンバトル？～

203

掲示板 初バトルが終わって | 215

第20話 某月某日、首相官邸にて | 239

閑話 ポケモン研究所所長はソウトウカツカしているようです

248

閑話 シロちゃん、インタビューを受ける～顔合わせ～ | 252

閑話 シロちゃん、インタビューを受ける～月刊ポケモンより抜粋

～ | 259

掲示板 シロ民は雑誌に目を通す様です。

閑話 我輩はポツポである～その壱～ | 296

閑話 排水溝ピエロがポケモン図鑑アプリをオススメするよう

す | 306

外伝I 再会 | 312

一章終了時の設定まとめ | 320

第二章 決戦！ カントー！

第21話 動き出すモノ | 331

第22話 不可視の思惑 | 338

掲示板 シロ民は情報操作に気づいた様です | 346

第23話 ポケモンリーグ設立に向けて | 375

第24話 ステイツ、介入 | 384

第25話 特殊弾頭輸送任務（前編） | 392

第26話 特殊弾頭輸送任務（後編） | 401

ハロウィン企画 魔女っ娘シロちゃん！	415
第27話 返しの一手	424
クリスマス企画 メリークリシミマス	434
第28話 変わるモノ達	442
第29話 ちよつとしたお節介	452
第30話 私には夢がある	472
第31話 配信、ミュウツーとミュウ	478
掲示板 間もなくポケモンリーグが開催されるようです	485
第32話 旅の終わりが始まった	517
第33話 武装勢力、襲来	523
第34話 VS現代兵器	530
第35話 SATUMA無双	539
閑話 大惨事ポケモン大戦	548
第36話 やせいのミュウツーがあらわれた！	553
第37話 戦闘！ ミュウツー	562
掲示板 閉幕、ポケモンリーグ	575

## プロローグ

### ポケモンが無い私の世界

——ポケットモンスター。縮めて、ポケモン。

そう呼ばれる彼らの誕生は西暦1996年2月27日『赤』そして『緑』そう題された二本のゲームから始まる。

それからのポケモンは……語る必要はないだろう。無名の創作物だった彼らが、今や世界中で知られているのだから。それこそ知らぬ人など居ない、そう言っても問題無い程度には。

斯く言う私もポケモンを知っている人間だ。

赤、緑、黄、青、金、銀、クリスタル。残念ながらこれらは機会に恵まれなかった為に知識だけ。

しかし、ルビー、サファイア、エメラルド、ファイアレッド、リーフグリーン、ダイヤモンド、パール、プラチナ、ハートゴールド、ソウルシルバー。これは私の歴史。私と共にあったポケモンだ。

その後ブラック、ホワイトが出たが……私の歴史はそこで終わった。飽きた訳ではない。だが私はブラック、ホワイトをプレイして、その先へと進む事は無かった。

なので私のポケモン経歴はルビー、サファイアからブラック、ホワイトまでとなる。後付けの知識だけなら赤、緑から。

……先へ進まなかった理由？ まあ、言い訳させて貰えるなら幾らか有る。仕事がいよいよ忙しくなったとか、日々の生活に手一杯で遊ぶ暇がなかったとか、だ。

けれど一番の理由は、たぶん、私が年寄りになったからだろう。身体ではなく、心が。先へと進むポケモン達について行けなくなった。もう充分だ。引退だ。時代の進化に付いて行けない……そんな風に、誤魔化して。

——ああ、そうだ！ ホントは付いて行きたかった！ 私とポケモンは十年以上共に居たんだ、当たり前前だろう!?

……だが、そんな事は今更だ。こんな気持ちに気づいたのだから、一度死んだ後。転生した後だった。

全くもって馬鹿馬鹿しい話だ。バカは死ななきや治らないというから、私はバカだったのだろう。ああその通りだ。私はバカだった。何せ、一度死んで転生して、ポケモンの無い世界に生まれてやつと気づくのだから。

——ポケモンは1996年にゲームとしてこの世に産声を上げ、誕生した。その後を知る者からすればそれは当たり前前の事だったが、当時は多くの不確定要素があったはずだ。もし売れなければ？ 何らかの社会的な動きにかき消されたら？ そもそも……開発者が作ると思わなければ？

それらは充分にあつた可能性、ifであり、そして、私の転生した世界の……歴史だった。

最初に疑問を持ったのは子供の頃。転生した事を現実として受け止め、今世の世界がファンタジー世界などでは無く、前世と同じごく普通の世界だと決め付けようとしていた頃。元花札作りな会社が出しているゲームの中で、髭の配管工やピンクの宇宙人は居るのに黄色ネズミことピカチュウが居なかつたのが最初の疑問。

そしてその疑問がどうしても気になった私は、まだブラウン管を使っていた家のパソコンで調べて………絶望した。ポケモンが居ない。ポケモンだけが居ない。

何がどうなればそうなるのか不明だ。しかし、ポケモンだけが居ないのは間違いのない事実だった。

それからの私は……端的にいつて、グレた。具体的に言うなら引きこもつた。元々転生後の生活には不満があつたのだ。間もなく高校生だというのに背は伸びないし、親は居ないし、けど金は毎月入るし、諸々の書類も確りやっっているらしいから文句は言えないし——だが何故か女。前世は男だったのに、何故か女。それもアルビノ美少女、あるいは不思議系美少女だ。そんな存在にTS……いやもう慣れたケド。しかし不満は不満だ。せつかく転生したのに自分がヒロイン



とか笑えない。

細けえこたあいい  
閑話休題

そんなこんなな理由で日本の主神様よろしく引きこもったアルビノ美少女な私だが……当時の記憶が飛び飛びだったりする辺り、どうやら私は自覚が欠片も無かっただけで、狂信的かつ熱狂的なポケモンファンだったらしい。それこそ、些細な掛け違いで自殺するレベルの。

ああ、当時はかなりヤバかった。何がヤバかったかって無意識でロープを……いや、止めよう。ロクな話じゃない。

兎に角、私は生き残った。そして自身が熱狂的なポケモンファンだと自覚した私の思考は、気づけば斜め上へカツ飛んでいた。

……え？ 何をしたか？ ポケモンの絵を描いたんだ。そしてそれをネットに上げたり、某笑顔溢れる動画サイトでお絵描き風景を雑談しながら配信したりした。

そのどこが斜め上かって？ ——いいか、そもそもこの世界にはポケモンが居ないんだ。それを突然描き出してネットに上げたんだぞ？ しかも、私は新世界の神になる!! とか言いかねないテンションで。

まあ、痛い子扱いされるよね。でも声はプリティーだし、お手では綺麗だし、晒して無いけどたぶん顔も美少女だと思われるよね。絵描きの才能があったのか絵も上手いからそこそこ人気が出るよね。ズルズル続けるよね。そしたらある程度固定のファンも付くよね。そうすると存在すらしなかったポケモン達も認知されるよね。……私のオリキャラとして。うん、そこは不満だった。ポケモンはポケモンで、私なんかのオリキャラではないのだから。

でも、まあ、満足していたのだ。そこそこの人数の人がどういう形であれ、ポケモンを知っている状況に。

だから。まさか、このポケモンの居ない世界がポケモンの世界だなんて事に、気づく事は無かった。そのときは、まだ。

# 第一章 侵食は始まった

## 第1話 最初の異変

ポケモン大好きTSアルビノ美少女である私の朝は基本的に早い。……嘘だ。基本的に遅い。ものすごく遅い。具体的に言うとは遅い。……だ。

「くあ……ああ。おはよー、ポチ」

昼過ぎに起きて、一通りのルーチンをこなした私。そんな私は最後のルーチンをこなすべく、欠伸をしながら人の居ないリビングへと顔を出す。

「わふう……」

人の居ないリビングで、たった一人の家族である黒毛の日本犬が呆れた様子で声を返してくれる。

五、六年前に拾ったときは小さな子犬だったのに、今や立派に凛々しく成長した彼女は今日も優しい。モフモフしても鬱陶しそうにするだけで吠えもしないのだから。仕方ない奴だと思われているのだろう。あー、癒されるうー……よし。

「行くかうか。ポチ」

存分にモフモフした私はリードを手に取り、ポチを日課の散歩へと誘った。彼女は無言で、しかし尻尾をブンブンと振りながら立ち上がる。その姿は「別に私は行かなくていいんだがな。仕方なくだ」と言っている様に思える。ホント、凛々しくて可愛い……私の家族だ。

「うーんと、よし。出発」

「わふう」

ポチに緩くりードを付け、並んで家を出る。

最初に浴びるのは寝起きの私を焼く熱い日差し。実にウザイ。心底ウザイ。SLBブチコミたい。そんな転生特典無いケド。……ああ、これだから外には出たくないのだ。転生した私のプリティーボデイは日差しに弱いのだし。

私は日焼けなんて論外だとフードを深くかぶり、リード片手に足を

進める。フードをかぶっても中が蒸れないのは季節のおかげか。今は少し肌寒い三月だからな。基本的に温度の高めなハウエ——九州地方であるここも、そこは変わらない。

「ポチは、元気だね……」

「わふ」

焼く様な日焼しが上から「メガトンキック」を、アスファルトからの照り返しが下から「メガトンパンチ」を、それぞれ放たれたそれらにノックアウト寸前の私は羨ましげにポチに語りかける。何時もの事だ。なので彼女の仕方のない奴めと言わんばかりの呆れた返しもいつも通り。

テクテクと、全く持つていつも通りな散歩道を進む。寂れ気味の住宅街を抜け、土手沿いを歩き、小さな公園を横切り、お互いのルーチンをこなし、田んぼが見えたところで引き返して、草木が生い茂る小山を通り過ぎ、寂れ気味の住宅街へと戻ってくる。散歩コースもパターン化したうちの一つで大した変化もなく、全くいつも通りだった。

ここまでは。

「おおい。シロちゃんや！ ちょっと来てくれんか!？」

唐突に私、シロを呼び掛ける年老いた老人の声。ふと声のした方を見てみると、近所の老夫婦が私を手招きしていた。

何事だろうか？

「はあーい！ 今行きます！ ……行こうか、ポチ」

「わふう」

やれやれといった様子のポチを連れ、久々に大声を出した喉を撫でながら足早に老夫婦へと歩み寄る。

古く、そして大きい日本家屋に住む老夫婦は、その家よりも広い庭先で私を待っていた。お互いに挨拶を交わし、ふとお爺さんの手元を見れば見慣れぬ青いナカが手の内に……それが理由か？

「ごめんねえ、シロちゃん。散歩の途中に爺さんが呼び止めてしまつて」

「いえ、大丈夫です。……その青いのが私を呼んだ理由ですか？」

「うむ。婆さんがシロちゃんならと言うんでついな。ほれ、これじゃよ」

気楽な調子でお爺さんから手渡された青いナニカ。手に取って見るとそれはナニカの果実の様だった。直径は4cm程。軽くつついた感じだとかかなり硬い。見た目はミカンに似ているが、どうしようもなく青かった。……私の知らない果実だ。頭の奥の方がチリチリするが、こんな果実は聞いた事が無い。新種だろうか？

ポチが下から興味深げに果実を見ているのを横目に、思案する事数秒。老夫婦はこの果実について唐突に語り出す。不気味な話なのじゃが、と。

「その果実は今朝起きたらそこの、ミカンの木に成ってあつたんじゃ。のう婆さん」

「ええ。この木のミカンは少し前に全部取ってしまったからいったい何なのだろうと、お爺さんと首を傾げていたんですよ」

「うむ。それも五個も成っておったからな。一つはカラスに食われて……いやまあ、アレはつくだけについて捨てただけじゃろうが。まあ兎に角グシャグシャじゃ。一つはワシが食ったが……」

「え、食べたんですか？ コレを？」

「うむ。不味かった。辛かったり、渋かったり、苦かったり、酸っぱかったりする、変な味じゃった」

「切るのも大変でしたよ。ものすごく固かったから……昨日研いでなかつたら切れなかつたでしょうね」

不味かつたって……こんな色だし、その味はもう毒では？ それにこの家の包丁はそうとうな業物だったはずだ。以前自慢された覚えがある。それで大変？ 少なくとも食べる物ではないのでは？

薄い胸に込み上げた思いを苦笑いで封殺しつつ、改めて青い果実を見る。――やはり知らない。だが頭の奥の方がチリチリする。……私は知っているのか？ こんな訳の分からない果実を？

「……お爺さん。この果実はこの一個だけですか？」

「いや、それと合わせて手付かずのが三つじゃ。なんじゃ、欲しいのか？」

「はい。家に持って帰って調べようと思います」

「そうか。婆さん、持って来ておやり」

「私は知りませんよ？ お爺さんが持って行ったではありませんか」

「そうじゃったかの？ ううむ、どこに置いたのか……」

お爺さんが縁側から日本家屋の中へと力無く入って行くのを見送りつつ、私はお婆さんが「あの人はこの頃ボケが酷いのよ」などと言うのに相づちを打っていた。

……ポチは相変わらず私の手の内にある青い果実を眺めている。不思議そうに。

「あつたあつた。玄関に置きっぱなしじゃった。ほれ、これが残りの青いのじゃ」

「有り難うございます。……では、私はこれで。何か分かったら連絡しますね」

「あら、急がなくても良いのよ？」

「いえ、私も気になるので」

私は青い果実をジップパーカーのポケットに突っ込み、名残惜しそうな老夫婦に一礼してから、フードをより深くかぶってポチを連れて家へと戻る。頭の奥の方からチリチリとこちらを刺激する何かに急かされる様にして。足早に。

「疲れた……」

そうして家に帰った私はリビングの机にお爺さんから受け取った青い果実を転がし、ジップパーカーを脱いで手短な椅子に引っ掻ける。これでシャツとズボンという何時ものラフな部屋着に戻れた。パーカーを元の場所に戻すのは……後でいいだろう。

そうして相変わらず果実を見つめるポチからリードを取り外し、自由にしておく。彼女は賢いからこの状態でも家の中、あるいは庭に出るだけで、敷地の外から出たりしないのだ。それに大きく頑丈な柵もしてあるし。そう思っただけでリードを外したのだが、どういう訳か彼女はそのまま動かない。いつもなら庭に出るか日当たりの良いところに行くのに……余程この果実が気になっている様だ。

「ポチも気になるの？」

「わふ」

「そっか、なら少し待っててね」

私は一度自室まで足を動かし、そこからスマホを取ってリビングへと戻る。ポチは、お行儀良く待っていてくれた。彼女の為にもサクツと検索をかけてみるが……

「ヒットしない。調べ方が悪いのかな……ん？」

某事典サイトにはそれらしい果実は載っていなかった。が、いつもならスルーするピックアップニュースに視線が釣られる。タイトルは『日本各地で起こる果実の異変』だ。

「これは、ふむ……なるほど」

そこに書かれていたのは老夫婦の家で聞いた様な話が日本各地で起こっているという話。載せられた記事と写真を見るに、ミカンだけでなくイチゴや梨、サクランボや桃、その他多数の果実が似たような状況らしい。形や色がおかしかったり、桃を除いて酷い味になっているようだ。専門家曰く——うん、言い訳がましい言い回しだが、要するに分からないらしい。この事例が最初に確認されたのは……関東地方との事。

「……………」

チリチリと頭の奥が煩い。緑に変色した、苦いイチゴの写真を睨み付ける。

私は知っているのか？ この果実達を。

いや、知らないはずだ。私はただの転生者。何の転生特典も持たない、ただの転生者だ。それが専門家もお手上げな果実を知っている？

酷い幻想だ。

「わふう？」

「何でもないよ。……ご飯にしようか」

不思議そうなポチの声を切っ掛けに、私は幻想と頭の奥の煩いチリチリを脳内から蹴り出した。夢を見るなど。

その変わりとはばかりにポチのご飯を出し、自分のご飯もまた適当に済ませる。

それから時間が過ぎていき、二度目の散歩も終わらせ、夜が来て、今

日は庭の犬小屋で寝るらしいポチを見送り——私は自室で最近新型に買い換えたパソコンを前に少しだけ緊張していた。パソコンの置かれた机の端には青い果実が三つ。頭の中は相変わらずチリチリと閃きが足りないとばかりに煩いが……まあ、それも話題にはなる。「さて、始めますか」

私はマウスを操作して、ポチりと。配信開始のボタンを押した。

## 第2話 配信、疑念の『きのみ』

「はい、皆さんこんばんは。シロです。今日は予定通り雑談しつつお絵描きしていきます」

ポチも居なくなつて一人ぼっちの部屋に私の声が響く。しかし、虚しくはない。今の私は一人だが、一人ではないからだ。

『わこつ』『待ってた』『初見』『ワイも初見』『ワシ古参』

『今日もシロちゃんの声がかわいい……』『お手てもな』『髪の毛勢のワイ、今は低見の見物』

「はい、わこつ有り難うございます。初見さんはゆっくり見ていって下さいね。可愛いですか？ 有り難うございます」

パソコンの液晶画面を流れていく無数のコメントの幾つかに反応を返し、返答していく。可愛い関連が多いが……まあ、今世のボディはプリティーやからな！ 私だつてそう言う。誰だつてそう言う。この可愛らしい身体は密かな自慢なのだ。まあ、男の身体が懐かしくもあるのだが。

そう上機嫌な思考のまま、何気なく視聴者数をチラリと確認すれば……既に千人近くが見ている様だ。ああ、私は一人ではない。この数字に気圧されていた頃を懐かしむ暇もある。大丈夫だ。やっていこう。

『うっ、ふう……』『ふう……』

『お前ら何してんだ』『何つてそりやナニだろ』

『貴様ら何をしとるか！』『ヤベーぞ、犬兵だ！』

大丈夫だ！ やつていこう！ 自浄作用も働いてるしな！

「今日の一枚目は……そうですね。一通りのポケモンは二回ずつは描きましたし、初心に帰るつもりでポツポを描きましようか」

『ポツポか』『ポツポ？』『ああ、あの鳥ね』

『誰か説明してクレメンズ』『鳥だ』『鳥だな』『ちげーよ小鳥だ』『お前から説明してやれよ……鳥だな』『草』

「あはは……皆さん中々酷いですね。まあ鳥ですけど、ポツポはポツポですよ……」



『せやな』『セヤナー』『ポツポはポツポやからな』『鳩ポツポ』『ポツポ』

『誰か、説明を……』『分かったから待て』

ポツポに対する視聴者さんの認識が酷かったが……まあ鳥で間違いないのは事実だ。元ネタは鳩と、そして複数の小鳥を混ぜたモノだと言われていたからな。鳥としか言いようがないだろう。鳩にしてはイケメン過ぎるし。

そんな事を脳ミソの隅っこで考えつつ、私はささっと手を動かし、愛用の鉛筆で紙にポツポを描いていく。このとき絵に集中し過ぎると何故か微妙に下手くなるので、特に意識はせずに描き進める。本能に任せるのだ。

『はー、相変わらず上手いなあ』『あれだよな。参考にならない上手さ』『シロちゃんのそれは才能やからね』

「あはは……有り難うございます。自分では良く分からないんですけどね」

お礼を言いつつも、中々に痛い指摘だと噛み締める。何せ概ね事実だ。この身体に宿っている絵心というか、画力とのか、そういう才能が凄まじいからこそ、私はポケモンを描ける。他の人と共有できるのだ。

これが転生特典なら……まあ、納得しよう。無双は出来ないだろうが、これが無ければ私は彼らにポケモンを見せれなかっただろうから。

『お手て綺麗』『お手てちっちゃい』『ちっちゃい真つ白お手て……』『何を言うか、チラチラ映るロングの白髪こそ……うっ』

『う、ふう……』『ふう……』『ふう……』『貴様ら何をしとるか!』『ヤベーぞ犬兵だ!』『ほーら骨だぞ取ってこーい!』『わうーん!』

共有できるのだ! てか自浄作用要員買収されんな! 頑張れよ! もうちよつと頑張ってみろって! ネバーギブアップ!

『説明、を……』『おい初見が死にかけてるぞ』『あー、初見にはちとキツイいな』『シロちゃんが描くのは完全なオリキャラやからなあ』『オリキャラ、なるほどな』『あーそういう事ね。完全に把握した。……』

で、ポケモンって何?』

オリキャラではないのだが……言っても仕方あるまい。それより初見が死にかけてるのを何とかしないと。

「ポツポはことりポケモンですね。体長三十センチほどの、小さな鳥型のポケモンです」

『せやな』『三十センチ……小鳥? 小さい?』『小鳥やぞ。ポケモン基準ではな』『家よりデカイのとか普通に居るからな』『アイエエエ!?!』『ポケモンヤバいな』『ポケモンは忍者も居るぞ』『アイエエエ!?! ニンジャ!? ニンジャナンデ!?!』

頭の中にポツポの基礎プロフィールを思い出しながら、手はポツポを描き続ける。もうすぐ折り返しだ。

しかし忍者のポケモンか……どの子を指して言ってるんだろうな。うん、もう一度忍者ポケモン特集をやるのも良いかも知れない。あのときのコメントの伸びは異常で面白かったし。

まあ、今はポツポだ。

『シロちゃんに先越されたか』『有能ニキ無能』『速報。有能ニキ無能だった!』『(・ω・)(・ω・)』

「タイプはひこう、ノーマル。穏やかな性格で戦いは好みません。生息数は多めで、あちこちで見かけるポケモンですね。……ああ、説明しようとしてくれたニキ、有り難うございます」

『(・ω・)(・ω・)』『復活早過ぎィー!』

『俺もシロちゃんにお礼言われない』『ワカル。俺もお兄ちゃん呼びさりたい』『拡大解釈してて草』

変態め。気持ちは分かるが、変態め。

てかその手のバイノーラル作ってなかったか? ……業が深いな、なんだかんだで理解を示して協力した私も。

『ちなみにこのポツポ、進化すると更にデカくなる』『進化とかあるんか』『初見はまともウエキ見て来い。作り込み凄いから』『オリキャラとは思えない作り込みだよな。今何匹だっけ?』『ざっと650匹ぐらいじゃね? マジヤベエ』『!?!』

だからオリキャラではないのだが……つと、今抜けられては困る。

せつかくなのだから、この子を見て行ってからにして欲しい。

「あ、まとめウエキ見るのは後にして下さいね。ポツポも、もうすぐラフが描き終わりますから」

『せやな』『セヤナー』

『はー上手いな』『俺の絵とは大違いだぜ……』『涙拭けよ』

『懐かしのポツポ』『どこがポツポなんだよ……イケメンじゃねえか！』『名前詐欺だよ』『俺ポツポ好きなんだよ。何となくだけど』『イケメンな鳩だもん』『イケ鳩』『ポツポ』『ポツポ』『ポツポ？』『ポツポ！』『ポツポオー！』

まだ色付けはしてないが、確かに名前詐欺なイケメンだ。しかもコイツの登場場所はスタート地点の直ぐだというのだから驚き。

そして何やら謎の儀式が行われてるが……スルーしておこう。

「さて、ポツポ完成です。色付けは……どうしましょうか？」

『有り』『あり』『無しで雑談』『初見おるし蟻』『むしろ初見がいるからこそ雑談では？』『賛成。雑談で』『シロちゃんに話題があるなら雑談でエエんちゃう？ 無ければ色付けで』

完成したポツポに色付けするかどうかを聞いてみたが、だいたい半々のようだ。まあポツポは三度目だしそんなものか。しかし話題……ああ、そういえばコイツがあったな。

「では雑談にしましょう。実はご近所さんからこんなのを預かってるんです。……見えますか？ 青い果実です」

私はポツポを描いた紙を脇に退けて、手元を映すカメラに映るように老夫婦から貰った青い果実を机に転がす。……頭の奥がチリチリする。やつぱり、私はコレを知っているのだろうか？

『青？』『青いな』『見た目はミカンっぽい……』『青い』『うん、青いな』

『てかこれアレじゃね？ ニューズでやってた奴』『ああ、あれか』『たしか日本の果実がおかしいってやつだよ』『ああ、ついにシロちゃんの近くにも生ったのか……』

コメントを読む限り知っている感じの人は居なさそうだ。ならばこの頭の煩さは……そう思ったとき、一つのコメントが目飛び込

む。

『オレンの実か』

オレンの実？——そうか、オレン！ ポケモンの！ あの『きのみ』か！ それなら老夫婦が言っていた妙な味と固さも納得……いや待て、なぜオレンの実が現実存在する？

『オレンの実？』『オレンジじゃなくて？』『オレンの実だよ。俺も食って確認したから間違いない』『!』『食ったのか!』『オイオイオイ、氏ぬはアイツ』『氏なねえよ。クソ不味いけど』『不味いのか……』『甘さ以外全ての味がした』『なんぞソレ』『不味そう』『てか吐きそう』

呆然とする私の目の前でツラツラとコメントが流れていく。どうやら老夫婦以外にも食べた人がいるらしい。……どうやら、私だけがおかしいという訳ではない様だ。

『なあ、オレンの実ってなに？』『知らんのか？』『ポケモン世界のアイテムだぞ。シロちゃんオリジナル設定だ。詳しくはウエキな』『ほん、そんなもあるんか。後で見えてくるわ』

「いえ、オリジナル設定では……無いんですが」

呆然としていた私は目の前に流れたオリジナル設定云々について反応してしまう。そりやそうだろう。この世界ではオリジナルでも、本当は違う。違うのだ。このオレンの実は、ポケモン世界のソレなのだから。

『久々にシロちゃんのオリジナル否定発言聞いたわ』『どう足掻いてもシロちゃん発祥なんだよなあ』『はいはいポケモンは実在する実在する』『やめないか！ ポケモンは実在するんだよ！』『それは洒落にならないのでNG』『ギャラドスとかヤバいし、流石にね？』『正直スマンかった』『過保護犬兵敗北』

「……………」

そうだ。そうなのだ。残念な、非常に残念な事に、この世界ではポケモンは私のオリキャラに過ぎず、オレンの実だって同様だ。……なら、なぜここにオレンの実があるんだ？ なぜポケモン世界のきのみが、ここに？ なぜ、なぜ——？

『おーい、シロちゃん？』『おこ？ おこなの？』『てか手震えてない？』

『大丈夫か!? シロちゃん!』『犬兵落ちち着け』『お前が落ち着け』  
『おい、血色。流石にヤバくないか?』『え、そんなシヨックだった?』  
『謝れ!・今すぐシロ様に謝れ!』『本音出でて草』『いや、こんな事になるとは』『謝罪早よ』

不味い。コメントの流れが不穏だ。落ち着け、落ち着くんだ。先ずは落ち着け。そしてコメントの流れを修正。その後……情報収集だ。  
「あ、あー、すみません。少し驚いてしまっ。固まってしまいました。私は大丈夫です」

『いや、大丈夫って感じじゃなくね?』『声震えてる』『シロ様! 大丈夫ですか!』『ドM犬兵落ち着け。本音出てるから』『その大丈夫は大丈夫じゃない大丈夫だろ』

「いえ、大丈夫ですよ。本当に驚いただけですから。……それで、皆さんこのオレンの実について何か知りませんか?」

『俺は知らね』『俺もニュースで見ただけ』『食ったニキはどう?』『せや、食ったニキなら食レポもいけるやろ!』『クソ不味い。ウエキ通り。体力回復は良く分かんけど、何か元気になった気がする』『俺も知らないな』『体力回復?』『知らないのはウエキ見とけ。たぶん知つといた方がいい』

『てかシロちゃんが一番良く知ってるんじゃない?』『せやな』

ふむ、どうやら目新しい情報を持っている人は居ないらしい。それどころか私が一番良く知ってるときた。……確かに、これがオレンの実ならば、この世界の誰よりも私が一番良く知ってる、か。

——どうする? よく分からないが、どうやらこれはオレンの実らしいし……いや、そもそもオレンの実なのか? 見た目や味は間違いなさそうだったが、他の要素はどうなんだ? ホントにポケモンのオレンの実だといえるのか? ……検証が必要か。

「そう、ですね……」

チラリ、と。残りの配信時間を確認。まだ半分ほど余っている。当たり前前か。しかし早いところ検証したい。これが本当にオレンの実なのか。そうでないのか。もしオレンの実なら——いや、流石に今からそれは視聴者さんに悪いか。……よし。

「この青い果実が、オレンの実なのか検証したので配信終了後に例の鳥で……いえ、掲示板で話し合いますよ。暇な人が居ましたら、一緒にお願ひできますか？」

『任せろー』『やったぜ』『一緒、お願ひ、うっ、ふう……』『おいさっきの奴、強制参加な。働け』『犬兵コワイ』『流石にこのご時世に強制は……』『エエで。暇やったし、やりたい。やらせて下さい』『罪悪感感じて草。あ、僕もやります。はい』『結構人数集まりそうやな』『なら今ある掲示板使ったら？ 何かあったろ』

気が急ぐ。落ち着け、落ち着け。まだこれがオレンの実と決まった訳じゃないんだ。だから焦るな。まずは検証だ。

『きのみ検証板だな。後でここのコメにURLとタイトル書いてくわ。好きな方法で来ると良いぞ』『りよ』『てかそれ元いた人迷惑しない？ 大丈夫？』『元いた奴もシロ民と犬兵だけだから問題ない』『ok。なら安心だな』

『シロちゃんこれでいい？』『大丈夫？ 気分悪い感じ？』『やっぱりシヨックだったのでは……』

「あ。いえ、大丈夫ですよ。URLとタイトルのコメントよろしくお願ひしますね。………それでは、残りの時間は、ポツポに色を塗っていきましようか」

私はオレンの実を脇に避け、ポツポを描いた紙を引き寄せて色鉛筆で色を塗っていく。簡単なはずのソレは何度も失敗しかけ、新しく到着した視聴者さんに『今日は無口だね』とコメントされてしまったが……しかし、なんとかシヨックの多かった配信を乗り切る事が出来た。

だが休んでいる暇はない。掲示板へ行こう。そして検証し、ハッキリさせよう。これがオレンの実なのかどうかを。そしてオレンの実なのなら、私はきつと――

## 掲示板 シロ民達の雑談

【犬ども】 お絵描き配信者シロちゃんについて語るスレ part 1  
53 【集まれ】

101：名無しの犬  
しかしシロちゃんも結構有名になってきたよな。スレの消費も早くなつたし。

102：名無しの犬  
>>101

せやな。ほんの一年前はそうでもなかったと思うんだけどなあ……何かあつたけ？

105：名無しの犬  
>>102

あれだろ。どっかの芸能人だかアイドルがポケモンにハマってますとか発言して、ポケモンとは何かって何も知らない奴がまとめウエキ経由で流れて来た奴。

あと最近絵で流れて来てるのもいるらしい。  
107：名無しの犬

>>105  
サンクス。そういえばそうだったわ。総理だったか、大臣だったかの孫が言い始めたやつだな。シロ民こと犬を量産してやったの思い出した。

けど、絵？ 何だっけ？  
108：名無しの犬

>>107  
ほら、シロちゃん絵が上手いだろ？ 特に風景画とかプロみたいじゃん。それをみたやつが他の作品であるポケモンとか、シロちゃん自身に興味湧いて流れて来るんだよ。

109：名無しの犬  
>>108

シロちゃんが鳥で万で売れたとか震えてたやつだな。

冗談半分でネットオークションで出してたとかいう。

112：名無しの犬

>>108

>>109

ほーん。そんなんがあつたのね。サンクス。

113：名無しの犬

シロちゃん風景画とかの写実絵は上手いんだよなあ。写実絵は。

しかし時代は現代アートだ。

115：名無しの犬

ぶっちゃけ写真で事足りるしなあ。ポケモン絡ませずに想像で書くどスツゴく下手くなるらしいし。

117：名無しの犬

>>113

>>115

やめないか！ ポケモン絡ませれば一枚で万行くんだから良いだろ!?

119：名無しの犬

>>117

それ、絵の価値が分からないやつが買っていった説があつてだな……

120：名無しの犬

>>119

やめやめろ！

いや、マジでやめて差し上げろ。絵が上手いのは間違いないんだし。

122：名無しの犬

>>120

ほんそれ。アレだけ上手ければ充分凄いだろ。ポケモンの設定も凄いいしさ。あの若さならまだ上もいけるだろうし。

124：名無しの犬

今シロちゃん何歳だっけ？ 声と手からして、中校一年生くらい？



色々大丈夫なん？

125：名無しの犬

>>124

と、思うじゃん？ 最低でも高校生やぞ。中学校の卒業式を思い出話として話してた事あるし。

つか場合によつては大学生ないし、社会人やぞ。

127：名無しの犬

>>125

嘘やる？ だとしたら声若すぎるし、手とか小さすぎひん？ あれ子供の手じゃん。身長も相当低いだろ。

129：名無しの犬

>>127

嘘でも何でも無いんだよなあ。雑談の感じ纏めると成人しててもおかしくないし。まとめ動画見てくるとイイゾ。

身長は……察してやれ。

130：名無しの犬

シロちゃん成長期にマトモにご飯食べれなかった説あるからな。低身長も仕方なし。

131：名無しの犬

>>129

>>130

マジか。てか、それネグレクトとかなんじゃ……

132：名無しの犬

>>130

>>131

やめないか！ 暗い話を憶測するのは！

134：名無しの犬

いうてシロちゃんナチュラルに闇吐くし……

135：名無しの犬

生まれてから一度も親の顔を見てないとか、会話の流れ次第で普通に言っちゃうもんなあ。サラツと。

137：名無しの犬

>>135

しかもそれが当たり前だと思ってるところがあから、わざとらしいとか欠片もないもんな。サラツと闇吐いて、サラツと流して、気づいた俺らが傷つく。

指摘とかしたらああそういういえばそうでしたね、とか思い出した様にさ……アレから俺、パソコンの前でポテチ食いにくくなった。

139：名無しの犬

>>137

良かったじゃん。痩せれるぞ。

まあシロちゃんは欠片も良くないんだがな！

141：名無しの犬

まだシロちゃんが子供だと思われていた頃。

コメ この時間、親御さんとか大丈夫なん？

←

シロちゃん 親はいませんか

←

コメ 外出中なのか

←

シロちゃん

(不思議そうな声で) いえ、そもそもいませんよ？

思えばこれが最初の闇だった。

143：名無しの犬

>>141

いや、最初の闇は「ポチは私の大切な家族です」だろ。文章的にはごく普通なのに、後々シロちゃんの状況を知ってから考えると……ヤバない？

144：名無しの犬

>>143

いや、流石に邪推し過ぎだろ。

145：名無しの犬

>>>143

ワカル。あのとときの流れならもつと別の名前が上がるべきなのに、ペットの名前が上がるのはヤバイ。まあ、ポチネキ頼りになるのは嫌というほど知ってるけど。

146：名無しの犬

>>>145

流れ？

148：名無しの犬

>>>146

アーカイブなりまとめなり見てこい。

そしてお前もシロ闇に染まるんだよお！

150：名無しの犬

シロ闇とかいう矛盾に見えるだけの現実。除草されるわ。

……思えばシロってあだ名だよな？ 本名じゃないよな？ ペツ

トの名前みたいなんだけど。

152：名無しの犬

>>>150

本名らしいぞ。調べたアホ（今は豚箱の中）がいた。

ペットの名前みたいなのは……まあ、親がそういう奴だったて事だろ。

155：名無しの犬

一時期は身体売ってるとかいう噂もあったしなあ。

シロちゃん家にまで行ったアホもいたしなあ……

158：名無しの犬

なあ、それシロちゃん大丈夫なん？ ガチで。

特に名前バレと住所バレは洒落にらんやろ？

160：名無しの犬

>>>158

ネグレクトされてたのは昔の話だし。今は自分でお金稼いで税金も入れてるみたいやぞ。

名前バレと住所バレは……まあ、ポチネキが強いし。シロちゃん自

身もあれで武道スキル持ちやから。多少はね？

162：名無しの犬

>>160

撃退したって事か？ あの小さい手で？

164：名無しの犬

>>162

なんや、知らんのか？ ポチネキとシロちゃんでも少なくとも変態の二個分隊は潰したぞ。

シロちゃんの家族ことペットのポチネキは軍用犬として訓練された経験を持つ上に、番犬として名高い四国犬、闘犬として名高い土佐闘犬の血とかを引いとるから、何の訓練もされてない変態やチンピラなら余裕。なんなら武装した相手も制圧出来る。更にイケメン。

シロちゃんも護身術を習ってるから弱くはない。まあ、握力はシヨボいから決定力はないけど……スルスル逃げてポチネキ頼るか、蹴り上げるかすればトロイ変態ぐらいなら余裕やし。後可愛い。

165：名無しの犬

>>164

アイエエエ……ナニソレ凄い。

てか護身術は分からんでもないけど、この日本で軍用犬？ 警察犬じゃなくて？

167：名無しの犬

>>165

軍用犬。なんでも近所の元陸軍少佐のじーさんが仕込んだとか。昔なんかあったのか、軍用犬として仕込むのはだいぶ渋ったらしいけど……まあ、シロちゃんあんな感じやから。結局ほだされてやったらしい。護身術もその人から教わったのが殆んどだって自慢してた。

ちなみにこのじーさんも一人で不審者の半個分隊潰した強者ぞ。噂ではSATUMA民族らしい。

168：名無しの犬

>>167

また SATUMA か

でも納得だわ。……いや、変態ども凸り過ぎだろとは思うけど。

170：名無しの犬

>>168

元々治安の悪い、変質者が多い場所ではあったらしい。シロちゃん狙いの変態は数人で、後はその辺の不審者が巻き添えくらったんだろ。うってのが定説だな。

とはいえ、少なくとも一個小隊規模は凸って豚箱に叩き込まれたのは間違いない。おかげで警察の見回りが更に嚴重になったらしいぞ。やったな。

なおMVPはポチネキ。シロ民が何かと犬に関連付けられるのはこの辺の逸話からやで。

173：名無しの犬

ポチネキ最強伝説。

シロちゃんに寄って来た変態を撃退するのは当たり前前、制圧して警察に引き渡した事も。

玄関前に陣取る番犬の鑑。

ポチネキにとって変態撃退は闘犬試合の練習。

固まっていた変態達をまとめて突進でひき倒すのも余裕。

一回の体当たりで変態が3人倒れる。

突進↓吹っ飛んだ先で追撃の噛み付きは基本。

変態を一睨みしただけで失神させる。

突進も噛み付きも使わずに、吠えるだけで撃退させた事も。

夜間の警備も余裕、一晩中一睡もせず警備していた事もある。

病院に運ばれたらポチネキがいた。

木の上に避難していても余裕でジャンピング噛み付き。

突進キャッチしようとしたデブと、それを受け止めようとした変

態、ピザ、ガリ、筋肉、全てまとめて吹き飛ばした。

変態の愚痴に流暢な人語で反論しながら噛み付き。

噛み付きモーションをただけで5人くらい気絶した。

吠え声の風圧で隣の町まで吹っ飛ばされることは有名。

変態が絶滅に瀕した切っ掛けはポチネキを怒らせたから。

家の水飲み場から駅に到着した変態を遠吠えで撃退した。  
スタンガンの電撃を喰らっても平然としていた。

自分の先生である元陸軍少佐を連れて、近くに引越した変態の自宅まで行くというファンサービス。

これがだいたい事実という現実。

174：名無しの犬

>>173

こんなワンコが居れば変態なんざ怖くないよなあ？

不意打ちしようにも本人自身体格の割に全然弱くないし、ポチネキ  
ずっと側に居るし。更に四国犬の血が強いのか忠実かつイケメンや。

うちにも欲しいぜ……

175：名無しの犬

>>174

お前には勿体ない。ポチネキはシロちゃんと共にいてこそ輝くの  
だ。

つまりポチ×シロこそ至高。

176：名無しの犬

>>175

シロ×ポチだろ常考。

177：名無しの犬

>>176

あゝ？ やんのか？

178：名無しの犬

>>177

上等だぜ。来いよ異教徒！ 戯言なんて捨ててかかってこい！

179：名無しの犬

>>177

>>178

喧嘩なら他所でな。

……あ、俺はポチ×シロ派です。

180：名無しの犬

>>179

貴様あー!

.....

.....

.....

◇

「相変わらず賑やかだなあ……」

検証板を探す中で時折覗いている板を見つけて軽くとはいえ、つい読んでしまったが、相変わらずだった。

スレまだ伸びてるし、読もうと思えばまだ読めるが……今は検証が先だろう。

「さて、と」

心のざわめきも、急ぐ様な衝動もだいぶ収まっている。

だが、気になる気持ちは全く変わらない。もしオレンの実が実在するのなら、それはポケモンが実在する可能性を示しているのだから。

「あつた、これだ」

私は検証板を見つけて、その板の中に飛び込んでいく。

どうかこの検証で良い結果が出ます様にと、祈りながら。

### 第3話 検証、オレンの実

LEDの明かりが照らす部屋の中、私はパソコンにかじりつく様になりながら椅子に座っていた。時刻は既に日を跨いでおり、今の私はきつと……酷いしかめっ面をしているに違いない。

『やっぱり、新しい情報は無いんですか?』

愛用のキーボードを叩き、掲示板にそう書き込む。そして書き込んでから気づくのは、その文章がもう二度目だと言うことだった。

『無いな』『無い』『ニュースサイト巡ったけど、どこも一緒だった』『やっぱりシロちゃんが一番詳しいで』『ポケモンの設定をまとめてるサイトが一番詳しく書いてる状況やからな』

そう、きのみ検証板と名付けられたソコでの会議は堂々巡りになりつつあったのだ。新しい情報を求める私と、私に何かを期待するシロ民達で。……私だって何も分からないのに、何を期待しているのやら。

まあ、私はこの件を徹底的に追究するつもりだが、このままでは追究し終わるより先にシロ民達が落胆し、飽きてしまうだろう。彼らはいくまで善意の協力者、飽きてしまうのは仕方ないし、無理強いも出来ないのだから。……仕方ない。情報が足りないが、踏み込もう。

「はあ、ふう……」

『今集まっている情報で、検証を始めます』

深く、しかし短く深呼吸して、検証開始を宣言する。

『よっしゃ』『待つてました』『シロ様、我らに知恵を!』『おい犬兵、身内が暴走しとるぞ』『あれはDM犬兵だ。身内ではない』『見捨てられて草』『シロ様あー!』

スルスルと流れるスレを追いながら、私は何を話したのかと悩む。

今集まっている情報は殆んどが知っている物ばかりで、検証も何もなくオレンの実だと言ってくるのだ。検証する事がない。しかし問題は私がそれを信じれない事。ポケモンが現実に現れるなんて、それこそファンタジー。幻想だからだ。



ならば検証の焦点は……私が信じるしかない情報を手に入れる事、これだろう。

『まずはオレンの実からいきましよう。手元にある人はどれくらい居ますか？』

『持っていない』『俺も持っていない』『手元には無いな。近所で見かけたが』『冷蔵庫にあるわ。取ってくる』『俺はこたつの上に置いてたな。違和感しかなかった。ちよつと取ってくる』『手元に幾つかあるで。少しかじったけど……本当にクソ不味いんだな、コレ』『なぜ食ったし』

私自身手元にあるオレンの実を引き寄せながらコメを読む。持っていない人も多いが……持っている人もまた多い様だ。案外手に入れ易いのか？ ……聞いてみるか。

『皆さんどうやってオレンの実(仮)を手に入れたんですか？ 私は配信中言ったように、ミカンの木を植えてる近所の人から譲って貰ったのですが……』

『庭で取って来た。オレンの実は庭になってた。小さめの柑橘系の木で、ミカンの木ではなかったと記憶している』『俺はシロちゃんに同じく。近所の人から貰った』『食うんじゃなかったよ……ああ、俺は公園になってたのを拝借した。……いや、シロちゃんの言ってた奴じゃね？ って気になったら、つい』『つい、じゃないだろ……』『今は反省してる。だがシロちゃんの力になれるなら後悔は無い』『ワカル』『ワカルマーン』『犬兵、仕事しろ』『いや、逮捕状無いから……』『無能犬兵』『わうーん……』

ふむ。どうやら比較的手に入れ易い様だ。全国的に発生しているせいもあるのだろうか……オレンの実がなる条件は緩いのか？ 確かにゲームでは果実とは思えないスピードで成長するし、大した世話も必要無いが……

「案外、植えたら勝手に育ったりするかな」

そう思わず呟いてから、思う。ポケモンのオレンの実ならあり得ると。

だが今は夜。やるにしても他の要素を試してからにすべきだろう。

となると……

『なら、回復効果を試みましょうか。比較的手に入れ易いようですし、気軽にやりましょう』

『ok』『りよ』『OK!』

『でも回復効果つてもどうするんだ?』『設定では10回復、だっけ?』『10か、シヨボいな』『シヨボい言うな』『回復……やっぱ怪我を治す感じか?』

『私もよく分からないのですが、怪我を治すと仮定しましょう。オレンの実を持つている人で怪我をしている人は……居ますか?』

『してない』『俺もしてない』『擦り傷一つ無い』『軽く怪我してるがオレンの実が無い』『無能ばかりじゃねえか!』『オマエモナー』

まあ、そうそう都合良くはあるまい。ならば。

『じゃあ先ず私が怪我をして食べてみますね』

そう書いてどうやって怪我をしたものかと思案する。

家の中でお手軽に出来る怪我……やはり道具を使うのがいいだろう。刃物とか。そうすると台所まで行って包丁を……ん?

『いやいやいや』『オイオイオイ』『待つて、お願いだから待つて』『女の子が怪我はアカンやろ』『シロ闇』『おい、誰か早く怪我して食えー!』『お前がやれ、手元に刃物がない』『除草』

何やらコメントが騒がしい。別にハラキリする訳でもないのだが……

『よーし、ここはリスカのプロである俺がリスカしてやるよ! カッターもあるしな!』『オレンの実は?』『ある。行くぜ!』『逝け。早よしろ』『シロ様は見ているだけでいいので怪我はしないで下さい! むしろ怪我をするなら私に! 私を!』『そうだ……いや、本来なら見るのも駄目だろ。後ドM犬兵は今すぐ黙れ。教育に悪い』『シロ民そのものが教育に良くないと思うのですがそれは』

どうやらいつの間にか話が進み、善意の協力者が既にリスカに及んでいるようだ。怪我はしないでくれという声もあるし、ここは様子見かな?

『おい、どうだ?』『リスカの実況は要らんから、結果だけを言え』『おー

い、返事は?』『……まさか切りすぎて逝ったのか』『オイオイオイ』『誰か、蘇生魔法』

『やったか?』『やったか?!』『やったか?』『バ〇ス!』『やったか?!』『フアミキチ下さい』『やったか』『コイツ直接脳内に……』『おい、誰だ滅びの呪文唱えた奴』『ちくわ大明神』『おい誰だ今の』

『まだー?』『おい、ガチで逝ったのか?』『そんなことよりおうどんたべたい』『人選ミスか……』『カップラーメンでも食ってろ』『太るからヤダ』

「何かどンドン脇に流れてる……」

まあネットだしこんなものだろうとは思うが……しかし遅い。切り過ぎたというより、迷っているのか? やはり包丁を取って来るべきか。

私はそう結論付けて席を立つ。部屋に置いてある姿見に映った自分の姿——中学一年生で止まった身長と童顔。肩口を過ぎる伸ばしに伸ばした真っ白な白髪。いつもは死んでるが、今日はなぜか輝いている紅い瞳。眠そうな目元とゆったりとしたネルのパジャマ——を横目に、足を踏み出そうとして一応とばかりにコメントを再度確認すると……あった。

『オレンの実ヤバイ。マジ、ヤバイ』

そのコメントに心がざわつく。だってその物言いではまるで……いや、確認だ。確認が先だ。落ち着け。

私は急ぐ気持ちを押さええて再度席に着き、微かに震える手でキーボードを叩く。

『どうしたんですか? 何が、どう、ヤバイのか、落ち着いて書き込んで下さい』

『シロちゃん食い気味?』『そりや食い気味にもなるだろ。……おら、早よ書き込め』『食い気味シロちゃん可愛い。食い気味シロ民コワイ』『コワイ!』『いいから、早よ』

『オレンの実を一口食ったら、リスカした傷が秒速でふさがった。三度繰り返し返したが全く同じ。リスカの傷ぐらいなら秒速で治る。深めに切っても治った。ヤバイ、ナニコレ。ファンタジー?』

「——っ！」

間違いない。オレンの実だ。食べただけで傷を治すなんて、オレンの実の効果そのものだ。

ああ、ああ……なんという事か。ポケモンが、ポケモンが、ポケモンが現実になった！

『え？ マジ？』『冗談だろ？』『マジだ。お前らも確かめて見ろ。マジファンタジーだから』『ちよつと俺も試して見る』『なあ、深夜テンションの冗談だろ？』『予感が当たったか……明日近所を巡らないとな』『ねえ、マジなの？』『マジだつて言ってるだろ？ 嘘だと思うんなら試せば？』『オイオイオイ……え、マジ？』『ヤベエ、冗談かと思つたらマジだ。クソ不味いけど怪我が治つた。ナニコレ』

「……………はあ、すう——はあ……………よし」

コメント欄は大荒れだ。信じる者、信じない者、半信半疑な者……信じない者が一番少数派のようだが、直ぐにでも鞍替えする事になるのだろう。

ああ、断定しようこれは。

『間違いなく、オレンの実のようですね』

『え？ シロちゃん信じるん？』『そりゃシロちゃんが一番信じたいだろうし……てかき、今気づいたけど他の『きのみ』もこんななんじゃないか？』『他のきのみ……チーゴとか、ナナシか』『そーいやチーゴぽいのが庭のイチゴに成つてたわ。明日収穫しとこ』『信じてる奴大杉ワロタ』『信じれないシロ民は間抜け面晒さない様にな』『お前は信じるのかよw』『薄々こうだと思つてたしなあ』『だよな。嘘にしては規模がデカ過ぎるし、一致する箇所が多すぎる。シロちゃんがやった……訳じゃないだろうけど。預言者的な？』『マジか……』

コメント欄はどんどん信じる者が増えている様だ。預言者云々は……今は脇に置いておこう。チーゴやナナシも恐らくポケモンのソレ。とはいえ検証は必要だし、手に入れておくべきか。……これでやれる事は全部か？ 他に何か出来る事は——そうだ。栽培。

『今日の検証はここまでにしましょう。取り敢えずオレンの実は本物、という事で。そして明日は本物だと思われるオレンで栽培を試み

ようと思います。興味のある方は各自で栽培に挑戦してくれませんか？ その後このスレで報告し合う……というのはどうでしょう？』  
『ok』『任せろ！』『りよ』『賛成』『オレンって栽培できた？ 時間かららない？』『確かだいたい半日で育つし、一個から二、三個生るはず。詳しくはウエキな』『水やりとか肥料は？』『あるに越した事はないが無くても育つはず。ウエキ見ろ』『ヤベエなオレンの実』『よし、今から植えて来る。庭で良いよな？』『良いんじゃない？ 割りところでも育つつぽいし』『家に庭無いんだけど……』『近所の公園の端っこにでも植えてろ』『それだ！』『そして不審者として職務質問されるんですね分かります』

『では、宜しくお願いしますね。私は落ちます』

『乙』『お疲れ様』『おやすみ』『任せとけ！ バリバリ』『やめて！』

『シロちゃんおやすみー』

「ふう……」

スレから出てパソコンの電源を落とした私は、深めに息を吐いて肩の力を抜く。

だが、心はちつとも落ち着かない。急ぐ様な気持ちは強くなった。

……当たり前か。

「これが、本物……か」

オレンを手に眺めながら、そうポツリと呟く。

この世界にポケモンは居なかった。だが、今、こうしてオレンの実が現れた。ならば……今は居ないポケモン達も、やがて現れるのでは？ そんな突飛な考えは、頭にこびりついて離れない。それどころか確信だけが強くなる。彼らが、ポケモン達が、近づいていると。

「考え過ぎ、かな。………寝よう」

果たして考え過ぎなのかどうなのか。それもやがて分かるだろう。そう思いを蹴り飛ばし、オレンの実を机の上に戻して布団に潜り込む。

私が寝付けたのは、それからかなりの時間が過ぎた後だった。

#### 第4話 きのみ、ニュースにて語られる？

きのみ検証掲示板での検証と雑談から一夜開けて、お昼頃。私は珍しく昼前には目を覚まし、ご飯も食わずに外に出ていた。

理由は勿論、オレンの実を植える為だ。

長袖のジップパーカーと長ズボンという、ファッション性よりも日差しを遮る事に重きを置いた衣服で外に出た私のポケットと手の中にはオレンの実が握られ、それは今や半ば以上土に埋まっている。

「ワフウン？」

「あ、ポチ。おはよう」

「わふう」

せつせつせとときのみを植える私が珍しかったのか、それとも昨日に引き続きオレンの実が気になるのか、いつの間にか「何をしているんだ？」と言いたげなポチが私の近くまで来ていた。

お互いに挨拶を交わしたあとは特に何も言わず、何もせず。私はきのみを植え、ポチはそれを見守る。なんだか穏やかな時間だった。

「楽しみだね。ポチ」

「わふう？」

きのみを全て埋め終えた私はポチにそういった後、古びたジヨウロできのみに水をやり。テキトーな鼻歌を歌いながら、ポチを連れて家の中に戻る。あれがゲーム通りのオレンの実なら次の水やりは三時間後だなど思いながら。

「〜♪」

家に戻った私は暫く鼻歌を続行しつつポチのご飯を用意した後、自分の分として食パンにジャムを付けてもそもそと食べ始める。

そうしてチビチビと食べていて思うのは、これが男だった前世なら朝に食パン一枚なんて耐えられなかっただろうし、そもそも考慮すらしなかっただろうという事だ。まあ、今世のマイボデイたるこのロリボデイは燃費が良いのか、それとも単純に胃が小さいのか、食パン一枚で事足りてしまうのだが。

もそもそモヒモヒ、喉が乾けば牛乳を一飲み。そしてまたチビチビ

と食べ進め……ふと何気なくテレビのリモコンを手にとり、そのまま特に考える事もなくテレビの電源を入れる。

殆んどノータイムで起動した画面に映るのは……どうやらニュース番組、それもワイドショーの様だ。普段は絶対見ない、馴染みなんて欠片もないタイプの番組だ。

『では次の話題にいきましょう。次の話題は、こちら！』 『日本各地でおかしくなった果実』です！ 今回はこの件について日本各地に取材を行い、また専門家の方にスタジオまでお越し頂きました。まずはVTRをどうぞ！』

ニュース番組と気づいてすぐにテレビを消そうとした私の腕が止まる。今アナウンサーが言った『日本各地でおかしくなった果実』とは、きのみの事だからだ。……なにか新しい情報があるかも知れない。そう思ってしまった、私はテレビを消す事が出来なくなっていた。

私が食パン片手に固まっている間にも番組は進行し、農家の人へのインタビューが始まっている。背景とテロップを読むに、今はリングゴ農家の人の様だ。

『ええ、いつの間にかですよ。前触れなんて全然ありませんでした。……見てくださいこの木を。コイツの収穫はまだまだ先なんですけど、いつの間にかこのサクランボみたいな小さいのが生ってるんです。——味？ 酷いもんです。うちのは甘さとホンの少しの酸味が自慢だったのに、何故か辛いし、渋みまである。たまったもんじゃありませんよ。——不安？ そりゃこんな訳が分からないのが出来て、次の収穫が出来るのかは不安ですね。こんな訳分からないじゃ売れないし、早いとこ原因を突き止めて貰わないと、ワシらみたいな農家は廃業ですよ』

質問のテロップを挟みながらも、心底困った様子でそう語ってみせるリングゴ農家のお爺さん。その有り様は同情を誘うに価するだろう。だが、私は同情どころでは無かった。リングゴ農家のお爺さんが訳が分からないと吐き捨てたその小さな果実、それは私の目と記憶が確かならポケモンの『きののみ』それもヒメリの実だからだ。

——ヒメリの実。きののみナンバーは6。ポケモンのPP、技の使用

回数を回復させるといふ、他には類をみない効果を持つ特殊なきのみ  
……

ヒメリの実はその特殊性からピンチのときにお世話になる機会が  
時たまあり、比較的印象に残り易いきのみだろう。斯くいう私もヒメ  
リの実印象に残っているし、それだけにテレビに映ったそれは衝撃  
だった。確かにナンバー7のオレンの実が存在したのだから、ヒメリ  
の実があってもおかしくはないが……それでも実際にあるのだと見  
せられると、少なくとも驚きがある。

『ああ、うちは見ての通り西洋すももを主に育ててるんだよ。立派な  
もんだらう？　ここまでするには苦労したんだ』

私がヒメリの実を思い出している間に番組が進んだらしく、テレビ  
には別の農家の人が映っていた。育てているのは西洋すももらしい。  
『ところが見てくれよこいつを。……ああ、緑さ。葉っぱが丸まつて  
る訳でも、収穫が早い訳でもない。これで育ちきってるんだよ。うち  
で育ててる西洋すももとは色からして違う。味も……正直微妙だ。  
慣れりや上手い食い方が分かるかも知れねえが、少なくとも今は売り  
物にはなりそうにない。商売上がったりさ。……しかもコイツ、ざつ  
と二日おきに実をつけやがる。こうなると木がまるごと使い物にな  
らなくなってる事を考えなきゃならねえから……ははっ、腹が痛く  
なってくるよ』

乾いた笑いを漏らす農家のオッサンの手に握られた緑のきのみ実。  
あれは……ラムの実か？　テレビ越しでは確信までいかないが、そう  
見える。

きのみナンバー9。全ての状態異常を回復するという特殊な効果  
を持つラムの実。あのきのみまで現実に現れた、か。これは他のきの  
みの存在にも期待できるかも知れない。

『はい。』覧頂きました通り、日本各地で果実の異常が発生していま  
す。味は勿論、その他様々なものが変わり、生産者の方は困惑するし  
かないのが現状のようです。……ではスタジオにお越し頂きました  
専門家の皆さんの意見を伺ってみましょう』

私がヒメリの実とラムの実に衝撃を受けて少しばかり思案してい



るうちに番組が進んだらしく、アナウンサーの男が総括に入っていた。そして次は専門家の話らしい。

うーん、何か新しい情報があるといいのだが。

『ここはやはり病気と考えるのが自然でしょう。毒性こそ確認されていませんが、味の変化や色の変化はまさに病気のそれです。とはいえこの件以外に前例は見当たりませんから、新種の病気……もつといえは新種のウイルスが絡んでいる可能性が高い。勿論、温暖化の可能性もあり得ますし、早急に詳しい調査が必要でしょう』

『なるほど。確かに病気と言われれば納得ですね』

『ええ、その通りです。病気と考えるのが一番自然なのですよ』

どこか自慢げにそう語る白衣のオッサン。その後もアナウンサーにそれらしい事を二、三言っているが……ボンクラだな。ポケモンのきのみを病気とは、知らないにしてもずいぶんな話だ。

私はヤブの専門家の話を右から左へ聞き流しつつ、手に持った食パンをかじる作業に戻る。モヒモヒもそもそ、牛乳を一飲み。そこで一応とテレビに視線を戻せば、違う専門家が映っていた。白衣なのは同じだが、先程のオッサンよりも一回り以上は若そうだ。選手交代らしい。テロップによれば先進気鋭の若手学者との事。

『先ほどの方は病気と仰いましたが……いささか性急に過ぎるのではありませんか？』

『と、いいますと？』

『私としては病気ではなく、新種の可能性……つまりは突然変異の可能性を提示したい。あれらの果実が今まさに進化しよ』新種の可能性……ふっ、学が無いのは幸せだな……黙って頂けますか？ 今は私が発言しているのですが』

『はて、何をいつているのか。サッパリ分かりませんな。……ああ、どうぞ。先を続けて下さい。……ふんっ、田舎者のガキが——』

『……言いたい事があるならハッキリ言ったらどうです？』

『私は何も言っていないですよ？ その歳で耳が悪いとは……いやはや、大変ですねえ』

『——私よりも貴方の耳の方が悪いでしょう。……ああいえ、悪

いのは耳ではなく頭ですか？ 病院に行くにせよ付き添いが必要ですね。なんなら今すぐ救急車を呼んで上げますよ。番組が終わるまで、そこで寝転んで休んだらいかがですか？』

『小僧っ！ 貴様あー！』

『ちよっ!?! 待って、止まれえ!?!』

若い男が多少マシな事を言っていると思つたら、なぜか乱闘騒ぎ寸前になっていた。いいぞもつとやれ。あー牛乳美味しい。

しかし慌ててアナウンサーが止めに入ったのが良かったのか、激昂したオツサンは席に座り、若いのと睨み合いに入る。仲が悪いのだろうか？ だとしたら番組スタッフはなんだって二人を一緒に呼んだ？ こうなる事は予想出来ただろうに……つと、どうやら次の専門家に移るようだ。オツサン、若いのと来て、次はそこそこの年といった老人だった。テロップにはどこぞの大学教授で、植物学の権威だと書いてある。

『えー、はい。先生はどう思われますか？』

『そうですね。まずあの映像だけではなんとも言えません。病気が、突然変異なのかすら判別できない。となるとサンプルが必要ですが、あの小さな果実のサンプルはまだ私の手元に届いてすらいませんし、憶測で物をいう事もできません。そんな事をしてしまえば植物学とは言えませんからね』

『えー……つまり、分からない、と?』

『いえ、サンプルがあり、十分な研究が出来れば何なのかハッキリするでしょう。ただ現状では何とも言えない、そういう事です』

「……それは要するに分からないという事では?」

モヒモヒもそもそと食べていた食パンがついに無くなり、口が空いた私は思わずその声を漏らす。

あの手の人間は「分からない」と言う事をとことん嫌い、必ず前置きを置くか、遠回しに表現するとは聞いていたが……どうやら事実だったようだ。実にめんどくさい。

『えー……はい。先生方、貴重なご意見ありがとうございます。では次のコーナーに参りましょう』

そしてどうやらそれはアナウンサーや番組スタッフも同じだったのか、ロクな意見も出てないのに話をぶった切って次のコーナーへと進んでいった。

次のコーナーは……きのみとは関係なさそうだ。そう判断してテレビの電源を落とす。新しい情報は特に無く、強いていえば専門家はまるで何も分かってないという事だけ。時間と電力の無駄だったな。

「……私が一番詳しい、か」

ふと掲示板で言われた事を思い出した。別に自分が一番だと自惚れるつもりはないが……自覚が必要なのかも知れない。そして、このアドバンテージをどうするのかも。

「……………どうしようかなあ」

「わふう？」

「ん、何でもないよ。ポチ」

食べ終わって空になったお皿を私のところまで持って来て、まるで「何か悩み事か？」と言わんばかりのポチの頭を撫でつつ、お皿を受け取って思う。もつと大規模に事を運ぶべきかも知れない、と。

「くうーん——」

「もふもふー……………」

とはいえそれは今ではない。だったら先でどう動くにせよ、今私がポチをどれだけでももふもふしようが構わないはずだ。わしやわしやもふもふ、パタパタ。

ああ、そうだ。

「んー……………そうだね。ポチ、今日はお風呂入る？ それとも先にお散歩？」

身振り手振りを交えながらポチにそう伝えれば、私から一步離れる。どうやらお散歩の気分らしい。

それならばと私はリードを取って来て、ポチとの散歩に出向く準備を確りと整える。ポチとの散歩は一日二回、昼過ぎと夕方だ。夕方は日が沈んでいるからいいのだが、昼過ぎの日差しはなかなかキツイ。アルビノとしては強めの日光耐性があるらしいが、それでもウカツな格好で外に出れば文字通り肌が焼けるのは間違いなく、準備は怠れな

かった。

「よし、準備OK。行こうか、ポチ」

「ワン！」

リードを手に取って、フードを深くかぶり、ポチと並んで家を出た。

どの散歩コースを通ろうか、いや老夫婦のところには一度寄って報告をしなければ。そんな事を思いつつ歩き始める。風はまだ冷たく、春の芽吹きはまだ先の事の様に思えた。

## 掲示板 植物学者、現る

【シロ民】きのみ検証板 part 21 【緊急招集】

202：名無しの犬

なあ、昼頃あつた生放送モドキのワイドショー見た奴いるか？ きのみを特集しようとして失敗してた奴。

203：名無しの犬

>>202

ここにいます。

てかさ、あの挑発されてた若手研究者。あれ新米のシロ民じゃなかったか？ 深夜、シロちゃんが寝た後にここに来てた奴じゃね？

205：名無しの犬

>>203

おお、いたか。

で、やっぱりそう思う？ 実は俺もそう思ったんだ。深夜に来てた奴、自分は研究者で今日昼のテレビに出るとかなんとか言ってたし。

206：名無しの犬

>>205

だな。まあ、二人も既視感感じてるんなら当たりだろ。そうなるそろそろ顔を出すはずだが……

209：名無しの犬

>>206

呼んだ？ AA略

210：名無しの犬

>>209

お前じゃねえ座ってる。AA略

……違うよね？ コテハン付けてないし。

211：名無しの犬

>>210

ぶつちやけ知らない。ノリでやった。済んだ事。

……で、シロちゃんの後に来た奴って誰？ 俺シロちゃんが落ちた

タイミングでROMるの止めて寝たから、ガチで知らないんだよ。

212：名無しの犬

ちくわ大明神

215：名無しの犬

誰だ今の

>>211

で、研究者を名乗るXの話か？ あれは今から三十六万……いや17、8時間程前の事だ。俺にとつてはつい昨日の出来事だが……お前に取ってはたぶん、次の瞬間の出来事だ。

……まあ、真面目に、かつ簡単にまとめていうと。

シロちゃん寝る。約2時ちよつと前。

←

有志と暇人は残って雑談、検証、推測を重ねる。約3時過ぎ。

←

自らを植物学の研究者と名乗る奴がスレに初カキコ。

>>自分は植物を専門に研究しているのだが、オタク気質の……シロ民？ の知人からここに果実の異変に一番詳しい人物がいると聞いた。それは確かか？  
てな。

←

その後質疑応答を重ねていくうちに俺らはソイツをマジモンの植物学者だと判断し、ソイツは俺らの希望もあってコテハンに植物学者と入れる。

そこから専門的な質疑応答を行い、植物学者はきのみに対し理解を深め、そして当時研究室に居たらしくマウスを使って検証もやってくれた。チーゴ、クラボ、モモンの三つをな。結果？ シロちゃんの設定通りだよ。無意識で預言者してたのか……それともおとぎ話的な話なのか。閑話休題。

←

その中で

>>明日テレビに出る予定がある。流星にこの知識をテレビで

言ったところで真実とは思って貰えないだろうから、先ずは新種として世間に伝えるつもりだ。

若手の足を引っ張るのが趣味のコネしかない無能な研究者モドキのクズと、権力や立場に固執する様になった老人と一緒に聞いてやる気を無くしていたが、意義を見いだせた。聡明なシロ民の者達に感謝する。

とカキコし

>>収録と一通りの用事を済ませて、自分の研究室に戻ったらまたここに顔を出す。進展があつたら教えて欲しい。私も協力は惜しまない。

>>戻るのは遅くても18時頃だ。19時には必ずここに来る。

と約束して去っていった。という話だ。長文になつたけど説明の為だからね。仕方ないね。

216：名無しの犬

>>215

サックス。そんな事があつたんだな。

……てか、今18時どころか19時過ぎやぞ。しかもそろそろ20時いくぞ？ その植物学者は来たん？ それともテレビでやらかしたからキャンセル？

218：名無しの犬

>>216

連絡とかある訳ないし、正直分からん。

待ってたのも殆んど引き上げちまった。テレビでのやらかしで説教くらって掲示板来れないんだろうって。

219：名無しの犬

>>218

りよ。まあ、そんなもんか。

案外、呼んだら来るかもなw

220：名無しの犬

>>219

待たせたな（イケボ）てかw

225：植物学者

すまない。遅れてしまった。

まだ誰か残っているか？

227：名無しの犬

キタ——（。▽。）——！！

228：名無しの犬

>>225

イエ`アアア！ 死体だけです。

にしても、遅かったじゃないか……

230：植物学者

すまない。

挑発にのって醜態を晒してしまった事について上からネチネチと責められていてな……庇ってくれる者も外に出ていたり、研究を任せたりしたから、気づけばこの時間だったんだ。本当にすまない。

231：名無しの犬

>>230

（ただのネタやから）気にするな！

232：名無しの犬

>>230

エエんやで。

まあ、人はかなり少ないけど。

234：植物学者

そうか、ネタか。よかった。どうにもネットの空気というのは分かってにくいな。いや、新鮮でいいのだが。

ああ、有り難う。人が少ないのは、仕方ないだろうさ。

ところで、何か新しい情報はあるか？

235：名無しの犬

>>234

新しい情報は特に無いね。夕方前に何人かが栽培に成功したってカキコしたくらい？

暇だったから植物学者のテレビでの活躍を話してたぐらいだよ。



237：植物学者

いやいや、あるじゃないか！ 新しい情報！ 栽培に成功したなんて話は初耳だ！ 恐らく日本初、いや、世界初だろう。やはり君達シロ民に頼ったのは間違い等ではなかった。詳しく教えてくれ。いや、教えて下さい。頼む。

それとテレビでの事は言わないでくれないか？ いや、君達の努力を少なからず世間に知らしめようとして失敗したのは申し訳ないと思う。思うが、言わないでくれ。あれは一生の恥だ。

239：名無しの犬

>>237

え、マジ？ 俺らそんな凄い事やってたん？ 俺なんか近所のジーさんから貰ったオレンの実を、シロちゃんの設定通りに埋めただけやぞ。水やりすらしてないのに。

テレビでの事は言わないで下さいってかあ!? ……まあそれもセヤナ。仕方ないから忘れておいてやるよお！

240：名無しの犬

>>237

必死過ぎて草。ビールでも飲んでリラックスしな。

俺は朝イチゴからチーゴ収穫して、その流れでそのまま植えたから……そろそろ生ってるかな？ 確認してくる。

テレビでの事は……まあ、忘れておいてやるよ。誰にでも失敗はあるからな。

241：植物学者

オレンの実。確かミカンの木を中心に出現した青い果実だな。栽培に成功したのか？ できる限り詳しく教えてくれ。

それとチーゴの実、イチゴになる緑の果実だな。成功しているしてないに限らず、後で状況を詳しく教えてくれ。

ああ、テレビでの事は忘れておいてくれ。助かるよ。思い出したくもないんだ。

242：名無しの犬

>>240

行つてら。植物学者の面倒は俺がしつかり見といてやるよ。

>>>241

で、オレンの実だな。栽培には成功したぞ。つてもシロちゃんの設定通りやったから、ああやっぱりーみたいなき感じだけど。

ちなみに俺は深夜三時頃に庭に植えて、今日の六時過ぎに収穫。水やりは一度もしてない。けど実は生つてた。一本に二個だったな。ウエキの情報通りだったよ。

ただ家に帰つて来て庭を覗いたら、朝にはなかった……こう、ヒョロつとした背が低めの木が出来てたのはビビった。しかもきのみを全部もいで取つたら、凄まじい速度で枯れて灰になつたし。あれ植物じゃなくて、きのみという名のナニカじゃないのか？ どう思う？

植物学者さん。

243：植物学者

すまない。理解し難いのだが……それは本当か？ いや、疑う訳ではないのだが……

244：名無しの犬

>>>243

マジやぞ。まあ、理解し難いのはしゃーない。俺も訳ワカメだし、シロちゃんの存在でワンクッション置いてなきやこんな冷静にカキコ出来ん。特に木が枯れた瞬間の衝撃の凄まじさよ。

246：名無しの犬

チーゴ収穫してきた。三時間おきの水やりが功を奏したのか、三つや。

それとだいたい>>242と同じ状況だったわ。ミカンから取れたオレンが木になるのはいいとして、イチゴから取ったチーゴが木になるのはマジ訳ワカメだけど。あと灰になつた瞬間の焦りよ。まあ>>242の感じと合わせると、これがきのみだけのデフォなんだろうな。

247：名無しの犬

きのみを持っていないワイ、低見の見物。

……明日休みだし、少し遠出して探してみるか。

249：植物学者

そうか。昼間、まとめサイトを見たときからそんな気は……まあ、少しはしていたが……あのサイト通りになったのか。

ハッキリした事はまだ言えない。言えないが……恐らく『きのみ』は既存の植物学で図る事の出来ない代物だろう。論文をどうまとめたものか、今から悩ましいよ。

取り敢えず私もきのみを育てて見ようと思う。あのサイト通りというのが前提ならば、栽培そのものは簡単なようだからね。今すぐに、幾つかを下の者に植えさせよう。詳しい結果は、もう少し待ってくれ。

251：名無しの犬

>>>249

植物学者さんウエキ見てたのね。まあだいたいあんな感じじゃ。

俺らじゃ検証とかは出来ても専門的などころとか、詳しい数値とかはきつかったから、その辺は任せるで。

252：植物学者

任されよう。

しかし、きのみが世に出るより先に、これらの設定をネットに打ち出したシロという人物は何者なのだろうか？ 預言者か何かなのか？

253：名無しの犬

>>>252

ちゃんを付けろよデコすけ野郎。もしくは様だ。

254：植物学者

すまない。それもそうだな。それで、その、シロちゃんが預言者なのかについての検証はあったのか？

255：名無しの犬

>>>254

ねえよ！ いや、少しはあったけどさ……シロ聞かると、預言者とかよりもおとぎ話的な話……こう、哀れな少女を哀れんだ神様が云々の話だろうってなった。そして以後ノータッチ、というよりア

ンタッチャブルで行く事になった。だってその手の話って地雷多いし……

257：植物学者

哀れな少女を哀れんだ神様……ああ、なるほど。子供の頃にそういう話を読んだな。スケールがいささか大きいけど、確かに酷似してなくもない。

しかし、そのシロちゃんは神様に哀れまれる様な人物なのか？ 直接見た事がないのでな……どうにも想像できない。

259：名無しの犬

>>257

ご存知、ないのですか……!?

まあ、知らんわな。普通ならROMって来いって場面だけど、植物学者にはバリバリ働いてもらわなアカンから。ほれ。

——URL——

これはシロ闇をまとめた闇の深い動画や。

——URL——

こっちは今は使われていないシロ闇コピペが貼られ、その後もシロ闇についての雑談が長かったスレや。コピペは334やから、その後さえ読めばいいと思うで。

261：植物学者

有り難う。いつかはシロちゃん氏とも話しがしたいと思っていたところだ。事前知識を入れさせて貰うよ。

262：名無しの犬

>>259

これは有能。シロちゃんもニッコリやろ。

264：名無しの犬

>>262

ニッコリシロちゃん……見たい。見たくない？

265：名無しの犬

見たい。

266：名無しの犬

ワカル。見たい。

268：名無しの犬

ワカルマーン。見たいです。

271：名無しの犬

ナニソレ見たいな！

ところで、今北産業。

273：名無しの犬

>>271

カワイイよ

シロちゃんカワイイ

カワイイよ

274：名無しの犬

>>271

植物学者が来た。

きのみ栽培成功の話をしたが、やっぱりよく分からん。

シロちゃんをすこれ。↑今ココ

275：名無しの犬

>>271

江戸の町

ああ江戸の町

江戸の町

278：名無しの犬

>>274

サンクス。お礼に一曲歌って上げてもいいわよ？

280：名無しの犬

>>278

ん？もしかしてジーさんが元政治家で、自分はキャラがブレまくる女優兼アイドルネキか？ 仕事どうした。

283：名無しの犬

>>280

休んでやった。というより長期休みくれなきヤストライキするっ

てマネージャーに泣き付いた。だってシロちゃんの周りが面白そうなんだもん。きのみも現実になったし、私も混ざりたい！

285：名無しの犬

>>283

隣れマネージャー……つかそんなじやまた仕事無くなるぞ？

286：名無しの犬

>>285

仕事よりシロちゃんでしょ常考。それに仕事無くなったら私シロちゃんのところに永久就職するから。お祖父ちゃんの遺産持つてね！

288：名無しの犬

>>286

お、おう……流石シロちゃんガチネキ勢はやバイな。マジヤバイ。ドM犬兵とガチ勢の勢力を二分するだけある。

てかお祖父ちゃん憐れな……昔はお祖父ちゃんっ子で、こんなグイグイ行く子じゃなかったんだよなあ……（元ファン並み感）

290：名無しの犬

>>288

ファンは大事だけど、シロちゃんカワイイし、仕方ないよね。

292：名無しの犬

何だろう。そこはかかない、寝取られ（百合風味）を見た気がする。

293：名無しの犬

>>292

どうしよう。こんなとき、好きな子どうしの百合カプが出来たと笑えばいいのか、両方とも寝取られたと泣けばいいのか分からないの。

295：名無しの犬

>>293

泣けよ。

296：名無しの犬

(……)

298：名無しの犬

>>293

◇◇◇296

正直、キモE

299：名無しの犬

。。。。(ノ皿、)ウワン！

300：名無しの犬

◇◇◇298

『おいうち』はヤメテ差し上げろw

.....

.....

.....

◇

「へえ、昼間の植物学者さんが来てたんだ……」

老夫婦への報告——テレビでもよく分からないと言っていたし、急がないでいいと言われた——と、二度のポチとの散歩や水やりを終わらせ、お風呂も済ませてポチにおやすみを言った後の夜の9時前。私は何気なしに掲示板を読んでいた。書き込みは引き続き続いており、好き勝手やる者、植物学者、アイドルネキの三つに別れて賑やかにやっているようだ。人もだんだん増えている様だし、そろそろ私も混ぜるとしよう。

「どんな話を……じゃなかった。皆に大規模に事を進める事を相談しよう」

私は現状打破、人類の未来の為、そして転生してからずっと引きずっている事を解消すべく、大規模な計画を胸に秘めて掲示板へと飛び込む。

きつと上手くいく。そう願いながら。

## 第5話 関東へ向かうべきはいつか？

『皆さん、賑わっているみたいですね』

先ずは普通に。そう考えてうちの決意が滲み出ない様に注意しつつ、ごく普通の書き込みを行う。反応は……直ぐだった。

『待ってた』『シロちゃんキター！』『おう植物学者、準備はいいか？』『シロちゃん今までのまとめいいる？』『ああシロちゃんだー！ 久しぶりー！』『アイドルネキ落ち着け。マジで落ち着け』

今までROM専してた人まで書き込みするものだから、一気に数十は進む。読み取れたのはごく少数だ。とはいえさかのぼっている暇はあるまい。一先ず読み取れたコメを幾つか拾おう。

『植物学者さん、ご協力有り難うございます。私に聞きたい事があつたら何でも聞いて下さい。まとめの提案有り難うございます。けどちゃんと読んで来たので大丈夫ですよ。それとアイドルネキお久しぶりです。二週間くらいですかね？』

『ん？ 今何でも答えるって』『植物学者限定でな。裏山しす』『ちゃんとROMシロちゃん。さすシロ』『さすシロ』『きゃー！ シロちゃんに覚えて貰ってたー！』『アイドルネキそろそろ落ち着け……ていうか覚える云々は普通逆だからな……？』『黙れ犬』『(´；ω；)』『憐れな……』

いつもより人が多いのか、スレの消費がかなり早い。読み取るのも割りと一杯一杯だ。……これで動く提案なんて出来るのか？ いや、人が多いのは必ずしも悪い事ではないんだ。大丈夫。やってみせる。……けど、その前に。

『今日は皆さんに提案があるのですが、その前にきのみの栽培についてまとめ……というよりは総括しようと思います』

私はそこまで書き込んだ後。ふう、と一息ついて、窓の方をチラリと見る。残念ながら角度がまるで足りず、庭で成長しているオレンの実は確認出来なかったが、それでも頭の整理には充分だった。

『先ず、オレンの実を始めとしたきのみはポケモンと同じ様に栽培、収穫が出来る。またその効果もおおよそ同一であり、変化は見られな



い。そして、現在確認されているきのみはナンバー10までである……これでいいでしょうか?』

オレンの実際の栽培と収穫。これは希望的観測が入っていたとはいえ、殆んど確信していた事だ。とはいえここで前提が崩れてはどうしようもないので一応確認を。効果も同じく。

問題は現在出現しているきのみの種類だが……実はナンバー10のオボンの実だけ確認していない。ナンバー8のキーの実は今日の散歩中に姿だけとはいえ存在を確認できたのだが。

『シロちゃん食い気味?』『そりや食い気味にも……この台詞前にも言った気がする』『栽培、収穫、効果は植物学者と検証したから間違いない』『セヤナ』『植物学者有能』『なおテレビ』『なお煽り耐性』『やめやめろ!』『てかナンバー10って何だっけ?』『オボンやな。俺は見えてない』『あの黄色のデコポンか。俺も見えてないな。シロちゃんは見ただのかな?』『俺も見えてないなあ』

「? 見てない人ばかり? そんなはずは……」  
栽培、収穫、効果はシロ民でも意見が一致しているようで反論はない。

しかしオボンの実に関しては見てないという意見ばかりだった。ナンバー10以降が出てないのはまだ仕方ないにしても、オボンの実が出てこないのは不自然に思えるのだが……私が思っているよりも、まだまだポケモンは遠いのだろうか?

『あー、オボンならどっかで見たよ。どこだったかな……』

いや、居た。これは、アイドルネキか。彼女は確か……いや、今は。『アイドルネキ、どこで見たんですか?』

『えつとね、えつとね……ちよつと待ってね』『ほらアイドルネキ、シロちゃんが期待しとるぞ』『スツゴい期待してるよ(たぶん)』『頑張れ頑張れはーと』『シロちゃんからすれば長年の夢みたいなモンだろうしなあ』

『思い出した! じいちゃんの部屋だ! ちよつと行ってくる!』  
『いてら』『いてら』『いて……待て、アイドルネキのじいちゃんって確か……』『元総理やな。けつこう前だけど』『その部屋で見たって……』

大丈夫なん？ 機密だつたりしない？』『たとえ機密だろうと、問題なくね？ アイドルネキは身内だし、ヤバイなら黙っとく様に言うだろう。つか、俺らが知ってるから機密もクソもない気が……』『つまりさすしろ』『さすしろ』

「そういえば、そうだった。アイドルネキは政界に繋がりがあったんだった」

気安い感じなので失念していたが、彼女は中々に大物だった。現役の女優にしてアイドル。祖父はかつて総理の座まで上り詰めた御仁……始めるなら、彼女からになるか。

いや、今はオボンの実だ。先ずはあのきのみが出現したかどうかを確かめる必要がある。もし現実に現れてないなら急ぐ必要は無く、しかし現れているのなら急ぐ必要があるのだ。恐らく、きのみのは出現はナンバー10が一つの区切りだろうから。

『あった、あったよー。じいちゃんの机の上の書類に書いてあった。関東地方の、ザボン？ を作ってる農家さんのところで確認されたらしいよ。まだ個数は少ないって書いてある。書類の日付は三日前から、実際に現れたのは四、五日前じゃないかな？』

「っ！……近づいてる。間違いなく」

彼女が書き込んだ情報が確かならば、恐らく次に来るのはナンバー11か、あるいは『ポケモン』だ。……いや、ひよつとしたら同タイミングか？ どちらにせよ、足音は近づいている。もうすぐそこまで。

『オボンまで現実に、か』『オレンの三倍の力を持つオボンが現れたのか』『色は赤色だな（違う）』

『なあ、これそろそろ来るんじゃないのか？』『何がだよ』『ポケモンだよ！ オボンより先のきのみってかなり特殊だし、それにこうなるとポケモン本体が出て来てもおかしくないだろ』『それは……』『確かに』『きのみが来たならポケモンも、か』『分からないでもないけど……ちよつと、なあ？』『ああ、流石に考え難い』『いや、逆にもう現れるんじゃないのか？』『!?』『!?』『なん……だと……!?』『!?』

「——ッ！」

スレに書き込まれた可能性。それは私も考えていた可能性だ。……しかし、可能性は可能性でしかない。もし違ったら？ もしきのみだけしか来なかったら？ もし私の勘違いなら？ 私は二度と立ち直れまい。

——だが、もう足踏みなんてしてられない。彼らが来る。それはもう殆んど確信なのだ。そして最初にどこに現れるかも分かっている。ならば。ならば！

『関東に、私は関東に向かおうと思います。もしポケモンが現れるならば、最初の場所は、関東です』

『!?』『?!?』『シロちゃんが、動く!?』『オイオイオイ、え？ マジ?』『そうか、ポケモン最初の地方。カントー地方は、関東地方が元ネタだったな』『シロちゃんが、関東に……』『良かったな。関東民。合法的にシロちゃんに会えるぞ。会えるぞ……!』（非関東民）『憐れな……』『泣けよ』『。』（ノロノロ）

『具体的にいつになるかは分かりません。しかし近日中に移動し、現地調査や……ポケモン知識の布教を開始したいと思います。シロ民の皆さん、お願いがあります。暇な時だけでもいいです。協力して下さい』

震える指がエンターキーを叩き、私の書き込みが上げられる。

現地調査は最初にポケモンに会う為で、ポケモンの布教は……仲間を、増やしたいからだ。ポケモンバトルだって一人では出来ないのだし、私の持っているポケモン知識は多くの人を知っておいた方がいいだろうから。

問題は、協力してくれる人がいるかどうか。私がこの決断を出来たのも、きのみの情報スピーディーに集められたのも、ネットにいるシロ民あってこそ。もしシロ民の協力が得られないなら……その不安は直ぐに払拭された。

『よっしゃ、ワイに任せろ!』『これは協力せざるを得ないな!』『俺も参加するぞ!』『シロちゃんが関東に、行き違いにな……いや、その方が良いか。うん』『俺もやるかあ』『シロ民の戦力を結集するのか……』『なんだろう。風が吹いている（以下略）』『大抵の事は出来そうだな』

『祭りじゃー!』『シロちゃんが関東に……案内を……でも広報なら私が適任だし……むむむ』

「よかった……」

どうやら最初のステップでつまづく事は回避された様だ。実際にどれ程の人数になるかは不明だが、最低限の人員は確保できたはず。後は……

『アイドルネキ。重ね重ねになるのですが、お願いがあります』

『何々? なんでもいって!』

『その、アイドルネキのお爺さん……元総理にポケモンの事を話して貰いたいです。そして本当にポケモンが現れたときの為に何か準備を、と』

もしポケモンが現実に現れるなら、それは嬉しい事だ。これは間違いない。が、同時に問題も発生するだろう。例えばスピアーが現れれば被害はスズメバチのソレを遥かに上回るし、ギャラドスが出現すれば一都市が丸ごと灰になる可能性がある。そしてそれらを解決する為に機動隊や自衛隊が出動し、武器の使用を以てポケモンと戦闘に等なれば……確実に悲しい結末を生むだろう。そんな未来は早めに排除しておきたい。

そうなると頼りたいのは権力のある政治家で、アイドルネキのお爺さんはその点では悪くなく、またアイドルネキを通じてとはいえ比較的頼り易い。もしアイドルネキのお爺さんが政界に働きかけ、前もってマニュアルなり法なりを準備していれば、悲しい結末は遠ざかっていくはずだから。

『駄目、でしょうか……?』

私はポケモンが好きだ。そしてポケモンの良さを他の人にも知って貰いたいし、分かって貰いたい。その為には人とポケモンの争い、戦争は不要なのだ。ここでつまづく訳にはいかない。アイドルネキには領いてもらわないとかなり困るが……果たして。

『んー……私はぜんぜんいいんだけど。じいちゃん私に政治の話したからないからなあ……難しいかも』

「っ……」

駄目か。いや、そもそも虫が良すぎる話なのだ。駄目でもアイドルネキを責める訳にはいかない。それにまだ草の根活動は可能だ。そちらで何とかするしか……

『でも、頑張ってみる。たぶんここが踏ん張りどころだよな？ やつてみるよ。あ、そうだ！ シロちゃんも一緒に説得しない？』

「……え？」

『お？』『流れ変わったな』『これはUC間違いない』『シロちゃんとアイドルネキのダブルおねだり……これには耐えられまい』『勝利確定』『勝ったな。ステーキ食って田んぼの様子見て風呂行ってくる』

わ、私が、元総理に……じ、直談判？ た、確かに悪い手ではないかも知れないがしかし私はロクに外に出た事もないし人と話すのも近所のじーさんばーさん相手だけだしいきなり元総理とかちよつとハードル高過ぎるけどポケモンの為にはこのくらいこのくらいこのくらい——

『分かりました。行きましょう。ポケモンの為です』

『やった！ なら迎えの車をそっちに向かわせるね！ 私も行くから！ 待ってて！』

『ええと、大丈夫なんですか？ 色々。それに来るにしても私の住所は……』

『大丈夫！ 全部何とかする！ 住所は皆知ってるし大丈夫！ 分かる！』『セヤナ』『ワカル』『あ、おい馬鹿。確かシロちゃんは……』『やりやがったな、この馬鹿ども……』

「……は？」

え？ 皆知ってる？ しかも反論もなく受け入れられてる？

……あれ？ もしかしてガチで住所バレしてる？ これ？ いやいや、そんなはずは……一応、確認しよう。

『もしかして、私、住所バレしてます？』

『してる』『うん、してる。てか知らなかったん？』『え？ 常識じゃなかったの？ え、私何かマズイ事言った？』『言ったな。シロちゃん、住所バレ気ついてなかったんだよ』『そもそもあれ、変態がハツキング仕掛けて掴んだ情報だしなあ』『え？ マジで？ ……てか今まで皆

黙り決め込んだの?』『最初は言おうと思ったけど、なあ?』『うん。現地のシロ民からのポチネキ無双とS A T U M A無双聞いてたら……わざわざ言ってる怖がらせなくてもいいかなって』『警察も気づいたし、大丈夫かなって。むしろ気づいてなかったのね』『その辺は俺らでも意見割れてたしなあ』『ええ……』

う、嘘だろ……? いや、そういえば一時期やたら治安悪くなったときがあった。そのときはポチと鹿児島出身のじーさんがピリピリしてたっけ。ああ、思えば最近散歩中に警察とすれ違う事が多くなつたな。うん、そういうことか。そういうことかあ……よし。

『アイドルネキ。早く迎えに来て下さいお願いします』

三十六計逃げるにしかず。とはいえ引越してしようが無いので、さつさとアイドルネキに迎えに来て貰おう。それしかない。

『任せて! 今すぐ行く!』『それがエエやろな』『茶化そうと思ったが茶化せねえ……アイドルネキ早く行ってあげて』『引越したか出来そうにないだろうしなあ』『取り敢えずシロちゃんはアイドルネキに迎えに来て貰う手順とか決めるべき。シロ民は……関東活動組は一回集合?』『シロちゃん手一杯だろうし、関東活動組の編成はこっちでやるべきやろな。掲示板で何回か話して、シロちゃんが関東に来る前に一度現地集合って感じじゃね?』『シロちゃんはアイドルネキとゆっくりしてどうぞ』『セヤナ』

幸いにもというべきか。アイドルネキとシロ民の反応は悪くない。それどころか現地戦力の編成までしてくれるそうだ。これならアイドルネキと計画を詰める事も出来るだろう。では。

『えっと、ではアイドルネキ。私の鳥で軽く話しますか?』『うん、そうしよつか。じゃ、一旦落ちます。シロちゃん鳥でまたね!』

『では、えっと、シロ民の皆さん後をお願いします。落ちますね』

『乙』『お疲れ様』『ごゆっくり』『任せろ!』『任せろーバリバリ』『やめて!』『編成は進めとくでー』

私はシロ民に見送られた後、鳥でアイドルネキと話し合う。途中から声が聞きたいと言われ、電話番号を教えて貰い、結果長電話の話し合いになったが……おかげで段取りは出来た。

予定通りなら一週間以内に私は関東の地を踏む。ポケモンが最初に現れるであろう、関東へ。……準備を、進めなければならぬだろう。

「……………あ、きのみの水やり」

私が荷造りの準備を始めるのは、もう少し先になりそうだったが。

## 第6話 お爺ちゃんはSATUMA人

関東へと向かう事を決意し、アイドルネキと簡単に打ち合わせを行った翌日の昼間。私はポチの散歩の途中に、ある人物の家へお邪魔していた。

目的は、主に挨拶だ。場合によっては長期間に渡って家を空ける事になるので、心配させないように事前に報告しておこうという話……なのだが。

「……………」

「……………」

非常に、空気が、重い。

家主も私も、それどころかポチすらも一言も喋らない。

家主と私が喋ったのは私が家にかかる際にお互い社交辞令を交わしたときと、招かれた居間で交わした挨拶のみで、その後は畳の上の座布団に座ってお茶を飲んでいただけ。ポチに至っては私の近くで行儀よくしているのみ。

もう何度目か。沈黙に耐えかねて家主が出した湯飲みに手を伸ばし、冷めてきた緑茶を少しだけ啜る。それはロリボディ故なのか、甘党な私からすればいささか以上に苦味が強く、とてもではないが落ちて着ける代物ではない。

「……………」

「……………」

苦さで顔をしかめない様に注意する私とは打って変わって、低い机の向こう側に座る家主は落ち着いた様子で苦い緑茶を一飲み。その有り様は実に堂に入っており、貫禄や威厳すら感じさせる。あるいは『プレッシャー』なのか。

凄まじい圧を発する家主を見つつ、流石はSATUMA人かと何度目かの変な納得をする。……そう、今私がお邪魔しているのはネットではSATUMA人を通っている人の家、鹿児島から移住してきたという東郷お爺ちゃんの家だ。

思えば、東郷お爺ちゃんには本当にお世話になった。この辺りに住



んでいる人達には軒並みお世話になったが、東郷お爺ちゃんはその中でも特に私が頼った人だ。

例えば拾ってきたポチの躰を手伝って貰ったし、簡単にだが護身術を教えて貰ったりした。暇なときに話をしに来た回数も多く、まるで孫の様に可愛がつて貰えたと……勝手にながら思っている。それと、これは推測になるのだが……私が住所バレしていたのに未だに無事なのは東郷お爺ちゃんが頑張ってくれたからだろう。ポチが番犬だったのもあるだろうが……東郷お爺ちゃんは警察にコネがあると聞く。巡回中の警察が多いのは、恐らくこのおかげだ。

……そう思えばこの重々しい『プレツシャー』もさして気にならなくなる。いや、いつもより重々しいのは気になるが、それは脇に置いておけるだろう。

「東郷お爺ちゃん」

「……何かな」

厳格。そうとしか言い様のない声で、しかしどこかに優しさを持って東郷お爺ちゃんが私に声を返してくる。

厳格さに食われかけた私は一拍息を飲み、優しさを頼って口を開く。

「私、関東に行くこうと思う」

「関東」

ふむ。と東郷お爺ちゃんは頷き、少し考えた様子を見せた後。

「引越すのか？ それとも旅行か？」

「旅行、の予定。ただ、かなり長期になるかも知れないから。一応話しておこうと思って」

「なるほど。……他の者にはもう話したのか？」

「ううん。まだ」

「なら話しておきなさい。ワシが話しておいてもよいが、シロから話された方が彼らも嬉しいだろうからな」

「うん。分かった」

私から話された方が嬉しいのかは正直分からないし納得し難いが、東郷お爺ちゃんがそういうならそうなのだろう。もともと私がやる

つもりだったが、しつかりやつておこうと思った。

「して、出発はいつ頃かね？」

「だいたい、一週間後」

「シロ一人か？」

「うん。ポチも一緒の予定。迎えの人もそれが良いだろうって」

「迎え」

妙な事でも言ったのだろうか？ 東郷お爺ちゃんはそうポツリと呟いて目を閉じる。そうして十秒は悩んでいた様子だったが、やがて。

「それは、知り合いかね？」

「うん。知り合い。ネットだね。アイドル……と、女優やってる人」

「……………」

私の言葉に東郷お爺ちゃんは一気に顔をしかめた。空気が、重くなる。まるで逆鱗に触れたかの様な反応。恐らく、引き金はアイドルや女優ではなく『ネット』なのだろう。しかし……東郷お爺ちゃんはネット嫌いという訳ではなかったはずなのだが。

数秒たつても強まり続けるプレッシャー。この重さに反応したのは、今まで黙っていたポチだ。

「グルウ——」

ホンの一鳴き。まるで「落ち着け」と言わんばかりのその効果は劇的で、東郷お爺ちゃんのプレッシャーはみるみる元の大きさに戻っていく。

そうして平常に戻った東郷お爺ちゃんは少しだけバツの悪そうな顔を見せた後、私に質問を投げ掛け始めた。

「その人物は信用出来るのか？ 事前に話はしたか？ 不審な点は無かったか？」

「個人的にも社会的にも信用出来る人だよ。話はちゃんとしてある。段取りも決めた後。不審な点は無かった」

「ふむ。……ポチは連れていくんだな」

「うん。連れて行くよ」

そこまで聞いて東郷お爺ちゃんは納得した……というより諦めた様子を見せ、ポチに視線を投げる。



「と、東郷お爺ちゃん。……何が出るの？」

「うむ。……そう、そのな。奴がいうには、幽霊、だそうだ」

「幽霊」

幽霊。おばけ、ゴースト、死者の魂。オカルト。そう、普通ならオカルトと、幻想だと笑える話だ。

……しかし、ポケモンもつい最近までその手合いだった。ならば、笑う事は出来まい。

「……笑わないのか？」

「笑えないよ。……それで、東郷お爺ちゃんは幽霊を見に行くの？」

「そう、だな。正直迷ってはいる。故郷には帰るし、話も聞いてくる。だが……彼らに会っていいのか、悩んでいるのだ」

「彼ら？」

「——幽霊はな。私の、昔の仲間の姿だったそうだ」

昔の、仲間。幽霊。東郷お爺ちゃんの年齢と、経歴。それを考えると……どんな姿の幽霊なのか、ボンヤリと浮かんで来た。

だがボンヤリだ。それに……もう七十年以上が経っている。七十年だ。それも考えると……何となく気が進まないのも理解できた。少なくとも私なら、七十年もの長きに渡ってさ迷い続けた魂に掛ける言葉なんて、見つからないのだから。

「だが、そうだな。会わねばなるまい。シロちゃんも旅行へ行くというのなら……いや、そう、きつと、これも必然か」

「……東郷お爺ちゃん？」

「……いや、何でもないよ」

自虐する様に、しかし柔らかに笑った東郷お爺ちゃんはお茶を一飲みして、どこか遠くを見る。

その姿になんと言えればいいのか、私は分からなかったが……黙っているのはつらかったので一つ聞いてみる。

「ねえ、東郷お爺ちゃん。その、幽霊が出たのってどこなの？ 答えにくいなら、答えなくても良いんだけど」

「……うむ。それがな。不思議な事に、桜島だそうだ」

「桜島？ 鹿児島にある、あの火山の？」

「そう、その桜島だ。……ああ、そこもまた迷っている原因なのだ。彼らの遺骨はなんとか回収したから、ちゃんとした墓地に墓がある。そして彼らと別れたのは南方の島で、日本の大地、ましてや桜島ではないからな。どう考えても繋がりが無い」

だから嘘臭いのだと疑問を口にする東郷お爺ちゃん。しかし直ぐに情報源が嘘を言う人物ではなく信用できる人物なので、どういう事なのかと思っているとも私に伝える。

そうして思うのは……90度傾いた九州。つまりは、ハウエン地方の事だ。そこでの桜島の位置にあったのは……確か――

「東郷お爺ちゃん」

「……何だ？」

「行った方が、良いと思う。たぶん、来てるから」

「………そうか」

不思議ちゃんか電波か、あるいは狂人か。そう取られてもおかしくない物言いだったのだが、東郷お爺ちゃんはすんなりと、見て分かる程に納得してくれた。

良かった、というべきなのか。それとも眠りが妨げられたのか。それは……東郷お爺ちゃんが行けばハッキリするだろう。それに、もし桜島が変質しているなら……

「後、東郷お爺ちゃん。幽霊の話がホントだったら教えてくれる？」

「ああ、構わんよ」

「………なんで、とか聞かないんだ」

「聞かんよ。シロは人の大事なところに土足で踏み込まんし、そういう顔をしているときは……何をどうしても退かないからな」

誰に似たのか、と小さく呟いて。東郷お爺ちゃんは苦笑いしながら答えてくれた。

旧友、あるいは戦友との話を笑い話にされるとは思っていないらしい。勿論そんな事をするつもりは微塵もないが、だとしても……信頼されている？ まさか。今回だって桜島の変質具合で証拠にしようかどうか考えていたのだ。それこそまさかの話だろう。

有りそうもない可能性を蹴飛ばし、残り少なかった緑茶を一気に飲

み干す。苦い。帰ったらチョコでもかじるか。

「……………」

「……………」

そのまま緩い沈黙が支配する事、数十秒。

このまま雑談に入るか、それとも帰るか……いつもなら雑談なのだろうが、今日はやる事もあるし、考えたい事も出来た。今日は帰ろう。

「それじゃあ、東郷お爺ちゃん。今日は帰るね」

「そうか」

小さく頷いた東郷お爺ちゃんは空になった湯飲みに急須から緑茶を入れ、一飲み、二飲み。

「ポチ、行くよ」

「わふう……………」

「——ああ、そうだ」

私が立ち上がり、ポチを連れて居間を出ようとしたとき、背後から声が掛かる。

いったい何だろうと振り返って見れば、東郷お爺ちゃんが湯飲みを片手に口を開く。

「旅行。楽しいものになると良いな」

それは祈りの言葉だろうか。ああ、そうだろう。

「うん。たぶん、楽しいよ」

「そうか」

今度の旅行は楽しいものになると、私はそう確信している。

だからその確信を東郷お爺ちゃんに告げれば、何とも微妙な声が帰って来た。嬉しい様な、迷う様な。やはり……幽霊の件は悩みの種らしい。

とはいえ私がどうこう言える話でもないのです、その後東郷お爺ちゃんに挨拶してから東郷家を出る。背後を振り返れば古めかしい日本家屋。思い出すのは東郷お爺ちゃんとの話——特に桜島の幽霊の事だ。もしこの世界にポケモンが来るならば、桜島は桜島ではなくなる。そう、ポケモンが来たなら桜島は——

「——おくりびやま、か」

「わふう？」

「ううん。何でもないよ」

ポチの頭を一撫でし、フードを深く被って道を歩く。

おくりびやま。ハウエン地方にある特殊な山。濃い霧と無数の墓、そして多くのゴーストタイプのポケモンが待ち受けるその場所は、死者の魂と関係深い場所だ。ならば、東郷お爺ちゃんの戦友が居ても……おかしくはない。それが良いことなのか、悪い事なのかは、分からないが。

「ポケモンが来ている。……けど、喜んでばかりもいられないか」

ポケモンが来れば私は嬉しい。だが、事はそれだけではすまない。大きく変わり過ぎるのだ。

故に、備えなければならぬ。今回の話だって人の幽霊で済んでいるが、もしゴーストタイプのポケモンが出現していたら？ 彼らが町に出て悪さをしたら？ 確実に死者が出る。そうすればポケモンを知らない人は、全てのポケモンを排斥しようとするだろう。殺そうとするだろう。

「それは、駄目」

駄目だ。認められない。そんな現実はいらない。

だから、備えよう。関東に行つて、ポケモンを探して、元総理と話して……日本国として備えよう。そうすれば、きつと。

「……ああ、きのみみの栽培を頼んでおくのも良いかもね」

「わふう……」

私は「やれやれだ」とでも言いたげなポチを連れて、オレンの実を貰った老夫婦の元へと向かう。そこで報告と、きのみみの栽培を頼もう。他の近所を回って同じ事を頼もう。備えるのだ。そうすれば、そうすれば。

「仲良く、出来るよね」

まだ見ぬポケモン達に語り掛ける様に、そう溢す。

その私の声は……ずいぶんと、自信に欠けていた。

## 第7話 お嬢様は人使いが荒い

九州の片田舎でSATUMA人とTSロリっ娘の微笑ましい？

談笑が行われていた頃。関東は東京のある日本家屋の一室では、ピリピリとした嫌な空気が流れていた。その空気の中心にいるのは二十代前半か、それよりも手前だろう若い黒髪の女性……十人中八人は綺麗だと称賛するであろう美少女、あるいは美女だ。一言で形容するなら、現代版大和撫子か。

彼女のネットでのアダ名はアイドルネキ。いわゆるシロ民の中でも、シロちゃんガチ勢と呼ばれる一人であった。

「……で？ まだなの？」

身長から察するに高校生か、あるいは大学生か、しかし若い女性だという事だけは間違いないはずの彼女の声は、信じられない程ドスが効いている。少なくとも彼女が今の声を本当に発したのか、二度は確認したくなる程度に。

コワイ黒服のあんちゃん達を彷彿とさせるその声の原因は、多分に不機嫌さが混じっているのである程度は察する事は出来る。だとしてもその原因を暴くよりも逃げる方が得策なのは、誰の目にも明らかだった。

「はい。お嬢様のスケジュールは調整が終わり、歓迎の用意もいつでも始められます。ですが、足が確保出来ません」

しかしその原因に立ち向かう勇者が一人。仏頂面か、鬼の面か、陰しさが全面に出た顔付きの男だ。その身体付きはキチツとしたスーツ越しでも分かる程に頑強そうで、実際彼はかなり鍛えられていた。少なくとも戦士ではあるだろう。

「お嬢様は止めろと何度言えば……」

美少女と喋っていい彼女はそこまで口にして小さくため息を吐く。それどころではないと。

「それで？ 空いている機体は無いとでも言われた訳？」

「はい。こちらの条件を満たした機体で貸せる物は一つも無いと。またこれは船も同様で、条件が厳し過ぎるとの事です」



「私は九州から東京まで、ペットを一匹同伴しつつ、二人と一匹が快適に過ごせる物としか言っていないだけど？」

「失礼ながら、そのレベルが問題かと。特にペット同伴が厳しく、次点で距離がありすぎます。この時点で車の全てと航空機の大半が使えなくなっているのですから、その上で快適さもとなると……」

「——なに、あなたは私に出来ない、そう言いたい訳？」

「いえ、そういう訳では……」

絶対零度。そういつても過言ではない圧が、年若い大和撫子から強面の男へと叩き付けられる。男は彼女からの圧を柳に風と受け流し……ているように見えたが、よくよく見れば額に汗が浮き出ている。冷や汗だろう。どうやら彼も一杯一杯らしい。

そんな男の様子を知ってか知らずか、彼女は続けて口を開く。

「いい？ 私はシロちゃんに約束したの。私が貴女を東京まで連れて行って案内してあげると。快適な旅を約束すると。例えそれがネットや電話越しの口約束でも、他でもないこの私が、約束したのよ。あなたはそれを反故にしろと言うつもり？」

マグマの様な熱と、吹雪の様な厳しさが男に突き刺さる。彼女のプロデューサー兼護衛である男からすれば比較的慣れた物ではあったが、だからこそ肌で分かる。内に秘める覚悟が違くと。元々プライドがエベレストの様に高く、しかも身内に対する約束には頑固だったが、今回は特に凄まじい。恐らくここで自分が下手を打てば、死人を出してでもシロちゃんとやらを迎えに行くだらうと男は確信した。

だからといって状況は変わらない。出来ないものは出来ないのだから。……いや、そんな事は彼女も分かっているだろう。そう仮定して、ならばと男は妥協点の模索に回った。

「いえ、そんなつもりはありません。しかし、このままでは迎えに行く事すら困難です。ここは幾らかグレードを落とすべきだと考えます」

「駄目よ」

キツパリと、あるいはハッキリと、彼女は男の提案を雷速で切り捨てる。取り付く余地なんて微塵も無い。

この即断に男は内心でかなり驚きを感じていた。プライドが高く、

頑固な彼女だが、頭は悪くない。むしろ非常に良い。グレードを落とさなければどうにもならない事は、とうの昔に分かっているはずなのだ。しかし彼女は首を横に振る。理性を上回ったのはプライドか、それとも頑固さか。男がプロデューサーとしての腕を見せるべきかと腹を括ったとき、彼女が口を開く。

「グレードダウン？ シロちゃんを迎えに行くのに、グレードダウン？ あり得ない。ええあり得ないわ。あんた、私にとってあの子がどんな存在なのか……わかつてるの？」

「……いえ、好意を感じている相手だとは思いますが」

「好意？ まあそうね。好意は感じている。けどそんなものじゃないのよ。……あの子は、シロちゃんは、私に夢を見せてくれたの。私の、恩人なのよ」

噛みしめる様に、しかし朗らかな笑みを浮かべる彼女を見て、男は不思議な衝撃を受けていた。それがいったい何なのか分からなかったが……その代わりか、男はふと思いつく。

あれは今から五年程前だっただろうか？ よくは覚えていないが、生まれて初めて手痛い失敗を経験したお嬢様が暗く沈みきっていた時期があった。しかしそれは一年と続かず、直ぐに立ち上がり、それどころかより強くなっていたので流石はお嬢様と称賛したのだが……よくよく思い出せばその辺りから『シロちゃん』という人物を口にし出していたはず。

男はそこまで思い出して、考え至る。あの暗く沈んでいた時期に助けとなったのが『シロちゃん』で、その助けは恩人といえる程なのだろうと。

「なる、ほど」

内心をポツリと溢した男は納得しつつも、しかし現状どうにもならないと判断していた。

シロちゃんが恩人なのは分かった。恩人を丁寧に、盛大にもてなしたいのも分かる。だが、どうにもなるまい。彼女は元旧家の人間で、資産もかなりある。しかし無理なものは無理だ。近日中に九州から東京まで一人と一匹を丁寧に、快適に連れてくる。この問題はどうに

もならない。要求レベルが高すぎるのだ。

ここは折れて貰うしかない。男がそう決心したとき、彼女もまた決心していた。全てを使う覚悟を。

彼女はおもむろにスマホを取り出し、何やら調べ始める。男の目線からでは何をしているかは分からないが……しかし、彼女は調べ終わったらしい。

「リヴァイアサンを使うわ」

「……は？」

彼女が何と言ったのか、男は一瞬分からなかった。

リヴァイアサン。それは架空の怪物の名前だ。海を支配する最強の怪物の名。それを使うとは……と、そこまで考えて思い出す。その名を持つ存在を、彼女の家は保有している。

「ま、まさか……ギガヨット、リヴァイアサン号ですか？」

リヴァイアサン号。それはラグジュアリーヨットの中でも特に大きいギガヨットの一隻だ。彼女が、というより彼女の家が所有する巨大な船。

全長およそ140メートル。最大速力28ノット。船体後部に本格的なヘリ甲板と格納庫を持ち、軍用ヘリすら運用出来るという代物。勿論その内装は資産家のギガヨットらしいきらびやかさであり、そのレベルは一流ホテルにも匹敵する。優美な気品の中に確かな力強さを感じさせる、美しい船だったと男は記憶していた。

なるほど、確かにかの船ならば問題を全て解決出来る。特に問題だった快適さも十二分だ。しかし……

「あの船は今ハワイ近海に居るのでは？ それに、あの船はお嬢様が動かすには所有権が曖昧なのは……？」

問題を全て解決できるリヴァイアサン号だが、この船には別の問題があった。

先ずそもそも日本に居ない。これはこの船がタンカーや軍艦並みの大きさの為、日本国内で停泊出来る港が少ないという問題があった事と、船長が風来坊気質で一ヶ所に居たがらないからだ。男が以前聞いた話通りなら、今頃ハワイ近海で金持ち仲間とクルージングし

たり、大金が動く何らかのプロジェクトに関わっているはず。

そして最も大きな問題として、所有権が曖昧だ。書類上では資産家でもある彼女の父親が所有者となっており、家として所有しているとも言っても問題ない。しかし事実上の所有者はリヴァイアサン号船長でもある外国人資産家で、リヴァイアサン号の建艦費も六割は彼の負担だ。なんでそんなややこしい事になっているのかは男の知るところではなかったが、風の噂に聞くに酒のノリだそうだ。絶対口くでもない。

「久しぶりに日本が見たくなつたから帰って来るらしいわよ。港まで後600キロを切つたと連絡があつたらしいわ。それとあの船が私に動かせるかどうかだけど……あなた、私のプロデューサー何年してるの？ 私が使うと言つたら使うのよ」

どこから情報を掴んだのか、なんとという横暴か。ああいや、そんな事はもうどうでもいいのだろう。彼女の目を見てみる、自信しかない。いや、確信だ。あれは自分なら出来るという確信だ。それも実力に裏打ちされたソレ。男はここに至つて思い出す。ああ、我が主はこういう人だったと。

「さあ、出発するわよ。あなたはヘリを用意しなさい。私はリヴァイアサンに連絡を入れて、航路を変更して貰うから」

「ヘリ、ですか……？ それはまた……いえ、まさか、寄港するのを待たないおつもりで……？」

「ええそうよ。リヴァイアサンとは海上で合流するわ。船の中身はシロちゃんを迎えるに値するはずだけど……汚れてたなら『掃除』しないといけないしね。それに、早い方がいいわ」

なんという無茶をするつもりなのか。彼女は自分が何者なのか分かっていいのか、いや分かつてやっているのだろう。スケールがハリウッドみたいになっているが、思えばだいたい何時もの事だった。

ため息を飲み込んだ男は頭の中に使えるだろうヘリとパイロットを思い起こし、厳選する。何せこれからやらかすのは海上での合流だ。それも船まで500キロはあり、燃料的にギリギリになるはず。お転婆なお嬢様がこれ以上待つとは思えないので、それを考えれば航

続距離の長いヘリと腕の良いパイロットが必要だった。

ああ、それと『掃除』の手配も考えておこう。事の次第とお嬢様の機嫌次第では船の内装を丸ごとりかえる可能性もある。一つ何百万という調度品をダースで手配するかも知れないのだ。自分の財布は痛まないとはいえ、心構えは必要だろう。

「ああ、シロちゃんに渡すプレゼントとか用意した方が良いかしら？  
それとも案内中に買う？ うーん、悩ましいわ。……ああ、でも保護者役らしい近所のお年寄り達や、噂のSATUMA人に挨拶するときの土産は必要ね。……うん。プロデューサー、悪いけどヘリの手配が終わったら土産の品をお願いね。常識的な物で良いわ。お年寄りが喜びそうな物をダースで、シロちゃんの分は私が選ぶわ」

「了解しました」

男は仏頂面のまま即答し、積み上げられたタスクに脳内でため息を吐く。年頃の少女に選ぶ品を考えずにすんだ様だが、それでもお年寄りが喜ぶ品とは何なのか？ まだ若い男には想像しにくかった。

男は暫しネットで調べてやろうかと思案し、結局彼女の祖父母が時折食べている銘菓を買ってくる事にする。とはいえヘリの手配もあるので、買ってくるのは男の部下になるだろうが……経費で落ちるのだろうか？ 落ちないだろう。部下に払わせる訳にもいかず、彼女に金をせびる気にもならないので、男が出す他ない。諭吉に羽が生えて飛んでいく光景を幻視できる気分だった。

「それと船に持ち込む私物と……ああ、お祖父様に挨拶とおねだりをしておかないと。アポは必要だったかしら？」

「……はい。最近は果実の異変騒動で忙しくされていますので、いくらお嬢様相手でもアポが必要かと。国会をまとめる地下活動の最中でしようから」

「はあ……アイツら、きのみぐらいで未だにギャーギャー言ってるの？ もう何カ月経つものよ」

「最初の一つが確認されておよそ半年。異変が本格化したのがここ1、2ヶ月です。ちなみに最近与党が新しい特別法案を提案しましたが、野党がこれを再び蹴り、国会は機能停止状態に陥りました。何で

も納得できない、与党に都合が良すぎる。何より国民への説明が充分でない」と

「ハッ」

馬鹿馬鹿しい。そう言わんばかりの嘲笑を上げる彼女。

男はその嘲笑に内心ではげしく同意しつつも、やっぱり政治家には向いてないなと感じていた。彼女が政治家になったらその圧倒的な自信と実力、そしてカリスマで国家を支配するか、凡人に袋にされるかのどちらかだろうからと。

「まあ、いいわ。あれらクズのおかげでシロちゃんもこっちに来るし  
かなくなつたのでしようし。……いつかお礼をしてあげないとね」

お礼。それは嬉しい物のはずだ。しかし男はそのお礼だけは欲しくない  
と直感で感じ取つた。絶対にロクでもない。そら、その証拠に彼女の  
圧が冷たく、重くなっている。彼女は間違いなく、キレていた。

男はお礼内容とその後始末を考えないようにしつつ、ヘリとパイロットを  
まとめた脳内リストからMi-26を保有する個人資産家を外しておく。Mi-  
26の巨体ではリヴァイアサンのヘリ甲板に着艦出来ないだろうという至極  
全うな考えからだったが、果たして本当にそれだけだったのか。Mi-26  
から別の何かを連想しなかつたかについては……男は忘却する事にした。  
今日は厄介事をこれ以上考えたくなかつたのだ。

「——そういえばシロちゃん、服って持ってるのかしら？　あまりオ  
シャレには興味ない感じだったし……幾つか買って持っていてみて  
ようかな？」

勝手にしてくれ。そう半ば仕事を放棄した事を考えながら男は首と  
視線を動かし、窓から庭を見る。

そこでは人を走らせ方々から集めた変異した果実が、昨日今日植えた  
ばかりだというのに色とりどりの花や実を付けていた。あり得ない代物  
だ。今頃学者連中は自分同様頭を痛めているに違いない。そう思うと心  
が軽くなる男だった。

「うん。プロデューサー、車を用意しなさい。シロちゃんに何か買つ

ていくわ」

「……了解しました」

そのシロちゃんと言わねえが来れば自分の心労も減るのだろうか？  
期待せずにはいられない男だったが——この後、シロちゃんと連絡を  
取ったらしい主が何やら鬼気迫る様子で自分を連れて下着売り場ま  
で突入し、仕舞いには荷物持ちにさせられて……男の淡い期待は切実  
な祈りに変わるのだった。

## 第8話 見えない変化、見える変化

東郷お爺ちゃんへの報告を済ませ、オレンの実をくれた老夫婦を含めた、近所のお爺ちゃんお婆ちゃん達にも報告し終わった夕方。

私はポチとの散歩を終わらせ、テキトーな鼻歌を歌いながら上機嫌で夕御飯の準備をしていた。上機嫌の理由は……今手元にある桃色のきのみ、モモンの実が手に入ったからだ。

「〜♪」

近所のお年寄り達に挨拶するなかで、桃の木を植えている人から譲って貰ったのだ。突然出来てなんだか気味が悪いと言っていたから、簡単にモモンの実を始めとしたきのみについてレクチャーしたところ、最後には栽培も確約してくれた。他の人達も多くが栽培に賛同してくれたから、関東から帰って来た頃にはきのみが溢れかえっている事だろう。

「んー、そうしたらポロックやポプインの試作も出来るかな？」

機材はサツパリだが、材料には困らないはず。関東から帰って来たらそういうのに挑戦するのもありだろう。

そんな事を考えながらモモンの実に包丁を入れて幾つかに切り分け、それを二つの皿に分けて盛る。私と、ポチの分だ。

「ポチー、ご飯出来たよー」

私は自分の分を机の上に置き、ポチの分を目の前に差し出す。いつものメニューにきのみが追加されただけだったが、それはなんだか特別な物の様に思えた。

ポチはその特別に躊躇したのか、私の方を見てくる。だが私が食べていいことを伝えると、真っ先にモモンの実に食い付いた。意外、そう感じる心。当たり前前、そう感じる理性。

「……まあ、これだけは食べやすいし、美味しいしね」

私は席に着きながら、小さく切り分けたモモンの実を一口口に放り込む。口に広がるのは素朴な、しかし純粋な甘さ。他のきのみではこうはいかないだろう美味しさだ。あるいは私が甘党だからか。

そう思いつつご飯にも手を伸ばし、前世では考えられないスロー



ペースで前世よりも少ない量のご飯を食べ進めていく。

「はむ。……んん？」

半ばまで食べ進めたとき、ポチが私の側まで来ている事に気づく。お行儀の良い普段のポチからすれば珍しい動きだ。見ればポチの分はきのみ含めて空になっており……ポチの視線の先にあるのは日付が変わった深夜に収穫したオレンの実。まさか、食べたいのだろうか？

「えつと……食べる？」

迷いは暫く。しかしポチの視線に負けた私はオレンの実を二つ、ポチのお皿の中に落とす。絶対美味しくない。そう思いながら。

差し出されたきのみをポチが食べるか悩んだ様子だったのは、私の半分以下。彼女は実にアッサリとオレンの実に食いついた。一かじり、二かじり。人間からすればマズイと言つていい代物をポチはさくさくと食べ進める。……美味しいのだろうか？ いや、あんなデタラメな味覚パラメーターで美味しいはずがない。

そう疑念を蹴飛ばし、私は私のご飯を食べ進める。

「グルウ……」

「満足そうだね。ポチ」

結局食べ終わるのもポチの方が早く、彼女は「満足だ」とでも言いたげに体を休めていた。実にリラックスしている。

「……ん？ 何かポチ、変わった？」

「グルウ？」

気のせいだろうか？ 心なし大きくなった様な、毛並みが良くなった様な……それとも声か？ うーん……？ 何か変わった様な気がしたんだが……何なのだろうか？

疑問がどうしても解消されず、お皿を片付けた私がポチを見ながら思考に潜ろうとした——そのときだ。

——プルルル……

「つ、と。電話？」

何の前触れもなく私のスマホから機械音が鳴る。電話だ。しかし私の電話番号を知ってるのは片手で足りる程度だし、その殆んどは

今日会ったばかり……いや。

「はい、もしもし?」

『シロちゃん? 昨日ぶりね。元気にしてた?』

「ああ、アイドルネキ。はい、元気ですよ」

やはりというか、電話を掛けてきた相手はアイドルネキだった。しかし、手順は軽くとはいえ昨日打ち合わせしたばかりのはずだが……「どうしたんですか? アイドルネキ。計画に変更でも?」

『んー、まあ……そうね。それもあるわ』

「それも……?」

『ええ。……んん、一先ず計画の変更について教えるわね。実は、移動手段の変更で当初の予定より早くそちらに着きそうなの。だいたい明後日の夕方過ぎにはそちらの近海に到着する予定よ。一週間と言っておいてなんなのだけ……変更出来るかしら?』

「明後日ですね。大丈夫ですよ」

私は基本的に暇人なので計画はいつでも変更出来るし、元々こういう事が起こるのはお互いに折り込み済みな話だ。強いていえば東郷お爺ちゃんに話を伝えるくらいか。これは後で電話しておこう。

「しかし近海……? もしかして、船ですか?」

『流石はシロちゃん。察しが良いわね。ええ、船よ。少し不安はあるけど、きつとシロちゃんを迎えるに価値すると思うわ。楽しみにしててね』

「はい。楽しみにしてます」

私を迎える価値する船……漁船かな? あるいは泥船か、イカダか。いやいや、アイドルネキの家は大きいと聞く。きつとお金持ちが乗っている様なボート……全長10メートルちよいぐらいのプレジャーボートとかいう奴に違いない。

うん、楽しみだな。あの手の船には前世も含めて乗った事がないし、一度は乗ってみたいと思っていたのだ。あのボートから釣糸を……昼はキツイから夜釣りを楽しむのもありだな! 実に楽しみだ。『ああ、それと。シロちゃんに何か買って行こうと思ったのだけど……シロちゃんって服、持ってるわよね?』

「? ええ、持ってますよ?」

当たり前だろう。服を持ってないとか、未開の蛮族じゃあるまいし。

『……………一応、聞くのだけど。どんな服を持ってるの?』

「ん……………」

どんな服ときたか。そういわれると困るな。

何せ前世ではアウターとかトップスとか言われても分からないファッション知識ゼロ野郎だったし、今世でもそれは概ね変わらないのだ。それに興味もないとすれば、アルビノのせいで制限もあるときてる。だから私の手持ちの服は……………えーと?

「……………パーカーと、ジャージと、ズボンと、ジャージと、下着が3、4枚に……………後は、パーカーとジャージ? ああ、それとパジャマの類いが3、4着ありましたね」

『……………』

何故だろう。電話の向こうのアイドルネキが凄まじい顔で絶句しているのが見えた気がした。正直に手持ちを言っただけなのだが。

『——し、シロちゃん? じよ、冗談……………よね?』

「いえ。正直に言いましたが」

『……………ねえ、それ服、というか下着からして足りないでしょ?』

「いえ? 足りてますよ? 洗濯込みでローテーションに余裕がありますし」

『……………』

何度目かの絶句。なんだろう。私はそんなにおかしな事を言っただろうか? 普通だと思っただが……………

『いや、いやいやいや! おかしいでしょ!? 女の子がそれじゃ駄目だから!? ——いや、待ちなさい。……………ねえ、洗濯込みのローテーションって……………オシヤレとかは?』

「あー、特に考えて無いですね。興味もないので」

普通の女の子なら例え制限があってもオシヤレするものなのだろうが……………私は元男だし、その辺りズボラで当然興味も無い。服なんて着れりや良い、楽なら更に良し、オシヤレは度外視……………そんな人種だ。

思えば、アイロン掛けも長らくやってない。必要性を感じなかったからなあ。

『——ねえ。それ、誰かに指摘されなかった訳？　というかオシヤレしようと思わないの？』

「指摘なら、されませんでしたね。周りはお爺ちゃんお婆ちゃん達だけですし、家にはポチだけですから、指摘する人が居ません。それにオシヤレも……特に誰かに見せる訳でもないですし、興味もないので」

『——そう。ええ、そうだったわね……ごめんなさいね。シロちゃん』

「？　いえ、お気になさらず」

正直に話していたら何故か謝られたでゴザル。それもガチなトーンで。解せぬ。

『——決めた。私はシロちゃんにオシヤレを教えるわ』

「え？　いや、大丈夫です。私はオシヤレとかそういうのは……」

『駄目よ。決めたから』

「ええ……」

何と横暴な。私は今のパーカーとズボンスタイルで間に合っているというのに……やはりアイドルとしてオシヤレに興味が無いという台詞が許せなかったのだろうか？　だったら謝るので、どうかオシヤレ云々は放って置いて欲しい。私はオシヤレとかよく分からないのだ。

「あの、アイドルネキ。本気ですか？　私、そういうのは分からないし、その、必要無いと思うんですけど……」

『本気よ。それに私が教えるのだから問題無いわ。後、シロちゃんに必要無いなら全人類必要無いわね。シロちゃんを差し置いてオシヤレなんて……ねえ？』

何という自信か。何という横暴か。電話越しでも気迫が伝わってくる。こう、出来る女というか、女王様というか。あれだ、霸王の覇気だ。これは。

「いえ、あの、ホントに……」

『いいえ、やるわ。例えシロちゃんに嫌われてもやる。これは決めた事よ。……………それに、そんな格好ではお祖父様に会わせられないわ。元とはいえ、お祖父様は総理大臣だったのだから』  
「う……………」

アイドルネキの覚悟と覇気でお腹一杯なのに、更にそれを指摘されると反論なんて欠片も出来ない。私はオシャレに興味が無いだけで、ドレスコードとかは理解しているのだ。パーカーとズボンのズボラスタイルで総理大臣に会えない事ぐらい分かる。最低でもスーツだろう。……………そうだ、スーツがあるじゃないか！

「あ、あの。アイドルネキ。ドレスコードならスーツとかでも良いのでは？ 何なら中学時代のセーラー服出しますから……………」

これでドレスコードは解決！ 不登校気味だったから大して着てないセーラー服だけど、取って置いて良かったぜ！

『……………ええ、そうね。それならドレスコードは問題無いわ。……………けどシロちゃん。貴女身長、何センチだったかしら？』

「えつと……………150センチぐらいですけど」

正確には150にギリギリ足りていない。下手すれば小学六年生レベルだ。我ながら実に低い。マイボディに不満があるならここだけなのだが……………最早どうにもならない。牛乳では、どうにも、ならなかったのだ。……………ならなかったのだ！

『その身長だとスーツは似合わないわ。ええ、似合わない。それにセーラー服も……………悪くはないけれど、外聞を気にすると控えて欲しいわね』

「外聞、ですか？」

『元総理の家に招かれる不自然に身長の高いスーツの女。あるいは中学生。……………マスコミにその瞬間を撮られれば、さぞ面白おかしく書かれるでしょうねえ』

「……………」

……………ああ、あれか。R-18的な関係だと邪推されると言いたいのか。それも非常に良くない関係だと。……………うん。私の負けだ。負けでいいよ。別にアイドルネキやその家族に迷惑掛けたい訳じゃない

し。

「はあ……分かりました。私の負けでいいです」

『ふふ、それじゃあ色々……教えて貰いましょうか?』

その後私は妙にハイテンションなアイドルネキに根掘り葉掘り聞かれた。身長から始まってスリーサイズ——囃り方を電話越しにレクチャーする気の入れよう——まで……地獄だ。地獄でしかない。こうなるからファッションは面倒くさいんだ。

と、いうか。アイドルネキ上機嫌過ぎやしないか? まさか外聞とかどうでも良くて、何か別の狙いが……な訳ないか。

『なるほど……うん、今から行けば間に合うわね。それじゃあシロちゃん。また明日電話するわね!』

「はい……ああ、アイドルネキ」

『ん? なに、シロちゃん?』

「おやすみなさい」

『ふふ、ええ。おやすみなさい。シロちゃん』

お互いに挨拶を交わし、疲れきった私は上機嫌なアイドルネキとの電話を切る。長いため息。膝が笑う。肩が重い。

「あー……うー……疲れたよお。ポチい……」

「わふう……」

慣れない事はするもんじゃない。精も根も尽き果てた私はポチをモフモフする事で英気を養う。それをポチは「あのくらいでだらしない……全く、仕方ないな」とでも言いたげな様子で受け入れてくれる。ああ、今日も私の家族は優しい。

「ああ〜モフモフ……」

それから暫くモフモフしていたが、ハタと思い出す。東郷お爺ちゃんに電話して予定変更を伝えねばと。

「……あ、東郷お爺ちゃん? うん。私だよ。それで東京行きの日程なんだけど——」

ポチに軽く寄りかかりながら、私は東郷お爺ちゃんに予定変更を伝え……その後は特に何もする事なく眠りにつく。

——何か大事な事を忘れている様な、奇妙な焦りを抱えて。

## 第9話 配信、序盤ポケモン達とモンスターボール

「はい、皆さんこんばんは。シロです。事前の告知通り、今日はお絵描き配信メインでいきますよ」

東郷お爺ちゃんとアイドルネキとの話し合いから丸一日後。アイドルネキの迎えが明日に迫った夜、私は配信者として自分の机に着いていた。

手元にはいつもの道具達。そして視線を動かせば……シロ民達の声がある。

『わこっ』『初見』『待ってた』『初見』『ワイも初見』『俺古参』『船の上で見る配信も案外いいわねー』

「はい、わこっです。初見さんはゆっくりしていつて下さいね」

各コメントに反応しつつ、視界に捉えたアイドルネキらしきコマから予定は順調らしい事を感じる。とはいえ配信中に話す話題でもないからスルーするしかないが。さて。

「今日はポケモンを二匹と、風景画を一枚書こうと思います」

私はそう言いつつ手先を動かし、ポケモンを描いていく。頭に思い浮かべるのはポツポと同じ序盤鳥にも数えられる事のあるポケモン、オニスズメだ。

オニスズメを選んだ理由は主に2つ。先日描いたのがポツポだという事と、オニスズメがカントー地方で比較的生息数の多いポケモンだと推測できる事。つまり、私の推測通りポケモンが現実に現れたのならば、人々が最初に遭遇する可能性の高いポケモンだからだ。

「ちなみに今日書くポケモンは、カントー地方でよく見かけるポケモンなんですよ。良かったら覚えて行って下さいね」

そういう理由から選んだので当然こういう押し付けがましい事も言う。普段なら言っても疎外感しか感じれないから、絶対に言わない言葉なのだ……

『OK!』『なるほど、今日はそういうチョイスか』『まあ、そうなるな』『むしろ有り難い?』『遠回しに備えろと……関東民は聞いてるな?』

『聞いてる。有り難い』『関東活動部隊向けの内容になりそうだ』

どうやらシロ民は概ね察してくれているようだ。関東で活動する有志の協力者達の助けとなればいいのだが……

問題は。

『んんー予備知識いる感じかな』『カントー？』『ポケモン？』『あー、初見連中は混乱しかないか』『コメで補足してやるから読め、聞け、絶対損はしないから』『りよ』『ハードル高いのか低いのか分からんなw』

初見の人達は置いてけぼりだと覚悟していたのだが、シロ民達が有能で助かった。これで初見の人達にも伝える事が出来そうだ。今は少しでもポケモン知識を持つ人を増やしておきたいからな。

さて、そうこうしている内にも手はオニスズメを描き続け、まだ完成には遠いがオニスズメだと判断出来る程度には描き上がっていた。鋭い目付きに赤く小さな翼。我ながら、なかなか躍動感あるオニスズメが描けたと思う。……後で背景を付けてサイトに上げておくか。

『上手いな』『鳥？』『てか描くの早い』『まあ、鳥だな』『オニスズメか。確かに出てきそうだ』『俺、ポツポも好きだけどオニスズメも好きなんだよな……』『浮気はよくないぞ』『ナイスボート』

どうやら古参の人は概ねオニスズメの事を知っている様だ。そこそこ描いてるから不思議ではないのだが、覚えて貰えていると実感出来るのは嬉しい。刺されている人は……放っておこう。

『ナンバー21、オニスズメ。ことりポケモン。タイプ、ノーマル、ひこう。全長30センチ。鳥型のポケモンではあるが、羽が小さい為に飛ぶのは苦手。ナワバリ意識が強く、ポツポに比べて好戦的。食欲旺盛でむしポケモンを襲う事もある』

『有能ニキ有能』『速報、有能ニキ今回は有能！』『(´・ω・´)』

『へー、結構作り込んでるんだ』『そういえばそんなだったな』『鳥なのに飛ぶのは苦手なのか……』『てか大きい。大きくない？』『ポケモンにしては小さいぞ』『アイエエ……』『むしポケモン好きのワイ。少し悲C』『アキラメロン。むしポケモンの宿命や』

つと、どうやら今回はニキの仕事が間に合ったらしい。台詞を取られたと嘆くべきか、喋る手間が省けたと喜ぶべきか。まあ、取り敢え



ず。

「ニキ、説明有り難うございます。初見さん達は楽しんで、シロ民は覚えて行って下さいね。……はい、オニスズメの完成です。色塗りは後日にして、次に行きますね」

『絵上手いな』『オニスズメイケメンやなあ……』『なにせ鬼雀だからね』『それ語感が矛盾してないか……?』

『シロちゃん早足?』『今回は風景画も描くから、それやろ。まあしゃあない』『てか今回は復習みたいな側面もあるからな』

『おら、初見はじゃんじゃんコメントで質問するんだよ。シロ民が答えるゾ』

「絵の上手さはちよつとした自慢なんですよ? 有り難うございます。オニスズメはイケメンさんですからね。……はい、今回は早足です。質問コメはシロ民の皆さんに任せますね」

手早くコメントに答えて、次の紙にポケモンを描いていく。画面に流れるコメントを拾う事もせず思い浮かべるのは……コラツタだ。

紫色の体毛と突き出た前歯。手先はスルスルと動き、コラツタを描き出していく。スツスツと、あるいはシャシャツと。

そうして特徴的な前歯を含む頭部を描き終えた私がチラリとコメントを覗いて見ると、意外と言うべきかシロ民は優秀だった。

『——という感じでポケモンはシロちゃんのオリキャラゾ』『本人は否定するけどな』『なるほど』『りよ。後でウエキ見てくるわ』

『これはコラツタかな』『コラツタやね』『ネズミか』『ネズミだな』

どうやら私がコラツタに集中している間に初見さんの質問に答え続けていたらしく、何人かはまだ頭部だけなのにコラツタだと指摘してくる。こういうのは有り難いし、覚えて貰えているというのは嬉しい話だ。

……オリキャラ云々だけは、仕方ないとはいえ不満だが。

「シロ民の皆さん、質問への対応有り難うございます。ええ、これはコラツタですよ。かなり数の多いポケモンで、1匹居たら40匹居るといわれるポケモンです」

『ナンバー19、コラツタ。ねずみポケモン。タイプ、ノーマル。全長

30センチ。特徴的な前歯は一生伸び続けるので、定期的に削る必要がある。警戒心がとても強く、高い生命力と適応能力を持つ。放っておくとドンドン増える』

『有能ニキ有能……？』『たぶん有能』『速報、有能ニキ、たぶん有能！』  
『(・ω・)』

『まさにねずみ』『デカイねずみ』『作り込み凄いなあ』『というかその説明だと台所の茶羽じゃないか……？』『あれよりは若干マシだろ。たぶん』

『ねずみ……そういえばねずみの遊園地、結構前に新しくなったんだっけ？』『あ、おい馬鹿ヤメロ』

ニキが補足してくれたので、これ以上言う事が無くなってしまった。今回の目的上なら黙っていても問題無いが……ここはコメントを拾うか。うーん、そうだなあ……G云々は触りたくないし、遊園地か？ とはいえ。

「ニキ有り難うございますね。コラツタはニキのいった通りのポケモンですよ。……しかし遊園地ですか。楽しそうですね」

ニキを労い、遊園地に対して率直な感想を述べておく。楽し『そう』という推測なのは、今世では一度も行った事が無いし、前世でも学校行事なんかで片手で足りる程度しか行かなかつたからだ。それに私は煩いところや人の多い場所は苦手だし、普通なら恐らく楽しいのだろうというのが正直な感想だった。まあ、貸し切りとか人が少ないのであれば……

「ジェットコースターとか、面白そうですね……お化け屋敷とかもありですね。ゴーストタイプのポケモンとか出てきそうですね」

ジェットコースターは純粹な興味から。お化け屋敷はポケモン云々もそうだが、今のボディを勘案してのチョイスだ。前世のボディでは見栄えもクソも無いが、今世のボディならさぞ見栄えするだろうという安直かつ下世話な考えだった。

『セヤナ。ポケモンとか出てきそうやな』『ポケモンとかな!!』『ジェットコースターも楽しいと思うで!』『ゴーストポケモン見れるかもな!!』『なあ、今何かニュアンスが……』『何で推測系……？』『黙れ、妙

な事を言う奴は今すぐ黙れ』『闇に引きずり込むぞ』『ゴーストポケモンコワイヤッター』『闇深の気配』

『大丈夫。何の邪魔も無ければ遊園地行くから。何なら貸し切りでね！』『さすネキ』『流石はアイドルネキ。スケールが違うウー！』

ふむ、案外コメントが付いて来ていて驚きだ。幾つかよく分からな  
いのはいつもの事だが……殆んどのコメが茶化してくるかと思っ  
いたので、意外という他ない。

しかしアイドルネキの貸し切り云々は……まあ、流石にジョークだ  
ろう。ゲルマンジョークの親戚か何かだ。

『ゴーストポケモン、見てみたいですねえー……はい、コラツタ完成で  
す』

『相変わらず上手いな』『しかも早い』『安……くはないか』

『ねずみ?』『ネズミやな』『紫鼠や。出っ歯のな』『なお出っ歯過ぎる  
と物が食えなくて餓死する模様』『不憫な……いや、アホなのか?』『ア  
ホ可愛いだろ?』『せ、セヤナー』

ふむ、多少は印象付いただろうか？ これでおニスズメやコラツタ  
を含めたポケモンに理解が広がると良いんだが……その時になるま  
で何とも言えないか。

さて、次は。

「では次の絵に行きましょう。次は風景画、モンスターボールを中心  
に描いて行こうと思います。」

やはりポケモンといえばモンスターボールだろう。こいつに関す  
る知識が無ければ、ポケモンを楽しむ事は困難だ。

『モンスターボール?』『ああ、あの紅白玉か』『あれもよく分からん代  
物だよな……』『きのみみたいにアレが出てきたら……学者連中は失  
神するなw』『おら、説明ニキ出番やぞ』『(´・ω・｀)』

まあ、きのみの方にモンスターボールがひよつこりと出てくれば、  
大なり小なり混乱は間違いなく起こるだろう。この絵とニキの説明  
で多少なりそれが緩和できると良いのだが……っと、そろそろ始めな  
いと時間がキツいか。

「この絵は後でオークションに出すので、気になる人は買って下さい

ね」

私はそう言つて何時も使う紙よりも大きく、また上等な紙を取り出す。残りの時間では……全ての色塗りは無理か。仕方ない、さつさと取り掛かろう。

鉛筆を手に取つて、思い浮かべるのはモンスターボール。そしてその側で休むポケモン……そうだな、今回は序盤の虫ポケモンにしよう。ならばキヤタピーとビードルだろうか？ ——よし。

「〜♪」

私はテキストにチョイスしたポケモンの主題歌を歌いながら、スルスルと手を動かしていく。

モンスターボール、キヤタピー、ビードル。ならば背景は森。手は自然とそれを加味した動きになり、ラフではあるが大きな切り株を描き出す。そしてその上にポツリと置かれるモンスターボール。どこか寂しげだ。ならばと私はその側にキヤタピーとビードルを描いていく。これで賑やかになった。後は背景に木々を描けば、ほら、優しい木漏れ日が差し込んでくる。

『唐突に歌うなあ……』『しかも完全新曲やぞ』『お歌シリーズがまた増えるな』『シロちゃん上機嫌やん』

『スッゴいなあ』『ワカル。スゴイ』『上手いよね』『そして早い』『安くはないがな。また万行くだろ……コレ』『ラフスケッチでこれだもん』『んー、今回は譲るわ。毎度私じゃ芸が無い』『やはり買ったのは貴方か……』『あの値段じゃ安かったぐらいだけどね』

チラリとずらした視線に入った情報によれば前回の絵はアイドルネキが買った様だ。7、8万の値がついたはずなんだが……そこまでの価値は無いと思うぞ？

しかしニキの説明は終わったのか？ それともまだか？ そろそろ歌も品切れなんだが……

『モンスターボール。ポケモンをゲットする為に必要な球状の道具で、ポケモンを捕獲する能力を持つ。幾つか種類があり、最も基本的な物は紅白カラー。ボールの中は快適な環境が保たれており、ポケモンの出し入れはスイッチやポケモン自身の意思に基づいて行われて

いる様子。なおポケモンをボールに入れると縮小する様に見えるが、これはボールそのものの力ではない（シロちゃん&ポケモンまとめウエキより抜粋）』

「はい、モンスターボールについてはニキの書いた通りですね。詳しく知りたい方はまとめウエキへお願いします。長いので」

『セヤナ』『ニキ有能?』『かろうじて有能』『りよ、後で見ても見ようかな』『(・ω・)』『関東活動部隊各員は必ずチェックしろよ。てか暗記しろ。俺はした』『俺もした。ていうかそれぐらいもうやってた』  
ふむ、関東で活動する有志の人達は頭数こそ少ないが、思ったよりも本腰でやってくれる様だ。実に有り難い。……これならポケモンを、あるいはモンスターボールぐらいなら見付けられるかも知れないな。

「——っと、一先ず完成です。ここから先は配信外で仕上げてオークションに出しておきますね。………それと、この絵にあるようなボールを見掛けたらご一報……はしなくていいので、一つは確保しておく和良好的と思いますよ」

『セヤナ』『ソレナ』『ワカル』『ワカル』『まあ、関東活動部隊の目的の1つはソコだからな』『政府より早くモンスターボールを確保し、シロちゃんに届ける……ハードなミッションだぜ』『やる意味しかないならやるけどな』

『なんかよく分からんけど、見つけたら確保しとくわ』『あれか、きのみ? みたいにコイツが出てくるって事か?』『気になった初見はウエキかスレに行け。そして仲間になれ。人手が足りん』『作戦エリアは関東全域だからなあ……』

うん? なんか思ってたより大規模にやるみたいなんだが……今回の配信は余計なお世話だったか? いや、結束を強め、新規を引き込むという意味では悪くないはずだ。

「んー、少しだけ時間が余りましたね。では、少しだけ雑談して終わりますしょうか」

私はそう言って描き掛けの絵を脇に置き、短い時間ではあったがコメントを1つ1つ拾って雑談していく。

それが終わって配信が終了した後、私は描き掛けの絵を仕上げにいった。バランスを整え、線を強くし、色を付け——そうしているうちにも夜は更けていき……オークションに出す手続きを済ませて、ベッドに入り込んだ頃には日付が変わってしまっていた。

……アイドルネキとの合流まで、後数十時間。

## 第10話 夜の海に浮かぶ城

モンスターボールと虫ポケモンの絵をネットオークションに上げた日から一夜明け、アイドルネキが迎えに来るその日の夕方。私はいつものパーカーとズボンスタイルでアイドルネキの迎えを待っていた。本当ならスカートぐらい着た方が良いのだろうが、生憎持っていない。その辺はアイドルネキのオシヤレ指導に期待？ うん、期待するしかないだろう。

ちなみに手持ちの荷物は一切無い。全てアイドルネキが用意すると豪語して譲らなかったの、渋々任せたのだ。まあ、旅行カバンなんて持っていないから助かったけども。

「わふう……」

「……………」

ちなみにアイドルネキを待っているのは私だけではない。アイドルネキの許可もあつて連れていく事になっているポチと、見送りがしたいと言った東郷お爺ちゃんもアイドルネキの到着を待っている。

ポチは暇そうにしつつも私の側で行儀よく待っており、東郷お爺ちゃんはどこかピリピリとした雰囲気放っていた。私？ 私は緊張もあるが、基本的にはポチ寄りだ。どうかそろそろ来てくれないと肌が焼けてしまうのだが……まさか迷子か？

「…………シロちゃんや。迎えはそろそろだったな？」

「うん。さつき連絡があつて、あと10分もあれば着くはずだつて」  
「……………」

焦れてきたのか、東郷お爺ちゃんが2度目の確認をしてくる。ちなみにその連絡があつたのは約10分前。正確には7、8分前だろうか？ どちらにせよそろそろのはずだが……つと？

「グルウ……？」

「ふむ」

「お、おお……」

何の前触れも無く曲がり角を曲がつて現れたソレに、私達は三者三様の反応を示した。ポチは怪訝そうに、東郷お爺ちゃんは何かを思案

する様に、そして私は感嘆の声を漏らす。

約束の時間間近に私達の前に現れたのは……リムジンだ。それも大統領とかが乗っていきそうな、黒くて長いアレ。まさか……？

いや、いやいや、幾ら何でもそれは無いだろう。あのリムジンは偶然ここを通り掛かっただけに違いない。そう私が思案している間にも、リムジンはひび割れたアスファルトを蹴りながらこちらへと近付いて来て……私達の目の前で止まった。

目の前に黒光りするリムジンの横つ面、映る犬と老人と少女。それらを呆然と見ていると、リムジンからずいぶんと体格の良い運転手だろう人が降りて来て、リムジンの扉を開けていく。

一拍。私とは真逆の艶やかな黒髪がサラリと流れて、その綺麗な人は降りて来た。間違いない、テレビで見たことがある。アイドルネキだ。確か本名は……

「ふふ、こうして会うのは初めてね。伊藤結香よ。ユウカでいいわ。宜しくね？ シロちゃん」

本名、伊藤ユウカ。シロ民通称アイドルネキ。祖父に歴戦の政治家を、父に大企業の社長を持つ現役アイドルにして名女優。間違いなく有名人である彼女は、握手だろう手を差し出しつつ私に目線の高さを合わせてくる。

彼女の挨拶は堂に入っているというのか、実に自信溢れる堂々たる物で、コミュ症気味の私からすればそれだけで飲まれてしまう様な物だった。……とはいえ飲まれてばかりもいられない。私は何とか手を伸ばして握手しつつ、挨拶を返す。

「あ、あ、はい。宜しく願います。えっと、不知火白です」

「ええ、よく知ってるわ。……それで、その子がポチで、そちらの御仁が噂のお爺ちゃんかしら？」

「は、はい。この子がポチです。それでお爺ちゃんが……はい、噂のお爺ちゃんです」

しどろもどろになりつつもポチを紹介し——このときポチの視線が呆れた様子で「胸を張って、ちゃんとしろ」と言っていたような気がするのはいのせいだ——次に東郷お爺ちゃんを紹介しようとして



失敗した後、東郷お爺ちゃんが半歩前に入る。

もしかしてフォローだろうか？ フォローであって欲しい。いや、やっぱりいい。フォローされても恥ずかしいだけだ。なんだよお爺ちゃんはお爺ちゃんって……私のアホオ……これじゃコミュ症そのものじゃないかあ……………

「どうも。自分は東郷といいます。シロちゃんからは東郷お爺ちゃんと呼ばれていましたね。……何でも、これからシロちゃんがお世話になるとか。伊藤さん、でしたな？ 何とぞ、宜しくお願いします」

「——ええ。任せましたわ。東郷さん」

なんだろう。ごく普通の挨拶のはずなのに、アイドルネキの後ろに龍が、東郷お爺ちゃんの後ろに虎が、それぞれ幻視できるのだが……気のせいか？ うん、気のせいだな。気のせいということにしておう。

一拍、二拍。私が自分自身に必死に言い聞かせる事暫し。二人のらみ合いは続いている。それはアイコンタクトにしては長すぎ、また空気も重い。まるでお互いの力量を測っているかの様だ。……ああ、この重苦しい空気はいつまでも続くのだろうか？ 耐えかねた私がそろそろ割って入るべきかと考えたとき、厳つい運転手らしき人が動く。

「お嬢様。そろそろ」

「……そうね」

ふつ、と。空気が揺らぐ。チャンスだ。

「じゃあ、東郷お爺ちゃん。私行くね」

「……………ああ。気をつけてな」

「大丈夫だよ。……さ、ポチ。行くよ」

これ以上にらみ合いをさせる訳には行かないと、私は東郷お爺ちゃんに手早く出立を告げる。ポチも直ぐに反応してくれたので、私はそのまま一歩踏み出した。

「えっと、失礼します？」

「ええ、どうぞ」

一応というか、アイドルネキ……ユウカさんに断りを入れてリムジ

ンの中に乗り込む。中はハリウッド映画に出てくる様な……いわばリッチな雰囲気にも包まれており、一般平民でしかない私はある種の場違い感を感じるざるを得ない。とはいえ私に続いてユウカさんも乗り込んで来るので無理やり足を二歩動かしたが、そこでユウカさんが乗り込み終わったのか扉が閉められた。場違い感が増す。

……いや、しかしプレッシャーに負けてばかりもいられない。さしあたって、どこに座った物だろう？ そう私が悩んでいるのが分かったのか、ユウカさんが軽く手を引いて席まで連れて行ってくれる。有り難い。が、人肌の暖かさ……それも綺麗な人の肌ときているせいかな、感覚が酷く鈍く、やたら現実感が薄い。頬をつねるべきだろうか？

「ふふ、緊張してるの？ シロちゃん」

「い、いえ、大丈夫です」

何が大丈夫なのか、私にも分からん。

半ば混乱した思考をしている間にリムジンが動き出し、窓外の景色が流れていく。ああ、家が離れていく……いやいや落ち着け、私は今から関東に行くんだぞ？ これくらいなんだというんだ。早くもホームシックなんて冗談じゃない。

「わふう……」

私の足元でポチが呆れた様子で声を漏らす。そうだ、私にはまだポチがいる。何も問題は無い。

私は初めての場所にも関わらず落ち着いた様子のポチを軽く数回撫で、落ち着きを取り戻す。そうしてハタとユウカさんの方を見れば、何だか良い物を見たような、そんな表情をしていた。

「えっと、どうかしましたか？ ユウカさん」

「いいえ、仲が良くて微笑ましいなあーって。それだけよ」

「そ、そうですか……」

嘘は言っていないのだろう。ユウカさんは微笑を浮かべながら私とポチを視界にいれ続けている。ずっと見ていたい、そういわんばかりに。

……しかし、あれだな。精神年齢はともかく、肉体年齢的には同年

齢ないし同年代のはずなのだが……色々と違う。それは身長もそうだし、女性的な部分もそうだが、何より内面的なソレが違い過ぎる。こう、覇気のような物を感じるのだ。会話にイマイチ慣れないのは……きつとそのせいだろう。そうでなければ私がコミュ症だという事になつてしまうのだから。

「……………ねえ、シロちゃん」

「はい。えっと、なんででしょう?」

「……………撫でてもいい?」

「? ……ああ、はい。大丈夫ですよ」

考え込んでいた事もあって一瞬何の事か分からなかったが、直ぐにポチを撫でたいのだろうと判断した。何せポチの毛並みは素晴らしく、撫でていると落ち着いてくる程。ユウカさんはきつとそれを見破つたに違いないと確信し、この幸福を分かち合うべく許可を出したのだが……何故かユウカさんは私に視線を合わせ、滑る様に近付いて来た。

「ゆ、ユウカさん……………」

困惑。私の声はそれに尽きた。

何せ、近い。物凄く近い。息の当たる距離だ。うつすらと花の香りがする。香水か? ほのかに甘いにおいだ。

「ふふ」

アギトだ。龍のアギトが見えた。

私が困惑のままにソレを幻視していると——ユウカさんの手がポン、と。私の頭の上に乗せられる。そしてそのままゆつくりと手を動かして……………そこで私はようやく思考が追いつく。撫でられていると。ああ、撫でたいのはポチではなく私かと。……………いや、何故に? 「ん、つと。軽いわね。シロちゃん」

「? ……!?!」

「わふう……………? グルウ——」

気づけば私はユウカさんの膝の上に乗せられ、そこでゆつくりと頭を撫でられていた。それこそ幼子の様に、子供の様に。

ああ、最早私の頭の中にはクエスチョンマークしかない。何故だ。

何故そんな事を？ 何故私を撫でるのだ？ ふとポチに視線をやったが、顔を逸らされた。解せぬ。

「え、えっと、ユウカさん」

「なあに？ シロちゃん」

「わ、私、なんで撫でられてるんですか？」

「それは——っと、そうね。んー……シロちゃん。髪のお手入れ、ちゃんとしてる？」

「か、髪のお手入れですか？」

質問を質問で返されたが、大した事でもないので軽く考えてみる。

髪の手入れ。それはつまり、あれだろう。世の女性達がやっている事をしているかということだろう。コマーシャルで出てくる様な品々を使っているか、と。

思考時間はホンの数秒。答えは直ぐに出た。

「いえ、何もやってないです」

こちらら前世は野郎なのだ。その手の事に興味は無く、知識も無ければ必要性も感じなかった。そのせいか私の髪はちよつとばかりボサボサというか、何というか、そこまで綺麗ではない。当然洗っているので汚い訳でもないが……まあ、アイドルや女優としての顔を持つ人からすれば赤点間違いなしの状態だ。気になって仕方なかったに違いはない。

「うん、そうよね」

「わふう……」

知ってたとしても言わんばかりの軽い調子で声が2つ返ってくる。服を持ってない時点で察せられたのだろう。ポチが呆れた様に狸寝入りに入り、ユウカさんの私を撫でる手が強ばった気がするのは……たぶん、気のせいだ。

「船に着いたら……まずお風呂ね。簡単にでも整えておかないと」

「えっと、そんなに駄目ですか？」

「駄目。全然駄目。当然今のままでも可愛いけれど、磨いてないのは勿体無いわ」

「は、はあ……そういうものですか」

「そういうものよ」

欠点どころかマイナス表記だと言いたげなユウカさんの声に押され、もうどうにでもなれと諦めにも似た境地に至る。アイドルで女優なのだから変な事にはなるまい、とも。

そんな事を頭の端で流しながら、ユウカさんに頭を優しく撫でられ続ける事暫し。私はふと思った。

「あの、ユウカさん。船にお風呂……あるんですか？」

疑問に思ったのはそこだ。私の思い浮かべる船はこう……漁船のデカくて高い版みたいな、金持ちのボートであり、それにお風呂が付いているとは思えなかったのだ。勿論フェリーとかなら付いているかも知れないが……今回の船はユウカさんがコネで引つ張つて来た奴だと聞いている。幾らなんでもフェリーサイズではないだろう。そうなることやはお風呂の存在は疑問視されるのだが……

「ええ、幾つか付いているわ。シロちゃんはどうなお風呂がいい？」

「……え？ いや、えっと、お任せします？」

「ふふ、任されたわ」

？ ……気のせいかな。何か幾つかお風呂があり、選べるみたいな事を言っていた気がしたが……うん、気のせいだ。幾らかユウカさんがアイドルで女優で、父親が大企業の社長で、祖父が元大物政治家でも限度がある。あれだ、ジョークに違いない。金持ちジョークだ。そうでないなら今回の船のサイズは――

「ん、着いたみたいね」

どうやら私がぼんやりとしているうちに目的地に着いたらしい。

厳つい運転手さんが扉を開け、私とポチはユウカさんに連れられて外に出た。日はとうに沈み、電気の明かりが辺りを照らしている。潮風は……特に感じない。というか、辺りには背の低いビルが立ち並び、真新しい背の高いビルが両手の数程見える。

——ここは港ではなく、市内ではないか？

私が疑問を覚えていると、ユウカさんは厳つい運転手さんに2、3話した後、私の手を引いて背の高いビルへと入っていく。ビルの内装は……かなり高級感があって、私の場違い感が凄まじい。

しかしユウカさんはそんな事はどうでも良いとばかりに進んで行き、あろう事かポチまでそれに追従しだした。ユウカさんもポチも私を引つ張り過ぎない様に、置いていかない様に気をつけてくれている様なのだが……私は付いていくのに精一杯だ。というか何故ポチは平然としていられるのか。

「遅いわ」

「申し訳ありません」

気がつけば私とユウカさんはエレベーターの前で、背後に厳つい運転手の人が居た。何やらユウカさんと話しているが、耳に入らない。場違い感が凄まじいせいだ。

「わふう……」

ああ、こんな状況でも私の家族は頼もしい。ポチは平然と待っている。

「さあシロちゃん、ポチちゃん、行くわよ」

ぼさつとしているうちにエレベーターが到着し、私達はユウカさんに引つ張られる様にエレベーターに乗り込む。厳つい運転手の人も一緒だ。

私は右手をユウカさんに握られたまま、空いた左手でポチを撫でる。そうして視線を動かせば……エレベーターはどんどん上へ上へと上がっている様だった。いったいどこで降りるのか、聞けないままエレベーターは最上階へ。

「ごっちよ。シロちゃん」

「わふう」

ユウカさんに手を引かれ、ポチに背を押されて私は進む。困惑しつつも通路を歩き、階段を上り、そして。

「……シーホーク？」

辿り着いた先。ビルの屋上で私達を待っていたのはヘリポートと、ローターを緩やかに回転させる……SH-60シーホークらしきヘリ。いや、なぜ軍用の対潜哨戒ヘリがここに？ とうにかいつの間にか運転手の人はヘリの操縦席に移動したのだ？ 疑問を抱く私達をよそに、ユウカさんは手を引いて、ポチは背を押してくる。

いや、そんな、まさか。

疑問を抱えたまま私はへりの中へと押し込まれ、ローターの回転音が大きくなっていく。ああ、扉が閉められた。

「では、飛びます」

「ええ。シロちゃん、飛ぶわよ」

待って、待ってくれ。なぜ私はへりに乗っているんだ。船に乗るのではなかったのか。とうかポチは落ち着き過ぎではなからうか？

え、なんでそんな「やれやれ、落ち着きのないやつめ」みたいな目で見られなければならぬんだ!? いや、落ち着いてるポチの方がおかしいんだからな!? ……おかしいんだよな? あれ? わたしが駄目なだけなのか?

グルグルと思考が頭を駆け回り、ポチには呆れられ、ユウカさんには微笑ましいものを見る様に眺められる。…ああ、私が駄目なだけか。そう納得したとき、へりが飛んでいる事に気づいた。

「わあ……」

歓声、だろうか。声が漏れる。今や市内のビル街は私の下にあり、眩い電気の明かりが眼下を流れていく。

小さな窓にへばりつく様にして下を眺め、光が通り過ぎて行き……機体が海に出た。何気なく視線を動かして、瞬きを二回。目を擦って、もう一度瞬き。うん、いや、アレは何だ? 小さな港から程近い海の上に、建物がある。爛々とつけられた電気の明かりで海を照らし、そのナニカは存在感を放ち続けている。

「ふふ、紹介するわ。アレがシロちゃんがこれから乗る船。ギガヨット、リヴァイアサン号よ」

「リヴァイアサン……」

神話の怪物の名を持つ海に浮かぶ城を見ながら、私は自分の心が浮き足立っているのをひしひしと感じずにはいられなかった。

## 第11話 お嬢様の手は広い

side：伊藤ユウカ

「こちらリヴァイアサン・ツ。リヴァイアサン号管制へ、着艦許可を求む」

『こちら管制。了解だ、リヴァイアサン・ツ。着艦を許可する。それと、君のお姫様に艦長から伝言だ。受け入れと歓迎、それに出港の準備は終わっている。自分は船酔いしたので部屋にこもるから、船の指揮は自由にしていい……だそうだ。ククツ、散々この船で世界中を巡ってるのに今更船酔いとは、妙な話だとは思わないか？ しかもさっきまではピンピンしてたんだぜ？』

「管制、了解した。伝言は必ずお嬢様に伝えておこう。それと、その件に関してはノーコメントだ」

ようやく、ホントにようやく会えたシロちゃんを眺めていた私の耳にそんな会話が飛び込んでくる。念の為と小型のインカムを耳に付けていたせいだろう。良く聞こえた。

私は同じ話を繰り返し返そうとするマネージャーに手振りで充分だと伝え、操縦に集中させる。このヘリにはシロちゃんが乗っているのだ。墜落は勿論、操縦ミスによる微かな揺れすら許すつもりは無い。

「わあ……ふわあ……」

さて、私を恐れてか苦手なのか、船を放棄して自室に引きこもった船長の事なんてどうでもいい。

私は直ぐに視線を元に戻し、ヘリの窓にへばりつく様にしてリヴァイアサン号を熱心に見るシロちゃんを見る。

「ふわ……」

ああ、思わず笑みが溢れる。我慢なんて出来ない。中学一年生程で止まった愛らしい身体、肩口を過ぎて伸びる長い白髪、爛々と輝く紅い瞳。まるで雪の精霊の様な、それら全てが可愛らしく、いとおいしい。

私は今すぐシロちゃんを抱きしめたい衝動を抑えながら、キラキラと輝く紅い瞳に焦点を合わせる。今の今まで困惑を始めとした感情に揺れる事はあっても、基本的にジト目にハイライト無しがデフォ



だったその目に映るのは私ではなくリヴァイアサン号。そこにドロリした黒いものを感じるも、普段では見れないのだろうシロちゃんを眺めて洗い流す。シロちゃんが楽しそうなのだからいいじゃないか、無理矢理振り向かせるのはナンセンスだ、と。

「わふう……」

シロちゃんの側から漏れる呆れた様子の鳴き声。毛並みも良く、体躯も立派な黒い日本犬。ポチ、通称ポチネキだ。私は非常に優秀な番犬である彼女をチラリと見やり、彼女もまた一瞬だけ視線を合わせてくる。

「グルウ——」

何を言っているかなんて分からない。だが私が彼女のお眼鏡に叶ったのは間違いないだろう。同時に「妙な真似をしたら殺す」とも。

私はその野性的な殺意を正面から受け止め、また同種の物を叩き付けておく。交差は一瞬。

「グルウ……」

彼女は興味を失ったかの様に私から視線を逸らして、狸寝入りに戻る。見ようによっては私の圧に屈した様にも取れるが、そんな訳が無い。マウントを取ったのは、あちらだ。

「ふう……」

本当に、シロちゃんは面白い。可愛いらしいだけでなく、様々な傑物を惹き付けるのだから。

私はポケモンでいうところの『グラエナ』の様な日本犬を視界に入れつつ、彼女達の先生だという老人の事を思い出す。彼もまた傑物……いや、英雄だった。この私があまりの力量差に思わず見栄を張ってしまう程だ。おかげでマネージャーが土産の品を渡す暇を潰してしまっただが……まあ、彼ならどうとでもするだろう。今頃部下を走り回らせてるはずだ。どうせポケットマネーを出したのだろうし、後でボーナスを出してあげなければならないだろう。実に面倒だ。が、しかし……ああ、全く。シロちゃんはズルい。シロちゃんを知らなければこんなミスをする事も、傑物や英雄と出会う事も、自分がこんなに欲深だと気づく事も無かったのに。

彼女との出会いは偶然。完璧だった……いや、完璧だと慢心し、様々な物に興味を持たなくなった私が出会った未知、夢、そして欲。それが私に取つてのシロちゃんだ。

私はシロちゃんが語り、描く夢と未知に魅せられ、自分にも夢がある事に気づいた。またその後で知った隠し撮り写真に写る、雪の精霊の様な美しく愛らしい姿に再度魅せられ、シロちゃんを自分のモノにしたいという……ドロリとした欲にも気づいた。それからの私は未知と夢を追い、シロちゃんへの欲を抑えて生きてきた。そして、それはこれからも変わらない。……まあ、欲の方は今後チビチビ出す事になるだろうが。

「お嬢様、これより着艦します」

「ええ、分かったわ」

私は耳に付けていたインカムを外し、シロちゃんの乱れた白髪を軽くまとめた後、肩に優しく手を置いて席に着かせてシートベルトの確認をする。別にそのままでも良かったのだが……

「あ、有り難うございます。ユウカさん」

「ふふ、良いのよ。シロちゃん」

ああ！　なんと甘美な響きか！　しかし顔に出しては幻滅されるだろう。私はアイドルと女優業で鍛えた微笑を盾にしつつ、シートベルトを確認し——然り気無くボディタッチを行う。

……ふむ。やはり全体的に線が細いというか、肉付きが悪いというか、酷く痩せている。胸の膨らみなんて皆無だ。生まれて直ぐにネグレクトを受け、殆んど一人で育ってきた家庭環境を考えれば仕方ないのかも知れないが……不憫。そう思うのは、今まで独りぼっちでも生き抜いて来た彼女に失礼か。しかしこれはあまりに……

「えっと、どうかしましたか？　ユウカさん」

「……いいえ。そう、お肌の手入れもしないと駄目だと思つてね」

「そ、そうですか……？」

私は内心の動揺を直ぐ様押し殺し、咄嗟にそうウソぶいた。

ああ、勿論そんなものは必要無い。当然やれば更に輝くのは間違いないが、現状でもツルリと、あるいはプルリとしており、緊急性は無

い。

だが私はそれが重要な問題であるかの様な調子でシロちゃんに告げ、雪の様な白髪を揺らして小首を傾げるシロちゃんを置いて自分の席に戻る。……これで私がボディタッチしていた理由が付けられた訳だ。それが本当に真実かどうかは別として。

私がねじ曲げた真実にシロちゃんが気づく前にへりはリヴァイアサン号に着艦。うん、60点。微かだが揺れた。もしこれでシロちゃんが転んで怪我でもしたら……幾らマネージャーでも許す気はない。コンクリート詰めにして東京湾に捨ててやるところだ。

幸いシロちゃんに怪我は無かった様なので、紅い瞳がジト目に戻りつつも、困惑と期待は隠せない様子のシロちゃんの手を引いてへりから連れ出す。

「お待ちしておりましたっ！」

「!？」

「お出迎えご苦労様」

驚愕か、ピクリと小さな手を震わせたシロちゃんを横目に、私は屈強な男達の出迎えにサラリと答える。キツチリ列を作って迎えるその姿は軍隊のそれだったが、私からすれば慣れた物だ。彼らを使う立場になるシロちゃんもそのうち慣れるだろう。確か彼らの殆んどは中東でならした傭兵や元アメリカ海兵隊員、あるいは軍や警察の特殊部隊経験者でクセや我が強いが……些細な事だ。この私が演出するシロちゃんの魅力の前に、彼らも直ぐに屈服する事になるのだから。

私がそう確信し、彼らを元の場所に戻らせようと指示を出そうとした——そのとき。私のスマホがマナーモードで着信を告げる。何気なく相手を確認すると……ドM犬兵の文字。

「……貴方達、私の代わりにシロちゃんを案内しなさい。不手際や無礼は許されないわ、いいわね？」

「イエス！ マム！」

「え、えつと、ユウカさん……？」

「ゴメンね、シロちゃん。急用が入っちゃって、私が案内する事は出来ないわ。その代わり彼らを自由に使っていいから、このリヴァイアサ

ン号を楽しんで来てね」

「え、いや、その、え?」

「大丈夫よ。彼らは犬と思えば良いの。ポチちゃんも連れて行っていいから……ね?」

「ふええ……?」

何が何だか分からないのだろうか、あるいはオーバーフローしてしまったのか、シロちゃんが奇妙な声を上げて混乱する。その様も可愛らしくて、今すぐ抱きしめたくなるが……我慢だ。今は犬兵からの報告を手早く受け取らねばならないし、その報告をシロちゃんに聞かせる訳にはいかないのだから。

ふむ、仕方ない。ここは心を鬼にすべきか。

「貴方達、シロちゃんをエスコートしなさい。不手際があれば……分かってるわね?」

「いい、イエス! マム!」

「え? あ、あれ? ええ……?」

「わふう……」

屈強な男達に囲まれ、困惑しきりのシロちゃんと落ち着いた様子のポチネキが船内へと消えて行く。あれらに一通りの日本語と礼儀作法を叩き込んだのは私だし、その辺り問題は起こらないと思えるが……一応とばかりにマネージャーを顎で送り込んでおく。これで万全だ。

さて。

「なに? 妙な報告なら殺すわよ」

私はスマホを 통화状態にし、開口一番そう言い放った。普段なら絶対にならないが、相手はある種私の同類でもあるあのDMだ。遠慮は要らない。

『貴女から聞いた福岡の拠点だが……2ヶ所とも、もぬけのからだ。何も無い』

「……何ですって?」

電話の向こうの困惑が伝わるかの様な報告を、私は疑問系で聞き返す。

だってそうだろう。有志の協力者である犬兵に調べさせたあの場所は、間違いなくシロちゃんを狙う変態どもの巢窟だった。武器と思われる何かが入るのも一週間前に確認している。だからこそ、有志の協力者である犬兵を含めたそれなりの人員と少数の警官を、シロちゃんの移動と同時に突入させたのに……もぬけのから？ まさか、読まれた？

「そう。逃げられたのね？」

『恐らくは。しかし逃げたにしては綺麗に引き払われているし、2ヶ所ともこれだ。かなり前から準備が行われていたとみるべきだろう』

「……何か、痕跡の様なものは？」

『無いな。全くだ。貴女の私兵や俺の様な有志の人間はともかく、連れて来た警官連中は不満を抱えて早々に引き上げた程だよ』

「そう……」

警官の事はどうでもいい。いざとなれば上からどうとでも出来る。だが、完全に逃げられたというのは問題だ。これで私達は不安要素を残す事になった……

「間違いなく、来る。……わよね？」

『ああ、間違いなく奴は兵を連れてそちらに行く。シロちゃんが関東に行く聞いて、迅速に準備したに違いない。……奴はシロちゃんの帰還を待たず、関東で事を起こすつもりだ』

「チツ、忌々しい……」

『同感だ』

忌々しい。実に忌々しい。あのシロちゃんが他人に触れられるだけでドロリとした黒い物を感じるというのに、かのクソツタレな変態はそれ以上の事をしようというのだ。シロちゃんを、白を汚す？ あの真っ白な、無垢な白を、私以外の誰かが汚す？ 許せない。許せない許せない許せない！ 絶対に許さない！

「奴らは、絶対に捕らえるわ」

『了解している』

当たり前だ。奴らは即刻捕らえて、取り敢えず拷問だ。楽に殺してなどやるものか。シロちゃんの姿を見せる事は勿論、幻聴でも声を聞

かす事すらおこがましい。絶対、許さない。

『それと、なんだ。俺の……その、アレも、意識的に活用してみたんだが……』

「ええ、サイコメトリー能力ね」

『……言うなよ。それじゃ俺が厨二病みたいじゃないか……』

「事実でしょう？」

『……』

サイコメトリー能力。超能力の一種で、物体に残った残留思念や記憶を拾い、過去を透視する事が出来る能力。日本では馬鹿にされる能力だが、海外では事件解決や新たな発掘等に役立てられている力だ。

とはいえここは日本で、当然以前ならオカルトと鼻で笑われるし、笑った話だが……きのみが出てきてからはそんな気も失せた。シロちゃんの夢の前には常識なんてゴミでしかない。だからこの犬兵が超能力者でも、今更だ。

「いい加減認めなさい。サイコメトリーの超能力者。この私が断言したのだから」

『……横暴だな』

何とでも言え。それでこの犬兵が自身を認め、結果としてシロちゃんを守るなら安い物だ。私が何の為に手早くシロ民を束ね、その中でも貴様を重用していると思っている。全てはこういうときの為だ。

さあ、どうだ？ まだ足りないか？

『はあ……自信なんて無いし、確証も無いぞ？』

「構わないわ。それを決めるのは貴方ではなく、この私なのだから。貴方は私の言う通りにすればいいの……さあ、言いなさい」

ゆっくりと、語り掛ける様に。

優しく、染み込む様に。

しかし、力強く。

物心ついてからずっと続けて来た私の力は犬兵の不安を取り除けたのか、彼が語りだす。

『正直、ロクな情報は拾えなかった。部屋は空っぽだし、液体らしい液体もないしな』

「そう、確かサイコメトリーは液体相手が得意だったわね」

『ああ、水は霊と深い関わりがあるらしいからな……つと、そうじゃねえ』

軽く咳払い。そして犬兵は「見えたのはぎつと3つだ」と前置きして話し始める。

『先ず人数は2ヶ所だけで40人を突破してる。ロクに見えないし、出入りも激しかったから重複や誤認もあるだろうが……それでも、かなり強大だ』

「……想定以上、ね」

マズイ。犬兵から話は聞いていたから、リヴアエアサン号の人員を投入する準備は終えているが……数が多すぎる。

攻撃側は防衛側の3倍の戦力が要る、というのは防衛側が城に立てこもり、その城が壊れてもいときだけだ。今回の様に立てこもる城が無く、護衛対象がいるなら、むしろ逆。防衛側が攻撃側の3倍の戦力が必要とするのだから。

そう考えるとこの時点でシロちゃんを守る為に必要な人数は120人。この時点で難しいのに、現実には更に必要だろう。全く、ままならない。

『それとあのクソツタレ、どこかから支援を取り付けたいらしい。拳銃を持ってやがった。他の奴らも何かしらの武器、だいたい拳銃で武装してるし、少数だがサブマシンガンとアサルトライフルも確認した。スナイパーライフルは確認出来なかったが……恐らく見れなかっただけだ。持ってないとは思えない。それと、運び込まれた武器の中にRPG、対戦車ロケットランチャーを見た。流石に偽物だと期待したいが……この町は、前例があるからな』

「……そうね」

軽く足を動かして船の欄干に身を預ける。そこから見えるのは船の光に照らされた黒い海……白さなんて無いのに、どこかシロちゃんを思い出した私はおかしいのだろうか？

まあ、落ち着く事は出来た。

「はあ……」

しかしたため息ぐらいは吐きたくなる。あの町は最近幾らかマシになつたと聴いていたが……やはり修羅の国という事なのか、それとも根っこまでは枯れてなかつたのか、どちらにせよロクでもない。悪質な変態どもはいつの間にか過激なテロリストに変質していたのだから。

これでは警察を呼んでも戦力不足だろう。自衛隊を呼んでやつと勝負になる。しかしそれは無理だ。自衛隊なんて動かせない。ならば手持ちの戦力に武装を……そう考えたいが、流石の私も銃器の入手ルートは持ってない。ここの船長なら密輸ルートの1つや2つはぐらい持っているだろうが……シロちゃんの為だからといって何でもしていいと、悪事を働いてもいいという訳ではない。しかし、しかしこれでは対抗のしようが……

「今から関門橋とトンネルで警察に検問を張らせるのは……間に合わないでしょうね」

『ああ、無理だろう。奴はすでに本州に上陸しているはずだ。水際での迎撃が出来ない以上はゲリラ戦になる。もしも全ての警察を動かせるなら、ゲリラ戦でも勝利する事は可能だが……』

「そんな力はお祖父様にだって無いわ。やるにしても時間が掛かる。……個人特定と、その証拠はある？」

『無いな。超能力者の透視が証拠になるならあるが』

「残念だけど、日本の法律は超能力者に対応してないの」

お互いのため息を吐き、先行きの暗さを嘆く。

しかし嘆くばかりは私のすることではないし、そんな奴を重用したりはしない。つまり。

『ただ、1つだけ手掛かりがある』

そら、来た。

私は期待を隠しもせず先を促させる。すると犬兵は淀みなく報告し始めた。

『どうやら奴は九州にある拠点を軒並み引き払わせたらしいが……1ヶ所だけ、支援者と連絡をつける為に連絡員を残して設置したままらしい。見えたビジョンも曖昧だから確証も無く、場所も曖昧だが



……』

「いいわ。追って。資金は引き続き出して上げる。私兵は……一人一人に確認を取って使って。あれはお父様の人員だから」

『了解した』

自信ありげな犬兵に調査続行の許可を出し、私はスマホの電源を落とす。

結局決着はつかず、安全も確保出来なかった。しかし前進はしている。どうにも評価しづらいそれを切り落とし、私はシロちゃんの護衛計画を練る。今のままでも出来る事を……そう考える私の背後からマネージャーが近づいて来るのを感じた。彼はシロちゃんにつかせていたはずだが……叱責しようと振り返って見れば、微妙な顔。何事だろうか？

「お嬢様、関東で動かしていた、シロ民を名乗る一般人達から連絡があったのですが……」

「なに？」

「いえ、その……なんというか」

普段ではあり得ない程に言い淀むマネージャーを視線で強く叱責し、先を促す。そうすると彼はやはり暫く言い淀んだが、やがて言葉を発した。

「モンスターボールを発見、確保した……と」

「っ！」

何という事か、何という事か！

私はマネージャーを置いて走り出した。普段なら絶対にしないが、今は時間が惜しい。この一報を早くシロちゃんに伝えたい。他でもない、この私が！

「ふふ、ふふふ……」

笑みが溢れる。それはそうだろう。

叶うのだ。

シロちゃんの夢が。

叶うはずのない夢が、ついに、叶うときが来たのだ。

多くの者を魅せ、惹き付け、虜にしてきた、夜の海の様な夢が……

独りぼっちの少女が描いた夢が、ついに――

## 掲示板 一般？ネット民の対応

【シロ民が】最近の異変について答えるスレpart1【答えます】

1：名無しの犬

スレタイ通り。大抵の事は答えるから、知識共有していこう！

2：名無しの犬

シロちゃんは忙しいから、代わりにワイらが知識を広めに来たぞ！

さあ、何でも聞け！

.....

.....

.....

187：名無しさん

つまりお前らシロ民が言う事をまとめると、最近の異変は『ポケモン』とやらが現れる前兆でしかなく、本番はまだまだこれからだって事でok？

188：名無しの犬

>>187

セヤナ。それで合ってる。

だからお前らもきのみ植えて増やしたり、モンスターボール確保したり、ポケモン知識を頭に叩き込んでおくと良いぞ！

189：名無しさん

>>188

お、おう、セヤナ！

191：名無しさん

>>188

アホクサ

寝るわ。

193：名無しの犬

>>191

アホクサって……何だよ。信じてないのか？

194：名無しさん

>>>193

信じられる訳ないだろ常考。というか嘘つくならもつとマシな嘘つけよ。

変異した果実で傷がふさがるとか、ボールが突然現れたとか……仕舞いには未知の生物が出現する？ 頭おかしいだろ。あと何？ 土浦辺りで起きてる幽霊騒ぎもポケモン？の前兆？ しかもマジモンの超能力者とかサイキツカーが出てくる？ はぁーマジでアホクサ。

196：名無しの犬

>>>194

は？ きのみはちゃんと映像で証拠出したろ。ちゃんと見たか？ ボールも鳥でのリアルタイムの証言つきだしさ。嘘な訳ないだろ。

197：名無しさん

>>>196

はいはい嘘乙。あんな編集した奴に決まってるじゃん。鳥云々もやらせだろ？ 認めろよw

199：名無しの犬

>>>197

こ、こいつ、言わしておけば！

201：名無しさん

>>>199

お？ なんだよやるか？

202：名無しの犬

>>>199

止めろ。信じない奴は放つとけ。ユウカ様……アイドルネキからも言われたろうが。ムキになるな、疑惑や疑念で充分だって。

そんな事より他に質問無いか？ 答えるぞ。

204：名無しさん

>>>202

じゃあボール発見時ってどんな感じだったん？ 鳥見たらだいた分かるけどさ、それをお前らが即行で気づいて取りに行ったのはち

と都合良すぎね？

207：名無しの犬

>>204

ああ、それか。待機してたんだよ。ざっと百人かな？ 有志の人間がバラバラに関東中に散らばってそれぞれ待機してたんだ。だから即行で対応できたんだよ。あと鳥や掲示板に張り付く情報収集要員もちゃんと確保してたからな。

だから鳥にボールの写真がのせられたとき、直ぐに近場の奴に連絡が飛んで、ソイツが……まあ、俺だな。俺が引き取りに行ったんだよ。スピーディーにな。まあ、ゴミとして処理されるところだったのはビビったけど。

208：名無しさん

>>207

ほーん。なるほど。しかしそのボールは突然現れたって話だが、その辺どうなん？ あとそのボールってのは設定通り動くんか？

210：名無しの犬

>>208

ぶっちゃけ何も分からん。分かるのはこれが間違いなくモンスターボールで、ポケモンが出てくる準備が整ったんだろうって事だけだ。

最初にモンスターボールを見つけたコンビニ店員に話を聞いたが、いつの間にか倉庫にポンツと置いてあったらしいからその辺一切不明。ただ俺らは突然現れたとしてもおかしくはないって考えてる。

あとちゃんと動くかだけど、植物学者を通じて専門の機関に調査を依頼した。最初に確保したモンスターボールはシロちゃん用に、その次はアイドルネキ用に確保したけど……今頃は追加で見つけられた分の殆んどが送られてるんじゃないか？ 何だかんだ、八王子周辺のコンビニで一個か二個ずつ見つかった次々確保されてるからな。

植物学者は専門外だからってきのみ集中してるけど、最初見せたときに現代の科学で作れる代物なのかって2人で怪しがつたなあ……

211：名無しさん

>>210

ふーん。ホントにこれからって感じなんだな。

で、そのボールが見つけれるのはコンビニだけか？

212：名無しの犬

>>211

ああ、今のところ八王子周辺のコンビニだけだな。けど範囲はきのみみたいに広がるだろうから、そのうち関東全域で見つかるはず。忙しくなるぜ。

あと考察班はポケモン世界のフレンドリショップと、こちらのコンビニの役目が同じだからだろうって考えてるみたいだな。

214：名無しさん

>>212

ポケモン世界、ねえ……まあ、だいたい分かったよ。

つまり俺らの世界は今、異世界と融合しつつあるって感じなんだな

？

215：名無しの犬

>>214

そうなるな。

218：名無しさん

異世界と融合www

そうなるなwww

お前ら馬鹿過ぎだろw流行りのアニメじゃあるまいし、草生えるわ

w

つか幽霊騒ぎとサイキツカーの理由はどうしたしwええ？

221：名無しの犬

>>218

幽霊騒ぎは土浦がシオンタウン化してるんだろ。そのうちゴーストタイプのポケモンが出てくるはずだ。

で、サイキツカーとか超能力者は、ポケモン世界だとサイキツカーなんてゴロゴロいるからな。霊能力者とかもいるし。ポケモンが来

るならサイキッカーや超能力者も生えてくるだろうってのが考察班含めたシロ民の考えだ。分かったか？

222：名無しさん

>>221

分かる訳ないだろカスカよwww

ポケモンとか超能力者とかwやっぱシロ民はキチガイの集まりだわwww

これじゃその親玉のシロちゃんとかいうビッチもキチガイだろうなwww

223：名無しの犬

>>222

野郎、言わせておけば……！

224：名無しの犬

>>222

俺らをキチガイ呼ばわりはまだいいさ。だがシロちゃんをバカにしたのは許さない。見つけ出してブチのめしてやる。

226：名無しさん

>>222

煽りはまだいいが、ここに居ない人間の誹謗中傷は止めとけよ？

227：名無しの犬

チツ、ハツカーの奴が居たらこの場で住所特定してやったのに……

229：名無しの犬

>>227

止めろ。居ない奴の事は忘れるんだ。というかアイツはもうシロ民じゃない。変態道に堕ち、今やテロリストだからな。

しかし元々黒い噂のある奴だった……まさかああなるとは。

230：名無しの犬

>>229

福岡の拠点でアサルトライフルやロケランを海外から密輸、ないし買い集めて、関東に逃げたらしいな。犬兵ニキも良い仕事したで、ホンマ。今は警察が高速道路や主要な道路に検問張らせたりしてるら

しいが……

つかロケランってなんだよ。拳銃で充分だろ。それともあれか、ポチネキに瞬殺されたのがそんなにトラウマなのか……？

232：名無しさん

ハッカーwwwテロリストwwwロケランwwwやつぱシロ民頭  
おかしいwww

あ、未知の生物が出てくるとか言ってる時点でお察しでしたねww  
w

こりやシロちゃんとやらは相当な馬鹿に違いない。美少女とか言われてるけどそれも頭おかしいシロ民の想像だし、実際は相当なブスに違いないぞwwwうはw草生えるwww大草原www

234：名無しさん

テロリストとかロケランは流石に盛り過ぎだろ。ここ日本だけ？  
そんな話聞いた事ない。

冗談にしても、そういうのは良くないぞ。

235：名無しの人

>>232

今度シロちゃんを馬鹿にするような事を言ってみろ。貴様の居場所を特定し、便所まで追い詰めて口を縫い合わせてやる。

236：名無しの人

>>232

そうか。ならお前の手ごと除草してやるから待ってる。

238：名無しの人

>>234

嘘でも冗談でもないんだよなあ……日本でこの手の話を聞かないのは情報統制と、苦勞して密輸しても使う奴が居ないll売れないから滅多に持ち込まれないだけで、持ち込もうと思えば幾らでも持ち込める訳だし。

とはいえ、いったいどんな支援者を取り付けたのやら……まあ、日本の事が本気で邪魔な国なんて数える程度しかないし、それこそお察しだけ。



240：名無しさん

>>238

は？ おいおい、本気で言ってるのか？

242：名無しの犬

>>240

マジだぞ。まあ、信じなくてもいいよ。ポケモンならまだしも、ロケランは俺もいまいち信じ難いし。

243：名無しさん

>>242

ロケランは信じれなくても、ポケモンは信じれるのか……煽り野郎じゃないが、お前ら大丈夫か？

245：名無しの犬

>>243

ちよつとおかしいかな？ と思わなくもないけど……シロちゃんだし、俺らシロ民だし、多少はね？

というかあれだな。きのみショックで完全に信じちまったのが1つ、後は……俺もいつの間にかシロちゃんの夢に魅せられて闇に沈んでたって事なんだろう。

247：名無しさん

>>245

おおう……そうか。

うん、流石はネットで最も闇が深くヤバい連中の集まりと言われるだけあるわ。

248：名無しの犬

>>247

それなあ……俺らに自分達がヤバいって自覚はあんまり無いんだよなあ。俺らにとつては常識つーか日常つーか……

でも確かにシロちゃんが黒を白と言うんなら俺らも黒を白と呼ぶって程ではないけど、灰色扱いはするしなあ。うーん？

250：名無しさん

>>248

もういい、休め。なんかクトウルフじみて来た。

252：名無しさん

>>250

クトウルフ感ワカルマーン。

何回かアーカイブ見たことあるけど……あの配信者の声ってき、なんかこう、心にスウツて入ってくるよね。スルツ、じゃなくてスウツと。壁を通り抜ける幽霊みたいな感じ。

気づいたら洗脳されてもおかしくはないと思うの。

255：名無しさん

>>250

クトウルフワカル。

俺あの子の催眠音声愛用してるけど、ホントスゴいもん。オカルトでも納得していいぐらいマジぐつすり。不眠症が治ったし。

まあ代わりに催眠音声手放せなくなったんだけどな！ 別バージョン出して下さいお願いします何でもしますから！

257：名無しの犬

>>255

ん？ 今何でもするって言ったよね？

取り敢えずシロ民になれ。そして関東に来てモンスターボールをかき集めるんだよお！ 運が良ければシロちゃんに直談判できるかも知れんぞ！

259：名無しさん

>>250

クトウルフというよりSCPじゃね？ あの配信者。誰かがあの配信者の声はl/fの揺らぎだとか何とか言ってたが、影響力がそういうレベル越えてるしなあ。

……うん、取り敢えずクラスは何だろうな？

260：名無しさん

>>257

それしかないかあ……

まあ今度関東に転勤するから丁度良かったのか？ ブラック企業

を辞めるタイミング見失いそうだ……ああうん、モンスターボール？  
見つけたら確保しとくよ。

262：名無しの犬

>>259

そりゃ害とかないし safe……いや、影響力とか考えると  
ユークリッド  
Euclidか？

まあ詳しくは……言い出しつぺの法則な！

263：名無しの犬

>>260

社畜ニキ強く生きて……ポケモンが来たなら転職すればいいさ。  
うん。

264：名無しの犬

煽りウザイ。スレの消費が早くなるだろうが。

てかブスだのビッチだの、キチガイだとか散々言ってるけどさ、あの  
年頃の子供にそういう事言えるお前の方がキチガイじゃん。鏡見  
ろよ豚。

266：名無しの犬

>>260

イキ  
ロ

268：名無しの犬

>>262

ああ分かったよ！ やってやるよ！ どうせ後戻りなんか出来  
ねえんだ。やれば良いんだろ!!

途中にどんな地獄が待っていようとお前に！ お前らに！ 俺が  
やってやるよ!!

270：名無しの犬

>>264

正論だけど、もう相手しなくていいで。そろそろBANされるやろ  
うし。

273：名無しの犬

>>268

SCP好きのワイ。全裸待機。

……てかシロ民的にはこれはセーフなん？

275：名無しの犬

>>273

誹謗中傷してる訳でもないし、俺らも薄々そんな感じはしてるし……何より本人がそういうの割りと好きだからな。大丈夫やろ。

てかもうあったような気が……何番スレだったけ？

276：名無しの犬

>>275

さあ？ でもシロ闇まとめに合った気がする。

278：名無しさん

書こうと思ったら既にあつたわw

シロ闇まとめにあつたw

ワイ書かなくてすむぜw書いた人ありが……↑パンパンパン

279：名無しさん

>>278

キボウノハナー

しかし煽り消えたな。ザマアw

281：名無しの犬

>>279

今頃ぐっすり寝てるだろうな。

ああ頼みがあるんだが、煽り野郎を起こさないでくれ。死ぬほど疲れてる。

282：名無しさん

>>281

(それだと煽り野郎は) 死んでんじやない？

284：名無しの犬

>>282

大丈夫(今のところは)生きてるよ。

285：名無しの犬

全く、煽り野郎なんて口ばかり達者なトシローばかりだ。

ただのカカシでしたな。

俺達ならまばたきする間に（パチン）BANさせる事が出来る。忘れない事だ。

287：名無しさん

ああ駄目。これじゃ異変を語るスレじゃなくてコマンドーを語るスレよ！

288：名無しの犬

>>287

だったら軌道修正すればいいだろ！

290：名無しさん

ここで空気を読まずにコンビニ店員の俺参上！

紅白カラーの、モンスタールボール？ を倉庫で見つけて、紛れ込んだゴミとして捨てるよこんなだけ……これいりゆ？

291：名無しの犬

>>290

いや、最高に空気読めてたよお前。

そしていりゆううう！

で、どこのコンビニ？ 一番近いシロ民行かせるわ。

293：名無しさん

>>291

八王子の※※※※ってとこ。直ぐ来れる？ 来れるんなら店の前で掃除しながら待ってるけど。

296：名無しの犬

>>293

そこギリギリ八王子じゃねえか……もう範囲が広がってるのか？

ああ、今連絡した。直ぐに行ける場所に1人居るから向かわせるつてよ。十分あれば充分だろ。

それと取りに行く奴は首に白いチョーカーしてるから個人特定に役立ててくれ。受け取り時の合言葉は『ポケットモンスター』それと代金兼手間賃兼合言葉代わりに200円を渡すから、好きにしてください。

ちなみに一応聞くけど、お前自身が持たなくて良いのか？

298：名無しさん

>>296

りよ。

200円シヨボいと思ったけど、俺何もしてねえしな。ジューズでも買うわw

で俺？ 要らん要らん。よく分からんし、欲しい奴が持つとくのが一番だろ。それに必要になったら自分で探すわw

299：名無しの犬

ok!

後で返してくれって言っても返せないからな。心変わりするなら今の内だぞ。

301：名無しさん

>>299

(ヾノ・▽・ヽ) ナイナイ

んじゃジューズゴチになりまーす。……てか何故に白いチョーカー？

303：名無しの犬

>>301

俺らはシロ民。要するに犬だ。つまりはシロちゃんの犬だ。つまり……

304：名無しの犬

>>301

もしかして 首輪

306：名無しさん

うん、やっぱりお前らシロ民は頭おかしいわ。

……

……

……

◇

「結構派手に動いてるんだ……」

夜の海を進むリヴァイアサン号の中。今なお更新され続けている、罵声すら飛び交う賑やかな掲示板を見つつ私はそうポツリと呟く。シロ民が協力してくれるとは聞いていたものの、10人もいれば上等だと考えていたので、まさか100人単位が集まるとは思っていなかったのだ。

他にも怪しげかつ物騒な話も驚きであるし、散々書かれた悪口はむしろ懐かしいというかマトモというか……まあ、有意義な情報収集だった。

「ふふ、当然よ」

そうやって私が一人満足していると、後ろから自慢気な声が耳をくすぐる。ユウカさんだ。

私は何気なしに上を向き、私を膝の上に乗せて私の髪をすいているユウカさんの顔を見る。とても、とても得意気だった。掲示板の話では総指揮を取っているらしいし、お礼ぐらい言っておくか。

「……そう、ですね」

そう思ったのだが……私は先ほどあつた事を思い出してユウカさんの顔を見ていれず、顔を正面に戻して口をつぐんだ。

お風呂から上がってだいぶ経つたはずの身体が火照ってくる。ユウカさんに着せられた薄い……ネグリジエの一種なのか、ベビードールとかいうらしい、実に頼りない薄くヒラヒラとした服の裾を弄りながら、心を落ち着けようと努力してみるが……駄目だ。先ほどの事が頭に浮かんでしまう。

「……っ！」

声にならない声で叫びつつ、思い出すのは暖かさと柔らかさ。

話があるのだと、なんとも嬉しそうな顔のユウカさんに連れられてバカデカイお風呂に入り、恥ずかしながらも必要だからと押されて髪を洗って貰い、流され言いくるめられて身体まで洗って貰って……二人で湯船に入った。うん、この時点で自分を殴り倒したいのに、問題はここから。

そう、問題は湯船に入って……そこで言われた『モンスターボール』

発見の報告。

私はその報告に一拍、二拍と思考が止まり、湯の暖かさと同時にジンワリと喜びが上がって来て、そして、私は近くにいたユウカさんに飛び付いたのだ。ポケモンの足音が聞こえた、確かに聞こえたその喜びを、我慢出来ずに、あるいは誰かに分かって欲しくて、私はユウカさんに抱きついた。

お風呂場で。

当然、お互い真っ裸だ。というかタオルはマナー違反だとユウカさんにひっぺがされた。お互い同性なのだからいいじゃないかと。だから真っ裸だ。絵面だけなら女性二人。何の問題も無かった。

ああ、つまり、はい、柔らかかったです。

「ふふ……」

ユウカさんは気にしていないのか、当たり前だと思っているのか、お風呂から上がってずっと私の髪を整え続けている。丁寧に、丁寧に……本当に有り難い話で、だからこそ恥ずかしさはより一層強くなる。

「——っ！——!!」

声に出来ない声を発しつつ、私はまるで女の子の様に恥ずかしがる。男なのに。ああ駄目だ。身体に引っ張られるな。私は男なんだぞ!?

——そんな事を思う私を乗せて船は行く。関東まで、あと少しだ。



## 第12話 集い始める力

リヴァイアサン号がシロちゃんを乗せて一路関東へと進んでいる頃。東京都内のある大学の研究室では、一人の男が達成感に浸っていた。男のネットでの通称は植物学者。シロ民からきのみ科学的な検証について任された男だ。

「ふう……」

まだ年若いといっている男はゆったりと椅子に腰掛け、その背もたれに身体を預ける。いかにも疲れてますといわんばかりの男の視線の先にあるのは十数枚の紙……男の書いた論文だ。内容は当然、きのみについて。

「……………」

男は今まで幾つもの論文を書いて来たし、それが人に認められた事もあれば、尊敬出来る教授に誉められた事もあった。植物学者として名が売れ、今では若くして講師の地位にまで上り詰められている。しかし、そんな彼をして今回の論文は期待と不安、その他諸々がごちゃ混ぜになって全く先が見えない代物になってしまっていた。

勿論努力はしたと自負出来る。それこそここ2、3日は寝食を惜しんでやったと言える程度には打ち込んだのだ。尊敬する教授からの反応も悪くはなかった。どこぞのコネしかないボンクラ教授とは違い、ある種の叩き上げであるその教授からも及第点を貰えている。まあ、懐疑的ではあったが……それは仕方ない事だ。男とて自分の目で見なければ信じなかっただろうから。

「……………きのみ、か」

一通りの仕事をこなしたという達成感が薄れ、本当にこんな論文で大丈夫なのかと不安が増してきた男の目に映るのは、大学の校内で大量に育てた青い果実……オレンの実と、それに関する自らが書いた論文の一枚。思い出すのはきのみに関する事だ。

最初にきのみが現れたとき、実は男は見向きもしなかった。講師としての仕事が忙しかったし、何かの間違いか、仮に本当だったとしても自分が出る幕は無いだろうと。

風向きが変わりだしたのは、その果実達を誰も解析できない状況が丸1ヶ月続いたとき。誰もが一番成功者の席になる事を争い、しかし最初には成りたくないと奪い合いと押し付け合い、何より無能の足の引つ張りが続き……男がようやく舞台上上がったとき、誰もやらないなら自分がやると男が立ち上がったときに、風向きが変わりだした。

そしてそんな彼に助言したオタク趣味なシロ民らしい友人の言葉、つまりシロ民なら答えを既に知っている……その言葉を確かめにネットの海に潜ったとき、風向きが完全に変わった。向かい風でも、横風でもなく、追い風に。

そこからはトントン拍子だった。あまりの調子の良さと事の簡単さに拍子抜けした程だ。何せ彼らシロ民の言う通りに、もつといえればシロちゃんの言う通りにすれば、その通りの結果が出たのだから。まるで、最初から答えが分かっているかの如く。むしろ周りから足を引つ張られないように気を配る方が大変だったまでである。

「……いや、事実分かっていたんだったな」

自分の論文、その中の一文をチラリと見て呟く。男の論文の各所にはシロちゃんが描いたきみのみの設定、その説明文が殆んどそのまま引用されていた。一応、自分の考えた事ではないと明言してはいるが……仕方のない事だった。まさかシロちゃんが論文を書く訳にもいかず、仮に書いたとしても誰も取り合わないだろうから。いや、場合によっては読もうとすらしないだろう。無名の、姿を見れば幼女並みの彼女を嘲笑するのがオチだ。……嘲笑した相手が元凶とも知らずに。

「ん？ いや、この言い方は語弊があるな……」

男は暫し考え込んだが、結局良い言い回しは見つからない。

だがそれも仕方ないだろう。今の状況はどう考えても彼女が元凶としかいいようがなく、どうオブラートに包んでも今回の騒動の中心であるのは間違いないのだから。

「シロ民も、そこは否定しきれなかったしな……」

彼ら曰く、シロちゃんはおとぎ話の主人公。

今起きているのは、親に捨てられた憐れな少女の、儂い夢の具現化。

なんともそれらしい話だ。男自身そういう話を子供の頃に読んだ覚えがある。日々の生活にすら苦しむ少女が夢を見て、少女を憐れんだ神様がそれを叶える……そんな話だったか。

実際、シロちゃんは神様に憐れまれるような苦勞をしている。物心ついたときには親は居らず、家に一人ぼっち。お金だけは無機質に払い込まれるが、まだ幼い少女……いや、幼女にそれでどうこうしろと言うのは無理だ。もし彼女が賢い子でなければ、近所の人が異変に気づかなければ、恐らくシロちゃんは……死んでいた。小学校に入る前に、だ。

そして、更に悪い事に彼女の苦難はその後も続く。何せ体質的に身体が弱く、長時間日の下を歩けず、しかも学校でそれらに理解が得られなかったのだから、義務教育期間は苦痛でしかなかったろう。その上味方するはずの親は居らず、家に帰っても一人ぼっち……私なら苦痛に耐えかねて死んでいる。少なくともあんなに真っ直ぐには育つまい。そう男は考えを一度まとめる。……まあ、いささか闇深いところがあつたり、精神年齢にバラつきはあるが、それは仕方ないというものだ。むしろよく生き残ったと称賛されるべきだろう。

「そう、だからこそ……彼女を批判するのは間違い、あつてはならない間違いだ」

勿論苦勞しているのはシロちゃんだけではない。男が知らないふりをしているだけで、不幸な子供なんて山ほどいるのだ。

しかし、それでも。いや、だからこそ。彼女一人の夢ぐらい叶つたつていいじゃないかと、男は思う。シロ民も、概ね似たような考えの者が多い。今まで知らないふりをしてきたのだから、その様な事になつても文句を言える筋合い無し、と。

しかし世の中は基本的に理不尽でクソツタレだ。男が、シロ民が予測するに、先ず間違いなくシロちゃんを元凶だ黒幕だと叩く連中が現れる。夢を願っただけの少女を、今まで憐れな子供を見捨ててきたクセに、偉そうに糾弾するのだ！ 自分達こそ正義と胸を張って！

あつてはならない。そんな間違い認めていいはずがない！

だが……ネットの掲示板でアイドルネキが語るに、一般の民衆は声

の大きな者の考えに同調するものなのだという。自分では何も考えず、群れの流れに流されるのが民衆という生き物なのだと。男もその考えには同意した。専門ではないが、分かる話だったから。

しかし、だからといって認めるつもりにはならない。それは男を含めたシロ民の総意だった。ようやく報われそうな憐れな少女を、再び地獄に落とす道理無しと。例え偽善だとしても、これ以上見て見ぬふりは出来ない。ならば、どうするか？ その答えの1つこそ、男の論文であった。

「シロちゃん聖女化計画……だったか？」

作戦名はコロコロ変わるのでなんともいえないが、やることは同じだ。シロちゃんを騒動の元凶や黒幕ではなく、災いを予言した聖女に落とし込む……それが作戦の骨子である。男のオタク趣味なシロ民の友人曰く「シロちゃんを危険なK<sup>ケ</sup>e<sup>テ</sup>t<sup>テ</sup>rではなく、友好的かつ利益を生むTh<sup>タ</sup>h<sup>ウ</sup>a<sup>ミ</sup>m<sup>エ</sup>i<sup>ル</sup>e<sup>ル</sup>として世間に認識させる」との事。男にはその英単語がどういう意味を持つか推測しかねたが、言ってる事は同じだろうと察した。シロちゃんを聖女として神聖化し、悪口を言うことすらタブー化させると。多分にネット特有のノリがある様だが、悪い作戦ではない。少なくとも男はそう考えていた。

そして、その一歩目こそ自分の論文を皮切りに打ち出される『きのみ』の有効利用。そして事前準備を兼ねた『モンスターボール』の確保、及び解析なのだ。男はそう考えている。

もし、もし仮に——いや、男は意地でも成功させる覚悟だが——今回のこれが上手くいけば、民衆のシロちゃんのイメージは概ね良い方向を向くはずだ。それが預言者か、聖女か、あるいは可哀想な少女になるかは不明だが……少なくとも、民衆に利益をもたらした彼女を叩くアホは少数になるはず。そして少数ならば、どうとでもなる。それがシロ民の考えだった。

「論文の根回しは進んでいるし、近日中に元総理に説明出来る様にアポが取れている。モンスターボールも、第一陣は既に送った」

男は自分の論文の一枚を手に取りながら、指折り数える様にして呟く。

元総理とのアポはアイドルネキが取ってきた。ここで成功すれば政界への情報伝達がスムーズになり、場合によっては今後シロちゃんも動き易くなる様に風通しを良くする事も出来るだろうとの事だ。勿論失敗したときは腹切りものだが……男には失敗のビジョンは見えなかった。

そしてモンスターボール。こちらは男の専門ではないので、他のシロ民同様自分用を確保した後は専門の研究機関等に送ってある。もつとも有名どころは十中八九門前払いされるので後回しにし、こういう新しい事に目がない人物や、男自身が事前に説明したり頭を下げる場所を優先したが……だからこそ、話が通り易いはずだ。

男はそこで1人頷き、何気なくオレンの実に関する論文を流し読みする。もう何度もやったので大方の内容は諳じていたが……：……：目につくのはやはり『傷が塞がる』とかいう非常識な文言や、『未知の物質』とかいう今時そうそう見かけない文言。そして『シロちゃんと呼ばれる人物の預言じみた知識』という色んな意味で危ない文言だ。男は思う。これ論文じゃねえ、作文だ、と。しかしこうとしか書けなかったのだからどうしようもない。

ああ、これも全部『きのみ』が非常識過ぎるのが悪い。効果はフアントラジードだし、成分は未知の物質だらけだし、そもそも自分で研究した部分なんて検証だけだ。研究とはいえないし、それで論文なんて書ける訳がない。そうだ、全部きのみが悪いんだ。さもなくばこうなるまでシロちゃんを放って置いた世間が悪い。皆悪い。男はそう現実逃避し、更に現実逃避を重ねてみた。つまり……：

「フツ……きのみが世に出れば全てがひっくり返るな」

男が軽く鼻で笑いながら出したのは、果実1つで世界が変わるという馬鹿馬鹿しい考え。しかし、事実だ。少なくとも植物学と、医学と薬学辺りは研究を1からやり直す事になるだろう。ああそうだ。もう珍しい植物を草の根分けて探しに行く必要は無くなる。何せ目の前でアホみたく生えてくるのだから。社会の、大学のあちこちで悲鳴が聞こえるに違いない。男はそう考えて爽快感と、何ともいえない感情を抱く。何アホな事考えてるんだろう、と。

「……仕事するか」

一周回って冷静になったのか、男は自分の役目を果たすべく動き出す。男の役目は何もきのみやモンスターボールだけではない。大学の講師としての仕事もあるし、先々を考えれば方々へのコネクションを手に入れておかねばならないのだ。更に足を引つ張つらんとする有象無象への対処も必要だった。休んでいる暇は、ハッキリ言っただい。

「――しかし、変態どもがテロリストになったらしいが……大丈夫なのか？」

だが男の思考は隙あらばそんな方向にも飛んで行っており、まだまだ余裕はある様子だった――

## 第13話 最初のポケモン

私がリヴァイアサン号に乗って早くも二日目。船は関東まであと少しのところまで来た……らしい。

いや、らしいというのは私自身レーダーの見方なんて知らないし、陸地も見えないからだ。1つ確かに言えるのは、水平線というのは案外近い物だったという事か。

「わふう」

「機嫌良さげだね、ポチ……」

「わふ」

昨日専門の人に毛並みを整えて貰ったのが嬉しいのか、心なし機嫌良さげに聞こえるポチの声をBGMに、私は船の通路横の窓から五キロ先の水平線を見る。勿論、海しか見えない。青く輝く海はそれだけでキレイだが……しかし、私の心は微塵も浮かなかった。何故か？  
今着ている服のせいだ。

「うう……」

私は小さく唸りながら、今着ている服の裾を弄る。

別に着ている服が気に入らない訳でも、きわどい訳でもない。むしろそれらの逆。ユウカさんが勧めて来た服が私によく似合い、また清楚な感じがするから断るに断れなかったのだ。具体的に何と呼べばいいのかは知らないが……恐らくワンピースの一種だろう。真っ白で膝下まで隠してくれるそれはかなり良い物の様に思えた。更に下着の類いから小物に至るまで買ってくれたユウカさんには、本当に頭が下がる思いだ。

まあ、その代わりとばかりに昨日は着せ替え人形にされたが……今日中に元総理に会う事を考えると、それも必要な事だったのだろう。最低でもセミフォーマルといえる格好をしておかないといけないのだし。

とはいえ、いつもパーカーとジャージが基本だった私からするとこういう女の子の子女の子している服は馴染みが無く……ハッキリ言って落ち着かない。具体的にいうと足元がスースーして、心もとない事こ

の上なかった。

「うう……！」

しかし、ポケモンの為にはこの心もとなさにも慣れなければならぬのだろう。このハリウッドにでも出るのかと聞きたくなるワンピーススタイルがセミフォーマルなのだとすると、これから着る機会は無数にあるだろうから。それこそ、お偉いさんに話をする回数だけ着るのは間違いなく……私の心はダイビング中だ。

「あら、シロちゃん。ここに居たのね」

「ユウカさん……」

通路の向こうから歩いて来たのは、ユウカさんだった。彼女の服装も私と似たようなワンピーススタイルだったが、しかし私よりも遥かにハリウッド的な高級感と気品が溢れている。これが慣れか、それとも持って生まれた才能なのだろうか……？ どちらにせよ、ユウカさんと私では比較にすらならないだろう。

「ポチちゃんも……うん、大丈夫そうね」

「グルウ」

しゃがんだユウカさんが何かを確認するかの様にポチの首もとを撫でて……それをボウツと端から見ていた私は、そこでハタと奇妙な疑問を持つ。

ポチってこんなだっけ？ と。

黒い毛並みも、イケメンフェイスも変わってないように思えるし、この子が頼りになる私の家族なのは間違いない。しかし……ポチの牙や爪はあそこまで鋭かっただろうか？ 特にあの眼光は、幾ら何でも圧がありすぎる様な気がする。……気のせいかな？

「——ちゃん、シロちゃん？」

「え、あ、はい。どうかしましたか？」

「いえ、何だかボウツとしてたから……大丈夫？」

「ああ、すみません。大丈夫です。……その、ポチが何だか変わった様な気がして」

「グルウ？」

ポチは首をかしげ、ユウカさんは心配そうな表情を崩してポチへと



視線を向ける。

黒い毛並み、格好いい顔立ち、鋭い眼光や牙。それは以前からポチに備わっていたものではあるが、改めて見てもやはり変化しているような気がした。そう、まるで……

「うーん、グラエナみたいな子だとは思うけど……前からこうじゃなかったの？」

「——っ！」

そうだ、今のポチはまるでグラエナだ！ 細部も違うし、違いなんて幾らでもあるが……その印象は日本犬というよりグラエナによく似ていた。まさか、まさかまさかまさか!! ポチがポケモンになったの!?

「——」

呼吸が止まる。

一拍、二拍、動き出す。

改めてポチを見て、グラエナを連想して……ふと思うのはグラエナの登場世代。確かグラエナは第三世代からの登場だ。もしポケモンが現れるなら第一世代からだと思ったのだが……違ったのか？ それともポチだけが特別？ それともポケモンは既に第三世代まで現れた後？ あるいは私の見間違いでポチはポケモンではない？ ……分からない、分からないが。

「——ユウカさん」

「ふふ、何？ シロちゃん」

恐らく、全ての答えは関東にある。既に用意されている！

こうなれば最早足踏みしている暇すら惜しい。早急かつ完璧に元総理との会談を終わらせ、関東をひっくり返す勢いで調べつくさねば……！ そうすればポチがポケモンになったかどうか——

「関東へは、まだかかりますか？」

「ええ、この船の到着を待つのなら後半日はかかるでしょうね。……我慢出来なくなっただけ？」

「はい。今すぐ行きたいです」

「ふふっ、そう言うと思って準備させたわ。さっ、こつちよ」

スタスタと歩いて行くユウカさんの後が続くように私も歩き出す。意識すればするほどグラエナに見えてくるポチも私の横を歩き、リヴァイアサン号の中を進んでいく。私なら迷いそうな艦内をユウカさんは迷いなく進んで……確かこの先は。

「へり、ですか？」

「ええ。陸地まで届く距離になったからね。これからへりで久里浜の別荘近くにあるビルまで移動。そこでモンスターボールを受け取り、車でお祖父様がいる別荘まで向かうわ」

「モンスターボール……！」

シロ民達が複数のモンスターボールの確保に成功し、私の分も確保してくれたと聞いてはいたが……そうか、ついにモンスターボールをこの手に——！

「ふふ、嬉しそうね？」

「はい。モンスターボールですから」

「グルウ」

「そうね。モンスターボールだもの……夢が、叶うわね？」

夢。そうだ。私の夢は叶う。ポケモン達が現れるのは確定し、後は時間の問題。だが、まだまだ。まだ足りない。ポケモンを見たぐらいでは満足出来ない。私は一度死んでなお夢を見た……いや、死んだからこそ夢をみた強欲な人間だ。そんな奴がポケモンをただだけで満足出来るはずがない。ポケモン達とふれあい、バトルし、コンテストもやり……それら全てを他者と共有し、広げ、世界にポケモンがなん足るかを知らしめて——恐らく、それでもまだ満足出来ないだろう。

だが、それでいい。もう離したりしない。離す気は無い。私は死ぬまでポケモンと共にあり、ポケモンの為に生きる。これは、その第一歩。だから。

「まだ、これからです」

夢はまだ、始まったばかり……ここで満足なんて、してやらない。

「そう、そうね。そうだったわね。ええ。ポケモンは、これからだわ」

「はい」

「グルウ」

差し当たって、先ずは元総理にポケモンがなん足るかを分かって貰おう。そして次は国会で、その次は日本国民に、ポケモンを広めるのだ。

私は決意も新たに足を踏み出し、リヴァイアサン号の後部甲板に出る。大きなヘリポートの真ん中にレスキューホークが一機、ローターを回転させながら私達の事を待っていた。

「準備は、良さそうね？」

「はい。問題ありません。……行くよ、ポチ」

「グルウ」

私の言葉に笑顔を返したユウカさんが先に乗り込み、続いて私とポチが乗り込み……扉が閉められる。パイロットを見ると、以前の運転手さんと同じの様だ。

「リヴァイアサン・ツーよりリヴァイアサン号管制。これより発艦する」

その言葉から一拍してローター音が大きくなり、機体が浮き上がったのが窓から見て分かる。ヘリはそのまま止まる事なくリヴァイアサン号から発艦、進路を関東へと取る。

過ぎ去る巨船、走る海原。私はヘリのローター音をBGMにそれらを眺め、ふとポチへと手を伸ばしてその頭をやわらかく撫でる。

「グルウ……」

どこか気持ち良さそうなポチを眺めながら、やはりグラエナに似ていると思う。言われれば気づかない程度の変化……いや、少しずつ変化して私が慣らされたのか？ どちらにせよ、今はグラエナにしか見えない。

「関東についてモンスターボールを手に入れたら……ポチに使ってみようかな？」

その思い付きはヘリのローター音にかき消されてポチにすら聞こえなかった様だが、私はその考えを悪くないと思っていた。長年連れ添った大好きな家族が、大好きなポケモンに変わったのなら……それを少しでも早く実感したいのが、私の正直な心情だった。

それに、メリットこそあれどメリットは特に無い。むしろポチが

ポケモンになっているのなら、モンスターボールに入れない方が危険だ。

私はアレコレと思考した後、モンスターボールを手に入れたら直ぐにポチに試す事を決意する。確かアニメではスイッチ部分を押し当てていたなと思いながら、ポチを撫でて眺めて過ごす事、暫し。それまで黙って此方を眺めて微笑んでいたユウカさんが私の隣まで移動して伝えてくる。目的のビルに降りる、と。

——いよいよだ。

「さ、シロちゃん」

「はっ」

私はユウカさんに連れられて、ポチと一緒にヘリの外へと出る。

そうしてユウカさんの後ろを歩き続けながら辺りに視線を回すと……ヘリから少し離れた場所に数人の男性達が立っているのが見えた。モノトーンカラーな彼らが、シロ民だろうか？

私が彼らに近づくに連れ、彼らの驚きと喜びは見て分かる程に大きくなり、首もとの白いチョーカーがよく見える位置まで来たときには……何というか、爆発寸前といった風だった。私が何か喋ったら文字通り爆発するんじゃないだろうか？ そう思える程に。

「お疲れ様。モンスターボールは？」

「っ、っくに！ はい！」

私が喋ったものかどうか悩んでいると、その思考を読んだのかユウカさんがモンスターボールを彼らから受け取ってくれた。有り難い。

そうしてユウカさんは手元のモンスターボール2つのうち、片方を私に渡してくれる。手に取って、軽く頭を下げる事で礼をして……そこからはただ、モンスターボールに視線が引き寄せられた。

今や赤と白のボールは私の手の中にあり、その冷たく滑らかな感覚を指先で感じる事も出来る。ああ、間違いない。今、私は、モンスターボールを、モンスターボールを手に行っているのだ！ 他でもない、あのモンスターボールを!! 夢に見たモンスターボールを、この手に！

この手の中に!!

それは歓喜か、狂喜か、少なくとも喜びであった。

「グルウ？」

それが中断されたのはすぐ側から聞こえた家族の声。ポチだ。

うん、分かっている。喜ぶのはこれから……そうだよね？　ポチ。

「ポチ——いくよ」

「グルウ」

迷いは、無かった。

私はモンスターボールを手にし、それをゆつくりとポチに近づけていく。ポチは動かない。私の目をジッと見つめている……うん、そうだね。大丈夫だ。

ポチの視線に領きつつ、私もまた視線を返し。そして、ついにモンスターボールがポチに触れる。

「——っ！」

変化は劇的だった。モンスターボールがポチに触れた途端、ポチは光となってモンスターボールの中へと吸い込まれていく。

私の手元で点滅しながら揺れるモンスターボール。ああ……間違いない。ポチはポケモンになっていた。私でも気づかないうちに、ポケモンに！　グラエナに！！　ポケモンは、ポケモンは、既に現れている！

驚愕と歓喜に揺れる私の手の中で2度、3度、モンスターボールが揺れる。私を落ち着ける様にゆらりゆらりと。そして。

——カチツ。

音が、する。それは聞き慣れた……ゲットの合図。

「っ——！」

私は我慢せずにポチの入ったモンスターボールを胸に抱きしめ、ポツリと呟く。

——ありがとう、ポチ。これからも、宜しくね。

「——おいで、ポチ！」

ポチに感謝の言葉を告げ、私は確信を持ってモンスターボールを空に放り投げる。

モンスターボールは空を舞い……重力に引かれて落ちる直前、光を外に出す。それはまさしく見慣れた光景で、光はやがてポチになる。

「……ポチ！」

私は手元に戻って来たモンスターボールをキャッチし、ポケモンとなったポチに抱き付く。

ポチは私のとっしんを受け止め、一度だけ頬を合わせてくれる。まるで「こちらこそ、これからも宜しく」そう言う様に。……ああ、私の家族は今日も頼りになる……優しい家族だ。

私は胸に熱いものが込み上げて来て、その衝動のままにより一層強くポチを抱きしめた。柔らかな毛並みが私を包み、暖かな鼓動が私を落ち着けてくれる。夢は叶った。ポケモンは今、目の前にいる。勿論満足なんて出来ない。出来ないけれど……今はもう少し、このまま――

## 第14話 政界への第一撃

私がポチをゲットした十数分後。私はユウカさんと共に何だか見慣れてきてしまったリムジンの中に居た。ポチはボールの中に居て貰うか悩んだが……そこにいると分かっても、姿が見えないというのは案外不安を煽るものだったので、外に出て貰っている。サトシのピカチュウスタイルだな。

ちなみにビルに居たシロ民とは結局一言も話さないまま別れた。私は何と言えば良いのか分からなかったし……恐らく、あちらも同じだったのではないだろうか？ 何だか私を見て呆気に取られた風だったし。

「——ええ、分かったわ。では、この後も引き続き彼らと行動を共にして。以上よ。……シロちゃん。お祖父様の所にはもう既にモンスターのボールの現物と、きのみに関する論文が届いているみたい。特にかきのみの論文は著者自らが説明に来ていて、たった今別荘を後にしたそうよ」

「なるほど……」

ユウカさんからの報告を聞いた私は、流れが自分に来ていた事を察した。元総理がどのような人物かは不明だが、例え堅物だったとしても何か起きていた事は把握したはずだ。ならば後はポチをモンスターのボールに出し入れしたり、私自身が説明すれば……きつと、分かってくれるはず。大丈夫、大丈夫のはずだ。

「シロちゃん？」

「……何ですか？」

「緊張……してる？」

「緊張。……いえ、緊張はしてません」

そうだ。緊張はしていない。今私の頭をかき乱しているこれは……不安。それと喜びだ。

当たり前だろう。失敗すれば全てが駄目になるどころか、ポケモンと人とのファーストコンタクトが失敗し、戦争になる可能性すらあるのだ。不安にならないはずがない。

しかしまた同時に喜びもあるのは……ポケモンを知る人が増えるからだ。ポケモンバトルも、コンテストも、語り合うのも、1人では出来ないのだから。それらは2人、3人と居て初めて出来て、多ければ多い程良いのだ。私とシロ民以外の人にポケモンを知って貰える千載一遇の好機……見逃す手はなく、喜ばざるを得ない。

「そう。……もしかして、嬉しい?」

「分かり、ますか?」

「何となくだけどね。何時もと違って、目が輝いていたから」

目、目か。それはどうにもならないな。普段は死んでいる私でも、現実にポケモンと触れ合えるとくれば……輝かざるを得ないだろうし。

「——つと、到着したわね。……覚悟は良い? シロちゃん?」

「はい。大丈夫です」

やろう。賽の目がどう出るかは分からないが、ここで止まる事だけは有り得ないのだから。そして私の全力を持って、ポケモンの事を分かって貰おう。そうすれば、きつと。

そんな思いを胸に私はポチをボールに戻し、ユウカさんに連れられて車の外に出る。そして私を迎えたのは立派な日本家屋……故郷にあるそれらよりも遥かに立派なそれだった。

「さ、お祖父様は既に待っているわ。行きましよう?」

「……はい」

一瞬飲まれかけたが、ユウカさんに声を掛けられて私は歩き出す。門をくぐり、石畳の上を歩き、屋敷の中へと入っていく。勝手知ったる様子のお嬢様スタイルなユウカさんの後をコソコソと歩きつつ、私はひっそりとユウカさんの選んだ服に感謝していた。

何せこんな立派な屋敷の中で芋芋しいジャージなんて着ていたらそれこそ萎縮してしまう。ユウカさんが選んだお嬢様スタイルな服を来ているからこそ、軽く小さくなる程度ですんでいるのだ。とはいえ、このお嬢様スタイルに違和感があるのも事実だが。

「ハイよ。……用意はいい?」

「——はい。行けます」



ユウカさんの問い掛けに一度だけ深呼吸し、答える。

「いよいよだ。いよいよ政界への道の入り口が見えたのだ。私は素早く何を言うべきか再度確認し……ユウカさんが一通りの事を行って扉を開ける。」

「失礼しますね。お祖父様」

「し、失礼します」

「ああ、久しいな。ユウカ。それと君がシロちゃんだね？ ユウカから話は聞いているよ。……さ、座ってくれ」

扉の向こうで私達を待っていたのは好々爺といった雰囲気の人だった。東郷お爺ちゃんよりは若く見えるが、80歳……いや、90歳はいつているだろう人だった。この人が、伊藤元総理か。

私はユウカさんにならって高そうなソファに並んで座り、伊藤元総理も私達の反対側に座る。その瞬間、微かに空気が重くなった。……始まりだ。

「さて、あまり時間ありませんし……手早くいきましょうか。お祖父様、資料は確認されましたか？」

「ああ、見たよ。先ほど学者の方が来てね。説明までしてくれた。この紅白の……モンスターボール？ と、果実……いや、きのみだったかな？ それの実演までしてくれた」

私が何と切り出した物かと思っていると、ユウカさんが口火を切ってくれた。

話を聞くにどうやら噂の植物学者さんは実演までしてくれたらしい。有り難い話だ。まだ一度も、それこそ掲示板ですら会っていないが……そのうちお礼を伝えたいと思う。

「あら……ちなみに、何の実演されたのです？」

「青い果実……そう、オレンの実だったかな？ それの実演をしてくれた。ここにマウスとメスを持ち込んだときは何事かと思ったものだが……納得したよ。あれは直に見て……いや、直に見れたからこそ半信半疑になれる」

「なるほど。論文だけでは信じれない、と？」

「信じれないだろうな。この目で見ても半信半疑なのだ。そんな論文

なんて読んでも……信じようとは思うまい」

私は手に持ったままのポチが入ったモンスターボールを撫でながら、2人の矢継ぎ早の会話を必死に聞く。

恐らくこれはお互いにジャブを打っているのだと思うが……展開が早すぎる。とてもついていけない気がする……大丈夫だろうか？

「ああ、それと彼は変異した果実達……彼が言うに『きのみ』の有効利用についても話してくれた。殆んどが荒唐無稽と笑われる話だが……仮にきのみ効果が本物であり、また安全であるならばそうでもない。むしろそれらは暫しの間とはいえ巨万の富を生み、その後一般に広がれば人々の生活を一変させるだろう。勿論、良い方へ」

「ええ。それは私も同じ意見です。きのみを有効利用すれば大きく世界は変わる。その効果は凶り知れませんが」

「うむ、彼は言っていたよ。健康寿命は勿論の事、半身不随や末期のガン、それどころか治療法すら見当のつかなかった難病すら治せる可能性がある。薬の殆んどはきのみに関連した物になり、その効果は今までとは比較にならず、事故にあつたときにはAEDや救急車よりもきのみを食べれるか確認する事になる……とね。笑い話だよ。普通なら」

「しかし、今は普通ではない。……昔の血が騒いでいるのでは？」

「その通りだ。事によれば有事なのかも知れん。そして……そうだな、今の若い連中には荷が重いだらうとも感じている。私自身、ボケてなくて幸いだったともね。だが、どう動けば良いのか判断しかねているのも事実で……もつといえ、こんな老害が今更出張るのは間違いないかとも思うのだ。——さて。そろそろ、お嬢さんの話を聞かせてくれるかな？」

2人の高速戦に付いていけず、半ば脱落仕掛かっていた私に元総理が声を掛けてくる。混乱は一瞬。語る事は決まっているのだ。ならば。

「伊藤元総理はきのみのは事は分かっている、という事で良いでしょうか？」

「キミ程ではないがね。……この異常事態の、専門家さん？」

言葉の上ではやさしく。しかし元総理の眼光は圧を持って私を見据える。嘘は許さないと。元より嘘などつくつもりはないが……しかし、この程度の圧なら東郷お爺ちゃんに慣れている。ああ、そう思えば一気に楽になった。

さあ、始めよう。

「専門家、といえば専門家なのでしょう。しかし、私はただ彼らが好きなのだけの……ごく普通の人間です。ですから私から元総理にお話出来るのは、3つ。そのモンスターボールの使い方、ポケモンについて、これからの予測……これだけです」

「……………ふむ。そうか、では、先ずこのボールについて教えてくれるかな？」

指を立てて説明し出した私に、総理はモンスターボールをコツコツと指先で叩きながら指名してきた。

モンスターボール。その詳しい原理なんて知らないからその辺は説明しようがないが……私の知る限りの事を話すならば、そう。

「はい。その紅白のボールの名前はモンスターボール。ポケモンを入れておく為の入れ物……いえ、お家、ですかね」

この表現が適切だろう。とはいえ知らない人に家だと言うのは突飛に過ぎたのか、元総理は見て分かる程に困惑していた。

「ポケモン、家。……そのポケモンとはこれに入る程小さいのかね？」

「いえ、ポケモン……正式名をポケットモンスターと呼ぶ彼らはそれに入る程小さくありません。しかし、彼らはその身体をある程度凝縮させる事ができ、モンスターボールはそれを応用した品になります」

「……………信じ難い話だな」

それはそうだ。私自身その辺はサツパリなのだし。とはいえ、見れば分かる程に分かりやすい話でもある。なのでここは……

「そうでしょうね。なので、実演します。——おいで、ポチ」

私は手に持っていたモンスターボールを部屋の空きスペースが多い場所に放り、ポチを呼ぶ。

一拍、彼女はモンスターボールから光となって出てきてくれる。私に取っては見慣れた光景。しかし、元総理にとっては違うもののはず

だ。

「グルウ」

「有り難うね。ポチ」

「グルウ……」

私は近寄ってきたポチを撫でながら褒める。これで元総理はポケモンを信じるしかないだろう。少なくとも、既存の常識が通用しないナニカが現れた事は理解したはずだ。

チラリ、と。元総理の様子を伺えば、その顔は驚愕で埋め尽くされていた。

「これは、驚いたな……手品、という訳でもなさそうだ。それにその犬……いや、犬ではないのか」

「ええ。ポチはポケモン……種族名グラエナ、ですから。手品かどうかは元総理が信じられるかどうかの問題ですが……ご希望でしたら何度でもやりましょう。あるいは、元総理自身がやってみますか？」

駄目押しとばかりにこれが特別な事ではないのだと宣言してみせる。事実これはポケモンをゲットしているなら誰でも出来る事だし、誰が持つてきたのか都合よくモンスターボールもあるのだから。

だというのに元総理はその驚愕をより一層強めた。

「……出来るのかね？」

「流石にポチを、私の家族を貸す事は出来ませんが……元総理ご自身が何らかのポケモンをゲットすれば、容易に可能かと」

「むう……」

私がハッキリと言ったのが良かったのか、元総理は一瞬だけ微かに納得を見せ……そしてそれを素早く隠して疑念を表に出してくる。老いたとはいえ、この辺りは流石元政治家といったところか。しかし最低限は信じて貰えたようだ。

そう私が安堵していると、元総理はその疑惑顔のままユウカさんの方を向き……1拍、2拍、2人の視線がぶつかり合う。それはアイコンタクトに見えたが、それにしても剣呑に過ぎた。

「ユウカ、この子は……」

「お祖父様。先に言ってますが、私は何があるかとシロちゃんの

味方ですのぞ」

「ぬ……そうか。——シロちゃん、キミは……何者かね？」  
「？」

何を言っているのだろうか？ 元総理には私が化け物にでも見えているのか？ 私はどこからどう見ても人間、更に今の私は芋芋しさを完全に捨て去り、お嬢様スタイルで決めてみせているのだが……ボケたのか？ いや、元々ボケていたのが露呈したのか？

まあ、いい。ここは真面目に答えておこう。そうだな……

「ポケモンが大好きな人間……では、駄目でしょうか？」

これで充分だろう。これで尚お前は誰だと聞かれたら元総理はボケていると断定し、ユウカさんに全てを放り投げるしかない。その場合は政界への道が閉ざされてしまうので、出来ればマトモであって欲しいところだが。

「はあ……分かったよ、ユウカ。賭けはキミの、キミらの勝ちだ。総理やその近辺には今日中に話しておこう。繋がりのある方々にも、順次説明しておく」

「ふふ、有り難うございます。お祖父様」

どうやらボケていた訳ではなく、私の何かを試したらしい。私には何を試されたのかサツパリなのだが……ユウカさんが分かっている様だし、政界への……それも総理大臣への道が開けたので良しとしよう。

これで、今回の会談は成功。そう見て問題ないはず。私は隣に居るポチをスルリと撫で、嬉しさを発散させる。まだ騒ぐ訳にもいかなからだ。

「全く、誰に似たのやら……」

「お婆様とお母様かと」

「勘弁してくれ……」

話が終わったからか、元総理は何ともアットホームな雰囲気ですユウカさんと笑い合う。ちよつと疎外感。

元総理はそのまま暫し苦笑していたが、やがて席を立った。総理への説明に行ってくれるのだろうか。……これで、他の人を巻き込めるは

ずだ。

「ではユウカ、後を任せる。シロちゃん……聞きたい事も言いたい事も山ほどあるが、今日は休むといい。……では、失礼させて貰うよ」  
私が内心で未来に思いを馳せているうちに、元総理は退室していった。

部屋にはユウカさんとポチと、私だけ。ある種身内だけとなったので私は肩の力を抜き、グダーとソファア―に寄りかかる。流石、高そう  
なだけあって良い心地だ。

「ふふ、お疲れ様」

「グルウ」

「はい。ユウカさんもお疲れ様です。ポチもありがとね」

「グルウ……」

疲れている私をみかねてか、ユウカさんが私の頭を撫でてくれる。多少、いやかなり気恥ずかしいが……これは悪くない。

そんな事を思いつつ私はより一層力を抜き――その調子のまま伊藤家別荘で半日を過ごし、眠りに付く。どうか今日の会談が、ポケモンと人が仲良く出来る第一歩になります様にと願いながら。

## エイプリルフル企画 IF崩れた日常

彼らは、突如として現れた。

始めは果実の異変として。それは全国で点々と発生し、やがて日本中を被い尽くした。……だが、殆んど人間は気にもしない。何かがおかしいとは思いつながらも、他人事だったのだ。

真剣に悩み、困るのは農家の人だけ。

専門家は変異した果実があまりに規格外に過ぎ、結論を中々出せない。そうしているうちに声だけがデカイ無能がこれは病気だ毒があると騒ぎたて。

そして一般人は変異した果実には毒があると思いつき、手も着けなかった。変異した木ごと焼いた人もいる。

なにより……一部の人間が果実の有用性や特異性を指摘しても、誰も彼も耳を貸さなかった。変異した果実を食べた無謀な勇者は嘘つき呼ばわりされ、その有用性を論文にした植物学者はコネしかない無能に潰された。

ああ、誰も彼も思いもしなかった。これが、前兆だなんて。チュートリアルだなんて、考えもしなかったのだ。もし、もし仮に『彼女が』居たならそうでなかっただろうが……そこに『彼女』は居なかった。テレビは若き植物学者を潰した無能を持ち上げ、才を持って余し気味だったアイドルの失墜劇を面白可笑しく取り上げる。

新聞ではオタク系の人間がネットで犯罪を犯したと論点をすり替えてネットやオタクそのものを批難し、その脇に小さく偉大な鹿児島出身の元陸軍少佐と、その弟子だった元総理の死を悼む文言を書く。

世界は回っていた。異物の無い世界は予定通り回り……予定通り壊れる。

怪物……別の世界でポケモンと呼ばれた者達の出現だ。

最初は大した事はなかった。生物が変異したとはいえ、それはごく限られた範囲、限られた種類だけで、日常が変わると思える程ではなかったのだ。そもそも数だつて少なかつた。

……しかし、それは最初の数ヶ月だけ。人々がその存在に慣れよう

とした頃、事件が起こる。

### 通称『針蜂事件』

多数の死傷者を出した、悲しい事件。最初の怪物事件だ。

事が起こったのは寒さの出始めた秋。関東各地の森や林から大型の蜂らしき何かが一斉に出現したのが始まりだ。

最初に犠牲になったのは、この蜂をSNSにあげようと刺激した学生達。その襲撃……いや、惨殺劇を生き残りがSNSに上げたのが始まりだ。

林に近づくと彼ら、飛び出す大きな針蜂、そして——次の瞬間、串刺しにされ、あるいは射出された針に撃ち抜かれる若者達。……世間は、彼ら学生達に非があるとは考えない。むしろ虫ごときが人を殺したと怒りとパニックを生み出した。更に悪い事に被害はそこだけではすまない。関東各地で発生した針蜂達は人も動物も、同じ怪物すら襲って殺していくのだ！ その被害者は最終的に、5万人近くまで増えてしまっていた。

これに対する政府の反応は鈍かった。総理大臣が首脳会議の為に海外にいた事もあるし、責任を取るべき者が責任から逃げ出し、これ幸いと各々が敵対者の足を引っ張った事もある。結局、自衛隊の出勤が行われたのは針蜂出現から丸2日たった後だったのだ。

しかし、そうして出動した自衛隊にも被害が出た。意気揚々と出撃した歩兵は串刺しにされ、敵討ちだとその仲間が小銃を発砲するも中々死なない。事はどんどんと大きくなり、歩兵の火器では殲滅困難との報告が上がる。……が、これに対する政府と民間人の動きは鈍い。政府は責任問題から逃げ出す者と他者の足を引っ張る者、そして自分で行動を起こさない者が過半数を越えてしまっており、マトモに機能していなかったのだ。更に民間人の避難が遅れていたのも問題だった。地震ならまだしも虫ごときで避難する人間は半数以下で、残った大勢の人々の為に、自衛隊はより強力な火器……戦車や対戦車ヘリの投入が出来なかったのだ。

結局、自衛隊は針蜂殲滅まで歩兵の火器で対処するしかなく……多数の殉職者を出すに至る。特にこの戦いに大多数が投入されたレン



ジャー等の精兵部隊の損失はあまりに大きく、既に取り返しがつかない状態になっていた。ある若手の自衛隊員は言う。政府がもつと早く動いてくれれば、民間人が直ぐに避難してくれていれば、と。

しかし世間や民衆というのは勝手だ。そうやって悪条件の中で奮闘した自衛隊に彼らは、罵倒を叩き付けた。煽った者がいたのは明らかだ。しかし、殆んど民衆は本気で罵倒していた。武器を持っているながら蜂の駆除も出来ないのかと、おかげで何人死んだと思っただののだ。……被害が広がったのは、虫ごときと侮って避難しなかったのが原因だというのに。

だが流れは止まらない。世論は流れに流され、煽りに煽られ、ついに自衛隊の解散まで話が進んでしまった。外国の軍隊の受け入れを進める者達すら居たのだ。存続の危機に陥る自衛隊……しかし、そんな自衛隊を救ったのは、皮肉にも新たな怪物だった。

#### 識別名称『青暴龍』

かの暴龍の出現により、再び関東はパニックに陥ったのだ。

記録によればその龍は何の変わりもない池……いや、ドブ沼から現れたらしい。そして、針蜂同様直ぐに人を襲い始めた。違うのは個体数が一匹にも関わらず、針蜂よりも高い破壊力を持っていた事。その巨体で暴れたかと思えば、空に登って光線を撃ち、あるいは凄まじい水流を吐き出す。出現して僅か二時間で人工密集地にあるビル街が壊滅し、少なくとも数千人が犠牲となった。

これには虫ごときと侮った人間も我先にと逃げ出し、政府もある程度まとまって動いた。結果、暴龍出現から3時間後に自衛隊の出動、及び武器の無制限使用が許可される。……しかし、マニュアル通りの事にこだわる政府と民間の動きは遅すぎたのだろう。既に被害は甚大な物に拡大。後に記録された事によれば針蜂事件と同数の死傷者が出ていたらしい。

だが、そんな事は現場には関係ない。暴龍と対峙した自衛隊に、死んだ者を気にかける余裕などなかった。

何せ、邂逅一発目に放たれた光線により対戦ヘリが2機撃墜され、一拍置かれて放たれた水流で戦車3台が行動不能に陥ったのだ。

……余裕を持って掛かれる相手ではない。死力を尽くした戦いだつた。

この戦いそのものは手厚い近接航空支援があつた事もあつて一時間以内に決着する。いかに暴龍といえど航空攻撃と合わせて行われた誘導弾と戦車砲による集中攻撃には耐えれなかつたのだ。

しかし、かの龍もただやられた訳ではない。攻撃を避け、反撃を撃ち込んでくる事も多く……最終的に対戦ヘリ4機、戦車10台、分散展開していた歩兵100名が犠牲となつた。

だが、我々は勝つた。そう思つた数日後……事件は更に起きる。暴龍に恐れをなし、自衛隊の戦力強化を打ち出した矢先の事だ。

#### 『土浦幽霊事件』

まるでバラエティーの企画であるかのようなそれは、どこまでも現実だつた。

死傷者数不明。行方不明者約2万人。意識不明者3万人。

誰にも気づかれずに被害をだし、意識不明者に関しては医者も匙を投げるこの事態は、数ヶ月の混乱の末オカルト的なモノだと仮定される。行方不明者や意識不明者は神隠しにあつたか、幽霊に呪い殺されたのだと。

以前なら鼻で笑う事件。しかし、人々は既に常識というものがクソの役にも立たない事を察し始めていた。

そして、悪い事は続く。

#### 『地下鉄寸断事件』

謎の怪物が掘つた穴により地下鉄が突如として寸断、あるいは地盤そのものが建物ごと崩落し、関東各地で多数の民間人が生き埋めとなつた事件。

死傷者数20万人。行方不明30万人。大災害だ。

#### 『小規模地震多発事象』

穴を掘つた謎の怪物を含める複数の怪物達が時折おこす小規模な地震。これは日常的に起こり続けており、被害は増える一方。

#### 『原発爆破事件』

異常の中でも稼働していた原発が突如として爆発。辺りに放射性

物質がバラ蒔かれた事件だ。回収された記録映像には新手の怪物が自爆する光景が収められており、事故ではなく事件となった。

被害者数、不明。

復旧の見込み、無し。

またこの事件を切欠にアメリカ第7艦隊はその殆んどがハワイまで後退。事実上のアメリカ軍の撤退が始まった。

『伊豆半島消滅事件』

それはこの異変の中でも極め付きといえる異常事件だ。ある日突然、何の前触れもなく伊豆半島が消滅した。そこにいた人々ごと消滅したのだ。行方不明者は数えきれず、推測としての数字があるのみ。直前に未確認の人形怪物が現れ、何かを伝えたときれるが詳細は不明。確かなのは伊豆半島が消滅したということだけだ。

またこの事件がトドメだったのか、アメリカ軍はアジア方面から完全撤退。日米首脳による電話会談が行われ……その結果、関東全域に対する核攻撃が決定された。脅威が広がる前に対処する必要があると。

そこにとどの様な取引があったのか、あるいはアメリカの独断横行なのかは分からない。分かるのは……日本は3度目の核攻撃を受けるという事のみ。回避策は、無い。

——関東全域に対する核攻撃まであと3日。この日、陸上自衛隊第3臨時戦闘群は避難民の護衛を行っていた。

彼らはいつどこから何が出てくるか分からない状況で、パニック状態の避難民を関東から脱出させるのが任務だ。危険極まりなく高度で過酷な任務。しかし、それに従事している正規の自衛隊員は半数以下で、殆んどが入ったばかりの新兵ばかり。最低限小銃が撃てる程度に訓練された、敬礼すら覚束ない連中だ。

迷彩服に慣れてないのが明らかに分かる彼らのそれは、末期戦のソレを思い起こさせるが……事実そうだった。関東にいた自衛隊の戦力の損耗は絶望的で、他の場所から人を回して貰ってもなお足りない。故に半ば徴兵する形で人員を増やし、それを適当な名前を当てはめて使っているのが、この陸上自衛隊第3臨時戦闘群だった。

そして、その戦闘群も今や消滅の危機にある。

「第3小隊どうした!? 第3小隊! 返事しろ! おい!!」

「青暴龍の群れ、更に接近! 第1戦車小隊、壊滅!」

「上に支援要請だ! このままでは避難民ごと全滅するぞ!」

「待ち伏せしていた第5小隊との交信途絶!」

「隊長! 第7小隊から援護要請!」

「後続の第4臨時戦闘団との通信、未だに回復しません!」

「第2戦車小隊前進を開始せよ! 残存する第1戦車小隊車両との合

流を目指せ!」

「針蜂と交戦中の第2臨時戦闘団より通信! 我戦闘能力を喪失、援

護は……不能!」

「こちらに向かっていた第5戦闘団より連絡! 岩サイの群れと遭遇

し交戦中との事です!」

「せ、青暴龍、更に接近! 間もなくここも光線の射程に入ります!」

「クソツ、状況は最悪だつ……!」

怒号と、悲鳴。第3臨時戦闘群の作戦指揮所は混乱のルツボにあった。辛うじて統制が取れているのは……青暴龍の群れ相手に逃げ場なんて思い付かないからか。少なくとも、誰も彼も絶望に顔を歪めている。

この絶望に、予兆なんてなかった。充分に警戒しながら避難民を護衛し、一団が大きな池を通り過ぎ始めたとき、彼ら青暴龍は池の水面を割って現れ、一団向けて一斉に襲い掛かって来たのだ。

先ず始めに近くにいた民間人が吹き飛び、続いて彼らを護衛していた新兵が消し飛ぶ。それからは被害を出しながら避難民を落ち着け、統率し、逃がし、そして……地獄の遅滞戦闘が始まったのだ。

その結果は……指揮所を見るに明らかだろう。避難民は逃せたが、代わりに自分達が消し飛ぶ事になった。誰に恨み言を言えばいいのか、何が悪かったのか、それすら定かではなく、彼らはゆっくりと絶望に身を浸していく。

しかし……そんな猶予すら許されず、絶望と相対する事になった者達もいる。今、前線で戦っている者達だ。

「う、うわあああ!? あ、足があああ!」

「ジョージがやられた!」

「こつちも駄目だ! 助けてくれえ!」

「チクシヨウ! 奴らアサルトライフルを豆鉄砲みたいに!」

「駄目だ、勝てる訳がない……!」

「後退! 後退しろ!」

「慌てるな! 落ち着いて対応しろ!」

「隊長! 暴龍が光線を——」

「なっ——!」

「た、隊長がやられた!」

「そんな! 俺達はどうれば……うわあああ!? こつちに来るなあ!」

「バカ野郎! 騒ぐんじや——ギイヤアアア!」

「ふざけるな! ふざけるなあああ!」

怒声と悲鳴、怒りと絶望。思うがままに剥き出しのまま吐き出されるそれらは、間違いなく彼らの本音だ。何故、どうして、こんな事に、こんな事を、何故自分が。

困惑する者は弾け飛び、絶望した者は瓦礫に潰され、怒りを持った者は……血に濡れた武器を手取る。

「頭の中でギャンギャン煩いんだよ……! この、ヘビ畜生どもがアアア!」

この騒動が始まってから無秩序に情報を頭に送り込まれ続け、また自分を肯定出来ない男は発狂していた。もし彼に夢があれば、理解者が居れば、仲間が居れば……それはもう、叶わないifだ。

そして、男は手に取ったRPG-7を青暴龍に向けて構える。真つ直ぐこちらに向かって来る傷だらけの暴龍を睨み、待ち、両者がぶつかりあうその寸前、引き金が引かれる。

一瞬。爆発音——

青暴龍の口内に叩き込まれたRPG-7はその威力をいかになく発揮し、暴龍を内側から粉碎してみせた。そしてその近くにいた男も。

ああ、男が最後に見た光景はなんだっただろう？ 最早それを知る者は誰もいない。

暴龍達は自らの同族の亡骸を気にする事もなく、当然それを討ち取った戦士の生死も気にせず、怒りの表情のままに進撃を開始する。彼らの目的は何なのか、知る者は……『彼女』は、ここにはいない。

——この日、陸上自衛隊第3臨時戦闘群は文字通り全滅した。青暴龍に蹂躪されたのだ。更に第2、第4臨時戦闘群も壊滅しその損害から立て直しは絶望視された。

そして、彼らが辛うじて作戦を成功させた3日後。アメリカ主導の関東全域に対する全力核攻撃が実行された。大陸からは大陸間弾道ミサイルが放たれ、近海に潜んでいた潜水艦からはトライデントミサイルが発射される……そのどれもに核弾頭を乗せて、怪物の楽園となった関東地方へと向かい——その全てが、突如として現れた未確認生物により迎撃された。

『やはり、人間は愚かな存在でしかなかった。甘い幻影に惑わされるのも終わりだ。……これより始まるは戦争。人とポケモン、お互い生存を賭けた戦いだ！』

そう語った未確認生物により、その日から『ポケモン』との戦争が始まった。避けられたはずのそれはごく自然に受け入れられ、お互いの生存権を賭けた戦いへと発展していく。

——人類は、選択を誤った。滅亡のカウントダウンが……始まったのだ。

## 第15話 加速する前進

伊藤家に着き、元総理を説得した翌日。私は妙に不快な気分朝を……正確には昼過ぎを迎えていた。

「んー？ んー……？」

何となく胸の辺りに何か引つ掛かった様な、微妙な感覚が中々取れない。もしかすると忘れただけで嫌な夢を見ていたのか？ それこそ、人とポケモンが争う夢とかを。

「……まあ、いいか」

何にせよ重要な事ではないだろう。そう判断した私は身支度を始め、慣れない環境ながら手早く終わらせる。私が何をどうしようが、どうせ後でユウさんに駄目だしされるのは変わらないのだから、アレコレやっても無駄だろうと。

「おはよう、シロちゃん。ふふっ、ようやくのお目覚めね？」

「おはようございます。ユウカさん。はい、やっぱり朝は起きられないので……」

ようやく身だしなみを整えて一通りの準備が終わった頃、ユウカさんが私の借りている部屋に顔を出す。お互い簡単に挨拶した後、ユウカさんは私を上から下へ、下から上へと見て、一つ頷き。

「うん、駄目ね」

「駄目、ですか？」

「駄目よ。全然駄目。さあ、椅子に座って。やってあげるから」

「……はい」

私としては別に髪がボサボサでも気にならないのだが、アイドル兼女優であるユウカさんからすればどうしても気になってしまいうらしい。リヴァイアサン号の中でも毎日繰り返された事が、今日ここでも繰り返される事になった。

文字通り髪の手先から爪の手先まで、徹底的な身だしなみのチェックと修正が行われる。正直場所によっては流石に恥ずかしかったり、くすぐったかったりするのだが……仕方ないだろう。私にフアッションセンスなんて欠片も無いのだし。

「……むう、まあ。こんなところかしら」

「有り難うございます……」

結局ユウカさんが満足したのはタップリ10分、あるいはそれ以上が経った後だった。その頃には私はすっかり気力を失ってなすがままになっていたが、その犠牲は無駄ではないのだろう。

自覚できる程芋芋しかった身だしなみは、誰がどう見ても良家のお嬢様だと間違う程の完璧なお嬢様スタイルへと変貌。その変わりぶりや凄まじく、ナルシストのナの字も無い私が危うく自身の容姿を自画自賛しかける程だ。流石はユウカさんか。

「さて、行きましようか」

「？ えっと、どこにですか？」

「お祖父様のところよ。先程帰ってきたの。シロちゃんに話があるんですって」

「なるほど。分かりました」

恐らく何らかの結果が出たのだろう。そう察した私はユウカさんと共に元総理の元へ向かった。ポチの入ったモンスタールボールを撫でながら、できれば吉報が聞きたいと思いつつ。

そして。

「ああ、来たね。どうかな、昨日はよく眠れたかね？」

「えっと、はい」

「そうか。それはなによりだ」

昨日と同じ部屋で好好爺といった雰囲気のエリートに迎えられ、私は軽く挨拶を済ませて席に付く。ユウカさんも私の隣に腰をおろし、一拍。元総理は私達に軽く視線を投げた後、その雰囲気を殆んど崩さないまま話を始めた。

「さて、例の……ポケモンの話だが。結論から言えば力不足だった」

「そう、ですか……」

そう言って軽く頭を下げる元総理を見て落胆しつつ、それも仕方ない事だろうと納得もする。何せポケモンは既存の常識全てが通じない話だ。簡単に通るとは思えないし、ましてや相手は頭が硬く自己保身を優先する事がデフォオの政治家。それが普通だろう。むしろ元総



理が柔軟過ぎたぐらいだ。

「やはり私の言葉だけでは信じ難いらしくてな。懸念こそ共有出来たが、肝心なところはまるで詰められなかった。……自身の政治生命を賭ける程の事態だとは思えんらしい」

「いえ、仕方ないと思います」

「……そうだな」

私の落胆混じりの同意に、なぜか元総理は疑問がにじみ出る声で答えた。まるで私の同意は意外だと言わんばかりに。

「いったい何が意外なのか？ 私がそれを考えようとする前に、今まで黙っていたユウカさんがグイッと前面に出る。」

「とはいえ、ここで終わる訳にはいきません。そうですね？ お祖父様」

「その通りだ。この問題と情報は早急に共有する必要がある。出来れば、国全体で。……総理やその近辺。私の影響下にあった者達には資料を渡して来た。一晩明けた今日ならば、ある程度整理出来ているはずだ。平時ではなく、有事なのだ」と

「あら……では？」

「うむ。王手を打とうと思う。いささか性急に感じなくはないが……時間を掛ければ掛ける程後手に回り、それが甚大な損失、あるいは被害を生む可能性が出て来たからな。やれば出来るのにギリギリまでやらないのはこの国の悪いクセだが……今回ばかりは、それを繰り返す訳にはいかん」

「……ポケモン災害、ですか」

「ああ。昨日ユウカから聞かされたときはまさかと思ったが……一晩明ければ可能性ばかりが大きくなってな。年甲斐もなく焦る事にした。楽隠居を気取るのは昨日までだ」

高速のジャブ連打に割り込めずにいると、唐突に2人の視線がこちらに向けられる。

ポチの入ったボールを握りしめ、一瞬ビクリと小さくなった私は悪くない。だって突然に過ぎたのだ。ポケモン災害とかいう、聞き慣れない単語にクエスチョンマークを浮かべていたときなので尚更。

「シロちゃん、お願い出来る？」

「? え、えつと……」

「ああ、ごめんなさいね。目的語が抜けてたわ。……総理の説得よ」  
「時刻は今日の夜を予定している。短時間だが時間を作ってもらった。なに、難しい事ではない。彼にもアレを見せればよいのだ。そうすれば嫌でも理解できる。国家の危機であり、同時にチャンスなのだとね」

待て、待って。ちよつと待って。なぜ私が現職総理の説得に? いや、話だけでは信じれないと言つてたな……つまり、これはあれか。ポチをモンスターボールから出すことで、証拠の提出をお願いしたいと。そういう事か。

「はい。大丈夫です。やれます」

それならお安い御用だ。やる事もちよつとボールを投げるだけ。それでポケモンとの未来が手に入るなら幾らでもやってやる。むしろ昨日私がついて行かなかったのが悪いまであるだろう。

「うむ、助かる。これで未来の安全は確保されるだろう。……ではユウカ、時間まで宜しく頼む。私は私で動く事にするよ。野党はどうにもならんが、最低でも与党は与党で一致団結しなければならぬ。今まで傍観していたが……状況が状況だからな。いつまでも分裂させておく訳にはいかなかった」

「ええ、分かりました。任せて下さい」

「ああ。シロちゃん、時間までユウカとゆっくりしていてくれ……では、失礼するよ」

そう言つて元総理は席を立ち、部屋を出ていく。恐らく何らかの準備をに行ったのだろう。それらしい事をユウカさんと話していたし、間違いないはず。

しかし、総理の説得か。だいたいのところは元総理が昨日終わらせているだろうから、私がするのは本当に最後の一押しなのだろうが……不安が脳裏をかすめる。もし失敗すれば、もし詰めきれなければ、とんでもなくマズイ未来に繋がる気がしたのだ。

「……シロちゃん?」

湧き出るのは朝感じた嫌な感覚。視界を走るのは火の景色。……不快だ。そして、この感覚は些細な事で現実になりうる。そんな気がする。チリチリ、チリチリ、頭が騒ぐ。

手先はボールを撫でる。一つ、二つ、フワリ、と。頭にぬくもり。見上げればユウカさんが私を撫でていた。優しく、ゆっくりと。

「大丈夫よ。シロちゃんだけじゃない。私も行くし、ポチちゃんもいるでしょう?」

「そう、ですね……」

カタリ、と。小さくボールが揺れる。それはどこか呆れているようにでいて、しかし励ましてくれていた。本当に、彼女は私の事をよく見ている。

ああ……不安は、ある。もし失敗すればという不安は尽きない。しかし不快さは無く、未来も見えた。むしろその点に関しては楽しみですらある。何せ今度の相手は現役の総理大臣だ。その影響力は元総理のそれを上回り、説得出来たときの前進具合は今までの比ではない。それは正しく王手と呼ぶに相応しい前進になるはずだ。

「……ええ、楽しみです」

「ふふ、その意気よ」

ああ、楽しみだ。今回の前進が叶えば、日本各地でポケモンバトルが見れる日も具体的になるだろう。そうなれば私もポケモントレーナーとして戦えるかも知れない。ポチをパートナーに、様々な戦いを……!

そんな風に夢想する事……どれくらいだったか? ふとユウカさんがスマホに目を落としている事に気づく。その表情は、複雑だ。喜びが強くはあるが、悔しさも見れる。……何事だ?

「ユウカさん?」

「——いえ、そうね。……シロちゃん、嬉しい報告よ。ポケモンが見つかったわ。ポチちゃんに続く、2匹目ね」

「……………!?!」

ポケモンが見つかった。2匹目。

その情報が正しく脳ミソに伝わるまで数秒を必要とした。何せ、何

せ2匹目のポケモンだ！ この事実が意味するところは複数で、大きい。しかし一言でいうのなら……ポケモンが来た、そういう事だ。

私はユウカさんが見せて来たスマホの画面を見る。そこに映っているのは掲示板と、そこに貼られた写真が複数枚。写真はどれも画質とブレが酷いが、どこかの住宅地で撮られた物のように見えた。そしてそれらに共通して写る、一匹の鳥らしきナニカ……いや、あれは――ポツポだ。

「ユウカさん、このポツポは……？」

「久里浜付近に展開させたシロ民からの一報よ。目撃場所は久里浜内。正確に言えばここから少し北側といったところで目撃したらしいわ。写真を撮った後直ぐ様捕獲に向けて動くも、かなり素早く逃げられたらしいわね」

「なる、ほど……つまり、そのポツポはまだ野生のまま、ですか」

「ええ、そうらしいわ。現時点で30人近いシロ民が捕獲に動くも、逃げられ続けているみたい。ボールは当たらず、捕獲用にと用意された網は軽々破られ、飛び掛ければ砂をぶつけられ手酷く蹴散らされる……散々ね」

「……………」

掲示板に書き込まれているのだろうユウカさんの声を聞きつつ、私はすんなりとボールに入ったポチは特殊な例だったのだろうと思う。

ゲームならば楽々ゲットできるポツポも、現実になれば大捕物に発展してもなお捕獲出来ないのだ。これはシロ民が無能な訳ではなく、ポツポが強過ぎるから。ましてや彼らは手持ち無し。むしろ健闘しているぐらいだろう。とはいえ、このまま放っておくには惜しい話だ……ここは私以外の誰かにゲットして貰い、ポケモントレーナー候補を増やしておきたいのだが。

「シロちゃん。彼らシロ民に何か助言はある？」

「助言、ですか……」

普通に考えるのなら体力を削って状態異常にするのがベターだ。しかし件のポツポの体力を削ろうにもバトルで削れるポケモンがない。グラエナであるポチではオーバークイルだろうし、生身の人間が

ポケモンの体力を削れるとは思えないからだ。ならば状態異常だといきたいがこれも同じく駄目。バトル以上にやれるポケモンがいない。八方塞がりだ。

……いや、待て。なぜ私はポチをゲット出来たんだ？ ポチが特殊だった。なら、何が特殊だった……？

「……友情ゲット」

「友情、ゲット？」

「はい。友情ゲットです。戦う事ではなく、別のやり方でこちらを認めて貰う事でボールに入って貰う事です」

「……なるほど。シロちゃんがポチちゃん相手にやったのは、それね？」

「はい。……ただ、野生のポップとどう友情を築けば良いのかは、サツパリですが」

「いえ、充分よ。後は彼らが上手くやるでしょう」

そう言うとユウカさんは凄まじい速度でスマホを操作していく。恐らくシロ民に友情ゲットすべしと書き込んでいるのだろうが……私はそれに何も言えないし、それこそ祈る事しか出来なさそうだ。これ以上の助言は思い付かず、ポチと共に参戦する訳にもいかないのだから。それに、夜には総理の説得も待っている。……ここは、役割分担か。

「さ、て……シロちゃん？」

「な、なんですか……？ ユウカさん？」

シロ民に伝達し終わったのか、スマホをしまったユウカさんが私の肩を押さえる。その顔は満面の笑みであったが……しかし、嫌な迫力があつた。まさか。

「総理と会うのだから、おめかしは……必要よね？」

「そ、それは……」

「シロちゃん？」

「必要、です」

負けた。3秒と持たなかった。即落ちだった。

だって、仕方ないだろう？ おめかしが必要なのは事実なのだ。

……この格好でもお嬢様してるし、充分な気もするのだが。

「駄目よ。それは自宅でくつろぐ為の物で、出掛けるには不向き。事今回の様な話なら失礼にもなるわ」

「そう、なんですか……？」

「ええ、そうよ」

そうなのかあー

私は内心ため息を吐きながらそう納得する。ユウカさんの言う事だし、更にああもキツパリ言い切ったのだ。間違いないのだろう。

とはいえ慣れない物は慣れないので、必要以上のおめかしは断ろう。そう思いながら私はユウカさんに背を押されて部屋を後にし、別の部屋に向かった。

——化粧を勧めるユウカさんに断固として抵抗するまで、あと数分。

掲示板 やせいのポケモンがあらわれた！

【久里浜】ポケモンをゲットするスレpart2【大捕物】

333：名無しの犬

こちらチームアルファ2！ ポツポの捕獲に失敗、負傷者……2名

！ 撤退の許可を!!

334：名無しの犬

>>>333

こちら本部。撤退は許可出来ない。捕獲作戦を続行せよ。

335：名無しの犬

>>>334

だろうな。治療費上乘せだ。

337：名無しの犬

こ、こちらチームベータ3。二重にした捕獲用のネットを突き破られた！ 作戦続行は困難。撤退の許可を！

338：名無しの犬

>>>337

よく聞こえないぞ。繰り返せ。

340：名無しの犬

>>>338

撤退の許可を!!

341：名無しの犬

>>>340

クソツ、通信妨害か……！

342：名無しの犬

ソースとケチャップ、どっち派だ？

344：名無しの犬

本部。どうやらポツポはかなり素早く、手強いようです。恐らく『でんこうせっか』と『すなかけ』を修得しているものと思われま

345：名無しの犬

>>>342

明日考えよう。

346：名無しの犬

>>344

今更そんな情報がなんだと言うんだ！ 走って追いかける！

348：名無しの犬

>>346

(・ω・)

350：名無しの犬

こちらチームアルファ1。拠点までの後退に成功した。

351：名無しの犬

>>350

よし。アルファ1、5分後に再出撃だ。

352：名無しの犬

>>351

そんな！

353：名無しの犬

>>351

どうすればいいんだ！

354：名無しの犬

>>353

あきらめろ。

355：名無しの犬

>>354

了解！

357：名無しの犬

>>353

俺がなんとかしてやる！

358：名無しの犬

>>357

お前は俺の英雄だ。

359：名無しの犬



俺はギャンブルの天才だぜえ？

361：名無しの犬

>>359

そういうことにしといてやる！

363：名無しの犬

分かったぞ。ポッポの弱点は持久力の無さだ。奴のスタミナを消費させ続ければ、いずれは接近出来る！

総員！ 装備を放棄して、ポッポを追い掛けるんだ！

364：名無しの犬

>>363

ホントかよ!?

365：名無しの犬

>>363

確かなのか？

367：名無しの犬

>>364

>>365

そういう噂だ。

368：名無しの犬

>>367

俺もそう思う。

369：名無しの犬

クソツ、状況は最悪だ……！

370：名無しの犬

よし。敵の潜水艦を発見！

371：名無しの犬

>>370

駄目だ！

372：名無しの犬

>>370

駄目だ！



390：名無しの犬

>>388

してない。俺のせいで民度が低いとか思われたくないし。

391：名無しの犬

>>388

する訳ない。犯罪者どもじゃあるまいし……

393：名無しの犬

……もしながらスマホしてるシロ民が居たら？

395：名無しの犬

>>393

ポチネキに突き出す。

396：名無しの犬

>>393

SATUMAおじじに通報。

397：名無しの犬

>>393

シロ民総出でリンチ。

399：名無しの犬

うん、気を付けるわ

400：名無しの犬

>>399

お前、まさか……？

402：名無しの犬

ところでさ、お前らアイドルネキから友情ゲットしろって言われなかった？　なんでまだ追い掛けとるん？

404：名無しの犬

>>402

だってポップ早すぎて友情どころじゃないし。先ずは足止めしないとパンの耳を投げる事すら出来ん。

405：名無しの犬

>>404

それな。

でもこのまま追い掛けても負傷者が増えるばかりでどうにもならん気がする。ポッポの機嫌もあるだろうし……ここは一度撤退も考えるべきでは？

407：名無しの犬

>>405

いやいや、ここまで来て撤退出来るか？俺は無理。

鳥一匹捕まえないとか、シロちゃんは勿論ユウカ様にも軽蔑される……いや、それはそれでいいか。

409：名無しの犬

>>407

ドM犬兵怖いなあ。戸締まりストIV。

けど実際撤退するかどうかは悩ましいよな。今の負傷者何人だっけ？

411：名無しの犬

>>409

軽症が20人くらいだな。重傷者は無し。殆んどがすなかけでムスカして蹴散らされた奴らで、何人かがでんこうせっか食らってゲロった。

412：名無しの犬

>>411

うーん、難しいよな。撤退するには被害が無さすぎるけど、ここで退いた方が賢明な気がするという。

413：名無しの犬

でんこうせっか痛かった。あばら骨折れたかと思った。

でもあれたぶん手加減してた気がする……

416：名無しの犬

>>413

人間には215本も骨があるんだぞ？今更一本や二本折れたとして、それがなんだと言うんだ！

418：名無しの犬

>>416

ヒデエや……

420：名無しの犬

ポッポ発見！

421：名無しの犬

ポッポめえ、とっ捕まえてやる！

422：名無しの犬

バイノハヤサデー

423：名無しの犬

突撃イイイ！

424：名無しの犬

バンザアアアイ！

425：名無しの犬

ypaaaaaaa!

426：名無しの犬

着剣せよ！

427：名無しの犬

着☆剣！

428：名無しの犬

あれ？ ポッポを見失ってしまいました。

429：名無しの犬

馬鹿者お！ 貴様あ！ 臆病風にふかれたかあ！

430：名無しの犬

申し訳ありません。違う場所を、搜索しましょうよ。

431：名無しの犬

いや、突撃だ。素手でもネットでも構わん。必ず捕獲するのだ。

432：名無しの犬

(^q^) リョウカイ

433：名無しの犬

(^q^) ジュンビハイイカ

434：名無しの犬

( ^ q ^ ) オレニツツケ

4 3 5 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) カレニツツケ

4 3 6 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) ワー

4 3 7 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) モウコレイジヨウソウサクデキナイ

4 3 8 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) テッターイ

4 3 9 : 名無しの犬

警告する。お前は戦いから逃げようとしている。逃亡者はポチネ  
キに突き出される。

4 4 0 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) ……………

4 4 1 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) モンスターボールヲナゲロー

4 4 2 : 名無しの犬

( ^ q ^ ) ワー

4 4 5 : 名無しの犬

こ、こちらチームアルファ1！ 本部、本部応答願う！ 我々アル  
ファ1はコラツタと遭遇！ 繰り返す！ アルファ1はコラツタと  
遭遇した！

『荒い画像』

4 4 7 : 名無しの犬

>>>4 4 5

なんだと!? アルファ1、詳細に報告せよ！

4 4 8 : 名無しの犬

久里浜内の裏路地で、マズイ逃げるぞ！ アルファ1はコラツタ追  
跡に移る！

4 4 9 : 名無しの犬

>>>4 4 8

了解したアルファ1。健闘を祈る。

450：名無しの犬

>>448

本部よりアルファ1へ。コラツタは狂暴な側面もある。接近時は充分に注意せよ。

452：名無しの犬

しかしコラツタまで来たか……もうノンストップって感じだな。ボサツとしてたらおいてかれそうだ。

454：名無しの犬

>>452

実際そうなんだろうよ。この激動の時代に入ろうかという瞬間、シロ民だったのは幸運だった。この流れならブラック企業無理やり退職出来そうだし、ホントシロちゃん様々だわ。

可愛いってか、神々しかったし。もうね、一生付いて行くわ。

456：名無しの犬

>>454

ワカル。今まさに時代が変わろうとしてるのマジワカル。あれだよ、黒船からの明治維新みたいな激動を感じる。それでシロ民な俺らは圧倒的なアドバンテージ持った転生者みたいな、そんな感じスツゴいする。

……てか、その口振りだとシロちゃんに会ったの？ え、会ったの？ くじ引き勝者なの？

459：名無しの犬

>>456

会った。ポチネキゲットシーンも見た。時代の変革を肌で感じました。

え？ シロちゃん？ もうね、マジ神々しい。ユウカ様もテレビ以上だったけど、シロちゃんはその更に上。アルビノだからか肌の露出少なめな清楚な格好してたけど、もう清楚通り越して神々しいもん。なにあれ、よく分かんないけどオーラ？ うん、オーラが違う。顔は可愛いし、ちっちゃくて可愛いし、オーラ神々しいし、なんか全

体的に儂い。うん、消えそうなくらい儂くて神々しいの。よく分かんないけどスツゴい。神秘的？ うん神秘的だった。で、神秘的過ぎて声かけるの躊躇して最後まで喋れなかった。いや、だって声掛けたら消えそうなんだもんよ……

460：名無しの犬

>>459

ok。分かったから取り敢えず落ち着け。

461：名無しの犬

>>459

長水草。しかも語彙力微妙に低下してるし。

そんなに凄かったん？

463：名無しの犬

>>460

無理。思い出すだけでテンション上がる。

>>461

凄いかいいうレベルじゃない。言葉で表現するの難しいけど、可愛いくて神々しくて儂くて神秘的なんだよ！

クソツ、語彙力下がり過ぎて言葉が見つからねえ！ 取り敢えずお前らも会えば分かる！ 会え！ いや、やっぱり会うな！ 人に会ったら消えそう！

465：名無しの犬

>>463

だいたい分かった。あとキレるな落ち着け。

そしてどつちだよw

467：名無しの犬

>>465

キレてねえよ！ テンション上がってるだけ！

あとどつちかは俺も分かんない！

でもポツポコラツタ捕まえた奴はシロちゃんと会えると思うから、早く捕まえて俺と同じ思いして欲しい。この感覚は会わないと分からない。



468：名無しの犬

>>467

なるほどなあ。

確かにポケモン捕まえたなら会えるわな。合法的に。

……しかし、アルファ1はどうした？　くたばったか？

469：名無しの犬

それとポチネキがですね……

470：名無しの犬

こちらアルファ1。コラッタを行き止まりまで追い詰めた。これより、餌付け作戦を開始する。

471：名無しの犬

>>470

了解したアルファ1。健闘を祈る。

472：名無しの犬

>>470

注意しろアルファ1。追い詰められたコラッタに余裕は無く、更にその前歯はかなり強力だ。

下手すると食い千切られるぞ！

473：名無しの犬

俺はこれでも誇り高きエリートシロ民！　その程度の覚悟は出来てこの任務についておるのだ！　シロちゃんの為なら！　手足の2本や3本、簡単にくれてやるわアアア！

474：名無しの犬

良いぞエリートシロ民！

そして食らえコラッタ！　総額8万円！　職人の手によって丁寧に熟成された超高級チーズだ！　一口一口がお前を魅了するのだアアア！

475：名無しの犬

食って欲しいのだアアア！

476：名無しの犬

お、おお、食ったぞ！

あつ、ぶね。あと少しで勢いのまま腕に噛み付かれてたぞ？

478：名無しの犬

良いぞエリートシロ民！

我々はお前のような勇氣ある者に＼（・ω・＼）敬意を表す（／

ω・＼／（・ω・＼）敬意を表す（／・ω・＼／

480：名無しの犬

満足してる場合かあー！

早くボールでゲットするのだ！

481：名無しの犬

エリートシロ民がボールを取り出して満足げなコラツタに……ナ

ニイー!?

モンスターボールにイイイ！ ああ、あんなボールに！ ホンの直

径5センチ程の手のひらサイズのボールの中に！ 自分の身体を凝

縮して入って行ったアアア!?

482：名無しの犬

なんというI☆K I☆M O☆N O！

483：名無しの犬

ゲット出来たのか!?

484：名無しの犬

どうなんだ!?

485：名無しの犬

コラツタゲットだぜ！

『コラツタを肩に乗せている荒い写真』

486：名無しの犬

良し！

487：名無しの犬

やったぜ！

488：名無しの犬

>>485

勲章ものだ！

489：名無しの犬

>>485

お見事！

490：名無しの犬

日本の勝利である。

大東亜戦争の終わりも近い。

491：名無しの犬

バンザアアアイ！

492：名無しの犬

流石は伊藤社長が父親の伊藤元総理へ晩酌時のつまみ用にと送つたのを、横からアイドルネキが搔つ払って転用しただけはある。余裕だぜ。

494：名無しの犬

>>492

え、ナニソレ聞いてないんだけど。

496：名無しの犬

>>494

そりや言つてないからな。

498：名無しの犬

2人目のポケモントレーナーの誕生か……裏山しす。

500：名無しの犬

これでコラツタゲットニキはシロちゃんに報告出来るな！

裏山しいぞ！

502：名無しの犬

そ、そうか。これで俺はもう一度シロちゃんに会えるのか……いや、あわよくばそのままバトルとかしちやったり？ ポケモン談義とかで会話もワンチャン？ ヤツベ。マジヤツベ。取り敢えずチーズ買ってコラツタにやりつつ、ポケモン知識入れ直すわ。

504：名無しの犬

>>502

逝てら。

さて、俺らはさっさとポツポ捕まえるぞオラア！

3人目の栄光は俺のモンだアアア!

506：名無しの犬

>>504

バカ言え俺だろ常考。

508：名無しの犬

>>504

>>506

お前ら喧嘩すんなよ……俺に決まってるだろ?

509：名無しの犬

>>508

貴様あああ!

510：名無しの犬

ポツポ発見!

512：名無しの犬

こちら小隊長から大隊へ、次の地点へ支援願います。

目標東経105、北緯20、地点口の2。繰り返す、地点口の2。

513：名無しの犬

>>512

こちら大隊から小隊長へ。支援要請、却下されました☆

514：名無しの犬

まーじかよお。誰もこんなこと言ってなかったぜ。驚きだ。

515：名無しの犬

よし! 海軍の支援を要請する!

516：名無しの犬

>>515

駄目だ!

517：名無しの犬

>>515

駄目だ!

518：名無しの犬

>>515

駄目だ！

.....  
.....  
.....

◇

「そっか、2人目のポケモントレーナーが……」

まもなく総理との会談に出発しようという頃、私はユウカさんの部屋でネタまみれの掲示板を流し見していた。

そうして目につくのは2人目のポケモントレーナー……ビルに居たシロ民の一人だ。コラツタとグラエナでは勝負になるか微妙だが、ポケモンバトルをしようと思えば出来る状況にはなった。

そして、それはこの後の私の努力次第で加速するだろう。いや、そういうえば……私は顔を出したユウカさんを見てふと疑問が出来た。聞いてみよう。

「シロちゃん準備は良い？」

「はい。……ユウカさん」

「なに？ 悪いけれど、それ以上の妥協はしないわよ？」

「いえ、そうではなく」

夜だから日光は気にしないで良いだろうと、今の私はヒラヒラピラピラのお嬢様スタイルMK-11だ。華麗さやAPP値は上がっていると認めざるを得ないが、しかし、足元がなくてなく心もとなく、すんごいスースーする。今すぐ芋ジャージに戻りたいし、もう勘弁して欲しかったが……化粧しないならこれが妥協点らしいので、もう諦めた。慣れはしないが。

「ユウカさんは、ゲットするならどんなポケモンが良いですか？」

「ん、そうねえ……」

私が無気なく聞いた疑問に、ユウカさんは暫し黙り込んだ後。いつも通りの力強い声で答えてくる。

「強い子が良いわね。そうになると、ドラゴンタイプかしら？」

「それは……似合いそうです」

「そう?」

「はい」

脳裏に金髪の女性チャンピオンがチラついたが、脇に置いておく。

……まあ、それはそれで問題無さそうだが。

「んー……カントーでドラゴンなら、ミニリュウかな?」

「ミニリュウ。ああ、あの龍みたいな子ね。進化するとハクリュー、カイリュウになるのだったかしら?」

「はい。種族値も高いと聞きますし、強いドラゴンタイプかと。捕まえられるかどうかは……かなりシビアですが」

「たしか生息数が少ないのよね? ……まあ、それぐらいならなんとかなるでしょう」

「そうですね」

力強く即答するユウカさんに釣られ、私は苦笑しつつも即時に同意する。居ないとか会えないとかならともかく、生息数が少ないくらいユウカさんならなんとでもするだろうという確信があったから。なんなら明日起きたときにユウカさんがミニリュウをゲットしていても、私は絶対に驚かない自信まである。

……つと、そうこうしているうちに時間が来た様だ。運転手の人が元総理と共に迎えに来た。

「さ、て……時間ね。行くわよ?」

「はい、行きましょう」

私はユウカさんに連れられ、リムジンに乗って伊藤家を出る。

ポチの入ったボールを撫でながら、私は思うのだ。ポチを使ってポケモンバトルする日も近いだろう、と。

## 第16話 政界への第二撃

日が沈み、電気の明かりが街を照らす夜。とある高級料理屋の個室で一人の男が頭を抱えていた。

もしテレビや新聞を一切見ない様な世捨て人がその人物を見れば、恐ろしく疲れたサラリーマンだと判断するだろう。見た目よりもいささか後退した白髪混じりの前髪、覇気に欠ける雰囲気、何より手元の紙に落とされた視線は覇気どころか生氣にも欠けていた……が、この人物はサラリーマンなどではない。下手な有名人よりもよっぽど知名度のある人物、彼は現役の日本国首相。つまりは総理大臣であった。

「むう……」

信じがたい。そう言わんばかりに目頭をもみ、何らかの資料なのだろう紙に視線を走らせる総理。その仕草からは疲労しか感じなかったが、しかし何とか問題を解こうとしている意思は見える。

そのまま視線を走らせ、ページをめくり、かと思えば元に戻し……数分が経過。

「参ったな……」

降参だ。そう後に続く様に資料から目を離し、腕時計を確認する総理。彼はもうかれこれ10分以上は待っていた。あちらが事故——恐らくテロの一種だろうと連絡があった——で発生した渋滞に巻き込まれた事で時間がズレてしまっていたが為の暇であったが……その時間も後少し。そろそろ到着するはずだ。

それを確認した総理は再度資料に目を落とす。そこに書かれた見慣れない文字……例えば『きのみ』だとか『ポケモン』だのに酷く集中力を奪われながら、しかし最低限は理解しなければ先生と話をするどころではないと。

総理がその資料を受け取ったのはつい昨日の事で、本格的に読み始めたのは今日になってからだ。まだ自分が若い頃にお世話になり、今も先生と呼び慕う相手から手渡された資料。

最初にパッと見たときは馬鹿馬鹿しいと思った。何かのジョーク

か、あるいは先生もついに寄る年波に勝てずにボケたのかと。しかしボケとは程遠い、現役の頃に戻ったかの様な覇気を持つて説明する先生を見て……察した。事実だと。勝負所なのだ。しかし、だからといって直ぐに呑み込める代物では無く、ついいつも通りのらりくらりとやり過ごしてしまい、結局は軽く読んだ後一晩休みを置き、今日になって本格的に読み覚えようとしているのだが……やはり、ファンタジーの様な文言が邪魔して中々覚えられない。

食せば傷が一瞬で治るきのみ。ガンも治るかも知れないきのみ。不老長寿をもたらすかも知れないきのみ。

一匹で火力発電所に成り代わられる生物。戦車よりも強い生物。オカルトチックな生物。

彼は、自分は総理としてはこの手の事に知識のある方だと思っていた。新しい時代を生きる為に、若い文化もある程度は知っている。

いや、だからこそか。

彼はこの資料を、今時のファンタジーアニメか何かの設定だと思えないのだ。そしてそんなものを真剣に覚えようにも身が入らず……そして。

「総理、到着したようです」

「ああ、通してくれ」

資料を半分も理解出来ないうちにあちらが到着してしまう。こうなってはなるようにしかならない。総理は資料を脇に置き、潔く腹をくくった。

そうして暫くして部屋に入ってくる老人と若い娘。先生と、その孫娘だ。彼らとは面識がある。問題は……

「うわあ……」

小学生……いや、中学生だろうか？ まだ子供と聞いていいだろう年頃の、雪の様に白く、儂い印象を受ける少女。何も知らなければ家に帰る事を勧めるところだが……総理は既に知っていた。少女が、この事態の専門家であることを。

「お待ちしておりました、先生」

「いや、待たせたようで悪かったね」



「いえ。……ユウカ嬢もお久しぶりです」

「はい。お久しぶりです。総理」

この手の店が珍しいのか辺りをキョロキョロと見回す白い少女を脇に、和やかとも取れる挨拶をしつつ総理は少女のプロフィールを思い出す。

名前を不知火白。年齢は18歳。しかし戸籍に何らかの改竄が加えられた事が発覚しており、その年齢も当てにならない。むしろ見た目相応と見るべきである。また先天性白皮症……いわゆるアルビノであり、日光に弱く昼間は外出しにくい模様。髪の毛と目の色が違うのはこの為。なお症状そのものは軽度だと思われる。

親はおらず、また不明。戸籍が改竄されていた事から上流階級の間、酷く後ろめたい隠し子ではないかと推測されている。

学歴は中卒となっているが、そもそも小学校に行っていたかすら怪しいところがあり、これはいじめを受けていたか、親が居ない為の弊害とみられる。

趣味は『ポケモン』の絵を書くこと。彼女はこの事態以前から『ポケモン』を書いており、この事件の黒幕、あるいは何かを知っていると思われる。またこの関係か数回に渡って預言を行ったという噂もあり。

更にシロ民と呼ばれる独自の戦力を多数保有しており、その総数は一万人に届き、実働戦力は千人以上と推測される。その実態はアイドルや有名人の追っかけよりも新興宗教のそれに近く、注意が必要。噂によれば彼らの中には重武装のテロリストも居るらしく、公安がそれとなく動いているとの話だ。

ハッキリ言って、普通なら関わりたくない危険な素性の人物であると同時に、同情を感じずにはいられない少女だった。まあ、どちらにせよ。

「シロちゃん」

「え？ あ、はい。不知火白です。宜しくお願いします」

「ああ、宜しく」

事態の打開の為には関わる他無い。そう決心して不知火白の自己

紹介を受けるが、ただ一言で警戒心がガリガリと削れていく。ペコリと頭を下げるこの白い少女が危険？ 何かの間違いではないだろうか、と。

そう思考した総理だったが、ハツとして意識を切り替える。ただ一言で警戒を解くなんておかしい。いくら相手が小さいとはいえ、事前情報を考えれば警戒心を解ける要素にはならないのだ。にも関わらず自分は警戒を解きかけた……危険だ。どうしようもなく。

『不審なところは多く、信じるに値するかも難しいが……悪人ではないのだろう。少なくとも、私はそう思う』

そう言つて苦笑いを溢した昨日の先生を思い出し、総理はその記憶に同意する。確かに悪人ではないと。しかし、悪人でないからといって、それが悪い事にならないとイコールにはならないのが現実だ。

例えば子供であつたとしても、警戒をとく気にはなれない。なつてはいけない。ただ一言で相手の警戒心を解き、同情、あるいは同調させるなんて能力は、危険だ。警戒心を解いてはならないのだ。絶対に。「では、早速で悪いのだが……説明を頼めるかね？」

「あ、はい。分かりました」

こういう手合いと長話は危険だ。そう判断した総理は4人がそれぞれ席に着くなり早々に本題に入る。

そうして不知火白が唐突に取り出したのは、紅白のボール。ずっと手に持っていたらしいその名は確か……モンスターボール。先ほど総理の手元に届いた新しい資料によれば、未知の技術や素材が使われており、説明には時間がかかるといわれる代物。一説には、異世界の品といわれるそれ。

「おいで、ポチ」

その不可思議なボールを不知火白は自身の近くに放り——光が溢れる。眩しいのは一瞬だけ。光はすぐに形をとり始め、気づけば光は黒い犬の姿となっていた。

不可思議な、非現実的な光景。総理は確かに先生から聞かされてはいたが……それでも信じがたいその光景に動揺せずにはおれず、黒い犬が不知火白の側に控えるのを横目に、先生とその孫娘の方をチラリ

と見る。

先生の目には同情と、そしてこちらを伺う意志が。孫娘の方は不知火白とポチと呼ばれた黒い犬……ポケモンに熱い視線が釘付けだった。

「どう、ですか？」

総理が内心を定めるより早く、不知火白が問いを投げ掛ける。勝ち誇った目でもしているのか、そう思いながら総理が視線を合わせると……白い少女の目は不安と期待に揺れていた。

——やめてくれ。

この状況で不安に揺れられると、まるで私が悪人ではないか。

その期待を否定すれば、私は悪人の様ではないか。子供をイジメて悦に浸る趣味は無いのに。

そんな風に総理が思考し、良心が痛んだのはホンの一瞬。しかし……それで勝負はついていた。

「いや……なるほど。確かに話の通りのようだ」

例え表向きのお飾りだったとしても、仮にも国を預かる者として冷静に、慎重に、そして確実に事を決める為、何とか相手の不備を指摘し、目の前の光景を否定しようと総理は頭を回そうとしたが……回らない。先ほど見た光景が事前に聞かされた話を裏付けており、白い少女の不安と期待がその思考を後押しするのだ。見た通りだ、聞いた通りだ、受け入れろ、現実逃避の為に年端もいかない少女をいたぶるのか、と。

結局、総理は折れた。目の前の光景を認めるしかなかったのだ。昨日の時点で疑念を持ち、まさかと思っていたのが呼び水だったのか。少女の不安と期待、そして独特の雰囲気気圧されたのがトドメだったのか。……いや、そもそも認めるだけなら特に損失が発生しなかったからだろう。責任問題になるなら意地でも認める訳にはいかなかった。

とはいえ、それらは最早どうでもいい事で。現実を認めた総理の頭の中では今後の動きが決まり始めていた。

「はい。……では、詳しい説明に入りたいと思います」

「ああ。宜しくお願いする。先ずはこの、きのみについてお願いできるかな？」

「はい。それではきのみについてですが――」

だから、その後2時間に渡って行われたポケモン説明会はただの確認でしかなかった。勿論、それによって手に入った知識もあったが、総理がどうするかは既に決まっていたのだ。

紅い瞳を生氣と覇気でたぎらせ、ポケモンについて語り語った白い少女がユウカ嬢と共に退室する。残るのは総理と、元総理の2人。

「……………」

「……………」

部屋に残った師弟の間に重い沈黙が降りる。探りあい、思考をまとめ、先に口を開いたのは総理の方だった。

「あんな少女が、この異変の専門家ですか」

「信じがたい事に、な。しかし、信じる他無い。信じなければ……口く大な事になるまいよ。君なら分かるだろう？ あの子の語るポケモンとやらの危険性が。そしてそれを上手く扱えたときの未来も」

「……ええ、しかし、難題です」

「だろうな。今の我が国では少々荷が重い」

言外に頭が痛いそのため息を漏らす政治家2人。そこで両者ともに共感点を見いだすが、それについて語る事はない。語るべきは、未来の事だ。

「さしあたり、どうするかね？」

「党内で意見をまとめ、国会で法を……ポケモン特別法案を作る必要があるでしょう。それと並行して各種メディアを使った国民への周知も急務です。口で言うのは、簡単ですが」

「だろうな……それらは私も協力しよう。ツテを辿って説明と説得に回る。現役時代に使えなかったネタも使おうじゃないか、それで党内はまとめられるはずだ。国民への周知はユウカがやってくれるはず……しかし、法案が通るかはキミら次第だぞ？ 我が国は仮にも法治国家なのでね。建前は必要だ」

「分かっています。……ああ、しかし」

「なにかね？」

「ポケモン……その存在を話して、それだけで信じろというのも難しいかと」

「……何度もあの少女を引っ張り出す訳にもいかん。確か新たにポケモンを捕まえた者が居たはず。その者を召集しよう」

「シロ民、でしたか？ 信頼できるので？」

「逆に言えば、その程度の人間でもポケモンは捕まえられるという事だ。……分かるな？」

「……なるほど。それも難題ですな」

そこまで一気に打ち合わせ、2人は黙り込む。

シロ民。そして誰にでも捕まえられるポケモン。この2つの事実  
に直したからだ。

前者は気にするだけ無駄……とはいわないが、考えてもどうにもなるまい。一般人でありながら、同時に軍隊でもあり狂信者でもあると思われる彼ら。少なくとも常識的に考えてその思考と行動を読むのは不可能だろうし、そんな事をするぐらいなら頭……不知火白を抑えるべきだろうと総理は思う。少なくとも不知火白は悪人ではなく、それどころか不憫な子供であるのだし、場合によっては保護も考える必要があると。それこそ、VIPとして。

そして後者は……非常に難しい問題だ。総理に不知火白が語った話ではポケモンはすべからず善性の生き物だが、持ち主によって悪にも染まる。そしてその力は近代兵器を上回るという。……馬鹿馬鹿しい話だが、真実なら大変な事だ。もし、もしもテロリストや悪人がポケモンを手に入れたら、それだけで街一つが消し飛ぶ覚悟が必要になる。……そんな事態に、今までの常識は通用しまい。そう総理は考え、目の前の先生と視線を合わせる。一拍。珍しく少しの迷いを見せた後、先生が重々しく口を開いた。青年時代の願いを叶えられるかも知れないのだと。

「青年時代の願い、ですか？ 確かそれは……」

「日本を世界一の国にしたい。……あの頃は私も若かった。それは認める。だが、その願いが間違いだとは今も思っていない。単に実現不

可能だったただけだ……ホンの数日前まで、な」

「今なら、可能だと?」

「あの子の言うポケモンの力が本当なら可能だろう。いや、仮にポケモンがそれ程の力を持たなくても、モンスターボールを一つ解析に成功するだけで物流に革命が起きる。君も見ただろう? 物体を凝縮、軽量化する力を。……まあ、安売りせざるをえないだろうがな」

「それは……」

我が国の立場は弱い。そう肩を落とす先生に、総理は力なく頷くしかなかった。思えばいつも足元を見られながら交渉させられていたなど。

小国相手ならまだなんとかなるのだろう。しかし大国相手に、こちらが相手の足元を見ながら交渉出来た事が何度あるだろうか?

……正直、数える程度しか無いのが総理の本音だった。

そんな状態で大国からモンスターボールの技術を寄越せ、公開しろと迫られれば……断る事が出来ないのは火を見るよりも明らかだろう。我々が先んじて苦労して手に入れたにも関わらず、後から来た奴に譲歩しなければならぬのだ! そうなった場合でも、値段交渉に持ち込めれば奇跡の大健闘と言わざるを得ない。我が国が技術を独占する事など不可能だ。ましてやこれ程の大事ならば、余計に。「私は徴兵され……しかし一度も戦う事なく負けた。あの時の悔しさ、無力感、絶望。忘れもしない。忘れるはずもない! 一瞬でも安堵した自分に恥じ入るばかりだった……!」

「先生……」

「そして、あの苦しみを孫の代にくれてやるつもりも無い。——だがな、今の我が国には鉄と血が不足しているのだ。このままではポケモン関連でもナメられるだろう。……いや、国家だけではない。個人間ですら鉄と血が、抑止力が不足しているのだ。だからつけあがられる。余計な不和がおきる。しかし、ポケモンならば……!」

「この状況を、解決すると?」

「あの子の言うポケモンが事実なら、自然とそうなるだろう。ポケモンは力を持っている。そして力とはすなわち抑止力だ。ならば、お互

いがお互いにポケモンという抑止力を保持する事で、個人間で相互確証破壊が成立する時代がやって来るだろう。勿論、国家間にもな。

……そして、やがてお互いが持つ抑止力は敬意に変わるはずだ」

全身から覇気をみなぎらせ、ポケモンによる抑止力を語る老人の目に迷いはなかった。彼は確信しているのだ。ポケモンは新たな抑止力となり得ると。

ポケモンによる抑止。新たな鉄と血。

それはシロちゃんですら、いや、シロちゃんだからこそ考えもしなかった、平和の可能性だった。そして、その新たな抑止力が行使される世界のトップに立っているのは……………

「良くも悪くも、時代が変わろうとしているのだよ。今、この瞬間にな」

「それは、あの少女を中心に……………ですか？」

「恐らくは。そして我々に出来るのは、流れに逆らわない事。そして、流れに乗れる者を増やす事だろう。新たな鉄と血をもってして、な」

「……………なるほど」

何度目かの言外のため息を吐き、政治家二人は頭を痛める。なる程、政治生命を賭けるに値する状況なのは分かった。しかし問題が難解に過ぎるのだと。

……………だがしかし、あるいは必然的に、その目はむしろ燃えていた。問題は難解だがそれをやる意義、そして乗り越えたときに手に入るモノ。それらを考えればくすぶっている暇などありはしない。

「彼女は祝福の天使か、それとも終末を知らせる死神か……………」

「……………前者である事を祈りましょう」

「……………そうだな」

しかし今日ばかりは、そう言わんばかりについてため息を外に漏らす政治家二人。……………その後暫く、夜の料理屋の個室は陰鬱とした、しかし熱量を持った空気が流れ続けたのだった。

第17話 配信、全国放送！　　（裏方の親衛隊）

現職総理との会談を終えて——早三日。

総理の説得は上手く行ったとユウカさんから聞かされたが、流石に三日で何かが変わる訳もなく。これといった進展を聞かないまま私は伊藤家に滞在し続けている。

そして進展が無いのはシロ民達も同じのようで、彼らは三日経ってもポップを捕獲出来ず、当然三人目のポケモントレーナーは現れていなかった。私としてはコラツタを捕まえたトレーナーとバトルでも……と思ったのだが、彼は私の代わりに国会やら議員先生、更には有権者や資産家の説得に走り回っているらしいので、残念ながらそれも難しい。

ハッキリ言おう。私は暇だった。ああ、だった。過去形だ。今は……緊張している。何せ——

「本番まであと一分！」

「説明用小道具の再確認は終わったか!？」

「おい、ここに置いてた機材どこにやった!？」

「予備のモンスターボールは丁重に扱え！　無くしたらただじやすまないぞ!？」

「おい！　光の当て方には注意しろ！　下手な真似したらここにいる全員の首が飛ぶんだぞ!？」

「警備要員との連絡は絶やすなよ！　野次馬の一人足りとも通すな!？」

「現場の協力者から連絡！　目標に動き無しとの事です!？」

満月の夜空の下で大声が飛び交う中、私はお嬢様スタイルでカメラの前に立っている。まるでテレビに映るタレントやアナウンサーの様に。……いや、まるでも何もその通りなのだが。

「ふふっ、緊張してるの？　シロちゃん?？」

「はい。少しだけ」

嘘だ。ガチガチだ。緊張しまくりだ。

何だってテレビに、それも生中継で映る事になったのか？　それは



分からない。気づいたらユウカさんと共にテレビに出る事になっていたのだ。なんでも民衆の意識を操作するのに仕込みが必要だとか何とかで……本当に、いつの間にかこうなっていた。予定では配信を  
するはずだったのに。

「リラックスよ。シロちゃん。普段配信するのと大して変わらないわ」

「でも、あれは顔は出さないの……その」

「シロちゃんは可愛いから大丈夫よ？」

「う……」

美人系のユウカさんにそう言われるとかなり気恥ずかしい。確かに今世の私はかなり可愛いだろうが……それとこれは別。そんな理由で緊張が取れるはずもない。むしろ気恥ずかしさで悪化するまである。

「それに、この放送が上手く行けば人とポケモンの仲はより近づくわ。勿論、良い方にね。そうなればシロちゃんが楽しみにしてたポケモンバトルやコンテストも出来る様になると思うわよ？」

「人と、ポケモンを……？」

「ええ、間違いなく」

そうか。この放送にはそんな力があるのか。……ならば、やるしかない。総理に話をつけたとはいえまだ動きは見えず、不安は残っているのだ。それが今回で解消されるのなら……緊張などしている暇はない。

「本番十秒前！」

この放送でやるべき事は分かっている。ポケモンの説明と、ゲットだ。説明は私とユウカさん、そしてポチで。ゲットは他の人を交えてやると聞いている。

「五秒前！」

手に持ったボールに指を這わせる。ツルリとした感触はいつも通り。そして中にあるポチも……きつといつも通りだ。

「三、二、一……」

だから私も、いつも通りに――！

「スタート！」

.....  
.....  
.....

『春陽麗和の好季節を迎えました今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか？……皆様こんばんは。伊藤ユウカです。そしてこちらの子は——』

『え？ あ、あ、はい。不知火シロです。宜しく願いします』

『はい。今日はこのシロちゃんと私。そしてゲストの方々と共に、昨今発生している異常についての最新情報を、詳しく説明していきたいと思います』

黒と白の二人の美少女が自己紹介をするところからその番組は始まった。

黒髪の少女は『清楚なお嬢様』として有名な女優兼アイドルの伊藤ユウカ。こちらについての説明はわざわざする必要を感じない有名な人だ。産まれを鼻にかけない性格。清楚で、淑やかで、落ち着いた仕事等から真正銘の大和撫子と名高い。

しかし、もう片方の白い少女については多くの人が知らなかった。美しく、それでいて可愛らしい、まるで雪の妖精の様な白い少女。一度目にすれば早々忘れないはずだが……芸能人ではないのだろうか？ そうテレビの前の視聴者が首を傾げていた頃。そんな大衆の意思にシヤケの如く逆らって盛り上がる集団がいた。

「シロちゃんキター！」

「俺らのシロちゃんがついに全国放送に……」

「俺らのかはともかく、快拳だな」

「飲むべ飲むべ？」

「酒！ 飲まずには、いられないッ！」

公園に備え付けられた街灯に照らされる、年齢も格好もバラバラの、しかし首もとのチョーカーの色だけは統一された十人程の集団。彼らの視線の先には大きめのノートパソコンが数台、そしてその画面

には困り顔の『シロちゃん』がドアップで写っている。

そう、彼らはシロ民。その中でもガチ中のガチ中。シロちゃん親衛隊と呼ばれる猛者達だ。

『では早速昨今の異変について説明を……と、いきたいですが、その前に。シロちゃんって誰？ という皆様の疑問についてお答えしていきますしよう。彼女は普段ネットで配信を行う絵描きの一人で——』

略すればSSとなる彼らが酒盛りを進める——既に完全に出来上がっている——間にも番組は進行し、彼らにとっては今更の、しかし一般市民にとっては初耳となる『シロちゃん』についての情報が語られる。

親衛隊は最初こそ耳を傾けていたが、それが既知の、それも初歩的な物だと把握して興味を失う。シロちゃんが普段何をしているのかなんて、彼らにとっては今更だったのだ。これが不知火シロの知られざる過去であるなら話は別だったろうが……それらが語られる様子はまるで無く、良くも悪くも当たり障りのない説明だった。

「なんつーか、普通だなあ」

「そりゃイキナリ不憫設定出してもウザイだけだしな。ああいうのは後から、自分の手で知るから効くんだし……おう、追加くれ」

「お前飲み過ぎだろ……で、やたらと実感がこもった意見だな？」  
「祝い事だからしゃーない、しゃーない。そして実体験ですが、なにか？」

ほぼ初めて会った面子だというのに、これといって緊張した様子も無く——あるいは酒の力を借りて——親衛隊の酒盛りは続く。それはビール缶片手に野球中継を見る様なオヤジ臭に溢れていたが……それを上回ってにじみ出るナニカが彼らを彼ら足らしめていた。

それは恐らく、狂気だろう。

何せ彼らは関東中を走り回ったのだ。久里浜を走り、八王子を走り、次はどこになるのかと関東中に散って走り回った。

ポチネキがイレギュラーなのか、それともあれで正しいのか、念のためと関東外……ハウエンやジョウトに該当する地域を調査した者もいる。それらを組織的に動かす為、ネットを泳いだ者もいた。

勿論彼らに利益はビタ一文も出ていない。完全なボランティアだ。にも関わらず彼らは今日まで走り続けた。止まる事なく、走り続け、そして、今日の放送までたどり着いたのだ。その有り様は狂気無くしてはあり得なかった。

「おい、時間だ。代われ」

「マジかよ。ユウカネキの猫被りがイイところだったのに……」

「向こうで一人寂しくスマホで見てろ」

「まあ良いけどよ……キャタピーに動きは？」

「無い。ありや寝てるな」

「そりや上々……んじや、行ってくる」

「いてら」

そう、この放送は彼らの努力と献身と、何より勝利の証だった。彼らは関東中を走り回り『キャタピー』を発見する事に成功したのだ。その一報は直ぐにユウカ嬢に伝えられ、彼女のコネと力を持って今日の放送を行う事になった。

『ポケモン』を社会に見せつける為に。

『——と、いったところですね。それではポケモン専門家であるシロちゃんに、ポケモンについて説明してもらいましょう。……シロちゃん』

『はい。今この世界にはポケットモンスター。縮めてポケモンと呼ばれる生き物達が、いたるところに現れ、住んでいます。そのポケモンという生き物はペットにしたり、勝負に使ったりする事が出来……そして、私はそのポケモンの専門家、という事です』

手元に紅白のボールを持ちながら、小さく笑みを浮かべてそう語る白い少女。

彼女を見ての反応は大きく分けて二つ。ああ、可哀想な子なのだなと白けた視線を送る者。そして……

「ん？ シロちゃんドヤ顔？」

「そりやドヤ顔にもなるだろう。歴史的な最初の一ページだぞ、これ」

「今のシーンが教科書に載るのか……」

「そしてその裏側には俺らが居る訳だ。胸熱」

「ドキュメンタリーとかになる訳？ 実感ねえなあ」

事情を予め知っているが故に緩く、しかし熱い反応を返す者だ。

画面を見る彼ら親衛隊の反応は実に緩い。酒が入っているせいか、それともやり易いからか、ノリなんて掲示板のそれからロクに変化していなかった。が、しかし、彼らは確かに聞いた。新たな時代の足音を。少女の声と共に。

『と……言っても信じられない人が殆んどだと思います。なので——  
おいで、ポチ』

白い少女がボールを放り、中から光が溢れる。それはやがて犬の形をとっていき……そこには黒い大型犬の姿があった。

普通ならあり得ない光景。

それに対する反応はバラけた。疑う者、信じる者、そして……

「あれがポチネキ？ 噂通りのイケメンじゃん」

「イレギュラーなのか、ハウエン地方からのたった一匹で殴り込みだ。しかも強いぞ。何せ進化済みだから……レベルも相当だろうってさ」

「この間の『わざ』の検証じゃあ最低でも50レベだっけ？ 推定個体

値と努力値を加味すると、戦車持って来ても勝てるかどうかにはハテナが付くってレベルらしいな」

「ワンコが戦車に勝つのか……マジファンタジー」

「ポケモンとシロちゃんだからな。悩んでもしやらないしやらない。酒でも飲んでた方が建設的だ」

「……お前、それ何本目だ？」

「さあ？」

ある種の納得を返す者達だ。これは特に親衛隊を中心にシロ民に多く、中には専門的な見解を持つ者もいた。

ああ、彼らがこの変化中で最も新しくアドバンテージを得た者達だという事は、まず間違いないだろう。だからこそ。

「うはっ、ネット大発狂中やで」

「あー？ ああ、散々否定してた連中か。んー……確かに発狂してんな」

「静観決め込んでた連中巻き込んで発狂か……てか、やつらこの番組見てんのな」

「事前の広報は鬱陶しい程したし、何だかんだ気になってはいたんだろ。……総理や官房長が出る前にこれ組んだのはファインプレーかもな」

彼らはネットで発狂している者達を、常識が破壊された者達を、真偽を訝しがる者達を、冷ややかな目で見る事が出来ていた。それどころか冷静に評価までしている程。その有り様は勝者のソレであり、彼らの勝利をもたらした者が誰かなど……考えるまでもない。

『——このポケモンが最初にこの世界に現れたのはごく最近。世間でいうところの異常な果実……ポケモン風に言うなら『きのみ』が現れたのが最初です。現在確認されているきのみは——』

今テレビの中でフリップを使いつつ、ポケモンやきのみについて笑みを浮かべながら説明している白い少女。彼女こそ彼女らにとっての勝利の女神であり、信仰の捧げ先であった。

「おーい、スタッフさんが準備してくれってよ」

「お、もうか。んじや、キヤタピーが逃げない様に本格的に囲むかね」

「やるべやるべ。……しかし、ついに生でシロちゃんを拝めるのか」

「遠目だけどな。……遠目だよな？」

「遠目だよ。万が一にも一般通過シロちゃん親衛隊員する訳にはいかないからな」

彼らは影で動く。歴史的な瞬間が輝かしく迎える様に。

「それと、テロリストどもの警戒な。近くまで来ていてもおかしくない」

「テロリストはちよつと大袈裟じゃないか？　せいぜい暴走した野次馬だろ。……だよな？」

「だと良いんだけどなあ。筆頭犬兵曰く、どうも本拠地その他もろもろもぬけの殻で、こっちに來てるらしいんだわ。元シロ民ども」

「それと、俺ら以外の何者ががモンスターボール回収してたって話な。あの段階で動くとしたらシロ民か、元シロ民以外にない。つまり……」

「近くにいるって事か。それもポケモンを持つてる可能性有りだ」  
「現にキヤタピーが見つかったのに、ビードルが見つからないままだからな……コラツタニキが居ないのが痛いぜ」

「政治家連中と飯食いながら番組見てるんだっけ？ ……まあ、それを言うならポツポつまえなかつた俺らも俺らだしなあ」

万難を排する為に。

——山場は、もうすぐだ。

第18話 配信、全国放送！ ～キヤタピーゲット～

『——さて、シロちゃんの説明で皆様もポケモンがどういう生き物なのか？ ある程度はイメージが掴め始めた事でしょう。なので、今から実際にあるポケモンを見て、更にゲットしようと思います。……では、一度スタジオにカメラをお返ししますね』

番組が始まってどれくらい経っただろうか？ スタッフさんが用意したフリップを使い、指示のカンペを見つつ、ユウカさんにフォローされながらたつぷりと語った気がするが……具体的な時間や、説明の出来はサツパリだ。

とはいえ、ユウカさんがサクサク進行しているので——あまりの猫被りに驚いたの言うまでもないが——問題はないのだろう。

そんな事を思いつつ、スタスタと歩いていくユウカさんに続いて私も移動する。チラリとカメラの方を見してみるが……どうやら今は撮っていないようだ。一安心。

「どう、でしたか？」

「とっても良かったわよ。これならポケモンを信じる人が出てくるのは間違いないでしょうね」

「そうですか？」

「ええ。頑張ったわね」

「わっ、うう……？」

ポフポフなどで頭を撫でてくれるユウカさんに気恥ずかしさを覚えつつも、説明が出来が良かったと聞いてホッと一息つく。

なんとというか、肩の荷が降りた気分だ。ホンの少しの説明に人とポケモンの未来がかかっていたからなあ……

「さ、て……次はポケモンのゲットだけど、大丈夫？」

「えっ、と。確か相手はキヤタピーで、説明は別にやるんですけどよね？」

「ええ、CGなんかを使ってスタジオの方でね。モンスターボールの事から、ポケモンをゲットするにあたっての危険性。キヤタピーの事も簡単にだけ説明しているはずよ。後は……呼んでおいたゲスト



に語らせたり、かしら？」

「ゲスト……」

ユウカさんの話をふんふんと聞いていた私は、ふとその単語に嫌な感覚を覚える。テレビに出てくる専門家とか、ゲストとか、そういう輩はロクな事を言った記憶がないからだ。大抵テキトウな事しか言わないモノだろう。

そんな奴らがポケモンに対してどう批判するか……考えたくもない。

「不安？」

「はい。そういう人達って、その……」

「大丈夫よ。ちゃんと選別したから好意的な事、あるいはマトモな疑問や注意点を話すはず。この現場に来ている子なんて……ああ、居たわね」

「？」

ユウカさんがそう言ってどこかに視線をやり、今の今まで私の頭上にあつた手のひらを離す。暖かさが消えるのに合わせて、その視線を私も追ってみれば……女の子が見えた。周りのスタッフとは格好が、あるいは纏う気配が違う少女が一人。あの子がゲストだろうか？  
だとするとあの少女がキャタピーのトレーナーになる訳だが……

「あ！ ユウカさん！」

こちらに気づいたのか、ゲストだろう少女が手を振りながらこちらに走り寄ってくる。元気の良さそうな子だ。年頃は……高校生程か？ 身長的には私より上だった。

「今日は来てくれて有り難うね」

「いえいえ！ ユウカさんの頼みですし。何より、私もポケモントレーナーになれるんですから！」

「そうね」

「？」

茶髪寄りの元気な子がユウカさんに機嫌良く話かけているのを見ていた私は、ふと違和感を覚える。

——少女と仲良さそうなユウカさん？ 違う。では少女の方に？

ホンの少しだけ考えて、やがて答えは出た。

違和感の原因は少女が『ポケモントレーナー』という単語を使ったからだ。今その単語を使えるのは前々から私の配信を熱心に見ていたシロ民ぐらいで、つまりこの少女は……

「で、この子が『シロちゃん』ですね？」

「ええ、貴女は見るのは初めてだったわね」

「はい！ ユウカさんに勧められてから、配信は時たま見てましたが……思ったよりも、可愛い子ですね！」

「か、可愛い……？ て、わっ!？」

「わー！ もう、可愛いです！ それとちっちゃいです！」

どうやら私の配信視聴者らしい少女は、パーソナルスペースが恐ろしく狭いらしい。なんと会って間もないうちに私を撫で回し始めたのだ。

頭を撫で、抱き付き、頬ずりまで始めだす。

疾風怒濤のボディータッチ。恐ろしいのはそれらに下心を感じられず、手慣れている気配すら感じられるところか。どうやらこの少女にとってこのくらいのボディータッチは日常茶飯事らしい。……根本的に、私とはタイプの違う少女だ。目が回ってくる。

「そこまでよ。そろそろ時間だから、準備して」

「あっはい。スミマセン。……じゃあシロちゃん、また後でね」

「はい。……はい？ はい」

私が目を回しているうちに顔見せは終わったのか、何がなんだかよく分からないままに少女は私達の元から走り去っていった。

分かった事といえば少女が配信視聴者である事と、元気の良い事ぐらいだが……まあ、充分だろう。

「キャタピーは、任せられそう」

ポツリと小さく呟いて、一人頷く。あれだけ元気が良く、気持ちのいい性格をしているのだし、それは間違いないだろう。

私はそう確信してカメラの前に立つ。番組の続きは……不安なく進められそうだった。

.....

不知火白が一人のトレーナーの誕生を認めていた頃。

都内某所の料亭。その大きめの個室で、ある男が胃を痛めていた。『ご覧の番組は、新しい未来へ、イトウ自動車。と。ご覧のスポンサーの提供で、お送りしています』

個室に持ち込まれた大型の液晶テレビに映るスポンサー——軒並み伊藤家関連の企業という清々しさ——を横目で見つつ、その男は胃の痛みに耐える。

なぜそんな事をしなければならぬのか？ その答えは目の前にあった。

「うーむ。信じがたい。実に信じがたい」

「確かに。ポケモン？ という生物は信じがたい生き物ですな」

「全く。眉唾物の生き物の話をあかも真面目に喋られると、妙な気分になります」

「あれならツチノコの話をされた方がまだ真面目に聞ける」

「いや、全く持ってその通り」

彼の前に居るのは高そうなスーツを来た、自分よりも一回り以上は年上の男達。彼らは国会議員や大企業の役員、あるいは地元の有力者であったり旧華族の人間だ。それとその関係者や、強い影響力を持つ人物も居たりする。……所謂、権力者だ。彼の推測でしかないが、恐らく上級国民と呼ばれる連中よりも更に一段上の者達だろう。文字通り格が、生まれが違う者達だ。

そしてその権力者達が彼の胃を痛める切っ掛けであり、より決定的な原因は、彼の身分にあった。

「しかし、現にそこにポケモンが居ますからなあ」

「この紫色のネズミですか。チーズをむさぼっているあたりそうは見えませんが……」

「だが、あのボールに出入り出来る、奇妙な生き物にはかわりない」

「確か名前は……ああ、キミ。何だったかな？」

「え、あ、はい。コラツタです」

権力者の疑問に、もう何度目かの返答を返す男。

そう、男は世界で二番目のポケモントレーナーであり、ネットでコラツタニキと呼ばれる男だ。ポケモントレーナーになる前の職業はフリーター。それも二十代でしかなく……コラツタニキは場違い感を拭えない。なぜ自分が権力者と、それも上位数パーセントの権力者とテレビを見ているのだ？ と。

「そう、コラツタ。何とも可愛いらしい名前だ」

「元は少女が付けたらしいですから……そうだったな？」

「あ、はい。そうです。全てのポケモンの名付け親はシロちゃんです」

「シロちゃん……不知火白か」

そうだ。シロちゃんだ。あの白いロリっ娘の為に自分はここに居るのだ！

そう男は心の中で『きあいのハチマキ』を締め直し、何気なく目の前に並べられた高そうな料理に手を伸ばす。だが……

——味が分からない。

間違いなく旨いはずの、高級料理。しかしなぜか味がしない。直ぐ近くでは相棒のコラツタがバリバリと、高級チーズを山程むさぼっているというのに……

締め直したはずの『きあいのハチマキ』が、ほどけて落ちた気がした。

「不知火白。ポケモンの生みの親。年齢不明、家族関係も不明。両親の顔すら知らない少女……でしたか」

「愛に飢えた少女が何気なく見た夢が具現化したのがポケモン……でしたか？」

「余計な事をしてくれたものですな」

「全くだ」

「そのネズミですら鉄板を噛み切って見せた……全てのポケモンが具現化したときの被害は想像出来ません」

「余計な事を——」

「いつそ不知火白を——」

「しかしそれは――」

口々に流れる不知火白への言葉。その多くは悪意に濡れており、まるで不知火白こそ諸悪の根源と言いたげ。それどころか時間が経つにつれて極端な意見まで出てくる始末。

普通なら、彼らに同意するのが正解だ。それがどんな内容でも、権力者には媚びておくのが利口なのだから。しかし……生憎コラツタニキは、シロ民だった。

「シロちゃんは！ シロちゃんが、悪い訳ではありません……」

勢い良く反論を述べ、しかし権力者達の凄まじい睨みに耐えかねて尻萎みになるコラツタニキ。しかし、彼に続く者がいた。

「彼の言う通りだ。あの少女が悪い訳ではない。仮にあの少女が悪いというなら、彼女を救えなかった我々も……いや、全ての人が悪いのだからね」

「確かに。それを言われては反論のしようがない」

「それに、彼女と彼らは新しい可能性も提示してくれています」

伊藤元総理と、彼の支持者達だ。彼らによつて個室の空気は完全に変わった。今日が向けられているのは不知火白への罵倒ではなく、彼女達が提示した……コラツタニキが持ち込んだ資料だ。それは新しい利益であり、利権だった。

きのみ医療活用。電気ポケモンによるエネルギー問題の解決。特殊技能を持つポケモンによる環境浄化等々――

他にも様々な資料が持ち込まれ、それらは全て権力者の前に鎮座している。それらがどう見えているか等、わざわざ考えるまでもない。間違いなく宝の山だ。巨万の富も、支持率アップも、不老長寿も思いのまま……これに食い付かない権力者がいるはずもなかった。

「とはいえ、これらもポケモンが誰にでもゲット出来て始めて実現出来る事だ。……先ずは、見守ろう」

「……そうですな」

コラツタニキを含めた男達の目が、再びテレビへと向かう。

胃を痛めていたコラツタニキは気づかなかったが、どうやら番組の企画は既に進んでいたようで、バカデカイ芋虫……キヤタピーがテレ

ビに映っていた。

相對するのは、最近よくテレビで見かける可愛いらしいアイドルだ。確か現役の女子高生だったはず……そんな風にコラツタニキが思い出しているうちにも企画は進む。

『——なるほど。では今ならあのキヤタピーに、このモンスターボールを投げつけるだけでゲット出来るんですね？』

『はい。あのキヤタピーは今は寝ていますし、キヤタピー自体強い種族ではないので……恐らくゲット出来るかと』

『ふむふむ。そして万が一ゲット出来なくても餌で釣り、それでも駄目ならポケモンバトル！ ですね』

『はい。その場合はポチだどうやってもやり過ぎちゃうので、餌で釣られて欲しいところですが……』

『あー、ポチちゃんワンコ……というか狼ですからね。芋虫なキヤタピー相手は手加減しようがなさそうです。でも大丈夫ですよ、シロちゃん！ 何せ餌として高級ハチミツと、新鮮な生野菜を用意してますから！』

『確かに。それならゲットした後の関係もスムーズに進められそうです』

見れば番組はキヤタピーゲットの寸前まで進んでいたらしい。二人の少女と眠りこけるキヤタピー。そして餌として高級そうなハチミツと生野菜が映されていた。

どうやらあのキヤタピーも、コラツタニキがゲットしたコラツタと同じ様にもてなされる様だ。

——俺は飯の味も分からないってのに。

コラツタニキがそんな愚痴を喉から胃へと戻しているうちに少女二人の話が終わったらしく、モンスターボールが高々と掲げられる。

いよいよゲットの瞬間だ。

チーズをむさぼるコラツタ以外の面々がテレビを凝視し、部屋の空気が一気に重くなる。

『ではっ！ いきますっ！』

『はい』

『せえーいつ!』

デタラメなフォームから放たれるモンスターボール。外れるかと思われたそれは、意外にも弧を描いてキヤタピーへと向かい——そして。

『わあ……』

『……』

キヤタピーがボールへと収まった。

だが、まだだ。まだ入っただけ。ゲットではない。現にボールは不安定に揺れており、今にもボールを壊して中のキヤタピーが出て来てしまいそうだ。

一揺れ、二揺れ、三揺れ——

——カチツ。

音が、した。

ゲット成功だ。

『や、やりました! 私やりました! シロちゃん、私やりましたよ!』

『はい。キヤタピーゲット。おめでとうございます』

『イエーイー! これで私が三人目のポケモントレーナーですね! あっ、ユウカさん見てましたか!?!』

『ええ……そうね。三人目のポケモントレーナー誕生ね。ええ、見たわよ』

『あれ? 何か不機嫌……?』

これで自分が続くポケモントレーナーが現れた。そうシミジミと思いを噛み締めるコラツタニキ。

しかしそれも数秒の事。同室の空気が更に重くなった事で感慨にふける事も出来なくなる。権力者達の気配が、変わったのだ。

『さあ、キヤタピーを出してあげて下さい。顔見せをして、なついてもらわないと』

『はい。ではキヤタピー! 出しておいで——わあ、感動ですね! キヤタピー寝てますが!』

『のんびりした子なのかも知れません。……可哀想ですが、起きて貰

いましょう』

『はいはい。キヤタちゃん起きてーご飯だよー』

権力者が権力を手に入れたのが偶然でないのなら、当然彼らはそれに見合うだけの力があるはずだ。特に、新しい利権の匂いには敏感だろう。

例えばつい先ほどまでは利権に成りうるか微妙だったが、今この瞬間利権に成るのが確定した……ポケモン利権など。

ああ、ポケモン達が生み出す利権は間違いなく膨大な数に上り——そのポケモン利権を手に入れた者が次の時代の勝者になる事は、誰の目にも明らかで……権力者からすれば是が非でも手に入れなければならぬ物になったのだ。

そして、それらポケモン利権には、二番目のポケモントレーナーであるコラツタニキ自身も含まれる。

『わあー。いっぱい食べますねえ……キヤタちゃん』

『お腹空いてたのかも知れませんか。……でも、なついてくれそうで良かったです。ちよつとアレなゲットの仕方でしたから』

『普通は起きてるときに餌付けしたり、話したり、バトルで認めさせたりするんですよ？ 確かに今回は……アレですね。前後逆になってます』

『まあ、その辺りはスタジオで補足して貰いましょう……では、一旦CMです。この後はポケモンバトルをやってみましょう』

『え？ キヤタピーでポチちゃんに挑むんですか……？』

『その、手加減するので……宜しく願います』

『や、やります！ やってみせます！』

テレビの向こうで少女が悲壮な覚悟を決めたとき、コラツタニキもまた覚悟を決めていた。

何せ権力者達の気配や目が違うのだ。既に料亭の個室は利権を奪い合う戦場となり、コラツタニキは解説役から獲物に成り下がる。

コラツタニキが複数人の老人からうちの孫娘は年頃でして……などと、言外にご令嬢との見合いの話を進められ、何も入っていない胃をひっくり返しそうになるまで——後数分の事だった。



第19話 配信、全国放送！ ～初めてのポケモンバトル？～

キヤタピーがゲットされて暫く。現場は和やかな雰囲気に含まれていた。理由はカメラが回っていない事と、ポケモンとのふれあいだろう。

「キヤタピー、〴〵いとをはく〴〵！」

「ポチ、かわして！」

キヤタピーがシュツと吐き出した糸を、ポチは横に軽く飛ぶ事で避けてみせる。その動きに危なげは無く、流石といったところだった。

とはいえ……

「んー、やっぱりポチちゃん相手はキツイ気がします……やつてもやらせ感が出てしまう気が」

「ん、そうですね。コラツタニキが居れば良かったのですが……」

「彼は総理達と食事中よ。難しいでしょうね」

「むむー、キヤタちゃんやれそう？ ——うん、ダヨネ」

ポケモンバトル……とはいえない程度に〴〵わざ〴〵を撃ち、キヤタピーとそのトレーナーは首を横に振る。キヤタピーが弱いというより、ポチが強すぎるのだ。

私としては家族が強いのは嬉しいが、バトルの相手が居ないのは確かに問題だった。これではポケモンバトルの魅力と必要性を伝えられない。……どうしたものだろう？

「ポケモンバトルは無しで、〴〵わざ〴〵だけ見せて説明する……？」

「でも、それだとインパクトが足りないと思います」

「う、ん……」

私はポチの背中をゆつくりと撫でつつ、キヤタピーを頭の上に乗せた少女と話し合う。といっても、あちらを立てればこちらが立たずで全く進展はないのだが。

「ユウカさんは……？」

「どうしたんですかー？ ユウカさん」

「——いえ、そうね。ちょっと問題発生よ」

「?」

ユウカさんの意見を聞こうと声を掛ければ、何か問題が起こったと聞かされる。その表情は非常に険しく、起きた問題の大きさが伺い知れた。

「ここを守る様に展開していたシロ民の何人かと連絡が取れなくなつたわ」

「え?」

「連絡が取れなくなったシロ民はここから北東方向の者ばかり……恐らく、何者かが強行突破を敢行しているのでしよう。……来るわよ。二人とも、備えて」

連絡の取れないシロ民。強行突破。何とも物騒なワードが並んでいる事に説明を求めようとしたのだが……ユウカさんはそれどころではないとスタッフの人達に指示を飛ばしている。カメラを何があっても回す様に、とか。関係のない者は直ちに退避、とか叫んでいる。

明らかに、普通ではない。

「し、シロちゃん……? いったい何が……」

「大丈夫です。ね、ポチ?」

「グルウ……」

当たり前だ。そう言わんばかりのポチをキャタピー少女に見せ、私自身もポチを撫でて心を落ち着ける。大丈夫、ポチが居るから大丈夫。

……そういえば、昨日掲示板で元シロ民のテロリストが数名関東入りしたのを確認したとか何とか書いてあって、下手な冗談だと思ったものだが……まさかね。

「グルル——」

「? ポチ?」

突然毛を逆立て、滅多に聞かない唸り声を上げるポチ。

何事かと驚き、ポチと同じ方向を見てみれば……人が居た。バクラバや覆面で顔を隠した黒ずくめの男達が三人。手には、モンスター

ボール。……まさか、本当に？

「……白髪赤目の子供、情報通りか？」

「間違いないだろう。他には無い容姿……ターゲットだ」

「おい、そんな分かりきった事は良いだろ？ さっさとやろうぜ。マヌケのシロ民どもも、今頃三途の川の渡し賃金が無くて立ち往生して  
る頃だしなあ」

「っ！ 彼らに、何かしたんですか……!？」

「おうさ、コイツでチクツてな」

そう言った男を皮切りに、男達がモンスターボールからポケモンを  
出していく。

けむしポケモン、ビードル。

ことりポケモン、オニスズメ。

ぶたぎるポケモン、マンキー。

いずれも今確保されていてもおかしくないポケモン達で、シロ民が  
発見出来なかったポケモン達。そして、三匹のポケモン達の目は一様  
に――

「っ――！ ポケモンは！ そんな事をするための存在では！」

「残念だが、それはキミが決める事ではない」

「そうそう。だいたいアイツらバカだよなあ？ ポケモンも持つてな  
いのにイキつて突っ掛かって来てさあ……何だっけ？ 『シロちゃん  
は俺らが守る！』だっけ？ ははっワロス。守れてねえし」

「『どくばり』が刺さってはな……さて、お喋りはそこまでだ」  
「くっ……」

ビードルの『どくばり』。それは人を殺すには十分な威力を持つ  
ていて……そして、目の前の彼らならやってしまうだろうという確信  
があった。恐らく、彼らと相対したシロ民は、もう既に――

「……許さない」

「ほう？ では、どうする？」

「そうそう。守ってくれるジジイはお前を置いて故郷に帰り、シロ民  
は既に死んで、今は犬つころ一匹だけ。……なのにこっちは三匹も居  
る！ 教えてやるよ、世間の厳しさをなあ！」

「はあ……まあ、そういう事だ」

バクラバ二人はその手の事を生業とするプロのニンゲン。覆面の男は素人。

そんな事を脳の隅っこで判断しつつ、私の頭がスツと冷えていく。許さない。絶対に許さない。それは変わらない。けれど、思考はドンドンと冷えていく。そうして考えるのはどうやって目の前のポケモン達を鎮圧し、奴らを撃滅するか……薄汚い欲望をぶちまけている素人と、あくまで仕事に徹するプロが二人。そんな奴らを相手に幾つかプランを考える。そこから安易に実行可能な物を選び、それぞれ点数を付け、そして。

「キヤタピーのトレーナーさん。手伝って下さい」

「え？ わ、私？」

「はい。後ろから良いので、援護を。嫌なら逃げてくれて良いです」  
回されるカメラや、不安そうなユウカさんには視線を向けず、キヤタピー少女にそう言っただけで私は視線を奴らに戻す。

別に逃げてくれてもいいのだ。ただ居てくれると保険になる。それだけだから。

「や、やります。よく分からないけど、ここで逃げたくないです……！」

「そうですか。では、お願いします」

視線を向けず、それだけ言って後方を任せる。

「相談は終わったか？」

「そーそー待つのも飽きちまったぜ」

「よく言いますね。怖いくせに」

「……あ？」

覆面の男がガンを飛ばしてくるが不思議と怖くない。恐らく、怒りのせいだ。……ああ、私はかつてなく怒っている。ポケモンが人を殺した事、それはいい。生物の生存競争だ。だが、人がポケモンに人殺しをさせた事は、許せない。悪事を押し付けた事は、許す訳がない。

私は、怒っているんだ。

「怖いんでしょう？ ポチが。だから貴方達はポケモンを出して動か

ない。勝てる未来が見えないから」

「だ、誰がそんな犬ところ！」

「そうですか？　ならなんで足を震わせて……ええ、そうやって確認する辺り、語るに落ちてます」

「こ、このガキ……！」

「ええ、私は子供です。ならそんな子供にいいように言われてる貴方達はそれ以下ですね。ポケモンを出せば怖がると思いましたが？

人を殺せば怖がると思いませんか？　そんな訳、そんな訳ないでしょう！　許さない。貴方達は許さない。絶対に」

私の怒りを汲み取ったのか、ポチが一步前に出た。

ジリツ、と。男達と相手のポケモンが後ろへと後退りする。もう一押し。

「なぜ後ろへ下がるんですか？　そのポケモン達を使って私を襲えばいい。骨を砕き、肉を裂き、泣きわめく私を犯したいんでしょう？

……それとも、恐ろしいですか？　この私が」

「だ、誰がお前のようなガキ……！」

「ええ、そうですね。何せ犬一匹に恐れをなして逃げ出す腰抜け達です。弱い者どうし集まってイキがる事しか出来ない子供ばかり。だから貴方達はその程度なんですよ……この、臆病者」

「ガキが言わせておけばア！　やれ！　オニスズメ、”つつく”だ！」  
「おいっ!？」

私の安い挑発に乗った男が一人、ポケモンを突っ込ませてくる。

突出による孤立……ありがちなミスだ。そして今の私はそれを見逃したりしない。

「ポチ、迎え撃って。オニスズメに”かみつく”」

「グルウー！」

ポケモンに罪は無い。悪いのは人間。だから”わぎ”は弱いものを選択し、指示を出す。

ポチは私の意思を読み取ってくれたのか、突っ込んでくるオニスズメを真っ向から迎え撃ち、”つつく”が当たるその瞬間。身体を滑らせて”つつく”の焦点を逸らし、逆にオニスズメの翼に噛みついた。

「そのまま放り投げて」

ブンツ、と。存外勢い良く放り投げられたオニスズメは体勢を立て直す間もなく飛んでいき、トレーナーへとブチ当たった。

ダメージは……手加減もしてたし、そこそこかな？ そう思う私とは別に、奴らは大きな衝撃を受けているようだった。あるいは、逃げる算段でも立てているのか。……許さない。

「私、怒ってるんです」

「え、は？」

「絶対に、許しません」

逃がすものか。貴様らは逃がさない。ここで叩き潰す。

幸いにも戦術や戦い方は薩摩隼人の東郷お爺ちゃんに教えて貰った事がある。ついぞ実戦は出来なかつたが……こういう形なら、生かせるはずだ。

「キヤタピーのトレーナーさん」

「へ？ あ、はい！ キヤタピー！ 〴〵いとはく〴〵！」

「対象の指示」

「あ、えっと、オニスズメ目掛けて！」

多少もたついたが、キヤタピーの放った糸がオニスズメ目掛けて飛んで行き……命中。

ポケモンバトルには不慣れなのだろう。奴らの対応は遅い。だからこそ、畳み掛ける。

「ポチ、マンキーへ〴〵とっしん〴〵」

「来るぞっ！」

マンキーはかくとうタイプ。あくタイプのグラエナであるポチとは相性が悪い。事故を防ぐ為にも、ここでノーマルタイプかつ強力な〴〵とっしん〴〵で落としておくべきだ。

幸いにもあちらは対応出来ていない……やれるだろう。

「マンキー！ ……〴〵けたぐり〴〵だ！」

「遅い——」

指示が遅い。遅すぎる。さては迷ったな？ それとも〴〵わざ〴〵の名前を忘れたか？ 全く、何の為のトレーナーだ。その手の事を生業

としている様子だが、それにしてもレベルが低いにも程がある。見ろ、オニスズメは糸を避けられず未だに飛び立てず、マンキーの「けたぐり」は不発気味。現にマンキーはポチの「とつしん」で吹き飛ばされ、ポチに大きなダメージは見えない。

まあ、「とつしん」は反動ダメージもあるし、後でオボンの実を手配しないといけないだろうが。

「キヤタピー！ 更にオニスズメに「いとをはく」！ グルグル巻きにしちやえ！」

レベルの低い奴らとは打って変わって、勢い任せではあるがキヤタピー少女はかなり優秀だ。「どくばり」を持つビードル相手や、タイプ相性の悪いオニスズメにキヤタピーで接近戦はリスキーと捉えたのだろう。

「いとをはく」の連射でオニスズメを封殺している。勿論それではトドメはさせないが……そこは私とポチがすれば良いことで、ポチが手透きになるまでオニスズメを封殺出来れば事実上彼女の勝ちなのだ。そう考えれば彼女は優秀だろう。

「クソツ、オニスズメなにしてる!! ただの糸だぞ?! いつものパワーはどうした! さっさと振りほどけ!」

「キヤタピー、あの煩いのも一発入れちやえ! 「いとをはく」!」  
「危っ!」

訂正。多少エグい。そしてトリガーハツピーの気があるようだ。トレーナーにダイレクトアタックとは……キヤタピーのトレーナーにしたの、失敗だったかなあ?

「クソツ、ふざけやがって! ビードル「どくばり」だ! ぶっ殺せ!」

「殺すな! 目的を放棄する気か!?! ……ええい、マンキー」からてちヨツプ」! ビードルを掩護しろ!」

そうこうしているうちにこちらにも攻撃が飛んで来るが……赤点だ。対象の指示を忘れてるし、何よりトレーナー同士で会話するんじゃない。

見ろ、そのせいでビードルとマンキーの初動が鈍い。迷ってしまっ

ている。……おかげで、私はいくらでも挽回出来るが。

「ポチ、マンキーに『ふいうち』」

とはいえ、『すばやさ』とは関係ないところで先手を取られたのは事実。ならば今から先手を取り返せる『わざ』で先にマンキーを落とし、返す刀でビードルをやるしかない。

その目論みは——上手くいった。ポチの『ふいうち』は成功し、歩法を乱して懐に入り込み……しかし、横合いから接近したポチはマンキーに対応させず、そのまま噛みついて放り投げる。相性は良くないが、『ふいうち』は見事に先手を奪ったのだ。後は。

「ポチ、『カウンター』」

間に合うかは微妙だ。もし奴らの指示がスムーズなら確実に間に合わなかっただろう。だが——ビードルの『どくばり』がポチに刺さる……その瞬間。ポチの姿がブレ、どくばりがかん高い音を立ててアスファルトに突き刺さった。

ポチは、無傷だ。そして。

「グルウアア！」

決まった。ビードルは素早く地を駆けたポチの『カウンター』で地に叩きのめされ、そのまま噛みつかれて投げ飛ばされる。見たところ、既に落ちている様子だ。

「お、おい!! ビードル!! な、何が……!」

「口だけの素人が……っ! マンキー『ちきゆうなげ』!」

『カウンター』を出したというのに、相手は愚かしくも真っ向から物理わざで来た。『ふいうち』で落とされる可能性もあるのに……バカだろうか? バカなのだろう。あるいは『わざ』の暗記もしてないのか? どうやらその手の事を生業としている連中でも、ポケモンは手に余るらしい。

とはいえ、どちらで攻めるべきか——ポチと視線が重なる。そうか。なら。

「ポチ、『カウンター』。思うようにやって」

「グルウ」

思えばポチは東郷お爺ちゃんと何度も練習していた。特に『後の



先』を取る練習を。『カウンター』は攻撃を受けてから反撃する『わざ』。

だが、彼女ならば……

「いけやー！」

「っ！ ポチー！」

マンキーがポチを掴む——その瞬間。再びポチがブレる。いや、高速で横に飛んだのだ。予備動作もなく、いつの間にか。東郷お爺ちゃんに教えて貰った事がある。あれは。

「無拍子……」

ポチの奥義によってマンキーの『ちきゆうなげ』は不発。見えるのは、無防備な側面か。

停滞はホンの一瞬。再びポチが動き出したときには、もう遅い。体当たりで初撃を入れ、すかさず鋭く噛みついて、地に叩き付け、投げ飛ばす。見るまでもない。マンキーは落ちているだろう。

「ま、マンキー!? バカな！ 相性は良かったはず……!」

確かに相性はポチに不利だった。しかし挑発に乗って連携せず、マトモな指示も出せない……そんなレベルの低いトレーナーではタイプ相性も何もないだろう。

勝つべくしてポチは勝ち、負けるべくして貴様らは負けたのだ。現に……

「もう一度よ、キヤタピー。『たいあたり』！」

「オニスズメ!? クソツ、こんな事が……!」

キヤタピー少女は勝っていた。オニスズメを糸でグルグル巻きにし、動けないオニスズメに『たいあたり』を連発……エグい。実にエグい。しかし効果的だ。オニスズメは得意のひこうわざを撃てないまま封殺されている。タイプ相性は懸念事項だったので、やはりキヤタピー少女は優秀だな。

いや、ああなるまでロクな指示を出せないトレーナーが無能なのか？ 無能だな。あるいは慣れてないのか？

「『たいあたり』 『たいあたり』 『たいあたり』 よキヤタピー!」

ガストドストドコツと。そんな効果音が響く様な激しいタツクル

の連続は凄まじい。見ればオニスズメは既に目を回している様子……戦闘不能だ。

「よーし、もう一発「そこまでです」アツハイ」

恐慌状態の新兵でもあるまいし、オーバーキルは駄目だ。絶対に。さて。

「これでそちらの手持ちは全滅……まだ、やりますか？」

ポチはマンキーとビードルを落とし、キャタピー少女もオニスズメを落として見せた。

私達の勝ちだ。ゲームならカツアゲの時間だが、彼らには警察が必要だろう。……そんな私の思考を読んだのか、覆面の男が胸元から何かを取り出す。財布か？ いや、あれは——拳銃!?

「このクソガキがつ！ お、大人をなめるなよ!?! 死ぬ！ 今すぐ死ぬよオオオ!!」

「お、おいっ!?!」

向けられる銃口に思考が止まる。

死ぬのだろうか？ 私は。

ここで？ こんなところで？ まだポケモン達との旅は始まったばかりなのに？

——嫌だ。

まだだ。まだ死ねない。ポケモン達との旅が終わるまで、死ねない！ だから、ポチ——！

「グルウアアア！」

「ヒッ!?!」

私の思考を汲み取ったのか、ポチが男へと“ふいうち”し、拳銃を弾き飛ばす。

拳銃はやがて私の足元までたどり着き……私はそれを拾って構える。

「ポケモンをモンスターボールに戻し、手を上に上げて……ひざまづきなさい」

「そ、そんな風に脅したって……」

「撃てないとも?」

「……クソッ」

そんなに私の脅迫は真に迫っていたのか、覆面の男は大人しくポケモンをモンスターボールに戻す。

後は手を上に上げて……いや、待て。バクラバの男達が動いてない。むしろ懐に手を伸ばしている……？ まさか。

「そこっ、何を——！」

「相棒、撤退だ！」

「了解！」

遅かった。私が銃口を向けるより、ポチが反応するよりも先に、男は懐から取り出した何かを地面に叩き付ける。

吹き出すのは煙。モクモクと広がるそれはこちらから視界を奪っていく。間違いなく、逃げるつもりだ。

「待て！ くっ、ポチ——」

私が指示を出そうとした瞬間、煙の中から何かが複数転がってくる。丸く、黒い何か。それらは1拍して、破裂。辺りに光と音を撒き散らした。

これは——スタングレネードだ。

「——くう、み、耳が……」

やがて光が収まり、目を開くが……かなり霞んでいる。咄嗟に目をつむったつもりだったが、けっこう食らってしまったらしい。耳も酷く痛いし……私もオレンの実が欲しいかな、これは。

「……逃げられた、か」

ある程度良くなった視界で辺りを確認してみるが、三人の男の姿はどこにも無い。間違いなく逃げられた。

いや、それよりも周りが酷い。

「クウン……」

「あ——！ イイツタイ目がアアア！」

「耳痛、おえええ」

「目が！ 目があああ！」

「シロちやんどこ？ ここお？ シロちやああん……」

「……追撃は、無理かな」

感覚が鋭いのがアダになったのかポチは完全にダウン。キヤタピーはひっくり返り、キヤタピー少女は目を押さえて叫び、感覚器官が弱いらしいスタツフがゲロを吐き、ムスカが現れ、ユウカさんは幽霊の如くフラついている。

どう考えても追撃どころではなく、警察より先に救急車が必要な状況で……初ポケモンバトルの結末は、酷い物に終わってしまったのだった。

## 掲示板 初バトルが終わって

【負傷者多数】 お絵描き配信者シロちゃんについて語るスレ p a r  
t187【メデイイイク!】

112：名無しの犬

いやー、変態三銃士は強敵でしたね。

114：名無しの犬

>>112

お、そうだな。死人も出たしな。

115：名無しの犬

>>114

出てねえよ。いや、出たけど出てねえよ。

117：名無しの犬

>>115

どっちだよ。てか死人？ 大事じゃねえか。

120：名無しの犬

>>117

なんだ、知らないのか？

関東で精力的に活動してたシロ民が、テレビに出るシロちゃん護衛任務中に変態三銃士ことテロリスト崩れに襲撃され、重症。どくばりで刺された奴とか、両足粉碎骨折させられた奴とか、色々死にかけだったが、全員がお守り感覚で持ってたオレンの実で一命を取り止め、どく状態の奴もその後急行した増援が所持していたモモンの実で死なずにすんだって話。

とはいえ三途の川まで行った奴がチラホラいるので、死ななかつたとハッキリ言えない事実。

その後は……テレビ見てたら分かるだろ？

122：名無しの犬

>>120

サックス。

ああ、あの女王様シロちゃんな。見てた、ゾクツときた。ヤバイ。

んでどくばりって事はビードルにやられたのか？ シロ民。情けないのか、勇敢だったのか……まあ、きのみのおかげなのは間違いないか。

123：名無しの犬

ひざまづきなさい無限ループですわ。

それ以外もイイ感じ。シロちゃんあんな雰囲気も出せるのな

124：名無しの犬

>>123

変態が居るぞ！ つまみ出せ！

まあ、分からんでもない。俺もゾクツときたし。あのモードのシロちゃんに死ねと命じられたら死ねる。

あと雰囲気云々は……死人が出たとか、ポケモンが悪事に使われたのが許せなかったんでない？ 激おこシロちゃんがああなるのは、色々予想外だったけど。

125：名無しの犬

>>122

悪人に渡ったポケモンは脅威だからな、勇敢だったと言えるんじゃない？ これでポケモンの脅威度も政治家連中に知れるだろうし……そう考えると必要な犠牲だったな。その辺の対応急いで貰わんといけなかったし。

あときのみで助かったけど、きのみので入院してる奴もチラホラいる。

127：名無しの犬

>>125

きのみで入院？ どゆこと？

129：名無しの犬

>>127

きのみは傷は治すんだが、それ相応に身体中からエネルギーを使うらしくてな。大半が栄養失調で入院だ。

即日退院組以外は暫く病院に缶詰めだな。特に両足粉碎骨折させられ、更にどくばり食らってオボンとモモンの実にダブルでお世話に

なつた連中は割りとかヤバいらしい。点滴ものだよ。

130：名無しの犬

>>129

植物学者の奴が人体実験をしたようで申し訳ないとか言ってたやつだな。ポケモンと人間とで効果に差異がどーのこーのとか。未知の成分がどーのこーのとか。

まあ、別にそれぐらいならバッチコイなんだが。

132：名無しの犬

>>129

>>130

おおう……便利なきのみにも落とし穴がって訳か。頼り過ぎは危険って事だな。

134：名無しの犬

>>132

そゆこと。

まあ、シロ民の尊い犠牲のおかげできのみ研究は進んだ訳だ。リスクが無い訳じゃないってな。

135：名無しの犬

無茶しやがって……

(AA略)

137：名無しの犬

>>134

>>135

勝手に殺すなw まだ生きとるわw

ところで病院食マズイんだけど。米しか旨いのないんだけど。野菜味しないんだけど。肉出て来ないんだけど。誰か差し入れくれな  
い？ 肉食いたい肉。カリ城の大泥棒みたく食って治すから。

138：名無しの犬

>>137

よう英雄。おつかれ。

しかし食って治せ……るか。きのみあるし。

差し入れは、ポケモンと素手で戦闘したレポート出すなら考えてやろう（考えるだけ）

140：名無しの犬

>>138

レポートならコラツタニキに提出した後だよ……政治家連中に渡すんだと。

まあ、感想をいうなら『無理ゲ』の一言に尽きるな。素手の奴は勿論、バリステイクシールド持ってた奴がシールドごとやられたのは絶望だったわ。ポケモンにはポケモンで対抗するしかねえよ。アレ。

あ、病院は○○病院な。肉待ってるぜ。

142：名無しの犬

>>140

マジかよ。バリステイクシールドってあれだろ？ 警察の機動隊が持つてるライオットシールドより硬い、鉄板だろ？ それごとやられたのか……そうじゃないかとは思ってたが、ポケモンヤバいな。んで肉な。OK！ 良いぜ、生肉持っていつてやるよお。肉には変わりないだろ？

143：名無しの犬

>>142

H A H A H A……OK、分かった。俺が悪かった。調理済みのをくれ。唐揚げとかジャステイス。

145：名無しの犬

>>143

トウ！ ヘアー！ 良いぜ、ファミチキな。

146：名無しの犬

>>145

お前は俺の英雄だ。

147：名無しの犬

ファミチキで傷が治るのか（曲解）

148：名無しの犬

今更だけどスレタイこれでいいのか？



お絵描き配信したのだいぶ前やぞ？ 今やちよつとした教祖やぞ？

149：名無しの犬

>>148

初心忘れるべからずつてやつだろ。

たぶん。

150：名無しの犬

>>149

なるほどな。

155：名無しの犬

今録画してたポチネキ無双シーン見直してるんだけどさ、ポチネキマジ強いのかな。被弾しつつも相手はキツチリブチのめしてるし、シロちゃん冷静だし、キヤタピー少女エグいし……語るところ多くない？

157：名無しの犬

>>155

多い。語り切れん。

ポチネキが被弾多めなのはそういう戦闘スタイルなのか、短期決戦を狙ったのか。つかサラツと無拍子してたのはビビった。前に見た某野球選手の盗塁シーン思い出したわ。あれSATUMA仕込みじゃないよな……？

シロちゃんが冷静なのは激おこプツツンして一周回ったからだとして、俺もあのモードで命令されてみたいとか思ったのは内緒。

キヤタピー少女は……まあ、うん。頑張ったよね。エグいけど。

158：名無しの犬

>>157

つまりポチネキがレーザービーム放てば地球滅亡……？

てかキヤタピー少女の事をエグいつていうの止めてやれよお！

ちよつと糸でダイレクトアタックしたり、ちよいキツのグルグル巻きにして一方的に叩いただけじゃないか！ ……いや、エグいな。

160：名無しの犬

>>158

ポケモンはガチでビーム撃てるのでその例えはマジでNG。

そして諦めんなよお。どうしてもここで諦めるんだよそこで！も  
う少し頑張ってみろって！ だからこそ、ネバーギブアップ！ ……  
いや、やっぱり諦めて良いわ。擁護出来ん。

161：名無しの犬

>>160

草。まあ、恐慌状態の新兵だったと思えば……ねえ？

162：名無しの犬

>>161

少佐殿！ 大隊指揮官殿！

165：名無しの犬

うん？ もしかして、女王様モードのシロちゃんなら大隊指揮官も  
ワンチャン……？

167：名無しの犬

>>165

うーん？ どうだろうな。それだと女王様というより、冷徹な指揮  
官じゃね？ 何があろうと敵を殲滅するーみたいなの。

……うん。言ってるあの目のハイライトが消えたシロちゃんなら  
やれると思ったのは内緒ダゾ！

169：名無しの犬

>>167

冷徹な指揮官。ピツタリじゃん。

……まあ、そうなるって何で普段ふわーとしてるのに、プツンした  
らそうなるのか？ って謎が出来るんだけどな。

172：名無しの犬

>>169

知ってるか？ 二重人格……解離性同一性障害ってのはな、幼少期  
に凄惨な過去があったりすると発症しやすいらしいぞ。そしてシロ  
ちゃんは親が居ない。近所の人気がつくまでそこそこ時間があつた。  
……後は、分かるな？

173：名無しの犬

>>172

ヤメルンダ！ 闇に引きずり込もうとするなあああ――

174：名無しの犬

その後、173の姿を見た者はいなかった……

176：名無しの犬

>>174

オマエモコツチニコイヨオオオ……

178：名無しの犬

闇深民怖いなあ。戸締まりストIV。

そしてキヤタピー少女はエグいつと。メモメモ。

179：名無しの犬

>>178

メモるなw

180：コラツタニキ

まあ、キヤタピー少女じゃなくてバタフリー少女なんですけどね。

『頭にバタフリー乗せた少女の写真』

あ、こっちは進化時の映像な

『URL』

182：名無しの犬

>>180

コラツタニキ？ 胃薬コラツタニキじゃないか!?

てかもう進化？ いくらなんでも早くね？

183：名無しの犬

>>180

コラツタニキ！ ポケモントレーナーのクセに現場で戦力になれなかつたコラツタニキじゃないか！ 高い飯は旨かったか？ ん？

185：コラツタニキ

187：名無しの犬

コラツタニキが（胃痛で）死んだ！

188：名無しの犬

この人でなし！

190：名無しの犬

>>182

普通に考えれば、経験値は十分に溜まってたんだろ。それなりに鍛えただろう。ポケモン三匹分と、ポチネキとの模擬戦は大きいだろう。

で、コラツタニキと模擬戦でもやったのが刺激になって、二段階進化したってところだろ。

192：名無しの犬

>>190

なるほどな。

ならなんであの場で進化しなかったんだ？ レベルはあの時点で上がってただろ？

193：名無しの犬

>>192

ヒント。スタングレネード。

195：名無しの犬

>>193

ああ……スタングレネードの衝撃で驚いて、進化キャンセルしちまったのか。

納得だわ。

197：コラツタニキ

うぐぐ……胃が痛い。

バタフリー少女に関しては、上で考察してる通りだよ。仕事場がダブってな。軽く模擬戦したら進化するからビビったわ……ああ胃が痛い。

199：名無しの犬

>>197

仕事場？ なんかやってんの？ 胃痛ニキ。

201：コラツタニキ

>>199

胃痛ニキ……いや、俺は権力者連中相手にしてるけど、バタフリー少女は民間人向けに広報活動してるんだよ。

ポケモンがどんなのかーとか、ポケモンバトルは野蛮ではないのかーとか。先日のドンパチはなんなんだーとか。その辺の対応はバタフリー少女がやってるんだが……俺がテレビ局のお偉いさんに会う時間と、バタフリー少女が報道番組に出る時間がダブってな。それでせっかくだからってバタフリー少女と番組内で軽くバトルしたんだよ。ポケモンバトルは本来安全なんですよーコミュニケーションですよーってな。

ちなみに貼ったURLは報道番組のアーカイブだから。詳しくは見る。

203：名無しの犬

>>201

なるほどな。

普段マスゴミ見ないから気づかなかったわ。ちよつと見てくる。

204：名無しの犬

>>201

ちなみに、どっちの勝ちだったんだ？

206：コラッタニキ

208：名無しの犬

コラッタニキが（胃痛で）死んだ！

209：名無しの犬

この人でなし！

211：名無しの犬

いや、なぜこのタイピングで死ぬし。

213：名無しの犬

>>211

そりゃ負けたからだろ。

しかも負けた理由は……運動不足のせいとか、そんなオチで。

215：名無しの犬

>>>213

あー……コラツタニキのコラツタ、マトモにバトルしたことないもんな。高級チーズ食ってばっかりで。

216：名無しの犬

>>>215

胃痛と緊張で飯の味が分からないニキの横でなw

217：名無しの犬

H A H A H A

218：名無しの犬

H A H A H A

220：コラツタニキ

ヤメロオ。ヤメロオオオ……

223：名無しの犬

そーいやポケモンバトルの反響ってどうなん？

面白そう？ それとも野蛮？ どっちに傾いてる？

225：コラツタニキ

>>>223

お偉いさんの方はどっちでもないな。ポケモンは生態上バトルしないとヤバいってことは伝えてあるし、それよりも先日みたいなポケモン使った犯罪やテロを不安視してる感じだ。あの日の番組見てて半ば発狂してたし。

今はその対策とか、法案とか考えたり、根回ししたりしてる。あのテロリストを逮捕するのを手伝う確約を取られたりとかもしてる。うん、吐きそう。てか吐いた。中身カラだった。胃が痛い。もうお腹の中身があんこの連中の相手したくない……うっ胃痛が。

227：名無しの犬

>>>225

強くイキ。まあ、コラツタニキはユウカ嬢がポケモンゲットするまでその調子やろうな。適任じゃないし、ムカつくしのダブルパンチャ。どっちの比率が高いかは知らんが……一つ言えるのは、女の嫉妬は根深いって事だな！

229：コラッタニキ

230：名無しの犬

コラッタニキ（の胃）が死んだ！

231：名無しの犬

この人でなし！

232：名無しの犬

もう誰かきのみで胃薬作ってやれよ……

233：名無しの犬

>>223

鳥を監視した感じだと、民間の方は野蛮寄りだな。

ポケモンで悪事を働く奴もいるし、なんか怖いって意見が多い。テロリストがバカやったし（あるいはこれが狙いか？）シロちゃん冷徹な指揮官モードでやっちゃったからなあ。その辺も影響してる感じ。あと未だに信じてない奴。この辺はキヤタピー少女……改め、バタフリー少女の活躍次第だわ。

ただ楽しそうって意見の奴もチラホラ居る事は居る。これはキヤタピー少女が生き生きとやったのが良かった感じだな。シロちゃんは……うん。いつも通りなら良かったんだけど、プツンしちゃったから……（目逸らし）

235：名無しの犬

>>233

シロちゃんプツンはしやらない。あの子ポケモン大好きやから。で、なるほどな。奴らテロリストは狙ってあのタイミングでポケモンを使って襲って来たって事か……これ以上ポケモンを持つ人間が増えて、自分達が集めた銃火器が無駄にならないように。となるとあの三人組は捕まってもいいザコなのかも分からんね。

237：コラッタニキ

>>235

あの日番組見てた警察のお偉いさんもそんな見方してたよ。あれは切り捨て要員だなんて。まあ、拳銃まで持ち出したし捕まえる為に

人員は割くらしいけど、それで本丸までは辿り着けないだろうってさ。

あとシロちゃんが警察に提出した拳銃、中華製のコピー品だと。密輸品としてはありふれてるから、これだけで追うのは厳しいってさ。

それにポケモン関連の法律がないから、ポケモンで犯罪を起こされても逮捕しにくいとかなんとか。ああ、その件で話してこなきゃ……

240：名無しの犬

>>237

警察も役に立たない……というか、そうか。ポケモンの法律がないから、そっち案件では逮捕しにくいし、逮捕しても刑が微妙になるんだな。

そういう意味だと拳銃出してくれて助かったのか。

241：名無しの犬

>>240

代わりに一般人のポケモンへの目が微妙な事になったがな！

その辺バタフリー少女が頑張ってるけど……イメージの払拭にはちよつと時間がかかりそうだわ。

ホント、アイツら余計な事してくれやがった。

243：名無しの犬

>>241

それさ、シロちゃんにもう一回テレビ出て貰えば解決しない？ 無理？

245：名無しの犬

>>243

そりゃ一般人視点からすればポケモン大好きな優しい子（怒るとコワイ）だからウケはそこまで悪くないだろうけど、それやるとテロリスト連中呼ぶ事になりかねないからな……

247：名無しの犬

>>245

難しいな……シロちゃんはポケモンとのんびりしたいだけで、俺らはそれを眺めていただけなのに、なんでこうなるのか。



249：名無しの犬

>>247

ほんそれ。

もう全人類シロちゃんバンザアアイしてれば楽なのに……

251：名無しの犬

白様バンザアアイ！

253：名無しの犬

Y p a a a a a a a a !

254：名無しの犬

着剣せよ！

255：名無しの犬

着☆剣！

256：名無しの犬

砲塔を、ゆっくり、動かして下さい。

257：名無しの犬

射撃用意よし！

258：名無しの犬

いよいよシロちゃんが世界一であることを世に知らしめる時が来た。

259：名無しの犬

アルビノ幼女の威力。現実逃避者どもよ、思い知るが良い……！

260：名無しの犬

神☆仏☆照☆覧

261：名無しの犬

第一射、撃ち方始めエ！

262：名無しの犬

バアン

『ポチを抱き締めるシロちゃんの写真』

263：名無しの犬

バアン

『ハイライトの消えた指揮官モードシロちゃんの写真』

264：名無しの犬  
バアン

『ドレスアップしたシロちゃんの写真』

267：名無しの犬

>>262<<264

お前らなんでそんな写真持つてるんだよw

てかシロちゃんこういう顔してたのな。スツゴい可愛いじゃん。  
知らなかった。

269：名無しの犬

>>267

あゝ？ お前お前お前！ シロちゃんの全国配信を見なかったのかア!?

271：名無しの犬

>>269

仕事でな…：今からアーカイブ探してくるところ。

274：名無しの犬

>>271

なんだ、そうか。兼業は大変だな。

ほらよ『URL』

275：名無しの犬

>>274

サンクス。助かるわ。

278：名無しの犬

和気あいあいとしてるところ悪いけどさ、お前ら気づいてるか？

280：名無しの犬

>>278

何が？

283：名無しの犬

シロ民捕獲ポケモン コラツタ 合計1匹

テロリスト捕獲ポケモン ビードル マンキー オニスズメ 合

計3匹

俺らが無能だって話だよ

285：名無しの犬

286：名無しの犬

287：名無しの犬

288：名無しの犬

きや、キヤタピー見つけたの俺らやし（震え声）  
うん、今やバタフリー少女やし？

289：名無しの犬

そ、それにポッポも見つけたじゃないか！

291：名無しの犬

で、即時投入可能な戦力は？

テロリストが暴れたときに鎮圧に迎えるのは何人いるんだ？

言つとくが、ポケモン相手じゃ警察は無力だぞ。バリステイクシー  
ルド持ち込んだシロ民が証明しちまったからな。

292：名無しの犬

正直、スマンかった。

293：名無しの犬

本当に、申し訳ない。

295：名無しの犬

更にいうと確認出来たのが三匹であって、相手の手札がそれで全部  
かはまた別の話だしな。

ポッポはまだ捕まってないのが確認されてるが……密かに搜索し  
てるピカチュウが全く見つかってないし。

297：名無しの犬

298：名無しの犬

299：名無しの犬

300：名無しの犬

あれ？　もしかして俺ら、マジで無能……？  
変態テロリストどもに負けてる……？

302：名無しの犬

だ、大丈夫だ。まだ、まだコラッタニキが居る……！

303：名無しの犬

そうだ。まだコラッタニキがいる！

305：名無しの犬

コラッタニキ！　シロ民の魂！

308：コラッタニキ

いや、無理。これ以上仕事増えたらマジでくたばる。

……おかしいな。なぜ俺は社畜時代に戻っているのだろうか……？  
関東に来る前に辞めたはずなのに。

310：名無しの犬

>>308

もういい……！　休め、休むんだ……！

311：名無しの犬

>>310

ところがどっこい。彼は休めません……！

今権力者との連携を怠る訳にはいかないからです……！　故に、彼の胃痛は、治らない——っ！

313：コラッタニキ

グフツ……

314：名無しの犬

カスタム

315：名無しの犬

頼みがあるんだが、コラッタニキを起こさないでやってくれ。死ぬ程疲れてる。

317：名無しの犬

シロちゃんの面倒は俺が確り見といてやるよw

318：名無しの犬

>>317

面白い奴だな。気に入った。今すぐ前線へ送ってやる。

319：名無しの犬

うわあああああ……

321：名無しの犬

317はどうしたの？

322：名無しの犬

>>321

(ポケモン搜索の最前線へ) 放してやった。

325：名無しの犬

口だけは達者なシロ民ばかりよく集めたものですな。全くお笑いだ。催眠術野郎が居れば、奴も笑うでしょう。

327：名無しの犬

325君。シロ民は皆(シロちゃん国の)愛国者だ。

328：名無しの犬

ただのカカシですな。現状の戦力ではテロリストどもにまばたきする間に(パチンツ)皆殺しにされる。忘れない事だ。

329：名無しの犬

寝言言つてんじやねえよw

331：名無しの犬

野性のポケモンを最初に見つけたのはシロ民です。元シロ民じゃありません。我々の功績です。暫し遅れをとりましたが、今や、巻き返しのときです。

333：名無しの犬

何が始まるんです？

335：名無しの犬

大惨事大戦だ。

337：名無しの犬

／デエエエエン／

340：コラツタニキ

あー……流れぶった切って悪いが、本格的に俺ら無能っぽいぞ。

『ピカチュウとバタフリーのツーショット写真』

何か送られて来た。何でもバタフリー少女の友人がゲットしたらしい。その様子は夕方のワイドショーで流すってさ。

342：名無しの犬

アイエエエ!? ピカチュウ！ ピカチュウナンデ!?

343：名無しの犬

ピカチュウゲットなんてベイビー・サブミッション。そう思ったときもありました……

344：名無しの犬

こ、こんなのは欺瞞だ！ 俺は詳しいんだ！

345：名無しの犬

ピカチュウⅡサンをゲット出来ればキンボシ・オオキイでサンシタシロ民からカチグミシロ民になれる……そう思ってたのに。

356：名無しの犬

ゴウランガ！ バタフリー少女の友人は実際奥ゆかしい人物だ。

しかし無能のシロ民は決断的にセブクすべきでは？ シロ民はいぶかしんだ。

357：名無しの犬

シヨツギョ・ムツジヨ。これもマツポーの世の一側面か。

358：名無しの犬

ナムアミダブツ！ ヤバレカバレの悪あがきすら許さない驚愕の事実のエントリーだ！ おお、ブツタよ。寝ているのですか!?

360：名無しの犬

……なあ、ヤバくね？ 流石にヤバくね？ このままだとガチで俺ら無能じゃん。

363：名無しの犬

>>>360

だよな。つてもどうにもならんだろ。ポケモンとの遭遇は運次第だし……人員だってそう多くない。てかテロリストどもに相当数やられたから投入可能な人員はかなり減ってるぞ。

365：名無しの犬

>>363

何人やられたんだっけ？

367：名無しの犬

>>365

二桁はいつたと聞いた。侵入時のアンブッシュで4、5人。追撃しようと思いを焦ったのが返り討ちにあって更に追加……最終的に現場で活動していた戦力の九割近くがやられたと聞く。

しかもこのとき活動していたのは特にアクティブな連中だったから……関東活動中のシロ民は中核部隊を失った状態になってる。

控え目にいっても役に立つ状態じゃない。人員の補充しないとどうにもならないだろうな。

368：名無しの犬

>>367

マジかよ……あれ？ このままだとテロリストどもがいいように暴れ回るんじゃないのか？ 警察の力はまだ借りれないんだろ？

370：コラツタニキ

>>368

無理。銃云々はともかく、ポケモン云々は警察上層部がどう動くか決まってるから、ポケモンに関しては警察任せにしてたらテロリストどもが立て直す方が早い。あっちにはどうもスポンサーがいるみたいだからな。それも国家レベルの。

前例がないとか二の足踏んでる場合じゃないってのに……悪いけど、警察のポケモン部隊の設立はまだまだ先になる。

371：名無しの犬

テロリストに国家レベルのスポンサー……そのスポンサーの心当たり、片手の数ほどしかないんですがそれは。

372：名無しの犬

>>370

なるほどな。

となると暫くは俺らシロ民でポケモンゲットして、テロリストに渡

さない様にしないといけないが……次はどこになるんだ？

373：名無しの犬

>>371

分からんぞ、ヨーロッパの辺りならシレッとした顔でスパイを送り込んでいてもおかしくないし驚かない。紅茶とか、紅茶とか、紅茶とか。

374：名無しの犬

紅茶への厚い信頼。

375：名無しの犬

>>372

ピカチュウが出て来たから、既にトキワの森まで来てるって見ていい。

んで、シロちゃんの地図を見てみると……次に近いのはデイグダの穴と3番道路。そしてオツキミ山だ。

376：名無しの犬

>>374

デイグダは穴を掘るし、マグニチュード持ってるし早めに捕まえておかないとヤバいな。なんとかこっちで抑えておきたい。それと3番道路はシロちゃん Wikiによればニドランか……こいつら毒持ってるし、ゲットしとかなないと死人が出かねないな。

377：名無しの犬

>>376

オツキミ山もヤバいぞ。イワークが居る。あの巨体が暴れ回れば

……

378：名無しの犬

ん？ イワークってオツキミ山だったけ……？

379：名無しの犬

>>377

人とポケモンの共存は遠退く事を強いられるな。

380：名無しの犬

ちよつと待て。となるとこれはあれか？ デイグダ穴、3番道路、



オツキミ山に相当するだろう場所を推測し、そこに戦力を分散配置しつつ、ポケモンを必ず確保しろってのか？

無理じゃね？ 明らかに人手が足りない。

381：名無しの犬

今までだってなんとかかんとかだったのに……人員が減った状態で、広い地域からポケモン一匹を見つけ出す？ 無理だろ。

383：名無しの犬

>>380

>>381

だがやるしかない。我々には後がないんだ。人員を増員し、戦い抜くしかない……！

385：名無しの犬

>>383

関東に来れる奴はもう軒並み来てるだろ。むしろ引きこもりのネト民がこれだけ集まったのが奇跡だったんだよ……命懸けのボランティアだしな。皆が皆、コラッタニキみたいにか家財引き払って来れる訳じゃない。

387：名無しの犬

畜生！ このままじゃ皆死ぬぞ!!

388：名無しの犬

>>387

だが今日じゃない（開き直り）

390：名無しの犬

せめて日銭出るなら今やってるバイト即刻辞めて、関東行くんだけどな……流石にボランティアは餓死する。

392：名無しの犬

ワイ、ブラック企業のサラリマン。最低限の給料と休みをくれるんなら、即刻会社辞めて喜んで行ける。

394：名無しの犬

俺もだな。最低でも日銭ないと厳しい。二、三日ならともかく、長期で張り付けてなると尚更な……

395：名無しの犬

やっぱそういう奴は多いか……でも俺らも金が有り余ってる訳じゃないしなあ。

397：名無しの犬

>>395

だが逆に考えれば、日銭さえ出せるんなら人手は一気に増えるという事でもある。……出せればの話だが。

400：アイドルネキ

良いわよ。出すわ。

私のボディガード名目で、取り敢えず先着100名。給料はそこそこよ。

402：名無しの犬

!?

403：名無しの犬

!?

404：名無しの犬

アイドルネキ!? そうか、ユウカお嬢様なら……!

405：名無しの犬

行く！ 行きます！ 喜んで行きますお嬢様アアア！

407：名無しの犬

>>405

決断早いなw

408：名無しの犬

>>407

バヤカロウコノヤロウ！ お嬢様の『そこそこ』と俺らの『そこそ

こ』が同じだと思ってるか!?

409：名無しの犬

!?

410：名無しの犬

>>408

なん、だと……!?

411：名無しの犬

>>408

そ、そうか！ という事はお嬢様のいう『そこそこ』の給料は……  
今の俺の給料より多い！

ヒヤッハー！ 栄転だアアア！ 俺は関東に行くぞおお！  
ジヨジヨオオオ！

413：名無しの犬

>>411

いちいちジヨジヨに報告するなしw

……さて、やはり関東か。いつ出発する？ 私も同行する。

415：名無しの犬

俺ら関東まで突っ走れ！

……

……

……

「良いんですか？ ユウカさん」

「良いのよ。頭数が足りないのは分かってたから、むしろ丁度良かったわ」

冷えきった私が好き勝手やってしまったあの日から数日。私は相変わらず伊藤家に滞在し、ユウカさんのお世話になっていた。

私は今日までポチの様子を見たり、東郷お爺ちゃんに報告したり、あの日のバトルの反省点を振り返ったりして日々を過ごし。ユウカさんはどこかに出掛けたり、偉い人と話をしたりして過ごしていたのだが、今日は二人揃って時間がとれたので、他愛ない話をしながらシロ民の様子を眺めていたのだ。

するとユウカさんがシロ民に給料を出すと書き込んで驚いたのだ  
が……ユウカさんにとっては何でもないようだった。

「それに、いつまでもボランティアで動かれると色々面倒事を呼び込みかねないしね。……ああ、ついでにリヴァイアサン号の人員も降ろ

しましようか。どうせ暇してるでしようし」

「リヴァイアサン号の人達……そういえば、私はあまり見てないです」  
「……良いのよ、シロちゃんが見るような連中じゃないから。アイツらは」

「は、はあ……？」

よく分からないが……どうやらポケモン捜索の人手は一気に大きくなる様だ。デイグダの穴、3番道路、オツキミ山。その全てをくまなく抑える事が出来るだろう。

これなら。

「ポケモン。奴らより先にゲット出来ますよね」

「……ええ。勿論よ」

ユウカさんがそういうなら大丈夫だろう。

ポケモンが、あんな奴らに使われるのは可哀想なのだ。それなら、私達が……いや、いつそのこと奴らを撃滅してしまえば。

「——次は、逃がしません」

「つ……そうね」

先ずはポケモンをゲットしよう。

そして、来るべき日に奴らを——殲滅するのだ。

## 第20話 某月某日、首相官邸にて

私の……いや、人類最初のポケモンバトルから一週間と少しが過ぎたある日。私はユウカさんとポチと一緒に、伊藤家の居間に居た。

「後少しで、発表……」

「グルウ……」

「そうね」

この一週間と少しの間に起きた事はあまりない。ユウカさん主導で人員の増強が行われ、訓練と配置、そしてポケモンゲットが進んでいる——通りすがりのカップルがニドラン♂♀を、シロ民がデイグダとイシツブテを確保したらしい——事。キャタピー少女改め、バタフリー少女がテレビに出て、ポケモンとポケモンバトルのイメージ改善に取り組んでいる事……それぐらいだ。

後はコラツタニキや総理が頑張つてポケモン特別法案の草案が出来たぐらいか。

「……そろそろ、時間ね」

そう、ポケモン特別法案。人とポケモンが共に生きていく為の基本ルールが、ついに出来上がったのだ。とはいえ、まだ可決した訳ではないのでやる事は多いが……それでも、私達は確かに前進している。

そして今日この日、それを象徴付ける事が起きる予定だ。

「テレビ、つけるわね」

「お願いします」

ユウカさんが居間の大きなテレビの電源を入れ、チャンネルを合わせる。映し出されるのは……政府の偉い人が何かを発表する例のある場所だ。確か、首相官邸だったか。画面端のテロップには『ポケモンに関する政府公式会見』とある。

——いよいよだ。いよいよ人とポケモンの歴史が始まる。

今日あそこで行われるのは『日本政府がポケモンを認める』ただそれだけ。だが、それによって発生する問題は多岐に渡り、同時に始動するプロジェクトも多い。

リスクと、メリット。

普通なら日本政府はリスクを気にして素早く動けなかっただろう。そして動けないうちにしがらみが増え、邪魔をされ、人とポケモンの歴史は闇から始まる事になったはずだ。

しかし、そうはならなかった。シロ民を筆頭に多くの人が人とポケモンの未来の為に頑張ってくれたのだ。

人と人を繋ぎ、利を説き、準備を整えた人が居る。

胃痛に耐え、威を示し、ポケモンがなんたるかを語り、理解を広めた人が居る。

公の場でポケモンを語り、魅せ、人とポケモンの未来を示した人が居る。

将来どの様な問題が起きるのかを考え、付き合わせ、思索し、法案を作った人が居る。

ポケモンを探し、捕まえ、問題の発生を未然に防いだ人が居る。

——皆の協力があって、今日がある。

誰か一人でも欠けていたら、人とポケモンの歴史の始まりは今日ではなかっただろう。ずっと先、あるいは闇に沈んでいたかも知れない。

だが、私達はやりきった。国民に事前に周知させ、法案を用意し、反対勢力を抑えきって……今日を迎える事が出来たのだ。

確かに、私達の歩みはテロ行為により多少後退はした。だが、国民のポケモンに向ける目は概ね改善されている。『なんだか怖い存在』ではなく『友達になれる存在』へと。正直、マスメディアを使ってプロパ……ではなく、事実の周知を行ってくれたユウカさんを筆頭とする伊藤家と、バタフリー少女やピカチュウ少女達、ポケモンの魅力を伝えてくれた人達には頭が上がらない。彼ら彼女ら無くしては、この日は決して来なかっただろうから。

「！ 来た……」

一度だけ会った事のある人物がテレビの画面に入る。総理だ。

眩しいフラッシュ、総理は画面中央へと、そして——

『本日、日本政府として、重大な発表を行う事となりました』

歴史のページ目が、始まる。

.....  
.....  
.....

総理の口から最初の一言が発せられ、会見は……いや、日本中が緊張に包まれた。誰も彼もが分かっている。何の発表かなど。テロツプにも書かれているし、それこそここ数日はどのテレビも同じ事柄を扱っていたのだから。

だが、それでも。いや、だからこそ、緊張が走った。まさか？ 本当に？ あれを政府が認めるのか？ と。もし政府が公式に認めるなら、あの生物達は嘘でも幻想でもなんでもない、ただの現実だと確定してしまうと。

「本当に言うのか？」

「否定かも知れん」

「どちらせよ、ニュースにはなる」

人々のざわめきは暫く。しかし制止の声も上げず、続きも発しない総理の様子にゆっくりざわめきは静まっていき……そして。

「現在日本全国各地で発生している、異常な果実。並びに、関東地方で見された複数の、新種の生物。日本政府はこれらの異常を『ポケモン』によるものであると、断定しました」

あまりに突飛な、発表者の正気を疑って然るべき内容。しかし、連日の報道やバラエティー企画によって、人々は少なからずポケモンを信じていた。だから、だろうか？ 静寂は一拍。直ぐにフラッシュがたかれる。歴史的な瞬間を捉えようと。

「現在、我々はポケモン特別法案を準備しています。近いうちに、ポケモンに関する法案が施行される事になるでしょう。それまでの間、各地でポケモンに関する勉強会や、既存メディアによる周知等が行われる予定です。国民の皆様には、どうか怖がらず、彼らポケモンについて知って頂きたいと考えています」

語られたのは眉唾物の、ファンタジーな存在に対して、日本政府が本気で対応しているという事実。そして前へ踏み出すべきだという流れ。

人々は確信せざるを得なかった。彼ら『ポケモン』は現実で、ついに政府が動いたのだと。踏み出さなければ、置いて行かれると。

「……このポケモンについて、ここで語れる事はそう多くありません。連日のポケモン報道を聞いている方には耳タコな話だけです。でするので、私からポケモンについて言えるのはただ一言——日本政府は、ポケモンとの協調路線を歩む予定です。敵対するのではなく、友人として。手を取り合って生きていく……そんな未来を目指し、歩いていく事になるでしょう」

その瞬間、人とポケモンの歴史の一ページは決まった。人がポケモンと敵対せず、友人として手を伸ばす事が公に伝えられたのだ。

それに対する多くの反応は……安堵だった。

『よかった……』『当然よね』

『大勝利!』『UC流しとくか』『コロンビア』『頑張った甲斐があったな……』『ちくわ大明神』『俺の胃痛、プライスレス』『慣れだしてて草』『誰だ今の』『人とポケモンの歴史がまた一ページ……』『これで俺らも教科書入りか』『幻想入りみたいに言うなしw』『歴史が始まったのか……』

『これで私もシロちゃん撫でたり出来るかなー?』『仕事多いから無理』『(´;ω;)』『ほら、次の現場行く。初期のポケモントレーナーの私達に休んでる暇なんてない』『。。。。(ノ口、)』

ネットで、あるいは個々の胸中で溢れる思い。それらはバラバラではあったが、人とポケモンが共に歩いていく事を喜ぶ一点においては、全く同じであった。

「——では、このまま記者会見へと移りたいと思います。発言のある方は挙手をお願いします」

予定でも詰まってるのか、公式会見はそのまま記者会見へと移り変わった。そうなれば血気盛んになる連中もいる。マスコミだ。

「一週間前にもポケモンを使った犯罪がありました。この点についてはどう考えているのでしょうか?」

「その件については私も知っていますが、一概にポケモンが悪いとは言えません。包丁は料理をする為にありますが、犯罪にも使えます。



それと同じでポケモンは飼い主次第なところがあり、だからこそ法整備と国民の皆様の理解が必要だと考えています」

「それはつまりポケモンが危険な事にならないのでは？ 隔離や駆除も必要ではないでしょうか？」

「確かにポケモンはライオンや熊よりも危険です。しかし同時にそういった動物よりも知性がある。であるなら隔離や駆除で遠ざけるよりも、友人として付き合っていく方が危険がないと考えます」

「その根拠はどこにあるのでしょうか！ 事実無根ではありませんか！」

「皆様も見たとは思いますが、一週間前の事件ではポケモンが悪事に使われると同時に、悪事に使われたポケモンを制圧したのもポケモンです。毒を以て毒を制す……とまでは言わないでしょう。しかし、ポケモンと友人関係を築いていけば、いざというときそうやって対抗する事も出来ると考えます」

「それは野蛮なのでは!? 何より動物虐待ではありませんか！」

「一週間前に行われたアレはポケモンバトルと言われる、ポケモンを飼うにあたって必要な物だと考えられています。全てのポケモンがそうだとは言えませんが、大多数のポケモンはああやって闘争本能を発散させる必要があります、動物虐待には当たらず、また野蛮というには理性的な面が多いかと思われまます」

「その野蛮な行為に子供が参加していた事は！ 危険ではありませんか！」

「勿論、自制心が育っていない子供がポケモンを持つのは危険です。ですので今後の法整備によって何らかの規制、あるいは資格制度等を設ける事になるでしょう」

「海外からポケモン被害による賠償要求が来ていますが、いつ賠償する気ですか！」

「その様な事実は現在確認されて居らず、今のところ賠償は考えておりません」

騒然とぶつけられる様々な問いに、一つずつ答えていく総理。その歩みに迷いはなく、質問の内容をおおよそ予想していた事が伺えた。

しかしその表情はどこもなく暗い。否定的な意見ばかりである事に嫌気が差している様子だ。やはりまだ公式で認めるには早かったのか？ そう総理が内心で思い出した頃。

「――動画の者ですが……」

その担当者が質問の機会を与えられる。その内容は……

「ポケモンをゲットしてバトルしてみたいが、どうすればいいのかわからない。今現在モンスターボールは手に入るのか？ そういった声が上がっていますが……どうなのでしょう？」

ある種ポジティブな質問に総理の目に生気が戻る。そうだ、こう来なくては遣り甲斐がないと。そういった声の為に自分達は法案を煮詰めてきたのだからと。

「はい。ポケモンバトルに関しては法整備と同時にルール設定、及びそういった教育機関ないし学べる場所を……仮称名『ポケモンジム』を開設する予定です。ですのでポケモンバトルがしてみたい、ポケモンバトルで勝ちたい、という方はそこで勉強してもらおう事になりますね。モンスターボールについては――現在量産化を予定しています」「なるほど。しかし量産化、ですか。アレはかなり高度かつ未知の技術が使われており、解析するのも難しいと聞きましたが……？」

「はい。ですので、今すぐ量産化する訳ではありません。しかし、一ヶ月以内には日本製のモンスターボールが一般向けに販売できる様に、官民一体となって準備を進めています」

「おお……それは素晴らしい」

勉強不足らしい記者達……全体の約半数を置き去りにして進む話。着いていける者が熱心にメモを取る中、話は更に深みへと進んでいった。

「性能についての声も上がったのですが……お聞きできますでしょうか？」

「残念ながら全ての情報を開示する事は出来ません。しかし、ポケモンの家としての……いわば居住性能に関してはほぼ同レベルを維持出来る予定です。またデザイン等もそのままの予定です」

「なるほど。……ということは捕獲性能や、お値段の方は？」

「機密事項となります。……が、解析に酷く難儀しているとの報告もありますので、捕獲性能は下がってしまうかもしれません。価格については可能な限りの低コストを目指していますが……なにぶん初めての物ですので、それなりの価格となってしまう可能性があります。その場合でも中高生が頑張れば手に入れられる価格に抑えるか、何らかの制度を設ける予定です」

語られたのはモンスターボールの性能。メモを取っている記者達は熱意凄まじく、置いていかれている者はつまらなそうに聞き流したソレだが……ネットの反応もおよそ二つに割れた。

『これで俺もポケモントレーナーになれるのか』『子供が買えるのは危ない』『有給の申請しとくか……』『一ヶ月はちと長いな』『俺、ブラツク企業やめてポケモントレーナーになるんだ……』『よく分からんな』『性能下がるのか……まあ、仕方ないか』『我が日本国の技術力は世界一イイイ！ 出来ん事は無いイイイ！』『万いくのか？ だとしたら嫌だな』『町工場もフル稼働中！ 昨日まで暇だったのに！』『首相も頭がおかしくなったか。政権交代だな』『テレビで見たときから楽しみにしてたワイ、後一ヶ月全裸待機』

楽しみだという者、アレコレ理由をつけて忌避する者。その二つだ。どちらが正しいのか、利益が出るのか、主流なのかは……今、この日には分からない事だった。

「なるほどでは質問を……いえ、最後に一つ、宜しいでしょうか？」  
「なんででしょう？」

「一週間前の事件でポケモンバトルを行った少女達のうち、白髪の少女の姿が見えない事に不安を感じている方も居るようなのです。現在どうなっているのか、お教え頂けるでしょうか」

「機密事項です」

取り付く暇もなく、バツサリと切り落とす総理。これに驚いたのは質問者や記者達だ。今までは噛み付かれるのをよしとしていたのに、この件だけ即座に払い落とされた……

——何かある。あの少女には何かある！

そうマスコミが思うのも無理はなかった。

それは総理の落ち度か、それとも……………

「ま、まさか、重症を負っているのでしょうか？」

「機密事項です。彼女に関しては何もお答え出来ません」

「せめて安否だけで」「それはポケモンバトルで死人が出たという事では?!」「え、ちょ……………」

「やはりポケモンは危険なのではないでしょうか!？」

「今すぐ規制すべきかと思いますが、いかがですか!？」

「彼女から危険なポケモンを取り上げる事も検討すべきでは!？」

「政府としてはどう責任を取るおつもりでしょうか!？」

「総理!」「総理!!」

騒然と、アレコレと好き勝手な論調をぶちまける記者達。総理は怒号の中で視線を巡らし、批難の声を上げる者をザツと確認していく。

——今までメモを取っていなかった者達が殆んどか。

それを最低限確認した総理は進行役が制止させるのに任せ、ある程度場が落ち着いたので確認して話始める。

「彼女に関しては現在その全てが機密事項であり、今お話出来る事は何もありません。…………ですが、一つだけいうなら、特に怪我等はしておらず、彼女は彼女の夢に向かって歩いている。とだけお話しておきます」

「なるほど、有り難うございました」

ホツとした様子で、しかしそそくさと席につく質問者。なぜそそくさとしたのかは…………考えるまでもない。揚げ足を取ろうと必死な者達が噛み付いたからだ。

巻き込まれてたまるものか。そんな考えが透けて見えており、事実マスコミの噛み付きはその後暫く続き…………

「静粛に!」皆さん静粛に! お時間となりましたので記者会見を終了します!!」

進行役のその声で、一旦打ち切りとなった。とはいえ騒ぐ人間は相変わらず騒いでいたが…………総理が退出しては騒ぐ理由もなく。三々五々解散となる。

「政府はシロちゃん寄りか。それもガツツリと…………さて、スポンサー

に報告だな」

そこにどんな思惑があったにせよ、どんなモノが渦巻いていたにせよ、政府からの発表は終わった。

人とポケモンの旅が始まったのだ。

閑話 ポケモン研究所所長はソウトウカツカしているようです

首相官邸で歴史的な発表が行われた……その直ぐ後、とある一室では無数の人々が頭を付き合わせていた。彼らの多くは白衣を身につけており、医者か、さもなければ何らかの研究員である事を連想させる。そして、その連想は間違っていない。彼らはいよいよ最近設立された研究機関……ポケモン研究所の研究員であり、今彼らが顔を付き合わせている一室は研究所の所長室だ。

今また新しい研究員がガチャリと扉を開けて部屋に入って来る。そしてそれが切っ掛けなのか、彼らの中から一人の男が口を開いた。「先程首相官邸で発表がありました。政府はポケモンを公式に認め、彼らと良い関係を築いていく事を正式に表明。これにより人とポケモンの関係が本格的に始まり、同時に多くのプロジェクトが始動、我々の活動も本格化していく事が予想されます」

語られたのは先程行われた総理自ら行った政府公式の発表についてだ。研究員らしい男はタブレットに号外記事を映し出し、それを指差しながら説明する。

その説明を受けたチヨビ髭が特徴的な男……この研究所の所長は落ち着いた様子で頷き、指をクルクルと回しながら返答する。

「モンスターボールの生産もあと少しで可能になるからな。我々は安泰だろう」

「所長……モンスターボールは……」

「総理がモンスターボール発売時期を一ヶ月以内と発表してしまいました。このままでは間に合いません」

言い淀んだ男の言葉を引き継いだスキンヘッドの男が、衝撃的な事実を告げる。それは総理の発言が間違いであり、その責任が彼らにあるという物。そう、総理はモンスターボールを発売出来ると言ったが、実際にはまだ完成すらしていなかったのだ。

あまりに衝撃的過ぎる事実に、所長は言葉を失って沈黙。やがて再

起動した彼はプルプルと震える手で掛けていた小さな眼鏡を外し、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……モンスターボールを一ヶ月以内に発売出来ると思う者だけ残れ。アンポンタン」

それは選別の言葉。その内容に合う人間が何人いるかと思えば……かなり少ない。何せ殆んど人間が出て行ってしまったのだ。無理だと思っているのか、それとも逃げたのか……いずれにせよ、部屋にはスキンヘッドを初めとした数人しか残らなかった。

そして所長は彼らをサツと見渡し、興奮した様子で怒声を発する。

「言っただろうが！ モンスターボールを生産出来るのは最速で一ヶ月だと言っただろうが！ 一体どこの誰が伝達ミスをしたのだ!？」

その結果がこれだ。あと一ヶ月でモンスターボールを発売など出来るか！ そもそも誰だ、モンスターボールとかいう訳の分からない物を持ち込みやがった奴は！ コイツの意味不明さに何度吐き気を覚えたと思っている……モンスターボールなんて大嫌いだ！」

「しかし所長。今多くの人々がモンスターボールを求めているのです。一刻も早くと……」

「うっさい！ 大っ嫌いだ！ バァーカ！」

「所長、お氣を確かに！」

「こんなの解析させられて正気で居れるか！」

立ち上がりながら罵声を部下に浴びせ、錯乱していると思われる様子を散々見せた後、所長は手に持っていた2本のペンを机に叩きつける！

「チクシヨームエエエ!!」

発せられた罵声。それが今の所長の心情の全てなのだろう。だが彼は止まらない。止まる事なく畳み掛ける様な怒声が続く。

「だいたいなんだ、あのモンスターボールとかいう訳の分からない技術で作られた代物は！ ちょっと調べただけでウオツと驚く情報ゴロゴロ出てきおって！ いや、今思えばあの若いのが私の先生と連名でコレを送って来たときに察するべきだった！ 私の危機管理に対する判断力足らんかったあ……！ ああ私もやっておくべきだっ

た！ 疑わしきは全て遠ざければ良かった……スターリンのように！」

語られたのはモンスターボール解析の際の心情と後悔。しかし大きく腕を振って歴史上の人名を叫ぶ所長の目は……明らかに正気ではなかった。何かに取り憑かれたかの様な有り様――

そんな所長を見ながらまだ怒声が続くのか、そう研究員達が思っている……所長は途端に落ち着きを取り戻して元の椅子へと座り、熱がこもった声を発し始める。

「私はポケモンについては全く知らなかった。だが私は一人の力でやってやった、モンスターボールの基礎研究を！ シロちゃんを知ったのはその後だ……もっと早くに見れば良かったと思つたよ。ああ今では私もシロ民だ。シロちゃんのおっぱいツルンペタン！ だが元々日本では胸は慎ましい方が良いとされていたのだ。別に変な事など無い。私は日本古来の感覚を持っているだけだ！」

胸を叩き、胸を語る。そんな彼もシロ民になつたらしい。明らかに正気を失った彼に何があつたのか？ その答えは部屋の外に出た女性研究員の一人が、所長のおんまりな発狂具合に泣いている女性研究員に掛けた言葉にあつた。

「所長、……このところ全く寝てないから……」

どうやら睡眠不足が原因らしい。目覚ましか、暇潰しか、それとも睡眠導入として見たのかは不明だが……そんな状態で人の心の揺れに入り込む不知火白の声を聞いたのは致命的だったろう。それではクトウルフやSCPと噂される彼女の声に耐えられるはずがない。

「このままではモンスターボールは予定通り発売出来ない。シロちゃんも落ち込むだろう。終わりだ。我々は負けだ。だが諸君、私が諦めて逃げ出すと思つているならそれは大きな間違いだ。私は誇り高きシロ民として、最後まで戦い抜く！」

彼は最早立派なシロ民だった。一人の少女の為に戦うと宣言するチヨビ髭は……間違いなく男の鑑であり、シロ民の鑑だ。

「私は好きにする。君らも好きにしろ」

そう沈み込んだ様子で言つて、所長は沈黙する。



ポケモン研究所。まだ出来て間もない研究所は、早速地獄へと出発する事になったのだった。全ては人とポケモンの未来の為に――

閑話 シロちゃん、インタビューを受けるゝ顔合わせ  
)

不知火白。普段シロちゃんと呼ばれる少女についての情報は驚く程少ない。長い白髪が特徴的な、人の目を惹き付けるその見た目こそネットに広く上がっているものの、その生まれや育ち、果ては年齢すら分からないという謎の人物。一説にはそも純粋な人間ではないという話もあり……謎が謎を呼んで深淵と化しているのが現状だ。

しかも政府が公式にポケモンを認めた発表の後、政府や巨大財閥等がその情報を率先して隠蔽しており、深淵は広がるばかり……今日、この日までは。

「お、お腹痛くなってきた……」

「胃薬、さつき飲んだでしょ？」

「効かないー！」

「そう」

誰もが知る日本の巨大財閥、伊藤家の保有する別荘の一つ。その一室で二人の少女が硬い表情で座っていた。

美少女。そう言っているいい二人の共通点はただ一つ。モンスターボールを持っている事だ。

「うう、胃痛のお兄さんから胃薬借りてきたのに……」

「その呼び名、止めてあげなさいよ」

「だってあのお兄さんいっつも胃痛でお腹痛めてるし……あ、お兄さんよりオジサン？」

「ホント、止めてあげなさい。まだそこまでの年じゃないんだから」

まだ数少ないモンスターボールを持っている彼女達の職業はアイドル。伊藤家絡みの事務所に所属するアイドルのポケモントレーナーだ。片やバタフリーの使い手、片やピカチュウのトレーナー。幸運と、そして伊藤ユウカとの繋がり故に手に入れたただ一つのアドバンテージ。それが、彼女達がここに居る最も多きな理由だった。

「うーん、じゃあコラッタのお兄さん？」

「それもいいけど、コラツタはそのうち大量に出てくるでしょ……名前前で呼んであげなさいよ」

「……………」

「え、嘘でしょ？」

哀れ。名前を覚えて貰えないのは彼の人物の宿命なのか。それとも胃痛が宿命の星か。今日もどこかでコラツタニキは胃痛に呻く。

しかし彼女達にとってそんな事は他人事……でもないのかも知れない。何せ、今日の仕事が仕事だ。

「まもなく本番です。移動お願いしまーす」

「はーいー」

「はあ……………」

部屋に顔を出して要件を告げ、直ぐに去っていくスタッフ。そんな光景を目の当たりにし、二人の胃痛が酷くなる。コラツタニキの呪いか？ いいや、仕事が迫っているからだ。

「行こっかあ」

「そうね」

今日の仕事を一言で言えば『不知火白と喋る』これだけだ。年頃も殆んど同じに見える少女と喋るだけ、そう思えば簡単な仕事に思えるが……現実是非情である。

先ず一つ、この仕事を頼んで来たのはあの伊藤ユウカだ。それもかなりの念押しを、酷く悔しそうにしてきた。彼女達にとっては先輩にあたり、ここ最近はその所属事務所の実権も握っている、シロちゃんガチ勢の伊藤ユウカが、だ。やむにやまれぬ事情があるのは目に見えている話だろう。

つまり、この仕事に失敗する事は伊藤ユウカの顔に泥を塗った上で唾を吐き掛け踏みつける事に等しく、そんな事をすれば彼女達の未来は東京湾でドラム缶にコンクリートだろう。ここ最近海外から私兵を入れたとの話も聞いており、その突飛な想像に裏付けをしていた。嬉しくない。

「私、今度胃痛のお兄さんにあつたら優しくするんだ……」

「そう」

フラグ臭い事を言い、何気なく天井を見上げるバタフリー少女。そんな彼女の目に青い空と、そこにうつすらと浮かぶ胃痛から解放された苦笑するコラツタニキが見えた……気がした。末期である。そしてそんな相方にノータイムで塩対応するピカチュウ少女もまた、末期なのだろう。余裕があればそんな事はしまい。

精神的にかなり追い込まれている少女は長い廊下を歩く。時折黒服グラサン白チョーカーの男達の前を通り過ぎながら……ああ、精神力が削れる。彼らは何なのか？ 少なくとも常人ではあるまい。まとう気配が狂氣的に過ぎる。

狂気、そう。狂気だ。

彼女達がこの仕事で最も疲弊しているのにはこれが原因だった。先輩からの重圧で手一杯なのに、仕事先の屋敷は狂気に包まれているのだ。静かな、しかし普通とは全く異なる狂気に。

黒服グラサン白チョーカー男達もそうだが、この屋敷の人間はどこか狂っていた。表面上はマトモに見えるのに、話す事と言えばポケモンかシロちゃんについてののみ。

別に自分達について語れとは言わない。だが自分達がポケモントレナーである事にかこつけてか、挨拶すれば必ずポケモンの事に話題が飛び、最後はシロちゃんについてで締める。目に、あるいはグラサンの奥に見て分かる程の狂気を宿しながら。誰も彼もがポケモンポケモンシロちゃんポケモンシロちゃんシロちゃんシロちゃん——狂気だ。ここまで人心を統一させるシロちゃんとは何者なのか？ 知りたくなく、また踏み込むなんて考えたくないのが彼女達の本心だった。が、現実是非情である。残念な事に、彼女達の仕事は不知火白について踏み込む事だ。

「ねえ」

「なに？」

「前にシロちゃんと会ったんでしょ？ どんな子なの？」

「一度だけだけどね。んー……最初は凄く可愛い子だなあとと思って、次にポケモンが好きなんだなあって思って……最後は、ちよつと怖かったかな」

「怖い？」

「うん。何というか、その、性格が違うというか、印象が変わるとい  
か、んー……顔が2つある感じ？　かな？」

「……二面性がある？」

「そうそれ！　二面性！　全然違う二面性がある子だった！　目のハ  
イライト消えてたし！」

「そう……」

以前一度だけ会い、タツグを組んでポケモンバトルを行ったバタフ  
リー少女はシロちゃんの印象をそう語る。二面性があると。

それはポケモンを語る愛らしい少女としてのシロちゃんと、冷徹な  
指揮官としての不知火白の違いか。それとも……何にせよ、会った事  
のないピカチュウ少女にはイメージしにくい話だった。

そうしてバタフリー少女が恐ろしくも楽しかった日を思い出し、ピ  
カチュウ少女が首を傾げる中、二人はある一室の前にとどり着く。簡  
素な、しかし素人目に見ても上物と分かるふすまで仕切られた……不  
知火白が待っている部屋。ごくり、と。ほぼ同時に息を飲む。許可こ  
そ貰ってはいるが、だとしても万が一の失礼も許されないと。

「し、失礼しますー！」

「……失礼します」

口火を切ったのはバタフリー少女。続いてピカチュウ少女が後に  
続き、部屋の中へと入る。

そうして目に見えるのは畳に障子しょうじ、ふすまやいおりといったいかに  
もな和室。そして、白い少女と黒い犬の姿……シロちゃんとグラエナ  
であるポチだ。

「来ましたか……」

一拍、部屋の空気が凍る。

放たれた声は酷く冷たく、全てを拒絶する様なモノ。不知火白がグ  
ラエナを撫でていた手を止め、垂れていた白髪を後ろへとスツと回  
し、その視線を少女達に向ければ——彼女達は背筋に冷たい物が走る  
のを感じずにはいられなかった。

無だ。不知火白の眼には何も映っていなかったのだ。確かにこち

らを見ているはずなのに、不知火白の眼は何も見てはいない。ハイライトの消えた生気に欠ける瞳をこちらに向けるのみ。

——何がどうなればこんな少女が、そんな冷たい目を宿すのか。

親の顔も知らぬ捨て子であるとは聞いていたし、その後の境遇に同情もした。しかし、ここまでとは聞いていない。

そんな思いを抱きつつ、少女達が不知火白と対峙する事……数瞬。不意に不知火白の視線が動き、目に生気が戻り始める。視界に入ったのは恐らく、モンスターボールだ。

「ああ、誰かと思えばバタフリーのトレーナーさんでしたか。お久しぶりです。バタフリーとは、仲良く出来てますか？」

「へ？ あ、はい！ あの子とは友達みたいな、その、仲良く出来てます！」

「それは良かったです」

ニコリ、と。優しいな笑みを浮かべて相方とその相棒を祝福するシロちゃんに、ピカチュウ少女は内心驚きを隠せなかった。これは二面性というレベルではない、と。何せ先ほどの凍てつく氷の様な雰囲気と、今見せている雪の精の様な儂く可愛らしい印象。それが全く一致しないのだ。二面性というより多重人格の方が正しいだろう。

恐らく今見せている顔は身内や仲間に対する物で、先ほどの敵対者に対する物なのだろうが……しかし、それを分けたのは何なのか？

いや、モンスターボールなのだろう。もつと言えばポケモンだ。つまり——

——不知火白にとってポケモンを認めるかどうか……いえ、ポケモンと共に生きていけるかどうか。それが大きな線引きになっている。その点でいえば我が相方は合格であり、彼女達に襲いかかったテロリスト達は失格だったのだろう。そんな事を内心考えながら、ピカチュウ少女は一旦考えを打ち切る。不知火白の視線がこちらを向いたからだ。

「噂は聞いています。確かピカチュウのトレーナーさんだと。……見せて貰っても良いですか？」

「はい、分かりました」

緊張している。それを自覚しつつも、ピカチュウ少女は自分の相棒をモンスターボールから解き放つ。

光が溢れ、小さく可愛らしい黄色のネズミが現れる。ピカチュウだ。その可愛らしいポケモンに対するシロちゃんの反応は……劇的だといえるのだろうか。

「わああ……」

最早最初の冷たさなどどこにもなかった。今ここに居るのは可愛らしいポケモンを愛でる一人の少女だけ。笑顔を隠す事もせず、赤い瞳に光を宿しながらピカチュウの頭をゆつくりと撫でているその姿は年相応だ。漏れた感嘆の声には喜びの感情がこれでもかと詰まっている。

——これは、最初の冷たさの方が何かの間違いだったのでは？

年下に見える少女の姿にピカチュウ少女はそう考え、頭にこびりついた警戒心を落とす。あんな人殺しの様な目をこんな年頃の少女が出来るはずがないじゃないか、と。

そう思ってしまったえば身構えるのも馬鹿馬鹿しくなるもので、ピカチュウ少女はいつも通り仕事を始める事にする。

「では、インタビューを始めても？」

「あ、はい。大丈夫ですよ。確か、私自身についてインタビューしたいとか？」

「ええ。とはいえカメラは回さないから、あまり緊張する事もない。たぶん、気楽にやれる」

「了解です。……ふふっ、そっちの方がらしいですね？」

「……敬語の方が？」

「いえ、堅苦しいのはニガテなので、そちらで。……ああ、せつかくなのでポケモンを出しながらしませんか？」

「そうですね」

一万を越える新興宗教の教祖だの、重武装テロリストのボスだの、日本経済を裏から操るだの、人を容易く洗脳するだの聞いていたが……やはり噂は当てにならない。笑顔を溢しながら話す白い少女にそんな事を思いながら、ピカチュウ少女は相方に肘鉄を入れる。お前

もポケモンを出せと。

「ふえ？ な、なに？」

「ポケモン」

「見てみたいですね。生のバタフリー」

「あ、はい！ 出て来て、バタフリー！」

意志疎通に時間がかかったものの、バタフリー少女は自分の相棒を外へと出す。光が溢れ、やがて大きな蝶々の姿を取る。バタフリーだ。

全長1・1メートルという巨大な蝶々は外へ出れた事が嬉しいのか、バサバサと羽ばたきながら軽く舞い、やがて自分の主の頭の上へと着地する。かつて自分がまだ飛べなかつた頃と同じ様に。

「なつかれてますね……」

「グルウ……」

体重32キロという巨大な蝶々を頭に乘せている少女を微笑ましく見ながら、シロちゃんは自分の相棒の背を撫でる。ゆっくり、ゆっくりと。噛み締める様に。

その少女の姿がここではない、どこか遠くにある様な、そんな違和感を感じたのは——ピカチュウ少女だけだった。何せバタフリー少女は……

「ぬぐ、ぐぐぐ……」

バタフリーの重さに悶絶していたのだから。それでも下ろさないのは優しさか、それとも意地か。ピカチュウ少女としてはその姿にアホを見る様な目を向けつつ、自身の相棒(6キロ)を肩に登らせる。この重さに慣れだしたのがごく最近なのは……彼女だけの秘密だ。

「では、始めていきます」

「い、いき、まず……」

「はい。宜しくお願ひします」

各々座布団に座り、頭に、肩に、隣に、三者三様の接し方で相棒を見せ合いつつ……伊藤ユウカがセッティングした少女トレーナー達の会話は始まるのだった。



閑話 シロちゃん、インタビューを受ける〜月刊ポケモンより抜粋〜

昨今の異常をポケモンによるものであると断定する

そう日本政府がポケットモンスター、縮めてポケモンを公式に認めたのは記憶に新しい。そしてそれが驚きを伴いつつも、スムーズに受け入れられていったのもまた同じだろう。

あの発表から間もなく一週間。今我々の隣にポケモンはいない。だがテレビをつければポケモンを目にするし、ポケモントレーナーになろうとポケモンを探す人もそこまで珍しくはなくなつた。今はまだ、我々の隣にポケモンはいない。しかしそう遠くない未来に、ポケモンは我々の隣に来る事になるだろう。直径5センチ程のボールの中に入ったり、姿形が大きく変わったり、物理法則に逆らつて空を飛んだり……そんな不思議な生物が我々の隣に来る日はそう遠くないのだ。

さて、そんな変化する状況で人々の助けとなるべくこの『月刊ポケモン』を発行する事になつた我々編集部だが……一つ、疑問があつた。ポケットモンスターとは何か？

根本的な、酷く根本的な事だが我々編集部はそれを知らなかつたのだ。

いや、勿論ポケモンが不思議な生物である事は分かる。だが彼らがどこから来たのか？ 彼らは何なのか？ そんな哲学的とも言える、しかし根本的な事を我々は知らない。

ポケモンはどこから来て、どこへ行くのか？  
哲学的かも知れない。だが重要な事でもある。

この難題に対し我々編集部が出した答えは……専門家に聞く。これだ。まだ新しい存在故に数は少ないものの、だからこそ一流の専門家達に話を聞く事にしたのだ――

・新進気鋭の植物学者は語る

・二人目のポケモントレーナーの苦勞

・ モンスターボール解析の裏話  
広告 これぞ胃痛ともオサラバ！ きのみ成分を使用した最新胃薬！

- ・ ポケモン求めて、今日も関東を走る
- ・ 来日した生物学の権威に聞く

.....

.....

.....

さて、ここまで多くの専門家の声を紹介し、ポケモンとは何なのか？ その答えがオボロゲながら見えてきた。

しかし、まだ後一人、どうしても話を聞かなければならない存在が残っている。そう最初のポケモントレーナーにして最初のポケモン専門家、不知火白だ。

だが彼女に今現在コンタクトを取るのには酷く難しい。そのポケモンに対する知識の深さと、幼いといつていい見た目からくる襲撃を恐れた政府と財界によつて厳重な警戒が敷かれているからだ。

しかし彼女に話を聞かずしてポケモンは語れない――

そう確信した我々編集部は独自のルートを通じて不知火白への単独取材の許可を獲得。彼女に話を聞く機会を手に入れた。

とはいえ相手は幼い少女。あまり威圧的にインタビュする訳にもいかず、我々は彼女と年代かつ同じポケモントレーナーをインタビュアーとして送り出す事にした。

バタフリーのトレーナー ゆさん 遊山 かおり 香

ピカチュウのトレーナー しみず 冷水 ささき 紗輝

ユニットを組んでアイドル活動をしている彼女達と、不知火白による少女三人のポケモントレーナーによるポケモン談義。そこで我々は驚くべき事実を知る事になる――

.....

.....

.....

不知火白（以下シロ）「よろしくお願ひいたします」

冷水紗輝（以下サキ）「はい、よろしくお願いします」

遊山香（以下カオリ）「お、お願い、します……！」

『三人の少女とポケモン達の和やかな——1名を除く——写真』

それぞれの手持ちを外に出して始まった少女トレーナー三人による談義。最初こそ遠慮するような空気があったが、数分もすれば古い友人の様な気安さを感じる程に話は盛り上がっていた。

（中略）

シロ「そういえば今回のこれはインタビューとの事でしたが、私は何を話せばいいのですか？」

サキ「それならこちらが質問するから、それに答えてくれれば……カオリ」

カオリ「はい。先ず最初の質問は『ポケモンとは何なのか？』です」  
少女達三人の談義が一段落し——限界だったのかカオリも途中でバタフリーを降ろして——いぎインタビューへと入る。その最初の質問はポケモンとは何なのか？ だ。哲学的ともいえる質問だったが、白氏の返答は早かった。

シロ「ポケモンはポケモンです」

カオリ「いや、それはそうなんだけど……もう少し詳しくお願いできるか？」

シロ「そうですね………家族、ですかね」

サキ「家族」

シロ「はい。当たり前前に、自分の一番近くに居てくれる存在。それが私にとってのポケモンですし、そういう存在の事を世間では家族とよぶと思うので」

サキ「なるほど。ポケモンは人の家族に成りうる存在だと」

シロ「はい。犬や猫よりもっと身近に、近くに居てくれる存在だと思っっています。……これは、サキさんやカオリさんも実感しているでしょう？」

カオリ「あー、確かに。この子と居る時間結構長いし………家族と言われても違和感ないかな」

サキ「まあ、ね」

ポケモンは家族。それはつまりポケモンと人は隣人や友人を越える関係になるという事で、未だ多くの問題が山積している中でその考えを語るのは、流石最初のポケモントレーナーといったところか。白氏のポケモンへの愛は本物の様だった。

シロ「他に何か質問はありますか？」

カオリ「えーと……それじゃあ『今後ポケモンとの関係はどうなるのか?』について聞いてても？」

サキ「出来れば今後予定しているイベント等があればそれも」

シロ「ポケモンとは仲良くなっていけますよ。間違いありません。そしてイベントですが……んー、言っても良いのかな? 良いか」

カオリ「お、何かまだ発表してない情報が?」

シロ「はい。今話しているのは『ジム』と『リーグ』の話ですね。『法案』や『関連商品』の話は駄目なので」

さもありません。しかし『ジム』と『リーグ』の話も興味深く、更に詳しく話を聞く事になった。

シロ「ポケモンジムについては半年を一つの目安とし、先ずは関東に8ヶ所をオープン。その後様子を見て増設していく予定です。ポケモンの捕まえ方や育て方といった基本的なレクチャーから、ポケモンバトルに勝つ為の訓練まで幅広いニーズに対応する場所になるでしょう」

サキ「ポケモンバトル、ね。これにはあまり良い声がないけど、シロちゃんとしてはその辺りどう考えてる?」

カオリ「ちよ、サキ!?!」

シロ「構いませんよ。まあ、最初が最初でしたから仕方ありませんが……やってみれば、あるいは見てみれば分かると思います。人もポケモンも、両者にとって楽しいものだ。とはいえニガテな人やポケモンもいるので、ジムの利用は強制ではありません。一度は訪れて欲しいですが」

サキ「なるほど。食わず嫌いはするなと」

シロ「ハッキリ言えばそうなります。見もしないで文句言われても困りますし」

カオリ「あ、アハハ……」

齒に衣を着せずにズバズバと物を言う二人に、カオリの胃は荒れる一方の様子。しかし談話はまだ始まったばかりだ。

サキ「では『リーグ』とは？」

シロ「リーグ、正式にはポケモンリーグですね。ポケモンに関する統括組織、そして人間でいうところの……オリンピックを開催する物になる予定です。地方ポケモンリーグ、全国ポケモンリーグ。行く行くは世界ポケモンリーグの開設、開催を目指しています。その先駆けとして半年以内にも全日本ポケモンリーグの開設、そして第1回関東ポケモンリーグを開催する予定です」

カオリ「えっと、つまり大きい大会が近々にあると？」

シロ「はい。関東中の腕自慢を集めた大会になる予定です。選考も予選もしていませんから、まだまだ参加のチャンスはありますよ。……ちなみに、お二人は参加されますよね？」

カオリ「ふえ？ え、えっと、出ても良いんですか？」

シロ「出ないんですか？」

サキ「予定が合えば、かな。シロちゃんは参加する予定？」

シロ「勿論です。挑戦待ってますよ」

ポケモンバトルなら受けてたつ。そう笑顔で語るシロ氏。とはいえ以前見せつけた圧倒的な技量に勝てる者が居るのだろうか？ そんな疑問を抱えつつ次の質問へと移る。

サキ「んんっ、では次の質問を……けど似たようなのを繰り返すのもあれだし、カオリ？」

カオリ「えーと、これかな？ 『シロちゃんについて』聞きたいです」

シロ「漠然としてますね……私についてですか。私の経歴は聞いていて面白い物ではないと思うのですが……」

カオリ「え、えっと、それは。あ、アハハ……」

不知火白。彼女の経歴は謎に包まれているが、あまり面白い物ではないらしい。一説には過酷な幼少期を過ごしたらしいが……とはいえ、無理に聞く事もないので質問は変更された。

サキ「普段何をしているか、とかでもいいと思う」

シロ「普段……そうですね。絵を描いたり、お話したり、かな。後はポチと縁側でゆつくりしたり？」

サキ「それは、なんというか……」

シロ「ジジ臭い？」

サキ「いや、まあ。はい」

カオリ「アハハ……シロちゃんはお買い物とかしないの？」

シロ「あまり物に執着がないので、買い物とかは必要性を感じないんですよね。日光もニガテですし。それに育ての親の影響か、のんびり過ごすのが一番性に合うので」

カオリ「育ての親……？」

シロ「東郷っていうお爺ちゃんですね。後は近所の人達？ まあ、皆お年寄りなので自然と趣味もそちらに寄っちゃって。その辺り普通の子供とは違うかも知れませんね……」

そう相棒を撫でながら語る白氏。その顔に陰りはないが、どこか寂しそうであった。

カオリ「え、えつと、お友達と遊んだりとかは……？」

シロ「居ませんし、無理ですね。それに同年代の子とはどうにも話が合わないですよええ……気づいたら皆逃げてたりしましたから」

サキ「ちなみに、何の話をしてて？」

シロ「ポケモンの話を少々」

サキ「ああ……」

シロ「でもお二人とは話が合いそうでなによりです。良ければこの後ポケモンバトルでもどうですか？」

カオリ「え」。シロちゃんとポチに挑めど？」

シロ「んー……レベル差もありますし、そちらでタッグを組んで二対一とかどうですか？」

カオリ「い、いやーどうかな？ ね、サキ？」

サキ「面白い話だとは思う。けれどまた何で急に？」

シロ「前回含めてマトモなポケモンバトル出来てないので……機会を逃したくないですよね」

カオリ「確かに」

サキ「なるほど」

やはりというべきか。白氏は前回のポケモンバトルに不満があるらしく、本来のポケモンバトルを行いたいそうだ。

当初の予定にはなかったが、ポケモントレーナー同士という事もあり変則的なポケモンバトルが行われる事となった——(特典DVDに続く)

掲示板 シロ民は雑誌に目を通す様です。

【シロ民の戦いは】お絵描き配信者シロちゃんについて語るスレ  
art198【始まったばかりだ】 p

201：名無しの犬

いやー、イワヤマトンネルは強敵でしたね……

202：名無しの犬

>>>201

正確にはイワヤマトンネルに該当する場所、だけどな。

203：名無しの犬

wikiには暗いとか書かれてたがそんな事はなかったな。まあ、町が暗くなったらホラーだしそれで良いんだけど……まさかイワークがあそこまで脅威だとは、予想外だったぜ。

ところで、イワークの生息位置をオツキミ山と間違えてたニキは？

205：名無しの犬

>>>203

決断的にセブクしたんじゃない？

206：名無しの犬

(ポケモンの生息位置を間違えるなんて)ただのカカシですな。

207：名無しの犬

エリートシロ民なら瞬きする間に覚えられる。忘れない事だ。

209：名無しの犬

(イワークが)居たぞ！ 居たぞオオオ！

210：名無しの犬

うわああああ!!

211：名無しの犬

撃ち方やめエ！ 見てこいカルロ。

213：名無しの犬

何が始まるんです？

214：名無しの犬

大惨事大戦DA！



215：名無しの犬

ああ駄目。こんなのポケモンバトルじゃないわ。ただの大怪獣決戦よ！

216：名無しの犬

だったらゲットすればいいだろ！

218：名無しの犬

入れこのデカブツが。入ってんだよ！

219：名無しの犬

この手に限る。

221：名無しの犬

／デエエエエン／

223：名無しの犬

まあ、そんな感じで重症を負いつつもイワークゲットしたんだから誤報ニキは許してやれ。

225：名無しの犬

>>>223

しょうがないニヤア……

226：名無しの犬

>>>223

両足粉碎骨折だっけ？ よくやるよ……

228：名無しの犬

しかしそれでも彼は輝いていた。

230：名無しの犬

>>>228

実際満面の笑みだったからな。そのあと気絶して救急車で運ばれたが。

231：名無しの犬

大健闘だったのは間違いない。

232：名無しの犬

お見事！

233：名無しの犬

凄いぞ！

235：名無しの犬

たいしたもんだ！

236：名無しの犬

よくやった！

237：名無しの犬

勲章ものだ！

240：名無しの犬

しっかしテロリストどもの妨害があると思ったんだが、無かったな？

243：名無しの犬

>>240

筆頭犬兵曰く奴らのボスが一時的に関東から退いてるらしい。前回のアレでボロ負けして準備不足を痛感したんだろうな。で、奴ら全体としても動きが鈍ってるらしい。ポカやらかして警察のご用になる奴もチラホラいるし、所詮は烏合の集だな。

ちな犬兵はソイツを追って関東から離れてます。

245：名無しの犬

>>243

無茶しやがって（AA略）

251：名無しの犬

何にせよこれで4、5、9、24、25番道路が終わり、次は10番道路って訳か？

254：名無しの犬

>>249

そういう事だな。無人発電所は俺らの管轄じゃなくて国とリヴァイアサン号乗員の管轄で、ハナダの洞窟は未確認だし。

256：名無しの犬

>>254

あー、電気ポケモンでエネルギー問題を解決しつつ（金と支持率を一儲けだったか？ まあ場所が場所だしなあ。でもリヴァイアサン

号の乗員は何でOKが出たんだ？ 原発だろ？

258：名無しの犬

>>256

アメリカとの政治的取り引きらしいぞ。あそこの艦長向こうの政治家やスパイと繋がりがあるらしいし、大方船員にCIAの現地協力者でも居たんだろ。

というかシーホークと元海兵隊員載つけてる時点で普通じゃないし……

259：名無しの犬

俺も欲しかったなあ。電気ポケモン……サキたんとお揃いだったのに。

261：名無しの犬

>>259

掛け持ち、だどっ……!?

262：名無しの犬

>>259

以前なら背教者だが……シロちゃん親衛隊曰く、最近あの三人は仲が良いそうだからセーフにしといてやるよ。

265：名無しの犬

シロ民の規律キツすぎんよー

266：名無しの犬

>>265

身内からテロリスト出したし、多少はね？

267：名無しの犬

けどさ、ハナダの洞窟は正直助かったよな。高レベルポケモンだの最強のポケモンだのの相手なんかしてられないって……

268：名無しの犬

>>267

まあ、な……

269：名無しの犬

>>267

いくらポチネキでも一匹じゃキツイだろうし、危うく日本沈没の危機だったからな……

272：名無しの犬

ポチネキを筆頭にポケモンのデータ取って調べた自衛隊の試算だと、近代兵器はおよそ役立たず（理由未公開）なんだっけ？ つくづくヤバイよな……

274：名無しの犬

戦闘機不要論（ガチ）

275：名無しの犬

軍艦不要論（ガチ）

276：名無しの犬

戦車不要論（ガチ）

277：名無しの犬

なんなら歩兵も銃も要らなくなるぞ。何せポケモン一匹で全部糺ぎ払われる訳だからな……場合によっては持つだけ無駄になりかねん。

アメリカがこんな早々に慌てる訳だ。

279：名無しの犬

ポケモンヤバ過ぎワロエない……

285：名無しの犬

落ち込んでるところ悪いが、その次は皆 お待たせ シオンタウンとゴーストポケモンだぜ？

288：名無しの犬

アイエエエ!? オバケ！ オバケナンデ!?

290：名無しの犬

ナムアミダブツ！ モーターシロ民は恐怖に耐えきれずしめやかに失禁！

291：名無しの犬

実際ゴーストポケモンは人を死に追いやる事もあり、非常に危険だ。

292：名無しの犬

ドーモ、ゴーストポケモンIIサン。エリートシロ民です。ポケモン  
ゲットすべし、イヤーツ！

293：名無しの犬

イヤーツ！

294：名無しの犬

イヤーツ！

295：名無しの犬

イヤーツ！

297：名無しの犬

しかしこうかはいまひとつのようだ。

298：名無しの犬

効果がいまひとつだからといって一発の力に頼ってはならない。  
百のモンスターボールを投げるのだ。

299：名無しの犬

>>298

ハイッ、センセイ！

302：名無しの犬

という訳で、シオンタウンと思われる場所にイクゾー

303：名無しの犬

デッデッデデデ！ カーン！

305：名無しの犬

予測だと今日頃だっけ？ 確か全戦力を投入するとか。

306：名無しの犬

>>305

イワーク並みにヤバい案件だからな。投入可能なポケモントレー  
ナーは全て投入。リヴァイアサン号でハートマン軍曹式で鍛えられ  
た奴らも投入だ。シロ民的には総力戦になる。

307：名無しの犬

いよいよ決戦か……

308：名無しの犬

全体の流れとしては中ボスですらねえけどな……そういえば二匹

目以降に関する対応は？

310：名無しの犬

>>308

全く。そつちは政府にブン投げてる。まあ、一匹目のレポートとか前例があるから大丈夫だろ……たぶん。

312：名無しの犬

ポツポ以外はな。

だとしてもモンスターボールの量産はまだ先だから、今来られても困るんだが……

315：名無しの犬

>>312

それな。いくら日本の技術力が世界一イイ！で、研究所も頑張つてるとしても、やつぱり早々容易く量産は出来んだろうし。

ポツポは……まあ、ね？

316：名無しの犬

あのポツポ何者だよ、マジで。プリンですら捕まったというのに。

318：名無しの犬

通りすがりのラスボスがシロ民からモンスターボール借りてアツサリ捕まえたのは笑った。

後日『プリンと一緒に歌ってみた』をネットに投稿したのはマジワロス。

ワロス……

319：名無しの犬

流石ラスボスだわ……確実に時代についてきてる。マジヤベエ。

320：名無しの犬

そういえばモンスターボールの回収はどうなってる？ 管轄が政府に移ったんだっけ？

323：名無しの犬

>>320

せやで。研究名目で回収してる。相手が駄々捏ねたら危険だからとか言って回収。更に捏ねるなら放置……そんな感じや。

今んとこ回収はスムーズらしいがな。

324：名無しの犬

後で買えるの分かってるからなあ。政府の役人が出て来て説明して、それでも駄々捏ねるのはよっほどアレな奴だけだろ。

326：名無しの犬

まあ、そうやって政府主導で回収してるから俺らシロ民の残存モンスターボールは心許ない事になってるんですがね……

327：名無しの犬

まだだ。まだ終わらんよ……！

328：名無しの犬

取り敢えずシオンタウン乗り切りや後は何とかなるだろ。たぶん。

329：名無しの犬

>>328

セヤナ。

330：名無しの犬

ソヤナ。

333：名無しの犬

知らんけどー

334：名無しの犬

な阪神

335：名無しの犬

>>333

知らんのかいつ！

337：名無しの犬

>>335

良いツツコミ。座布団をやろう。

339：名無しの犬

わーい……てかなぜ俺らはこんなところで下らんコメ打ってるんだ？

340：名無しの犬

だって暇だし。

3 4 1 : 名無しの犬  
暇だからなあ。

3 4 3 : 名無しの犬  
基本待ってるだけだから (震え声)

3 4 4 : 名無しの犬  
待ちぼうけか。

3 4 5 : 名無しの犬  
辺り一面荒れ地になりそう (童謡並感)

3 4 6 : 名無しの犬  
草。

3 4 7 : 名無しの犬  
草。

3 4 9 : 名無しの犬  
荒れ地じゃなくて草原になりそうですね……

3 5 1 : 名無しの犬  
w w w

3 5 2 : 名無しの犬  
w w w w w

3 5 3 : 名無しの犬  
w w w w w w w w w

3 5 5 : 名無しの犬  
草を生やすな w

3 5 7 : 名無しの犬  
>>> 3 5 5

( - - ∇、 ) オマエモナー  
3 6 0 : 名無しの犬

お前からそんなに暇なら今日発売の月刊ポケモンの話しようぜ！  
3 6 3 : 名無しの犬

あー、そんななああったなあ。あれ今日だっけ？  
3 6 5 : 名無しの犬

>>> 3 6 3



今日だな。コンビニから書店まで、あちこちで売ってるぞ。世間のポケモン熱がじわじわ上がってるのもあって、注目度も悪くない。

368：名無しの犬

世間の熱つてのは基本的に一度冷めたら二度と上がらないからな。じわじわと熱を上げていくやり方は流石だよ。アイドルネキ……

371：名無しの犬

>>368

民衆相手のアレコレはユウカ嬢の十八番だろうしなあ。実家の力もあって万事問題なく進めてるよ。

372：名無しの犬

世間のあちこちでポケモンポケモン。ポケモンは友達、仲間、皆仲良く！ 栄光の未来！ ……だからなあ。分かりきってる俺らからすりゃぶつちやけ耳ダコ。

375：名無しの犬

『宣伝効果のほとんどは人々の感情に訴えかけるべきであり、いわゆる知性に対して訴えかける部分は最小にしななければならない』『宣伝を効果的にするには、要点を絞り、大衆の最後の一人がスローガンの意味するところを理解できるまで、そのスローガンを繰り返し続けることが必要である』って奴だな。ある程度以上の人間なら大抵実践してる。プロパガンダの基本だが、だからこそそれをシレッと大規模にやる辺り、ユウカ嬢の本気が見えるって話だ。

379：名無しの犬

>>375

伍長閣下かよ……

381：コラツタニキ

その当人は忙しさからシロちゃんとかえなくてイライラしてるけどな。シロちゃんの友達候補として、自分で送り込んだ後輩に嫉妬するレベルで。

うっ胃が……

382：名無しの犬

>>381

お前は休め。というか胃薬どうなった？ きのみ使った新作出たろ。雑誌の広告にあったアレ。

383：コラツタニキ

>>382

アレまだ未完成だぞ。端っこに小さく書いてるだろ？ 予約受付中ってな。ああ、さも完成してるかのように書いてるけど、実際は予約受付してる間に完成する予定だ。

385：名無しの犬

>>383

せけえ……けどなんでそんな事を？

388：名無しの犬

>>385

演出の一環だろ。この広告はその一例でしかないが、世の中はポケモン一色ですよー、これからどんどんポケモン関連の話増えますよー、ポケモン当たり前になりますよー、着いて来て下さいネー……って感じにしてるのさ。

実際には全く間に合っていないんだけど、演出上は世の中はポケモン！ ポケモン！ 時代の変わり目！ ポケモンを受け入れないのは異端！ 時代遅れ！ 仲間外れも仕方ない！ ってしてるんだろ。プロパガンダの応用編だな。あるいは人の集団心理か？

390：名無しの犬

>>388

うわあ……ドン引きだわ。いつからユウカ嬢はチョコビヒゲになったんだ？

391：名無しの犬

>>390

最初からだろ。あそこの家デカイしな。

もつとも、本格的に頭角を現したのは最近なんだろうが……

393：名無しの犬

>>391

親御さんもまさかだったんだろうな。出なきや最初っから芸能界

に入れずに家を継がせてる。

まあ芸能界の第一線からは引退しつつあるし、これから家を継がせるのかもだけど。芸能界で培った人脈を手土産代わりにな！

394：名無しの犬

上流階級怖いなあ。戸締まりストIV。

395：名無しの犬

あそこの家が特殊な気もするがな……

398：名無しの犬

で、だ。当然シロ民はゲットしたよな？ シロちゃん出てるし。

400：名無しの犬

>>398

はい。

401：名無しの犬

>>398

当然だ。

402：名無しの犬

>>398

問題ない。

403：名無しの犬

>>398

当たり前だ。

404：名無しの犬

>>398

お前は間違ってる。

405：名無しの犬

え？ シロちゃん出てるの？

407：名無しの犬

>>405

お前……

408：名無しの犬

異端者だ！ 異端者が居るぞ！

409：名無しの犬  
異端者審問に掛ける！

410：名無しの犬  
テロリストか？　なあ、お前テロリストだろ？

412：名無しの犬  
いや待て。ただのニュービーシロ民かも知れん。

415：名無しの犬  
そもそもシロちゃんの取材決まったの直前で、特に告知もしてないしなあ。発売前に載ってるの知れたのはシロちゃんの肉盾してた親衛隊だけだろ。

418：名無しの犬  
>>415

それもそうか。という訳で、持っていない奴は今すぐ買ってこいカロ。特典はシロちゃんとアイドル二人のポケモンバトルを収めたDVDだぞ！

420：名無しの犬  
>>418

ホントかよ！

421：名無しの犬  
>>420

確かにそうだ。

422：名無しの犬  
>>420

間違いない。

423：名無しの犬  
>>418

シロ民は仲間を見捨てない。本当だな。

425：名無しの犬  
>>423

そういう噂だ。

426：名無しの犬

ちよつとコンビニ行ってくる（AA略）

4 2 7 : 名無しの犬

俺もちよつと行ってくるわ。

4 2 9 : 名無しの犬

んじや俺も。

4 3 0 : 名無しの犬

俺も俺も

4 3 2 : 名無しの犬

よ、よし。なら俺も。

4 3 3 : 名無しの犬

>> 4 3 2

どうぞどうぞ

4 3 5 : 名無しの犬

ちくわ大明神

4 3 6 : 名無しの犬

譲るなw はよ行け。

4 3 7 : 名無しの犬

>> 4 3 5

誰だ今の

4 4 0 : 名無しの犬

さて、持っていないのが旅立ったが……どこから話す？

4 4 2 : 名無しの犬

耳ダコ部分は流していいだろ。やはりここはシロちゃんについて  
だな。

4 4 3 : 名無しの犬

>> 4 4 2

ま、俺らシロ民だし。それが妥当だろう。となると……インタ  
ビューの部分か。

4 4 5 : 名無しの犬

だな。DVDは長くなるし後回しだ。

4 4 7 : 名無しの犬

そうなるよ……やっぱり目立つのは闇深さか。

449：名無しの犬

一見当たり前に見えるインタビュー。しかしそこには深淵が隠れていったっ……！

452：名無しの犬

ジムやリーグの話は昨日親衛隊がリークしたからもう知ってる話だしな。現状じゃ計画の中身スカスカなのも含めて。

そうなるよやっぱりシロ闇が目につくんだよなあ。

453：名無しの犬

ここしばらくはシロ闇無かったのに……

455：名無しの犬

だからこそグサツと来るのさ……そしてソレがクセになる。

456：名無しの犬

闇深民ヤバイなあ、戸締まりストIV。

458：名無しの犬

戸締まりし過ぎてサウナみたくなってそう。

459：名無しの犬

>>458

クーラーつけければ万事解決よ。

461：名無しの犬

>>459

文明の利器万歳！

462：名無しの犬

なんなら氷ポケモンでも可。

463：名無しの犬

>>462

ポケモン万歳！

467：名無しの犬

さて。現実逃避もそこまでにして、そろそろ語るか。

468：名無しの犬

時系列順に行けば『ポケモンは家族』か。

470：名無しの犬

ペットを家族という人もいるし、今の風潮を考えれば何の不自然もないごく普通の言葉……だがちよつと待って欲しい。ここでシロちゃんの過去を振り返ってみよう。

471：名無しの犬

独り暮らし。

472：名無しの犬

捨て子。

473：名無しの犬

親の顔も知らない。

475：名無しの犬

孤児院にも入れられず、近所の人気がつくまで半死半生で過ごす。

476：名無しの犬

近所の爺さん婆さんは居る。だが家族と言える人間は……

479：名無しの犬

そう、シロちゃんにおよそ家族といえる人間は居ないのだ。ポチネ

キは家族枠だが人間ではない。つまり……

480：名無しの犬

ゴクリ……

481：名無しの犬

ン。

482：名無しの犬

ガチでポケモンが、ポケモンだけが自分の家族だと思っている可能性があるんだよお！

483：名無しの犬

? どういう事だっばよ?

485：名無しの犬

>>482

なるほど、世間を取ってポケモンが家族になるのはファンタジーだが、シロちゃんからしてみれば人間が家族になる方がファンタジー、幻想、幻だと。そういう事か?

486：名無しの犬

>>485

Exactly そのとおりでございます。

489：名無しの犬

え、いや、つまりシロちゃんに取って空想上のポケモンは昔から家族で、だからポケモンは家族だと答えたと？ イマジナリーフレンドみたいな？ んで、人間は敵？ というか深い関係にはなり得ないと？ え？ 嘘だろ？

490：名無しの犬

いやいや流石に、流石に……ないよな？

493：名無しの犬

あー、これあれだな。狼に育てられた子供みたいだ。俺らからすれば異常だが、その子にとってはそれが普通だってやつ。なんなら自分は変わった狼だと思ってるとかいうアレ。

シロちゃんの場合狼がポケモンで、しかもそのポケモンはイマジナリーフレンド……もうこれ衰弱系BADENDが見えるな。

495：名無しの犬

うわあ、うわあ……

497：名無しの犬

ガチじゃねえか。草も枯れたわ……

498：名無しの犬

精神科医！ 精神科医はどこだ!?

499：名無しの犬

手遅れだろ。こうなると……

500：名無しの犬

いや、流石に自分が人間だという事は分かって……分かってるよな？

502：名無しの犬

下手すると近所の爺さん婆さんやユウカネキの事も変わったポケモンとか思ってたそう。逆に関係ない奴やテロリストは人間だと思ってたそう……



505：名無しの犬  
落ち着けお前ら。ラマーズ法だ！

508：名無しの犬  
スウ……ハアア

510：名無しの犬

>>508

それラマーズ法ちゃう。深呼吸や……ん？ それでいいのか？

514：名無しの犬

よし、落ち着いたところで次のシロちゃんの発言を拾って助けとしよう。ここの『私の経歴は聞いていて面白い物ではないと思うのですが……』という部分をな！

516：名無しの犬

>>514

何が助け……ああいや、そうだったな。シロちゃんは客観的に自分の境遇を見れてたわ。危ない危ない。

517：名無しの犬

そうか、シロちゃん自身が自分の境遇が面白い物ではない＝良くない方向で普通ではないと言ってるのだから、その手の勘違い系の可能性は否定されるのか。

518：名無しの犬

まさかシロ闇に助けられるとはな。俺も想像力が足りなかったのか……

520：名無しの犬

>>518

むしろ有り余ってる可能性。

しかしシロ闇に落ちてシロ闇に助けられるとかこれもう分かんねえな。

522：名無しの犬

まあ、客観的に見て分かっていることは自分が不幸だと気づいてしまうという事でもある。

まあ、シロちゃんその辺気にしてないっばいけど。

525：名無しの犬

『あまり物に執着がないので、買い物とかは必要性を感じないんですよ。日光もニガテですし。それに育ての親の影響か、のんびり過ごすのが一番性に合うので』

『東郷っていうお爺ちゃんですね。後は近所の人達？ まあ、皆お年寄りなので自然と趣味もそちらに寄っちゃって。その辺り普通の子供とは違うかも知れませんか……』

『居ませんし、無理ですね。それに同年代の子とはどうにも話が合わないですよええ……気づいたら皆逃げてたりしましたから』

この辺全部それだな。客観的に見て自分が不幸であるとは分かりつつも、それを苦にしていけない訳だ。SATUMAの教えのおかげかね……

524：名無しの犬

代わりにポッチという悲しみを背負ったけどな。

525：名無しの犬

変に虐められるよりは……まあ、ね？

527：名無しの犬

綺麗な子だしなあ。余程上手く立ち回らなきゃ虐められるだろ。その点マシだったと思うか……いや、ポッチの寂しさはどうにもならんか。

529：名無しの犬

>>527

そしてポッチの悲しみからポケモンへとより傾倒していく、と。

531：名無しの犬

負の連鎖じゃねか!?

533：名無しの犬

何連鎖出来ましたか……？

534：名無しの犬

>>533

あの様子だと48連鎖は余裕では？

536：名無しの犬

>>>534

地震学者もビックリの連鎖数だな……

537：名無しの犬

そしてポッチの気配に釣られたポッチがまた一人シロ闇へと落ちていく、と。

539：名無しの犬

自分もそうだったという親近感と儂い少女への同情、そしてポケモンという逃げ道……アリ地獄かな？

540：名無しの犬

実際事実だから何とも言えん……

549：名無しの犬

思えばシロ闇案件もだいぶ増えたよなあ……そういえば買い物云々も前あつたつけ？

553：名無しの犬

>>>549

あつたぞ。放送事故でシロちゃんの自室が映ったときにな。あの子の部屋ってサツパリしてるんだよね……言っちゃ悪いけど囚人並み。

555：名無しの犬

>>>553

マジで必要最低限の物しか置いてないからな……ホント数えられる程度しか物が無い。ベッドの下を探しても出てくるのは埃だけだろうな。

557：名無しの犬

これでポケモングッズが売ってればポケモンのぬいぐるみとかポスターとかで埋め尽くされ……いや、どうだろうな。当人物に執着しないっていうか興味がないからなあ。

558：名無しの犬

物が無い状態が長く続き過ぎて、それがデフォオになってるんだろうな、アレ。物に価値を見いだせないんだ。

562：名無しの犬

それに比べてお前らの部屋と来たら……

565：名無しの犬

ちよ、ちよーと本が多いだけやし？ な、なんもねーよ？

568：名無しの犬

セヤナ。俺の部屋にあるのはパソコンぐらいな物よ。シロちゃんと同じさー

569：名無しの犬

>>565

タイトル音読してみようか？

570：名無しの犬

>>568

おう、そのパソコンのフォルダ全部見せて見ろよ。

573：名無しの犬

ホテル暮らしの俺に死角はなかった。

574：名無しの犬

リヴァイアサン組の俺に死角はない。

575：名無しの犬

肉盾の俺にも死角はなかったな。

577：名無しの犬

>>573く575

実家の掃除してやろうか？

579：名無しの犬

>>577

やめやめろ！

580：名無しの犬

フツ、家財を引き払った俺に死角などあるまい……

582：名無しの犬

>>580

うん。じゃあスマホ見せてみ？

590：名無しの犬

何か静かですねー

592：名無しの犬

>>590

ああ、シロ民は軒並みノックアウトされたんだろ（以下詠唱破棄）

595：名無しの犬

だからよお、止まるんじやねえぞ……

596：名無しの犬

キボウノハナー

600：名無しの犬

ふと思つたがシロちゃんの趣味嗜好って年寄りな感じなん？ ポ

ケモン以外。

603：名無しの犬

>>600

当人が雑誌で言ってる通りやぞ。ジュースよりお茶。洋菓子より和菓子。ジャンクフードより和食。カラオケよりお昼寝。誰かと騒ぐよりひなたぼっこ……は出来ないから月光浴か？ まあ、そんな子や。

604：名無しの犬

>>603

何というか、おばあちゃんなのな。

606：名無しの犬

>>604

まあ、育ての親が年寄りばっかやったしな。それも田舎の年寄り。さもありなん。

609：名無しの犬

……ふと、思つたが、シロちゃん年齢不明だよな？ ロリババアの可能性つてあるのか？

601：名無しの犬

（；。 ㄩ。 ）!?

602：名無しの犬

（；。 ㄩ。 ）!?

603：名無しの犬

(。皿。)!?

604：名無しの犬

なん、だと……？

605：名無しの犬

>>603

コッチミンナ

606：名無しの犬

なるほど、確かにそれならババ臭い趣味にも納得がいくが……

607：名無しの犬

ほう、まさかりアルロリババアを見る事が出来ようとはな……

608：名無しの犬

いやいや、お前ら落ち着けよ。シロちゃんは確かに年齢不明だが、

十代前半から二十代前半の間と判明してらるだろうが。

610：名無しの犬

>>608

なんだツマラン。

……ところでその判明したっていうソースは？

612：名無しの犬

>>610

近所の爺さん婆さんの証言を考察した結果だな。……あと催眠術

テロリスト野郎のハッキング。

615：名無しの犬

>>612

うわぁ……素直に受け入れたくないソースだな、おい。

616：名無しの犬

だよな。アイツのおかげとは口が裂けても言いたくないわ、ホント。

620：名無しの犬

ところで、誰か特典DVD見たやついりゆ？

623：名無しの犬

>>620

いりゆううう！ 凄いよな。アレ。何が凄いつて……もう過ぐい。

624：名無しの犬

>>623

え？ そんなに凄いのか？

627：名無しの犬

>>624

マジ凄い。見てないなら見てこいよ。

628：名無しの犬

>>624

マジか……まさかシロちゃんがサービスシーンとはな。ちよつと見てくる。

630：名無しの犬

>>628

あ、いやそういう方の凄いじゃないんだが。

633：名無しの犬

(脳ミソが)腐ってやがる。汚れ過ぎたんだ。

634：名無しの犬

アニメのブルーレイとかじゃないんだし……いや、ブルーレイでも無修正なんざないが。

635：名無しの犬

エロ脳って怖いよなあ……帰ってきたらリヴァイアサン組に放り込んだろ。

637：名無しの犬

>>635

やめやめろ！ ハートマン式の犠牲者が増えるだけだ！ 皆死ぬぞ!?

638：名無しの犬

>>637

だが今日じゃない(他人事)

640：名無しの犬

>>638

チキンブリトーかな？

641：名無しの犬

チキンブリトーをくれエエエ！

642：名無しの犬

>>641

うるせー！ 今日はお店仕舞いだ！

644：名無しの犬

(チキンブリトー下さい)

646：名無しの犬

(コイツ直接店内に……)

650：名無しの犬

……で、結局特典DVDは何が凄いんだ？

653：名無しの犬

>>650

ポチネキ。ポチネキ無双。いや、レベル的に無双は確定なんだけど、前回とは違って魅せるバトルっていうのかな？ そういう事してくれてるから、素人目に見ても凄い。

同じ事が出来るとは思えんけど……憧れる人増えるんでね？

655：名無しの犬

セヤナ。バタフリーとピカチュウも悪い訳ではないんだが……い  
かんせんポチネキが相手ではな。

656：名無しの犬

凄いやな。各種“こな”系列の技と“まひ”を誘発する攻撃の全てをことごとく避けまくるんだもん。あれ普通ならハメられてボコられるで。

少なくともコラッタニキは手も足も出ずに完敗やろ。

658：コラッタニキ

659：名無しの犬

コラッタニキ(の胃)が死んだ！

660：名無しの犬



この人でなし！

662：名無しの犬

マトモにトレーニングする暇すら無いもんなあ。コラツタニキの  
コラツタ。

663：名無しの犬

>>662

それはいわゆるコラテラルダメージというものに過ぎない。目的  
達成の為に、致し方ない犠牲だ。

665：名無しの犬

そもそもアイドル組の連携が取れてるのもあって、イワークニキも  
下手すりゃハマられて一方的にボコられる可能性があるレベルだか  
らなあ。恐ろしや恐ろしや。

667：名無しの犬

それを易々と避けるポチネキよ……

668：名無しの犬

“わざ”を使つてないのに残像が見えてるレベルだもんな。場合  
によっては引きのカメラすら捉えられてないし。

669：名無しの犬

ポチネキ凄すぎだろ……あれもうレベル1000ってんじゃね？

700：名無しの犬

あるいは噂の6Vという奴かもな。

702：名無しの犬

ああ、wikiにただ一文の概要だけ書かれたアレか。

705：名無しの犬

そのポケモンが理論上持ちうる最高の才能を持つ個体。それが6  
V個体である……だったか？ 突然出て来た6Vの単語が何を意味  
するかすら不明だが……確かにポチネキはグラエナの限界点に到達  
してるんだらうな。

706：名無しの犬

しかもSATUMAの教えも受けてる。

708：名無しの犬

まさしく強靱！ 無敵！ 最強！ だな。

709：名無しの犬

流石ポチネキ。そこに痺れる憧れるウ！

711：名無しの犬

見てきた。サービスシーンなんてちよつとしかなかった。ポチネキ格好いい……そしてそれに挑む勇者達の活躍も悪くなかったと思う。うん。

713：名無しの犬

>>711

? サービスシーンなんてあつたか？

714：名無しの犬

>>711

そんなもんなかったろ。終始ポチネキ無双と頑張る二匹だったはずだが。

717：名無しの犬

ポチネキの“はかいこうせん”とピカチュウの“十万ボルト”がぶつかって相殺した瞬間に衝撃波が出たじゃん？ あのとときシロちゃんの履いてたロングスカートが軽くめくれて、少しだけどおみ足が見えましたん。

頑張ったピカチュウと、火力を調整して手加減してくれたポチネキに感謝。

718：名無しの犬

( ; 。 ㄩ ) !?

719：名無しの犬

( ; 。 ㄩ ) !?

720：名無しの犬

( ; 。 ㄩ ) !?

721：名無しの犬

ちよつと再確認してくる (A A 略)

722：名無しの犬

ちよつとDVD見直してくる (A A 略)

723：名無しの犬

ちよつと書店に行つてくる（AA略）

724：名無しの犬

、（OWO）ノエンゲージ

725：名無しの犬

オイオイマジか。マジか。

726：名無しの犬

普通なら健全。ヒワイは無い。しかしただでさえメディア露出の少ないシロちゃんの、更に露出があり得ない生足となれば……！

727：名無しの犬

今宵。犬は狼となるのだ。

728：名無しの犬

普段抑圧されてるからなあ、シロ犬ども。こんな些細な事でも血気盛んになってしまう。……さて、もう一度見直すか。

729：名無しの犬

、（OWO）ノイジエークト

733：名無しの犬

ちよつとコンビニ行つてくる（AA略）

734：名無しの犬

ちよつとコンビニ行つてくる（AA略）

735：名無しの犬

ちよつとコンビニ行つてくる（AA略）

737：名無しの犬

>>733〜735

ジェットストリームネタ被り

738：名無しの犬

、（OWO）ノエンゲージ

741：名無しの犬

財布忘れた（AA略）

743：名無しの犬

>>741

おかえり

744：名無しの犬

>>743

ただいま

745：名無しの犬

、(0w0)ノイジエークト

749：名無しの犬

ちよつとコンビニ行つて買い占めしてくる(AA略)

750：名無しの犬

俺も行つてくる(AA略)

751：名無しの犬

先ずは確認してくる(AA略)

752：名無しの犬

、(0w0)ノエンゲージ

754：名無しの犬

じゃ俺も(AA略)

755：名無しの犬

俺も俺も(AA略)

756：名無しの犬

、(0w0)ノイジエークト

760：名無しの犬

トム猫が無くなつちやったわ。

761：名無しの犬

>>760

だったら他ので行けばいいだろ!?

763：名無しの犬

>>761

そんなあ……

766：名無しの犬

俺はガン〇ムで行く。

768：名無しの犬

シロ民、行きまーす！

.....

.....

.....

## 閑話 我輩はポツポであるくその壺

吾輩はポツポである。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめめした所でクルポークルポー鳴いていた事だけは記憶している。吾輩はここで改めて人間というものを見た。

「居たぞ！ポツポだ！」

「ポツポめエ、取っ捕まえてやる！」

「突撃イイイ！」

不思議と以前よりもハッキリと知覚できるその人間達は我輩の事を『ポツポ』と呼び、網やボールを持って追い掛けまわして来たのだ。

——なんとという迷惑。我輩は飛んでいたただけだというのに。

しかしアレらによって分かった事もある。

先ず我輩は『ポツポ』であり、かつての同族『鳩』とは一線を画す存在……つまりは『ポケモン』になっていた事。そして今の我輩は人間よりも強いという事だ。肉体的に、あるいはその頭脳さえ。

——うむ。あのと時の事は何度思い出しても痛快だ。

我輩を捕まえようと紅白のボールを投げ、それが外れば網を広げる者共。それらをポケモンの力で薙ぎ払ったのは痛快としか言いようがない。

“たいあたり” “でんこうせっか” “すなかけ” 自然と理解出来たそれらの“わざ”を使い、あるいは純粋なスピードで抜き去り……あのと時の我輩は正しく無双であった。

——しかし、長くは続かなかったな。

我輩を捕まえようとする人間を蹴散らし、自由に空を飛び回り、好きなように食って、寝て……この世界に我輩よりも強い者などいない——そう思い始めた瞬間、その考えは木っ端微塵に砕け散った。

——そう、我輩は見てしまったのだ。真の強者というものを。

あれはよく晴れた月夜の晩。かつての同族達が巣へと引き込もっている中、悠然と空を飛んでいたときの事だ。

自慢の翼をバサリバサリと動かして空を飛んでいた我輩は突然、そ

う突然凄まじい圧を感じた。殺気ではない。しかしなんの意味もない訳ではない。いや、意味はないのか。恐らくその圧を発している者にとつては特段意味のある行為ではないのだろうから。そう、いわば……強者の圧プレッシャーというべきものだ。我輩はそれを感じとった。突然に。なぜ？ そう考えたのはホンの一瞬。しかしそれで充分であった。簡単な話だからだ。

——我輩が、相手のナワバリに入り込んだから……！  
いや、あるいはただたんに射程範囲に入ったから感じとれたのかも知れぬ。ともかく、命の危機に変わりはなかった。

——ああ、以前の我輩ならこんな失態は犯さなかった。  
以前の鳩である我輩なら、こんなナワバリには絶対に近づかないだろう。近づくのはこの圧に気づけない愚か者か、あるいはこの圧の主に気に入られた者だけ。

そして我輩は……前者だ。増長した我輩は前者に過ぎない、愚か者だった。

——なんたる増長！ たかが少数の人間に勝った程度で王者気取りとは！

今さら後悔しても遅い。最早あるのは死のみ……そう思つて覚悟するも、攻撃は飛んで来ない。それどころか圧が一段引き下がっていた。

——これは、招かれているのか。

それとも取るに足らぬと捨て置かれたか。どちらにせよ我輩の中に好奇心というやつが出てきた。実に厄介なアレが。

もし好奇心に釣られてホイホイ圧の主の様子を見に行けばどうなったか分かったものではない。しかしだからといって好奇心は静まってはくれないのだ。厄介な事に。

——話に聞くと人間は好奇心は猫を殺すというが、どうやらポツポも殺すらしい。

そんな事を思いつつ我輩は高度を下げ、圧の主の様子を見に行く。ゆるりゆるりと高度を下げ、目を凝らせば……そこに一匹の黒い犬の姿が見えた。

——否、あれは犬ではない。

では噂に聞いた狼という奴か？ 違う。全く違う。あれはそんな生易しい存在ではない。もつと恐ろしく強大で、それでいて美しい存在だ。

そう我輩が彼の存在に圧倒されていると、チラリと一瞬だけ視線がぶつかり……元に戻される。どうでもよいと。

——見逃された。

悔しさは、ない。あるのは安堵のみ……いや、微かに喜びがあった。彼の存在に一瞬とはいえ注意を向けられたのだと。あの王者の様な、それでいて噂に聞く騎士の様な高潔で美しき存在に！

そうやって我輩が心一杯の安堵と、微かに溢れた喜びを手土産に帰ろうとした——その瞬間。我輩は手土産を取り落とした。

「ポチー？ お風呂入ろうかー」

彼の存在が居た家の中から、そう言いながら人間の少女が出てくる……いや、アレは果たして人間なのか？ 我輩が今まで散々蹴散らして来た人間と、同じなのか？ 我輩には分からなかった。

肉体的には、弱いだらう。最低限の動きは心得ている様だったが、鍛えているとお世辞にも言えない。だが大きさが、放たれるナニカの大きさが、あまりにも大きすぎた。もし黒い犬の様な彼の存在を騎士とするなら、あの少女は王者か、神か……間違いなく絶対者のそれだろう。

——錯覚か？ 我輩がおかしいのか？

その場から逃げる様に飛び去りながら、我輩は自問自答する。彼の騎士の様な存在を強者と見たのは間違いではない。しかし人間を絶対者だと、彼の存在を従えるに相応しい存在だと見たのは、何かの間違いだろうか？ ……答えは、出ない。

肉体的には弱いのだ。強者ではない。しかしあの放たれるナニカはあまりに大きかった。強者のそれに似ていた。……結論は出ない。

——強いていうなら、何か切り札を持っているのは間違いはない。

普段は守られる必要がある程脆弱だが、一度切り札を切れば真の強者を上回る絶対者となる……それが我輩の出した結論だ。勿論間違



いかも知れない。だが、我輩はそれ以上考えたくはなかった。

——そうだ、二度と近づかなければ良い。噂に聞く、見ざる聞かざる言わざるだ。

あれほどのナニカ。放って置けば自然と引き寄せられるが、意識していれば避けようもあるというもの。そう考えついた我輩はそれからというもの、あの少女とその騎士を避けて空を飛ぶ事とした。そして彼の存在達に目をつけられぬよう、人目を気にする様にも。

そうして見えてくるのは人の営みだ。いや、正確に言えば変化した人の営みというべきか。我輩がまだ鳩であつた頃とは——とはいえあの頃の事は霞がかつていて不明瞭だが——様々な物が少しずつ変化していたのだ。例えば……そう、カラスどもの餌場にたむろする年のいった肥え太つた女性達の話など様変わりしている。以前なら自分のつがいの不平不満を口々に叫んでいたものだが、今となっては……

「ねえ、昨日のテレビ見ました?」

「ええ見ましたよ。アレよね?」

「ああ、アレですね」

「ええアレですよ。何でもポケモン? とかいう生物について特集してたアレ」

「ああ、アノ俳優さんが出てたやつね。分かりやすかつたわね」

「以外ですね。アノ俳優さんが出るなんて」

「そうかしら? アノ俳優さん新しいの好きだから、そうでもないわね」

「ああ、それもそうですね」

「それにしても不思議よねえ。あんな生物がこれから当たり前になるなんて」

「ホントねえ。危険なものもいるみたいだし、散歩も出来ないわね」

「確かに。でも犬が火を吹くというのは面白そうですね、番犬として頼もしいですよ。うちの子もそうなるのかしら……?」

「え、ええ。そういえばそういう子もいましたね。ほら、アノ子」

「ええアノ子の事ですね。ああ、そういえば便利な子もいるとか。何

でも家事の手伝いをしてくれるとかいう……アノ子とか。そういう子は助かるわねえ」

「ああ、アノ」

「ええ、アノ」

なんとというか、軽く聞いたただけだというのに驚異的な事だ。何せ彼女達は『アレ』だの『アノ』と言い合っているだけなのに通じているのだ。まるでエスパーの如く。

ポツポになってから出来る事が増えた我輩だが、流石にそこまでの力はない。そう考えるとあの女性達の何と凄まじい事か。彼の存在には及ばないが、彼女達もまた我輩を超える恐ろしい存在なのだ……

——高度を下げるのは止めておこう。

好奇心に任せて観察したいところだが、万が一という事を考えるとそんな気は直ぐに消え去った。我輩は学んだのだ。好奇心にホイホイ負けてはロクな事にならぬと。

そうしてその場をバサリバサリと離れて暫し、今度は別の集団が見える。首に揃いの白い首輪……あれは、以前我輩を捕まえようとした連中ではないだろうか？ どうやら巨大なポケモンに勝負を仕掛けているようだが……

「ああ！ コラツタニキがやられた！」

「だが奴はシロ民四天王の中でも最弱」

「カビゴンごときにやられるとは四天王の面汚しよ」

「ん？ カビゴンがこっち向いたぞ？ なにする気だ？」

「擬人化かな？」

「ぬふふ……」

「おい、あれは、はかいこうせん”じゃないか？」

「おいおいおい待て、ヤバいぞ！」

「退避！ 退避イイイ！」

「撤退しろオオオ！」

「撤退は許可出来ない。戦闘を続行せよ」

「言ってる場合か!? 逃げるぞ！」

「マズイ、間に合わない……！」

「う、うわあああ!？」

我輩が空から首輪付きの奮闘を眺める事暫し。機嫌が悪そうなポケモン……カビゴンというらしい者が「はかいこうせん」を放ち、首輪付きを蹴散らしていた。とはいえ退避が間に合ったのか頭数は減っていなかったが。

「なんて威力だ。勝てる訳がない……!？」

「諦めるな! 最後まで戦い抜くぞ!」

「PDFの誇りを思い出せ!」

「え、ガチで設立するの? アレ」

「シロ民親衛隊も行くぞ! エリートトレーナーの力をを見せてやれ!」

「おお! SS隊員の力を、見せてやるぜエ!」

「デュフフ。では、ここは拙者に任せて貰うのですぞ」

「あ、あんたは……」

「うわ、お前居たのか……」

「フオカヌポウ」

何だ? 奴は。いきさか肥えた男……という訳ではない。鍛えてないのに鍛えている。一人なのに一人ではない? 見れば見るほど恐気がする。あれは……複数が一つになっているのだろうか?

「オウフ、ヤビゴンとは……拙者の敵ではありませんな。行くのですぞゴース!」

珍妙怪奇な男が繰り出したのはガス状のゴーストポケモン。ゴースというらしい……が、あの男に軽く取り憑いていないか?

「……なあ、アイツ、あんなに変な喋り方だったっけ?」

「ああ……何か霊的才能があったのか、ゴースを捕まえるときに複数の幽霊に取り憑かれたらしくてな」

「え」

「確か今は、論者とかいう異界のオタクと、この世のオタクの集合無意識に取り憑かれてるんだっけ?」

「あと遠縁のご先祖様らしい江戸時代の侍な。なんでも身体の動きを常々指導矯正してるらしい。ときどき会話もしてる」

「コポオ」

「カオスウ……」

これは、何というべきか。やはり世の中は恐ろしく知らぬ事ばかりだ。他者に精神を侵食されながら、それでも生きているとは……我輩の想像を絶している。あれらもまた、彼の存在に及ばないまでも恐ろしい存在なのだ。高度を上げるべきだろう。

「ドフォオ！ ゴーストタイプにノーマルタイプの “はかいこうせん” を撃つ気とは、無知とは恐ろしいものですな」

我輩がバサリバサリと高度を上げた、その時。我輩の直ぐ側をビツと光線が貫いていった。カビゴンの “はかいこうせん” だ。

——恐ろしい、何と恐ろしい事か。

流れ弾だろう。狙った訳ではない。だが流れ弾でこの威力……やはり増長など出来そうもない。

そう改めて心に思い、我輩はその場から全速力で離脱する。羽ばたき、風に乗り、 “でんこうせっか” を使って距離を取り……今度はまた別の集団を目撃してしまう。あれは、テレビ局というやつではないだろうか？

「さあ、いよいよポケモンゲットの旅へ出発です。最初に狙うはポツポとコラツタ。二匹目、三匹目が発見されている種ですが、どこにいるのかは全くの不明……佐藤さん、心境はいかがですか？」

「正直自分に出来るか不安ですが、でも不思議と同時にワクワクもしています！ ……子供の頃カブトムシを捕まえに行った頃を思い出しますね」

「なるほど。確かにポケモンゲットと夏のカブトムシ取りは通じる物があるかも知れませんね。大人も童心に帰って楽しめる事でしょう」  
「ええ、私もそう思います。ここはバシツとゲットして、テレビの前の皆さんにポケモンバトルをお見せしたいですね！」

「それは良いですね！ 中々見れないポケモンバトル、素晴らしいものになるでしょう。……では、そろそろ出発して頂きましょう！」

ふむ、どうやらあれは噂に聞く番組作りの真っ最中らしい。若い二人が年寄りに駄目出しされているのが見える。

しかし何でもあれらは我輩の同族を狙っているらしいが、その様子を他の人間に見せてどうしようというのか？ 自慢か？ やはり人間というのはよく分からない……む、あちらが我輩に気づいたな。高度を下げ過ぎたか。

「さ、佐藤さん！ ポップですよ！ ポップ！」

「え!？」

「いかん、カメラを回せ！ 本番だ！」

「り、了解です！」

人間達が何やらバタバタと慌ただしくなる。恐ろしい我輩を捕まえようというのだろうか……だが捕まってやるつもりはない。我輩は今の気楽な生活が好みなのだ。

『いや、人間に捕まった方が楽つしよ。飯タダで食べるし、飼い主がダメならボコつて逃げればいい』

そんな風に言っ若い人間の女に捕まった同族とは違う。我輩はあの者の様に安定を手に入れる為に、人間に捕まり束縛される気はないのだ。

そう思いつつ我輩は高度を上げ、テレビ局の人間達から距離を取る。年寄りが発狂しているが……知った事ではない。

——風が心地好い。やはり自由は良い。

人に捕まれば衣食住に困る事はないだろう。しかし我輩にはこの自由が性に合っていた。例えば自分で日々の糧を得ないといけなないとしても。

——そろそろ、食事とするか。

空腹を感じた我輩は糧を得るべくルートを変更し、餌場としている場所へ向かう。以前鳩だった頃と同じ物を食べても良いのだが、この身体となつてからは別の物が口に合うようになったのだ。

——見えた。

人の町に囲まれた、しかし確かに生い茂る森の中。我輩はそこに目当ての物を見つけた。緑色のイチゴの様な果実……チーゴの実だ。

——ふむ、では早速。

辺りに驚異足り得る存在がないのを軽く確認し、我輩はモシヤリ

モシヤリとチーゴの実を頬張っていく。苦い。しかし旨みもある独特の味を楽しみながら口を進める。そうして一つの木が消えるまで口を進めた我輩は軽く辺りを見渡す。

雑木林。しかしそこにデタラメに生えているのは無数の「きのみの木だ。そのデタラメ具合と数の多さには人為的な物を感じる。そして、実際それは正しい。

「あんな木の実を育てさせてどうするんだろなーあの外人どもは」「俺が知るかよ。さっさと回収すんぞ」

「ういーす」

人の話し声。それを聞いた我輩は即座に飛び上がった木枝に止まって身を隠す。そうしてソロリと視線をやれば……なんともガラの悪そうな人間が数人居た。チンピラというやつだろうか？ どのつもこいつも頭の悪そうな顔をしている。

「つかよーあんだだけ銃があるんだから銀行強盗でもすりやいいんだよ。一生遊べんだろ」

「だからさーあの外人どもの目的はそこじゃねえんだよ。つか金ならじゃぶじゃぶ持ってんだろ」

「俺らにみてえな木っ端にもポンツと気前よくくれるからなあ」

「でもそこまですって捕まえたい女って、どんな美人なんだ？ ぜってえやりたいだけだろ」

「最近はその以外にもあるっばいけどなー。ほら、えらそーなのと話してんじゃん？」

「ああ……そういや最近はいカツい連中も金で雇われてたからな。なんだっけ？ ちゅーとーで暴れてたんだっけ？」

「人殺した事もあるってスゲーよなあ」

「つても何したいかよく分かんねーけどな。連中、今九州に行ってるだっけ？」

「ああ、あのガイジンどもな。ほにやほにや何言ってるだろうな、アイツら。やる事もめっちゃくちやだしよお」

「知らね。どうでも良くね？」

「だよな。金あるしユウだろ」

何と恐ろしく、そして頭の悪い会話か。少なくとも我輩はあそこに混じりたいとは思わない。むしろさっさと場を離れていた。

そうしてその場から離れて……思う事が一つ。平穩は、長くないという事。世界は変わり、人々もそれに順応しつつあり、その反発ももう間もなく起こる。

——退屈は、しないだろうな。

今日も、明日も、その先も、我輩は空を飛ぶ。自由に、気ままに空を飛ぶのだ。

閑話 排水溝ピエロがポケモン図鑑アプリをオススメするようです

降りしきる雨の中、白いカップを着た少女が小走りで駆けていく。彼女の視線の先にあるのは……歩道と車道の間に来た小川を流れるモンスターボール。白い少女はまだ新品のそれをトテトテと追い掛けるが、ついに間に合う事はなかった。

「新品のモンスターボールが！」

何という事か。貴重品のモンスターボールは道路脇の排水溝へと吸い込まれてしまった！

思わず排水溝を除き混む白い少女だが……その先には暗い闇しか見えない。

——またユウカさんにおねだりするしかないか……

そんな事を思いながら、残念そうに排水溝から視線を外す白い少女。たれてきた長い白髪をカップの中へと回し、白い少女がその場を後にしようとした——その瞬間。

「はーい、女兒？」

いったいどういう事か!? まるで仲の良い友人に呼び掛ける様な軽い声が、排水溝の中から聞こえてきたではないか！

思わず白い少女が再度排水溝を除き混み、その紅い瞳を向ければ……暗闇の中からニユツと人影が現れた。赤い鼻、白い顔、赤いアフ口髪、ギラギラとした目……それはまさしくピエロのそれだ。しかしなぜか首に白いチョーカーを身に付けている。どうやらシロ民のようだ。

「ポケモンゲットしてる？」

いったいコイツは何なのか？ ピエロなのか？ それともシロ民なのか？ そんな疑問と恐怖を感じつつも、ポケモン絡みの質問という事もあって白い少女は律儀にも首を振って返答する。直した白髪がカップの外に出て来る程に勢いが激しかったのは……動揺の証か。

「oh……最初のポケモントレーナーなのに……」



「ほら、ポケモン図鑑もあるよ?」

「そんな事言ってまたパチモンなんでしょ? だまされんぞ」

白い少女自身気にしている痛いところを——突かれ、少女が前々から欲しかったアイテムを見せられて思わず排水溝の中へと手が伸び……ギリギリで正気を取り戻して反論する。その手の詐欺にはもうあつたと。

「いや、これは俺が頑張って作ったスマホアプリでね。先日話題になったパチモンなんかじゃない」

「今回は取り敢えずシロちゃんで作ったポケモンwikiからカントー地方のデータだけを搭載しているが、それでも151匹分の基本データを入れてある」

「日本政府も伊藤グループもまだ作ってないポケモン図鑑を、スマートフォンアプリにする事で実現したんだ」

「どうよう?」

なるほど、ピエロの格好した男はかなりの努力をしたらしい。そして何より素晴らしいのはポケモン図鑑の形に囚われず、スマートフォンを最大限利用するという発想だろう。現代人らしい素晴らしい発想だ。間違っても趣味が爺臭いロートルには思い付かない発想である。ギラギラとした目は……睡眠不足のそれだろう。代償だ。

そうして努力した究極のアイテムを引っ提げて、排水溝からドヤ顔を決めるピエロ。その一撃は正しく、いちげきひつさつ。当たれば白い少女のバイタルパートは貫通していただろう。だが……

「面白そう! じゃ、帰ってユウカさんに商品化して貰おう」

渾身の攻撃は空しく外れる。白い少女が独りだった頃なら命中しただろうが、生憎今の少女には頼れる保護者や協力者が沢山居るのだ。さもありません。

そして、これに慌てたのはピエロ。このまま帰られてはマズイ——その思いから咄嗟に大声で呼び止める!

「待てや!!」

「これを、見るんだ……」

最早ピエロに余裕はない。闇の中から切り札を取り出す。それは……

「私のモンスターボール!」

なんと、闇の中から現れたのは諦めるしかないと思った新品のモンスターボールだ! これには白い少女も思わず排水溝に食い付くざるを得ないっ……!

「イグザクトリー。今アプリを入れるなら返して上げよう」

「さあ、ダウンロードしろ」

何という脅迫か。最後までないピエロはモンスターボールを人質に脅迫してきたのだ!

これには白い少女も——その手の趣味の人が喜ぶだろう——嫌な顔を叩き付け、ピエロを侮蔑する。このゲスめ、と。

「oh……」

「このアプリに盗聴盗撮用のウイルスが仕込まれるって顔だね」

幸か不幸か、ピエロはMではなかったらしい。そうして放たれるのは予想斜め上の懸念。

これには白い少女もドン引きしつつ——その手の趣味なら豚の鳴き声を上げるだろう——嫌な顔を「たたきつける」他ない。なんならこのままポケモントレーナーらしくポケモンバトルでボコつてやろうかと手持ちのモンスターボールを取り出すまでである。

「おっと、ポチネキは勘弁」

白い少女が取り出したモンスターボールの中身を察したのだろう。ピエロの勢いが弱まる。現状最強のポケモンを相手取りたくはなかったらしい。

しかし、勢いは弱まれど口は止まらなかった。

「でも大丈夫。このアプリにウイルスは入ってないよ」

「純粹な思いと徹夜テンションで作ったからね。当たり前さ」

ギラギラとした明らかな睡眠不足の目を向けつつ、ピエロは語る。大丈夫だ、問題ない……と。

「それデータ重くない?」

「えっ、うん……」

ありがちな不安点を指摘され、言葉につまるピエロ。副音声で内心の言い訳が聞こえきそうだが……

「ポケモン図鑑はいいぞ……シロちゃん」

「とってもいいぞ……」

あろうことか、ピエロはそのままゴリ押しに入った。いいぞ、いいぞ、と相手を洗脳するかの如く繰り返し、白い少女の意識を引き込む。相手に喋らせず、一方的に喋り続ける事で勝利を引き込もうとしているのだ……そして、その結果。

「このアプリを入れたスマホ片手にポケモンを探すといい……」

白い少女は手を伸ばす。ポケモン図鑑片手にポケモンゲットの旅は、白い少女の長年の夢だったのだ。殺し文句にも程があり……今度は確りと命中してしまっていた。正しく「いちげきひっさつ」だ。

「俺はその姿を激写して一儲けだ！」

白い少女のカン高い悲鳴と、男の野太い雄叫び、そして獣の遠吠えが響き――

……  
……  
……

雨の中、一つ棺を取り囲んで葬儀が行われていた。白い少女の物か……いや違う。参列者には白い少女の姿もあり、その傍らには尻尾をパタパタと振るグラエナも居た。

ではこれはいったい誰の葬儀か？ それは直ぐに分かった。

「欲を出した開発者は死んだ。ポチネキの『ほえる』を受けたのだ」

「大人しく別の方法で開発費を回収すれば良かったのに、シロちゃんに手を出すからこうなる」

哀れ、ピエロの格好した男の葬儀であった。まあ、そのうち勝手に生き返るだろうから無駄な儀式だが……

「やはり徹夜テンションで行動してはいけないのだ」

「アプリの出来映えは良かったんだから、他に売り込めば良かったのに……そんな事も分からなくなってきたのだろうか」

「ところで何で俺がコイツの葬儀やってんの？ モウヤダ」

実に哀れなり。同志からさえモウヤダと言われた男の葬儀は悲しみの欠片もありはしない。人によつては『シロちゃんの写真集出ないかなあ……』等と考えている始末だ。

さらば開発者。まあ、次の瞬間生き返ってそうだが。

……………

……………

……………

「ん、ううん……？」

目覚めの瞬間というのはいつも突然で、曖昧だ。そしてそれは今回も変わらない。どうやらいつの間にか眠っていたらしい身体を起こし、辺りを見渡せば……伊藤家が持つ別荘の居間だ。日は沈み始めており、かなりの時間居眠りしていた事が分かる。

しかし……

「変な、夢……」

最早ボンヤリとしか思い出せない夢。しかしその夢の中に『ポケモン図鑑』が出て来た事は覚えている。

——そんなに先日のパチモンがショックだったのかな？

どこかの業者が一儲けしようと、上っ面だけを似せた粗末なパチモン。なまじ本物のポケモン図鑑を期待しただけにあれば本当にショックだった。そのせいで妙な夢を見たのかも知れない。

そんな事を考えつつ私は何気なくテレビの電源を入れる。映しだされたのは……ワイドショーの様だ。テロップには『ポケモン図鑑アプリ完成！』とある。……ん？ ポケモン図鑑アプリ？ どこかで聞いた様な……？ どこだったかな。

『では、このアプリをインストールすればスマホがポケモン図鑑になる』

『はい。まだ荒削りな部分もあつて若干重いのが欠点ですが、その性能は本物です。例えばこのようにコラッタをカメラに映せば……はい、アプリ側で検索された結果コラッタの基礎データが表示されます。そしてここから専用ページに飛ばば確認された習性や“わざ”を確認する事が出来る訳です』

『なるほど。これならポケモンの事に詳しくなくても、そのポケモンがどんなポケモンなのか分かるという事ですね』

『その通りです。勿論使うには周囲の安全が必要ですし、まだまだ足りない機能も多い。その辺りは使い手に求めたり、あるいはこちらの課題だと思えます』

『なるほど、今後も進化していくと。……しかし、これだけの機能となると利用料もかかるのでは？』

『それも考えました。しかし我々シロ民は人とポケモンの共存を何より望んでおり、その為には多少の損は呑み込む覚悟でいます……ええ、このアプリは基本無料で使えます。今のところ課金要素もありません。今後追加される機能は全て無料で使用出来る様に取り計らっていく予定です。仮に課金要素を入れるとしても、それはポケモン図鑑とは直接関係のない……いわば着せ替え機能の部分になる事でしょう』

『それは素晴らしい！ これで人とポケモンがより手を取り合える事になるでしょうね』

『ええ、そうなる事を我々は望んでいます』

『では、具体的なダウンロード方法について——』

そこまで聞いた私はポケットからスマホを取り出し、早速ダウンロードに入る。何せポケモン図鑑だ。迷う必要もない。しかし……そこはかとなく不安があるのは、まあ気のせいだろう。

何にせよ、今のところポケモンは順調に世の中に受け入れられている様だ——

## 外伝Ⅰ 再会

——ザザアン、ザザアン。

遠くから波の音が聞こえる。穏やかな波の音。海の音が。

——ザザアン、ザザアン。

少しだけ音が大きくなり、スツと潮の香りが鼻に入ってくる。どうやら案外近くに海があるらしい。

——ザザアン、ザザアン。

暫く波の音を聞いていた私だったが、何気なく指を動かして……ハタと気づく。サラツと指に当たった砂。つまり、どうやら自分は砂浜で横たわっているらしいと。

——何だつて砂浜なんかに……

相も変わらず響く波の音を聞きながら、私はそんな事を思いながら目を開けて身体を起こす。そうしてグルリと辺りを見渡して……頭の上にクエスチョンマーク。

「(っ)、ど(っ)…:…?」

目の前に広がるのは綺麗な海だ。濁りもゴミも無い、深く青い大海原。そして私がペタリと座った周りと左右はこれまた綺麗な砂浜で、背後を振り返れば海岸らしい木々と植物が森を作っている。

ハッキリ言おう。大自然のド真ん中だ。

「なんで、こんなところに……」

いったい何がどうなれば、こんな大自然のド真ん中で居眠りする事になるのだろうか。そう疑問に思いつつ起きる前の記憶を遡ってみるが——

「……? あれ?」

無かった。全然、これっぽっちも、欠片も無かった。私に起きる前の記憶は存在していなかった。

「そんな、はずは……」

ない。そう思って再度記憶を引っ張り出してみるが、やはりそれらしい記憶は見当たらない。道具の使い方とか、ポケモン? の事とかなら分かるのだが……自分が何者で、どういう経歴を持っていて、な

ぜここに居るのか？　それが分かる記憶は全くありはしなかった。

いや、強いて言えば自分の名前だけは覚えていたが……

「不知火、白」

だからどうしたというのだ。存在しない幻と、白、そんな名前が分かったところでどうにもならない。現にこの名前を名付けただろう親の顔すら出て来ないのだ。なぜここに居るのかを名前から推測するのは困難だろう。

いや、こじつければ全ては夢幻と言えなくもないだろうが……

——それは、あんまりかな。

そう現実逃避を叩き潰しつつ、私は改めて身体を調べる。ペタペタと触ってみるにどうやら私は白髪の少女らしい。着ているのは……ワンピースだろうか？　靴なんかの小物から察するに、どこかのお嬢様と思えなくもない。

——少女、お嬢様。何か違和感がある。まるでそうではないような……

とはいえ、まさか男という訳もあるまい。そう感じていた違和感を切り離し、私はゆっくりと立ち上がって辺りを見渡す。

夕日に彩られ始めた海、岩礁、砂浜……そして先ほどは気づかなかったが、左手の先に洞窟の入り口を、右手の先にそれなりに使われているのか踏みならされた道を見つけた。

——無人島……という訳ではなさそう。

パツと見てそれと分かる程度には使われている土の道があるのだから、少なくとも無人島ではないだろう。そうボンヤリと考えていると……道の先から誰か歩いて来た。あれは、人か？

——綺麗な人だな。

スタスタとこちらに近づいてくるその女性を見て、最初に思ったのはそんな事だ。

長く綺麗なストレート黒髪と、どうにも本物に見えるケモミミと尻尾。年頃は……年上のお姉ちゃんといったところだろうか？　ピクピクと動くケモミミのせいかな、悪い人には見えない。

——というより、前に会ったような……？

気のせいだろうか。いや、気のせいのはずだ。何せ私には記憶がない。にも関わらずこうも会った事のあるような、懐かしい既視感を覚えるのは……やはり会った事があるのだろうか？ 記憶を失う前の私と。

だとすればどうすればいいのだろうか？ そんな事を思っていると、あちらは私に話し掛ける事にしたのか視線があつた。

「やあ、アンタも海を見に来たのか？」

「あ、え、えつと……」

フアサリと尻尾を動かし、そう訪ねてくるお姉さん。やはりコスプレではない。そんな事を頭の端で考えたせいも、返す言葉につまづきました。だって、どういえばいいのだ。記憶喪失なんて。

「そ、その、ですね」

「うん」

「ええと……」

どう言えば良いのか？ それを悩む私に、ケモミミお姉さんは相づちを打ちながら軽く膝を追って視線を合わせてくれる。目と目が合う。優しい赤色の瞳……ああ、もう、言ってしまうおう。きつと大丈夫だ。

「その、よく分からないんです。何で自分がここに居るのか……サツパリで」

「……なるほど。じゃあ、何か分かる事はないか？ 些細な事でもいいよ」

「えつと、自分の名前だけ。不知火白です」

「うん。うん？ シラヌイシロ？ 随分長い名前だな」

「いえ、その。不知火が名字で、白が名前です」

「ああ、家名持ちか。珍しいなあ」

うんうんと頷きながらそういうお姉さん。どうやらこの辺りでは名字は珍しいらしい……どういう文化なのだろうか？ まだそれほど人口が増えてないという事だろうか？

私がそう考えているうちにお姉さんは満足したのか頷くの止め、すんだ赤い瞳をこちらに向ける。なんだろうか？



「じゃあ、私も自分の名前を名乗ろうか。アタシの名前はポチ。グラエナのポチだ。宜しく、シロ」

「グラエナ……あ、はい。宜しく願います」

ポチ。そういうらしいお姉さんに頭を下げながら、私は『グラエナ』という単語に凄まじい既視感を覚える。そして『ポチ』という名前にも。グラエナのポチ……なんだろうこの感覚。とても懐かしい……けど、悲しい？ 嬉しい？ 不思議な感覚だ。やはり彼女と私は以前会った事があるのかも知れない。

「んじゃ、行こうか」

「えっと、どこにですか？」

「プクリンのギルド……今は閉まってるし、取り敢えず一杯やりに行かないか？ 最近出来た店なんだが、結構良い感じなんだ。一緒にどうだ？」

私がポチお姉さんに感じる不思議な既視感を考えていると、お姉さんが背後を親指で指しながら私を誘ってくる。一杯、という事はお酒だろうか？ だとすると誘いは嬉しいが、断らなければならないだろう。何せ私自身の年齢は分からないが、とてもお酒を飲める年には思えないのだから。

「いえ、その、私は……」

「ああ、カネなら気にするな。私が持つからさ、ドリンクでも飯でも好きに食ってくれていい」

うう、押しが強い……しかしドリンク？ お酒ではないのか？ いや、ポチお姉さんはお酒で、私はジュースという事？ だとするなら断る理由は無くなる。そうなる……

「じゃ、じゃあ、願います」

「あいよ。さ、こっちだ。特に道が複雑な訳じゃないが……この辺りの事はよく分らないんだろう？ はぐれないようにな」

「あ、はい」

私が返事をするるとポチお姉さんは微かに笑みを浮かべた後、クルリと振り替えて来た道へと戻って行く。スタスタと歩いていくお姉さんを小走りになりながら追い掛け、その綺麗な黒髪とふわふわな尻

尾の後へ続き、砂浜が土へと変わり、周りに生える植物が変わって、坂を登る事暫し。視界が開ける。

別に何か目立つ物がある訳じゃない。そこそこ広い土の道の交差点と、更にも上へと続く自然に溶け込む階段。後は井戸と立て看板か幾つかあるだけ……いや、もう一つあった。これは、地下への階段？

「目当ての店はその階段の先だよ。ドリンク屋と、交換クジ屋だったかな？ まあ、入れば分かるよ」

「は、はあ……」

地下への階段という突然の存在に、思わず曖昧に頷く私。

そんな私にポチお姉さんは苦笑を返して「じゃ、お先」と階段を降り始めてしまう。

——うう、ちよつと怖いけど……

でもポチお姉さんは悪い人？ グラエナ？ ではなさそうだし、大丈夫だろう。そう考えて私はポチお姉さんに数歩遅れて地下への階段を降り始める。

そうして数段降りてみると予想した様な怖さは無く、むしろワクワク感が強まっていくのがハッキリと分かった。原因は……なんだろう？ でも、この先は悪い場所ではないと、なんとなく分かるのだ。きつと大勢の人達が楽しめる場所なのだろうと。

そんな事を考えているとどうやら行き着くところまで着いた様で、パツと視界が開けて光が溢れる。ここは……

「ダアアツ！ またハズレたアー！」

「でだ、そこで俺はこう言つてやったのさ。残念だったな、トリックだよってな！」

「ふむ。これもなかなか美味しいですね」

かなり大きく、明るい木のホールには大勢のポケモン達が居て、各々賑やかに騒いでいた。ある者はギャンブルにでも負けたのか打ちひしがれ、ある者はコップ片手に己の武勇伝を語り、またある者は静かに場に溶け込み……なんといか、楽しげな場所だ。

——しかし、ポケモンとは。

パツと見るだけで様々なポケモン達が見える。ヘラクレス、オクタ

ン、ジグザグマ、バリヤード、パチリス、キレイハナ、パッチール、ソーナノ、ソーナンス……他にも様々な、それでいていずれも覚えのあるポケモンばかりだ。いや、今覚えばグラエナもポケモンだな。なぜかポチお姉さんは萌え擬人化されたそれだが。

——？ 何で私、ポケモンの事、知らないのに知ってるんだろ……？

はて、おかしいものだ。私は何もかも忘れていると思っていたのだが……どうやらこのポケモンと呼ばれる生物の事についてはかなり詳しく覚えているらしい。

とはいえ、ポケモンが具体的に何なのかはイマイチ不明瞭だが……まあ、こうして覚えているのだ。恐らくポケモンが居るのはごく当たり前の事なのだろう。

「おーい、シロ？ 大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です」

「そうか？ んー……じゃあ、こっちに来てくれ」

ポチお姉さんはボーとしていた私を暫し見つめていたが、直ぐに視線を切ってホールの奥へと歩いて行く。それに続く様に私も奥へと進めば……どうやらポチお姉さんはパッチールに用がある様子。あれがドリンク屋だろうか？ お酒が置いてる様には見えないが……

「おや、これはポチさん。ご注文ですか？」

「ああ。私はくろいグミで……そうだな、しろいグミでもう一つ頼めるか？」

「はい。くろいグミとしろいグミ入りました」

ポチお姉さんから何かを受け取り、まるでカクテルを作るかの様な動きをフラフラと始めるパッチール。その動きは危なっかしいが、同時に手慣れている感もある。さしずめ気安いバーテンダーか。

そして、材料にしたらしいグミがあのお菓子のグミならお酒云々は私の早とちり。そこは一安心……ではないな。何せお菓子で作られたドリンクだ……色々と、大丈夫か？ 不安になる。

「できあがりっ！」

おっと、そういう言っている間にドリンクが出来上がった様だ。ポ

ちお姉さんがパッチールから木のコップを二つ受け取り、振り返えって片方を私に渡してくる。中身は……美味しそうに見えるが、しかし。

「あつちでゆつくり飲もうか。聞きたい事もあるだろう?」

「そう、ですね」

ポチお姉さんの言葉に私はコップの中身の不安を一度置き、お姉さんに続いて店の端の方にあつた席に二人で着く。

周りは賑やかだが、この席だけは静か……そんな状況でお姉さんはコップを煽り、一気に半分を飲み干す。美味しいのだろうか? 美味しいそうだ。

——ま、先ずは少しだけ……

そう思い少しだけ、チビチビと飲んでみれば——これは、意外というべきか。かなり美味しい。そして好きになれそうな味だ。とてもお菓子から作ったとは思えないドリンクだ……

「な? 結構良いだろ?」

「はい。美味しいです」

追加でドリンクをチビチビと口に含めつつ、私はコップ片手に自慢気に微笑むポチお姉さんに言葉を返す。思えばこれは彼女のおごりなのだ。後でお礼を言わねばなるまい。

「さて、落ち着いたところでシロが聞きたい事に答えようか。何でも聞いてくれ。答えられるだけ答えよう」

「ん、そうですね……」

「ゆつくりで良いよ。そうポンポン出てくる物でもないだろうし。……ああ、ちなみに私の姿が他のグラエナと違うのは詳しく聞かないでくれよ? 前に遺跡のトラップに引っ掛ってからこんな感じなんだ」

「えっと、それは、なんというか」

「ああ、気にしないでくれ。別に不便してないし、私自身あんまり気にしてないんだ。身体の調子が悪い訳でもないしね」

んー、それは、大丈夫なのだろうか? 調子が変わらないとはいえ、早めにかした方が良いような気もするが……しかしそのまま

で居てくれた方が良いでしょうな。

——まあ、私がどうこう言う話ではあるまい。

今はポチお姉さんの気遣いを受け取り、何か分からない事を質問すべきだろう。

そう考えた私はウンウンと質問を考え始める。そんな私をポチお姉さんはコツプ片手に微笑ましそうに眺めていて……それは、なんだかとても懐かしい感じがするのだ——

## 一章終了時の設定まとめ

人物ノート01

名前 不知火白（通称シロちゃん）

年齢 ???

見た目 つるーんぺたーんすとーんなアルビノロリっ娘 ジト目

普段ハイライトはあまり入ってないが、ポケモンの事になると目が輝く

服装 基本的にジャージだったが、最近はや清楚なお嬢様系

種族 ???

特記技能 ポケモンへの狂愛 SATUMA人の教え子 APP

18 先導者の声 ■■■■の加護

解説

本作の主人公にしてヒロインであり、全ての元凶。その見た目は美しく可愛らしいアルビノ少女だが、中身は元野郎のポケモン狂人である。元々そうだったのか、死を経験して歪んだのかは不明だが、ポケモンに対する思いは狂人のソレであり、行動指針もポケモン中心となっている。また元男の為か、かなりのズボラで自身の事にも頓着しない。この予想しようのないギャップが闇深勘違いを生むのだが……本人は欠片も気づいていないのが現状。更に目がデフォルトで死んでいるので勘違いを更に助長させている。ちなみに育ての親の影響か趣味嗜好が年寄り臭い。

一章初期では世の中に絶望したちよつと信者の多い配信者でしかなかったが、一章終わりでは独自のツテを駆使して人脈を構築、財界や政界にまで首を突っ込める様になった。

特技はポケモンのお絵かき……そして他者の魅了と洗脳。とはいえ彼女の魅了が力を及ぼすには幾つかの条件——ストレスや睡眠不足等で精神の均衡が崩れている等——があり、誰でも彼でも墮とせる訳ではない。更に魅了洗脳共に能力については無自覚である為、効率的な運用はされていないのが現状。また何に由来した能力なのかも不明。

なお、一見完璧に見えるが割りと欠点が多い。特にポケモンバトルの知識やそれに向けた育成の知識があまり無く、この為ゲーム通りのルールに乗っ取った戦いはニガテ。ただ指揮官としての彼女は非常に冷静沈着でいつそ冷徹でさえある為か、現実的なバトルの腕前は決して悪くない。

最近是人とポケモンが上手くやっていけてる様子にご満悦な模様。

人物ノート02

名前 ポチ (通称ポチネキ)

レベル 1??

種族 グラエナ

特性 S A T U M A 式いかく

特記技能 S A T U M A 人の教え子 6 V 個体

解説

主人公の相棒にして現状最強のポケモン。歴戦の S A T U M A 人の教え子であり、およそグラエナとは思えない戦闘能力を有している。その強さは凄まじく、並みのポケモンでは本気にさせる事すら不可能。間違いなくグラエナとしての限界に達しているのだろう。なおカウンターがスマブラ仕様だったり、通常のグラエナとは能力に差違が見られる。

シロちゃんとの付き合いは長い様で、時折シロちゃんを姉の様な視線で見ている。

人物ノート03

通称名 東郷お爺ちゃん

年齢 100歳超え

見た目 筋肉の衰えていない厳格な爺さん

服装 基本的に和服

種族 S A T U M A 人

特性 S A T U M A の波動

特記技能 S クラフト 奥義・S A T U M A 神剣

## 解説

主人公とその相棒の育て親であり師匠。大戦を生き抜いた歴戦のS A T U M A 人であり、変態が編隊を組んでいた頃は警備員の真似事もしていた。現在は不穏な噂の真偽を確かめるべく故郷に帰省中……彼が戻るとすれば、それは戦いの最中だろう。

I F 時空では生きる意味を見失い、本編開始時期に老衰で死亡している。

人物ノート04

名前 伊藤ユウカ

年齢 二十代前半

見た目 大和撫子系

服装 落ち着いた雰囲気を好む

職業 お嬢様

特記技能 お嬢様 プロパガンダの知識 シロちゃんガチ勢

裏設定 スターシステム

## 解説

元T H Eお嬢様。現エリートシロ民。それが彼女の全てである。

生まれ持った家柄と才能を振り回し、芸能界で好き勝手にいた彼女はある日人生初の挫折を経験。そのまま下り坂を転げ落ちていった彼女を救ったのがシロちゃんであり、シロちゃんの夢だった。白い少女の純粹にして狂気の夢に触れた彼女は何かを思い至り、それまでの全てを捨てシロ民へと転進。結果芸能界でも有数の存在へと駆け上がるが……シロ民となった彼女にとってそんな事は些事に過ぎず、いつか少女と会える日を心待ちにし——ついにギガヨットを引っ提げて登場する事となった。

その後は自身の持つ能力、家柄、コネ……ありとあらゆる物を駆使してシロちゃんの夢を叶える為に奔走している。全てはあの日共感した夢の為に——

I F 時空ではシロちゃんに会えなかった為、落ちるところまで落ちきり、最終的には行方不明となっている。



人物ノート05

名前 ??? (通称筆頭犬兵)

年齢 二十代

見た目 鋭利な刃物の様だと言われるらしい

服装 コートを好む

職業 筆頭犬兵 超能力者

特記技能 サイコメトリー能力

解説

シロちゃんガチ勢の中でも秩序と規律を重んじるのが犬兵であり、彼はその中でも筆頭格の存在である。それなりに回る頭脳と、シロちゃんの為なら生活を投げ出すアクティブさ、何より秩序に準じる覚悟は筆頭犬兵の名に相応しい。

また彼はシロ民の中でも最も早く元シロ民達の不穏な動きに気づいた存在でもあり、以後その動きを追い続けている。とはいえ不規則に過ぎる動きに当初の予想は外れ、後手後手になっているが……それでも、何かを掴んで帰ってくるだろう。

基本的に個人で動くが、スポンサーの言う事に従う事も多い。またシロ民初の超能力者でもあり、そのサイコメトリー能力はかなり強力だ。とはいえ最初から自覚していた訳でもなく、本人も能力には懐疑的……もし彼の超能力を肯定してくれるシロちゃんの知識や人物がいなければ、彼の能力は暴走していただろう。

I F時空に置いては志願兵となり戦闘に参加するも、戦いの中でサイコメトリー能力が暴走。強化人間染みたムーヴでギャラドスと一騎打ちをする事になり、その後M I A判定を受ける。

人物ノート06

名前 ??? (通称コラツタニキ)

年齢 二十代後半

見た目 疲れきったサラリーマン

服装 セミフォーマル、あるいはスーツを好む

職業 ポケモントレーナー

特記技能 胃痛

解説

二人目のポケモントレーナーにして胃痛のお兄さん。それがコラツタニキである。

以前は社畜として過ごしていたが、ポケモンの登場を機に退職。人生最後の旅行とばかりに家財を引き払って関東へと向かい、そこで二人目のポケモントレーナーとなる。……が、それこそが彼の胃痛の始まりだった。

シロちゃんが警護やその他様々な問題から表に出れない為、お偉いさんへの説明を中心に駆り出される事になったのだ。勿論元社畜にそんな状況への耐性などなく、あつという間に彼は胃痛と友達に、胃薬と親友になるはめになった。最近は胃痛が慢性化しているらしい……また、相棒のコラツタと共に胃薬のコマーシャルにも起用された。

そんな二人目のポケモントレーナーだが、ポケモンバトルの腕はあまり良くない。というか悪い。これもお偉いさんとの会食ばかりで、実戦経験が少ないからだが……今後改善されるかは甚だ疑問だ。

IF時空に置いては蚊帳の外。何だか分からないうちに事が始まり、気づけば日常は崩壊していた。

人物ノート07

名前 ■■■■

解説

元シロ民の代表。作品が改訂されるにあたり、第一章から存在を抹消された。が、居なくなつた訳ではなく……

人物ノート08

名前 遊山<sup>ゆざん</sup>香<sup>かおり</sup> (通称バタフリーのトレーナー)

年齢 十代後半

見た目 元気系アイドル

服装 動きやすい物を好む

職業 アイドル

特記技能 アイドル ポケモントレーナー

裏設定 スターシステム

解説

元気系アイドルなバタフリーのトレーナー。日本政府が公式に認めた三人目のポケモントレーナーであり、本人の職業と相まってメディアでポケモンの事を語る事が多い。また伊藤ユウカは同じ事務所先輩であり雇い主で、無茶振りスレスレを要求されたり、便利に使われる事が多い様だ。

現在は同じポケモントレーナーになった同期の冷水紗輝と共にユニットを組んで活動しており、アイドル兼ポケモントレーナーとして様々な広報やデモンストラーションを行っている。胃痛のお兄さんとは友達。

最近はやれ気味の先輩からシロちゃんの友達枠に入る様に無茶振りされた。が、実際会ってみるとそこまで無茶振りではなく、スムーズに友人関係を結ぶ事に成功。人徳。とはいえシロちゃんからは闇のオーラを感じずにはいられず、どう仲良くしていくか悩んでいる様だ。

ポケモンバトルでは各種“ごな”を使って相手の動きを制限し、一方的に打ちのめす戦術を得意とする。またこの戦術を確かな物とする為か、彼女のバタフリーは回避技術を高められている様だ。腕前はそこそこ。

人物ノート09

名前 冷水<sup>しみず</sup> 紗輝<sup>さき</sup> (通称ピカチュウのトレーナー)

年齢 十代後半

見た目 無口系アイドル

服装 落ち着いた物を好む

職業 アイドル

特記技能 アイドル ポケモントレーナー

裏設定 スターシステム

解説

無口系アイドルなピカチュウのポケモントレーナー。他の人物に遅れつつも早い段階でポケモンをゲットした人物であり、遊山香とユニットを組んでからはポケモン関連の広報デモンストレーションに引つ張りだこ。バタフリー（32キロ）を頭に乗せる相棒をアホの子扱いしつつも、邪険には扱わない。なんだかんだ気が合うらしい。

最近はキレ気味の先輩から相棒と一緒にシロちゃんの友人枠に入れと言われ、仕事ならと覚悟を決めて望んだが……案外アツサリ友人枠に入れた事に拍子抜けしている。しかしシロちゃんから感じる闇のオーラに嫌な予感を感じずにはいられず、ポケモン談義で盛り上がりながらも警戒心が解けない日々が続いている。

ポケモンバトルではやたら動きのいいピカチュウを巧みに指示し、隙を見ては“まひ”状態に陥れて一気に叩く戦術を得意とする。またこの戦術を確かな物とする為か、彼女のピカチュウはかなりの練度を誇るようだ。腕前は悪くない。

その他

シロちゃん家の近所の爺さん婆さん

基本的にのんびりとした人達であり、シロちゃんの事は孫のように思っている。またシロちゃんとしても割りとなつている様子。最近はきのみ栽培に凝っている模様。

シロ民

ある意味この作品の主演といえる存在。ニートからお嬢様まで幅広い層を持ち、中には霊能力者や超能力者も居る。基本的にノリが良い連中（ノリが10年、20年古いのは作者の責任だ。だが作者は謝らない。というかどうかどうしようもない）

ポケモンへの知識はかなりの物があり、数百のポケモンの名前を全て暗記している者も多い。とはいえそのレベルや忠誠心はバラつきがあり、派閥も多岐にわたる。

モーターシロ民、一般シロ民、犬兵、シロちゃんガチ勢、エリートシロ民、シロちゃん親衛隊……と自称他称は多岐に過ぎるので、その場のフイーリングで誤魔化す者も多い様だ。最近では異世界から論者の生き霊が生えた。

元シロ民

シロ民から追放認定を受けた者達。元々シロちゃんのファンという訳では無かつたらしく、その殆んどが元来からの犯罪者。とはいえ物理的な犯罪者は少なく、ネット上での犯罪者が多い様子だ。シロ民曰くシロ民の恥。

ポケモンの知識はあまりないものの、全く無いという訳ではない。とはいえポケモンバトルの腕は赤点の様だ。

植物学者

“きのみ”学の第一人者。学者としてはかなりの若手であり、分からない事は人に聞く素直さと柔軟な発想力を持つ。

友人にシロ民がおり、その関係で“きのみ”やシロちゃんの事を知り、“きのみ”を中心に世間へポケモンを知らせる事に一役かった。現在はポケモン研究所で研究室の室長を努めている。

ポツポ

自分の事を我輩と呼ぶ特異なポツポ。ちよいちよい勘違いしているものの、人の世を冷静に見つめる等、かなりの知能を持っている事が伺える。

今日も彼は空を飛びながら、人の世を見るのだろう。

伊藤の爺さん

元大物政治家であり、現役引退後も各所に強い影響力を持つ人物。孫に甘い。

SATUMAのお爺ちゃん事東郷氏に教えを受けていた事があるらしく、彼にとってSATUMAお爺ちゃんは先生らしい。

若い頃は日本を世界一の国にしようとおれこれ頑張っていたが、各方面からの妨害に妥協するしかなかった過去がある。その為、妨害を跳ね除ける鉄と血……抑止力を重視しており、ポケモンにこれをもとめた。

IF時空では死になかった恩師の死にショックを受け、更に孫の目を疑う失態が続き、そのまま引きずられるように老衰した。

総理大臣

一般的に見て日本で一番偉い人。自分の任期中に来た特大の厄介

事に頭髪を減らしながらも、確かなやりごたえを感じている様だ。伊藤の爺さんは先生にあたるらしい。

IF時空では突然の災害の責任を追及され、叩かれ、頭ハゲ散らかしながら対応したもののどうにもならず、最終的に内閣総辞職ビームを受け行方不明となった。

リヴァイアサン号艦長

ギガヨットの持ち主。普段は日本に寄り付かないが、偶然立ち寄ったところを捕獲された。伊藤父とは仲が良いが、ユウカ嬢はニガテ。

最近CIAとの関係が噂されている。なお船酔いこそしないものの、「いあいぎり」も使えない。

ポケモン研究所所長

短時間で未知の技術の基礎研究を済ませるなど、非常に有能な人物。とはいえそれに比例するかの様にSAN値が低く、時折発狂する様子が見受けられる。

霊能力者曰く、チョコビヒゲの伍長閣下が背後に見えるそうだ……

用語解説

SATUMA人

歴史の節目節目に現れる謎の存在。頭角を表したのは戦国時代辺りからで、戦国時代の終わりには『島津の退き口』を披露しその名を後世まで知らしめた。

その後も事ある事にその名を残し、日中、日露、第一次、第二次と戦いの場には必ず彼らの名が残されている。また戦いとは直接関係なさそうな場面……例えば戦後日本においてもちよくちよく名前を残している。万能かよ

作者は一度薩摩の地を踏んだ事があるが……さもありなんといつたところか。人生で一度は行ってみるのをオススメする。二度行きたいとは思えないが。薩摩人。パワフル過ぎんよおー

リヴァイアサン号

ギガヨットという名の海の城。お前のようなヨットがいるか

豪華客船顔負けの内装を持ちながら、軍用ヘリの運用能力と軍艦並

みの抗堪性を備える海の要塞。今後海で何か起これば真っ先に駆り出される事だろう。

ちなみに世界にはステルス性能を持つギガヨットが存在するらしい。そんなもん何に使うんだ……所有者はロシア人？ ああ……（納得）

外伝人物ノート01

名前 不知火 白

レベル 1

年齢 ???

見た目 アルビノロリっ娘

服装 お嬢様スタイル

種族 ■■■■

特記技能 ■■■■の■■ ■■■の■■ ■■■ ■■■

解説

外伝時間軸のシロちゃん。どういう訳か様々な記憶を失い、ポケダ  
ン世界に迷い込んでいた。

失われた記憶には元野郎だった事や、ポケモンに関する狂愛等が含まれている様で、本編時間軸よりも女性的でマトモ。結果目のハイライトも普通になり、萌えレベルが上昇している。

目覚めた後は最初に会ったポチお姉さんに強い既視感と安心感を覚え、ホイホイ着いていつてドリリンクを奢られる始末。今後彼女はどうか……それは神ですら分からない。

外伝人物ノート02

名前 ポチ

レベル 60

年齢 人間換算で二十代前半

見た目 萌え擬人化したグラエナ

種族 グラエナ

職業 賞金稼ぎ 探検家

特記技能 6V個体 ■■■■ウイルス感染個体

解説

外伝時間軸のポチネキ。腕利きの賞金稼ぎ兼探検家として日々を過ごしていたが、何気なく海を見に行ったらやたらなつくのが早いアルビノロリっ娘を拾う。仕方なしにドリンクを奢り、落ち着いた状況で話を聞いていく事にした。面倒見が良いお姉さん。

萌え擬人化しているのは遺跡のトラップに引っ掛かったからだそう。



## 第二章 決戦！ カントー！

### 第21話 動き出すモノ

——政府公式会見より、一ヶ月。

——九州本土より北へ約130キロ。

——北緯34度25分。東経129度20分。

——対馬。

——内陸部、洞窟内。

この日、普段人が寄り付かないとある洞窟内には多くの人間が居た。懐中電灯で暗闇を照らしながら二、三人で一塊となつて注意深く足を進める者達……背丈も服装もバラバラな彼らだが、その動きは悪くない。むしろ良く訓練されているといえるだろう。

それもそのはず。一人を除けば彼らは警察官であり、あるいは普段SPの真似事をしている警備員や傭兵なのだ。そして除いた一人もただ者ではない。

「……間違いない。つい先程までここには複数人の人間が居た」

「サイコメトリー能力つて奴ですか。確かなので？」

「さあ、な。俺自身能力には半信半疑だ。……が、少なくとも能力はそう言つてる」

「それは、なんとも……」

現在確認されている唯一の超能力者にして、サイコメトリー能力の使い手。通称、筆頭犬兵。

シロちゃんガチ勢でありながら、彼女にいつさい絡むことの無かつた彼がなぜ対馬の洞窟に多数の人と共に居るのかといえば……この洞窟が元シロ民を含むテロリストの拠点だと推測されたからだ。そして、その推測は彼の超能力によつて——それを信じるならだが——裏が取れた。凡そ間違いないと。

「まあ、何にせよ、調べてないのは後少しです。居るとしたらそこでしよう」

「ああ、充分に注意して……ん？」

筆頭犬兵を含む一団が先へ進もうとしたところ、背後から足音が響く。すわテロリストの奇襲かと身構えて振り返り、各々が懐中電灯を向けて見れば……そこに居たのは自分達と同じ、しかし別の道を調べていた一団だった。どうやら別の道を調べ終わり、こちらへと合流したらしい。

「その様子だと、そちらは外れか？」

「ああ、こっちはちよつとした居住区で、人は居なかった」

「となると……」

「この先だろうか」

一団が合流し、各々が領いて先へと足を進める。慎重に、しかし確実に。その中で筆頭犬兵は妙な違和感を覚えていた。

——おかしい。静か過ぎる。

恐らくそれは他の者も思っているだろう。だからこそ警戒して進んでいるのだ。しかし……筆頭犬兵のそれは彼らより一步前に進んでいた。

——何だ？ この徒労感は……？

それは今まで無数に引いてきたハズレと同じ感覚。バカな、そんなはずはない。この洞窟の出入り口は少数とはいえ武装した警官隊が塞いでいるし、内部に先程まで居たのは能力で確認済みだ。それこそテロリストのリーダー格であろう元シロ民と、そのスポンサーや協力者達が居たのも確認している。ハズレなはずがない。

筆頭犬兵はそう思ってはみるが、それでも徒労感は無くならない。まるでここもハズレだといわんばかりに……

「これは、扉か？」

「重厚だな……鉄なのか？」

「各員、装備の点検。居るとしたらここだぞ」

そうこうしているうちに一団はそれらしい扉の前にたどり着く。重厚な、しかし最近になって後付けされたと見える鉄の扉だ。他の場所に居なかった以上、居るとしたらここに立て籠もって居るのだろうか……そう全員が確信し、各々装備を点検していく。

それが終われば隊列の変更。バリステイクシールドを持った者

が前に、拳銃を持った者がその後ろに続き、徒労感に悩まされる筆頭犬兵は最後尾だ。

そして、遂に準備が終わり、突入の瞬間が訪れる。

「よし。各員突入用意。分かっていると思うが我々の装備ではポケモンに勝てない。万が一テロリストがポケモンを出してきた、あるいはいた場合は直ちに後退。催涙弾と麻酔銃、及びスタングレネードによる無力化を試みる。……良いか？　良いな？　よし。先頭、扉を開けるか確認してくれ」

不幸にも彼らの中にポケモンを持つ者は一人も居ない。しかし居ないなら居ないなりにと効果的と推測される作戦を練っており、突入の準備は万端だった。

そうして先頭が扉に手を掛ける。大方鍵が掛かっているだろうと思いつつ先頭が扉に手を掛ける。大方鍵が掛かっているだろうと思いつつ先頭が扉に手を掛ける。大方鍵が掛かっているだろうと思いつつ先頭が扉に手を掛ける。

「これは、開く……？？」

「何？」

ギツ、と。微妙だが扉が動く。まさかテロリストども、鍵を掛け忘れたのか？　そう各々が隣の者と目を合わせる中、筆頭犬兵は酷い徒労感に襲われていた。間違いなく、ハズレだと。

「隊長、突入を」

「そうだな、各員——突入！」

これ以上嫌な感覚に襲われたくない筆頭犬兵は一団の隊長の背中を押して、結果として一団は一斉に前進を開始する。

先頭が鉄の扉に盾をぶつけて押し開きつつ突っ込み、後に続く者がその先を照らせば——誰も居ない。見えるのは洞窟の岩肌、そして幾つかのコンテナだ。

——どこかに隠れて居るのか？

そう各々が目を凝らし、懐中電灯を動かすが……人が居る様には見えない。かといって他の道がある訳でもなく、完全な行き止まりだ。

おかしい、ここに居るはずだ——そう一団が警戒する中、筆頭犬兵がスルリと盾持ちの横を通り抜けて先へと進む。

「あ、おい！」

「大丈夫だ。ここもハズレだからな」

うんざりだ。そう言わんばかりにスタスタと歩き、部屋の中央まで歩いていく筆頭犬兵。そうして進んだ彼を襲う者もおらず、一団も各々警戒しつつも先へと進んで筆頭犬兵と合流する。

そうして全員がハズレを確信し……興味が移るのはコンテナだ。

「居ない様ですな」

「ハズレ……いや、こんなものがあるのだから逃げられたか。抜け道でもあったか？」

「洞窟ですからね。なんとも。しかし、こんな大きなコンテナをどこから……」

部屋に幾つか置かれたコンテナは、貨物船やトラックで運ぶタイプなのだろう。かなり大きい。少なくとも彼らが通つて来た場所から運べるとはとも思えない大きさのものばかりだ。

そうして一団が頭にクエスチョンマークを浮かべつつ、何気なくコンテナの扉に手を掛けてみれば……開いた。やはり鍵は掛けてないらしい。そう呆れつつ中身を見てみれば、呆れは吹っ飛んだ。

「バカな、何だこれは!？」

「銃が、こんなに沢山……!」

「AK47にM16、トカレフに……お、M700もか」

そこにあるのは乱雑に、しかし無数に置かれた銃器の数々だ。どうにも銃に詳しいらしい警察官の一人言を信じるなら、種類も様々に用意されているのだろう。

「凄まじい物だな」

「ええ、全く。西側東側問わず揃えられています。とはいえ、全て中華製コピー品の様ですが……ん？」

銃に詳しい警察官はこれらの銃をコピー品だと断じた後、何かに気づいたのか手に取っていたライフル銃をおろして別の物を取る。それは鉄の筒。そのままでは役に立ちそうにもないが、少しでも知っている者にはそれが何なのかはおよそ想像がついた。つまり。

「バズーカか？」

「いえ、RPG7。ロケットランチャーですね。その発射機の部分で

す」

「……要するに、物騒な物って訳だろ？」

「まあ、そうですね」

確かに物騒には変わりないと銃に詳しい警察官が苦笑しつつRP G7を床に下ろしていると、別の警察官が慌てた様子で走り寄ってくる。どうやらロクでもない物を見つけたらしい。

「隊長！　こちらに来て下さい」

「どうした？　何か見つかったか」

「はい。その、自分では判断しかねる物が……こちらです」

いったい何を見つけたというのか？　そう疑問を持ちつつ移動してみれば……なるほど、確かに判断しかねる物が別のコンテナ内に転がっていた。

「これは……砲弾か？」

「ふむ………戦車砲弾ですね。以前ロシアの博物館でみたのとそっくりです。これは、T-34の砲弾か？」

「T-34？」

「戦車ですよ。ソ連が生み出した傑作戦車にして、現役の骨董品です」  
現役の骨董品というのはある意味矛盾した言葉だが、事実だから手に負えない。

そう苦笑する警察官の横を筆頭犬兵はスルリと通り過ぎ、コンテナ群の奥へと進んでいく。面倒な事になったと思いつつ。

——戦車とはな。何をやる気か知らないが……やり過ぎだろう。

いくら何でもこれはない。奴らめ、目的と手段が入れ替わって暴走してるんじゃないのか？　そう内心で吐きつつ他のコンテナを覗いてみれば、そこにも銃や砲弾、あるいは砲そのものが放置されている。恐らく運び込んだまでは良かったが、他に良い隠し場所も無く、そのまま今日を迎えて放棄せざるを得なくなったのだろう。その点でいえば今回はアタリだった。

もつとも、大元を絶たなければまた同じ事が繰り返されるだけだが。

——まあ、どんな手段で手に入れ、どうやってここに運んだかはだ

いたい想像がつくけどな。

そう鼻で笑って先へと進む筆頭犬兵だが、やがて完全な行き止まりにぶち当たる。抜け道も見られないし、やはりテロリスト自体は逃がしたか……そう思ったとき、脳ミソがふと何かを感じ取った。

その感覚に導かれてみれば――

「なんだ、この紙切れ……？」

そこにあつたのは落としてから間もないのだろう、まだ真新しい紙切れだった。何気なく拾って見れば……どうやらメモ用紙の切れ端らしく、幾つかの震えの酷い走り書きが書いてあつた。

「壁画、神、ポケモン。存在しない。過去……人類史の否定。不知火白、特異点。インベーター？ 消えた存在、概念。取り戻せない。そして、全ては侵食され消え失せる――何だ、これは？」

意味不明。そう言つて間違いない文字の羅列を一通り読んだ筆頭犬兵は、そのあまりのデータラメ具合に紙を捨てようとする……が、ふと自分の能力を思い出して改めて意識を集中する。

サイコメトリー能力。いつの間にか覚醒していたこの能力を使えば、コレが書かれた当時の事を見れるのではと期待したのだ。

――さて、上手くいくか……？

サイコメトリー能力は固体に対しては効きづらく、また思念が残らないゴミに対しても効果を発揮しない。しかしこのメモの切れ端が所謂『たいせつなもの』ならそれなりの情報を見れるはず……そう意識を集中していけば――

『洞窟』『奥へと続く通路』『先にある壁画』

『荒れ狂う大地』『荒れ狂う海』

『メモに書き殴る推測』『焦燥』『勘違い』『改変』『自我が崩れ――』

ブツリ。

そこで記憶の再生は止まる。ニガテな固体、それも紙切れ相手である事を考えればかなり健闘したが……何がなんだかさツパリ分らない。

強いていえば変態テロリストが――今までもそうだったが、これからはそれ以上に――発狂し、その原因がこの洞窟の奥にある壁画だと

いう事だろう。

しかし……

「どこにもそんな道は……いや、崩れたのか」

記憶で見た壁画の間へと続く通路はどこにも無く、あるのは岩肌ばかり。しかしよくよく懐中電灯で照らして見てみれば、どうにも崩れたらしい場所を見つける事が出来た。恐らくこのメモが書かれた後に崩れたのだろう。道は完全に塞がっており、幸か不幸か、壁画を見る事は出来なさそうだ。

「お前は、いったい……何を見たんだ？」

今は討つべき敵となつたかつての同胞が見たナニカ。それに激しく嫌な予感を感じつつ……しかし、何も出来ずに筆頭犬兵は警官隊と合流する。ここで得るべき情報は他にないと判断して。

ポケモンが世間に広まって一ヶ月。事態は大きく動き始めていた

## 第22話 不可視の思惑

日本政府がポケモンを認めてくれて……一ヶ月と少し。私は相変わらず伊藤家別荘に用意された自室でのんびりと過ごしていた。

いや、何せポケモンが順調に出現している以外には特に変わった事もないので、自然と私も暇になるのだ。まあ、ここ数日は女の子特有の理由で体調が悪かったけど……それも治ったし、本格的に暇だ。

——思えば、アレにも慣れちゃったなあ……

最初こそ突然の出血と体調不良に酷く困惑し、ダルい身体でネットを駆け回る事になったが……今となっては冷静に対応出来る。強くなったと誇るべきか、男の心が消し飛んだと嘆くべきかは分からないが。

「んー……何しよっかなあ」

終わった事はさておき、この状況での暇というのは良くない。何せ周りがいそいそと働いているのに自分だけのんびりしているのだから、罪悪感が凄まじいのだ。コラツタニキの話なんかを聞くと特に。

なので私も何かしたいところだが……手に職は無く、まさか毎時間配信する訳にもいかない。どうしたものか。

——んー？ ……リモコン、どこに置いたっけ？

特に何も思い付かないし、差し当たり暇潰しにテレビでも見よう。そう思い至った私は部屋からリモコンを探し出して、何となくテレビの電源を付ける。

普段見ないからこの時間に何があるのかサッパリなのだが……ふむ、どうやらどこかのライブ映像の様だ。演者は……おお、あの二人か。

『バタフリーー！ ぎんいろのかぜ』！』

『ピカチュウ、 十万ボルト』

バタフリーーが広く散らした銀のリンパンに、ピカチュウの十万ボルトが次々と突き刺さって激しく稲妻を散らす。出来上がるのは雷の神殿、幻想的にしてエレクトリックなステージの出来上がりだ。流石



に何日も練習しただけはある……生で見ている人達は圧倒された事だろう。何せ未完成のソレですら凄まじい迫力だったのだから。

『さあ！ 早速一曲目に行きましょう！ 最初は——』

そして雷の神殿が消え去り、元のステージに戻った舞台上二人は歌を歌い始める。歌の良し悪しは分からないけど……たぶん上手いのだろう。少なくとも聞いていて嫌になったりはしないし、むしろ楽しくなってくる。流星はアイドル。

「こうして歌ってるの見るの、始めてだけど」

彼女達との出会いはバラバラだ。バタフリーのポケモントレーナー……カオリとは悔いの残る最初のポケモンバトルの日で、ピカチュウのポケモントレーナー……サキとは私が雑誌のインタビューを受けた日。最初は仲がいいとはお世辞にもいえない仲だったけど、今ではよくポケモンの事——主に自分達の相棒の事——について話す仲だ。先日も先ほどのパフォーマンスの練習に付き合っていたし、むしろ仲が良いのではないだろうか……？

——その割には彼女達の仕事には一切興味を持たなかつたけど……

アイドルの仕事が何なのかはサツパリだが、少なくとも私から歌をねだった覚えは無く、せいぜい鼻歌を耳にしたくらい……いや、ポケモンの事を話せるからついついその辺りの気遣いがスツ飛んでいたのだ。彼女達のプライドを傷つけてなければ良いのだが……

『フリフリヤー』

『ピッ、ピカチュー！』

そうこうしてるうちに二人の歌はサビに入ったらしく、曲のテンポが上ががり、バタフリーとピカチュウによる演出もより一層強いものになっていった。

バタフリーが様々なリンプンを撒き、ピカチュウが電撃でそれを強調し、ときに利用する……息のあったコンビプレイだ。トレーナーが口頭で指示を出せず、身振り手振りで指示を出している事を加味すれば、この演目の技術評価点はストップ高間違いないだろう。少なくとも私なら10点満点中10点を付ける。

「……コンテスト、か」

そんな素晴らしい舞台を見て、私が思うのは『ポケモンコンテスト』の事。ユウカさんを通じて政府や財界の上層部にポケモンリーグ設立の必要性を訴えている私だが、ポケモンコンテスト開催には消極的だった。

やるのならハウエン……九州にポケモンが出てから。そんな思いが無かった訳ではないが、一番の理由は演者が居ないのではないかという不安からだ。そもそも私がコンテストに詳しくないし、フィージングでやろうにもポチの“わざ”はコンテスト向きとは言いがたい。少なくともあの二人の様な舞台を作り出すのは不可能だろう。

だが。

——あの二人を中心にすれば……？

出来なくはない、はすだ。あの二人は既にポケモンと協力してパフォーマンスを行っているし、観客の受けも良いように思える。テレビの向こう側の熱狂ぶりを見る限り、ポケモンとのパフォーマンスが一般化するのも時間の問題だと思える。

——そしてそうなれば、ポケモンコンテストの開催も自然に……

悪くない。そう内心で笑みを浮かべながら、私は脳内のメモにポケモンコンテスト開催についての草案を殴り書く。偉い人達を領けさせる利益や利権等はユウカさんに相談するとして、それがどういった物なのか？ その根本的な部分の説明は私の役目だろうから。

「……うん、二人にも手伝って貰おうかな」

友達、そう言えるかも知れない二人のパフォーマンスを見ながら、私はそう呟く。それなら説明の時間が大きく省けるし、ポケモンの魅力をより一層知って貰える。二人だって悪い顔はするまい。そう思っただけでテレビをボンヤリと眺めていると、突然画面が切り替わった。

ハツとして見れば、どうやらCMの時間らしい。なんと幸先の悪い

……

「むー」

興味も無いCMを見る気は無い私は、何気なくリモコンを操作して他のチャンネルを回して見る。

バラエティー、教育番組、CM、バラエティー、CM、スポーツ中継……どれもこれも興味が湧かない内容ばかり。やがてはこれらの番組もポケモンを扱うのだろうか？ そんな事を思いながらチャンネルを二人のライブ中継に戻そうとして——別のポケモンを扱う番組を見つけた。これは、バラエティー番組か？ どうやらトークショーの形を取ってポケモンの事を語っているようだが……おや？

『——以上の様な事実が既に立証され、臨床試験も完了。後は細かい法整備を待っただけという状況です。〴〵の〴〵 由来の薬効が不治の病を治す。そんな日も近い事でしょう』

テレビに映っているのは〴〵のみ〴〵を語る若い男性の姿。テロップを読めばきのみ学の権威だと書いてある。直接会った事は一度もないが、恐らく彼が噂の植物学者だろう。そんな気がする。

『なるほど、ファンタジーだな。それに副作用もあるとある。実際に導入するのは危険じゃないかね？』

『懸念は〴〵もつともです。しかし今回発生した副作用はいずれも同じ物……体内の栄養が急速に消費されるという物で、これらは事前に栄養を取っておくか、〴〵のみ〴〵の接触と並行して栄養剤を投与する事で充分解決出来ると考えています』

『遅効性の毒物が含まれている可能性は？』

『ありません』

『未知の成分があると聞いたが？ よくそれで断言できるな』

『確かに未知の成分は存在します。しかし同時にそれが毒物でない事も判明しているのです。……これは公開した資料にも明記されています』

ふむ、どうやら賛成派と反対派に分かれて討論を行うタイプの番組らしい。見たところ植物学者さんは賛成派で、反対派は旗色が悪いといったところか。さもありません。

そう私がウンウン頷いている間にも植物学者のターンは暫く続き、やがてカメラが切り替わる。別の話題に移るらしい。

『——では、続きましてポケモンに関しての事柄に移りましょう。……誰か、ああどうぞ』

『私からはポケモンの危険性についてです』

むう、危険性か。テレビに映る……どこぞの大学教授らしいジジイの懸念は分からないでもない。ポケモンの力は強大で、普通の人間ではコイキングにすら負けかねないのだ。現に一ヶ月以上のテロリストの襲撃では、ポケモンの攻撃で危うく死人が出掛けた……

——けど、あれは人間が悪い。

銃だろうと包丁だろうと、なんなら言葉や素手で人は人を殺せる。しかしそれらが危険だからといって、自分の手足をもぐ様な奴は居ないし、銃だつて持つてる人は持つてるのだ。

ポケモンも同じ話。付き合い方や知識を考えればどうともなるし、それらを考えなければ酷い事も出来れば、痛い目にも合う。現にテロリストどもはポケモンで人を傷つけたが、シロ民は「きのみ」の知識で難を逃れたのだ。結局は人次第で、だからこそ拒絶せずに、一度じっくりと考えて——

『ハッキリ言つて、ポケモンは危険です。今すぐ隔離し、遠ざけるべきかと』

………は？

『よく考えてみて下さい。我々の身の丈を越える生き物が、炎を吹き、雷を落とし、光線を吐くのです。果たしてそれは安全でしょうか？

いいえ。安全ではありません。危険です。現に一ヶ月前には犯罪に用いられ、多数の人々が病院へ救急搬送される事になりました』

『その通り。政府は友好関係を強調していますが、それは全くの嘘デタラメです。実際には多くの人々が傷ついているのです。そして、それは皆さんも例外ではありません。筑波では道路が寸断され、土浦では幽霊騒ぎが起き、多くの海岸では毒性生物を危惧して海水浴を楽しむなくなっています。……これはホンの一部。政府は躍起になって隠蔽していますが、あの異常な生物達は多くの被害を我々に与えているのです。そして、彼らと関係が続ける限り、この被害は拡大する事でしょう』

………嘘は、言っていない。確かに一ヶ月前の騒ぎでは多くのシロ民が救急搬送されたし、ポケモンゲットまでにそれなりの被害が出

ているのも事実だ。その被害が拡大するだろう事も。

しかし、しかしだ！ ポケモンはそれだけじゃない！ 危険だけがポケモンではない！ ポケモンは、ポケモンは人と共に歩んでいけるパートナーだ！ だいたい奴らは被害被害危険危険というが、ポケモンはちゃんと被害以上の利益を出しているし、怪我人こそ出したが死人は出していない。充分、充分共存可能な範疇だろう！ 人間だ。人間次第なんだ――

『そして、こちらをご覧下さい。これはポケモン出現前後の為替レートを比較した物です。ポケモン出現前はこのように一般的にもよく見られる円高でしたが……ポケモン出現後は大幅な円安に陥っています。これは海外資産家が日本のポケモン出現に不安を感じ、資金を引き上げた為に起こったと考えられます』

『……それが、どうしたというのですか』  
『研究職の方には分かりにくい指標かも知れませんが……これは日本が外国から信用されてない、危険だと思われた証拠です。ポケモンは日本に取ってプラスにならない。経済的に、あるいは国家そのものに打撃を受ける……この下がり幅を見るに、日本の滅亡を感じた人も居るのでしよう』

『そうですね。実際の日本は以前に比べて非常に危険です。いつどこから危険なポケモンが現れるか分からず、子供を一人で出歩かせる事も出来ない。テロリストや危険思想を持った人間が辺りをうろつき……世紀末さながらの状況。彼らの不安はもつともでしょう。そして、彼らが資金を引き上げた事によって起きる混乱は酷いものになる恐れがある。大企業は勿論、中小企業も倒産の危険性があります』  
う、うう……？ よく分からない。私が詳しいのはポケモンであつて、経済や為替なんてサツパリだ。彼らの言ってる事は正しいのか？  
ポケモンは受け入れられてない……？

い、いや、でも、海外の資産家が乗ってるらしいリヴァイアサン号はまだ日本に居るし、やっぱり嘘？ 分からない。こういうのに詳しいのはユウカさんだが、彼女は最近忙しくしてるし……テレビの向この植物学者さんや、その同業者さんも難しそうな顔をしている。彼

らも、分からないのだろう……

『皆さん、流れに流されず、一度よく考えて下さい。本当にポケモンは危険ではないのか？ と。こういう状況だからこそ、一人一人がしっかりと考える事が大事なのです』

『そうですな。……まあ、少なくとも私は安全だとは言えませぬね。身の丈を越える生き物が炎や雷を出してくるですよ？ そういうのは生き物ではなく、怪物と呼ぶのですから。彼らの気次第で殺される……ゾツとしない話です』

『その通り。ポケモン、等と可愛らしく歌ってはいますが、その実情は怪物のそれで——』

ブツリ、と。私はテレビの電源を切る。

これ以上聞きたくなかった。ポケモンはポケモンだ。人と共に歩んでいけるパートナーで、私の友達。そんな子達を貶す言葉なんて、聞きたくない。

「うううう……」

けれど、奴らは嘘は言っていない。全て事実だ。ポケモンが強い力を持つのも、危険性があるのも事実。だが、それでも、私はポケモンが好きなのだ。

そして、出来れば他の人達にも分かって欲しい。触れて欲しい。危険だからと遠ざけず、分からないからと目を逸らさず、そしてあのアイドル二人の様に、素晴らしい関係を築いて欲しい。ワガママかも知れない。けれど……

「むう——」

私は再びテレビの電源を付け、直ぐ様アイドル二人が映っているチャンネルのボタンを連打。討論番組を欠片も見ず、アイドル二人の素晴らしいパフォーマンスを見ながら考えを深める。

ああいう反対意見が出るのは分かっていた事だし、それら全てを圧殺しようとは思わない。それは私が夢見た世界ではない。なら、やる事は決まっている。その為に手始めにやるべき事は……

『いよいよこのライブもクライマックス！ 最後はお二人の代表曲で締めて頂きましょう——』

見せつける事だ。

掲示板 シロ民は情報操作に気づいた様です

【テロリストの】 お絵描き配信者シロちゃんについて語るスレ  
r t 2 3 6 【見えざる手】 p a

3 9 : 名無しの犬

バンザアアアイ!

4 1 : 名無しの犬

バンザアアアイ!

4 2 : 名無しの犬

Y p a a a a a a a a !

4 3 : 名無しの犬

着剣せよ!

4 5 : 名無しの犬

着剣!

4 8 : 名無しの犬

突撃イイイ!

5 5 : 名無しの犬

今北産業。

5 8 : 名無しの犬

>>>5 5

東経一〇五

北緯二〇

地点口の二

6 0 : 名無しの犬

>>>5 5

米海軍よ

思い知るがいい

神仏照覧!

6 1 : 名無しの犬

>>>5 5

左舷に被弾!



火災発生！

駆逐艦大破ア！

64：名無しの犬

誰か説明……してるのかw

67：名無しの犬

なん……だと……!?

68：名無しの犬

まるで意味が分からんぞ!?

69：名無しの犬

意☆味☆不☆明

71：名無しの犬

あー、もう分かりやすく要約したのを誰か書いてやれよ。

74：名無しの犬

テロリストどもに攻撃されてる。

前スレでそれに気づいたシロ民が一同総発狂。

万歳エディションに突入。

76：名無しの犬

>>>74

なるほどな。

77：名無しの犬

>>>74

お前は間違ってる。

79：名無しの犬

>>>74

勲章ものだ！

82：名無しの犬

え、いや、は？ テロリストに攻撃されてるのか!? それなら一大事じゃないか！ いったいどこに攻撃されたんだ!? まさか、シロちゃんが狙われたんじゃないだろうな！

85：名無しの犬

あー……狙われたと言えば狙われたな。

まあ、狙われてないといえば狙われてないが。

86：名無しの犬

どういう事だっばよ？

88：名無しの犬

まあ、気づかんよなあ。これが奴らの一手だとか、普通は。

90：名無しの犬

実際俺らもシロ闇してなかったら気づかなかったし……奴らめ、思ったより策士だぞ。

91：名無しの犬

まさかの情報戦だもんなあ……

93：名無しの犬

情報戦？

98：名無しの犬

取り敢えず、この辺のを見てこいカルロ。

URL

URL

URL

99：名無しの犬

>>>98

りよ、逝ってくる。

100：名無しの犬

流れる様に死亡フラグ立てるなしw

102：名無しの犬

何かと思えばニュースのアーカイブか……まあ、まさかだったよなあ。

104：名無しの犬

マスゴミがいつものをしてるだけかと思えば、その裏で

思惑が動いてるんだもんなあ。そんな誰が気づけるよ？

105：名無しの犬

フリーメイソンとか陰謀論が好きな人ならワンチャン……

107：名無しの犬

>>>105

逆にいえばそのレベルの話だという事でもある。……厄介だぞ、これは。

109：名無しの犬

俺らシロ民がテロリストの攻撃だと騒いでも『陰謀論乙』で片付けられるし、テロリストの情報戦で俺らやシロちゃんの味方は減り続けるからな。

112：名無しの犬

ぶっちゃけシロちゃんを信じれない奴とか要らねーんだけど……

113：名無しの犬

>>>112

戦いは数だよ、狂信者！

115：名無しの犬

>>>113

それな。

歩の無い将棋は負け将棋。例えコウモリでも構わんから今は支持者を増やす事が先決ぞ。

116：名無しの犬

だからこそポケモン賛成派を増やすべく、日夜コラツタニキを筆頭にお偉いさんに利権をちらつかせて説得し、アイドルズが一般向けにパフォーマンスしてるんだが……こうも情報操作で対抗されるとなあ。

119：名無しの犬

おのれテロリスト。おのれマスゴミ。そんなに金が好きかあ！

122：名無しの犬

我が世の春が来たあああ！

124：名無しの犬

庶民は！ 騙されていればいいのだ！（b y マスゴミ&テロリスト）

125：名無しの犬

この情報操作凄いやお！ 流石アカのお兄さん！（の得意分野）

126：名無しの犬

シロ民になあ！ 情報操作の対策などお！ 出来るわきやねえだろおおお！（自虐）

127：名無しの犬

（マスゴミが）絶好調である！

128：名無しの犬

（ポケモン賛成派の）何が不調なのだ!?

131：名無しの犬

（マスゴミが）ポケモン賛成派を金縛りにする！

133：名無しの犬

ユニバアアス！

136：名無しの犬

オ・ノー・ー・レ！

145：名無しの犬

見てきた。いつも の マスゴミだったけど、あれらにテロリストが関わってるなら……察するにあの識者（笑）がテロリストの手先か？

148：名無しの犬

>>>145

イグザクトリー、その通りだ。

だからこそ奴らは多少無理筋でもポケモン反対の気運を作ろうとしてたんだ。どう考えても無理な排除論や、検討違いの為替レートとかいい例。

150：名無しの犬

まあ、あの識者（笑）も本気でポケモンをどうこう出来るとは思ってないやろ。金貰ったから頼まれた事をそれらしく喋るとるだけか、あるいは感情任せに口先だけの威勢を見せとるだけや。

……いや、本気で勝てると思ってるなら頭の病院に無理やり突っ込まんとアレやろ。

151：名無しの犬

ポケモンの隔離とかどう考えても無理ぞ。シロちゃん筆頭にシロ

民は反対に回るし、この時点でポケモントレーナーの過半数が不参加。となると自衛隊の出番なんやが……まあ、ムリダナ（・×・）

152：名無しの犬

基本的に人間へポケモンだからなあ。シロちゃんが事前知識をくれたから共存の道が残ってるけど、それがなけりや人類滅亡ルートオシリーぞ？

153：名無しの犬

シロちゃんを崇めよ。

155：名無しの犬

しかも奴らがいう為替レートに至っては具体的にいつのデータか言っていないしな。

あれ、ポケモンテロ直後のデータやぞ。今では投資する奴と逃げ出す奴でバランス取れて元に戻ってる。

156：名無しの犬

むしろ目敏い奴こそ大量の金を投資に突っ込んでるんだよなあ。国レベルでは地雷を危惧して様子見してるけど、個人レベルならこの動きに一枚噛もうしてる連中は多い。

158：名無しの犬

まあ、その間抜け識者も次は無いだろ。

中々尻尾を出さなかったが、公安が尻尾を掴んだという噂があるからな。少なくとも奴らの一人はテロリスト経由で国外から金を貰っていたとき。

159：名無しの犬

噂（真実）

164：名無しの犬

公安にポケモン指導しに行ったニキ生きてるかな……

166：名無しの犬

>>164

リヴァイアサン号研修組だからヨユーやろヨユー

170：名無しの犬

……なあ、これヤバくね？ 俺らとかマスゴミ信じてない連中は問

題無いけど、こうも煽られると支持者減らない？

173：名無しの犬

>>170

ヤバい。というか既に増減を繰り返してる。

しかもこつちにとつては死活問題だけど、あつちにとつてはただのジヤブだし。

175：名無しの犬

俺らはポケモンを広めて、その上で皆仲良く楽しもうぜ！ っつのが目標だけど、奴らは混乱さえ発生させればそれでいいからな。しかも国家の支援付き（それも複数）難易度の落差が酷い。

178：名無しの犬

おのれ猿どもめ……ポケモンを撫で撫でモフモフしたり、ポケモンバトルしたりする楽しみが分からんとは。

179：名無しの犬

>>178

猿に失礼定期。

180：名無しの犬

しかもこれに関しては俺らは何も出来ねえんだよなあ。頼りの政府は野党の妨害をはね除けて法案可決させるのに手一杯だし、警察や自衛隊なんかも体制変更で忙しいから……ぶっちゃけ手詰まり。

185：名無しの犬

いやー、久方ぶりに起きた大乱闘国会ブラザーズは胸熱でしたね……

188：名無しの犬

進退窮まっつてどうにもならず、ついに野党議員の一人がヤロウオブクラッシュャーしたと思つたらそのまま乱闘だもんな。いいぞもつとやれ。

190：名無しの犬

大乱闘国会ブラザーズは前に国防関連の法案で一回あつたきりだもんな。……いや、もうちよい時代を遡れば議員さんの乱闘騒ぎは結構あつたんだが。警官の出動要請とかもまあまああるし。

191：名無しの犬

>>190

戦前の世代が生きてた頃か。

流石、やる事が派手だねえ……こうなるのはもう伝統芸能だな。

193：名無しの犬

あの議員テロリストの手先だったんだろなあ。ガチか金の繋が  
りか……あるいは催眠術に掛けられてたのかまでは知らんが。

まあ、なんにせよ即行で場外行きだったけど。

196：名無しの犬

勿論俺らは反対するで？ 拳 で

197：名無しの犬

そういう事するから……

200：名無しの犬

国会議事堂が一瞬にして魔界の議事堂になった瞬間である。

203：名無しの犬

ファルコーンパンチ！

205：名無しの犬

シヨウタイムダ

209：名無しの犬

ハドウケン！

214：名無しの犬

俺、首相がファイアボール出すの期待してたのに……

218：名無しの犬

ヤヤヤヤヤヤヤツフー！

221：名無しの犬

ケツワープ止めろ。

228：名無しの犬

配管工（TAS）の力を手に入れた首相……最強では？

235：名無しの犬

なお法案は可決され、乱闘でも勝利した模様。

239：名無しの犬

多数決の原理（違う）

243：名無しの犬

まあ、怪我したから慰謝料寄越せとか辞職しろとか言われてるけどな。

247：名無しの犬

お前から仕掛けたクセに何を……

250：名無しの犬

それも含めて時間稼ぎやろ。民間をかき回し、政府の足を止めて、その間に何かをやってるんだらうよ。

いや、あるいは混乱させるだけで充分なのか……？

254：名無しの犬

国会にまでテロリストの手先がウジャウジャ居るのか……状況は最悪だ。

258：名無しの犬

善戦を続けて来たつもりでした。しかし、奴らにとってこれはジャブに過ぎないようです。テロリストのスポンサーは底知れない戦力を持っていきます。

259：名無しの犬

それでも戦い続ける。出来る事は、それだけだ。

262：名無しの犬

あちらさん、最悪催眠術でいくらでもどこにでも駒を作れるからな。いちいちごっこにすらならんよ……

265：名無しの犬

苦労して取っ捕まえた奴が催眠術に掛けられてただけで構成員ですらなく、当然何も知らない上に罪にも問えないとかザラだしな。

しかも国会議員とか、芸能界の大物とか、以外な人物が催眠術に掛けられてたりするからマジ厄介。

267：名無しの犬

かと思ったらガチな構成員が催眠術に掛けられてたふりで逃げようとしたり、この流れに便乗する詐欺やら犯罪やら愉快犯やら……警察の処理能力は既に飽和状態やぞ？ 今関東で何か起こっても即応



出来るかどうか……

268：名無しの犬

まあ、催眠術自体はグーで殴ればだいたい解けるからまだ何とかなってるんだけどな。

270：名無しの犬

一時期国会で挨拶にお互いクロスカウンター決め合う法案が検討されたという事実。

……後世では国会でUFOへの対応を考えた話とどっこいどっこいに語られるな。間違いなく。

272：名無しの犬

結局様子がおかしかったら周囲に了解を取り、相手の了承の上腹パンするという暗黙の了解が出来上がりましたとき。

こんなんだから国会で大乱闘がおきるんだよ……

273：名無しの犬

あちらも相当混乱してんなあ。

276：名無しの犬

今ではカゴの実が効くんじゃね？ という国会常駐シロ民の鶴の一声で議員全員がカゴの実（人によっては汎用性からラムの実）を持ち歩き、怪しい奴には無理やり食わせるというもの変わったけだな。

……何で常に食わないか？ 味がゲロマズだからだよ。シロ民でもキツイって、あれは。

285：名無しの犬

しっかしよお。実際常に後手後手なのはつらいぜ？ 早いところ何とかしたいが、無理か？

288：名無しの犬

>>>285

無理。ポケモンリーグの設立すらままならないのに、こんな複雑な案件を早々にどうにかするとか無理ゲーもいいところ。

警察のポケモン部隊も中々上手くいかんし。前例とか無いに決まってるじゃん。責任者？ 逃げるなよ……責任者の椅子から逃げ

るなあ！

289：名無しの犬

>>288

責任を取らなくても良いんならさつきと決まるんだけどな。

責任がクツソ重いと明言したら誰も近づかないのワロス。かといつてめぼしい人物は他の役職について活躍してるから、軽々に移動させられないからなあ。

290：名無しの犬

しかも大乱闘して通した法案もまだまだ手始め感のある奴で、肝心要なのはまだ審議中だからな。いったい法案が通るのはいつになるやら……

291：名無しの犬

先行きは暗い、か。

294：名無しの犬

状況は絶望的だぞ!?

295：名無しの犬

もう駄目だ、おしまいだ……!

296：名無しの犬

勝てる訳がないYO!

298：名無しの犬

皆死ぬぞ!?

300：名無しの犬

だが今日じゃない(諦め)

305：名無しの犬

取り敢えず、なんか明るい話するか。

307：名無しの犬

セヤナ。

間接的にテロリストとそのスポンサーをヨイシヨするのも飽きたし。

308：名無しの犬

つてもなー何かあったか？ 明るい話題。

310：名無しの犬

ないから万歳エディションで空元気出してたんだよなあ……

314：名無しの犬

あー、強いていえば関東のほぼ全域でポケモンが確認された事ぐらい？

317：名無しの犬

残るはハナダの洞窟とセキエイ高原ぐらいのものだったけ？ 行き着くとこまで行き着いたんだなあ。なんというか、なんというかだな。

319：名無しの犬

最初にシロちゃんと出会ってどれ程の月日が流れたか。まさかこんな事になろうとは微塵も思ってたが、それでもワクワクが止まらない……シロちゃんに感化されたかな？

322：名無しの犬

>>319

それはあるんでない？ 俺らは普段気配も抑揚も死んでる子が、ポケモンの事になるとワクワクキラキラしたのをずっと聞いて見えてきた訳だから……メディア露出してからは尚更な。

323：名無しの犬

シロちゃんの写真集でねえかなあ。健全なので良いから欲しいわ。

324：名無しの犬

そう思うとここまで来たのは感慨深いな。

最早味方はシロ民以外にもいて、政府も動いてる。それでも俺らに出来る事があるつてのは……もう、ホント。ホントなあ！ やるしかねえぜ！

326：名無しの犬

>>324

禿同。

ちな、シロ民だから感慨深いで済んでる定期。

327：名無しの犬

シロちゃんを崇めよ。

328：名無しの犬

まあ、俺らからすれば推しと一緒に騒いでた事が現実になってヒヤッハーだけど、知らない人からすれば下手なゾンビモノより怖いだろうしなあ。

330：名無しの犬

あるいはサメ。

331：名無しの犬

もしくは宇宙人。

333：名無しの犬

B級映画!? B級映画三銃士じゃないか！ 自力で脱出を？

334：名無しの犬

な阪神

335：名無しの犬

>>>333

(無言の腹パン) あれらはB級映画ではない。Z級映画だ。

337：名無しの犬

悪化してて草。

342：名無しの犬

そしてその恐怖を煽ってポケモンを排斥しようとしてるのがテロリストで、恐怖を和らげて友好の道を指し示すのが我らがシロちゃんな訳だ。

344：名無しの犬

ホント、アイツらあの手この手で恐怖を煽ってポケモンを排斥させようとするからなあ。集めた銃火器をパーにしたくないんだろうが、マジクズ。

350：名無しの犬

止め止め、テロリストの話は止めようぜ？

あー、そうだ。ユウカ嬢のポケモン何だったけ？

353：名無しの犬

>>>350

ミニリユウ、もといハクリューだな。イワーク以上の大捕物だった

からよく覚えてる。

355：名無しの犬

>>353

それマ？ 例の最強のミニリュウを？

357：名無しの犬

>>355

ご存知、無いのですか……!?

まあ、知らんわな。捕まえたのつい最近だし。

で、そのミニリュウで合つとるぞ。最初のミニリュウ、6Vミニリュウや。今の今まで誰にも捕まえられず、見つけられなかったのを投入可能な全戦力を投じて確保したんやで。戦いの中でハクリューになつたのをな！

359：名無しの犬

流石にシロちゃんやその護衛は動かさんかったけど、手透きのシロ民と連絡の取れるポケモントレーナーは強制参加。対ポケモン用にチューニングされた対人リーダーまで引っ張り出した戦いだつたらなあ。

360：名無しの犬

その激しきといたら、最初にコラツタニキが相棒もろとも即行吹っ飛ばされるレベルや。

362：名無しの犬

い つ も の

363：名無しの犬

あのニキ、最近その手のパターンが板についてきてる感あるんだよなあ。

364：名無しの犬

ある意味プロ。

365：名無しの犬

プロ（かませ）

366：名無しの犬

パワーインフレについて行けてないからね。仕方ないね。……ヤ

ムチャかな？

368：名無しの犬

ただし、原因はコラツタの運動不足と高級チーズの食いすぎだけだな！

370：名無しの犬

>>>368

胃痛に慣れだしたニキの横でな！

371：名無しの犬

H A H A H A

372：名無しの犬

H A H A H A

375：コラツタニキ

ははは……

377：名無しの犬

>>>375

コラツタニキ!? 最近胃薬CMのレギュラーになったコラツタニキじゃないか！ 調子はどうだ？

378：名無しの犬

>>>375

よう、コラツタニキ。高い飯は旨いか？

381：コラツタニキ

……シロちゃんの次のメディア露出の内容持ってきたけど、そうか。要らないか。

383：名無しの犬

え？

384：名無しの犬

え？

385：名無しの犬

(。D。(マ？

387：コラツタニキ

>>>385

マ。

390：名無しの犬

要ります！ 要りますコラツタニキ様ああ！

391：名無しの犬

何とぞ、何とぞお許しをオオオ！

392：名無しの犬

我らに恵みをおお！

395：名無しの犬

この手のひら返しである。

396：名無しの犬

クルックルツやな、お前らの手のひら。

398：名無しの犬

おう、手のひら燕返しやぞ。

399：名無しの犬

全く、胃痛に呻くだけだったコラツタニキが強したたかになりやがって

……

400：名無しの犬

基本的に飢えてるしなあ、シロ民。ここのところシロちゃんの新情報なかつたし、配信も状況が状況だからなあ。

401：名無しの犬

それにシロ民は手のひら返しには慣れてるしな。さっきまでの常識が崩れる事はよくある事や。

403：名無しの犬

>>>401

ポケモンとかまさにそれやな。あとシロ闇もだいたい同じか。

405：名無しの犬

どうせオツサンやろと思ったら ガチ美少女

406：名無しの犬

親とか普通に居るやろと思ったらまさかの捨て子

407：名無しの犬

当然愛された事なんてないので 愛など知らぬ

408：名無しの犬

ほんわかとした上手い絵を見て優しい子かなあとか思ってたらまさかの ナチュラル 闇

410：名無しの犬

可愛い感じやし学校では人気者かと思ったら イジメられてる

411：名無しの犬

俺らと一緒

413：名無しの犬

なお理由は話が合わないから。特に ポケモンの事

415：名無しの犬

ポケモンはシロちゃんの イマジナリーフレンド

416：名無しの犬

かと思つたらそれが 現実に出てくる

420：名無しの犬

何度シロちゃんの “つばめがえし” を受けた事か分からぬ。

422：名無しの犬

そうしてシロ民もまた “つばめがえし” を取得したのだ……見と  
り稽古かな？

423：名無しの犬

ひでえ稽古だ……

425：名無しの犬

ミンチよりひでえや。

427：名無しの犬

そういえばシロ闇も新しいの無いなあ。いや、あっても困るけど。

429：名無しの犬

>>427

まあ、これ以上増えようがないやろ。それに今のシロちゃんはメ  
ディア露出どころか引きこもりも同然だからな。警備の関係上仕方  
ないといえれば仕方ないんだが……



431：名無しの犬

けどそうやって引きこもってやってる事といえば……ポチネキを  
なでなでモフモフしたり、縁側でお茶飲みながら鹿威しがカポーシ  
てるのを眺めてるぐらいやぞ？

あれ田舎のお婆ちゃんとか何が違うんだ……

432：名無しの犬

>>431

育ての親が揃って田舎の爺さん婆さんだから、多少はね？

434：名無しの犬

にしても落ち着き過ぎだけだな。見た目年齢とやってる事の  
ギャップが酷い。

この間なんかポチネキと精神統一みたいな事やってたゾ。……あ  
れ、SATUMA人の教えだよなあ。絶対。

435：名無しの犬

良いなあ、親衛隊員ども。シロちゃんの様子見れて。

438：名無しの犬

ポケモンを持ち、理解し、仲良くなり、その上で身边調査され、リ  
ヴァイアサン号に放り込まれて研修受けさせられるけどな……クツ  
ソ長い契約書も書かされたし。結構キツイぞ？ ガチ勢の中のガチ  
勢じゃないと無理。

439：名無しの犬

でも給料は良いんでしょ？

440：名無しの犬

>>439

勿論さあ。

442：名無しの犬

まあ、シロちゃんの近くに居れる事も考えれば……ちよつとしたア  
メリカンドリームくらい？

443：名無しの犬

チクシヨウメエエ！ こんなブラック企業止めてやる！ 俺は  
関東でポケモントレーナーになるぞおお！ ジョジョオオオ！

446：名無しの犬

あー、今ならポケモントレーナーに補助金出るんだっけ？

448：名無しの犬

>>446

大会で結果出せれば死なない程度の生活費を申請、受給出来るはず。いや、賞金形式だったかな？ 忘れた。

まあ、その肝心の大会がまだ一度もないし、資金を管理運営するポケモンリーグが未設立なので貰ってる人間はゼロですがね。

449：名無しの犬

通すべき法案の順序間違えてね……？

450：名無しの犬

>>449

それだけ政府も混乱しとるんやろ。というか通すべき法案の数が多すぎるんだよ……もうあれ、通せるやつから通しちまえ！ みたいな雰囲気あるぞ。ヤケクソ感凄いわ。ホント。

453：名無しの犬

というか一番要のポケモン危険等級はまだ審議中か？ いい加減にしないと違法所持もクソもないぞ……？

456：名無しの犬

>>453

ヤバイポケモンの所持に制限をつけるあれか。確かに二匹目が出る範囲は急速に拡大しとるし、規制基準は早目にしたいよなあ。

459：名無しの犬

コイキング10匹はOKでも、ギャラドス10匹はアウトとかな。当たり前といえど当たり前だけど、色々難しいよなあ。

462：コラッタニキ

ちなみに、次のシロちゃんのメディア露出はそれ絡みぞ。

463：名無しの犬

な、なんだってー!?

464：名無しの犬

ハラショー。それは良いな。

465：名無しの犬  
こいつは力を感じる。

466：名無しの犬  
というかお前らコラツタニキに懇願したと思ったら別の話し出すなよ……ニキ絶対困つとつたぞ。

467：名無しの犬  
ネト民だからね。仕方ないね。

469：名無しの犬  
ボケ老人じみた諸行。しかし実際よくある事だ。

471：名無しの犬  
相手の事を気にして喋れるなんてチャメシンシデント。そう言えたらこんな場所にはいないのである。

472：名無しの犬  
ネタを投げる事ならベイビー・サブミッション。しかし聴き手に回るのは実際難しい。

475：名無しの犬  
そんなんだから他スレでシロ民は10年古いか時代遅れとか叩かれるんだぞ……？

477：名無しの犬  
俺らもロートルって事か……

479：名無しの犬  
ロートル（SATUMA人含む）

480：名無しの犬  
まあ、崇めてるシロちゃんがロリババアだから、多少はね？

482：名無しの犬  
年齢不詳のロリババア（20代前後と推測される）

483：名無しの犬  
推測されてなかったら、ロリババア説をガチで信じれるところがな  
んとも……（のんびりモードシロちゃん見つつ）

485：名無しの犬  
しかしそこがシロちゃんらしい！そこに痺れる！惹かれてい

くウウウ!

487：名無しの犬

>>485

はい、狂信者はシロ闇行きよー

488：名無しの犬

(・ω・) やったー

490：名無しの犬

染まってやがる。遅過ぎたんだ……

491：名無しの犬

ほらまた話が逸れる。

492：名無しの犬

はい、今はコラツタニキの報告を聞きましようねー

493：名無しの犬

w k t k

495：名無しの犬

全裸待機

496：名無しの犬

、(0w0)ノエンゲージ

498：名無しの犬

待てが出来るシロ民……

499：名無しの犬

閃かない。

500：コラツタニキ

といっても詳しくは知らないけどな。伊藤家の影響下にあるテレビ局(ココ大事)で、危険等級について説明と理解を求める感じにするらしい。あとついでにポケモンバトルもするってさ。

501：名無しの犬

ソースは？

502：コラツタニキ

ユウカ嬢。

506：名無しの犬

ほーん。真面目路線やけど、見応えはありそうやね。しかしその夕イミングでポケモンバトルって、危険等級の説明代わりか？ なんと  
いうか、乱暴じゃね？ シロちゃんのほんわかお友達路線とは反する  
気がするんやけど……

510：名無しの犬

いや、なるほど……そういう事か。

513：名無しの犬

>>510

どういう事だつてばよ？

516：名無しの犬

推測だが、全て踏み潰すつもりなんだろう。シロちゃんという専門  
家にして一人の少女に解説、懇願させて理性と情に訴えかけつつ、ふ  
るいにつけて、その上でポケモンバトルによる圧倒的戦力差も感じさせ  
る。

ポケモンと友好関係を結ばなければ滅ぶのみだと、ついて来ないの  
は見捨てて進むぞと、理解させる為に。

518：名無しの犬

ふむ、ある種の最終宣告をするつもりか。死ぬ気について来いと。  
ポケモンバトルで勝てないのを理解させて、その上でポケモンとの融  
和を頼むとか……ある種の脅迫だな。この条件を飲めなければ勝手に  
滅べと言ってる様なもんやぞ？

その上説明しとるのが少女やから、変にバツシングするとかえって  
ソイツが悪者に見える。悪辣な一手や。

519：名無しの犬

シロちゃんは普通にポケモンバトルエンジョイするだけやろうか  
ら、その辺りは演出次第でどうとでもするつもりかな？

521：名無しの犬

よく分からんが、いよいよクライマックスなのは察した。

522：名無しの犬

まあ、猶予期間というか、チュートリアルを終了するつもりなのは  
間違いない。

524 : 名無しの犬

にしても強引な一手だなあ。伊藤家らしくない手だ。あそこは混乱の隙について巨大化した分家らしいし……

526 : 名無しの犬

>>524

やっかみも凄いらしいな。……ああ、だからこそ一切合切踏み潰すつもりか？ 反対させる時間を与えずに？

だとしても随分大胆な手だが、ユウカ嬢主導かね？

529 : 名無しの犬

>>526

シロちゃんかもよ？ あの子今の状況に満足げではあるけど、この間のポケモン反対派のテレビ見たとき相当苛立ってたし。

531 : 名無しの犬

暫くしゅーんと体育座りしたと思ったら、突然の霸王の覇気。いやー、流石シロちゃんですわ。ギャップというか、二面性が凄い。

533 : 名無しの犬

>>531

なにそれ知らない。……写真とかとってない？ 特にしよげて体育座りしてる方。

534 : 名無しの犬

>>533

生憎そういうのは禁止されるのだ。

535 : 名無しの犬

安全の為だからね。仕方ないね。

536 : 名無しの犬

(. . . .) そっかー

537 : 名無しの犬

アキラメロン。

538 : 名無しの犬

、(0w0) ノイジエークト

543 : 名無しの犬

まあ、シロちゃんお願いしたらヌードも撮らせてくれるだろうけど。

545：名無しの犬

(；。ㄩ)！?

546：名無しの犬

(；。ㄩ)！?

547：名無しの犬

(；。ㄩ)！?

550：名無しの犬

ああ、シロちゃんポケモン以外割りとどうでもいいってスタンスだからなあ。ポケモンの為なら文字通り脱ぎかねん。

553：名無しの犬

(；。ㄩ)！?

554：名無しの犬

(；。ㄩ)！?

555：名無しの犬

(。ㄩ。)

557：名無しの犬

>>>555

コツチミンナ

558：名無しの犬

、(0w0)ノエンゲージ

561：名無しの犬

いやー、長く警備していると薄々分かるんだけどな？ シロちゃん基本的に自分に興味が無いんだわ。それは過去の経験のせいなんだろうけど……どうにも極端でねえ。

562：名無しの犬

それにポケモンへの愛が加わる事で、ポケモンの為なら本当に何でもしちゃう女の子が生まれる訳です。はい。

563：名無しの犬

シロちゃん、ポケモンを人質に取られたら迷いなく腹切るぞ？ た

ぶんだけど、そんなくらい自分を大切にしないし、ポケモンへの愛が凄  
い。

自分の身の安全や貞操（（越えられない壁）（（（（（ポケモン。だか  
らな……

564 : 名無しの犬

ポケモン愛が溢れ過ぎて描いた絵とかヤベーぞ？

配信してないだけで絵は描きまくってるから……あれ総額幾らよ。

566 : 名無しの犬

>>564

ユウカ嬢が買うなら軽く億いく。

568 : 名無しの犬

ホント、ポケモンの情報や絵に熱中してポチネキが促さないと風呂  
や飯を取らないなんてザラだし。

570 : 名無しの犬

部屋は相変わらず殺風景だし。

571 : 名無しの犬

ポケモンの事なら延々喋ってるし。

572 : 名無しの犬

というか基本ポケモン関連の事しか喋らないし。

573 : 名無しの犬

ポケモンバトルの練習をすれば巻き添えを食らいかねない位置で  
指揮するし。

575 : 名無しの犬

飛んできた破片とかで怪我しても言われるまで放置するし。

576 : 名無しの犬

オシヤレに興味が無いのか、いつの間にローテーション組んでア  
イドルズに矯正されたりするし。

577 : 名無しの犬

かと思えば女の子として自覚がないのか、ミニスカート履いた日は  
パンチラ連発だし。

578 : 名無しの犬



マジ無防備。お願いだから女の子の自覚持つてクレメンス……

580：名無しの犬

某大先生は幼女がパンチラ気にしたら云々とかかなり熱弁したという都市伝説があるらしいが……

582：名無しの犬

それにしても、なあ？

583：名無しの犬

うん。

584：名無しの犬

おい、おい待て。

見たのか？

585：名無しの犬

見た。

586：名無しの犬

見ました。

587：名無しの犬

あの日別荘にいた連中は殆んど見たんじゃないか……？

590：名無しの犬

些細な動作でもそうだったし、ポケモンバトルの練習が重なったから特にな。

取り敢えずミニスカートを進めて、バトルの練習相手になってたアイドルズにはグツジョブと言いたい（予想外&不名誉だろうけど）

593：名無しの犬

俺らから一言いえるとしたら、シロだったな。

595：名無しの犬

ああ、白だった。

598：名無しの犬

色気がないといえはそこまでだが、シロちゃんらしい選択でもある。

600：名無しの犬

くあwせdrftgyふじこーp!!!

601：名無しの犬

、(0W0)ノFOX4！ イジエークト

602：名無しの犬

ヤロオオオオブツクラツシャアアアア!!

603：名無しの犬

眉間なんて撃つてやるものかあ、へへっ。ボールを吹っ飛ばしてやる！

605：名無しの犬

パンパンパン

606：名無しの犬

キボウノハナー

608：名無しの犬

頼みがあるんだが、そのシロ民を起こさないでやってくれ。死ぬ程疲れてる。

609：名無しの犬

パンチラは日本で進化しました。アメリカの功績ではありません。我が国の功績です。暫し遅れを取りましたが、今や、巻き返し的时候了です。

610：名無しの犬

面白い奴だな、気に入った。殺すのは最後にしてやる。

611：名無しの犬

怖いか？ 当然だぜ。シロちゃん親衛隊の俺に勝てるもんか。

613：名無しの犬

試してみるか？ 俺だってエリートシロ民だ。

614：名無しの犬

お前を殺すのは最後にすると言ったな。あれは嘘だ。

616：名無しの犬

うわあああああ——

620：名無しの犬

あなたを名誉毀損罪と迷惑防止条例違反罪で訴えます！ 理由はもちろんお分かりですね？ あなたがシロちゃんのパンツを拝み、シ

口民の心を破壊したからです！ 覚悟の準備をしておいて下さい。  
近いうちに訴えます。裁判も起こします。裁判所にも問答無用で  
てもらいます。慰謝料の準備もしておいて下さい！ 貴方は犯罪者  
です！ 刑務所にぶち込まれる楽しみにしておいて下さい！ いい  
ですね！

623：名無しの犬

>>620

アッハイ。

625：名無しの犬

>>620

アッハイ。

626：名無しの犬

アッガイ。

627：名無しの犬

ちくわ大明神。

628：名無しの犬

おい今水泳部居たぞ。

629：名無しの犬

誰だ今の。

645：名無しの犬

うーん、ユウカお嬢様に土下座でシロちゃん写真集を頼み込もうか

なあ……

648：名無しの犬

>>645

これだけメディア露出すればワンチャンあるやろ。なければ切り  
貼りMAD作れば良いし。

655：名無しの犬

何にせよ、これから忙しくなりそうだ。

660：名無しの犬

色んな意味でな。

……………



## 第23話 ポケモンリーグ設立に向けて

ポケモン賛成派と反対派が激しい情報戦を繰り広げる中、夜のとばりが降りた街の一角にある料亭の一室で、数人の人間が顔をつき合わせていた。

その内訳は殆んどがそれなりに年を食った男達であり、中には老人と云っていい者もいる。そして、少しでも世間の事を知っている者なら、彼らが皆大きな影響力を持つ権力者である事に気づくだろう。元総理大臣や各担当大臣、大企業の代表取締役、研究所の所長等……そうそうたる面子。そんな彼らが電話で終わらせず、わざわざ集まって話し合う事など今の状況では一つしかない。

「やはり、ポケモンの出現は止まりませんか」  
そう、ポケモンの事だ。

一部の者に取っては既知の、しかしそれ以外の大多数にとっては全く未知の異常存在の出現。最初の一匹が確認されてそれなりの時間が経ち、一般市民への理解も進んではいるが……それでも思わずにはいられないのだろう。その一言を皮切りにチラホラの愚痴の聲が上がる。

仕事、予算、支持率、出世、利権が。

そうやっていよいよ薄汚い愚痴大会となるか。そう思われたとき、一人の人物が「失礼だが」と前置きして流れを叩き切った。

「逆に聞かせて貰うが、止まると思っているのか？」

「いえ。しかし……」

「そうですね。正直、期待はしていません。どこかで収まると」

「ならその下らない期待は捨てておけ。世界は崩壊した」

ピシヤリ、と。チョビヒゲの研究所所長が不満タラタラな議員達の言葉を切り捨て、手元の資料を軽く叩いて改めて注目を集める。

「資料を見れば分かると思うが、ポケモン関連の基礎研究は概ね終了した。きのみは医療現場での臨床試験を終了し、生の状態での医療活用を開始。成分抽出の実験も始まっている。モンスターボールの試作品は数量限定とはいえ販売に成功し、量産型も間もなく生産が開

始。また自衛隊と警察から依頼のあった対ポケモン用特殊弾頭弾の研究も一段落がついた……これ以上のおさらいは省くが、その他の研究も一段落がついた状況だ。勿論、この崩壊の原因についての研究も」

ザワリと大の大人達が色めきだつ。ポケモン出現の原因。それは誰もが知りたいと思ひ、しかし同時に関わりたくないと思つていた案外だ。

科学的な根拠があるのか、それともポケモン同様ファンタジーな理由なのか、まさか関わつたら死ぬ様な案件か……そんな不安と期待を一身に受け、しかしチョビヒゲは平然と言葉を続ける。

「これに関してハッキリと分かる事は少ない。なにせデータがないからな。研究しようがない。……が、それでも分かる事が一つ」

「一つ。……それは？」

「シロちゃん……不知火白はポケモン出現の直接的原因ではないという事だ」

「は？ いえ、しかし、今まではあの少女がこの事態の原因だと思われていたのでは？」

「そうです。というか、彼女が元凶でなければいったいなにが原因だと？」

不知火白はポケモン出現の原因ではない。ハッキリと言葉にされた考えに方々から批判と質問が相次ぐ。

ポケモンを知っていたのは彼女だけ、広め始めたのも彼女、最初のポケモンは彼女の飼い犬だった、ポケモンの出現は彼女の言う通りに行われている、今まで彼女の予言から外れているのは何一つとしてない、この事態で最も得をしたのは彼女とその協力者だ――

暫くそういつた声を黙つて聞いていたチョビヒゲだが、やがて反対の声が一通り出終わった頃、唐突に軽く片手を上げて相手側の言葉を制す。そうして生まれた静寂をサツと眺め、彼は説明を始めた。

「不知火白はポケモン出現の直接的原因ではない。これはここ暫くの間不知火白を調査、観察した結果だ。全ての過去を洗い、ありとあらゆる手段で彼女を観察したが……彼女が何かをした、あるいは何かを

している様子は皆無。むしろ彼女は見た目相応に純粹で……あー、それなりに可哀想な子供だという事が改めて強調されただけに終わった」

「では、彼女は何の関係もないと？」

「……いや、それはない。不知火白は直接的に何かをして、ポケモンを呼び出している訳ではないが、しかし同時に無関係でもないのだ。恐らく間接的に影響を与えていると推測され……ああ、資料の23ページ目を見てくれ」

上げた片手をクルクルと動かして感情を表現しつつ、チョビヒゲはハキハキと言葉を紡いで他の大人達の目を資料に落とさせる。そこに書かれているのは複雑で、様々なデータだ。不知火白がまとめたポケモンの資料から、空間放射線量のデータまであり……その最後には一つの結論が書かれていた。

「不知火白は方向性を示す案内人である……？」

「あー、これはどういう事でしょうか？」

「簡単な事だ。彼女は何もしていない。だが彼女が居るからこそ事態は暴走せずにすんでいる……ふむ、あるいは巫女のような存在なのかも知れんな」

「巫女……荒ぶる神を宥める、ですか？」

「そうだ。ポケモンという荒ぶる神を宥め、共存の道を示す巫女にして案内人。それがシロちゃ……不知火白だと、我々ポケモン研究所はそう結論を出した」

静かに、しかし自信満々にそう言い放ったチョビヒゲの言葉に、思わず大人達は配られた資料に目を落とす。意味不明に過ぎる。自分達は何か重要な説明を見逃したのではないかと。と。

しかし資料に書かれているのは複雑なデータだけだ。ポケモンの出現状況、それぞれの推定される平均レベル、不知火白のデータとの兼ね合い、任意の地点の電波状況、発生した電波障害の数と場所、任意の地点の距離の変動、局地的地震のデータ、空間放射線量の微量な増減等々……しかもそれらに説明は殆んどなく、ただデータだけが連ねられている。知りたければ質問する他ない程に。だが……

「ハッキリ言おう。彼女を排除すれば口くいな事にならない。もし彼女が排除されれば、今は関東だけでゆつくりと発生しているポケモン出現が、一気に日本中に……あるいは世界中に広まる事になりかねない。順番を踏まずに、一気に、無秩序にな。そうなればどうなるか、分からないボンクラはここには居まい？」

「チョビヒゲは質問する暇を与えず畳み掛けてくる。まるで考えずに、受け入れろといわんばかりに。」

過半数の人間がそれに流されそうになったが……しかしこの場に居るのはただ者ではなく、ましてや無能ではない。そんな奴は一連の事態中で失態を演じて消えていった。故に、当然質問が飛んで来る。

「その根拠が、このデータだと？ 随分と散らかった考えに思えるが？」

「いや、そのデータはあくまでも一部でしかないし、不完全だ。しかし電波障害のデータや、今後取られる重力場の変動データがあれば完璧に証明出来るだろう。彼女は直接的原因ではなく——故に、彼女を殺してもこの異常事態は止まらないとな」

配られた資料のとある1ページ——不知火白を排除する事で事態の沈静化を図る提案が書かれたページ——を強く叩きながら、チョビヒゲは責める様に視線を走らせる。

自分に積極的、あるいは消極的に同意する者、興味なさげな者、目を逸らす者、一瞬だが反抗的な態度を取った者……そこまで見てチョビヒゲは目を閉じて腕組みをし、拒絶を示す。後は好きにしろといわんばかりに。

——次の会合ではまた顔ぶれが変わりそうだ。

他の者達がお互い目配せし合うのを薄目で確認しつつ、チョビヒゲは内心そんな事を考えていた。

彼らがこの場に居るのは影響力を持った権力者だからであり、それを失えばこの場には来られないのだ。ポケモン利権を得ようとする者、得ようとする者がトップや専門家のご機嫌伺いもしない者ども……それらに明るい未来が来るとはとも思えないのがチョビヒゲの正直な思いだった。少なくとも彼らの誰かが不幸な事故に合った



り、隠蔽したはずの不正が発覚するのが予定されたとしても、助ける気にはなれない。絶対に。

「まあ、彼女を本気でどうしようという者はこの場には居まい。そんな下らない妄言より重要な事がある……ポケモンリーグの設立だ」

元総理大臣である伊藤元総理の一声により、場の流れが変わりかける。話題転換だ。

この流れに乗るべくチョビヒゲも組んでいた腕を解き、行うべき報告を淡々と始める。まずは私から発表させて頂く、と。

「ポケモンリーグ設立にあたって、我が研究所は最大限の支援を行う準備がある。つい先日とある病院の倉庫から発見されたメデイカルマシンの解析、運用、量産の検討は勿論。モンスタールボールの性能向上や、より高い量産性の検討。ポケモンの生態や、トレーナーに要求される技能の数値化、項目化も行っている最中だ。そして……抑止力としての対ポケモン用特殊弾頭弾の研究開発もな」

「対ポケモン兵器は聞いているが……メデイカルマシン？」

「シロちゃ……不知火白曰く、ポケモンの『回復』が出来る便利な機械らしい。詳しくは研究中だが、恐らく使うだけなら何とでもなるだろう。これでポケモンバトルはより気軽な物になる」

「……初耳だ」

「今日初めて外部に出した情報だからな。当たり前だ。総理とて今頃アメリカで報告を受けている話だぞ」

メデイカルマシン。ポケモンを知っている者からすれば待ち望んだ物であり、知らない者からすれば意味不明の塊だ。少なくとも科学者の三桁は卒倒するだろう代物であり、ポケモンバトルを広めるにあたって必要不可欠な機械で……現にポケモンリーグ設立の条件の一つが、このメデイカルマシンの一定数の確保だった。

そして、それは間もなく成し遂げられようとしている。最初の一つがとある病院の倉庫から見つかって以来、あちこちの大型病院の倉庫から次々と見つかって回収されているのだから。勿論動かせるかは別の話だが、チョビヒゲを信じるなら動かす事は問題ないのだろう。

「あー……ところで、対ポケモン用特殊弾頭弾はどの程度完成しているんだ？」

各々がメデイカルマシンについて書かれたページを探して読む中、体格の良い一人の男が急かす様にそう問い掛けてくる。

対ポケモン用特殊弾頭弾。それはポケモンに対して全くの無力だった人間が作り出した剣……その存在すら極秘とされている代物だが、事この場においては秘密もクソもなかった。全員が知っていても問題無い人物であるが故に。

「開発可能な物について初期研究は終了し、幾つかは試作品が完成している。書類と部隊を寄越してくれば受け渡しを行おう」

「了解した。明日にでも輸送部隊を派遣する」

「こちらも人をやろう。……で、完成した弾頭はどういう物になったのだ？」

「最初に言っておくが、ポケモンを直接殺傷する弾頭の開発は不可能だ。ポケモンが常時発生させている……そう、生体バリアとでも言うべき防御膜を突破出来ん。そして国際条約の事もある。故に新規開発出来たのは条約で規制されているBC兵器すれの麻痺弾と催眠弾だけ。毒弾に関しては条約違反に相当する為、開発を凍結している」

資料の一部を指し示し、チョビヒゲは渋々といった様子で自衛隊と警察の担当に説明を始める。それを聞く彼らは真剣その物……何せポケモンが出てからというもの彼らは抑止力を失い、無駄飯食らいと馬鹿にされてきたのだ。さもありません。

「知つての通りポケモンは異常なまでの防御力を有する。我が研究所はこれを彼らが持つ特殊な生体エネルギーを利用した生体バリアが理由だと考えた。故に彼らはビルを粉碎する様な攻撃を受けても無傷で居られるし、ダメージが蓄積されたときに気絶するのだとな」

「……そして、その生体バリアは銃弾を弾く程の強度があり、個体によつては戦車砲にすら耐える、と」

「その通りだ。付け加えると効果的に生体バリアを削るなら同じ生体エネルギーを持つポケモンで削る必要があるという事か。……だが、

何事にも例外はある。特にポケモンの状態異常だ」

生体エネルギー、生体バリア、なんともファンタジーかSFチックな文言ではあったが、ここに居るのはポケモンの非常識さを嫌という程叩き付けられ、その上で少なからず状況を飲み込んできた者達。そこに突っ込む様な者は居なかった。むしろ代わりとばかりに資料に目を落として飲み込める物が無いか探す程……そんな中、チョコビヒゲの説明は多少の強弱を付けつつ進行していく。

「どく、まひ、ねむり、こおり、やけど、こんらん……例を上げればかなりの数になるが、これら状態異常をポケモンに発生させる際、生体バリアを破って傷つける事は必ずしも必要ではない。言い換えれば、生体バリアを破れなくても問題ないという事だ」

「……なるほど。この麻痺弾と催眠弾はそこに着目したと？」

「そうだ。状態異常を起こさせるだけなら生体バリアは殆んど無視できる。例えば最初のポケモン犯罪の際、現状最強のポケモンがスタングレネードで動きを止められた様にな。……一応、成分はポケモン由来の物を主成分にしているし、まず問題はあるまい」

新開発された対ポケモン用特殊弾頭弾は、ポケモンの生体バリア……ポケモンを知っている者風にいえばHPを削る事なく状態異常を与えられる。少なくともチョコビヒゲはそう考えていた。万が一自分の理論が間違っていたとしても、この麻痺弾と催眠弾はそれぞれポケモンの“こな”系列の成分を抽出使用しており、ポケモン相手に充分な効果が期待出来ると考えていたのだ。

実際シロちゃん親衛隊員協力の元行われた実験では、親衛隊員もろともポケモンを状態異常にさせる事に成功しており、その後の解毒にも問題なかった。国際条約にも配慮した兵器……いや、暴徒鎮圧用の武器だといえるだろう。強いて問題点を上げるとすれば、特殊弾頭及び、専用ランチャーの生産コストぐらいだが……それは研究者であるチョコビヒゲの知った事ではなかった。

「感謝する。これでいざというときに動ける」

「こちらもだ。これでようやくシロ民に頼らずにポケモン犯罪を処理する準備が整った」

「ふんっ、ならばさっさとポケモンリーグを設立すべきだろう。いつまでバラバラにポケモン案件を処理するつもりだ、ええ？」

自分はやるべき事を行った。ならば後は貴様らの番だ。

そういわんばかりのチョビヒゲに促されてか、元総理大臣が仕方ないとはかりに重い口を開いて音頭を取る。

「そうだな。人員や予算の確保はすんでいるし……例のメディアカルマシンは動かせるのだろうか？」

「動かすだけならな。仕組みや改良、ましてや量産は不透明だ」

「動かせるならリーグ設立に問題はない。抑止力、警察力としては……警察と自衛隊のポケモン部隊は？」

「警察のポケモン部隊は……量産型モンスターボールか対ポケモン用特殊弾頭弾のどちらかの配備が完了すれば、一先ずは警察としての仕事は出来ます」

「自衛隊も同じく。どちらかあれば抑止力を発揮できるかと」

「ふむ……となると残りは法案だけか」

ポケモン法案。その数は十を越えて百に届かんばかりの数であり、前例のない事も相まって政府の動きは酷く鈍かった。特にポケモンを犯罪に使つても的確な罪状がない、子供が凶悪なポケモンを所持しても違法にならないといった歪な部分はかなり問題視されており、早急な対応が望まれているところなのだ。

「なに？　まだ通らんのか？」

「いや、不思議な事に反対派や無能どもが次々と醜態を晒して失脚してくれてな。そのおかげというか、今週中には粗方のポケモン法案が施行出来るはずだ。総理がアメリカから帰ってくるのが合図になるだろう」

「アメリカか……」

どうやらようやく法案が施行されるらしい。そんな事実から一安心といった空気が部屋に流れ……やがて一人の大企業の社長が手を上げた。質問だ。

「そういえば、諸外国の動きはどうなのだ？　私の方では酷く鈍い様に感じているが……」

「そちらもか？ ああいや、実はこちらも外国の動きが鈍いと感じているのだ」

「ふむ……？」

諸外国の動き。それは日本人としては気を緩めれば直ぐに無知になりやすく、だからこそ酷く気になる部分でもあった。政治、軍事、経済……そういった物は日本単独で完結する物ではないのだから。

そして、大企業の社長にまで上り詰めた男の感覚は正常だった。

「ああ、その感覚で間違いない。あちらさんも混乱しているらしくてな……まあ、総理がアメリカに行った事でホワイトハウスも方針をある程度固めるだろうし、他も動きを決めるだろう。彼はその辺りが得意だからな」

「なるほど、外交屋の面目躍如という訳か？」

「変わりに国内はガタガタだがね。まあ、リーグさえ設立できればそれも落ち着くだろう」

殆んど国内に居ない総理ではあるが、その分諸外国の動きはある程度まとめてくる予定らしい。その情報を改めて共有し、更にその後二、三言葉交わされ……権力者達の方向は固まった。

ポケモンリーグは何としても早期に設立すると。

そこには決して口には出さないものの、新たな利権を狙う一手、自身の保身、純粋な発展を願う考え等様々な思惑が絡んでいたが……しかし、ポケモンリーグの設立が本格的に開始される事に決まる。それに一番喜ぶのは誰か……少なくともこの場には居ないと、元総理やチヨビヒゲは考えずにはいられなかった。

「では、他の話題と行こう。何か報告のある者は――」

会議は続く。利権、保身、願い、様々な思惑がぶつかり合いながら

## 第24話 ステイツ、介入

都内某所でお偉いさんの悪巧み会議が進行していた頃、別の場所でも会議が行われて……いや、こちらの方を会議というのは少し難しいかも知れない。何せ片方に話し合う気がまるでないのだ。

「貴方のご託は聞き飽きたわ。ハッキリ言いなさい。ホワイトハウスはシロちゃんを殺す気があるのか、否か」

礼儀正しくソフアーに座り、その後ろからまるで巻き付かせるかの様にドラゴンポケモン、ハクリューを従えた黒髪の女性……伊藤ユウカは脅す様に相手を問い詰める。いや、実際脅しているのだ。ふざけた事をいえばハクリューを暴れさせるぞ、と。

「いや、私にそんな事を聞かれてもね……?」

その怒りを一身に受けるのは対面のソフアーに座った中年の——しかし美容に大金でも使っているのか、まだ若さの見える——金髪の男だ。ユウカの怒りをなんとか受け流そうとする彼は資産家であり、リヴァイアサン号の艦長であり……

「ハッ。貴方がCIAのエージェントから協力を依頼され、複数の仕事を請け負った事は掴んでるのよ。私達をあまりなめないでくれるかしら?」

CIAの協力者だった。

男はユウカ言葉に引きつった笑みを浮かべつつ、ダラダラと汗を流す。その有り様はとでも演技には見えず、もし演技なら彼は仕事を間違えているとしかいいようがないだろう。具体的にいえば、ハリウッドに行くべきだ。

「Shit……! これだから気の強い女はニガテなんだ」

「あらそう。うやむやにする気ならこの船沈めるわよ? この子の力を知らない訳ではないでしょう? それと、次汚い……いえ、そうね。日本語以外を使ったら沈めるわ」

「ぐっ、く……」

脅迫の上に恐ろしく横暴、だがぐうの音しか出ない……男がそんな様子になるのも仕方あるまい。何せユウカの手持ちであるハク

リユウ……それも6Vハクリューの力は本物だ。

最初にミニリユウとしての姿が確認されてから幾人ものシロ民やハンター達が挑むも、その手は全てはね除けられ続け、誰の手持ちにもならなかった一匹。

やがてユウカ主導の大捕物が企画、実行され、大勢のシロ民に囲まれてそれでも落ちず。

戦いによってポケモン持ちの一般シロ民が50名、エリートシロ民10名が戦闘不能判定。公共物、車両、持ち込まれた備品の損壊及び破損が多数発生。

やがて戦いの中でミニリユウはハクリューへと進化し、局地的な竜巻及び暴風が発生。遂に歴戦のシロちゃん親衛隊所属シロ民5名が撃破。

そんな攻防が半日近くに及び、いよいよシロちゃんの出陣が願われだして……すんでのところユウカが淑女にあるまじき意地でゲツトしたのは、界限では知られた話だ。

「あ、あー……私ニホンゴワカリマ「ハクリュー？」分かった！ 話す話すから沈めるのは止めてくれ！」

「ふん、最初からそうすればいいのよ」

ちなみに。ユウカとハクリューの仲は当初あまり良くなかったが、今では上下関係が確立されたのかそれなりに従順だ。少なくともこんな茶番に付き合っつて、瞬間的かつ局所的な風雨を起こす程度には。

とはいえ、ハクリューの目には常に試す様な色合いが浮かんでおり、少しでも自分の主に相応しくないと判断されれば主従関係は壊れるだろうが。

「さあ、さっさと話しなさい。貴方が知っている事を洗いざらいね」

しかし、この自信に満ちた高圧的な態度で相手を気圧せている間は問題ないだろう。何せそれは自身が強者だと確信しているからこそ出来る事で……その姿にハクリューは満足しているのだから。

「そういわれてもね……正直私が知っている事はあまりないんだよ。確かに君の言う通り私はCIAの協力者だが、それだつて熱心に協力している訳でもない。だからそちらに提供出来る情報も大した物は

「ぎっさと吐け」オーケー、分かったらポケモンをけしかけるのを止めてくれ」

高慢なお嬢様とプライドの高いドラゴンポケモンというある種最悪のタッグを前に、遂にリヴァイアサン号艦長はポッキリと折れた。そうして彼はシブシブといった様子で口を開く。知りうる情報のうち、喋っても問題無いものを選びつつ。

「まずホワイトハウスが不知火白の殺害を……あー、悪かった。言い換えよう。彼女の排除をするのだが、今のところ不明だ。が、特にイレギュラーが起きなければ放置されると思われる」

「放置？ 随分消極的ね？」

「ホワイトハウスは……というよりステイツとしては今回の騒動には前向きなんだ。しかしどの程度のリスクが潜んでいるかも分からないのに突っ込む気もないらしくてね。故に様々なオプションを考えつつ、介入の瞬間を待っているのが現状だ」

「……随分と鈍い動きだこと」

どこかなじる様なユウカの発言に、艦長は苦笑しつつステイツも一枚岩ではないんだと返す。

「勿論全体としては乗り気さ。我々ステイツは常に新しいフロンティアを目指す開拓者だからね。ポケモンが生み出す利益や市場にはホワイトハウスも財団も、事によれば一般市民さえ興味津津だ。しかし……どこにも変化を嫌う者は居るし、敵対する者も当然いる」

艦長はそこで一度言葉を切り、揃えていた足を崩して足組みをする。その一連の動作は慣れと、余裕を感じさせる物だ。事実艦長の額から出ている汗は格段に減っていた。

「アジア地域の不安定さを嫌う者、推し進める者。現政権の支持率向上、あるいは下落を狙う者。新たな紛争を望む者、望まない者。現状に満足している者、してない者。何よりポケモンを良しとする者、しない者……そういった者達の対立と衝突。これがある程度沈静化されない事には、いくらステイツといえどあまり強引な事は出来ないんだよ。他の国々と同じ様に、ね」

「ハッ……つまり、そちらに動く気はないという訳？ 火中の栗は日



本に拾わせ、肝心な部分は自分達が横取りすると？ なめてくれるわね」

「そうは言わないさ。事態が落ち着けばちゃんと同盟国として支援もするだろう。現にCIAのエージェントが数人とはいえ、人とポケモンとの友好関係の為に動いてくれている。君達の望みは叶うと思うけど？ ミス・ユウカ？」

相手を落ち着かせる声音で淡々と語り掛ける艦長。その姿に当初の焦りはまるでなく、ギガヨットを所有する資産家として相応しい余裕が見えた。

一方でユウカの方といえば……自信と高圧的な態度は変わらない。だが、その姿にはイマイチ余裕を感じられなかった。

「ええそうね、おかげで予想以上にスムーズなポケモンリーグ設立が出来そうだわ。勿論、その後の事も。ただ——」

お礼……というにはいささか以上に気持ちのこもっていない言葉を投げた後、ユウカはそのキツイ視線で艦長を睨み付ける。一辺の嘘も許しはしないとばかりに。そして。

「テロリストのクズどもと接触したのは、どういうつもり？ 説明して貰うわよ」

そう言ってユウカは壁際で気配を消していた付き人のマネージャーに指示を出し、お互いのソファアームの間にあつた高級感溢れるテーブルに数枚の紙をぶちまけさせる。

そこに記されているのはシロちゃんを狙うテロリストと化した変態どもや犯罪者と、CIAないし米国の人間が接触していたという報告だ。写真の一枚すらなく、裏付けは超能力を使ったというファンタジーな物だったが……現状、それで問題はなかった。信じようと、信じられまいと、どちらでも。

「……随分と、ファンタジーな報告書だ。こんな妄言を信じると？」

「ええ、信じるわ。なんとも貴方達らしい話でしょう？ 対立する両者にそれぞれ接触して支援するなんて。それに……超能力が信じるに値する物だと、貴方は認めているでしょうに」

「なんの事かな」

「惚けなくて結構。貴方が超能力関係に多額の投資をしたのは掴んでるのよ。アメリカが超能力関係の研究施設を拡張したのもね」

「……………なるほど。随分と鼻の良い犬を飼っているらしい。それとも、君自身が犬かい？」

あくまで穏やかだった目を尖らせ、嘲る様に疑問を投げる艦長。それは犬と呼ばれる事もあるシロ民を揶揄している様であり、同時にユウカの立場を問う物でもあった。誰かの下に居るのか、それとも独立しているのか？

そんな疑問に対しユウカはハッと鼻で笑った後、お生憎様と断りを入れて言葉を繋げる。

「どちらかといえば私は狼よ。……………犬は、貴方でしょう？」

「……………」

自身を狼だと主張し、犬は艦長の方だと薄く笑うユウカ。その言葉に艦長は冷たい視線を返す。

彼が犬。何の？ 誰の？ それは恐らく……………

「故国を捨てて飛び出した貴方が、今更国家の犬とはね。笑い話だわ」

「……………賢い選択を、したまでだ」

「ならこの船を沈めなさいな。国や権利者に尻尾を振るのは愚かしい事だと、そう言つてた頃に造つたこの船を。あれは若さ故の過ちだと……………そう言えばいい。違うかしら？」

国家の犬となったのなら、さぞ忌々しい記憶でしょう？ と。相手の神経を逆撫でる様な笑みを浮かべ、ユウカは笑う。

それに対する艦長は……………最早睨み付けているのと変わらない有り様だ。ユウカの肩に暇そうに顎を預けているハクリューがいなければ、懐から銃を抜き取って脅し出してもおかしくない形相。とてもではないが余裕がある様には見え……………その状態のまま彼は反論の為に口を開く。

「ステイツは本気だぞ。大きき故に直ぐには動けないが、一度動き出せばあつという間だ。個人なんて簡単に叩き潰される。君のお気に入り……………いや、信仰している不知火白としてそれは変わるまい」

「……………そうね。それは否定しないわ。国家という大集団と正面から戦

えば負けるでしょう」

国家というのは強大だ。ましてやそれが地球最強の超大国ともなれば、いくらポケモンが居ても勝てるビジョンは思い浮かび難い。だが……

「けど、戦う必要があるの？ 国家と？ 否よ。その必要はない」

「……何？」

「ふふっ。勘違いしているようだけど、私は聞きに来ただけよ」

その報告書は差し上げるわ、と。なんとも優雅な笑みを浮かべながら告げ、今までの高圧的な態度も消し去ってユウカはスツと席を立つ。それに釣られる様に目を閉じていたハクリューも覚醒し、やっと終わったかーとでも言わんばかりにゆるゆるとユウカに続いて……一人と一匹は部屋の出口へと向かう。

そこまで事が進み、そこでまさかと艦長は顔を改める。

「……謀ったな」

苦々しく、艦長はその言葉を捻り出す。謀られたと。今の今までに至るやり取りで、彼女は必要な情報を自分から抜き出したのだ。何一つ交換せず、こちらの情報だけを抜き取っていった……それが具体的に何かは艦長には分からなかったが、謀られた事だけは確信出来た。

それに対するユウカの返答はない。ただ自信に満ちた笑みを艦長に向け、ごきげんようと優雅な礼を見せて退出していく。

「ああ、最後に一つ。言わせて貰うわ。……貴方達、ポケモンをなめすぎよ」

そう言つてユウカは今度こそ部屋から出ていった。ハクリューと付き人のマネージャーを連れ、勝ったといわんばかりの余裕と自信を見せながら。

そうして彼女が出ていった後の部屋に、暫く沈黙が降り……

「Shit! やつてくれるじゃないか。……なるほど、母親に似たな？ 忌々しい」

ギリツ、と。凄まじい歯ぎしりの音を響かせ、艦長は心底忌々しうにユウカが出て行った扉を睨み付ける。

そんな彼の様子を見かねたのか、壁際の影となっていた護衛らしい

大柄な男が艦長に近づき声を掛けた。何か手を打ちますか？ と。

「ふむ……」

護衛の提案に艦長は普段の平静さを取り戻し、軽く思案する。彼はいささか精神やテンションが安定しない嫌いはあるものの、決して無能ではなく……短い時間で結論を弾き出す。

「いや、必要ない。この船に滞在しているシロ民への教育も引き続き……いや、より濃密に行いたまえ」

「しかし、宜しいので？」

シロ民からはリヴァイアサン号研修と呼ばれるそれは、ユウカのゴリ押しと艦長の打算から行われてきた物だ。既に多くのシロ民がこの船で軍事的な知識や経験を積んでおり、それをいきなり取り止めるとなればそれなりの嫌がらせになるのは間違いない。

それを今回の報復にする事も可能だが……しかし、艦長はそれを含めた報復の全てを腹の中にしまい込んだ。勿論、打算からだ。

「恐らく、彼女は幾つかの確信が欲しかっただけだ。後は我々への警告、私の立場の確認。そしてオペレーションの時期を計りに来たのだろう。それぐらいならとやかくいう事ではないし……シロ民への影響力確保はCIAの希望でもある。切り上げる訳にはいかない」

人は善意では動かない。暇な日本人ならいざ知らず、艦長はアメリカンドリームを掴んだステイツの人間だ。当然誰かへの支援の裏には理由がある。それも利益に繋がる理由が。

今回でいえばリヴァイアサン号を通じてシロ民とCIAエージェントを結び付ける事であり……その行動には既に利益が出ていた。

「それより、ホワイトハウスからのオーダーを片付けなければなるまいよ。……例の特殊弾頭の輸送時間は？」

「口の軽いシロ民がおおよその時間を漏らしました。一般車の少ない早朝に行く様です。具体的な事は漏らしませんが……」

「充分だ。直ぐにでもエージェント達に教えてやりたまえ。後は彼らが好きにやるだろう。結果がどうなろうと、それで最低限オーダーには答えられる」

「yes sir！」

ビシツと敬礼を返し、指示を受けた男が退出していく。

ああ、口を滑らせたシロ民は夢にも思わなかっただろう。まさか酒場で退役軍人に漏らした情報がCIAエージェントに届けられ、それがまた別の——自分達の敵の手に渡るとは。リヴァイアサン号艦長の、そして米国の利益に使われるとは。

だが現実とはそんな物であり、既に事は起こった後。覆水盆に帰らず……手遅れだ。

「ステイツやコミーの軍人ども程ではないが……私も興味はある。遠くから聞かせて貰おうか。ポケモンが現代兵器にどの程度耐えうるのか？ その序曲を」

様々な人の努力、思惑、暗躍……それらが重なり、激突は決定した。開幕は、間もなくだ。

## 第25話 特殊弾頭輸送任務（前編）

対ポケモン用特殊弾頭弾。

それは人がポケモンと戦う為に作り出した剣だ。ポケモンの“この系の成分を抽出凝縮する事で高い状態異常発生率を誇る、BC兵器すれすれの武器。”

まあ、ポケモンからすれば“きのみ”や“わざ”で充分対抗可能な、傷一つ付かない鬱陶しいだけの物だが……それでも今まで全く無力だった人間が、ポケモンに対して有効な攻撃方法を手に入れた事に違いはなく、方々から注目されている特殊弾頭に変わりはない。最初の一步としては、大きな前進だと。

そしてこの日。研究所に併設された工場で少数生産された特殊弾頭の試作品が、駐屯地や警察施設へ輸送される日がやってきた――

MISSION

「特殊弾頭輸送任務」

集まったかね？

落ち着いてくれ。静かにしてくれ！

諸君らはシロ民実働部隊の一員として、今日までポケモンが出現した地域の平和を維持してきてくれた。……今日まで。

先ほど、我がシロ民実働部隊の先行偵察班が不審な動きをする不審者集団を通報してきた。

直後、当該偵察班からの通信が一切途絶えた。不審者集団による攻撃を受けたものと判断する。

任務を伝える。

この関東地域における膠着状態が約一ヶ月ぶりに破られた可能性がある。

シロ民実働部隊特殊弾頭輸送任務班はただ今をもって第一種戦闘態勢に移行。各隊員は担当車両へ各自乗車し、不審者集団の発見、捕捉、威嚇射撃をもって敵の狙いを阻止せよ！

もし敵から反撃を受けたその時には――

「部隊長、間もなく出発時間です」

「特殊弾頭の積み込み完了。今のところ妨害はありません」

「先行偵察班より連絡！ 攻撃を受けて退避中、負傷者多数。不審者集団……いえ、テロリストは見失ったとの事です」

「出撃だ！ 各員は直ちに乗車、輸送部隊へ攻撃を行うと推測されるテロリストを排除せよ。」

これは訓練ではない。

……

……

……

まだ日が出てすらいらない早朝、ポケモン研究所から暗闇に紛れて2つの車列が出発する。

片方はオリーブドラブに塗られた装甲車やトラックで構成された自衛隊の車列、もう片方はパトカーや特型警備車で構成された警察の車列だ。

そして、そのどちらにもシロ民が護衛として随伴していた。

彼らはそれぞれのトラックや特型警備車の中で各々時を過ごす。モンスターボールを手のひらで転がす者。全員が正式装備しているシロ民専用大型特殊防弾盾や防弾チョッキ等の自分の装備を確認する者。そわそわと落ち着かない者、寝ているのではないかというレベルで静かな者……様々だ。

とはいえ元ネット民だけあつてか会話らしい会話はなく……それに耐え兼ねたのか、やがて特型警備車に乗っている一人のシロ民がポツリと声を出す。こんな噂を知ってるか？ と。

「今回のコレ、色んな国がスパイを使って見てるらしいぜ？」

「ああ、それなら聞いた事がある。中露はテロリストに武器を横流しして、米国も一枚噛んでるとか」

「うわあ、米中露が揃い踏みかよ……あれ？ 欧州諸国は？」

「お嬢曰く、ブリカス含め欧州連中は足の引っぱり合いの真つ最中らしい。こつちを見るだけ、調べるだけならともかく、極東の島国相手

にマジになって動くには後一週間はかかるだろうってさ」

警察車列を担当しているシロ民達の話は、今回の任務の裏側だ。中露が武器を、米国が情報を、それぞれテロリストに引き渡した事実を噂話として知る彼らは、大国の思惑をあーでもないこーでもないと話し合う。

とはいえそこに真剣さや深刻さは殆んどなく、大国の思惑は馬鹿話の一つとして扱われ……やがて彼らは大国が自分達とテロリストをぶつけ合わせ、ポケモンの戦闘能力をはかろうとしているのではないかという結論に達した。今回の輸送任務も、その為に用意された舞台、演目だと。

「ったく、俺らは見世物か何かかよ」

「見たいのは俺らというより、ポケモンだろ。どういう存在なのか、どのくらい強いのか、友好関係とかそもそも可能なのか、必要なのか、新たな奴隷に出来ないかとか……まあ、根本的に対岸の火事って感覚だろうな。海一つは挟んでる訳だし」

「あー……そうなるとこの微妙に無駄な感じがする、芝居がかった輸送任務もじっくりくるなあ」

「用意された戦場、か」

「身体は闘争を求めろ」

大国の思惑をおおよそ把握し、それでも気の抜けた様子でシロ民達は車に揺られる。彼らからすれば今更、ようやくなのだ。ようやく大国がポケモンに注目しだした、動き出した。……遅い動きだと、内心嗤う者すら居る程だ。

何より、自分達はそういう手合を含めた障害に対処する為、各々ポケモンを手に入れ、関係を深め、経験を積み、シミュレーションと訓練を重ね、今日に至る。今更慌てたり、逃げ出す様な腰抜けはここには居ない。そんな奴はエリートや親衛隊員を名乗れないのだから。

「ま、一つ言えるのはポケモンが最初に日本で登場したのは正解だったな。シロちゃん居るし、こんな方法で調べようとするあたり、他国だったら今頃ポケモンとドンパチ始まってるだろ」

「日本人。その辺り柔軟つか、一旦は受け入れるからなあ……」



「そもそも、KAWAIIで全部解決よ」

「進んでるのか、馬鹿なのか……」

「まあ、平和的ではある」

「お、そうだな」

和気あいあい……とまではいかず、お互い殆んど目も合わせないが、シロ民達は比較的リラックスした様子で車に揺られる。渋滞もなく、順調に車列は進み、一団が郊外から都心部へと入ろうとした——その時。ドゴシヤア！ と、車の外から凄まじい衝突音が聞こえ、直ぐ様急ブレーキがかけられる。

身体が浮き上がる様な慣性。その中でシロ民達は唐突に起こった幾つかの出来事を頭の中で組み合わせ、二秒と掛けずに答えにたどり着く。即ち。

「敵襲?!」

「奴らめ、来やがったか!」

「小型ポケモン持つてる奴は出せ! 大型はまだ出すなよ!」

「サンド、出番だぞ!」 「来い、マダツボミ!」

「運転手! 状況は!」

敵襲だ。テロリストが襲って来たのだ!

予測されていた非常事態に、シロ民達は怯むことなく立ち向かう。素早く敵襲を確信し、サンドやマダツボミ、シエルダーやクラブ等の小型ポケモンを車内で出し、運転手に状況を確認する。淀みなくそこまで動きを終わらせ、各々が自分の装備を改めて確認している……運転席から怒鳴り声が響く。前の車がやられたと。

「トラックに、改造トラックに突っ込まれてる! こっちの進路を塞いで……いや、中から人が、銃を持ってるぞ!」

「お前ら行くぞ!」

「応!」

それだけ分かれば充分だ。そう言わんばかりに声を合わせ、ほぼ同時にシロ民の一人が扉を蹴破る様にして外への道を開き、そこからサンドを先頭に小型ポケモン達が外へと飛び出す。一拍、シロ民達も盾を構えながら隊列を組んで外へ進み、ポケモンを前に出しつつ警備車

の左右に展開。

車内のゆるゆるとした雰囲気とは打って変わって機敏な彼らを出迎えたのは、鉛弾の壁だ。

「構ええー！」

暗闇を引き裂く曳光弾えいこうだんの光を見る暇もなく、シロ民達は大型の盾へと身を隠す。

カンツ、キンツ、と盾で弾かれる鉛弾。だがそれも長くは続かない……それを知識で知る彼らは直ぐ様次の一手を打つ。シロ民らしく、ポケモンと共に。

「サンド！ 前へ進んで、スピードスター！」 応射しつつ照らせ！」

「行け、ポニータ！ 〴〵ひのこ〴〵だ！ 撃ち返せ！ 照らしてやれ！」  
「シエルダー、〴〵みずでつぽう〴〵。撃ち据えろ」

「クラブ、バブルこうせん」。武器を狙え！」

「マダツボミ、〴〵しびれこな〴〵。撃ってくる奴らを動けなくしてやるんだ！」

「行ってこい、タマタマ！ 〴〵タネマシンガン〴〵！ 片っ端から、吹っ飛ばしてやれ！」

盾に身を隠しつつ、暗闇の中自分のポケモンに指示を飛ばして応射を開始するシロ民達。追加でポニータとタマタマが場に出され、星が、火が、水が、泡が、粉が、種が、次々とポケモン達から放たれ、テロリスト達を撃ち据えていく。

勿論テロリスト達も黙ってはいない。車や街頭、ときには暗闇まで遮蔽物とする事でポケモンの攻撃を遮り、アサルトライフルで射撃。ポケモンの撃破を狙うが――

「サンド！ 〴〵まるくなる〴〵！ 前に出て攻撃を引き受けるんだ！」

「シエルダー、サンドの横に付いて、〴〵からにこもる〴〵だ。奴だけはい格好させるなよ」

「クラブ！ 〴〵かたくなる〴〵。そしてお前もサンドの横に付くんだ！ 前進しろ！」

「ポニータ。〴〵なきごえ〴〵そして〴〵ひのこ〴〵だ。飛んでくるのは出来

るだけ避ける、お前出番はまだ先だからな！」

「あれは……？　ちつ、ガスマスクとは小癩な……大丈夫だ、マダツボミ。その場から“ねむりごな”。手間を増やしてやれ」

「タマタマ。お前は引き続き“タネマシンガン”だ。顔を出した奴を吹っ飛ばしてやれ！」

小銃ではポケモンを殺傷出来ない。流石に小石が当たった程度にはダメージがある様だが、それでは十発当てようと百発当てようと殺す事は出来ないのだ。現にテロリスト達は一方的に撃たれ、吹き飛び、ジリジリとその数を減らしていく。

そうこうしているうちに警察官達もポケモンを出し、ライトを照らし、あるいは拳銃片手に車の影に隠れ、こちらもテロリスト達に圧力をかける。相手はシロ民だけではないと。

「運転手の人は早く後ろに、この警備車は盾として使います！」

「了解した、健闘を祈る！」

「っ、ロケラン注意！」

「言ってる側から……運転手の人は退避を！　サンド——」

このままやられるつもりはないといったところか、テロリスト達はRPG7を複数持ち出し……シロ民が止める暇もなく、斉射。

それに対するシロ民の動きは早い。防御力の低い個体には回避を、耐えられる個体には迎撃を指示。 “スピードスター”、 “みずでっぼう”、 “バブルこうせん”。星、水、泡の “わぎ” が放たれ、その幾つかがロケット弾に命中、爆発、迎撃に成功した。

「良しっ！」

「まだまだ！　まだ来るぞ！　クラブ！　撃ち続けろ！」

「ポニーター！　“ひのこ”！　撃ち落とせえええ！」

だが全てを落とすきれず、数発の弾頭がシロ民達へ迫る。今更逃げはしない。今までのものに加えて “ひのこ” や “タネマシンガン” 等々、焦りを含んだ声で更なる “わぎ” が指示され、即座に弾幕が形成される。

複数の爆発。しかし僅かだがすり抜けられ……そして。

「駄目だ、伏せろおおお——！」

その声に反応出来るか否か——そんなタイミングで凄まじい爆発音と共にシロ民達が乗っていた警備車が爆発炎上。パーツを撒き散らして吹き飛ぶ。対戦車弾頭が突き刺さったのだ。警察の車両ではひとたまりもない。

更に前へ出たポケモン達が居る付近にも着弾し、サンド、シエルダー、クラブが至近弾を受ける。が、こちらはそれほどダメージではなさそうだ。しかし、生身のトレーナー達、シロ民は違う。

「退避！ 退避い！ サンド、一旦下がれ！」

「訓練通りやれば生き残れる。落ち着いてフォーメーションを組むんだ！ シエルダー、サンドの後ろに付け！」

「クラブ！ お前も下がるんだ！」

「マダツボミ！ こっちは大丈夫だから、火から離れろ！」

「タマタマ、お前もだ！ 離れておけ！」

「ポニータ、一度戻ってくるんだ！」

シロ民達は指示を出しつつ、盾で自分と仲間を庇いながらゆるりと撃破された車両から距離を取る。しかしその隙を逃しはしないとばかりに放たれる鉛弾。普通なら死者を出さずにはいられないタイミング……だが。

「サンド！」「シエルダー」「クラブ！」

「「まもる」！」

空いた穴は即座に三匹が連携した「まもる」の壁によって塞がれ、直ぐに戦線が立て直される。そして直ぐ様飛び交う鉛弾と無数の「わざ」。キルレートはシロ民優勢ではあるが……

「サンド、スピードスター！」 牽制射！ ……どうする？ このままじゃ決め手に欠けるぞ？」

「クラブ！ マッドショット！」 連中の足元を薙ぎ払え！……なら突っ込むか？ 先頭はお前とお前のポケモンな」

「ポニータ！ ほのおのうず！」 閉じ込めろ！ ……これで準備は出来たぞ。まあ、俺らは無理だな、盾がイカれだした」

「わーお、えつぐい。まあ、死者無しを目指すと、どうにもな」

「それがいいんならガスマスク焼いて「どくのこな」で片付くだろ。」

……で、実際どうする？ 危険承知で突っ込んでケリ付けるか？」  
難しいところだ。そうため息を吐くシロ民。何せお互い死者無しで終わらせたいシロ民は、決め手に欠けているのだ。かといって王手を指そうとすればどちらかに、あるいは両方に死人が出かねない。  
それは、人とポケモンの共存の流れにヒビを入れてしまう事になる。だがこのままではどっちみち……そんな考えが全員の脳裏に浮かんで暫く、一人のシロ民が声を上げる。ここは俺の、俺達の出番だと。

「イワークニキ……運転手さんは？」

「他の警官にパスしてきた。で、ついでに許可も取ってきた。イワークで暴れる許可をな」

イワークニキ。それは最初に出現したイワークを両足粉碎しながらもゲットした男の通称名だ。そのクソ根性を根底に積み上げられた実力は確かな物で、今回の特殊弾頭輸送任務では切り札の一人として随伴していた。

とはいえ、何せイワークは巨大だ。空き地が広がっているならまだしも、建造物が密集する都心部ではモンスターボールから出しただけで被害が出かねない。その為イワークニキは自分の手持ちと共に後ろに控え、警備車の運転手や、その他警官隊の支援やアドバイスに回っていたのだ。……上から許可が下りる、この瞬間まで。

「……よく出たな。許可」

「これ以上町中でロケランブツパだのポケモンバトルだのはヤバいつて判断らしい。多少なら壊しても構わないから、S A Tの出勤より早くテロリストを取り押さえてくれとよ。……妙な指示だが、まあ、悪くない」

「うん？ ……ああ。なるほど、これも演目か。鬱陶しい」

同胞の言葉にそういう事だな、と。そう苦笑しつつイワークニキは腰のベルトからモンスターボールを取り外し、宙へと放り投げる。高く、高く。そして。

「来い、イワークー！」

ポンツ、と。独特の音と共に光が溢れ、巨大な蛇を形作り、やがて

巨大なポケモンが姿を現す。いわへびポケモン、イワークだ。

たかさ8・8メートル、おもさ210・0キロ。その怪獣さながらの巨大さを見る者を圧倒し、敵対する者の心をへし折る。――仮にポケモンに詳しい人間、例えばシロちゃんがこの場に居たならば、このイワークが意外と脆い事を指摘してくれたかも知れないが……生憎彼女はまだ夢の中だ。

「さあ、チェックメイトだ」

鮮やかな朝焼けがビルとイワークを照らす中、戦いは次の段階へ進もうとしていた。

## 第26話 特殊弾頭輸送任務（後編）

朝日が差し込み始めたビル街の端で、突如として始まった戦闘は既に終わりを見せ始めていた。

警察車列を強襲したテロリスト一党はアサルトライフルやロケットランチャーで護衛部隊を攻撃するも、それを全て無力化された上にポニータの「ほのおのうず」に囲まれて身動きが取れず。一方のシロ民達は新たにイワークを加えて戦列を組み、突入の瞬間を待っていた。

「各員準備は良いな？　『ほのおのうず』が消えたら突入するぞ」

「盾は使用限界だ。イワークを盾にして接近する。誰か、警官隊にもそう伝えろ」

「俺が行ってくる。手錠を連中にはめるのはあちらさんの仕事だしな」

「よし、よし。いつでも来い……！」

「さて、俺はポニータに乗っていくか」

「なにそれ格好いい」

次の攻防で勝負が決まる——それはこの場にいる全員が確信している事。元ネット民らしくゆるゆるとしたシロ民達もそれは同じで、ふわふわとした態度の裏で密かに息を飲む。

一拍。遂に「ほのおのうず」が霧散し始めた。

「突撃イイイ！」

「イワーク、突っ込め！　突撃だ！」

「Y p a a a a a a a a !!」

「うおおおおおー!!」

「GO！　GO！」

「突撃だあああ！」

炎が消えたのを合図とし、各々が声を上げながら前へ踏み出す。

先ずイワークが地を滑る様に前進。それを盾にポケモン達が続ぎ、シロ民達も使い物にならなくなった盾を投げ捨てて走り出し、警官隊もその後続いた。全軍突撃だ。

「撃ってきたぞお！」

「怯むな！ 突撃しろおお！」

「イワークの後ろに続くんだ！」

「イワークは鉄壁だ。この程度の攻撃では、びくともせんわ！」

破裂音、金属音、爆発音。凄まじい音が響く道を、シロ民達はイワークを盾に前へ進む。シロ民達からはイワークの巨体で見えないが、辺りに響く凄まじい跳弾音とそれに混じる爆発音を聞くに、テロリストは全力でイワークと相対しているのだろう。

そして、それは明らかにイワーク優勢だ。ライフル弾も、対戦車弾頭も、イワークを撃破するにはまるで足りていない。どう見ても豆鉄砲以下の効果しか与えていないのだから。

「よし、イワーク！ 奴らを取り囲め！ 動きを封じろ！」

そうしているうちにイワークはテロリスト達に取り付き、トレーナーの指示に従って彼らをグルリと取り囲む様にとぐろを巻く。いつでも押し潰せるぞと。そんな圧力をかけながら。

「決まったな……テロリストどもに告げる！ お前達は完全に包囲されている！ 大人しく武器を捨てて投降しろ！」

勝負は決まった。誰もがそう確信し、降伏勧告が始まる。武器を捨て、投降しろと。お前らは負けたのだと。繰り返し、繰り返し告げる。各々が反発に備えて銃を構え、ポケモンに指示を飛ばす準備を継続しつつ。

それを知ってか知らずか、イワークのとぐろの中からまだ戦えると罵声混じりの日本語で反発の音が上げられ、連続した銃声が響くもの……悲しいかな、それに続くのは虚しい跳弾音だ。どうやらテロリスト達はポケモンを持っていないらしく、イワークのとぐろを突破出来ないらしい。

「……連中、武器を捨てんな。まだ撃ってるぞ」

「まさか、この段でまだ勝てると思ってるのか？」

「いや、どっちかというと発狂してるんじゃないのか……？ あれ」

「あー、まあ、どっちにしる時間の無駄だな。お巡りさん方にも言うてくるわ」



「りよ。んじや、それで終わりだな。」

これ以上は時間の無駄だ。それを感じたシロ民は警官隊に話を付けに行き……やがて双方納得の上で協力して次の段階へと移る。つまり、突入だ。

「話つけて来た。早期突入に賛成、タイミングはこつちに合わせてくれるってよ」

「そりや、意外だな。素人には任せられない！……とか言われなかったのか？」

「いや、まあ……普通ならあるんだろうけど、俺とあちらさん顔馴染みだし。一時期教官だったし、俺」

「ああ、ポケモン教習の関係か……」

「コネの力だな。お嬢様々だ」

「なるほどな。んじや、前準備と行くか」

シロ民と警官隊の一部がお互い顔馴染みである事、準備がポケモンに関する専門家であるという世間風潮……そういった要素が噛み合って、シロ民主導の突入がスムーズに開始される。

その最初の一手はイワークニキ。彼がイワークに指示を出した事で、イワークがテロリストを囲ったままグルグルと身体を動かし始めたのだ。それはまるで、回転する石壁。

「良いぞイワーク。回れ、回れ。圧迫し、かき乱せ……！」

グルグル、グルグルと、しかし地響きを立てながらイワークは回る。その圧迫感たるや凄まじく、中にいるテロリスト達は混乱の極みにあった。

このまま磨り潰されるのではないか、押し潰されるのではないか、もし当たればひき肉にされるのは間違いない……ああ、これは一体いつになったら止まるのか、止まったとして突入してくる方向はどちらなのか。自分達は、どうなるのか？

「奴さん、酷く混乱してるな……そろそろじやないか？」

「そうだな。そちらの準備は？」

「終わってる。後は訓練通りにやるだけだ」

「よーし……イワーク、いやなおと！」　そろそろ決めるぞー！」

テロリストと呼称されてはいるが、彼らは歴戦の傭兵でもなければ狂気に染まった信仰がある訳でもない。ただのチンピラに毛が生えた程度の連中だ。故にイワークが恐怖を煽る度に容易く戦意が削れ、  
“いやなおと”による精神ダメージが刺さり、統制は崩壊寸前。

やがて恐怖からデタラメに撃っていた銃が弾切れになり、あるいは運悪く跳弾で自分を撃ち、味方に撃たれ、戦う力を失っていく。  
そして。

「イワーク！ ポケモン達の前に穴を開けろ！」

イワークニキの声でイワークの回転が止まり、一ヶ所だけ包囲に穴が空く。それも人が並んで通れる程の穴が。

これに戦意が崩壊したテロリスト達が遮二無二飛び付く。我先にと包囲から抜け出そうとし……

「サンド、 “たいあたり”！ 突入だ！」

「シエルダー、 “たいあたり”！ 続けえ！」

「ポニータ！ “たいあたり”だ！ 行くぞっ！」

包囲の直ぐ側で待機していたポケモン達の “たいあたり” を食らって薙ぎ倒され、直ぐ様シロ民が警察に捕縛された。武器を取り上げられ、拘束された彼らに反撃の手はない。

一方、まだ武器を持つている者達は反撃を試みるが……やがて等しく反撃の手を失った。シロ民一番乗り！ 手錠を振り回しながらそう叫ぶポニータに乗ったシロ民を先頭に、素早く接近してきたポケモン達の “たいあたり” を避けきれず、吹き飛ばされ、武器を破壊、もしくは取り上げられたのだ。狙いを定める暇すら与えない速攻で。

「突入！ 突入！ 抵抗する者はポケモンに制圧させろ！」

「手錠をかけてパトカーの後部座席に突っ込んでやる！」

「こら、大人しくしろ！」

文字通りポケモンに薙ぎ払われたテロリスト達に、打てる手は最早なかった。スーパーマサラ人でもなく、元が一般人に過ぎない彼らは体術に優れる警察や、囲んでポケモンで抑えるシロ民に抵抗出来ず次々と捕縛される。

やがて警察車列を強襲したテロリスト十数名は全員捕縛され、自体

は終息を迎えた。警察車列側の死傷者0。テロリストは全員捕縛済み……圧倒的な勝利だ。

「終わったな……」

「ああ、勝った」

「他愛ない」

「まあ、これでポケモンが最強だったのはハッキリしたろ。どこの国か企業か知らないが、バカ騒ぎを煽るのはこれで終わりにして欲しいもんだ」

「それな。今回はシロちゃん的にも、俺らとしても完全に寄り道……というか、どうでもいい結果だからなあ」

「ほんそれ」

人間は銃を持ったくらいではポケモンに勝てない。

それはシロ民や政府機関では周知の事実であり、日本国においては精度の高い噂話で……この瞬間、観戦していたスパイ達が目撃した事により、世界の常識となった。ポケモンに銃は効かず、接近されれば狙いを定める事すら困難だと。

「この、化物どもめ！ インベイダーの手先どもめ！ 滅びろ、死に絶えろ、貴様らのせいでは死ぬんだ！」

「ボスさえ、ボスさえ来れば貴様らなんぞイチコロだ！」

「ポケモンがなんだ、ポケモンがそんなに偉いか！ 貴様らのせいで、どれだけ消えると思ってる！ 狂人どもがあ！」

だからテロリストとは名ばかりの連中の……その中の数人がそんな事を叫んでも、誰も聞きはしない。敗者の戯れ言、負け犬の遠吠え、狂人の妄言。誰も、本気にはしない。他の有象無象と喚き声と同じと片付けてしまう。

だって、ポケモンに勝てるのはポケモンだけなのだから。こちらの有利は絶対なのだから。そう、ポケモンに勝てるのはポケモンだけだ。ならば——ポケモンにポケモンをぶつけたとき、どうなるか？

観戦者達の興味が移り実験が再開される。

「——了解した。スリーパー、イワークへ“ねんりき”。締め上げつつ、ビルに叩き付けろ」

その“わぎ”が、辺りに響く。狙われたのはイワーク。200キロを越える巨体が突如として持ち上がり、地面から離れ、ブンツと近くにあった廃ビルへ叩き付けられる！ 凄まじい衝撃と揺れが響き、廃ビルの外壁が吹き飛ぶ。

「イワーク!?!」

「何だ!? 何が起こった!?!」

「誰だ! どこからの攻撃だ!?!」

突然の事にポケモンもトレーナーも混乱し――

「スリーパー、”サイケこうせん”。イワークを落とせ」

次の瞬間には追撃の光線が刺さる。それはイワークに向けるにはお世辞にも相性がいいとはいえないエスパータイプの“わぎ”。だが、放たれた二つはいずれも“とくしゅわぎ”で、イワークは“とくぼう”が低い。そして何より、その“わぎ”はかなり鍛えられた一撃だった。

イワークが、沈む。ズルズルとビルを背に崩れ落ち、地響きを立てて地面に横倒しに。その目は……完全に回っている。戦闘不能だ。

「ば、馬鹿な。イワークが……?」

「あり得ない! 対戦車弾頭すら弾くんだぞ!」

「いや、今のはエスパータイプの……そもそもどこから撃ってきたんだ!」

「確かあつちの……おい、あれを見るろ!」

一人のシロ民がビルの屋上を指差す。逆光でよく見えないが、そこに居るのは複数のニンゲンの姿と……シロ民の知識と目が正しければ、さいみんポケモン、スリーパーに見えた。

――まさか、奴らが?」

そう彼らが思考した次の瞬間、ニンゲン達とスリーパーの姿が突如としてかき消える。まるでそこには誰も居なかったかのように。

そして。

「これが、噂のインベーター精鋭戦力か? 思ったより脆いな」

「我々が出る必要は無かったのではないかね?」

「なら黙れ。この件は私に一任されている」

「なっ!?!」

「馬鹿な!?!」

「瞬間、移動……!?!」

シロ民達の背後、そこから聞こえた声に思わず振り替えば、そこにはビルの上に居たはずのニンゲン達と一匹が居た。声に出るのは動揺と疑念。

そんなシロ民達にニンゲンの一人が薄笑いを返しつつ、指を向ける。

「アタリだ。スリーパー、〃サイケこうせん〃。薙ぎ払え」

放たれたのはポケモンへの指示。スツ、と動かされた指先に従う様に強力な光線が走り、無双を誇ったポケモン達を薙ぎ払う。

突然のポケモンバトル開始に、対応出来た者は半数。ポニータがトレーナーを庇い、タマママとマダツボミは逃げ遅れ、それぞれ一撃で撃破されたのだ。生き残ったのは咄嗟に〃まもる〃を指示された三匹だけ……その結果に満足しているのか、いないのか、男は曖昧な領きを打つ。悪くないはないと。

「しかし、足りない。それでは〃伝説〃にすり潰されるぞ。……スリーパー、〃ねんりき〃。まとめて締め落とせ」

「っ! サンド、スリーパーに〃ころがる〃だ!」

手加減の欠片も見えない、押し潰すかの様な連続攻撃。〃ころがる〃で突っ込んだサンドを除いたシエルダーとクラブが地面から浮き上がり、苦しそうに悶え始める。このままでは数秒で落とされてしまおうだろう……だが、そうなる前にサンドの〃ころがる〃がスリーパーに刺さる!

そうサンドのトレーナーが笑みを浮かべ、期待通りにサンドの〃ころがる〃がスリーパーにドスリと当たる。だが、当のスリーパーは何の痛みも感じていないのか、平然と〃ねんりき〃を使い続けていた。「シエルダー! スリーパーに〃みずでっぼう〃」  
「クラブ! スリーパーに〃バブルこうせん〃!」

このままではやられる。そう確信した二人のトレーナーは、サンドの二次攻撃を待たずに自身のポケモンに指示を飛ばす。例え接近出

来なくとも、遠距離系の「わざ」でスリーパーを落とそうと。

その目論みは——半分上手くいった。ポケモン達は棒立ちのスリーパーに水と泡をぶつける事に成功したのだ。しかし、やはりスリーパーに目立ったダメージは見られない。多少鬱陶しそうにするだけで、「ねんりき」を止める事すらしなかったのだ。

「スリーパー、その二匹に止めを差せ」

「サンド、行けえええ！」

サンドの二回目の「ころがる」がスリーパーに刺さる——その寸前、「ねんりき」によつてシエルダーとクラブがガツンツと激しくぶつけ合わされ、両者共に目を回して戦闘不能に陥ってしまう。これで、残るはサンドのみ。

その頼みのサンドは二回目の「ころがる」に成功し、一回目より激しい体当たりをスリーパーに敢行。僅かだがよろめかせる事に成功した。そしてそのまま第三次攻撃への準備へと走り抜ける。

「ふむ、「めいそう」を事前に積んでいたのが功をそうしたな……さて」

「何……？」

「めいそう」を事前に積んでいた。そうポツリと溢す男にサンドのトレーナーの注目が向くが、男はその注目に薄笑いを返すだけでそれ以上は何も言わない。

疑念、不審、推測。

シロ民達の脳裏に様々な思考が走る中、サンドの三回目になる「ころがる」がスリーパーへ向かい出した。……「ころがる」は成功する度に威力が上がり、最終的にはロマン砲じみた火力を發揮する「わざ」。その三回目ともなればそれなりの威力がある。当たればそれなりのダメージが見込めるが……

「スリーパー、「ドレインパンチ」だ」

流星に黙って見る気はないらしく、男はスリーパーに指示を飛ばす。向かい討てと。

その指示に男と似たような薄笑いを浮かべ、スリーパーは持っていた振り子を握った拳の中にしまいこむ。そのまま腕を引いて、転がっ

てくるサンドを睨み、そして。激突。

「っ！」

「ふん……」

凄まじい衝撃音と共にぶつかった両者の拮抗は、一瞬。

互角に見えた次の瞬間にはスリーパーの拳が丸まったサンドを押しきり、そのまま殴り飛ばしたのだ。ブンツと空に叩き上げられたサンドは、やがてボールが落ちるかの様に地面に叩き付けられる。その目はまだ回っておらず、闘志に燃えていたが……

「止めだスリーパー、”ねんりき”」

間髪入れずに放たれた追撃によってあえなく意識を刈り取られ、そのままトレーナーに向かって放り投げられた。

「なっ、サンド——!?」

ドスツ、と。想像よりも重い衝撃を受け、サンドは受け止めたトレーナーを巻き込んで地面に転がる。その目に闘志は無く……どう見ても戦闘不能。全滅だ。

「ば、馬鹿な。こんな事が……!?」

「ぜ、全滅? 六匹のポケモンが全滅? 五分も経たずにか?」

「化け物め……!」

たった一匹相手に六匹が戦闘不能……それも僅か数分で全滅したという現実にはシロ民へ動揺が広がっていく。負けた、勝てない、強すぎる、レベルが違う。まるで”めのまえがまっくらになった”かのような感覚に打ちのめされる。

その一方で活気に湧くのはテロリスト達だ。

「良いぞ! やっちまえ!」

「流石ボスだ!」

「ボスが助けに来てくれたぞ!」

手錠をはめられてなお歓声を上げ、男をボスと呼ぶテロリスト達。その様子にはシロ民達の脳裏に一人の人物が浮かび上がっていく。

テロリストの、ボス。まさか、奴が。

「まさか、元シロ民のハツカーか?」

「! 変態から犯罪者に、犯罪者からテロリストになったあの豚か!?

いや、だが……」

「顔が違うぞ。痩せてる」

口から出てくるのはやはり一人の人物だ。シロちゃんに邪な考えから凸を敢行し、ポチネキとSATUMA人に阻止され、敗北。そのまま刑務所に叩き込まれるも脱獄し、今日まで密かに戦力増強と情報戦に励んでいた男。元シロ民のハッカーにして催眠術師、現テロリストのボス。その男だと。

しかし、その男の顔や体型は事前に周知された物とはだいぶ違っていた。具体的にいうと痩せてる。それどころか鍛えてすらいるのだろう。手足は力強く、顔立ちも精悍……とまではいえないが、それなりに鍛えている男の顔つきだ。

——聞いていた話と違う。

敵のボスは豚だと聞いていたのに、会ってみればマッチョだった。そう思わずシロ民達が互いの顔を見合わせれば、男はその顔に似合わないぬ気味の悪い薄笑いを浮かべて告げる。それも仕方ないと。

「……デブだったのかね？ テロリストのボス殿？」

「その呼び名は止めろ。スパイどもが。それに、あんな“伝説”を見れば、少しは鍛えようという気にもなる」

「あんな伝説、だと……!?!」

「この世の……いや、人間の歴史の終わりだ。お前らがそうと知らずに人間を消し去る未来だよ」

「……は？」

何言っただ、フジャケルナ！ そうシロ民から声上がるが、男は薄笑いをより一層強くするばかりで、訂正する気配は見られない。それどころかやはり分からんか、と言葉を繋げてくる。

「ポケモンと人との共存？ 大いに結構！ 今見たように人はポケモンに勝てん。それが最善の道だろう……だが！ お前らはそれに固執するあまり多くの者を見捨てている！ 大事な事に目をつむっている！ 知らず、聞かず、分からぬと逃げ。それが何を招くか考えもせずに！」

両手で天をあおぎ、高らかに歌い上げる様に声を上げる男。その姿



は控え目にいってマトモではなく……しかし、その言葉はどこまでも真摯だった。

「少し考えれば分かる話のはずだ。このまま進めば人はどうなる？ ええ？」

「……ポケモンと、共にある。彼らと共に前へ進む。そのはずだ」  
「違うぞ。ポケモンに食われるのだ」

ポケモンと共に。シロ民の、元を辿ればシロちゃんの願いを男はバツサリと切り捨てる。それは違う。あり得ないと。

狂気に沈んだ、しかし冷静な目でシロ民達を睨み、男は続ける。確かにシロちゃんに従えばポケモンとの友好関係は不可能ではないだろうと。だが。

「シロちゃんが導くのは、人を切り捨てた、ポケモン優位の友好関係だ」

「ポケモン優位……？」

「分かるか、シロ民ども。やはり分からんか。だから貴様らはインベーダーなのだ。人間を辞めた化け物が。その怠慢と狂信が人、人間の歴史を、人類史を、忘却の彼方へ追いやるのだ！」

「……？」

「彼女は、不知火白は人など見ていないぞ？ 長く調べ、観察したからこそ分かる。彼女は人に、ニンゲンに関心がない。関心事は常にポケモンのみだ！ ……まあ、当たり前だな。彼女が一番ツライときに隣に居たのは人ではなく、ポケモンなのだから」

そこで男は言葉を切り、ギョロリとシロ民達を見回す。そうして口から出てくるのは一つの問い。貴様らなら助けてくれた者と助けてくれなかった者、どちらを取る？ と。

「簡単だ。助けてくれた者を取る。信頼する。優遇する！ ……そして、彼女を助けたのは人ではなく、ポケモンだ。……分かるだろう？ 彼女はポケモンを取るぞ。千人の人間を見捨てても、一匹のポケモンを取るぞ、不知火白は。何度でも、何度でも人を見捨てるぞ。彼女にとってニンゲンは、価値がないからな」

「何を、馬鹿な……」

「そう思うか？ 思うだろうな。私もそう思った。……しかし、違うのだ。それでは説明がつかない。普段の行動や言動は勿論、死を初めて向けられたはずの少女が……いや」

疑問符を浮かべるシロ民を置き去りに、そこまで一気に喋った男だった……様子を窺っていた別の男から割り込まれ、口を閉じる。喋り過ぎだと。

「そろそろ仕事をして貰うぞ。サイキッカー」

「……言われるまでもない。スリーパー、『さいみんじゅつ』。細部は私が調節する。やれ」

「くっ……!？」

『さいみんじゅつ』を指示した男はスツと手をかざし、スリーパーは振り子を降り始める。ゆっくり、ゆっくり、独特のリズムで。

これにシロ民は慌てて目や耳を閉じ、辺りへ警戒の声を飛ばそうとするが……もう遅い。ドサリドサリと次々に警察官達が、そしてテロリストまでもが眠りに落ち、崩れ落ちる。そしてシロ民達も強烈な眠気に襲われ……その景色の何が不満なのか男は不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「やはり信仰心の厚いシロ民は人間を辞めているか。私も貴様らも、哀れだな。気づかぬうちに人間ではなくなっているのだから……」

「何を……クソツ……」

自分も含めて哀れだと嗤う男にシロ民は噛み付こうとするが、激しい眠気がそれを許さない。一人、また一人と崩れ落ちていく。

「俺らを倒しても、シロちゃんはお前の物にはならんぞ……!」

「ん？ ああ……そうだろうな」

負け惜しみ。そう自覚しながらもこれだけはと放った言葉は、サラリと流される。どうでもいいとばかりに。

これに驚くのはシロ民達だ。事前情報と違い過ぎる。彼らはシロちゃんを狙う悪質な犯罪者ではなかったのかと。そんな彼らを置き去りに、男はゆっくりと首を振って言葉を繋げる。仕方ない事だと。

「非常に、非常に残念だが、仕方ない事だ。それに、前の私ならともかく今の私にとって彼女は最優先目標ではないし、固執する事でもな

い」

「何っ……!?!」

「勿論、手に入れられるなら好きにさせてもらうさ。私の好きに、使わせて貰う。だが、今やるべき事は彼女の、特異点の確保でも、排除でもない。……戦力を増強し、防波堤を作り、最終的に、決定的なタイミングで、流れを変える事だ」

「そうでもしなければ人の世界が終わるのだからと。薄笑いを浮かべながら男は肩をすくめる。そこに狂気はなく、真摯さと疲れが見えるのみ。」

だが、やはり男はどうしようもなく狂気に落ちていた。

「最早ポケモンの侵食が止まらない以上、ポケモンとの友好関係は必要不可欠だ。それに関しては裏から手を回してやろう。……だが、作られるべきはポケモン優位の世界ではない。人間優位の世界だ。彼女には悪いが、ここは人間の世界だったのだ! ならば、作られるべきは人間優位の世界であるはずだ。残されるべきは我々の世界の歴史だ!」

高らかに人の世界を守るのだと、壮大な事を語るその有り様は狂気に満ちているとしか言いようがない。

だが……男の周りに居る者達は正気であるはずなのに、演説を止めはしなかった。それどころか、もつともだと頷いている。我々こそが勝者であるべきだと。

「さて……諸君らはよく健闘したが、現代兵器の前に敗北した。ポケモンは現代兵器でダメージを受ける。その結果少数のテロリストを逃してしまい、手持ちポケモンは全滅した。当然テロリストのボスは居なかったし、何も聞いてはいない……ここであつたのは、そういう事だ」

「な、に……?」

「そういう事になるんだよ。その為の『さいみんじゅつ』だ。だいたいそうでもなければ、国外勢力を割れないじゃないか」

実際あつた事実と別のストーリーを語る男は、一層笑みを深めるとスリーパーに指示を飛ばす。仕上げの『さいみんじゅつ』だと。

そうしてリズムを変えてスリーパーの振り子が振られ、男が何やら集中し、遂に全てのシロ民が眠り落ちる。その後も暫く“さいみんじゅつ”が続き……やがて一人と一匹が“さいみんじゅつ”を切り上げたとき、そこにあつたのは薄笑いだ。バカバカしいと。

そんな男によくやつたと、共に居たものが声をかける。男にスパイだと言われた者達が。

「今頃あちらは完全に失敗した頃合いだろう。これで現代兵器が効いたグループと、効かなかつたグループの二つが出来る……仕込みはこれだけで良いだろう」

「そう上手く割れると思っているのか？ 割れるのは貴様らだろう」

「口のきき方に気をつけるよ。貴様。……まあ、割れなくともそれでいい。だが、人は信じたい情報を真実だと思ふ生き物だ……割れるだろう」

「そして、割れてしまえば動きは鈍くなり、各個撃破も行える。この島国を制圧し、我々の旗を突き立ててやる日は近い」

「——笑い話だな。『伝説』が目覚めるその日までに、人類は団結しないといけないというのに。誰も彼もまとまらない。まとまる気がない。ああ、残念だ。残念だなあ」

心底残念そうに、しかしどこか嬉しそうに笑う男。ある種矛盾した感情だったが……狂気に沈んだ男からすれば大した事ではない。ただ残念なもの、嬉しいのも真実なだけだ。『伝説』が目覚めるその日までに、全てを間に合わせなければならないのだから。

「さて、そろそろ先に片付けた他国の観客が起きる頃だ。撤収するぞ。次のターニングポイントまで潜む。……おい」

「——了解だ。スリーパー、『テレポート』だ」

『テレポート』。その『わざ』が使われたのか、テロリスト達が突如としてかき消える。後に残つたのは『さいみんじゅつ』に掛けられた人々のみだった……

## ハロウィン企画 魔女っ娘シロちゃん!

——10月31日。

——渋谷スクランブル交差点。

ハロウィン当日となったこの日、日本各地で様々な催しが行われており……その中でもここ渋谷スクランブル交差点は特に凄まじい喧騒の中に包まれていた。

理由はただ一つ。祭りだからだ。

「凄まじい人と喧騒だな……吐きそう」

「人酔いか？ ラムの実でもかじってる。……てか誰か持つてない？

俺も吐きそう」

「やっぱ元来非リアネット民のシロ民にハロウィン警備は無理があるつてー」

「仕方ないだろ。ポケモントレーナーが暴れだしたら警察だけじゃ人手足りないんだから」

「祭りだなあ……」

祭り。それは本来神聖かつ荘厳で、厳粛な物だ。豊穰を感謝し、神々を祀り、ときには供物をもってこの先の豊穰と安定を願う……本来、そういうものである。

しかし、良くも悪くも日本人というのは祭りというのが好きな——あるいは理由がないと騒げない——人種なのだろう。根暗を自覚するネット民ですら祭りとなれば騒ぎに騒ぎ、一時的とはいえ情報戦で勝利するのだから、これはもう種族のDNAに刻まれた宿命だ。

そのせいか時代を重ねる事に荘厳さや厳粛は消滅し、神聖さに至っては欠片も残っておらず……その代わりに年々増えているのは、賑やかさだ。

「にしても煩いな。誰だよ、ドゴーム連れてきてる奴は……」

「ドゴームというよりバクオングだろ。この喧騒は」

「こんな中でそんなの出したら即行捕縛案件なんだよなあ」

「都会のハロウィン。キツイ」

「というかハロウィンって何だっけ？」

「菓子メーカーの陰謀」

さもなければリア充とウエーイ系の巣窟だと、軽く鼻で笑うシロ民は恐らく間違っていない。

この騒がしいハロウィンも元はといえば神聖かつ荘厳で、厳粛な物だった。何せ——古い事なので諸説あるが——古代ケルトを発祥とする収穫祭だ。ついでに大みそかだったり、お盆だったり、悪霊避けだったりする。本来騒げという方が難しい祭りなのだが……何をどう間違ったのか。菓子メーカーのせいか。そこまでして騒ぐ理由が欲しかったのか。そんなにストレスが溜まっているのか。千年変態の歴史のせいか。日本におけるハロウィンは盛大に騒げる物になっている。

簡単にいえば、仮装パーティー。

もつといえば、変態百鬼夜行だ。

「ゾンビ、ミイラ、狼男、フランケンシュタイン、吸血鬼……西洋妖怪の行列だな」

「コスプレも多いぞ。アニメキャラからネタに走ったのまで……お、完成度高い奴発見」

「全く、ここはいつからコミケ会場になったのやら」

前々から準備していた者、やり慣れた者、既製品や有り合わせで場に合わせただけの者……各々の事情や仮装のレベルは様々だが、この場に居る者の過半数が何らかの仮装やコスプレを行っているのに変わりはなく、なんともサブカルチャー発祥の国らしいカオスな光景が広がっていた。

そして特に、というべきか。今回はそのカオスの度合いが酷い。何せ……

「おっ、ピカチュウ発見」

「どこに……いや、あれはピカチュウというより黄色いゴーリキーじゃね?」

「付け耳してるのならチラホラいるし、それぐらいで良いと思うんだよなあ。うん」

「目を逸らすな。あれが現実だ」

「ピカチュウバリエーション多すぎんよおー」

ピカチュウを筆頭に様々なポケモンモチーフと分かるコスプレをしている者が居るのだから。その上小型系とはいえポケモンを連れ歩いている者も多く、そのカオス度合いは例年を大きく上回っていた。

そして、そんな状況にもなれば当然トラブルが発生する。

「おーい。地点口の二でまたポケモン絡みのトラブルだと。俺らの方で対応してくれとき」

「またあそこかよ。だからグリッドはアルファベットとアラビア数字で割り振っておけと……」

「今更言っても仕方ないだろ。じゃ、行ってくる」  
「行てら」

ポケモン絡みのトラブル。それは対応を誤るか、あるいは人員の到着が遅れば戦術核兵器クラスの被害が出かねない非常に危険な物。だからこそ、今年のアロウインではポケモンのスペシャリストであるシロ民が警備に駆り出され、対応させられていた。万が一でも被害を出してはならないと。とはいえ……

「つたく、ポケモンの面倒みれないなら資格返納しろよ、ゲットするなよと。資格取得の難易度上げるべきだろ、これ」

「それな」

「つても、今でも結構キツ目なんだよなあ。これ以上やるとポケモンへの理解が低くなって、不理解が広まるし……」

「分かる」

「あゝーめんどくせ。もう意識高い系トレーナー様にやらせろよ……」

「ほんそれ」

「ゆうてアイツらクソシヨボじゃん。鎮圧も考えるならやつぱ俺らしか……あーダルい」

「そやな」

面倒、キツイ、ダルい……流石はリア充イベントクソ食らえなネット民であるシロ民達というべきか。望まぬ労働への不満は凄まじく、本格的な警備開始から一時間も経つ頃には愚痴も不満もタラタラで、や

る気やモチベーションは超低空飛行。控え目について頼りになる状態ではなかった。

だが、それは前もって予測されていた事。ならば、当然手は打つてある。

「しかし、これをパーフェクトクリアしないとシロちゃんのハロウィン姿を拝めないという現実」

「悪魔だわ。このやり方悪魔のそれだわ。しかも釣り餌が上等過ぎるから……」

「釣られるクマー」

「どうしたらオタクが動くか、よく知ってるよなあ。ある意味ご恩と奉公の関係性だぜ」

「オタクは千年前にも居た……?」

シロちゃんのハロウィン姿。それは今回のオペレーションに参加し、シロ民が仕事を完璧に仕上げたときのみ配布される超レアアイテムだ。それは写真だとも、絵だともいわれるが……

なんにせよ、こういう形になる物が殆んど出回らない推しのアイテム。それも限定品。シロ民としてはなんとしても、それこそ身内から殉職者を出そうとも手に入れたたいアイテムだった。

「つと? あれ、トラブルか?」

「んあ? ……おいおい。まさか、こんな人混みでポケモンバトルする気か? 死人が出るぞ」

「鎮圧対象だ。手早くやるぞ」

ハロウィンの夜。犬から狼となったシロ民達に、手加減の文字は無。トラブルは起きる前に、あるいは起きて直ぐに鎮圧消火される。

——全ては限定レアアイテムの為に!

人の業であった。しかし、その業のおかげで被害の大きいトラブルは無かったのだから、一概に悪いといえない。

……とはいえ、件の少女は前日に着せられた複数のハロウィン衣装姿が描かれたブロマイドが、大量に配られていくのを死んだ目で見送る事になるのだが……それはまた別の話。

ちなみに、彼女が何を着せられたかだが——それは時間の針を戻さ



ねばなるまい。

……  
……  
……

——10月30日

——久里浜某所

——伊藤家別邸

ハロウィン前日となったこの日、私……不知火白はユウカさんに呼び出されていた。なんでも大事な用があるから指示した部屋まで来て欲しいと。

それに私は少し妙な話だとは思いつつも、これといって警戒もせず  
に指示された部屋に向かい……入った瞬間察する。罨だと。

「来たわね、シロちゃん」

「あ、お久しぶりですねえ……」

「ん……」

部屋で待っていたのはいやにギラギラとした目のユウカさんと、疲れきった様子のカオリとサキのアイドル二人組……そして、大量の服。

もう、それだけで私がこれから何をされるか分かってしまうというもの。私は慌てて後ろに下がろうとして……既に扉が閉められている事に気づく。どうやらユウカのマネージャーさんが外からソツと閉めたらしい。まずい、逃げられない。

「わ、私に何か用ですか……？」

大量の服……それもよく見ればドレスだのネコミミだの、間違いなくコスプレに分類される品々を視界から追い出しつつ、私は会話を試みる。例え無駄だとしても、先延ばしにするぐらい出来るだろうと。着せ替え人形なんてごめん被ると。

しかし、残念な事に目がギラついたユウカさんにはこうかがないみたいだ……

「ハロウィンよ。シロちゃん」

「はい。外国の、収穫祭ですよね？」

「……ええ、そうね。でも、日本ではまた事情が違うの。……分かるわよね？」

「はい、いいえ。分かりたくないです」

言いたい事は分かる。私にコスプレしろと言いたいのだろう。まあ、確かに今の私は客観的に見てそれなりの美少女なのだから、この手のイベントに参加し、姿を見せ、愛想を振り撒き、新たなファン獲得に動くのが道理と言われれば道理だ。

しかし、しかしだ。分かりたくない。やりたくない。だって、気恥ずかしいし——つい忘れがちになるが、私はこれでも男なのだ。元とはいえ野郎なんだ。だいぶ自覚が薄まってしまったし、ポケモンが居るならもうどっちでもいいやとか思ってるが、それでも根っこの部分は野郎のままなのである。少なくとも普通の女の子とは嗜好がだいぶ違うし、性的対象なんかも元のまま。

そんな私が、あ、あんなフリフリしたのやらネコミミを着けて写真を取り、それを無作為にばら蒔く？ 却下だ。却下！ そんな事をアツサリ受け入れては男としての自覚が今度こそ、完全に、不可逆的に崩壊する。そうなれば私はただのポケモン好きの女の子になってしまう！ もし、どうしてもというなら……

——ポケモンバトルで私に勝つてから言え！

そうモンスターボールを突き付けようと、モンスターボールを収めている腰のベルトに手を回そうとして……ガシツとナニカに足を捕まれる。

「ヒュッ——!？」

突然の事に思わず女の子そのものの悲鳴を上げ、バツと足元を見てみれば……そこには私の足を掴むゾンビ染みたカオリの姿があった。充分以上に美少女で、普段は元気一杯な少女がゾンビ染みているのは恐怖しかない。

助けを求めて彼女の相方を見てみれば……こっちもゾンビ染みている。寝ているのか気絶しているのか、一切の動きがなく、とても頼れそうにない、普段は冷静沈着な少女の姿が。

「ど、どうかしましたか？ カオリ？」

「う、うう……」

私が自分でやるしかない。そう諦めてゾンビとの対話を試みてみたが、やはりマトモな反応は帰って……いや。

「お願いします。シロちゃん。コスプレを、して下さい……」

「いえ、その……」

「テレビに出るとか、コンテストとか、そういうのは私達がやるので、形だけでも、写真だけでいいので……」

息も絶え絶え。そんな有り様で私に五体投地モードキ——あるいは止まるんじやねえぞ——を敢行するカオリの姿に、思わず私は心が揺らぐ。忙しい仕事や学業の間にポケモンの話を聞いてくれ、コンテスト方面での活動もしてくれている……頼りきりの、友人といつていい少女がここまでしているのだ。断るのは、悪い。

だが、私がコスプレした程度で彼女達が助かるとも思えないのだが……

「えっと。ちなみに、それでカオリさん達は助かるんですか？」

「はい。助かります……」

「具体的にいうと、シロ民の煽動とかの手間が消えますね。ええ。後には不必要なミスティアススの消去、そこからのギャップ萌えや緩いとはいえ支持獲得に広報、話題性獲得等々。やってくれると非常に有り難いです。……私は、疲れたので」

む、うう……どうやら助かってしまうらしい。あろうことかゾンビ染みているカオリだけでなく、激務から寝落ちしていると思っていたサキからも肯定——その後また気絶モードに戻ったが——されてしまった。私の気恥ずかしさ一つで、彼女達が助かる事が。

もうこうなってしまうと断るのは悪いし、コスプレぐらいならという気にもなってしまう。……そんな私の内心を察したのだろう。ユウカさんがズイツと一つの服を差し出してくる。これは……

「なんか、魔女っぽいドレスですね」

「製作者曰く純真魔女っ娘ドレス……だそうよ。まあ、先ずはベターなところからね？」

先ずは、という事はこの後も幾つか着せ変えられるのだろう。そん

な事を察しつつ私は力なく頷き、ユウカさんからフリフリの服を受けとる。……なるほど、これは確かに魔女っ娘ドレスだろう。ハロウィンイラストでよく書かれるタイプの衣装だ。露出も少ないし、これぐらいなら着てもいいかな……？

「で、では着替えますので、えつと……」

「そこに仕切りがあるわ」

「……準備、いいですね」

「私だもの」

そうですねーと力なく返事を返し、その間にカオリが足を離してくれたので、私は仕切りの中へと入って着替え始める。

早着替えこそ出来ないが、ユウカさんのところに来てからこの手のフリフリの服の着方にも慣れてしまったので……む、これ案外良い生地使ってるな。暗色系を使って落ち着いた感じでまとめられてるし、普段使いも行けそう。お、パーカーも付いてる……ネコミミパーカーだけ。んんっ、まあ、ともかくそう時間を掛けずに着替え終われた。いよいよお披露目……いささか以上に気恥ずかしいが、待たせるのも悪い。私は潔くパツと仕切りを払い、三人に着替えた姿を見せる。「おお、流石シロちゃん。可愛い……ねえ、やっぱりうちに入らない？一緒にコンテストしない？」

「そうだね。可愛いと思う。けど、カオリはいい加減諦める。……ユウカ先輩？」

「……………ハッ！ な、なんでもないわ。いえ、可愛いわよ。シロちゃん。とつても！」

三者三様の言い方で可愛いと、そう言ってくれる女性陣。それは嬉しいのだが……うう、そういう反応をされると余計に恥ずかしくなる。そのせいで頬に血が上ってしまおうし……思わずネコミミパーカーを被ってしまった。

ここは罵ってくれるぐらいの方が元男としては気楽なだけけど、なんて、そんな事を深くフードを引っ張りながら思う。けど。

——悪い気はしない。うん。

……そう、ちよつと気分よくしてしまったのがバレたのか。ユウカ

さんとサキが素早い動きで複数回写真を取り、ポーズを指示され、それが終われば更にズイツズイツと追加の服を手渡そうとしてくる。

半ば諦めてそれを手に取って見れば……………なんか、こう、微妙に露出が多い。ハッキリ言えば、エッチだ。

「ユウカさん、これは…………？」

「ん？ ああ、それはサキユ……………ンンツ！ あれよ。吸血鬼ね。きつと。ハロウィンだもの」

ナニカ言いかけた様に聞こえたが……………そうか、吸血鬼か。確かにそういうわれればそれらしい装飾がチラホラと見える。……………にしてはいささか露出が多いし、この尻尾の先がハートマークになっているのは疑問だが。

——まあ、良いか。

別に真っ裸で外に行けと言われてる訳ではないし、これぐらいなら気恥ずかしいだけで済む。これで彼女達の仕事が減るなら安いものだろう。……………ついでに、元男のクセに穀潰しという状況からも脱却だ。うむ。

「では、着替えて来ますね」

「ええ、ええ」

何故か鼻の辺りを手で隠すユウカさんに見送られ、私は仕切りの中に逆戻り……………

——まあ、これとあと数枚で終わりにしてもらおう。うん。

そんな考えが甘かったと知るのは……………吸血鬼コスだと言われた、露出多めの服をお披露目した後。鬼気迫る彼女達に押されに押され……………結局、私は一通りのコスプレをさせられる事になってからだ。

ちなみに、そのコスプレは幾つかがお蔵入りとなったものの、殆んどがプロマイドカードに加工され、シロ民を中心に外へとばら撒かれる事になったのは……………また、別の話だ。

## 第27話 返しの一手

ポケモンリーグの設立が間近に迫りつつある今日この頃。私はポケモンに詳しい人間としての責務を果たす為に、伊藤家別荘に用意された自室で無数の書類と向き合っていた。

時刻は午前10時。まだ朝といっていい時間で、私からしてみれば少し早起きしての作業だが……だからといって劇的に何かが変わる訳ではない。体調も、そして書類の内容も。

「むー……」

口から出るのは迷いから来る唸り声。原因は勿論目の前の書類、そこに書かれた案件のせいだ。それは例えばポケモンの生態に関する事であり、ポケモンバトルに関する事であつたりする。

それらの殆んどは報告書……つまりは終わった事を報告しているだけなのだが、中には私に、世間ではポケモンの第一人者だと認識されている私に意見を求めて来る物もあるのだ。例えばポケモンの危険等級や、犯罪利用の可能性だとかがそれだろう。

「私に聞かれてもなあ……」

個々のポケモンの危険度は——最近見易さなどがアップグレードされた——ウエキ見てどうぞ、としか言いようが無いし、犯罪利用の可能性に関しても同じくだ。

ポケモンはポケモン。トレーナー次第で様々に変わる存在で、それを一般化して言えと言われても困る。

——まあ、この人達もマトモな答えなんか期待して無いだろうけど。

真摯に悩んでるのは全体の一、二割程度。後は私をなめ腐ってるか、取り敢えず送つとけ的な気配が漂っていて仕方ない。恐らく、あちらとしてはポケモン第一人者の私に聞いたという大義名分が欲しいだけなのだろう。

ユウカさんや会った人に名前を使われるならともかく、会った事もない、ポケモンを新たな利権としか見てない人達に集まられても……嬉しくない。嫌になる。

「はあ……これもポケモンリーグの為、かあ」

ポケモンリーグ。これが無くてはポケモンバトルの大会を開けず、個々のバトルが過度になったときに仲裁出来ない。他にもこれが無ければ話にならない事は山程あり、なんとしてもポケモンリーグを早期に設立しなければならなかった。

だが……その為にはあちこちに頭を下げ、協力を取り付けなければならぬ。ポケモンリーグの巨大さを考えれば、政界は勿論、財界や旧家の協力も必要だろう。あるいは海外からの理解も必要かも知れない。

そう、お願いしなければならぬ場所は幾らでもあり、かといってこれを面倒くさがって強引に進めれば妨害を受けかねず、今私が入っているような細かな作業が山程積み重なってしまうのが現状だった。

「取り敢えず、真面目に聞いてきてる人達の中から……」

片付けよう。そう思って書類を選別しようと手を伸ばし――バンツ！ と勢い良く扉が開かれる。

何事かと視線を投げれば、そこにはバタフリーのトレーナーであるカオリが肩で息をしながら立っていた。

「たい、です……」

「？」

「大変です！ シロちゃん！」

一度喋るのに失敗し、その後は大変なんですと焦った様子を見せるカオリに、クエスチョンマークを浮かべつつ、私は腰のモンスターボールに伸ばした手を元に戻しながら対応する。取り敢えず落ち着いて？ と。

「何があっただんですか？」

「えっと、あの、あれです！ シロ民の人達が！」

「？ 彼らは何かしましたか？」

シロ民。それは所謂私の……その、ファンの人達の通称だ。今はネット上だけでなく関東で実際に活動している人達もあり、その数は千人を越え、その全てがポケモントレーナー。更にその過半数が人にポケモンの事を教えられるエリートトレーナー級の腕前という頼もし

い人達だ。

正直自分にファンが居るといふのは恥ずかしいのだが……これもポケモンのおかげだろう。

で、その頼もしいシロ民がいったいどうしたのだろうか？ 何かやらかすとも思えないが……いや、そういえば確か今日は――

「襲撃されたそうです！ 沢山の人が病院に運び込まれたって！」

「！ それは、どういう事ですか？」

「えつと、えつと……あ、さ、サキイ……」

「はいはい。詳しくは私から説明するから」

シロ民が襲撃され病院に運び込まれた。その報告にどういう事かと詰め寄り、後から来たピカチュウのトレーナーことサキが補足を入れ始める。事件は特殊弾頭の輸送中に起きたのだと。

「本日早朝、特殊弾頭輸送部隊が襲撃された。それも自衛隊と警察、両方の車列が。襲撃したのは以前から問題視されていたテロリスト集団」

「テロリスト」

テロリスト、か。テロリストと一口に言っても色々居るが、ここで言うテロリストは……なぜか分からないが私をつけ狙い、ポケモン反対の声を上げている人達だろう。正直関わりたくもないのだが……しかし、そうか。遂に直接的な妨害に出たという訳か。

「それぞれの車列で護衛部隊とテロリストが激しく衝突。相手がポケモンを使用してきた場合を想定して、民間協力者として同乗していたシロ民達もこれに参戦した。けど……」

「けど？」

「その、ここから情報が錯綜してて、どうもシロ民を含めた警察車列の護衛部隊は敗北したみたい。自衛隊車列はテロリストを全員捕縛した様みたいだけど……」

敗北？ ポケモンを持ったシロ民が、テロリスト相手に敗北？ それは、有り得ないだろう。ポケモン相手に銃火器は通用しない。だからこそ特殊弾頭なんてその場しのぎの物が開発、輸送された訳であつて……にも関わらずシロ民が敗北？ 銃に？



……いや、待て。まさか——!

「サキ、まさか、テロリスト側もポケモンを?」

「うん。自衛隊側ではテロリストがポケモンを出してきたから、偶発的なポケモンバトルが発生。シロ民が勝利した。……けど、警察車列の方は情報が錯綜してる」

「? どういう事ですか?」

「ポケモンが居たとも、居ないとも。勝ったとも、負けたとも……とにかくその場に居た人達の意見がバラバラ。そしてポケモンは銃に撃たれて傷ついたとも証言してて……」

「……はい?」

ポケモンが、銃に撃たれて傷ついた? それは有り得ない。ポケモンが銃火器どころか戦車砲にも耐えうるのは既に確認された事実だ。

あくまでも秘密裏に行われた実験だが、あのコイキングですらアサルトライフルの弾丸を弾いたんだぞ? イワークに至っては戦車砲による一撃が直撃したにも関わらず、全くの無傷で平然としていた程だ。直接見てはいないが——というか現場に居たら止めに入っている——記録映像を確認したから知っている。ポケモンは銃では倒せない。これは覆しようのない事実だ。

だいたい、落ち着いて考えれば分かる話だろう。『はいこうせん』の一撃に耐えられる生物が今更銃ごとで傷つくはずがない。それが傷ついた? それは……

「何の、冗談ですか?」

「ひうつ……」

「っ——冗談じゃ、ない。そういう報告が、上がってる」

「……………そう、ですか」

「うん」

質の悪い冗談。そう思いたいが、残念ながら違うらしい。そうなるど、これはどういう事なのだろう? 銃で傷ついた……それが真実だと? 自衛隊の検証では不可能だったのにな?

……あるいは、何か特殊な弾丸が使われたのか? 日本政府が非殺傷の特殊弾頭を開発した様に、テロリストを支援する団体が殺傷力の

ある特殊弾頭を開発した？

——可能性は、ある。

だがそんな事が可能なのか？ もしそうならその銃弾は戦車砲以上の威力があるか、ポケモンの生体バリアを貫通出来るという事になる。それは、いささか現実的ではないのでは？

いや、というか、そもそも誤認という可能性は？ ポケモンバトルでやられたのに、銃でやられたと誤認した可能性は？

——分からない。

分からない。分からないな。

私は現場を見てないし、その場には居なかった。ここで考えても出てくるのは推測だけで、一連の流れは想像する事しか出来ない。襲撃、戦闘、敗北。そして輸送中の特殊弾頭を奪われ……いや、待てよ？

「サキ、輸送中だった特殊弾頭は？ 特殊弾頭は、全て持ち去られたんですか？」

「んっ、と……ううん。そんな話は聞いてない。ここに報告を入れた人は、そんな事は言わなかった。たぶん、無事だと思う」

「……襲撃されたの？」

「それは……確かに、変。言い忘れただけかも」

言い忘れ。確かにそれはあるかも知れない。相手も人間だし、どんな状況であれヒューマンエラーは発生しうる。だが、本当にそうだろうか？ この襲撃、何かが妙だ。

具体的に何が妙なのか聞かれると困るのだが……何か、こう、モヤモヤする。重大な何かを見過ごしてしまっている様な、そんな感覚が。

『物事には目的と手段がある。これを間違っつてはいけない。それは作戦立案でも同じ事。良いか、シロちゃんや。これを取り違えてはならぬぞ』

『目的と、手段』

『そうじゃ。例えば……そう、嚴重に守られた敵拠点を攻略したいでしょう。これが目的じゃな。であれば手段は何でも良い。バカ正直

に真っ直ぐ行っても、迂回しても、夜間に忍び込んでも良い。空から行っても構いはせぬし、ありったけの砲弾で更地にしてやっても良い。しかし……もし目的と手段を取り違えると酷い事になる』  
『？』

『そこを攻略する為に前へ進んでいるのに、いつしか前に進む事そのものが目的にすり変わったとき、他の方法は試せなくなる。前に進む為に前に進む。そんな間抜けを晒してしまう。……別に迂回するなりなんなり、やり方が他にあるにも関わらず、な』

『お爺ちゃん。その、よく、分からない』

『ん、む……例えが悪かったか。そうじゃな、他の例えをするなら――』

思い出したのは東郷おじいちゃんの戦術講義。目的と、手段。

そうだ、彼らの目的は何だ？ なぜ襲撃という手段を取った？ 特殊弾頭を奪う為？ それとも――

「サキ、今すぐ連絡を。特殊弾頭が奪われたかどうか、上に確認して。

……はい、私のスマホ。ロックはかけてないから。早く」

「え、あ、うん。……誰に連絡すればいい？」

「ん……まずは、ユウカさんに」

「了解」

戸惑うサキに私のスマホを押し付け、なぜか絶句しながらスマホを操作する彼女を視界の端に見つつ、もう一度良く考える。

テロリストの目的が特殊弾頭の奪取なら別にそれでいい。確かにあれは画期的な物だし、トレーナーがポケモンに頼らず状態異常を起こせるという面白いアイテムだが……奪われて致命傷になる物でもない。せいぜいが手数を増やし、こちらに手間を強要させる程度のアイテムだ。使つてくると分かっていれば対抗策は幾らでもある。

――けれど、そんなものに興味なんてなく、別の何かが目目的だったなら。

つまり、襲撃し、奪取する事が目的ではなく、手段だったなら。襲撃はあくまでも手段。奪取も手段。目的が別にあったなら……

――そうか、これか。違和感の正体は。

全く、落ち着いて考えれば分かる話だというのに、たどり着くのに時間がかかってしまった。やはり、ポケモンがやられたというのは結構なシヨックだったらしい……

「あ、ユウカせんぱ——はい。すみません、サキです。シロちゃんではありません。ゴメンナサイ。……いえ、違います。そんなつもりは、全く。……はい、はい。それは覚悟しています。……はい、実はシロちゃんが聞きたい事があると……はい。はい。そうです。是非ユウカさんに聞きたいと、シロちゃんが——」

「き、聞いてない。わたし何も聞いてない……」

なぜか顔を青ざめたサキと、ナマハゲでも見た子供の様にプルプル震えるカオリを見つつ、私は結果を待つ。

仮に特殊弾頭が奪われているのなら、その目的は大方特殊弾頭を使用したテロだろう。だが、もし奪われていないのなら……その場合は、かなり厄介だ。

「はい。有り難うございます。シロちゃんに必ず伝えます。……はい。それは、勿論。……はい。はい。了解しました。では、失礼します」

「——どうでしたか？ 特殊弾頭は、奪われてましたか？」

「奪われてはいる。ただ、ホンの数発が奪われただけで、非殺傷という事もあってさほど問題にはならないと考えている……らしい」

「……なるほど」

それは厄介ですね。そう吐き出した私はどうしたものかと頭を捻る。これは、一番分かりにくいパターンだ。

特殊弾頭は奪われている。だが直接使用してどうこう出来る数でもない。警察と自衛隊の車列を同時襲撃して、片方は成功しておきながら、結果がこれ？

——有り得ない。

それだけ奪うのが限界だったという事はあるまい。同時襲撃するような手際の良さがあるのだ。予備のトラックの二台や三台は用意出来たはず。だがそれがなかったという事は……彼らにとって特殊弾頭はオマケだったのだろう。本命は別にあった。

——それは、何？

襲撃、奪取。これらはあくまでも手段。目的は別にある。そしてその目的に特殊弾頭は必須ではない……ならなぜ輸送部隊を狙った？ 特殊弾頭がオマケなら、襲撃するのは別のところでも良かったはず。なぜ輸送部隊を狙った？ 輸送部隊でなければならぬ理由があるとしたら、それは何？

「なぜ、輸送部隊を襲撃した……？」

「？ シロちゃん？」

分からない。全く分からない。というよりも絞り切れない。候補が無数にあるのだ。極論ムカついたから、なんてのも目的になっってしまう。

——落ち着け、私。冷静に一つずつ詰めるんだ。

ここは、英語でいうところの Why done it? も考えてみよう。何故それが成されたのか？ 犯人の動機は何か？ その辺りからも考えてみればどうだ？

「ポケモン、反対……目的？ 違う。これも手段」

テロリストはポケモン反対を掲げ、ポケモンを排斥する為に死力を尽くしている。普通に考えればテロリストの目的はポケモンの排斥、排除だ。

なら Why done it? はポケモン排斥の為。その一手だと仮定したら。今回の目的は……いや、今回の襲撃を手段として、何を得たのか？

——今回ののはあくまで一手。一手でしかない。更に先を読まなければ……

まるで将棋だな。腕の良い打ち手と将棋をやってる気分だ。相手の一手から次の一手を予測し、それに対抗する一手を打たなければ負ける……神経が磨り減る戦いだ。

しかし、今回の一手がどんな一手なのかが分からない。間違いなく重要な一手だというのは分かるのだが……それがどんな意味を持つのか分からない。これは、一番マズイぞ。気づいたらいつの間にか王手をかけられていた——なんて可能性も出てしまう。

「うー……うー……！」

「し、シロちゃん……？」

「だ、大丈夫……？」

「ぬー……」

思わず唸り声が出てしまい、アイドルズに反応されるが……言葉を返す余力がない。読まなければ。相手の思惑を全て——いや。

『物量の差というのは、残酷じゃ。どんなに精強な兵を揃え、どんなに素晴らしい作戦を立てようとも、圧倒的な物量の差には負けざるを得ん。良くて引き分け、時間稼ぎ。それが限界じゃ』

『……島津の退き口』

『ふふっ、そういう特例もあるがの。だがあれも勝ちというのは……いや、勝ちではあるが。少なくとも殲滅勝利は難しからう。いつだって数の多い方が強いものよ。基本的にな』

物量の差。そうだ、こちらはあちらよりも駒は多いんだ。これを利用しない手は無い。勿論油断すれば敗北する可能性があるから、決して油断は出来ないが……あえて今回の一手をノーガードで受け、物量の差を生かして無理矢理殴り返す。そんなノーガード戦法も可能ではないか？

——そうだ、相手の一手を、思惑を、読みきる必要なんてない。策ごと踏み潰せばいい。

戦術としては下策も下策だが……戦略的に見れば、局所的敗北は許容範囲だ。最終的に勝てるのなら。

その為に必要なのは——大きな力、殴り返す一手。

「——うん。お爺ちゃんに、来て貰おう」

「お爺ちゃん？ でもシロちゃん……」

「カオリ、そつちじゃなくて、ほら、ね？」

「ああ！ SATUMA人の！」

「……カオリ、シロ民の思考に染まってない？」

取り敢えずお爺ちゃんに来て貰って、アドバイスを貰おう。可能ならポチにやったようにポケモンを鍛えて貰うのもいい。所謂「育て屋」だな。これで戦力を確保出来るはず。

あとは……ポケモンリーグの設立を急ごう。ついでに独立行動権を握りたい。今回の一件、ちゃんとケジメをつけたいし。

「……うん、勝てそう」

何だか不安そうな、悲しそうなアイドルズに横目に、私は鼻歌を歌い出す。一時はどうなるかと思っただけど、気分は上々。勝てる戦いなら気分もそう悪くないし、ポケモンを排斥しようとする人達を片付けられるかもしれないのだ。

——そうなれば、人とポケモンの繋がりはより加速するはず。

そうなったら何をしよう？ ポケモンバトル全日本大会？ 悪くない。同じくコンテストでもやるのもありだな。

そう楽しい未来に思いをはせながら、私はスマホを取り出してお爺ちゃんに連絡を取る。お爺ちゃんにもポケモントレーナーになって貰おう。そう思いながら。

「——もしもし、お爺ちゃん？ うん、私。シロだよ。……え？ ポケモン捕まえた？ たぶんあぶそる？ え、アブソル!? ホントに!!」

予想外の情報に思わず驚きと喜びの声を上げ、祖父にオモチャをねだる子供の様に言葉を繋げてしまう。そんな私にアイドルズが驚きと微笑まじげな視線を向けてくるが……うう、今はポケモン！ アブソルの事を聞くんだけ！ 恥ずかしがるのは後！

「——うん、うん、うん？ 真剣で、アブソルとサシでやり合った？ 勝った？ 良い勝負だった？ お爺ちゃん、なに言ってるの……？」

ちよつと突拍子もない話を聞きながら、思う。やはり、ポケモンは良い。ポケモンが広まれば、もっと楽しくなるはずだ、と——

## クリスマス企画　メリークリシミマス

西暦20XX年。クリスマス。

とある集団が都内某所の広場を占拠した。

降り続く雪の中、たった一年間の平穏は終わった。

そして、現状で唯一の対抗戦力であるシロ民達は――二つに分かれていた。

「我らがシロちゃんに忠勇なるシロ民達よ、今やリア充の半数が我らがポケモン化の変化に付いてこれず時代遅れとなった。この輝きこそ、我等シロ民の正義の証しである」

都内某所の広場を占拠した、背丈や格好すらバラバラな集団。共通点といえば首もとの白いチョーカーぐらいしかない集団の前で、軍服を着た老け顔の坊主頭が何やら熱く語っていた。まるで演説をするかの様に。

「決定的打撃を受けたリア充に如何ほどの戦力が残っていないかと、それは既に形骸である」

身振り手振りを交え、聴衆に語りかける坊主頭。その目には異様な熱量があり……またそれを聞く者達の目もまた、異様な熱を持っていた。そう、復讐心にも似た熱を。

やがて坊主頭は息を吸い、バツと手を振って声を放つ。

「敢えて言おう、カスであると!!」

力強く、ハッキリと断言する。敵は弱いと。

その言葉に揺らぎはなく、ただ確信のみがあった。思わず信じてしまふ程の真実があったのだ。

「それら軟弱の集団が我らシロ民を討つ事は出来ないと私は断言する」

力強い口調から一転。落ち着いた様子で、当たり前前の事を語るように真実を示し、一度言葉を切る。

そして坊主頭はサツと聴衆を見回し、再び口を開く。

「人類は我等選ばれた優良種たるスーパーマサラ人化した超人に管理運営されて、はじめて永久に生き延びることが出来る。これ以上クリ



スマスなどという、非リアを苦しめる下らない行事を続けては人類そのものの存亡に関わるのだ」

少々事が大きい、というかイマイチ筋が通っているかすら怪しい事を語る坊主頭。しかし、聴衆はその変化に気づかなかつた。先程まで当たり前前の事を言っていたのだ。ならばこれも当たり前前の事である。

何より……クリスマスという行事は、彼らにとって不要な物だつた。

「リア充の無能なる者どもに思い知らせ、クリスマス中止の為に我らシロ民は立たねばならぬのである！」

グツと拳を突き上げ、坊主町は演説を打ち切る。クリスマス中止の為に立てよシロ民！ と。

それに答えるのは同じ思いで集まったシロ民達だ。彼らも拳を突き上げ、思い思いの声を上げる。

クリスマス中止！

今年こそクリスマス中止を！

ジークシロちゃん！

熱狂は絶頂に達し、怒号となって辺りを支配して——それを先頭に立った坊主頭が止めようとした……その瞬間。坊主頭の視界に影が差した。

「待てい！」

制止の声！

突然響いたその声に、聴衆達も声を上げるのを止めて辺りを見渡す。どこだ？ どこから声がしたのだ？ と。

「力と力のぶつかり合う狭間に、己が醜い欲望を満たさんとする者よ、その行いを恥じと知れッ！ 人、それを……外道という！」

混乱の中にあるシロ民達を置き去りに、声は続く。熱い魂でもって、熱い言葉を投げ掛けて。

その先を見れば……おお、ゴウランガ！ なんと近場にあつた街灯の上に人影が見えるではないか！ シロ民達の上を取る姿は実際ニンジヤめいたアトモスフィアを感じる！

「何奴!？」

「貴様に名乗る名前は無いっ!」

思わず坊主頭が人影に誰何すいかの声を上げる。だが人影はそれに答えて名乗りを上げる事はせず、とああああッ! と威勢よく街灯から飛び降り、見事に着地。魂の熱さは戦士のそれだが、その動きは実際二ンジャだ!

その身のこなしを見て、ならばと坊主頭は襟をただして人影と向き合う。そして両手を合わせて――オジギ。

「ドーモ、エリートシロ民です」

オジギをするのだシロ民。格式ある伝統は守らねばならぬ……

そう思ったかは定かではないが、坊主頭は綺麗なアイサツをしてみた。瞬間、坊主頭の背後に爆炎が上がる! おおゴウランガ! これはオモチヤによる物ではない。間違いなくポケモンの“わざ”である“ほのおのうず”を改良した物だろう。どうやら近く居たコーデイネーター志望のシロ民が気を効かしてエフェクトを入れたらしい。

決まった。完全に決まった。見事なアイサツだ。そしてアイサツをされれば、返さねばならない……! 古事記にもそう書いてある。

「――ドーモ、エリートシロ民〓サン。シロちゃん親衛隊です」

パンツと手を合わせ、綺麗にオジギ。瞬間、背後に降り注ぐ無数の稲妻! エレクトリック! アイドル二人組のパフォーマンスめいたそれは実際スゴイ。

「なぜ止める! 親衛隊! クリスマスは中止されるべきだ……お前もそう思うだろう!？」

アイサツは終わった。ならばとシロ民の一人が親衛隊に声を掛けた。なぜ止めるのかと。クリスマス中止を思う心は一つのはずだと。

その声は次第に大きく、増えていく。クリスマスを中止せよと。

この日の為にシロ民達は準備し、結集したのだ。今更退けはしない。坊主頭なんて演説の為にコスプレまでして、声真似演説の練習もしたのだから。

だが、そんな声に親衛隊は答えない。いつの間にか暗闇から現れた

り、空から現れたりして数が増えてはいたが、やはり答ええない。

——最早武力衝突しかない。

そうシロ民達が思い始めたとき。充分に数が増えた親衛隊の一人が懐から何かを取り出す。それはカードの様で……そして。

「静まれえい！ 静まれえい！」

突如として声を張り上げ、シロ民に黙れと告げる親衛隊。その凄まじい気迫に押され、僅かな時間だがシロ民達が口を閉じる。そして、ソレが彼らの前に示された。

「このブロマイドカードが目に入らぬか!!」

堂々と親衛隊がシロ民達に示したソレ。それはブロマイドカードだった。描かれているのは……白髪赤目の幼さの残る少女。シロちゃんだ。しかもサンタコス（ミニスカート）という異例中の異例の格好。ロリは最高、枕草子にもそう書いてある。

バカな。あり得ない。合成か何かでは？

シロ民達に動揺が走り、あまりの衝撃に沈黙が降りる。それを好機とみたのだろう。親衛隊が畳み掛ける様に口を開いた。シロちゃんは騒動を望まぬと。

「我らがシロちゃんが望むのは人とポケモンの共存だ。決してポケモンを使って悪事を働いたり、テロを起こす事ではない。——ここは退いてくれ。悔しさは分かる。だが、その悔しさを晴らす為にポケモンを使えば……それは最早シロ民のあるべき姿ではない！ テロリストだ！」

「っ——！」

だからここは退け。今ならまだ間に合う。そうシロ民達に語り掛ける親衛隊。

その言葉に思うところがあつたのだろう。シロ民達は渋々ながらも矛を収めようとし始める。……だが、何も言わずに退くのも収まりがつかない。そんな考えから一人のシロ民がポツリと口を開く。お前らはどうなんだと。

「お前らはそれでいいのか？ 企業はポケモンをエサに商業戦争を起こしているぞ？ それはポケモンを道具にしている事じゃないのか

!? シロちゃんだって良い顔はしてなかったはずだ!」

「……あれは、仕方ないだろう。スポンサーをないがしろにする訳にはいかない」

「スポンサー? スポンサーだと? 我々シロ民はいかなる権力、財力、武力……どんな力にも屈しない! そうじゃないのか!?!」

「それは理想だ! 現実が違う……!」

「……分かっているさ。だが、それでも、我々が理想を示さなければ、後に続く者は何を信じれば良いんだ? 何を旗に集えば良いんだ?」

——それを示すんだよ。今、この日も! あの日と同じ様に!!」  
「バカどもめ……っ! あの日と今では状況が違う。命令違反も同然だぞ!」

「ああ、分かっているさ。ポケモンとダンスだ!」

意見は平行線。交わる事はない。ならばポケモントレーナーらしく、ポケモンバトルで決めるしかあるまい。そうエリートシロ民とシロちゃん親衛隊の何人かが腰にあるモンスターボールに手を伸ばしたとき……ポツリ、と。眩きが漏れる。そのブロマイドカードどこで買えるの? と。

「……何?」

「いや、そのミニスカサントアのシロちゃんのブロマイドカード。俺も欲しいな」と。……どこで買えるの?」

「……」  
どこで買えるんだ? そんな素朴な疑問に親衛隊員が一斉に目を逸らす。

お前言えよ。

嫌だよお前が言えよ。

俺帰ってもいい?

そんな声が聞こえる様な目逸らしに、まさかとエリートシロ民が声を上げる。売り切れか? と。

「……限定品だ」

「……何の」

「お前らを止める作戦参加者限定の、限定品だ」

「……………」

「……………」

沈黙。

10秒、20秒、30秒……長く、重い沈黙が辺りを支配する。

何せ親衛隊員の一人が白状してしまったのだ。このブロマイドカードは自分たちしか持つておらず、それ以外誰にも、どこにも無く……他の者はもう手に入れれないと。

あまりに重い沈黙はその後まる一分は続き——やがて一人のエリートシロ民がハッと何か思い付いたかの様な表情を見せる。なんだ、あるじゃないか。手に入れる方法がと。

「殺してでもうばいとる」

「!？」

自分は手に入れれない。だが目の前の相手は持っている。なら……後は簡単だと。

その原始的にして野蛮な考えは辺りへ一斉に伝染し、およそ全てのシロ民達に感染。そして、最初の一声が上がるのに時間は要らなかつた。

「ヤロオブツコロツシヤアアアア！」

野郎オブクラツシヤァ。その一声を皮切りに次々とシロ民が親衛隊へと殴り掛かる！

ポケモンを出さず、素手で戦おうとしているのはなけなしの理性の勝利か、それともポケモンバトルをするに価する相手と見なしていないのか。何にせよ、雪の降る広場は昭和の野球場へと変貌し、ここに大規模な乱闘が勃発した。

「ふざけやがってえ！ てめえそれは抜け駆けつてもんだろオン!？」

「うるせえ！ これは俺のモンだアアア！」

「突撃イイイ！」

「着剣セヨ！」

「着剣！」

「貴様は強くない」

「モアイ……」

よくも抜け駆けしやがって。お前らだけズルいぞ。そんな声がシロ民達から響き、それに親衛隊は喧しい。こんな事をしているお前らが悪いと答える。そこにOTON Aの姿は一人も無く、小学生レベルのケンカしか無い。

「だいたいシロちゃんに忠誠を誓ってれば逃さなくて済んだんだよ！

このヴァカどもが！」

「うるせえ！ 何が親衛隊だ！ この狂信者どもめ！ 俺だって彼女くらい欲しいわ!!」

「ハッ！ だから貴様らは二流止まりなのだアアアア！ 肉欲に踊らされている人間が一流に成れるかア！」

彼女欲しい！ バカが、どうせモテないんだから独身貴族として研鑽のみを積み！ そんな最早本題からズレている罵倒を交わし、拳を叩き付け、乱闘は地獄絵図を描く。

「うおおおおお！」

「チエストオオオ！」

逆だったかも知れねえ。そんな事を思っているかは定かではないが、シロ民達は全身にオーラにも似た何かをまとわせ、拳を叩き付け合う。

スーパーマサラ人化した超人同士の決着は……まだ、暫く掛かるのだった。

……

……

……

シロ民達が内ゲバに勤しんでいる頃、ある意味原因となったシロちゃんはといえば……

「あー、うあー……」

執務や利権調整、ポケモン絡みの事件解決やカバーストーリーの調整で疲れきり、田舎のおばあちゃんもかくやといった状態だった。

つい先日ポケモンをクリスマスマス商戦の戦術に組み込みたい菓子メーカーに、オブザーバーとして幾つかアドバイスを送ったり、ポケモンの生態を考えつつマスコットを選出——差し当たりデリバード

をプッシュしておいた——したりと、何かと忙しかったのだ。

その上シロ民向けのエサを用意する為に——いい加減慣れ始めてしまった——写真撮影も行っており、とてもではないがクリスマスどころでは無かった。

「もふ、もふ……」

自ら望んだポケモンと人との共存の道。しかしその道には幾つもの障害があり……幾つかは無理矢理壊すにしても、全て壊すつもりがない以上、チマチマとした仕事が無くなる事はない。

それは彼女も分かっている。しかし分かっているても疲れは出るもので……

「も、ふ——」

「グルウ……」

執務と外仕事の僅かな時間に相棒であるグラエナをモフリ、そのやわらかで暖かい毛と、仕方ないやつだといわんばかりの穏やかな視線に包まれてまぶたを閉じる。

来年はゆつくりケーキ食べよう。あ、ポケモン用のケーキも作らなきゃ。……そんな事を考えながら。

彼女達が穏やかにポケモンと過ごすには、まだ少し時間が必要だった——

## 第28話 変わるモノ達

——九州地方。

——鹿児島県。

——古武道道場。

「ああ、そういう訳でな、戦友達の姿を借りたナニカは居た。そして今はワシもポケモントレーナーというわけだ。……ああ、ああ。分かっている。任せておけ。ん？ ふむ——」

不知火白が育ての親ともいえるお爺ちゃんと電話をしていたとき、当然ながら件のお爺ちゃんもまた電話を手にとって孫ともいえる少女との話を楽しんでいた。

にこやかに、穏やかに、近況を語りつつ。

子供が居ない自分に出来た、予想外の可愛い孫。そんな相手との会話は彼にとって心安らく時間であり、何よりも優先すべき事であった。それこそ、『客』の相手を放棄する程度には。

「ああ、ああ。ではの。くれぐれも周囲には気を付けるんだぞ」

病気ではなく、周囲に気を付けろ。そういつてイマイチ使い慣れない様子でスマホを操作し、通話を終了させる彼。

歳は百を越えているにも関わらず、全く弱々しさを感ぜない……それどころか覇気すら漂わせる老人。名を東郷。不知火白曰く東郷お爺ちゃんと呼ばれる人物だ。

「……シロちゃんですか？」

そんな老人に声をかける男が一人。

鋭さのある視線を投げるその男は、正式に確認された超能力者であり、シロ民の中でも一目置かれる人物……シロちゃんガチ勢の一人、通称筆頭犬兵だ。今日は東郷に招かれた立場として活動していた。

そんな筆頭犬兵に東郷は端的に言葉を返す。その通りだが何か、と。

「いえ、噂通りの仲良さだと思ひまして」

「……孫だからな」

「なるほど」



そんな会話をしつつも視線は合わさず、二人揃って道場の廊下を進行んで行く。道場から聞こえる奇声にも似た怒声や掛け声を聞き流しつつ、やがて二人は離れの一室にたどり着き、一息ついた。ここなら盗み聞きされまいと。

そして、部屋に凄まじい「プレッシャー」が満ちる。

「さて、話しの続きだが……何か仮説があるのだったな？　今の我々について」

「——はい。一応は」

「プレッシャー」の出どころは筆頭犬兵の目の前。和服姿の老人からだ。

まるで重力そのものが増えたかのような感覚に教われながらも、筆頭犬兵はなんとか口を開いて言葉を発する。この道場に来る前、無理を言って老人と合流して見た桜島で見た光景について。あるいはそこで体感した自分達の力について。それを端的に。

「恐らく、スーパーマサラ人化しているのだと思います」

「ふむ……？」

「漫画やアニメの登場人物の様な、あるいは神話の英雄な様な、超人的な存在になった。そう考えて頂ければ」

「なるほど。超人か」

スーパーマサラ人化している。そんな意味不明な言葉を吐いた筆頭犬兵は、自分の言葉を自分で噛み砕いて老人へ説明する。スーパーマサラ人とは、いわゆる超人なのだ。

「10万ボルト」を食らっても死にはせず、「こうそくいどう」すら使いこなし、時にはオーラをまとって空を飛ぶ……そんな説明に納得したのか、東郷はふむと頷いてそれなら覚えがあると続けた。

「少し前からそうだったが、ここ最近は特に身体の調子が良くてな。若い頃と同じ様に動けるのだ。しかも剣に……そう、気がのりやすいのもそうか。おかげでカマイタチじみた事も出来る」

「え、ええ。恐らく間違いないかと」

身体が若返った様だ、それはまだ分かる。東郷氏は100歳を越えるべく高齢だが、まあ人間そういう事もあるだろうと。しかし、カマイ

夕チを出せる。そんなバトルマンガの登場人物もかくやといわんばかりの発言に、筆頭犬兵は口元を引きつらせてしまう。これがスーパーマサラ人の力を得た、伝説のスーパーSATUMAかと。

とはいえ筆頭犬兵とて半ばスーパーマサラ人化した超能力者だ。ならば腰が退けてばかりもいられないと、そう内心を即座に立ち直らせて筆頭犬兵は伝説のスーパーSATUMA人に質問を重ねていった。

「ちなみに、最初に変化があった少し前というのは……」

「ふむ。大きなところではここ最近だが……最初というのなら2、3年前前か？ いや、小さい物で良いのなら10年以上前になるな。ともかく、シロちゃんの面倒をみだしてからだ」

シロちゃんと関わってから身体に変化が起きたと語る東郷。最早マイナスイオンどころかオカルトか猫理論に片足突っ込んでる発言だったが、筆頭犬兵はそれをバカにしたりはしなかった。むしろ我が意を得たりとばかりに頷き、内心で確信を深める。やはり、間違いないと。

「——シロちゃんは、少なからず鍵になっている」

「否定は出来んな。あの子は周りに何かしらの、そう、そちらの言葉を借りるならポケモン化を起こすナニカを振り撒いているのだろう。まるで春の知らせを告げる様に」

「……詩的ですね。しかし、その通りだ」

「ああ。だが、しかし、本人に自覚はあるまい。そもそもあの子だけが原因というには事が大き過ぎるし、何より悪影響と一概に言えないともなれば……止めろと言える話ではない」

現に自分は未だに生き長らえている。そう言外に語る老人に、筆頭犬兵は頷きを返しながら同意する。メディアによつては悪い事ばかり取り上げられるが、実際はそれ以上のメリットが社会に持たされているのだと。

流石に賃金が目に見えて上昇する程ではないが、それでも少しずつポケモンを取り込む事で社会は前進と改善を見せているのだ。特に技術面でのブレークスルーは凄まじく、地球上のエネルギー問題を根

本的に解決出来る計画が立案されている程。

それらを考えればシロちゃんのもたらす影響は悪とはいえず、スーパーマサラ人化とて頭ごなしに否定する物ではない。むしろ歓迎出来る話だろう。彼女のもたらす変化は喜ばしい物だと。……多少の混乱は覚悟の上で。

「今回のアレも、そうなのでしよう。シロちゃんが鍵なのか、それとも別の何かの影響があったのかはまでは定かではありませんが……桜島に現れた彼ら。彼らもまた、ポケモン化の影響があつて現れた。桜島が『おくりびやま』となり始めた事で」

「……そうだろうな。確か、ポケモンには幽霊の様な者もいるのだろう？」

「ええ。ゴーストタイプが。ただ、彼らをゴーストタイプのポケモンと呼ぶには、抵抗がありますか」

「だが、無関係ではあるまい」

桜島に現れた彼ら。東郷氏の戦友、今は英霊と呼ばれるだろう人の姿を借りたナニカ。あり得ないよた話と思つてみれば、その目で目撃してしまつた存在達。

東郷氏はそれをポケモン化の影響を受けた存在だと判断した。具体的に何なのかは分からないが、無関係ではないだろうと。

そんな内心を言葉にした後、これは受け売りなのだがと前置きして、東郷氏は更に自身の推測を披露する。

「恐らく、アレらはまだどちらでもないのだろう。形を決めきれず、しかし出て来てしまい、やむを得ず由来を誰かに依存した結果。ワシは、思う」

「由来を、依存……ですか？」

「ああ、そんな気がする。——少なくとも、あれらは決してワシの友の霊ではない。だが、まだポケモンではない。恐らく、ポケモンになりかけのナニカが、ワシや、ワシの弟子の記憶を辿り、最も近い存在を目指した結果なのだろう。……後でバカ弟子どもはしごいておかねばな」

幽霊と聞いて連想するのが彼らとは、嘆かわしいと。聞こえぬ程小

さな声でポツリと呟く東郷氏の声を、筆頭犬兵は全力で聞かなかつた事にし、更に話の方向転換を狙う事を決意する。しごきに加えられるのはごめんだと。それぐらいなら話を切り上げてしまおうと。

「影響を受けたのは多数。むしろ影響を受けないところを探す方が難しく、混乱もやむなし……ですかね？」

「常識では考えられない事がおきているのだ。ある程度はやむを得まい。ワシも、君も、自分自身からして変わってしまったている」

「ええ、まあ……」

東郷氏は正統派のスーパーマサラ人として超人的な力を手に入れ、筆頭犬兵もまた常人とはいえない。最初はサイコメトリー能力から始まったそれも、今ではスプーン曲げが出来る程度の「ねんりき」を手に入れているのだ。とてもではないが一般人とはいえないだろう。そして……今のところスーパーマサラ人の例はこの程度ですんでいるが、時間が経過すればより拡大する事が目に見えている。ポケモンが関東中に広まった様に、スーパーマサラ人化する人間もまた広がって行くだろうからだ。

果たして、その時。既存の社会は耐えきれるだろうか？ 法は、常識は、物理法則は、壊れずに居られるだろうか？ ……筆頭犬兵は、その答えを考えたくなかった。

「——そして、変わるのは人だけではない。歴史すらも、変化してしまう」

「歴史、ですか？」

ポケモンによって壊れる既存世界。そんな事実から半ば現実逃避を始めていた筆頭犬兵の意識は、東郷氏の唐突な独白によって引き戻される。

ふと気づけば筆頭犬兵に領きを返した東郷氏が、懐から数枚の写真を取り出していた。そこに写っているのは……何かの遺跡だ。古びた、あるいは破損した石柱が何本か写されている物。石で出来た建物に見える物。石板に見える石の板。色がついた欠片。それら様々な物が写っており、そのどれもが遺跡としかいようがない代物ばかりだ。

そんな写真達から思わずパルテノン神殿を連想する筆頭犬兵だが、よく見ればそれとは別物の様子。……では、これは？

「あの、東郷さん。これは？」

「遺跡だ」

「いや、その……」

「それは分かっている？ そうだろうな。ワシもそう思うし、これを撮った者もそう思ったらしい。遺跡だと。昔からある物なのだと。しかし……事はそう単純では無い」

「と、いうと？」

筆頭犬兵に続きを促され、しかし東郷氏は直ぐには答えない。唸り声にも似た迷いの声をあげ、私にもよく分からないのだがと前置きしてからようやく語り始める。これは、あるはずのない物なのだと。

「これはワシの教え子から送られた物だな。どうにも自分は頭がおかしくなったようだから、マトモな知恵を貸してくれと」

「頭が、おかしくなった？」

「ああ。……これが撮られたのは、奈良県、明日香村。高松塚古墳だ。

——いいか、古墳だ。決して、決してこの様な石柱や石板がある場所ではなく、現に去年はこんな物は無かった。そして、この写真が撮られたとき、古墳はどこにも無かった。まるで入れ換わったかの様に」

「……！ まさか、ポケモン化の影響で!？」

「ワシはそう思う。ポケモン化の影響で、古墳が別の物に置き換わったのではないか？ とな」

古墳が消え、代わりに謎の遺跡が現れた。まるで置き換わったかの様に……あり得ない。幾ら何でもあり得ない話だ。

しかし、同時に筆頭犬兵は思い当たる遺跡があった。『アルフのいせき』。確か、あの遺跡のある場所は丁度奈良県辺りでは無かっただろうか？ もしポケモン化が進むのであれば、当然あの遺跡も現れるだろう。元々あった存在と、入れ替わる形で。だと、するなら……？

「実際、この石柱を見た者は僅かな時間とはいえ勘違いしたそうだと。これは最初からここにあったと。ここにあったのは古墳ではなく、この様な石柱や石板を含む遺跡だと。充分な経験を持つ、名のある考古

学の教授が、だぞ?」

「それは、まさか……認識が?」

「うむ。書き換えられたのだろう。体験した教授もそう言っていた。……その辺りは、専門だったな?」

ええ、まあ、一応は。そう筆頭犬兵は自信なさげに返答を返す。認識の書き換えや、超能力への対抗は本当に一応専門に対応している分野の為に。

だからこそ、か。筆頭犬兵は分かっってしまう。これもポケモン化の影響であり、完全にポケモン化してしまえば古墳の事を誰も思い出せなくなるだろうと。

「彼は不安を感じずにはいられなかったそうだ。こんな事では日本中の古墳が無くなっても、誰も気づかないのでは? とな」

「……気づかないでしょうね。ポケモン化が進めば、例えば人類史が焼却されても誰も気づかない」

「……そう、か」

常識が、過去が、書き換えられる。それはポケモン化最大の欠点であり、不安を煽る点だ。今のところは事のアマリの巨大さから気づいた者全員が口を閉じているが、それも時間の問題だろう。場合によっては政府高官による情報統制が必要な案件だ。

そんな国家機密級の案件に思わずため息が出る二人。どうにかするかこんなもん、と。しかし逃げ出す気も無い二人は会話に戻り、東郷氏が続きを語る。実は進展があったのだと。

「今日の朝ごろ、変化があったそうさ。丁度例の事件があった頃にな」  
「例の、というと、輸送部隊の襲撃事件ですか?」

「ああ。例の事件があつてから、遺跡が無くなったそうさ。突然な。代わりに元の古墳が現れたらしい。いや、元に戻った方がいいか?」  
「それは……」

良かったですね。そう言おうとした筆頭犬兵だが、ふと引つ掛かりを覚えて言葉を止める。何が引つ掛つたのだろうか? そう思つて暫く思考を巡らせば……答えは直ぐに見つかった。

——輸送部隊襲撃と、遺跡の消滅。この2つの事件の因果関係は、

どうなってるんだ？

関係があるのか、ないのか。もしあるのなら、どう関係があるのか？

分からない。分からない事ばかりだ。だが……ふと筆頭犬兵の脳裏にある壁画のイメージが思い浮かぶ。それはとある島の洞窟で見つけた古い壁画だ。直接見る事は無く、しかしテロリストの暫定的なりーダーとなった男の残留思念を通して見れた……荒れ狂う海と大地が描かれた壁画。あれもまた、見方によっては遺跡ではないか？ それもポケモン化によって現れた遺跡。

——あの男はポケモン壁画を見て発狂した。なら、その原因であるポケモン遺跡を目の敵にしてもおかしくないのでは……？

だと、すれば。今回の事件は特殊弾頭の奪取ではなく、シロ民間で密かに推測されている情報戦の一環でもなく、遺跡の消滅を狙った物ではないか……？

いや、仮にそうだとして、なぜ輸送部隊を襲撃する事が遺跡の消滅に繋がるんだ？ 彼らがやった事といえば、現代兵器でポケモンを攻撃したぐらいだろう。因果関係がまるで分からない。

ぐるぐると思考を巡らせる筆頭犬兵。そんな彼に東郷氏が声かける。

「心当たりが、あるようだな」

「はい、一応は。しかし、推測に過ぎません。それに突飛過ぎます。とても東郷さんに語れる物では……」

「……そうか。なら、その推測は頭の隅にでも置いておけ。いつか役に立つかも知れん」

「はい」

この考えはあまりに突飛過ぎるが、東郷氏が言うならと筆頭犬兵は推測を頭の隅に置く。今後取り出す事はあるまいと内思いながら。

そんな筆頭犬兵に東郷氏は話は変わるが、と前置きして別の話を始め出す。話題は……外国の動きだ。

「これも聞いた話なのだが……中露が怪しい動きをしていたらしいが、ここ最近では米国の動きもだいぶキナ臭いようだ。第七艦隊も、そ

れ以外もな」

「スパイ、ですか」

「恐らくは。その辺りは欧州の連中も変わらんだろうが、ここ最近は何国かの動きが強いらしい。……あそこは軍の力で国が安定している様な物。世界の軍事バランスが大きくひっくり返る様な案件には、首を突っ込まざるを得ないのだろう」

それに、ポケモンは新たなフロンティアだ。奴らとしては手を伸ばしたくて仕方あるまい。そう余裕ありげな笑みを浮かべながら東郷氏は語る。有利なのはこちらだと言わんばかりに。

何せ日本がほぼ独占しているポケモン利権やポケモン技術は凄まじい。高レベルの電気ポケモン一匹で火力発電所一つを置き換えられるという試算もあり、その利権の巨大さは……新たな大陸にも匹敵するだろう。

それは正しく新たなフロンティアであり、それを日本はほぼ独占しているのだ。国際関係を考えれば今後ある程度切り売りしなければならぬだろうが、それによって生まれる利益もある。何をどうしようが日本の有利はゆらぐが……だからこそ、面倒事も多い。

「だからこそ、か。国家の、それも複数の思惑が絡むとなれば、決戦の一つもある。……そして、それは近い」

「……はい。準備は出来ています」

国家の陰謀渦巻く決戦に、自信ありげに準備は出来ていると語る筆頭犬兵。彼には勝算があった。関東から離れている自分には無理だと思っていた筆頭犬兵だったのだが、縁あって念願のポケモンをゲットしたのだ。

ゲットしたのはてつきゆうポケモン、ダンバル。テロリストの根城を探して九州の島々を巡っていたとき、種子島を散策していた際にゲットしたのだ。いつの間にか、本当かいつの間にか近くにいたダンバルを見つけたのが最初で、それからは殆んどトントン拍子だった。途中何度も「ねんりき」や思念のぶつけ合いはあったが……それは超能力者である筆頭犬兵には大した事ではなく、それが気に入られたのかすんなりとモンスターボールに入ってくれたのだ。



今の自分はポケモントレーナーのサイキツカー。そう自信を持つ筆頭犬兵に東郷氏はポツリと呟く。甘い、と。

「甘い。実に甘いな」

「甘い、ですか？」

「大きな力を、ポケモンを持っただけで勝負に勝てる訳ではない。それを使いこなせて始めて、ようやく舞台に上がれるのだ。今の貴様では孫の盾にもならん。……来るといい。ポケモン共々、少し鍛えてやろう」

懐からモンスターボールを取り出し立ち上がる東郷氏に、筆頭犬兵は思わず戦慄する。ヤバい、地雷踏んだ、と。

だがここで退くような常人ならシロ民にはならないし、ましてや筆頭犬兵などと呼ばれるはずもない。……返答を邪魔した迷いは僅か、かかった時間も僅か。返答は、東郷氏と視線の高さを合わせる事でなされる。強くなれるなら好都合だと、筆頭犬兵はSATUMA人の教えを受ける事にしたのだ。

——その後。道場から悲鳴や絶叫が響き、翌日からは森の一角が消し飛びだしたのは……また別の話。

## 第29話 ちよつとしたお節介

お爺ちゃんに連絡を取った数日後。私は伊藤家別荘から離れた場所——位置合的にはトキワの森辺りかな?——にある町を昔からのパーカーとジャージスタイルでぶらついていた。チラホラとポケモンや、その痕跡が見える町並みをポチを連れているとはいえ一人だけ。

本当は護衛のボディガードやシロ民に止められるし、押し通しても護衛が引つ付くのだが……まあ、なんだ。ちよつと策を練って抜け出して来た。

——だって息苦しいんだもん……

彼らの気持ちや、自分の立場。そして現状が分からない訳ではない。

規模や戦力はロケット団以下とはいえポケモンを悪用するテロリストが現れ、治安レベルが少しずつ低下している中での外出は危険を伴うだろう。私のポケモンの第一人者——ただ知っていただけでこう言われるのは不満だし、植物学者さんみたいに頑張ってる他の人に不公平だ——としての立場を思えば暗殺の危険性すらある。幾らポチといえど、超長距離からアンチマテリアルライフルで私を狙って狙撃されれば対応出来まい。あるいは区画ごと爆撃された場合も同じだ。私だと分からない程度にはぐちゃぐちゃな死体が出来上がるかと間違い無し。

「けど、息苦しい」

「グルウ」

例の襲撃事件からこっち、ユウカさんを筆頭に多くの人が過保護になっちゃったのだ。私が襲われるのではないかと。次はここではないかと。私がお爺ちゃんを呼んでしまったのも状況を悪化させた。私が不安を持っていると。心細いのだと。

それらはそこまで間違いではない。けれど、やり過ぎだ。24時間体制で監視され、常に誰かが護衛として側に居て、基本的に部屋に缶詰にされる身にもなって欲しい。カオリもサキも、シロ民達ですらポ

ケモンバトルを受けてくれなくなったし。受けてくれなくなったし！　なんで？　ポケモントレーナー同士、目が合ったらバトルでしよう？　なんで？　なんで受けてくれないの???

「別にカツアゲする訳でもないのに」

ゲームではポケモンバトルに勝ったら賞金が手に入った。あれはゲームシステム上の都合なのだが……一部ではカツアゲしてるのだと真しやかに語られた話だ。

まあ、前なら笑い話だったろう。しかし、今では真面目に考えるべき話だ。流石にカツアゲは良くない。かといって賞金無しはしつくり来ない。なので今のところポケモンリーグ公認の試合では、ファイトマネーを出したり、有力なトレーナーには希望次第で補助金を出したりする方向で調整している。

「むう……」

だから、彼ら彼女らが私のポケモンバトルを断る理由はないはずだ。確かにポチが他のポケモンよりも遥かに強すぎて、私の勝ちがほぼ決まっているのはいささかつまらないだろうが、そこは一对多数等の非対称戦にする事で対応出来る。問題ない。

けれど、彼らはそれでも断るのだ。曰く、ポケモンバトルをする度に私がケガをするからやりたくない。解せぬ。

「ケガくらいどうでもいいじゃん……」  
「グルウ？」

飛んで来た破片で服や肌、場合によっては頬がバツサリ切れて、血がドボドボ溢れて血濡れになった事は何度かあるが……それがどうしたというのか？　オレンの実でもかじれば元に戻るし、何より、ポケモンバトルだぞ？　あのポケモンバトルが出来るんだぞ!?

ケガをした程度では、出血程度では、ポケモンバトルをやめる理由にならない。例えば足が吹き飛んでも続行してやる。頭と胴体があれば最低限やれるのだから。

「血が出たからってピーピー泣いたりしないのに」

私だって元男。血が出た程度で狼狽うろたえたりしないし、泣いたりもしない。むしろ勲章だと笑う胆力たんりきくらいある。

現にケガしても直ぐにオレンの実をかじっているのだ……それをすると周りにドン引きされるが。カオリとサキのアイドル組に至っては顔を青くしていた。解せぬ。

「良いじゃん、別に。だって近くで指揮した方が、バトルがよく見えるんだもん」

「グルウ」

ポチが最も得意とするのは高速での超高機動戦闘だ。耐えてからのカウンターも出来るが、それよりも戦場を縦横無尽に駆け回り、相手だけでなくバトルの流れすらも支配する事こそポチのやり方。ならそれをサポートする為に、私も常に最適な位置取りで確かな情報を得て、常に最適な警告と指示を飛ばす必要がある。場合によっては戦闘に集中するポチの代わりに作戦立案も。結果流れ弾を食らおうと、それは必要経費だ。気にする事はない。

まあ、バトルが終わればポチにかなり心配されるが……生きていれば問題ない。彼女もその辺りは理解してくれたしね。強ければ、勝てれば、生きていれば、何の問題も無いと。

「ふんっ……」

だというのに！ それを彼らは危ないからとやらせてくれないのだ。気持ちには分からないでもないが、お節介も良いところ。書類なら幾らでも書いて上げるから、ポケモンバトルぐらい自由にさせて欲しい。私の数少ないストレス発散方法なのだから。

そう内心ブチブチと愚痴を並び立て、ふて腐れながら町を歩いていれば……居た、ポケモンだ。

「あれは、ポツポか。……あ、行っちゃった」

「グルアア」

ポチの「いかく」が入ってしまったのか、ようやく見かけたポツポは慌てた様子でバサバサと飛び去ってしまった。

まあ、仕方ない。ポチの「いかく」はパッシブスキルの様な物。いちいちONOFFしろという方がおかしいだろう。そうまたふて腐れそうになる内心を納得させ、私は再び歩き始める。そうして目に入ってきたのは、そこそこ大きな公園だ。人もチラホラと……いや、

ポケモンも居るな。ポツポ、オニスズメ、コラツタ。そしてあれは、ポケモントレーナーか!?

「おお、ポケモントレーナーが居る……」

ポケモンバトルをしている訳でも、その練習をしている訳でもなく、ただガーディを横に連れて散歩しているだけだが……あれはポケモントレーナーだ。間違いない。

仮にペットの犬がポケモン化して、その後も前と同じ様に散歩しているだけなのとしても、ポケモンを連れてるならポケモントレーナーだ。異論は認めない。今日の私はポケモンバトルがしたくて仕方ないのだ。会いたかったぞ！ ポケモントレーナー!!

「ようし……」

ポケモントレーナーが二人。後は分かるな？

おい、ポケモンバトルしろよ。

そう声をかけようとしたとき——別の物が目に入る。モンスターボールだ。

「あれは……?」

「グルウ?」

正確に言えば、モンスターボールを持って固まっているスーツ姿の男性と、その側に居る小さな女の子だ。距離感や気配から察するに、恐らく二人は親子なのだろう。しかし、休日に公園に遊びに来たという訳でもなさそうだが……?

「うーん、中々難しいんだな。やはり簡単だという虫ポケモンに……いや、それは怒られるか。アイツは虫が嫌いだからな」

「パパ、大丈夫?」

「大丈夫だ。パパは昔野球部でピッチャーだったんだぞ? 任せておけ……万年補欠だったけど」

ふむ? 近づくにつれて聞こえた声を聞くに、どうやら彼らはポケモンをゲットしに来た様だ。お父さんの方がスーツ姿なのは……仕事帰りか、あるいはこれから仕事なのか、どちらにせよ忙しい中時間を捻り出した結果と見える。

良い話だな。感動的だ。無い時間を無理やり作り出しての家族

サービス。だがポケモンをゲット出来なければ無意味だ。

「ポケモンのゲットですか？ それでしたらお手伝いしますが」

しかしそうはなるまい。ポケモントレーナーになろうとしているが、中々上手くいかない人。そんな人には思わず手を差し伸べたくなくなるのがポケモントレーナーという人種だからだ。

そんな私の内心を知るはずもない彼ら親子は声をかけられた事に驚き、その相手がチンチクリンである事にクエスチョンマークを浮かべ、最後に私のポチを見て合点いった様子を見せる。父親は驚きを、女の子の方は喜びを。

「ポケモン、トレーナーの方でしたか」

「わあー、おつきなワンちゃんだー」

父親の方がポチに気圧されて口ごもる反面、女の子はタツと直ぐ様ポチを撫でにかかった。わしゃわしゃもふもふと両手で撫でる手に上手さはないが、しかし純粹だ。やはり子供はポケモンと仲良くなりやすいらしい。ポチも嫌がってはいないから、彼女は放置していいだろう。

そう判断した私は父親に向き直り、再度問う。それで？ と。

「どの子が良いんです？ 虫ポケモンは駄目だと聞こえましたか」

「ああ、聞こえてしまいましたか。はい。妻が虫嫌いなもので……そしてペットとして飼うつもりなので、出来ればピカチュウやイーブイ、ガーディが良いと」

「ママとねー可愛い子が良いねって、お話ししたのー」

「なるほど、なるほど……」

ピカチュウ、イーブイ、ガーディ。何れも——ポケモンの「せいかく」次第などところがあるが——育て易く、初心者向けで、人気も高いポケモンだ。

特にピカチュウはアイドルのサキがコーディネーターとして活動するとき、パートナーとして連れてくる事から知名度に困らないポケモンだし、ガーディは警察組織に私が売り込んだ事から需要が高騰し、それにつれて知名度が上がったポケモンだ。ここで名前が上がるのはある種当たり前だった。イーブイは少し意外だが……ペット枠

で、可愛いポケモンという事でポケモン図鑑から引つ張りだして来たのだろう。

彼らが上げたのは良くも悪くも初心者欲しがるポケモンだった。だからこそ、難しい。

「それは、難しいですね」

「やはり、難しいですか？」

「はい。その三匹は生息数が少なく……特にイーブイは無理でしょうね。希少過ぎる」

イーブイはゲームの頃からして生息地不明で、ゲーム中に一匹しか手に入れないポケモンだった。それ以上欲しいならタマゴを産ませるしかなかったのだ。

現実となった今では多少マシだが……それでも珍しい事には変わらない。他のポケモンがうじゃうじゃいる中で、イーブイは未だにゲット数が十数匹程度だといえばその珍しさが分かるだろうか？

少なくとも、彼らの様な一般人が狙って手に入れる事は出来ないポケモンだ。

「狙うとすればガーディですが……主な生息地がここから離れてますからね。この辺りで狙うならピカチュウでしょう。まあ、ピカチュウもかなり珍しいポケモンですが」

サキという身近な人物が手に入れている事で勘違いしやすいが、ピカチュウも貴重なポケモンだ。次代のエネルギー源として期待されるでんきタイプのポケモンという事で、政府や大手企業が血眼で探しているが、それでも100匹程度しかゲット出来ない。未発見を含めても現状では500匹居ないのではないかというのが政府の見解だ。彼らがピカチュウをゲット出来る確率は宝くじの一等に当選するのと同程度だろう。

まあ、何はともあれ先ずは行動あるのみだ。そう考えた私は父親を急かし、ポチを撫で回す女の子を諭し、彼らを連れて公園の端の方へと向かった。ポケモンが居るなら、人気のないこっちだと。

「ああ、やっぱり。こっちの方がポケモンが居ますね。キャタピーに、ビードル。トランセルまで居る」

「あー……すみません。虫のポケモンは……」

「嫌だど？ 彼らもポケモンですよ？ それに進化すればバタフリーになる。テレビで見たことがあるのでは？」

「まあ、そうなのですが……」

「ばたふりー……おつきなちようちよさん！」

「うん。そうだよー」

女の子はバタフリーと聞いてちゃんと連想出来たのか笑顔を浮かべているが、いかんせん父親の方が渋い顔をしている。

まあ、虫ポケモンだからな。人気は無い。キャタピーをゲットして家に連れて帰っても、嫁さんに叱られるのが目に見えているのだから。

——残念だったな。お前ら。

カオリの活躍で多少はマシだが、虫は虫という事らしい。彼らの人気が出るのはまだ先になりそうだ。

と、なれば……やるしかあるまい。

「さて、行きましようか」

「行く？ ……え、中に入るんですか？」

「？ 当たり前でしょう。ポケモンをゲットするなら草むらの中を探さないと。……おいで、お姉ちゃんとワンちゃんと一緒にポケモン探そう？」

「ポケモン……うん！」

「あ、ちよつと！」

父親の方を説得しても仕方ないと、私は女の子の方をポケモン探しに誘う。信用されるか怪しかったのだが……ポチをモフらせていたのが良かったのだろう。結果はこうかばつぐん。父親の方も慌てて森の中へと足を踏み入れて来た。

……自分の事をお姉ちゃんとか、変な笑いが出そうだけどな。我慢だ。我慢。

「危ないですよ！ 森の中なんて。それにニュースでポケモンには危険なものもいると！」

「ポケモンはみんな危険ですよ。ピカチュウは“かみなり”を落とせ



ますし、ガーディも「かえんほうしゃ」で家を焼ける。——けれど、それでもポケモンと居たいのなら、ポケモンと居れるのなら、そこにはきつと、綺麗な景色が待っている」

「？」

「何を言ってる……」

公園の横に引っ付く形で生い茂っている森の中に入って少し、ところどころに生えた「きのみ」の木を見ながらそれらしい事を喋ってみたが、いい加減父親の方がキレそうだ。そりゃ今の私がやってる事は誘拐犯と大差ないし、仕方ない。

女の子も不安そうに私の服とポチの毛を掴んでいるし、そろそろ何か出て欲しいが……ん？

「どうしたの？ ポチ」

「グルウ」

森の中を歩く事暫し、唐突にポチが立ち止まった。声を掛ければ鼻先で向こうの茂みを指し示して……まさか、何か見つけたのか？

「ふむ……ここでポチと少し待っててね？」

「あ、おねーちゃん……」

ポチが指し示したのなら、何かあるのだろう。そう思っただけでポチに女の子を任せて、ポチが指し示した茂みに近づく。

何も無いし、居ない様に見えるが……うん。手でも突っ込んでみるか！

「よっ、と……」

毒蛇に噛まれても、さつき生えてたモモンの実を使えば良い。ケガならオレンの実がある。そう思っただけで勢い良く茂みに手を突っ込めば

「痛っ……！」

「ヒット。何かに噛まれた。」

直ぐ様手を引っ込め、地を蹴って全力で茂みから離れるが、茂みに隠れた何かは茂みから出て来て追撃してくる。瞬間、「ひのこ」が走った。

「あぐっ、う……痛い——」

咄嗟に左手で顔を守ってはみたが、変わりに手のひらが軽く、やけど”してしまった。チラリと見れば、白い肌が醜く焼け爛れている。だが、これもこの子が手加減してくれたからこれですんでるのだ。この子が本気なら今頃私は火だるまか……さもなくばポチが我慢仕切れず介入して来てるはず。

「！ あれは、ガーディ!?!」

「ワンちゃんだー!」

茂みから現れたのは、こいぬポケモン。ガーディ。彼らが狙っていたうちの一匹だ。ようやく見つけたといったところか。

変わりに私は、”やけど”を食らったが……後ろに居た彼らは私が”ひのこ”を避けれたと思っているのか、幸いにも気づいてない様子だった。好都合。この程度の”やけど”、手のひらを握り混んでいればバレない。……だからポチ、そんな目で見るな。大丈夫だから。怪我は勲章。そうだろう?!

それよりも――

「パパ！ ガーディいた!」

「よしっ、パパに任せろ!」

「あ、ちよつと、待つ!?!」

確認すべき事がある。そう言おうとする前に、娘の手間功を焦ってしまつたらしい女の子の父親が、モンスターボールを野球ボールよろしくブン投げてしまった。豪速球がガーディへ向かう。

私も、ガーディも、誰も対応仕切れず、ある意味的確なタイミングでモンスターボールがガーディへと当たり――弾かれる。

「……ん?」

「やっぱりか……つと、ポチ。ポケモンバトルだよ。前に出て」

「グラア」

モンスターボールがポケモンに命中すれば、どんなポケモンでも一度はボール内に収まる様子を見せる。その後直ぐに破壊されたり、抵抗されて入りきれなかったりするが……弾かれるなんて事はまず無いのだ。

故に、弾かれる原因は限られる。 ”ゆうれい” の様にそもそもポケ

モンではないか、モンスターボールが不良品か、対象のポケモンが強すぎて当たった瞬間に壊れたか……あるいは、既に人のポケモンか。「貴方のトレーナーは、誰？ どこに居るの？」

ポチを前に出してポケモンバトルの形を取りながら、ガーデイへと語りかける。トレーナーは？ と。

人間の言葉なんてガーデイには分かるまい。しかし、ガーデイはポチの強烈な「いかく」を受けてなおこちらへ唸り声をあげている。震えながら、脅えながら、こっちに来るなど。どこかの鏡で見た、荒んだ瞳で。

「そう。一人なんだね。分かるよ。私も、つい最近まで同じ目をしてたから」

はぐれたのか——捨てられたのか。どちらなのかは分からないが、ガーデイは一人ぼっちらしい。目を見れば分かる。あれは世界で一人だけの異物だった頃の私と同じだった。

そして汚れ、荒れきった体毛を見るに……今日昨日はぐれた訳でもなさそうだ。本来の生息地からも遠く離れている。恐らく、捨てられた可能性が高い。

——捨てられた、か。可能性は考えてたけど……

捕まえたポケモンを捨てる人が居るだろう事は分かっていた。だからこそウカさんを通じて法律による重い罰則を用意して貰ったのだが……それがあってもやる奴はやるのだろう。バレなきやいと、知らなかったと、そんなつもりはなかったと。全く、ままならぬ。

ポケモンの命を預かるのだから、トレーナーも命を賭けるべきだろうに。最後まで共にいるべきだろうに。それが出来ないならゲットなんてするな。街灯に吊るされたいのか？

「ポチ、暫くお願い」

「グラア」

なんにせよ、このまま放置は出来ない。そう決断した私はポチにガーデイを抑えて貰う。

普通なら私が指示を出して的確に、やり過ぎない様に制圧すべきだ

ろうが……見たところガーデイのレベルはそう高くなさそうだし、ポチなら指示無しでも本能に負けず、冷静に戦えると思ったからだ。普段から一対多をこなしているのは伊達ではない。彼女なら問題なくやり遂げるだろう。

その間に私は……ガーデイの新たな飼い主を見つけなければならぬ。

「さて、見ての通りです。ガーデイは見つけましたが……どうやら捨てられた子の様です」

「捨てられた……捨て犬、の様なものですか？」

「おおよそはあつてます。ただ、先程も見たとようにモンスターボールの連れ去り防止の安全機能が働いてゲット出来ませんし、人間を怖がっています」

モンスターボールの連れ去り防止機能は優秀だ。優秀過ぎてボールごと捨てられた子が居ると、こうしてゲット出来ないポケモンが生まれてしまう。

こうなつた子を再度ゲットするには複数の手順が必要で、その苦労たるや一苦労どころか十苦労は要る。ほぼ不可能だ。

——それに、こうなつた子は初心者では重荷が過ぎる。

チラリ、と。ポチとガーデイの様子を見てみれば……そこにあるのは激しい戦闘だ。

勿論、ポチが終始優勢だし、億が一にもガーデイに勝ち目は無い。だが、ポチの目的はあくまでも制圧と時間稼ぎで、ガーデイには反撃の余地がある。

有利なポジションを取ろうと走り回り、*“たいあたり”*や*“かみつく”*でポチに飛び掛かって軽くあしらわれ、森の中だというのに*“ひのこ”*を放ち、それをやむなくポチが身体で受け止める。万が一の森林火災の危険を防ぐ為だ。全く、彼女の*“かしこさ”*といったら……だがその*“かしこさ”*故に戦闘が成立してしまっているのも事実。そろそろお仕置が必要だろう。

「お姉ちゃん」

「なにかな？」

「あのガーディ、さみしいの？」

「……そうだよ。一人ボツチ。さみしいだろうね」

さてどうやって制圧して心を折るか？ 折った後はどのぐらいの時間をかけ、どの様に心を癒していくべきか？ それを考えていた私に、女の子が私の服の袖を引いて聞いてくる。ガーディはさみしいのかと。

驚いた、というのは女の子に失礼だろうが、正直驚いた。どうやら感受性が強い子らしい。経験など無いだろうに、ガーディの心境を的確に読み取っていた。

「パパ、わたし、あのガーディがいい」

「え。いや、でもあれは……」

この子なら、このレベルの感受性をポケモンに向けられる子なら、あ  
るいは。そう期待した私は間違っていた。女の子はあのガー  
ディが良いと父親にねだったのだ。火を吹き、暴れ狂うポケモンを！  
父親はそれに答えない様子だったが、暴れ狂うガーディを見て腰が  
引けていた。あれを家の中でもやられると困ると。あんな狂犬の面  
倒は見れないと。

——大人と子供では見る世界が違う、か。

自己保身をはかる父親と、そんな親とは違うモノを見ている子供。  
今女の子の目に映っているのは怖いバケモノか、それとも……

——そういえば、ポケモントレーナー達の独り立ちはだいぶ早かつ  
たな。

基本的にポケモントレーナーは小学校を卒業して直ぐの子供達が  
挑むものだ。十代になっただけの子が最初のパートナーを選び、旅  
立ち、成長していく……あれは子供の高い感受性がポケモンとのコ  
ミュニケーションに大事だからかも知れない。感受性が腐らないう  
ちにポケモンと接する為に、ああも早く旅立たせる……ガーディに心  
を寄せる女の子を見ると、ふとそんな気がしてきた。ポケモント  
レーナーとして最適なのは、感受性の高い子供だと。

ならば、私の様な人間がする事は一つだ。

「ポチー。 なきごえ」。 押さえ付けて」

「……お姉ちゃん？」

「大丈夫だよ。ガーディと、お話してみよう？」

その為の時間は、なんとか作り出してみせる。そう女の子に笑いかけ、迷いまくっている父親を視線から外し、私はガーディとのポケモンバトルに戻る。

勝利条件はガーディの無力化。

敗北条件はガーディの戦闘不能。その他被害が周囲に発生する事……中々に難しい。だがポチとなら、楽勝だ。

「“ひのこ”を受け止めて、もう一度“なきごえ”」

これなら避けないと学習したのだろう。頻繁に撃ってくるようになった“ひのこ”をあえて受け止めさせ、更に“なきごえ”を重ねて“こうげき”を下げる。

バトルは長期戦の構え。しかしポチはまだ余裕があり……その一方ガーディには疲労が見えた。ポチを圧倒しようとして動き回る足は鈍り、ポチにマウントを取られる回数が目に見えて増えている。必殺だと再度放たれた“ひのこ”もイマイチ勢いが無い。ポチに当たる前に殆んど消えてしまっているような有り様だった。

——気力と、あとPPも尽きたかな？

PP。それはポケモンが使用する“わざ”の使用回数制限の数値の事だ。“はかいこうせん”なら5回、“なきごえ”なら40回といった風に見える回数が制限されており……“ひのこ”のPPは25。つまり“ひのこ”は25回が使用限度の技だ。

とはいえ、それはゲーム時代の話。現実化して個体差がより顕著になった今ではかなりのバラつきがあったりする。例えばその辺野生のポケモンはゲーム時代よりPPが少ないのか直ぐにバテてしまうが、ポチぐらいにまで鍛えればゲーム時代以上のPPを持てるのだ。勿論、“ポイントアップ”等のドーピングアイテムを使わずに、である。その力量たるや頑張れば“はかいこうせん”10連射もいけるのだから、レベル差は残酷としかいいようがない。

そして目の前のガーディがどちらなのかは……最早言うまでもなく前者だろう。しかも“ひのこ”の撃ちすぎで他の“わざ”のPP

まで釣られて減っていると見える。このまま放置すればHPが削れて早晚気絶するだろう。

——ここだ。

火を吹き、暴れ、噛みつかんと暴走するガーディを適度に追い詰められるチャンス。そう判断した私はポチに指示を出す。

「ポチ、手加減しつつ、たいあたり」

伝説のSATUMA人と噂されるおじいちゃんに鍛えられたのは伊達ではない。彼女の絶妙な手加減がされた「たいあたり」は、暴れ狂うガーディを的確に軽く突き飛ばす。

背後から息を飲む声。一瞬不安になるが……まだガーディは確りと地に足をつけ、意識を保っていた。流石はポチだ。ひよつとして「てかげん」も覚えてるんじゃないか？

——賢い。うちの子賢い。見たた？ ねえ見てた!?! 私の指示を的確に読み取って、本能を抑えての絶妙な手加減。流石ポチ。賢い! そう内心気分を跳ね回りさせながらも、外面では平静を取り繕う。後ろのギャラリーに説明しないとイケない故に。

——さて、どう説明しようかな？

私からすれば今のはポケモンバトルでしかなく、それ以上でも以下でも以外でもない。だが、ポケモンバトルを知らない人からすればどう映るだろうか？

闘犬、リンチ、弱いものイジメ、動物虐待、野蛮……そう指を指されて批判される可能性はゼロではない。勿論それらは真実ではないが、同時に嘘でもないからだ。

だからこそ、ポケモンバトルとは何なのかを説明しようとして……どうやらその必要が無い事に今更ながら気づいた。女の子が、一歩前に進んでいたのだ。

恐らく彼女の目に見えているのは暴れ狂うガーディでも、野蛮な闘犬でも無い。もっと違うものが終始見えていたのだろう。

……あるいは、ポケモン達の声すら聞こえているのか。

——子供は、純粹だな。それとも、私が歳を取ったのかな？

ポケモン達の声が聞こえる程の純粹さ。最近お腹真つ黒な大人達

の相手をしていたせいか、すっかり忘れてしまった感覚だ。それも取り戻せそうにないソレ。

だが、目の前の子供はそれを持っている。ならば、私の様な老人がやる事は背を押すこと、後ろを守る事だろう。

「お姉ちゃん。あのね……わたし、ガーデイとお話したい」

「うん、良いよ。今なら聞いてくれると思う。……行っておいで」

ガーデイと話がしたい。そう言う少女に道を譲り、危ないからと女の子を制止させようとする父親を睨んで止める。勿論、安全の為にポチは女の子の方につけておく。

——まあ、かみついたりはしないだろうけどね。

今のガーデイのHPは十中八九レッドゾーン。その上心は殆んど折れ、くっ殺状態だ。話の1つや2つはスムーズに出来るだろう。

そう確信する私の予測は正しく、ガーデイは女の子が近づいても噛み付かず、火も吹かず、威嚇の唸り声を上げるのが精一杯だった。私に噛み付き、〃やけど〃させた力は既にガーデイには無い。……最初からその調子だと私も〃やけど〃しなくて済んだんだけどなあ。そういう〃せいかく〃なのだろうか？

「怖くないよー、怖くない」

腰を落とし、ガーデイとなるべく視線を合わせて、女の子は手を伸ばす。怖くないから、一緒に来ない？ と。

その手はガーデイまであと少しのところまで来たが……ガーデイがその手を取る気配は一向にない。昔の私そっくりな目でニンゲンを見て、唸るだけだ。こっちに来るなど。

——願わくば、上手く行って欲しいけど……

そうは思うが、こればかりはガーデイと女の子次第だ。彼女の父親ですらガーデイを刺激する事を考えてか口が出せない。

出来れば今日公園で見たガーデイの様に、微笑ましい関係を手に入れてほしいが……

「さて、どうなるか」

「グルウ」

「ん？ ああ、有り難う。ポチ」



後は女の子とガーデイの問題だ。ガーデイが本能を暴走させる気配も無いし、私達が出る事は無い。

それを察したのか、ポチは女の子の側から少しだけ離れ、近くにあった茂みの中をから「チーゴの実」を確保してきて、私に渡してくれる。これで「やけど」を治せと。

「ん、うえっ……苦しい」

気掛かりを解消し、やる事はやったと女の子の護衛に戻るポチを見送りながら「チーゴの実」を口に含む。瞬間、凄まじい苦味が味覚を叩き潰しに来た。私が甘党という事もあってか、吐き気寸前の苦味が暫く口の中を蹂躪し……気づけば手のひらの「やけど」は消えていた。流石は「きのみ」だ。物理法則さんは青吐息だな。

そんな風に私が物理法則の脈を測っている間にも女の子とガーデイの会話は続いていて……いつの間にかガーデイの唸り声が消えていた。

「！……へえ？」

見ればガーデイの目に光が見える。それは私がポケモンの絵を描き始めた頃そっくりで……ホンの僅かな、しかし、希望の光だった。

どんな言葉を投げ、どんな光を見せたのか？ どうやら女の子はガーデイの説得に一先ず成功したらしい。

——しまった。友情シーン聞き損ねた……

ユウジョウ！ ユウジョウ！ とアイコンタクトを交わす女の子とガーデイ。その切欠を見損ねてしまった事に今更気づく。「やけど」の傷があんまりにもじくじくと痛むから、つい意識を逸らしてしまった……不覚。

だが、ここから先のゲットシーンは見ておかねば。そう確りと見張っていると、唐突にガーデイが茂みの中へと消えていく。

——？ 和解はしたけど、ゲットはしない感じかな？

そう思考するのはホンの少し。直ぐにガーデイが茂みから出て来た。その足元には……泥で汚れたモンスターボール。どうやらガーデイの「もちもの」らしいが……いや、まさか。

「よろしくね。ガーデイ」

「がう」

私が邪推する際に、女の子がモンスターボールを拾って、ガーディをその中に入れてしまう。ゲットではない。ボールに戻したただけの光。つまり、あのモンスターボールは……

「そっか。捨てられても、ずっと持ってたんだ」

恐らくあのガーディの前のポケモントレー……いや、根性無しのゴミ虫はモンスターボールごとガーディを捨てたのだろう。

やがてガーディは捨てられた事に気付き、自らモンスターボールから出てくるが、その後の行き場所も無く……今に至ると見えた。

「……捕まえた、のですか？」

「ええ。娘さんが、一人でね」

怒涛の展開について行けなかった大人に、置いてけぼりにされた老人が肯定を返す。見ての通りだと。

……次いでに、老婆心も出しておくか。

「分かっていると思いますが、ポケモンの所有には重い責任がのし掛かります。決して捨てたりしないで下さい。ましてや一度捨てられたガーディを……もう一度捨てるなんて事は」

「……はい。分かっています」

確かに予想外の事ばかりだったが、こうなった以上そんな事をするつもりはない。そう男気を見せる父親に領きを返し、嬉しそうにモンスターボール片手にトテトテと走り寄ってくる女の子を迎える。良かったねと。

「おねえちゃん！ ガーディ、ゲットできた！」

「うん。おめでどう。……ところで、なんてお話したの？」

「んー、一緒に居ようって。一人はさみしいよねって。そうお話ししたの」

「……そっか」

チラリ、と。女の子の目に独りぼっちの寂しさが見えた。親との仲が悪い訳でもなさそうだが……いや、両親共働きで一人でのお留守番が多いのかも知れない。

だとすれば彼女もまた孤独を知る者。ガーディはそこに共感出来

たのかも知れないな。

「ねえ。良かったらお姉ちゃんにガーディ見せてくれる？」

「うん。良いよ」

ガーディの興奮を収める為とはいえ、ボコボコにした張本人に見せるのは嫌かも知れないと思ったのだが、女の子は快くガーディをモンスターボールから出してくれた。

——やっぱり。彼女にはポケモンバトルが見えていたんだ。

野蛮な闘犬なんかではない。絆や、魂の輝きが見える美しきポケモンバトル。それが見えていた同志……立派なポケモントレーナーに深い満足と感謝を感じながら、私はモンスターボールから出て来たガーディに手を伸ばす。

噛み付かれ、火を吹かれて“やけど”させられるかとも思ったのだが……それは杞憂で、ちよつとやさぐれた様子ながらもガーディは確りと撫でさせてくれた。二度、三度と撫でていると直ぐに嫌がりだす辺り、気を許したのはそこまでらしいが。

「グレア」

「ガウ」

私の手からガーディがスルリと抜け出し、そんなガーディにポチが近くから取って来たらしい“オレンの実”を渡す。良い根性だったと言わんばかりに。

「お姉ちゃんはやる事があるからここでお別れだけ……ガーディ。大切にね？」

「うん」

ポケモン達がお互いに健闘を称え合う横で、私は女の子に別れの言葉を告げる。勿論、話したい事はシロガネ山ほどあるし、教えた事もテンガン山ほどあった。

だが、少しばかりやる事がある。それをやらずして先輩面するのは……残念ながら、最初のポケモントレーナーのやる事ではなかった。

——微かに聞こえるこの羽音……流星に、初心者巻き込みないかな。

私は女の子に言葉を送り、父親に再度釘を刺し、森の中から見送る。

女の子からは純粋なお礼を。ガーディと父親からは複雑な感情が混じったお礼や視線を向けられて。

……さて、と。

「ガーディを捨てたクズの身元洗い出し、ポケモンを捨てる事による罰則の更なる強化、既に捨てられたポケモンの搜索とケア。やる事は幾らでもあるけど……彼らの相手が先だね」

「グラーア……！」

ガーディを相手していたときとは比べ物にならない闘気をまとわせ、ポチが吠える。戦いだ、闘争だと。

その声を聞いて私も頭のギアを入れ換えておく。平時のものから、闘争の為の物に。

「ポチ、＼とおぼえ＼。 戦闘準備っ」

ポチの勇ましい＼とおぼえ＼が森に響く。私はここだぞと、挑む者はいないのかと。

そもそも今日、この辺り……＼トキワの森＼ 近くに来たのは気紛れではない。先ほどのガーディゲットの手伝いは完全に気紛れだし、息苦しかったのも事実だが、私にはそれらとは別の目的があったのだ。一応。

ひよっとしたら無駄になるかとも期待したのだが……森の奥から聞こえる、先ほどよりも大きくなった羽音を聞くに無駄にはならなさそうだ。

「――来た。スピアーの大軍……！ やっぱり、今日がここの羽化の日っ！」

「グラーアア！」

私達の目の前に現れたは無数のどくばちポケモン、スピアーだ。巨大な毒針を持つ彼らはさなぎポケモン、コクーンから進化するポケモンで……そのサナギからの羽化と言える進化は往々にして一斉に行われ、辺りに居たポケモンや人を襲う災害となる。

――そうは、させないけど……！！

ようやく今日会った人達のように、自分からポケモンと接しようとする人や子供が現れたのだ。そんなときにポケモンが人を殺したなん

てニユースが流れればどうなるか……考えたくもない。

だから、今日、彼らにはここで止まって貰う。他ならぬ、ポケモンバトルで！

「ポチっ！ シャドーボール！」

私がポチに指示を飛ばした牽制の「シャドーボール」——最近訓練の結果取得した数少ないポチの射撃「わざ」——が合図となって、スピアー達とのポケモンバトルの火蓋が切って落とされた——

### 第30話 私には夢がある

慣れというのは恐ろしい物だ。それは人間が猿から進化し、現代に至るまで生き抜くのに大きく役に立った能力だが……だとしても恐ろしい事に代わりはない。何せ最初は嫌だった事も、慣れてしまえば大した苦痛もなく受け入れられてしまうのだから。

空腹を感じてもやがて希薄になり、突然暴力を振るわれても痛みを感じず、世界で独りボツチの孤独感は当たり前になり、ボロ着れ一つで外に居ても寒さは遠退き、やがて全ての苦痛を認識出来なくなる。……それらは全て慣れによる物。ブラック企業のサラリーマンなんてその最たる例だ。

——だから、これも慣れてしまったという事なのだろう。

今私が着ているのは気楽なパーカーやジャージではない。ヒラヒラとした……いわば年頃の女の子が着るような服だ。Tシャツはお上品なブラウスに、ジャージのズボンも清楚なロングスカートに、パーカーはシルクのスカーフに、ダボダボはヒラヒラに。

ハッキリ言おう。落ち着かない。

だが、これも仕方なかったのだ。先日の責任を取る為に、着せ替え人形にさせられたのだから。

——反省は、まあ、してるけども……

先日別荘を抜け出してゲットの手伝いや、寝起きのせいかな暴走状態のスペアー達の撃退をやった。やってしまった。そう、やってしまったのだ、私は。

勿論、無視するべきだったという話ではない。ゲットの手伝いは少々強引だったし、お節介だったが、それでも新たなポケモントレーナーを生み出した。スペアーの撃退は人とポケモンの関係が壊れてしまう事を未然に防いだ。どちらも必要な事で……しかし、抜け出してまでやる事ではなかった。特に後者は事前に一報を入れ、増援を頼むべき案件だったのだから。

『怪我でもしたらどうするの!?!』

『そうだよ！ スペアーって狂暴なんですよ？ 危ないよ！』

『……う。シロちゃん、その手のひら……何か、おかしくない？』

万が一の事を指摘されるだけなら……まあ、なんとかなった。しかし、サキが看破した手のひらの“やけど”痕。まだ完全な完治には至っていないかったそれを見抜かれては、もうどうしようもなかった。

あれよあれよという間に追い詰められ、自覚持つてクレメンズ……等とシロ民ですら敵に回って打つ手が無くなり、私は泣く泣くケジメとして受け入れなければならなかったのだ。着飾っての、テレビ出演を。

「間もなく本番再開します」

「あー、不知火白さん？ 間もなく出番ですので、準備をお願い出来ますか？」

「……了解です」

ああ、どうやら私には悲嘆にくれてる暇すらないらしい。そう吐きそうになったため息を呑み込んで、私はテレビ局の人についていく。出番だからと。

確か……予定では番組途中からの登場だったはずだ。他のキャンペーンとの兼ね合いや、各々のスケジュールの関係で生放送形式となっていたはず。

——幸いなのは、このテレビ局はユウカさん達の一党が買収済みな事か。

ユウカさんが方々に声をかけ、根回しをし、その結果ポケモン賛成派の資産家達が多くスポンサーとなっているのがこのテレビ局だ。なんでも人員の入れ替えや部署異動、場合によっては退職すらさせたという。おかげで変な質問や意味不明なヤジが飛んで来る心配はしなくていいはずだ。天下のスポンサー様にブン屋は逆らえないだろうし。

そんな事を考えながら私は廊下を歩き、周りの人達に合わせて……気づけばいつの間に舞台へと立ってしまっていた。ああ、スポットライトが眩しい。何か紹介を受けている。大勢の人の前で、こんなヒラヒラした服で——いったい、なんだってこんな事に？ 不幸だ……

「若きポケモンの専門家。不知火白さんです！」

「……どうも」

緊張されている様ですね！ 等とフォローか茶化しか分からない言葉を入れた後、進行役の女性が私に話題を振ってくる。いきなりですが、そもそもポケモンとはなんなのでしょうか？ と。

ポケモンが何か？ そんな当たり前の話、答えは決まっている。

「ポケモンとは、不思議な生き物です。今までの動物達とは全く違う、不思議な、不思議な生き物達……それがポケモンです」

そこで一度言葉を切った私は、腰元からモンスターボールを取り出し、中からポチを外に出して見せる。それは丁度、ゲームのオーキド博士と同じ様に。これがポケモンだと。

「ある人は新たな家族として、またある人は戦友として、彼らポケモンと共に生きています。私もその一人、という訳です」

何気なく出したポチを一撫でして心を少しだけ落ち着かせ、私は進行役の人と軽く言葉を交わす。ポケモンとは不思議な生き物で、危険でもあるけれど、友達なのだと。

「なるほど。白さんに取ってポケモンは友達なのですね」

「はい。一番近くに居る友達、家族。そう言えるでしょうね」

そうして幾らか言葉を交わした後、別の人から声が上がる。どうやら話題が変わるらしい。

「最近超能力の様な力を持っていたり、凄まじい身体能力を持つ人達が現れ、これもポケモンのせいではないかと噂されていますが……専門家としてはどうなのですか？」

「ああ、スーパーマサラ人ですね」

「す、スーパー？」

「マサラ人」

スーパーマサラ人。それはポケモン世界に生きる人々の事であり、そして人間を超越した新人類とも言うべき存在だ。圧倒的な身体能力は勿論、適性次第で超能力すら使いこなし、状況次第でポケモンの“わざ”すら生身で使ってみせる。その能力はどこぞのバトル漫画もかくやといった有り様だ。

『タケシ、 “ ” すごくいどう “ ” だ！』



『おう！』

ふと思いつくのはアニメの一幕。ギャグ描写の一つとは分かっているのだが、真面目に考察すれば納得出来てしまう背景もまたある訳で……うん。お前ら人間じゃねえ！……それは凶らずも、スーパーマサラ人を言い表した言葉なのだろう。

いやー、突然ポケモンの“わざ”を使おうとするサトシもアレだが、それに『おう！』の一言で答えてしまうタケシも中々にアレだ。スーパーマサラ人ならぬスーパーニビ人だな。うん。

「なるほど。しかし、その“マサラ”というのは何を意味するのでしょうか？ 聞いた事ありませんが」

「……さあ？」

「え？」

さて、マサラとは何を意味するのだったか？ まっさら、つまりは白い事、何も無い事、原点、始まりの地……そんな意味が合った様な気がするが、イマイチ定かではない。

ゲーム、漫画、アニメ。様々な媒体で説明されていたはずなのだが、詳しいところを“ド忘れ”してしまったぞ？ まさかテレビで不確かな事得意気に言うなれば訳にはいかないし、知らない事にしておくしかないが……うん、後で覚え直さないと。最後にマサラタウンの看板を読んだのは二十年以上も前の事だし、覚え直しはやむを得まい。過去の私がwikiにまとめてあると良いのだが……

「さ、さて、次の話題に行きましょう！ 次の話題は、ポケモン危険等級についてです！ 最近政府が決定したポケモン特別法ですが、その中でも一番気になるのによく分からない……そんなポケモン危険等級についてお聞きしたいと思います！」

私が答えられないのを見てマズイと感じたのだろう。進行役の人が次の話題を振ってくれる。次の話は危険等級の話らしい。

なるほど、それならよーく覚えている。つい最近アドバイザーとして意見と書類を求められたからな。同じ事を何度も何度も何度も何度も……部署事に聞いてくるな！ まとめて聞いて来い！ まとめて！ そして聞いた事は他部署とも共有しろ!! ——え

？ 縦割りぎよーせーの弊害？ 利権の奪い合い？ マニュアルに無い？ はー……ホンマつかえ。止めたらその仕事？？」

「では、白さん。危険等級とはなんなのでしょうか？」

「……そうですね。この危険等級ですが、一言で言えばポケモンの危険度を種族事に表した物です。これはAからEの五段階に分かれており、それぞれの階級で危険度が異なります。例えば一番上の危険度Aは、怒らせると国が減じるレベル。その一つ下の危険度Bでも町一つ消し飛ばす……となっていますね」

「そ、それはまた……」

他の分類だと危険度Cが死傷者多数。危険度Eまで下がって、ようやく非常に危険という表記に収まってくれるレベルだ。マニュアルがー利権がー支持率がー等と、散々に呻いていた割には上出来な仕事をしたと言えるだろう。

しかし、こうしてみるとポケモンがいかに規格外かがよく分かる話だ。弱い弱いといわれるコイキングも進化すれば容易く町を吹き飛ばし、上を見れば時空間どころか創世神までいる始末。今私の足元で目を閉じてリラックスしているポチも、その気になればこの場の全員を瞬時に惨殺出来るのだ。見た目では計れない戦闘能力だろう。

……ホント、ポケモン世界の人達はどうやって生き延びてるんだろうね？ いや、スーパーマサラ人が発生してしまう様な彼らが、地球人と同じホモ・サピエンスとは限らないけども。

「有り難うございました。……つと、どうやらここでお時間の様です。それでは白さん、最後に何か一言！」

「——そうですね。私には夢があります」

スツ、と。特に考えた訳でもないのに出てきたのは、そんな言葉だった。I Have a Dream——私には夢がある、と。

「それはポケモンと共に生きていく事であり、ポケモンと人が共に生きる世界を見る事であり……いつの日か、ポケモンと共に世界を旅する事です」

ポケモンと共に生きたい。ポケモンと人が共に居る世界に行きたい。ポケモンと共に、世界を見ても周りたい。

それは、私の原点だ。私の夢だ。まだ少年だった頃の、青い夢。だが、しかし、それはどうしても叶えられず……無念の中で死に、そしてそんな事は一度で充分だから。だから、もう、私は二度と止まる気は無い。

「私は私の夢を、全力で叶えたいと思います」

その為なら、例えどんなことでもやってやる。そんな覚悟の笑みを浮かべて、私は微笑む。

恐怖にかられたテロや、利権絡みの下らない思惑で、そんな物で私を止められるものなら、止めてみると――

### 第31話 配信、ミュウツーとミュウ

ポケモンと人との共存まで後一步。しかしその一步が中々詰められずにいる日々が続いて……数日。

上手くいかない事に苛立ち、ストレスを感じ始めていた私は、気分転換にお絵かき配信をやってみる事にした。久々の、本当に久々の配信を。

「何だか、一年ぐらい配信してない気がする……」

流星にそれは気のせいだとは思う。思うが、ポケモンへの対応でこの手の自由な時間が作れなかったのも事実だ。ずっと書類仕事や根回し、広報活動に終わっていたせいで絵を描いてる暇がなかったのだから。

「ん？ あ、設定こつちか」

久しぶり過ぎて設定がうる覚えになってしまっていたが……それでも何とか設定、準備して、ふと思う。どの子を描こうか？ と。

「んー……」

現在関東にはカントー地方のポケモン達が殆んど出て来ている。まだ確認されてない子や、不確定な子も居るには居るが……いや、そうだな。そういう子達を描くか。

「となると……御三家か、それとも。三鳥は……目撃情報があるしね」  
サンダー、ファイヤー、フリーザー。彼ら三鳥については不確定ながらも目撃情報がある。雷雲を飛ぶナニカが居た。雲海の上で燃えるナニカが居た。あられが降る中で飛ぶナニカが居た。……そういった恐らく彼らだろうと思える話が、数件ばかりだが私の耳に入っているのだ。

となれば描くのは影も形も見えない御三家か、あるいは……とはいえ、配信時間的に描けるのはどちらか片方のみだろう。転生特典なのかなんなのか、私はポケモンに関して描くのが恐ろしく早い、それでも両方は無理だ。ブランクもあるし。

「うーん……よし。そつちにしようか」

少しだけ悩んだ後、私はどの子を描くか決めてしまう。御三家は後

日にして、今は彼らにしようと。

そうして設定も準備も終わらし、鳥でゲリラ配信を告知して………小一時間。ようやくその時間がやって来た。

「はいどうも。不知火シロです。……ちゃんと写ってますか？ 機材が全て変わっているので、勝手が分からないのですが……」

久しぶりの、最早懐かしきすら感じるお絵かき配信。その始まりはそんなありきたりな言葉で始まった。とはいえなんだか久しぶりですよね、と。

『キタ——（。▽。）——！！』『配信！ 配信！ 久しぶりの配信！』『一年は無かった気がする……』『↑半年も経ってねえよ？』『半年どころか三ヶ月以下なんだよなあ』『それでもご無沙汰には違くない』『万歳！』

そしてそれは彼らシロ民にとっても同じだったのだろう。立場も状況も何もかもが変わってしまったが、こんなゲリラ配信に来てしまう人達の思いはおおよそ同じだったようだ。

『シロちゃんカワユス』『ワカル』『ソレナ』

『シロちゃん様シロちゃん様ありがたやありがたや』『顔出し配信ありがたや』『今日も白髪がまぶしい……』『緋目の良さが分からぬとは……笑止』

『なんだか良いにおいしてくる。してこない？』『甘いな。実に甘い』『バレンタインより遥かにスイーティイイ！』『バレンタインは血が出る程には苦いもんな。分かるぜ』

だったようだ！

くつ、何が可愛い甘いにおいだ。中身は野郎なんだぞ変態どもめ………！

「あー、では始めていきますね」

『塩対応！』『時代遅れの犬の扱いはなんてこんなものさ……』『とはいえこの塩対応も懐かしい……』『塩対応か。何もかも、皆、懐かしい』『死亡確認。ヨシ（現場猫）』『誤診ヤメロ』

このままでは收拾がつかない。そう察した私は早々にお絵かきを始める。以前と違う環境で、しかし以前と同じ様に。

「ん、機材が変わってるから……慣れませんか。こうかな？ うん、合ってた」

スポンサー……というかなんというか。ユウカさんが資金と環境を提供してくれた結果、私のお絵かき環境はかなりの進歩を遂げている。画用紙はペンタブへ、色鉛筆は専用のペンへ、配信機器はポンコツから最新鋭の物へ。……スポンサーに逆らえない権力者の皆様の気持ちが分かってしまったのは、うん。あまり考えないようにしよう。そうしよう。

「では描いていきますね。……当てても良いんですよ？」

気紛れに少しだけ挑発してみて、その後はするりくるりとペンを走らせ、考えるよりも感じるままに絵を描いていく。頭に思い浮かべるのはとある二匹のポケモンだ。方や自らの存在意義に思い悩む最強。方や気紛れで純粋な幻。

『シロちゃん、挑発……閃いた』『↑処刑』

『んー、なんだろう？』

『この特徴的な丸みのある人型……ミュウツート、ミュウじゃな？』『知っているのか？ シロ民！』

流石というべきか。さもありませんというべきか。まだ書き始めたばかりだというのに、シロ民は私がどの子を描いているかを言い当ててきた。

初代最強のポケモン。凶鑑ナンバー150。いでんしポケモン、ミュウツート。

初代幻のポケモン、凶鑑ナンバー151。しんしゅポケモン、ミュウ。

赤、緑、青、ピカチュウ。それら第一世代における最強にして幻のポケモン。映画一作目の看板を飾ったポケモン。それが今日描くポケモンだ。

『ご存知、無いのですか？』『彼らこそカントー最強にして幻のポケモン。ミュウツートとミュウです』

『ミュウツート。けんきゅうのために いでんしを どんどん くみかえていった けっか きょうぼうな ポケモンに なった』

『ミュウ。みなみアメリカに　せいそくする　ぜつめつしたはずの  
ポケモン。ちのうがたかく　なんでも　おぼえる』

『ほへー』『有能シロ民』『相変わらず設定が細かいな……』『なおフレー  
バーテキストにはバリエーションがある模様』『細か過ぎイ』

流石というべきなのだろうか？　最早私が説明するまでもなく、シ  
ロ民達は彼らの情報を子細承知していた。Wikiにまとめた情報  
は暗記済みという事らしい。彼らもまたポケモントレーナーであり、  
知識においても私との差異が殆んどないエリートという訳だ。

「流石ですね。ええ、今日描くのはミュウツーとミュウですよ。最強  
と、幻のポケモン。未だに未発見の彼らです」

彼らのコメントの幾つかに反応しつつ思うのはゲーム、そして映画  
の内容だ。

——ゲームでは単なるエンドコンテンツとフレーバーテキスト  
だったけど……

そう、ゲームでの彼らの扱いは実に雑だ。登場はシナリオクリア後  
で、やらなくてもいいエンドコンテンツの一つ扱い。これといったス  
トーリーがある訳でも無く、背景や設定は幾つのフレーバーテキスト  
から推測しなければならぬ程。

後年のパッケージを飾るストーリー付きの伝説達と比べれば、彼ら  
二匹の扱いは雑の一言だ。ミュウツーにゲーム内ストーリーは無く、  
ミュウに至っては思い付きで詰め込まれたという噂付きで、実際に  
よっては彼らの存在を知らずにゲームを終えてしまえるのだから！

——まあ、その分というか。映画は傑作だったなあ……

映画『ミュウツーの逆襲』

主役でなければその後も出演しているが……彼ら二匹の活躍や存  
在を語るなら、あの映画が適切だろう。ポケモン映画の初代にして、  
その後数十年以上続く伝説の始まり。最初の一作。

その内容を一言で言ってしまうのは難しいが……そうだな。  
私に言わせて貰えれば、生まれた是非を問う物語、だろうか？　自分  
は生まれて良かったのか？　生きていて良いのか？　何の為に苦し  
むのか？　なぜここに居るのか？　——そういう重たいテーマを

扱った作品だと私は思う。所謂、本当の子供向け作品というやつだ。とはいえ、どうにも私は昔からミュウツウの苦しみや憎しみに深く共感してしまつて……つと。

「ん、一先ずはこんなところですかね」

映画について思いをさせているうちに、身体の方が勝手に絵を仕上げてしまつていた。まだラフだけだが……ふむ、ブランクの割には中々上手く出来ているのではないだろうか？ 描いた実感も何も無いが、そんな気がする。

『ラフ完成？』『相変わらず迷いのない一筆書きよ……』『技法は巧みなんだけど、迷いが無さすぎるから簡単な一筆書きに見えるバグ』『修正しろ』『修正してやる！』『スイカバー』『ぱ、パワーが違い過ぎる！』  
うむうむ。反応も上々だな。流星は唯一の転生特典とでもいうべきか、多少のブランクでは腕は落ちないらしい。正直、助かった。このところは書類仕事ばかりだったからなあ……うん、今や殆んど消し飛んでいる前世を思い出せそうな勢いだったぞ？ あれは。

「さて、このまま駆け抜けてしまうか、それとも一旦置いてお話でもするか……今日はどちらが良いですかね？」

『お話が良き』『雑談しようず』『このまま描き上げられるのもおっかないからね。仕方ないね』『おっかないってきょうび聞かねえな……』『今誘発されるとね？』

『シロちゃんにとってこの子達はどんな子なの？』『ミュウツウとミュウカあ』『それ気になるな。どんなイメージなのか……』

ふむ？ シロ民がそういうなら色塗りは後にして、私なりのミュウツウ観でも語るとしよう。

そうだな、私からみたミュウツウとは……

「そうですね……ポケモンですね」

『ソヤナ』『い つ も の』『ワカル』『俺がポケモンだ』『お前もポケモンだ』『お前はポケモンではない』『お前をポケモンにする』『やめろ』

「うーん。難しいんですよ。ポケモンはポケモンですし、特にミュウツウはなんとというか、共感し過ぎてしまいますし……」



なぜ生まれたのか？　なぜ苦しむのか？　自ら望んだ訳でもないのに――なぜ私はここに居る？　……そんな事、私の方こそ言いたい。声を大にして、彼と一緒に、なぜ私は生まれたのだ！　と。

まあ、一度死んだ身として言わせて貰えば、答えなんて死に際にすら無かったのだけど。

『共感？』『ミュウツーに共感……』『なあ、確かミュウツーでさ……』『おいバカやめろ』『草が沼に沈んでいった』

「難しいですね。難しい。ミュウツーをなんと言えば良いのか、私には分からないです。あの子をどう見るかでその人の人間性や生まれが透けて見えますからね……」

『あ』『あっ』『あっ（察し）』

何やら察された様だが、はて？　何を察したのやら。

まあ、ともかく。私にミュウツーを語れというのは少し難易度が高いな。これがミュウなら『お気楽で純粋な子ですよええ。いい子だとは思いますが。いい子だとは。少し純粋過ぎる気もしますけどね』とでも言ってやれるし、映画版だとミュウツーよりもよっぽど攻撃的ですよね？　とでも言ってやれるのだが……ミュウツーが抱える思いは重すぎる上に共感し過ぎてしまうのだ。前世は勿論、今世についても。

なぜ私は前世の記憶を持ったまま生まれたのか？　なぜ私はポケモンの居ない苦しみを味わわなければならなかったのか？　なぜ私は今なお生きているのか？　答えなんて無いだろうその問いが、どうしようもなくミュウツーの叫びに共鳴してしまう。なぜ私は生まれ、苦しみ、ここに居るのかと。……後、何だって性別が変わってるのかともそうかな？　違うか。もうあんまり気にしてないし。

「――そうですね。一度会ってみたい……のかも知れません」

果たしてそれがゲーム版の様な狂暴なミュウツーなのか？　映画版の様な存在意義に悩むミュウツーなのか？　それともそのどちらでもないのか。それは全く分からないが……どちらにせよ、会ってみたい。最強のポケモンに。問うてみたい。生きる事に意味はあるのかと。貴方はどう思う？　と。

ミュウは、まあ……そのうち出てくるだろう。ポケモン達が賑やかにしてれば、少なくともポケモン達の前にはそのうち姿を表すはずだ。例えばギアナ高地に居たって同じだろう。あの子は……そういうところがあるからなあ。

「——さて、続きを仕上げてしましましょうか。何だかそんな気分です」

『ん?』『シロちゃんがお絵かきを急ぐのは珍し……あ(察し)』『え?』『ああ……なるほど』『あつ(察し)』『これはもうダメかも分からんね』『この絵を仕上げたい気分って……』『審判決定のお知らせ』『深読みし過ぎ。そう思えばどれだけ楽か……』『待て、慌てるな。これは孔明の罠だ』『風評被害』『いやいや、誰かが遺伝子弄くらなきや出てこないだろ……出てこれないよね?』『手遅れじゃないかなあ(世界の暗部を見つつ)』『銀の鍵はここにある』『?』

コメント欄の謎の納得にクエスチョンマークを浮かべつつ、私はくるりするとペンを走らせる。今はミュウツーとミュウの絵を完成させて、もっと彼らを知って貰いたい。そんな気分になりながら――

掲示板 間もなくポケモンリーグが開催されるよう  
です

「まもなく開催ー」お絵描き配信者シロちゃんについて語るスレ p  
art263【ポケモンリーグ！】

088：名無しの犬

ついにこの日が来たのだ。我らの努力が無駄ではなかった事の、証  
の為に。再びシロちゃんの理想を掲げるために。ポケモンリーグ開  
催の成就の為に。

世間よ、私達は帰ってきた！

093：名無しの犬

無事に開催出来そうで何よりだな。ポケモンリーグ。

094：名無しの犬

まさかこんな早期に出来るとはな……

096：名無しの犬

あれこれ理由はあるけど、一番の理由はシロちゃんが我慢出来な  
かったからという。

098：名無しの犬

ミュウとミュウツ―描いちゃったしね……我慢なんて出来ようは  
ずもなし。

100：名無しの犬

妙に影響力持ってるからなあ。シロちゃん。ポケモン化前までは  
そうでもなかったのに……今や政界、財界、芸能界その他諸々あちこ  
ちにパイプがある始末。

そんな娘が本気になれば……なあ？

103：名無しの犬

イベントの企画立案実行なんぞベイビーサブミッション。

104：名無しの犬

ゴウランガ！ ゴウランガ！

112：名無しの犬

なおシロ民の役に立たなさは据え置きな模様。

106：名無しの犬

シロ民は所詮、先の（ポケモン化前の）時代の……敗北者じゃけえ。

108：名無しの犬

はあ、はあ、敗北者？ 取り消せよ、今の言葉あ！

109：名無しの犬

やめやめろ！

115：名無しの犬

リーグの日取りいつだっけ？

117：名無しの犬

>>115

ざっと一週間後だな。

ポケモンバトルする連中はコンディション整えとけよ？ 情けな

いバトルは勿論論外だが、億が一にも観客席に誤爆したらセブク物ぞ

？

119：名無しの犬

一応手の空いてるシロ民で“リフレクター”とか使って対策する

けど、完璧には程遠いからなあ。当たらないにこした事はない。

120：名無しの犬

もし仮にポケモンのわざが生身の人間に当たればどうなるか。考

えるまでもねえよなあ？

121：名無しの犬

ある程度はスーパーマサラ人化が進んでるだろうが……死者は避

けられまい。

123：名無しの犬

もしポケモンで死人出したら……

125：名無しの犬

決断的にケジメ。

126：名無しの犬

反ポケモン団体から避難殺到。

127：名無しの犬

反ポケモンの流れが強くなり、ポケモン排斥派が勢いを増す事間違いない。

128：名無しの犬

シロちゃんが更に病むのも確定。

129：名無しの犬

シロ闇が深くなるな。

131：名無しの犬

深くなるっていうか……殺人の片棒を、よりにもよって大好きなポケモンで担がれる訳だから……ヤバくね？

133：名無しの犬

ヤバい……かも？

いや、普通ならカミーユ物なんだけど、シロちゃん人間に興味無いから……

135：名無しの犬

ワンチャン「あ、そうですか」で終わりそうな気もしないではない。

136：名無しの犬

闇深あ！

137：名無しの犬

まあ、自分で人殺しちやっただ結果、今以上に人間に興味を無くす可能性もあるけどな。

138：名無しの犬

魔王ENDですね。分かります（白目）

140：名無しの犬

推測される権能を考えるとガチで魔王やれるのがなんとも……

145：名無しの犬

いやいや、お前らシロちゃんが基本良い子なの忘れてないか？ 流

石に殺人の片棒担がされたら普通に病むと思うぞ。

147：名無しの犬

良い子、良い子……まあ、良い子か？（今までの発言や提案が人間完全無視、ポケモン全肯定な事実から目を逸らしつつ）

148：名無しの犬

いうてシロちゃんからすればポケモンは我が子みたいなもんだし、多少はね？

150：名無しの犬

かといってそんな事を考えられる様な連中ばかりではない訳で……

152：名無しの犬

子供に責任取れとか言う奴出そう（予言）

153：名無しの犬

既に居るんだよなあ（クソデカため息）

154：名無しの犬

身体で払えばいいとかいう識者（人間のクズ）も居るしなあ。

173：名無しの犬

>>>154

その話、詳しく話せ（モンスターボールを取り出しつつ）

180：名無しの犬

実際問題その辺ヤバいんだよなあ。見た目子供だし、綺麗だし……下手すりや路地裏に死体が転がりかねん。

というか先日も勘違いストーカーと逆恨み野郎を排除したばかりだし。

185：名無しの犬

仕事無くなったのはお前の怠慢であってシロちゃんの責任じゃねえだろ。どんだけ支援策打ったと思ってんだ……

189：名無しの犬

農家とか畜産業が壊滅してるのは分かるぜ？ かといってそれを全部ポケモンのせいにしててもなあ。

190：名無しの犬

果樹園をきのみ園にして、まだきのみが出来てないところに売り出す人や、飼ってる牛や鶏がポケモンになったから、そのままポケモンブリーダーになった人とか居る訳で。

適応出来る人は適応してるんだよなあ。

192：名無しの犬

失業手当でもあるしな。

それを使い込んでポケモンのせいだ、シロちゃんのせいだつてのは……同情しようがない。

195：名無しの犬  
なおマスゴミの偏向報道。

196：名無しの犬  
はいはいポケモンが悪い。ポケモンが悪い。

198：名無しの犬  
子供が力を持つのは間違ってる！ 幼女が最強なのはおかしい！

……これマトモに聞こえるけど、根底にあるの嫉妬だからな。いい歳して（見た目）幼女に嫉妬するってどうなん？

200：名無しの犬  
マトモではないな。

201：名無しの犬  
つまり連中は……

202：名無しの犬  
いつから、マトモな人間が発言していると錯覚していた？

203：名無しの犬  
なん……だと……!?

205：名無しの犬  
いやー、ポケモン賛成派がスポンサーになつてるテレビ局や新聞社と、そうでないところの報道が毎度真逆で笑うわ。これはもうギャグでは???

206：名無しの犬  
そんな事しても視聴率が上がらないってそれ一番言われてるから。

208：名無しの犬  
しつつかし、この段で偏向報道する奴らが居るつて……反ポケモンのスポンサーとか居るのかねえ？

210：名無しの犬  
>>>208

ポケモンで利権消える奴は腐るほどいるからね。仕方ないね。

211：名無しの犬

リーグ開催当日も数ヶ所でデモだだよ。暇なこった。

215：名無しの犬

>>211

逆だ逆。暇だからデモとかするんだよ。趣味が忙しい人間がデモに興味示すか？ その日暮らしの人間がデモに参加出来るか？ 自殺寸前の奴がデモするか？ ブラック企業で三徹キメたサラリーマンが帰りにデモ行くか？ 赤字背負って締め切りに追われてる作家がデモやるか？

つまり、そういう事だ。

216：名無しの犬

うわあ……

219：名無しの犬

まあ、未来を憂いてーって奴もゼロではないだろうけどよ。一緒にくっついてる奴の正義が薄っぺらいからなあ。聞いててアクビが出る。

223：名無しの犬

だってあれ、分断工作だろ？ ぶっちゃけ。

224：名無しの犬

分断し、統治せよ。か。

228：名無しの犬

裏に居るのが何にせよ、ポケモン賛成派で日本がまとまると嫌な奴は腐る程いるって事だ。

賛成派と反対派でバラバラになってくれればそれで良し。国が疲弊し、国民が疲れ、団結に傷が入れば更に良し。そこに付け入る隙が出来るからな。国家戦略の基本やぞ、こんなん……

230：名無しの犬

つまり背後に居るのは……

231：名無しの犬

うわあ。うわあ……

232：名無しの犬

何で俺らこんな大事に巻き込まれてるんですかねえ……



234：名無しの犬

いうて世界が丸ごとひっくり返る訳だし、多少はね？

238：名無しの犬

今回のデモも暴徒化の危険が極めて大の為、警察は全力出動だからなあ。暴徒がポケモンを持っていた場合について聞かれたんで、ポケモンバトルでボコして逮捕すれば良いんじゃないですかねって答えておいた。……これで合ってた？

240：名無しの犬

>>238

それでおけ。シロちゃんもまずはポケモンバトルでボコするのは推奨してる。

241：名無しの犬

もう何でも良いからポケモンバトルしたいだけな気もしないではない発言だったけどな。

249：名無しの犬

ポケモンバトル。ポケモンバトルねえ。暇な奴らポケモン育てれば良いのに。ポケモンブリーダーはどこでも引く手あまただろ。

253：名無しの犬

ほんそれ。今から本気でやれば、ほぼ確定でエリートポケモントレナーなのに……そんなに新しい事が嫌なのか？

255：名無しの犬

>>253

深く考えるな。連中手頃なサンドバッグが欲しいだけで、何も考えてないゾ。

258：名無しの犬

シロちゃんを手頃なサンドバッグと勘違いしたアホなら腐る程見えてきたからなあ。俺ら。それ、何となく分かるわ。

259：名無しの犬

自分が最底辺だと思ってた俺氏。自分以下の人間がマジで居る事にショックを受ける。

262：名無しの犬

ビビるよな。子供をサンドバッグにしようとしてる奴が居るとか……

265：名無しの犬

まあ、俺らが居る限り辿り着けないし、くぐり抜けてもポチネキが居るんで全員まとめてブタ箱行きなんだけな。

266：名無しの犬

変質者とか、相当減ったんじゃない？ 向こう十年分の逮捕者出たろ。

267：名無しの犬

何で彼らは捕まらないとか思ったんですかねえ……（対人制圧が得意になってしまったポケモンとニキ達を見つつ）

268：名無しの犬

というか。逆恨み野郎はともかくさ、何であんなに変質者を引き寄せるんですかね……？ そもそも話。

275：名無しの犬

俺らも世の中基準では変質者定期。

278：名無しの犬

し、紳士の誓い守れてるから（震え声）

279：名無しの犬

yes ロリータ no タッチ！

281：名無しの犬

ようじよ信仰してる時点でなあ。

282：名無しの犬

うーん、やつぱあれかね？ ポケモン引き入れる為の致し方ないリスクなのかね？ こう、ブラックホールのな？

285：名無しの犬

ポケモンを引っ張り入れる力を手に入れたは良いが、セットで余計な物まで引っ張ってしまうと？

286：名無しの犬

強すぎた吸引力。

287：名無しの犬

ダイソン。

288：名無しの犬

無くはないが……うーん？

289：名無しの犬

何か違う気が……

293：名無しの犬

まあ、街灯に集まる虫の如く、アホがシロちゃんに引き寄せられるのは間違いないだろ。

296：名無しの犬

ホント、よく生きてたよな、シロちゃん。ポケモン来る前にくたばってる可能性普通あるぞ……

299：名無しの犬

忘れがちだけど、本人捨て子だしねえ。野垂れ死にもあり得た時点で……

301：名無しの犬

本人全く気にしてないから、つい忘れがちな事実。

305：名無しの犬

ポケモンの事除くと、とことん不運なんだよなあ。シロちゃん。

314：名無しの犬

シロちゃんが何をしたっていうんだ！

315：名無しの犬

>>314

ポケモンを生み出した。

316：名無しの犬

>>314

ポケモンを現実呼び込んだ。

317：名無しの犬

>>314

ポケモンで世界を塗り潰した。

322：名無しの犬

まあ、うん。

325：名無しの犬

(全力目逸らし)

330：名無しの犬

もしかして：抑止力。

333：名無しの犬

変質者が抑止力とかこの世界終わってんな……

335：名無しの犬

雑種にも程があんぞ!?

336：名無しの犬

世界は優秀な抑止力を求めています(切実)

338：名無しの犬

手頃な英雄が居ないところなるんやなって。

342：名無しの犬

細かく見れば宗教団体とか、失業者の割合もまあまあんだけど

……ねえ？

345：名無しの犬

変質者とはとにかく目立つから……失業者は同情の余地が目クソ

鼻クソ程度にはあるかも知れないと思えなくもないけど、連中はなあ。

347：名無しの犬

無職への風当たり強すぎんよー

348：名無しの犬

無職はポケモントレーナーになって。どうぞ。

350：名無しの犬

ポケモンブリーダーもいいぞ。ポケモンに噛み付かれるだけの簡

単なお仕事!

352：名無しの犬

>>350

それ死んでんじゃない？

353：名無しの犬

>>352

大丈夫。生きてるよ。

358：名無しの犬

これが、人材不足か……

360：名無しの犬

人を材として扱うからね。財として扱えば良いものを……

364：名無しの犬

それが出来る人間は処分される定期。

365：名無しの犬

奴隷制度は分かりにくくなっただけで、現代にも残ってるってそれ  
一番言われてるから。

370：名無しの犬

資本主義者め……

377：名無しの犬

資本主義といえば、大会の運営資金とかどうなってんだ？ そうと  
う突っ込んでるだろ。元取れるのか？

380：名無しの犬

>>>377

ユウカお嬢が説得した伊藤グループ筆頭に、ポケモン化に賛成の企  
業や団体が金出してるはずぞ。

億単位を、採算度外視で。

382：名無しの犬

今回転けても宣伝になれば良いという感覚。あれが金持ちの思考  
なんやなって。

383：名無しの犬

まあ、リスクは山程あるが、その分上手くやったときは凄まじいか  
らなあ。新規利権がガツポリや。

384：名無しの犬

誰でも食い付く。俺も食い付く。

385：名無しの犬

おごぼれ利権おいしいれす（＾q＾）ワー

392：名無しの犬

ただなあ。政界はグダグダだし、財界も……複雑怪奇なんだよなあ。ポケモン利権食えた奴と食えなかった奴で。

395：名無しの犬

大企業は伏魔殿だしな。

397：名無しの犬

アクシズを落とすべきは地球じゃなくてアナハイム定期。

398：名無しの犬

身体は闘争を求める。

399：名無しの犬

ACの新作が出る。

340：名無しの犬

あれも企業が悪いところあるしなあ……

351：名無しの犬

まあ、その辺は大丈夫だろ。

シロちゃんだけじゃなくて、お嬢も精力的に働いとるしなあ。上機嫌に。あれ、頼られたの嬉しかったんだろなあ。

352：名無しの犬

上機嫌だなあ？

354：名無しの犬

そりやそうですよ！ タカキも頑張ってたし、俺も頑張らないと！

355：名無しの犬

タカキ休め。

356：名無しの犬

ああ、そうだ。俺達が積み上げてきたもんは、全部無駄じゃなかった。俺達が立ち止まらない限り、道は続く（以下詠唱破棄）

357：名無しの犬

止まるんじゃねえぞ……

358：名無しの犬

キボウノハナー

359：名無しの犬

ネタが古い。

368：名無しの犬

まあ、その後シロちゃんがアイドルズに声かけたりする度にちよつとずつ不機嫌になっていったけどね……

370：名無しの犬

お嬢休めよ……あの余裕のなさ、絶対ストレスやん。

373：名無しの犬

あるいは更年期障害がもう来たか……うん？ 誰だこんな時間に？

374：名無しの犬

おめでどう>>373は消去された。

375：名無しの犬

シロちゃんの催眠ボイスが聞きたかったんだよもう半年もマトモにシロちゃんの配信見れてねえやつてられか！

379：名無しの犬

>>375

見てこいカルロ

385：名無しの犬

え？ シロちゃんに直接会えるんですか!?

386：名無しの犬

許可の無い者を通す訳にはいかない。

387：名無しの犬

キョカノナイモノヲトオスワケニハぬへへ。

389：名無しの犬

おいおい、そんなに怒る事はないだろ？ 最新のシロちゃん動向だ、激ウマだぜえ？

URL

390：名無しの犬

どうなるか試してみるか。

398：名無しの犬

>>389ー！ なんだこれは！ この俺をこんな安物の釣り動画で釣りやがって！

400：名無しの犬

>>389

釣りの出来映えを評価してやろうか？

100点だよ。

401：名無しの犬

どこの馬鹿だ。釣り動画なんて貼りやがった奴は。

402：名無しの犬

そんな事言ってる場合か。早く特定して始末しろ。

403：名無しの犬

怖いわー過激派よー

405：名無しの犬

身内からテロリスト出したから、多少はね？

406：名無しの犬

こういうケースは前にもあったよな？

407：名無しの犬

規律が全てだ。守れない者は、罰を受ける。

408：名無しの犬

カバンにするぞ。

410：名無しの犬

食べないでくださいーい！

411：名無しの犬

食べないよー！

412：名無しの犬

あの頃は良かった……

413：名無しの犬

そうだな……

415：名無しの犬

今、迫害されてきた者達の手には強力な武器が与えられた。

これより、ポケモン攻勢を開始する！

416：名無しの犬

ネタ切れです。



417：名無しの犬

>>416

切れたらさつさと補給しろマヌケエ……

425：名無しの犬

まあ、しかし、一瞬よく分からん新種のウイルスでリーグ開催が駄目になるとか言われてたけど、そんな事なかったしなあ。一安心だぜ。

427：名無しの犬

やけにタイミングの良い殺人ウイルスでも、ポケモンの前には無力よ。

431：名無しの犬

>>425

>>427

きのみがチート過ぎるんだよ……別の意味で医療崩壊してるわ。

432：名無しの犬

近所の農家、海外へきのみ出荷で大儲けな模様。

433：名無しの犬

まだ海外では育たないんだっけ？

435：名無しの犬

きのみの効果は海外でも幾らかは出るらしいけどな。

436：名無しの犬

こうして世界にポケモン化のくさびが打ち込まれるのだ……

439：名無しの犬

当人あれだし、科学は役に立たないしで殆んど推測だけ……まあ、まず間違いがないだろう現実。

441：名無しの犬

皆（ポケモン化のあれこれで胃が）死ぬぞ!?

442：名無しの犬

だが今日じゃない（他人事）

443：名無しの犬

チキンブリトー下さい

445：名無しの犬

コイツ直接店内に……

448：名無しの犬

山形リンゴ食べる

449：名無しの犬

山形リンゴ食べるんごー

450：名無しの犬

まあ、その山形リンゴもそのうち山形きのみになるんですけどね

……

452：名無しの犬

>>450

そんな、嘘だあー！

453：名無しの犬

>>450

嘘だ！

455：名無しの犬

>>450

オンドウルウラギツタンディスクー!?

459：名無しの犬

>>452

>>453

>>455

いくら叫ぼうが今更！　これが定めさ！　知りながらも突き進ん

だ道だろう!?!　正義と信じ、解らぬと逃げ、知らず、聞かず！　その

果ての終局だ！　もはや止める術などない！　そして、滅ぶ。人は、

滅ぶべくしてな！

462：名無しの犬

まだ苦しみたいか！　いつかは、やがていつかはと……！　そんな

甘い毒に踊らされ、いつたいどれほどの時を戦い続けてきた！

465：名無しの犬

これが人の夢！　人の望み！　人の業！　他者より強く、他者より

先へ、他者より上へ！ 競い、妬み、憎んで、その身を食い合う！

469：名無しの犬

怒涛の仮面語録はやめやめろ！

470：名無しの犬

認めたくないものだ。若さ故の過ちという奴を。

471：名無しの犬

坊やだからさ……

472：名無しの犬

それは違う仮面や。

473：名無しの犬

バエル！

474：名無しの犬

バエル！

475：名無しの犬

バエル！

476：名無しの犬

仮面……仮面か。一応。

477：名無しの犬

バエル！

478：名無しの犬

バエル！

479：名無しの犬

はいはいバエルバエル。

480：名無しの犬

インスタバエル。

481：名無しの犬

覇道に行くシロちゃんに100アグニカポイント。

482：名無しの犬

暗躍する割には役に立たないシロ民にはラストルポイントをやる。  
う。

483：名無しの犬

ラストルポイントじゃなくてペシャンポイントなんだよなあ。

484：名無しの犬

バエルを持つ私に刃向かうか……

485：名無しの犬

止まるんじやねえぞ……

487：名無しの犬

勝ち取りたい！

498：名無しの犬

唐突で悪いんだが、作業どこまで進んだ？

502：名無しの犬

あー、どこまでだっけ？

505：名無しの犬

大詰めぞ。会場の確保とかはとつくに終わってて、もう警備態勢の確認とかやってる。

507：名無しの犬

ワイ、正面ゲート警備マン。映画なら一番最初に殺られるポジ。

……誰か代わらね？

509

>>507

そんな事言ったら俺なんかスタジアム屋上だぞ？ スナイパーに殺られるか、ヘリで爆殺されるかの二択じゃねえか……

510：名無しの犬

内部警備も面倒なんだよなあ。コミユカそんなに高くねえつてのに。

513：名無しの犬

一番得してるの舞台警備の連中だろ。特等席じゃねえか。……まあ、俺の事ですがね。

515：名無しの犬

>>513

野郎オブクラッシャー！

516：名無しの犬

>>513

エリートポケモントレーナーの俺に勝てるもんか。

518：名無しの犬

>>516

試してみるか？ 俺だってシロちゃん親衛隊だ。

521：名無しの犬

何で俺は東京まで来て会場警備する事になってんだろっうなあ。

523：名無しの犬

>>521

よう、俺。

524：名無しの犬

こんなに活発に活動するネット民も居るんだなあ（すつとぼけ）

527：名無しの犬

俺らネット民っていうより……もう殆んどポケモントレーナーだしなあ。

528：名無しの犬

残当。

536：名無しの犬

しかし、これで俺もようやく生シロちゃんか。ブラック企業を徹夜テンションで辞めてからこっち、長かった様な短かった様な……

539：名無しの犬

さらばブラックサラリーマン。こんにちはエリートポケモントレーナー。

ワイもその口やで。

540：名無しの犬

ポケモン化前までならエリートポケモントレーナー（笑）だったのに、今やエリートポケモントレーナー（ガチ）だもんなあ。

541：名無しの犬

このまま行くとエリートポケモントレーナーは高給取りだし……あれ？ モテ期クルー？

543：名無しの犬

モテ期(金)

544 : 名無しの犬

金で買うモテ期か……オエー

545 : 名無しの犬

あ、ワイユニコインなんで。金に釣られる女に興味無いんで(とい  
うかハニトラ2回来てっから……)

548 : 名無しの犬

美少女でも非処女なら刺し殺す害獣は死んでどうぞ(一時期ポケモ  
ン持つてるだけでハニトラ来る事あったね、そういえば)

549 : 名無しの犬

風評被害なんだよなあ……

550 : 名無しの犬

そういえばハニトラのチャンネル来なくなっただな? 誰か食っ  
ちまった?

553 : 名無しの犬

>>550の顔面偏差値が低すぎる可能性。

まあ、俺らに頼らんでも自力でゲット出来るのは常識になったから  
な。その辺のキッズがポケモン持つとる事もしばしば……これじゃ  
ハニトラの必要性無いからね。仕方ないね。

555 : 名無しの犬

(.ω.)

560 : 名無しの犬

あれ、大丈夫なんかね? 子供の指示とか無視して暴れだしたら  
……

563 : 名無しの犬

>>560

子供だろうが大人だろうが人間である以上、ポケモンの前には等し  
く無力定期。

568 : 名無しの犬

人間とかいう下等生物。

569 : 名無しの犬

コイキングですら爆弾の爆発に耐えるのに、人間ときたら……

570：名無しの犬

“10万ボルト”にも耐えれず死ぬコイキング以下の生物。

571：名無しの犬

ちよつと強めの“たいあたり”くらっただけで死ぬ生き物が居るらしいですよ？ 人間っていうんですけどね。

572：名無しの犬

ポケモン登場で人間のヒエラルキー下がったからね。仕方ないね。

573：名無しの犬

なおシロちゃんの影響を受けてスーパーマサラ人化すれば耐えられる模様。

574：名無しの犬

ポケモンの“わざ”を受けて生きてる奴がいる。人間ではない

……

575：名無しの犬

じゃけん早く全人類スーパーマサラ人化しましょうねー

576：名無しの犬

あー、人類変革の音ー

579：名無しの犬

というか、むしろ大人の方が言う事聞かすの大変なんだよなあ。純粋な子供の方が先入観無く仲良くなれるから。

583：名無しの犬

子供は皆ニュータイプ。

585：名無しの犬

これが若さか……

588：名無しの犬

セツ……

590：名無しの犬

>>588

やめないか！

595：名無しの犬

しっかし、ポケモンバトルってトレーナーもカロリーー使うよなあ。  
緊張するし。なんか食うか。

599：名無しの犬  
パン。

600：名無しの犬  
もやし。

601：名無しの犬  
ボルシイチイ！

602：名無しの犬  
夜飯でタンメン！

603：名無しの犬  
フェーゲライン！

605：名無しの犬  
クロス☆

606：名無しの犬  
はい死んだー

607：名無しの犬  
チクシヨウメエエ！

608：名無しの犬  
アンポンタン。

609：名無しの犬  
大っ嫌いだ！ バァーカ！

610：名無しの犬  
おっぱいプルンプルン！

613：名無しの犬  
シロちゃんのおっぱいはツルンペタンでは？ ボブはいぶかしん

だ。

616：名無しの犬  
回転鳥も回れんだろ。流石に。

619：名無しの犬  
NOおっぱい。



620 : 名無しの犬  
NOおっばい。

621 : 名無しの犬  
NOおっばい。

622 : 名無しの犬  
NOおっばい。

623 : 名無しの犬  
回れる奴は居ないか……

625 : 名無しの犬  
いや、居るさ。ここに一人な！

626 : 名無しの犬  
ぶっちゃけシロ民ならシロちゃんおっばいで回れるんだよなあ。

余裕で。

627 : 名無しの犬

URL

629 : 名無しの犬

>>>627

ん？

630 : 名無しの犬

>>>627

ん？

633 : 名無しの犬

コブラじゃねーか！

634 : 名無しの犬

コブラじゃねーか！

637 : 名無しの犬

いや待て、あの孤独なSilhouetteは……？

638 : 名無しの犬

いや待て、あの孤独なSilhouetteは……？

641 : 名無しの犬

ヤツ……？

642：名無しの犬  
ヤツ…？  
645：名無しの犬  
コブラじゃねーか！  
646：名無しの犬  
コブラじゃねーか！  
649：名無しの犬  
二回も言っただぞ！  
650：名無しの犬  
二回も言っただぞ！  
653：名無しの犬  
三回も言っただぞ！ あのやずやでさえ二回なのに！  
654：名無しの犬  
三回も言っただぞ！ あのやずやでさえ二回なのに！  
658：名無しの犬  
くっ。  
659：名無しの犬  
くっ。  
663：名無しの犬  
千早は皆勤賞だな。  
664：名無しの犬  
千早は皆勤賞だな。  
666：名無しの犬  
お客様電磁サイリウムを投げるのはおやめください！  
678：名無しの犬  
お客様電磁サイリウムを投げるのはおやめください！  
681：名無しの犬  
Pさんって誰だよ。  
682：名無しの犬  
Pさんって誰だよ。  
689：名無しの犬

何の話してたっけ？

691：名無しの犬  
ハブ？

693：名無しの犬  
アナコンダ？

695：名無しの犬  
段ボール？

698：名無しの犬

>>695

それスネーク。

701：名無しの犬

どこかのバカがコブラOPのURLを貼りやがったからな。

704：名無しの犬

やったのはシロ民だ。特殊訓練を受けたシロ民だ！

705：名無しの犬

チエーンガンをバツクから出しなよ。

706：名無しの犬

出てこいクソツタレエエエ！

707：名無しの犬

ヴェアアアアア！

709：名無しの犬

武装ヘリで突っ込んでくりやなんとかなるんだ。

712：名無しの犬

やることが派手だねえ。

716：名無しの犬

お前ら語録で遊んでないで、大会に向けてポケモンバトルの練習で

もしろと……

720：名無しの犬

フリーザー発見！

725：名無しの犬

>>720

何だと!? 詳細に報告せよ!

726 : 名無しの犬

上空に飛行するフリーザーを……いや待て、あれは。

728 : 名無しの犬

こちらでも確認した。だがあれは、三匹居るぞ!?

729 : 名無しの犬

そんなバカな!

730 : 名無しの犬

どうなってる!?

731 : 名無しの犬

何が起こった!?

732 : 名無しの犬

ソースとケチャップ。どっち派だ?

734 : 名無しの犬

>>732

その話は後だ。

737 : 名無しの犬

サンダー、ファイヤー、フリーザー。カントー伝説の三鳥が編隊飛行してる!

738 : 名無しの犬

何が起こっているんだ……? 彼らが集まる事なんて、一度も無かったはずだ!

740 : 名無しの犬

こちらエリートシロ民! ひこうポケモンをゲットしておいた甲斐があった。追跡する!

743 : 名無しの犬

>>740

グツジョブ!

745 : 名無しの犬

>>740

ナイス!

746：名無しの犬

>>740

お前は俺の英雄だ。

747：名無しの犬

クソツ、駄目だ。高度が違い過ぎる。上がるまでに振り切られそう  
だ……こちらエリートシロ民。完全な追跡は困難！

749：名無しの犬

それでも戦い続ける。出来る事は、それだけだ。

750：名無しの犬

了解！

751：名無しの犬

了解！

752：名無しの犬

了解！

753：名無しの犬

大和魂を見せてやるう！

754：名無しの犬

突撃イー！

755：名無しの犬

バンザアアアイ！

756：名無しの犬

アアアアアアア！

757：名無しの犬

敵の潜水艦を発見！

758：名無しの犬

>>757

駄目だ！

759：名無しの犬

>>757

駄目だ！

760：名無しの犬

>>757

駄目だ！

762：名無しの犬

(^q^)ハイ

763：名無しの犬

(^q^)ワカリマシタ

764：名無しの犬

(^q^)リョウカイ

765：名無しの犬

(^q^)ジュンビハイイカ

766：名無しの犬

(^q^)ヤツガミエル

767：名無しの犬

(^q^)モンスターボールヲナゲロー

768：名無しの犬

(^q^)ワー

770：名無しの犬

本当に敵機に追われているのか？ 貴機の空域に敵機は確認されていない。

772：名無しの犬

>>770

バカモノオ！ 通信しなおせ！

773：名無しの犬

敵索敵内に侵入。警戒せよ！

774：名無しの犬

嚴重警戒。嚴重警戒。

775：名無しの犬

弾薬、欠乏。

776：名無しの犬

燃料、低下。

777：名無しの犬

離れるな！

779：名無しの犬

俺に任せろ！

782：名無しの犬

着剣せよ！

783：名無しの犬

着剣！

784：名無しの犬

着剣！

790：名無しの犬

三鳥が雲に入った。追うんだ！

792：名無しの犬

エリートシロ民、雲に侵入。着氷に気を付けろ！

793：名無しの犬

エリートシロ民。雲の中ではそちらの様子が把握出来ない。

795：名無しの犬

状況か、そうだな。少し心が踊るよ。

798：名無しの犬

雲の中を飛行しながらスマホ弄ってるのか……

801：名無しの犬

スマホ運転ってレベルじゃねえぞ!?

803：名無しの犬

いつも平気でやってる事だろうが！ 今更ご託を並べるな！

804：名無しの犬

飛行中のスマホ使用を罰する法律が無いから逮捕されない定期。

805：名無しの犬

早く法案整備して、どうぞ。

808：名無しの犬

無理じゃないかなあ（余裕が出来るなり、ぐだぐだに戻った国会見  
つつ）

812：名無しの犬

三鳥とエリートシロ民が雲から出たのを確認した。

814：名無しの犬

わざの射程内だ。撃て！

816：名無しの犬

え？ 撃って良いの？ これ。

819：名無しの犬

流石に撃つたらふくろにされるんじゃないかなあ。

822：名無しの犬

分からんか。

私にも分からん。

824：名無しの犬

駄目じゃねえか！

825：名無しの犬

なんでさっさと対空ミサイルをブチ込まないんだ？ 落としちま

えばスツキリするのに。

827：名無しの犬

>>825

もおー、パパったら古いんだ。

831：名無しの犬

よし、突撃イー！

833：名無しの犬

シロ民FOX4！ FOX4！

836：名無しの犬

駄目だ、外れた！

839：名無しの犬

まだ高度が上がるのか……!?

840：名無しの犬

こちら地上観測員。目視での確認困難！

841：名無しの犬

こちらエリートシロ民。空気が薄くなって来た……これ以上は厳しい。断念する。



845：名無しの犬  
駄目か……

849：名無しの犬  
よし、海軍の支援を要請する！

852：名無しの犬  
>>849

駄目だ！  
853：名無しの犬  
>>849

駄目だ！

855：名無しの犬  
>>849

駄目だ！

858：名無しの犬  
駄目え!?! そんなあ……

865：名無しの犬  
結局、なんで編隊飛行してたかは分からずか。

866：名無しの犬  
おい、あれを見ろ！

867：名無しの犬  
868：名無しの犬  
空が、切り裂かれた様だ……

868：名無しの犬  
星……いや、虹なのか!?

874：名無しの犬  
878：名無しの犬  
ハウオウだ。

880：名無しの犬  
何？

こちらエリートシロ民！　ハウオウを  
885：名無しの犬

おい、どうした。ハウオウをどうした!?!

891：名無しの犬

こちらエリートシロ民！　ホウオウではない。ホウオウではない

！

892：名無しの犬

何!?

896：名無しの犬

あれは、ミュウだ！

898：名無しの犬

ミュウ!?

902：名無しの犬

三鳥も編隊飛行を解いた。ミュウを見に来たのか？

903：名無しの犬

こちらエリートシロ民。ミュウを見失った。目標はテレポートで

どこかに移動した模様。

908：名無しの犬

なん……だと……!?

911：名無しの犬

どういことだってばよ!?

912：名無しの犬

まるで意味が分からんぞ！

913：名無しの犬

何かが起ころうとしている。だが、何が……？

925：名無しの犬

あれ？　この辺って、シロちゃんが居る別荘の近くの様な……？

……

……

……

### 第32話 旅の終わりが始まった

遂にこの日がやってきた。私はずっと、ずっと待ち望んでいた日。この世に生まれてから……いや、前世から待ち望み続けた日だ。私  
が、私と志を同じくする者全員が夢見た日が、今日、ようやくやってきた。

そう、ポケモンリーグ開催の日が。

ミュウが空を飛んだあの日から……二週間。本当に頑張った。今まで模頑張ってきたが、それ以上に頑張った。

終わってみればやれば出来るの一言だが、ここに来るまでどれ程の苦労と苦難があったか。とてもではないが語り尽くせない。

「やつと、ここまで……」

貸し切り状態にされた——世界大会にも耐えうるレベルの——大型ドーム。その最上層の一角から、私はポチと共にドームの様子を見下ろす。

眼下には無数の人々が席を埋めつくし、開催の瞬間を今か今かと待ち望んでいる。その脇や腰にポケモンやモンスターボールが見えるのは、私達が今日まで頑張ってきた証だ。

報道席には国内のオールドメディアだけでなく、海外からも人が入って……というか、海外から来たメディア関係者の熱量の方が凄いくらいだ。ジャパンはクレイジーだぜとかなんとか言っていたらしいが……クレイジーの一言で片付けられない存在を、彼らは見る事になるだろう。

VIP向けの席を見れば、なんとなく知っている顔触れがチラホラと見受けられた。流石に呼ばなかった立場の人も居るが、他国の外務関係の人間や、各界の著名人や大臣クラスの人間が見られるのは、このリーグがいかに重要で巨大化したかの証明に他ならない。

——私は、ここまで来た。

ポケモンを世界に認めて貰う。その終着点であるポケモンリーグ。その開催には問題が山積みだった。

何せポケモンリーグは終着点。旅の終わりなのだ。『赤』と『緑』か

らの伝統。主人公は旅をして、その終わりにポケモンリーグに挑み、殿堂入りして、エンディングを迎える……当然、その開催時には全ての問題——悪の組織とか伝説のポケモンの目覚めとかだ——をクリアして。……しかし、残念な事に、非常に残念な事に！ 私のポケモンリーグは妥協せざるを得なかった。

「ミュウが飛んじやったからね……」

ホントはミュウやミュウツーが出る前に片付けたかったのだが、殿堂入り後に現れる彼らが来てしまったのであれば仕方なかった。ましてや頭上を飛ばれては、急かされてる気分にもなる。ポケモンリーグまだですか、と。

私は頑張った。物凄く頑張った。けれど、足りなかった。まるで、全く。勤勉さが足りず、怠惰だった。努力を怠り、無能だった。その結果がこれだ。ミュウは失望したに違いない。これが「サトシ」や「レッド」なら、ミュウは満足してくれただろうに。私のせいで。

——おかげで、反発は強いまま……

爆破予告に殺害予告は当たり前で、脅迫電話に至っては殆んど毎時間掛かってきてる。しかもポケモンリーグを強行すると発表してからは三倍以上になった。ポケモンリーグの会場を爆破する。ポケモン関連の施設を爆破する。私を殺す。ポケモンを殺す。止めなければ恐ろしい事になる。お前は人でなしだ……正直、鬱陶しい。イライラする。モンスターボールを握ってないと落ち着けない。年頃の女の子なら震え上がっただろうが、私はそうではないのだ。止まる訳がない。止まらない。

まあ、一度郵便物に偽装された爆弾が送りつけられたときは流石に驚いたが。とはいえ、それも玄関口でシロ民がアフロパーマになるだけで済んだので大した被害にはなっていない。

——マルマインの「だいたくはつ」に耐えるシロ民が、爆弾なんかで死ぬはずもないんだよなあ。うん。

下手な爆弾より強力な「わざ」をその身に浴びながら、日々研鑽を積むシロ民達からしてみれば、今更小型爆弾を送り付けられてもネズミ火花以上には見えないだろう。

当人達も笑ってたし、それからより一層修行に励んでいたから間違いない。かめはめ波！とか、アバンストラッシュ！とか、波動拳！とか聞こえてきたのには笑ったが。しかし、何か光ったり大きな音がしたりした事もあったのが……あれはなんだったのだろうか？ ポケモンの「わざ」の練習だったのかな？

#### 閑話休題。

それら嫌がらせとしか思えない妨害の数々だが、解せないのは組織的な気配を感じる物があった事だ。個人が突発的にやったのも無数にあつたし、どうせそれらは私が子供だから殴りやすいと思つた連中……既にユウカさん主導で法的処置に入っているから気にしなくていい。

だが、組織的な妨害は……謎だ。しかも一つ二つではなく、複数の集団から攻撃を受けていると思われるらしい。ユウカさんやシロ民達は詳しく教えてくれないのだが、どうにも国家クラスのバックが居る様だとも。

「悲しいなあ……ね。ポチ」

「グラア？」

悲しい。私は悲しい。そんなに沢山の人達がポケモンを認めてくれないのが。

勿論、そんな人達よりもずっと多くの人がポケモンと歩む事を選んでくれたいるし、その事は純粋に嬉しい。眼下に居る人達のように、新たなポケモントレーナーが数多く生まれているのは喜ばしい事だ。

しかし……あれだけ広報して、キャンペーンを打って、空気感を演出して、説明して、根回しして、頭を下げて回つたのに。

まだポケモンを認めてくれない人が居るなんて。

ポケモンの何が悪いんだ。可愛くて、強くて、暖かい。私と、私達と共に居るパートナー。それがポケモンだ。ポケモンなんだ。パートナーを拒絶する必要が、どこにあるというのか？

恐ろしい？ 怖い？ 怪我人だっている？ それは無知だからだ。ポケモンの事を良く知っていればそんな事にはならない。大抵の子が人懐っこい子だと分かるし、気性の荒い子だつて近づかなければい

いだけだ。その為の情報は何いぐらいいに出してる。それでこちらのせいにされても……困惑するしかない。

——煩いといえば、スポンサーも最近煩いんだよね。

スポンサー……つまりは各大企業からは利権や利益をもつともつととせつつかれており、それらを無視してのポケモンリーグ開催に不満感があるようだった。政界からも早すぎると言われているし、若干四面楚歌と化している。

幸いなのは民衆は味方してくれるだろうという事ぐらい……

ああ、私には分からない。なぜそんなに利権や利益を欲しがるのだろうか？ ゆっくりやりたがるのだろうか？ 利権や利益は充分に上げただろう？ もう充分ゆっくりやったろう？ ポケモン利権の八割はあちらに譲ったんだぞ？ 私やシロ民、ポケモンリーグが得れた利益はそのおこぼれでしかない！ だいたいポケモンが出てから何か月経ったと思ってるんだ？ にも関わらず更に利益を寄越せ？ ポケモンリーグはまだ早い？ ……いい加減、協力して貰っているという感覚より、足を引っ張られている感覚の方が強くなってきたのが本音だ。

「もう、邪魔はさせない」

「……グアラ」

腰のモンスターボールをぎゅつと握りこんで、そう呟く。

準備は出来てない。終わってない事も多い。アニメやゲームの登場人物や、その代わりだつて見つからない。けれど、もう我慢出来ない。私は止まれない。『ランニングシューズ』や『じてんしゃ』で、走り出したくてたまらないんだ。私は。

——妨害は、ある。間違いなく。

妨害。あるいは攻撃が行われる可能性は高い。

例えば、デモだ。今も会場近くで大規模なデモが起こっており、警察の人員は殆んどそちらに割かれているのが現状。正直、警備の手は手薄で……襲撃の前準備としては、上等過ぎる物だ。

デモ隊の言い分？ ポケモンは危険だから、排除すべきなんだとさ。……ニホンオオカミを皆殺しにした頃から何も進歩してない辺

り、あれらが本当に人間なのか怪しい物だ。人間は考える葦だと言うのなら、考える事を放棄した人間は何なのだろうか？ 私には、タンパク質の塊以上には見えない。

——それが道をふさいでいるなら、カビゴンではなく、ただの肉の塊であるなら、私は。

私はここまで来た。完璧ではないかも知れない。全ての人が受け入れてはくれないだろう。しかし、あと少しで、夢が叶うのだ。

止まる必要が、無い。止まっただけはいけない。

『ついにこの日が来てしまったか』『ああ、始めてのポケモンリーグ開催だ』『ポケモンリーグキターー！』『ポケモンリーグキター』『ポケモンリーグキター』『わこつ』『今北産業』『↑まだ何も始まってないのでセーフ』『何も始まってない扱いされるお偉いさんよ……』『TSして美少女になつて？ どうぞ』

傍らに置いてあるノートパソコン。その画面に映っているのは、ポケモンリーグの公式配信だ。本当は私も配信しようとしたのだが……私にも仕事回ってきたので断念。結果、公式配信はこれ一つに絞られていて、配信画面はかなりの賑わいを見せている。定期的に弾幕が形成される程だ。その光景を見ると頬がゆるむ気がする。悪い事ばかりではなく、楽しんでくれる人は楽しんでくれているのだと。

そう、彼らもポケモンリーグ開催を望んでいる。旅の終わりを。旅の終わりの始まりを。

ああ、私は、私達は、旅路を終えるのだ。

『お、やっと終わったか』『校長先生のお話長いつてそれー』『喋ってたの大臣なんですすがそれは』『美少女の話なら長くても聞いてた』『お前ノンケかよ!?』『TS美少女も可』『それはホモでは』『なんだあ、テメエ……？』『なんだあ、テメエ……？』『なんだあ、テメエ……？』『なんだあ、テメエ……？』

ふむ、いつの間にかお偉いさん方の各種挨拶が終わった様だ。本当は私も挨拶する予定だったのだが、断らせて貰った。この身体は子供だし、格式張った挨拶では格好がつかないからね。

それに、ポケモントレーナーにはポケモントレーナーなりの挨拶の仕方がある。

『キタキタキタキタアア!』『アイドルコンビのエントリーだ!』『アイドルコンビのアンブッシュにより、会場のボルテージはうなぎ登り!』『実際アイドルコンビのパフォーマンスは素晴らしい』『ワザマエ!』『おおブツタよ、寝てるならさっさと起きろ』『エレクトリック!』お偉いさんの挨拶が終わり、司会進行によってデモンストラーションが開始された。これが終わればそのままの流れでポケモンリーグ開始となるので……ある種の大取に当たる。

その最初を努めるのは、カオリとサキのアイドルコンビ。そのポケモンコンテスト風パフォーマンスだ。

——けど、いつ見ても凄いな……

練習なら何度も見てきたし、リハーサルも見た。『わぎ』の指導をしたこともある。しかし、それでも素晴らしいと言うしかない光景だ。

チラリと会場に視線をやれば、皆が皆目を奪われている。……当たり前か。ポケモンコンテストなのだ。これは。

さて、演目はまだ続いているが……残念ながら私はここまでだ。この後のデモンストラーションの担当は、私だからな。そろそろ準備しないといけない。

「行く、ポチ」

「グレア」

うん。ポチもやる気充分な様子。コンディションは万全だ。

さあ、旅の終わり、ポケモンリーグの始まりを……始めよう。



### 第33話 武装勢力、襲来

ポケモンリーグの開催及び設立を祝うデモンストレーションが行われている……その最中。誰もが盛り上がりつつある会場内でただ一箇所、陰鬱とした空気が流れる場所があった。

会場警備、その指揮所である。

「俺もなあ、シロちゃんのバトル見たかったなあ……」

「ならそのモニターに張り付いてれば良いだろうが。そろそろ出番だろうし。というか退け。見えん」

「ちげえよ！ 生で見たかったんだよ！」

「黙れ！ お前は生ビール飲んでるんだから良いだろうがっ！ というか警備中に飲むな！」

「うるせえ！ これが飲まずにいられるかあ！」

キンキンに冷えてやがる……！ 犯罪的だ……！ 等と口走りながらビールをグビグビと喉に流し込むシロ民は、間違いなく酔っていた。

だが、それをたしなめる者は居ても、本気で咎める者も止める者も居ない。その気持ちは大なり小なり分かるからだ。このポケモンリーグの開会式はずっと推してきた少女の晴れ舞台であり、今まであちこち走り回って努力し続けたシロ民達の努力の結晶でもあるのだから。ハメを外すなという方が難しい。……だが、喜んでばかりも居られないのが現実だった。

「そういうえば、警察の人達は戻ってこれそうなのか？」

「あー……たぶん無理だと思うぞ。デモ隊が思ったより多いらしくてな。しかも既に暴徒化し始めてるらしい」

「そこかしこで煽ってる奴が居るっぽいな。まあ、警察もそれは予測してるから機動隊の準備は終わってるはずだぜ？ 何かあれば戦力を投入してくれるはずだ」

「それにそうなるの見越してたから、会場警備はポケモンリーグ……まあ、俺ら主体で進めてたからな。言うほど問題ないだろ」

「コミケとは訳が違うんだけどなあ……」

「ポケモンが出て来てからこっち、荒事多かつたもんな……そら慣れるわ」

無数の通信機やモニターが置かれた指揮所の中で交わされる、シロ民の不安。

それは急進するポケモン化運動に比例する様に過激になってきた反ポケモン派のデモ活動に対するものであり、ここが襲われるのではないかという懸念だ。反ポケモン派の説得をこれ以上は無理だと諦めたツケがいよいよ回ってきたとも取れる状況……だが、ポケモンに關しては基本的にタカ派で通っているシロ民に準備は抜かりなかった。増援の確保は前もって完了しており、警備自体にも支障は無い。

とはいえ……問題が全く無い訳では無かった。

「けど、自衛隊は動けないんだろう?」

「まあ、なあ……戦争になった訳でもないし、テロの声明が出されてる訳でもない。ただ正体不明の武装勢力に襲われる可能性が高いってだけだ」

「偶然にも、偶然にもポケモントレーナーの自衛官が非番を利用して、偶然にも会場内に居るが……さて」

「はいはい偶然偶然。意図してない」

警察はデモ隊の対応に忙しく、自衛隊も動けない。言い訳出来る範疇で戦力自体は確保しているものの、不安要素は残されていたのだ。法律関連での抜け穴等の事もあり、暗雲立ち込める状況。にも関わらず襲われる可能性は極めて高く……状況は極めて複雑かつ奇妙な事になっており、所謂、グレーゾーン事態に近かった。

平時と有事の中間点、国軍を投入したり宣戦布告するには事態が小さく、かといって民間や警察組織では対応できない状況。にも関わらず国家の主権が脅かされている事態……そして、そんなグレーゾーン事態に置いて明確な答えなど無い。何をしても非難されるし、何をしても被害が出るのだ。しかも状況を打破するのはあくまで個人の決断に掛かっている。

だがポケモンに決断を押し付ける事は出来ない。ならば、この場の個人の勇気ある決断はシロ民と……彼らの共通点である一人の少女

にゆだねられていた。今後の地球秩序、パワーゲームの行く末、ポケモンの未来が。

「何事も無ければ良いんだがな……」

「シロちゃん、楽しみにしてたもんなあ……でもまあ、馬鹿は来るだろうなあ」

「ポケモンに喧嘩売る奴なんて居ないと思ってるシロちゃんと、絶対居ると諦めた俺ら……どっちが正しいんだろうな？」

「俺らが間違つてて欲しいわ。今度ばかりは」

「ポケモンが新たな鉄と血に、抑止力になれたかと聞かれれば……なあ？」

「シロちゃん的には充分だと思つたんだろ。あれだけキャンペーン打つて説明して回つたし、身銭を切つて利益も投げまくつたんだから。なお現実」

「ポケモン派が過半数とは言え……ため息が出るわ。シロちゃんじゃなくても人類の愚かさに陥落ちするぞ。こんな」

全人類が叡智を得る日はまだ遠く、地球人類の革新は未だならず。今なお人々は既存の価値観でポケモンを測っていた。だから、この混乱と闘争は必然だったのだ。

ポケモンという新たななるフロンティア。絶大な力。膨大な利権。それらに集まる者共は数多く、特にパワーゲームに参加している大国からの視線は極めて熱く鋭い。グレイゾーン事態を活用し、リスクを最小限に抑えつつ成果を得ようとするのは殆ど間違いなかった。……無意識のうちに、ポケモンを格下に置いたまま。

中心人物である不知火白や、その近くにいるはずのシロ民の対応能力を越え、日本国家の弱みを打ち抜き、強みを出させないままに。

そして、誰もが懸念した通り、事態が動く。

「レーダーに反応だど？ 間違いないのか」

「間違いありません。リヴァイアサン号からの報告では、突如として新たな反応が出現したとの事です。方位3―2―0。距離1キロ。コンテナ船の様だと事です……」

「南西1キロ？ 東京湾内じゃないか。そんなところに突然……まさ

か、テレポートか？」

始まりはリヴァイアサン号から入った奇妙な一報。コンテナ船が突如としてリーダー上に現れたという情報だった。まさかテレポートなのかと混乱が僅かに広がり……やがて誰かが呟く。やつぱりやって来たか、と。

本音がネタか分からない一言。だが、それは全体に共有された。予想していた事だろうと。ならば。

「戦闘準備だ！ 所定の計画に従って防衛線の構築、避難準備にかか  
るぞ！」

「おう！」

誰かが叫び、誰かが答える。

酔っぱらっていたシロ民にはラムの実——かなり硬い——が投げつけられ、各々が予定した通りに動いていく。ある者は前線へ、ある者は避難誘導へ、ある者は情報収集へ。そして、更なる報告が飛び込んでくる。大変だ！ と。

「今警察の知り合いから連絡があつたんだが、デモ隊が暴徒化しや  
がったらしい！ こっちに向かって来てる！」

「だろうな。予測通りだ」

「それだけじゃねえ。連中、道路を封鎖してやがるんだ。増援の機動  
隊は出動すらままならねえ！」

「なに?！」

「そんなバカな！」

入ったのは増援が到着出来ないという報告。

そして悪い事は続くもので、あちこちから助けに行けないという報  
告が次々に飛び込んでくる。他の警察組織も、それどころか消防すら  
もデモ隊が邪魔で移動すらままならないと。それらをまとめると  
……ポケモンリーグの開会式場は孤立無援と化していた。明らかに、  
狙って起こされた暴徒化だ。

誰かが息を飲む。予測されていたとはいえ、本当にここが陸の孤島  
と化すとは、と。

そう、予測はされていた。ポケモンという大き過ぎる力を前に、ど

こかで大きな作戦が実行されるであろう事は。それに利益を計る大  
国の暗部の思惑や、プライドを捨てられない軍部の手が絡む事も。だ  
が、だからといってホントにやらかすとは誰が予想しただろう？ 誰  
もが予測はしつつ、現実的では無いと一笑していた破壊工作作戦……  
それが今、実現されようとしていた。

「リヴァイアサンCICよりシロ民各員に通達！ 不明船から複数の  
ブリップが出現、船自体もこっち目掛けて動き出した！」

「おいでなすったか……」

「屋上の観測員から連絡！ 複数のヘリがこつちに向かつてくる！」

「機種は？」

「初期型のハインドにイロコイ……とにかく沢山だ！ 国籍表記は確  
認出来ず！」

ハインド、Mi-24はソ連製の攻撃ヘリであり。イロコイ、UH  
—1はアメリカ製の汎用ヘリだ。

つまり、あり得ない。お世辞にも仲の良いとは言えない超大国のヘ  
リが並んで飛行するのは現実的ではなく、見張りのいう沢山という言  
葉は何も間違っではないなかった。こんな事はあり得ないと。しかし、  
国籍表記が無いという事実が一気に現実味をかけてくる。あり得な  
いが、あり得るに。

「あくまでテロリストによるテロって形は崩さない気か……しかし、  
洋の東西問わずとはな。どこから支援を受けたのか、誤魔化す為か  
……？」

「いや、全部じゃないか？ それが合同したんじゃ……」

「まさか。ロシアとアメリカが仲良しこよしでポケモン案件に挑んで  
いるとでも？ テロリストを尖兵にしたてて？」

「ポケモンの戦闘能力を測りかねているのはどの国も同じだ。アメリ  
カもロシアも、中国だってそれは変わらん。ヨーロッパもな。バカの  
計画に便乗しようっていうバカが少しぐらい居ても驚かんがね。そ  
れに送ったのは兵員じゃなく、武器だ。横流しぐらいならどこでも発  
生してる」

「そりゃそうだろうが、こいつも派手に動くか？ 普通。……いや、何か

ミスったか？」

「ポケモンが登場した時点で、スパイ合戦とそれに付随する軍事介入は避けられんだろ。ポケモンの強さ的に考えて。それより、避難誘導は？」

ポケモンの戦力を測り、可能ならポケモン優位の流れを破壊する。一見ふざけた話ではあるものの、そうでもしなければ軍事力でパワーゲームでの優位性を確保していた国家は大打撃を受けてしまうのだ。事が極東で収まらないのなら、尚更。

その為に大国が動いている……そんな事は分かりきっているのだ。ならば今はやれる事をやろう。そう口にしたシロ民が避難の状況を確認する。どうなっているんだ？ と。

「マニュアル通り進めているはずだが……」

「パニックを避ける為、有毒ガス発生の名目で進めている。会場内の混乱は無い。抽選とか言いながら怪しいのを落として、選り好みさせてもらったかいがあったな……スムーズだよ」

「三割は何事もなく終わるとはいえ、残り七割の確率でこうなると予測してたからな……さもありません」

「陸側のゲートから避難させているんだよな？ だとすると避難完了まで持ちこたえる必要があるぞ。怪我人なんぞ出したらメディアから集中砲火をくらう」

「……現場から連絡があった。一部VIPは脱出成功だと。……早くね？」

「襲撃があるのを知っていたな？ リストを作って……いや、脱出した連中はいい。民間人の避難を急がせよう。巻き込まれたのは事実だ。人員は足りているのか？」

「ちよつと待て……ゲート近くが少し手薄だ。誰か行ってくれないか？」

ここ数ヶ月荒事に従事し続け、人によっては軍事教練まで受けたのはダメではないという事か、慣れた様子で状況を話し合いつつ対応していくシロ民達。

そんな彼らの話題は次から次へと変わっていき……やがて一人が

ポツリとこぼす。そういえば、と。

「シロちゃんの様子は？」

その一言が出た瞬間、誰もが一斉に目を逸した。考えたくない現実だと言わんばかりに。

「ユウカ嬢&ハクリューとのポケモンバトルの直前だったんですよ」

「知ってる」

「無表情で、控え室に戻って行きました……」

「ガチギレですね。分かります」

「分かりたくねえよ……」

「アイツら死んだな」

予測では、最低でも彼女のポケモンバトルは出来る予定だったのだ。だからこそ盛り上げる為の演目が用意されたし、トーナメントも一応組んであった。チケットを販売して観客だつて呼んだ。

そもそもテロリストや大国側の理性が働いて襲撃されない可能性もあった以上、ポケモンリーグの開催をこれ以上延期する——既に数回延期されている——訳にもいかなかった。

予想外だったのは、シロ民の予測を越えて連中が速過ぎた事。そして人類がポケモンをすんなり受け入れなかった事にあった。

「これ、シロちゃん闇落ちするんじゃない？……え？ 未だに誰もポチネキ止めれないんだけど？ シロちゃんが人類粛清し始めても止められなくない？」

「止めれないなあ。ポチネキもそうだけど、シロちゃんもスーパーマサラ人化してるから……仮に対物ライフルで狙撃しても無意味なのよね。戦略核兵器ならワンチャンあるけど」

「笑うわ」

「お前ら……その辺にしとけ。だいたいシロちゃんがニンゲンを殺す前にこちらで捕縛すればいいだろうが。というか、それしかない」

襲われているというのになんとも間の抜けた話をしながら、それでもシロ民達は各々やるべき事を果たしていく。

ポケモンとの未来の為に。

## 第34話 VS現代兵器

### MISSION

「ポケモンリーグ会場防衛作戦」

武装勢力が日本政府、及びポケモンリーグとそれに同調する者達宛にテロ声明を発表した。

声明発表に前後して行われた攪乱工作により、日本政府関連の戦力が大きなダメージを受けている。

現在、日本国内には武装勢力に同調する勢力も現れている。リーグ会場付近は武装勢力と同調勢力によって制圧され、我々はリーグ会場内へ追い込まれつつある。

そう、各員が協力して開催したポケモンリーグ会場が武装勢力に占領されつつあるのだ。

ポケモンリーグはポケモンとの平和の象徴であると共に、地球におけるエネルギー問題の解決にも大きく貢献し得るものでもある。

これを手中に収める者は地球全体への影響力を持つことになる。我々はこのような目論見を見過ごすことはできない。

会場に居るポケモンリーグに所属する各ポケモントレーナーは、ポケモンリーグ会場防衛部隊の戦闘序列に入り、先遣隊として戦闘を開始する。

第一に、東京湾を北東へ進軍するへり部隊を迎撃。味方地上部隊反撃への妨げを排除する。

敵は重武装の攻撃へり複数を部隊に配備し警戒している。これを破壊せよ。

今の所、脅威度は低いと考えられる。

しかし、こちらの攻撃により敵も攻撃部隊を増援することを予想しなくてはならない。

その場合、速やかにそれを撃破し優勢を確立せよ。

.....

.....

.....



ポケモンリーグ開会式場の襲撃。その火ぶたを切ったのは正体不明の武装勢力のヘリ部隊だった。

洋の東西かまわず集められた軍用ヘリは武装勢力側の本気度の現れであり……歩兵の火器が駄目でも攻撃ヘリの持つ火力ならばどうだ？ と。そんな大国の思惑が透けて見えるようでもあった。

「迎撃用意！ 全部叩き落とすぞ！」

「チクショウ、まるでベトナム兵になった気分だ……！」

「なら勝つのは俺らだな！」

迎え撃つのは、つい一年前は完全な民間人だったシロ民達。一見すれば民兵以下にも思える彼ら——実際その練度は民兵に毛が生えた程度でしかない——だが、彼らはただのニンゲンでは無かった。

ポケモン化現象の真つ只中を駆け抜けた彼らは、今やスーパーマサラ人として覚醒しているのだ。今までの旧人類とは一線を画す、新人類へと。まるで夢物語の主人公の様な、スーパーマンなのだ。彼らは。

「まだだ、まだ遠い……！ 連中がこつちを狙う為に止まるまで待つんだ……！」

「撃ち落とすんだよな、アレを」

「そうだ！ だが殺すなよ。上手い具合にローターやコックピットのガラスだけを破壊するんだ」

「無茶言いやがる……！」

手持ちのポケモンと視線の高さを合わせつつ身を潜め、彼らは一様に軍用ヘリの群れを睨み付ける。その姿に迷いは無く、士気は極めて高かった。一見すれば勝ち目が見えないというのに。

……彼らだつて、分かっている。この襲撃の裏にあるのは大国の思惑だという事は。日本が利益を独り占めしている——真実はどうであれ、少なくとも外からはそう見える——状況への警告であり、本当に現代兵器ではポケモンに勝てないのか？ そんな疑問からくる実験である事は百も承知だった。

だからこそ、だからこそ負けられない。ここで失点すれば各国はここぞとばかりにつけ込んでくるだろう。スポンサーも黙ってはくれ

まい。せつかく順調なポケモン化の動きも鈍ってしまう。せつかく立ち上げたポケモンリーグも、潰されてしまうかも知れない。……何が何でも負ける訳にはいかなかった。破壊工作の欠片すら、許されはしないのだ。

——スーパーマサラ人と軍用ヘリ。どちらが強いのか……？

誰もが疑問に思いつつ、しかし答えの出なかった問い。その答えが今まさに明らかになるうとしていた。遂にヘリ部隊が海を越え、会場を射程に収めると同時に行き足を止めてホバリングしたのだ。

攻撃ヘリ達が辺りを見回す中、歩兵を降ろす為に——ロープで降りる訓練はされていないらしい——汎用ヘリの群れが地面に着地しようとう慎重に降下していく。十メートル。五メートル。三メートル……

「今だ！ 撃て！ 撃ちまくれ！」

「ブラックホーク、ダウンだ！」

ここがチャンスだ！ そう言わんばかりに屋上や物陰に隠れていたシロ民とポケモンが一斉に攻撃を開始する。

半ば以上にヘリから降り終わっていた武装勢力側の兵員が慌てて散開する中、「タネマシンガン」や「れいとうビーム」が汎用ヘリのローターに直撃。汎用ヘリの群れはその全てが破壊され、二度と飛び上がれなくなり……攻撃ヘリに関してもコックピットのガラスにヒビが入る。視界が塞がった中での攻撃には躊躇いがあったのか、攻撃されたというのに攻撃ヘリの特徴的な四銃身ガトリング式重機関砲は火を吹く事はなく……そして。

「ちわーす。シロ民です」

「——!？」

「すまねえ、ロシア語はサツパリだ」

英語かも知らんが、そつちも分からんと。そんな事を言いながら攻撃ヘリの中へ突然現れるシロ民が一人。

いや、突然ではない。彼の傍らには窮屈そうにしているオニドリル……そう、彼らは今まさに飛んで乗り移って来たのだ！ しかし、そんな事が分かるはずもないヘリパイロットからすればホラーだ。タ

チの悪いホラーでしかない。何で外国人が日本でテロリストやつてるんだ？ と首を傾げるシロ民の意味不明な余裕さも相まって、状況は乙級ホラー映画の様相をていしている。

「――！」

たぶんクソ野郎、とか。そんなスラングを吐きながら、ヘリパイロットが懐から拳銃を抜き放ってシロ民に突き付けようとしてくる。……どうやらヘリパイロットは素人では無いらしい。

それを察しながら、シロ民はスローモーになった視界の中でゆるりと身体を動かし、拳銃を突き付けられる前にその手首を締め上げる。瞬間、発砲音。そして跳弾音が響く中、シロ民はヘリパイロットの手首を締め上げたまま構え――そして。

「『メガトンパンチ』！」

徹頭徹尾、雇われだろうヘリパイロットには訳が分からなかったに違いない。ノーマルタイプの『わざ』である『メガトンパンチ』をモロに受けたヘリパイロットは一撃で意識を刈り取られ、コックピットで白目をむいて伸びてしまう。

必然、ヘリを操縦する者が居なくなつた訳で……突然、ヘリがバランスを崩す。

「ヤベエ……ッ！ オニドリル！」

パイロットが気絶すれば、そりや落ちるよな！ と、そんな事を内心で叫びながら、シロ民は気絶させたパイロットを小脇に抱えつつ慌ててヘリから脱出する。

なんの躊躇いも無く空中へと飛び出し、先んじて出ていたオニドリルの背にそのまま飛び乗る。見れば、同じくやらかしたらしい同胞が、同じ様にパイロットを小脇に抱えてピジョンに乗っていた。

――お前もか……

瞬間、やらかした二人の視線が交差し……しかし、それは長続きしなかった。

爆発音が響いたのだ。墜落したヘリの爆炎とはまた別の物が、立て続けに。

「なんだ!?! しくじったのか……!?!」

見れば、攻撃ヘリの一機がロケット弾を斉射していた。ロケットポットから次々と噴射炎を上げて放たられるそれらは地上のシロ民へと向けられており、あちこちで爆炎が上がる。

汎用ヘリから降りた武装勢力側の兵員からの射撃に対応していた地上のシロ民達は……全く逃げれていない。次々とロケット弾の直撃を受けて吹っ飛ばされてしまっていた。

「何をやってるんだ！ バカ野郎！」

幾らスーパーマサラ人化したとはいえ、あんな物を撃たれては無傷ではられない！ そんな事を頭の隅で憤りつつ、オニドリルのトレーナーはピジョンのトレーナーと示し合わせて、残り一機の攻撃ヘリを落とすにかかる。

どうにもやらかした二人が乗り込んだヘリと違って、件の攻撃ヘリは兵員を乗せていたらしい。中で乱闘になっている様だ。ヘリパイロットはそれに気づいて、撃てるうちに撃ち尽くしてしまう事にした様子……今や機関砲すらもデタラメにバラまいていた。

「オニドリル！ ……突っ込め！ 飛び乗る！」

「クルルウ！」

気絶させたヘリパイロットをオニドリルに任せながら、オニドリルのトレーナーは一瞬「ドリルくちばし」か「つばさでうつ」を指示しようとして……止めた。ポケモンに人殺しをさせる訳にはいかないのだ。ここは素手で制圧しなければならない。

「ぬおおお！」

先んじて突っ込んでいたトレーナーが破壊したらしい攻撃ヘリの兵員用ドア。オニドリルのトレーナーは相棒と共にそこ目掛けて突っ込み……すれ違いざまにオニドリルの背を蹴って勢いよく飛び込む。

反対側から飛び乗ってきたピジョンのトレーナーとぶつかりそうになりながらも、なんとか飛び移る事に成功したオニドリルのトレーナー。彼は同志であるピジョンのトレーナーと一瞬だけ視線を交わし、直ぐにヘリ内部の鎮圧に取り掛かる。

「助けに来てやったぞ？ 後で飯を奢れよ……」  
「メガトンパンチ」

！」

「恩着せがま……ええい、　「マツハパンチ」！　　「からてチョップ」！」

「「みきり」……からの「はどうだん」！」

シロ民二人が新たにエントリーしたヘリ内部は完全な乱闘会場と化す。……が、状況は完全にシロ民優位に進んでいた。誤射を恐れずか拳銃すら撃てず、拳と拳で殴り合うしかない状況でスーパーマサラ人化した人間にただの人間が勝てるはずもない。武装勢力側は数に任せて押し潰す事も出来ず、またたく間にヘリ内部は制圧出来てしまった。

当然、やけくそ気味に機関砲を掃射していたパイロットも即座に気絶させられる。秒殺であった。

「ヨシ！」

「何がヨシだバカ野郎オオオ！」

「逃げるんだよおお！」

操縦者を失って落ちていくヘリから、罵声混じりに脱出し……相棒たる鳥ポケモンへと飛び乗るシロ民一同。

各々気絶させた武装勢力の人間を抱えたり蹴落とした後に回収しているのは何も慈悲によるものではなく、戦後を見据えた利益重点の行動だが……ともかく、彼らは死者の一人も出さずにヘリ部隊を壊滅させた。完膚なきまでに。

「……で、どうする？」

「俺に聞くなよ……取り敢えずコイツらを適当なところに降ろして、地上支援じゃないのか？　知らんが」

「ヨシ。早いところ降ろそう。流星に5人も運べん」

「だな……」

……実験は決した。軍用ヘリといえど、ポケモンとスーパーマサラ人には勝てないのだ。不意をついたとはいえ、ポケモンとスーパーマサラ人が既存人類とは訳が違う生き物であると確信するには充分な結果だろう。

せめて乗組員が全てプロならば……いや、そうでなくてもポケモン

由来のナニカで機体を強化するなりコーティングするなりしていれば違っただろう。だが実際には完全な既存兵器、まして運用者もプロでないとなれば、こうなるのは必然的だったと言える。

「アイツらやりやがった……！」

「負けられないな！」

「行くぞ！ 押し返せ！ 海に突き落としてやれ！」

攻撃ヘリが全機落とされた事で士気が落ちたのか、武装勢力側の旗色が悪くなっていった。地上でもシロ民——攻撃ヘリに掃射されたというのに、死者は出ていない様子——が優勢を取り戻しており……完全勝利は目の前だ。

しかし……事は終わらない。シロ民は所詮民兵でしかなく、ポケモンにも出来ない事はあるのだから。

『至急！ 至急！ コンテナ船を誰か止めろ！ 奴らカミカゼアタックする気だぞ！』

無線で飛び込んで来たのは、コンテナ船の動きだった。なんとコンテナ船が加速し、止まる気配もなく突っ込んで来ているというのだ。誰がどう見ても、体当たりする気にはか見えない。

実のところコンテナ船というのは、あの巨体で案外スピードが出せる代物だ。湾内でこそゆっくり走るが……大洋では二十四ノット、つまり時速四十キロは出せる足の速い存在である。

それが一切ブレーキを掛けずに突っ込んで来るのだ。止める暇は……残念ながら無かった。

「ギャロップ、かえんほうしゃだ！」

「パルシエン、れいとうビーム！」 海面を狙うんだ！」

「ウツボット、ソーラービーム！」 焼き尽くせえ！」

状況に対応出来たのは歴戦のシロ民、その一部だけ。しかし彼らとはとっておきの射撃系必殺技を放ち、コンテナ船の行き足を止めようとする。だが……効果はいまひとつのようだった。装甲でも追加したのか？ それともポケモン由来のコーティングがされているのか？ 暴走するコンテナ船はポケモン達の「わざ」を物ともせず、その速度も保ち続け——そして、勢いよくコンクリートの岸壁へと衝突す

る。

瞬間、地響きが走った。コンテナ船はその艦首をひしゃげさせながらコンクリートを叩き割り、それでも殺し切れない慣性でドリフトして腹と尻も岸壁へと叩き付けてくる。

デカくて重いのがスピードをつけて体当たりすれば、だいたいの物は壊れる。そんな当たり前の事を、シロ民は肌で感じ取っていた。

「無茶苦茶しやがる……!?!」

「クソツタレめ……状況は?」

「スーパーマサラ人が怪我なんぞするか!　むしろ奴さんの方がミンチだぞ、あんなん」

一先ずお互いの無事を確認したシロ民達は、続けて辺りの状況を確認しにかかる。岸壁は……その見た目には大した事は無かった様子にも思えた。ただ単にコンテナ船が横付けしている様にも見えたのだ。一瞬だけ。

そう、一瞬だけだ。当然そんな事はなかった。コンクリートは叩き割られ、あちこちにヒビが入っており……何より、巨大なコンテナ船から無数のコンテナがこぼれ落ちて散乱しているのだ。それは子供が積み木で遊んだ後の様で……しかし、散乱しているのは鉄の塊。アレに押し潰されれば、幾らかスーパーマサラ人といえど無傷ではいられなかっただろう。現場のシロ民は思わず安堵し、無茶苦茶やりやがる武装勢力の正気を疑った。

あれでは船の中身もヒドイ事になっているだろうに、と。だが、その予測は……容易く裏切られる。

「?　なんだ?」

「おい、コンテナが……浮いてるぞ」

岸壁から退避した事で空いた空白地帯。そこにゆっくりといくつかの巨大なコンテナが降ろされていったのだ。

クレーンも使わず、独りでに浮遊しながら。一つ、また一つと。

「ねんりき……いや、サイコキネシスか?」

誰かが呟く。あれは超能力で動かしているのではないか?　と。

正気を疑う発言。しかし、発言者は誰よりも正気だった。事実、そ

れは正しいのだから。

しかし、タネと仕掛けが分かったところでどうしようもない。操り手の姿が見えないのだ。そして……コンテナの扉を内側から叩き開け、ソレが現れる。

「戦車、だと……!?!」

「T-34―85……? ロシア、いや、中東から持ってきたのか!」

「ソ連製の殆ど……いや、アメリカ製もあるな。まあ、中東から間違いないだろ。物凄く砂っぽいし」

「厄介な……!」

巨大コンテナから現れたのは、何両もの戦車達。どこから持ってきたのか分かりそうな骨董品レベルの主力戦車達が……しかし、歩兵相手には過剰ともいえる紛れもない戦車部隊が、次々とシロ民達に対峙する。

状況は、更なる混迷をみせていた……



### 第35話 SATUMA無双

からくも……というよりは余裕綽々とヘリ部隊を撃破し、残敵掃討に入り始めたシロ民達の前に現れた敵の増援部隊。骨董品寸前の旧式とはいえ、複数の主力戦車を前にシロ民達の間には緊張が走る。

勿論、彼らは自分達の勝利を疑ってはいない。しかし、未知数なのも事実だった。誰も戦車と殴り合った事などないのだから。

——スーパーマサラ人とポケモンは、戦車に勝てるのか？

ポケモンなら戦車に……勝てるだろう。一度も戦った事は無いし、破壊した事もない。だが計算上は勝てるはずだった。

しかし、トレーナーの方はどうだ？ スーパーマサラ人といえど人間には変わらない。あちらがご丁寧にポケモンバトルに付き合ってくれる訳が無い以上、トレーナーに直接ダイレクトアタックされる可能性は高いのだ。戦車砲弾の直撃を受けて生存出来るのだろうか？ 何もかもが、未知数だった。

……そして、その答えが今、明らかになる。

「っ！ 来るぞ、散開！」

ググツと。自分達へと砲口を向けた戦車に対し、誰かが叫ぶ。備えろと。

それに対しシロ民達は言われるまでもないと各々行動を取る。ある者は相棒たるポケモンと共に物陰に退避し、ある者は防御系の“わざ”を指示して待ち構え、ある者は撃ち落とさんと攻撃系の“わざ”を指示せんと意気込む。取った行動はバラバラなれど、思考停止してしまう者は一人もおらず。その有り様はエリートポケモントレーナーを名乗るに相応しい機敏さだった。

そして——砲音が轟く。

放たれた砲弾は一発。様子見の一発。

しかし、状況が動くにはそれで充分だった。放たれた砲弾は真っ直ぐにシロ民達へ……その先頭に立っていたイワークとそのトレーナーの元へと向かう。

衝撃。凄まじい金属音が響き、明後日の方向へと砲弾が弾かれる。

砲弾を容易く弾いたのは……イワークの「まもる」だ。いったいどういう原理なのかは未だ不明だが、「まもる」の障壁は「はかいこうせん」すら弾く。戦車砲弾とて貫通出来るはずもなかった。

しかし、そんな事はお構いなしに次々と砲音が響く。一発で駄目なら十発撃ち込んでやると言わんばかりに。事実、「まもる」の障壁は既に消滅しており、連続で使うと不発してしまいやすいという「わざ」の特性上連発も難しい。その行動は正しかった……これがポケモンバトルで、かつシングルバトルなら。

「パルシエン、まもる」だ！

「イワーク、かたくなる」！

武装勢力側に取っては残念な事に、これはポケモンバトルではなくシングルバトルでもない。イワークが「まもる」を使えなくても、他のポケモンがそれをカバーする事が出来るのだ。そしてその間に防御能力を上げる事も。

故に、放たれた砲弾がかん高い音を立てて弾かれる。当たり前の様に。

「サンドパン、まもる」！ 前に出るぞ！

「パルシエン、かたくなる」

咄嗟にローテーションを組んで「わざ」を回し、隊列を整えるシロ民。その動きは実際、機敏。流星はエリートポケモントレーナーと云ったところか。

戦いは一見するとシロ民優位……に思える。だが、かといって、シロ民から攻める事もなかった。砲弾に耐えられているのはポケモンだからなのか、「ぼうぎよ」の高いポケモンだからなのか、分からないからだ。もし後者ならば、迂闊な真似は出来ない……そんな思考が総員突撃を思い留まらせていた。

そう、彼らは迂闊に動けない。イワークを筆頭としたポケモン達の影から出られない。万が一「ぼうぎよ」が高いから耐えているのだとしたら……そう考えると動けない。

かといって指をくわえて見ているだけでもなかった。手すきの者も各々物陰から射撃系の「わざ」を繰り出しているのだ。……とは

いえ、これも戦車を撃破出来ない。……いや、正確には戦車まで届いていないのだ。何者かが“ひかりのかべ”を展開しているせいで。恐らくコンテナを“サイコキネシス”で動かした者と同一存在だろう。かなりレベルの高いエスパー使いの様だ。

しかし、だからといって、このまま千日手を繰り返す訳にはいかない。そんな考えからイワークと同じ“いわ”タイプのサイドンを持つトレーナーが単身前進を試みようとして——瞬間、ナニカが空から降って来る。

「親方！ 空から……老人が！」

「5秒で……いや、は？」

視力に長けた者が落ちてくる老人を目撃した次の瞬間。ネタにネタを返す暇もなく、老人は地面へと着地する。まるで、この程度なんでもないかの様に。シロ民と戦車部隊、その中間地点へと。

いったいなんだって老人が空から降って来るのか？ その場に居る誰もが困惑から手を止めてしまう。なぜ、なぜ……そんな思考の渦からいち早く脱却したシロ民がハッと気づく。いや、それよりも、と。

「爺さん危ねえ！」

どこのボケ老人か知らないが、そんなところに居ては危ない。撃ち殺されるぞと、シロ民は叫ぶ。逃げろと。——老人がどこから来たのかも忘れて。

そして、続いて困惑から立ち直ったらしい戦車の一台が躊躇なく砲弾を放つ。どうせ敵に違いないとばかりに。……それは、正しかった。

「——“かまいたち”」

ポツリ、と。そう呟かれると同時に、一迅の風が吹き、次いで砲弾が爆発する。唐突に。

何が起きたというのか？ 誰にも分からなかった……否。優れた動体視力を持つシロ民は目撃していた。インシデントはコンマ5秒前。老人が振り抜いた刀、そこから放たれた風が砲弾を切り裂くのを！

そして、彼は気づく。老人の顔に見覚えがあるのを。そう、確かあれは……！

「アイエ、アイエエエエ!? SATUMA人!? SATUMA人ナンデ!?」

「どうしたシロ民! 知っているのか!」

ナムアミダブツ! 空から降ってきた老人はSATUMA人だ!

状況を把握出来ないシロ民が何事かと問うが、SATUMAシヨックで東軍の兵士めいて脳のニューロンを一時的に破壊されたシロ民には答える余裕がない。

そうこうしているうちに戦車が動く。アイサツも無しに……あるいはこれがアイサツとでもいうつもりか? 老人目掛けて砲弾を放つ。だが……!

「〃かまいたち〃……!」

ワザマエ! 再び風が吹き、砲弾が爆発する!

間違いない。老人はポケモンの〃わざ〃である〃かまいたち〃を使つて砲弾を両断しているのだ。

もしここに白い少女がいたら〃かまいたち〃の能力を詳細に語り、いかに凄まじいかを語ってくれただろう。一つ言うならば、〃かまいたち〃は別段強い〃わざ〃ではなく、むしろ弱い〃わざ〃だという事か。つまり、あの〃かまいたち〃の威力は老人の実力によるもの……とはいえ多勢に無勢。流石に分が悪いとみたのか、老人がシロ民の元まで素早く飛び下がる。

必然、彼らは視線を合わせる事になった。……お辞儀をするのだ、シロ民。格式ある伝統は守らねばならぬ。

「ド、ドーム、トウゴウⅡサン。シロ民です」

「どうも。シロ民殿。東郷だ」

アイサツは実際大事。古事記にもそう書かれている。

そうオジギしつつシロ民が東郷氏とアイサツを交わし……気づく。東郷氏の着ている和服がはためている事に、いや、彼の周りには常に風が吹いている! それは〃かまいたち〃のチャージが済んでいる証拠に他ならない!

常在戦場。これぞS A T U M Aの教えである。戦いが始まる前から戦いは始まっており、いざ死合うときには決着は既についているのだ。孫氏もそう言っている。

「な、なんという……」

「どうかし「来るぞオー！」ムツ……！」

残念ながら、と嘆くべきか。空気を読めない奴めと罵声を上げるべきか。次弾装填完了した戦車部隊が砲口を揃え、一斉に発砲してくる。

狙いは、イワークを筆頭とした壁ポケモン達ではない。奇っ怪なれど当たれば倒せそうにも思える老人、東郷氏だ。

「イヤアアアッ！」

ゴウランガ！ 年齢に似合わぬ鋭いシャウトと共に放たれた「かまいたち」は見事に飛来した砲弾を切って捨てる。アイサツ後のスキを狙った攻撃は虚しく爆発。

東郷氏はただの老人ではない。歴戦の戦士であり……この惑星上で最もスーパーマサラ人として覚醒している御人であるのだ。戦車砲弾など、そこらを飛ぶハエにも等しい。

それを少なからず察したのか。ならばと戦車部隊は一斉に同軸機関銃を乱射してくる！ さしものS A T U M A人も、「かまいたち」のチャージは終了していない……！

——最早これまでか。

そうシロ民が思う暇もなく、東郷氏は決断的に刀を振るう！ 間違いない。あれはK A T A N Aの基本にして奥義……！

「いあいぎり」……！」

「かまいたち」がチャージ中でも何も問題はない。決断的に「みぎり」、「いあいぎり」を放てば良いのだ。切断され勢いを失った銃弾が、殺虫剤を掛けられた羽虫めいてポトポトと落ちていく。東郷氏の元には一発足りとも届いてはいない。

「……存外、何とかなるものだな」

またつまらぬ物を斬った。そう言わんばかりに刀を払う東郷氏。……シロ民は見た。東郷氏の持つ刀は古ぼけてこそいるものの良く

手入れされた軍刀らしき物であり、そして、傷一つ無い事を。十二カ  
のオーラを纏っている事を。

もしここに軍オタか刀剣オタが居れば東郷氏の持つ刀剣に驚愕し、  
その来歴を問うた事だろう。一つ言うなれば、名刀に分類される軍刀  
というのが存在しており、しかしその数は多くないという事が……

しかし、この場にそんな事まで分かる者は居なかった。故に、シロ  
民は直ぐに現実には直面する事となる。多勢に無勢には変わりない、  
と。ここはシロ民達が東郷氏と連携するしかないだろう。そんな考  
えから東郷氏に提案を行うが……東郷氏はそれを穏やかに奥ゆかし  
く断った。心配は無用だと。

「問題ない。……犬兵とメタングの準備が終わった様だ」

「アイエ？」

どういう意味だ？ と、そう聞く暇もなく、突如として全ての戦車  
が中に浮く！ 数十センチ程ではあるが、しかし、地面から浮き上  
がってその動きを拘束されているのだ。

ユウジヨウ！ 東郷氏をここまで送り届けた彼らが、上空に残って  
いる筆頭犬兵とメタングが戦車を“サイコキネシス”で浮かしてい  
るのだ！ そんな事が分かるはずもない戦車部隊は完全に混乱して  
動きを止めている……！ 千載一遇の好機。

「アブソル」

「クオオ……」

東郷氏はすかさずアブソルをモンスターボールから放ち、声をかけ  
て“かまいたち”のチャージに入る。一拍、最強のスーパーマサラ人  
とアブソルが同時に“かまいたち”を放った！

無数に放たれる風の刃。それは戦車部隊に向かう中で一つにまと  
まっていき、やがて一つの竜巻めいて戦車部隊を襲う。一つの“かま  
いたち”で駄目なら、百の“かまいたち”で斬りつける。そう言わん  
ばかりの攻撃は瞬く間に戦車の装甲を削り取っていき、ついに戦車の  
砲身が生首めいて空を飛ぶ。ナムサン。あれではもう砲は撃てない。  
実際スクラップ同然だ。

だが、まだ生き残りがいる。“ひかりのかべ”の強度が高かったの

か、それとも比較的新しい事が幸いしたのか、一両だけボロボロになりながらも耐えていた。そして、それはギギツと火花を散らしながら砲口を東郷氏とアブソルに向ける。破れかぶれの一撃を放つつもりだ。

「新型か？ 流石にそう簡単には斬れぬか……ならば、アブソル！」  
「ソルウ！」

ジェエツト！ 東郷氏の声を受けてすかさずアブソルが「スピードスター」を乱れ撃ちながら先行する！ 東郷氏も後を追い――アブソルが戦車を追い越すと同時、「スピードスター」を受けて怯んだ戦車をすれ違いざまに「きりさく」！ コンマ五秒遅れて身を翻したアブソルが再度戦車を天から「きりさく」……そして、二人が戦車を挟み込んだと見えた、その瞬間。

「重ね「かまいたち」！」

斬り捨て御免！ すれ違いざまにアブソルと「かまいたち」を重ね合わせて斬りつける合体「わざ」。重ねカマイタチだ！ タツジン！

先行したアブソルが反対側へと回り込み、位置を交換しながらすれ違いざまに「かまいたち」をあびせる！ ただそれだけの「わざ」だが、しかし、その強さは二倍どころの話では無かった。実際、一人と一匹がその場から飛び下がった瞬間、小爆発の花が咲き、砲塔が生首めいて空を飛ぶ。乗員こそ「みねうち」ですまされているが、戦車はスクラップだった。

「……終わったか」

ヒュン、と刀を払い、納刀する東郷氏。その横でアブソルも力を抜いて佇む。

彼らの周りに転がっているのは戦車のスクラップ、スクラップ、そしてスクラップ！ ショツギョ・ムツジヨ。ポケモン化前までは陸の王者として戦場の主力であった戦車達は、いまやツキジのマグロめいて屍を晒していた。インガオホー、時代が変わるときが来たのだ。

「ワオ……？」

「うむ。そうだな、あの子の様子を見に行くでしょう……君、すまない

が後片付けを頼めるか？」

「ア、ハイ。ヨロコンデー！」

東郷氏に頼み事をされたシロ民は危うく失禁仕掛けながらも返答する。逃さず捕縛しますと。実際、武装勢力側は制圧されているとはいえ、逃げ出す事は出来るのだ。これをみすみす逃しては無能シロ民のそしりは免れない。セプクもあり得るケジメ案件だった。

捕縛重点。会場へとアブソルを連れて歩いていく東郷氏を見送りながら、シロ民達は気絶している武装勢力側の捕縛に務める。捕縛された彼ら武装勢力の人員には、背後関係を洗う為に今後極めて厳しいインタビューが行われる事だろう。

それが嫌なのか、逃げ出そうとする者も居るが……忘れてはいけない。東郷氏程ではないが、シロ民もまたエリートポケモントレーナーである。逃げれる訳がない。エリートポケモントレーナーの俺に勝てるもんか。

『客員へ通達。リヴアイアサン号からの救援が到着した。捕縛に強力してくれるそうだ』

そうこうしているうちにリヴアイアサン号から飛び立ったシーホークがシロ民達の元へと到着する。東郷氏が暴れ回ったせいで完全に出遅れた救援部隊の到着だ。

とはいえ、何もしいまま帰る気もないのだろう。明らかに当初の予定とは異なる——戦闘に加わるつもりだったのか、完全武装だった——ものの、彼らもまた捕縛に協力してくれた。

これではスクラップの片付けだけ……そう、思った瞬間。光が天へと走る。

「な、なんだ!?! アレは!?!」

「リーグ会場から、光が……!」

「通信室、おい! 通信室応答しろ! 何が起こっている!?!」  
突然の事態にさしものシロ民にも混乱と同様が広がる。何がどうなっているんだ? と。

騒々しくなる中、メタングに乗った筆頭犬兵が悲鳴混じりに頭を押えて呻く。なんてサイコパワーだ、と。



「なんだって？ どういう事だ筆頭犬兵！」

「サイコパワーだ。俺のメタングどころじゃない。とんでもないサイコパワーの持ち主が、戦っている……！」

「なん、だと……!?!」

サイコパワー。それは即ち「エスパー」タイプのポケモンとしての戦闘力といっても過言ではない。そして、メタングはそれなりに強いポケモンだ。それを上回る……とんでもないサイコパワーの持ち主。

——シロ民には、心当たりがあった。武装勢力の襲来と同じくらい絶対に来ると確信し、むしろその存在を誘い込む為にリーグを開催した側面すらあった……とてつもないポケモン。

恐らく、絶対に不知火シロが出会ってはいけないポケモン。出会ったその日に何が起きるか分かったものではない闇深いポケモン。その名は………

「ミュウツー……！」

いつの間にか、状況は最終局面を迎えていた。

ついに初代最強のポケモンが……やって来たのだ。

## 閑話 大惨事。ポケモン大戦

皆さんこんにちは。

司会のウイリアムです。

今回は二時間の特別放送で、ポケモンと人との歴史を追っていきたいと思います。

突然ですが、皆さん。我々人とポケモンの歴史の始まりはいつたいどこでしょう？ 遙か古代から存在する彼らとの始まりはとても古く、語り尽くせない様に思えます。

ですが、実は明確に始まりがあったのを、ご存知ですか？

「人とポケモンの歴史の始まりをどこかと問われれば難しいです。答えようがありませんからね。しかし、決定的事件がどれかと問われれば簡単です」

人類歴史学の権威、ジョン・スミス氏はそう言います。

「ポケモンリーグ襲撃事件。あるいは大惨事ポケモン大戦。当時そう言われた事件こそ、人とポケモンの歴史、その命運を決定付ける事件でした」

それはなぜ？ そんな疑問にジョン氏はある資料を見せてくれます。人類の二つある歴史書……旧人類歴史書と、ポケモン歴史書です。

「そもそも人類の歴史はポケモンの歴史とぶつかった結果、凄まじい改変を受けています。我々の歴史は二つあるのです。ポケモンの居なかつた歴史と、ポケモンと暮らしてきた歴史。しかし、正しい歴史はポケモンと暮らしてきた歴史の方……なぜ、そんな事になったのか？ それは我々が負けたからに他なりません」

「人とポケモンの差は圧倒的だった。旧人類はポケモンを上位者として受け入れるしかなかったのだ」

旧人類の軍事学を教える、ハンス・シュミット教授は言います。

「旧人類の叡知は、まるで役に立たなかつた。彼らが自信満々で持つ

ていた銃も、砲も、ミサイルも、ポケモンに対してはオモチャ同然だったのだ。だからこそ、今現代、それらは申し訳程度に現存するのみとなっている。そんな物を持つより殴った方が早いとな。実際、波動の戦士”の力は……いや止めよう。ああ正しく、負けるべくして負けた戦いだ。あれは」

ジョン氏は言います。それが決定付けられた事件の始まりはポケモンリーグ開催と同時だったのだと。

「当時ポケモンリーグでは……ああ、本人はこう言われるのを酷く嫌がっていました。しかし、事実として初代チャンピオンと呼ばれる少女、不知火、白のポケモンバトルがデモンストレーションとして行われていました。いえ、行われるはずでした」

それと同時に起きた事とは何だったのでしょうか？

ジョン氏はそれにも答えてくれました。

「暴徒の襲来です。今では信じられないかもしれませんが、当時ポケモンを頑として認めなかった一団が居たのです。彼らはポケモンリーグ開催地の近くでデモを行っていましたが……突然、暴徒化しました。これは複数の勢力がコントロールした結果であり、煽動された暴徒は真っ直ぐにポケモンリーグ開催地へと向かいます。そして、ポケモンリーグ開催地を警備していた警官隊と衝突しました」

その激突は非常に激しい物だったと言います。

その原因の一つとして、ジョン氏は人数差があったと指摘します。

「辿り着くまでに幾らか分散したとはいえ暴徒は数千単位で存在しており、一方の警官隊は数百程度だったと言われています。圧倒的戦力差を前に、警官隊は戦力を集中しなければなりません。それこそ、本来の業務である警備を疎かにしてでも。勿論、それ自体は間違いではありません。目の前に差し迫った暴徒が居るのですからね。しかし、それこそが、敵の狙いでした」

「会場の警備が手薄になった瞬間、彼らはテレポートして来たのだ」

敵の狙いとは何だったのか？

それに詳しく答えてくれたのはハンス教授です。

「かつてのいかなる戦史にも無かった、テレポート戦術が始めて人類の手で実行された瞬間だ。このときテレポートしたのは一隻の大型のコンテナ船……に偽装した輸送船だった。会場の直ぐ近くに現れたこの船には、多数の歩兵、戦車、攻撃ヘリ、汎用ヘリが搭載されており……それが一斉に解き放たれたのだ」

それは歴史上でも類を見ない、テロリストによる異様な奇襲作戦だったと語ってくれました。

「先ずヘリ部隊がコンテナ船から離陸。次いでコンテナ船が……岸壁に激突した。コンクリートを捲り上げながら接岸した船から、戦車部隊が出撃。このとき会場を警備している警官隊は反対側で暴徒に襲われており、彼らテロリストは完全なる奇襲を果たした。会場は無防備だったのだ」

「歩兵、戦車、攻撃ヘリ、汎用ヘリ……限定的ながらも諸兵科連合を編成したテロリストを前に、民間人しか居ないポケモンリーグは成すすべがないかに見えた。しかし、そうはならなかったのだ」

「不知火 白。デモンストレーションのバトルを中止させられたばかりの彼女が号令を下したのです。迎撃せよと。……諸説ありますが、彼女の性格的に間違い無いでしょう。敵対者には容赦無かったそうですから」

ジョン氏は語ります。それこそ、旧人類史に於いて人とポケモンの関係性が方向付けられた、歴史的瞬間だと。

「年端も行かない少女だったと伝わる彼女。そんな少女の号令は、驚くべき事に実行に移されました。無防備な民間人を守る為、ポケモンの未来を守る為、多くの信奉者……シロ民達が立ち上がったのです」  
勇敢にもテロリストに立ち向かった民間人達。しかし、それはあまりにも無謀に思えます……が、ハンス教授はそうではないのだと指摘します。

「ただの民間人でしかない彼らが立ち上がったのは、彼らに大きな勝ち目があったのも大きい。彼らは知っていたのだ。兵器ではポケモンを殺せない。そして自分達もまた、同じである」と

自分達もポケモンと同じ。それはどういう意味なのか？ その疑問に答えてくれたのは、人体のスペシャリストであるアラン・スミシー博士です。

「スーパーマサラ人。当時そう言われていた、新人類としてのアドバンテージ。それこそ、彼らが終始強気でいれた理由でしょう。一説によると当時の彼らは『波動の戦士』として覚醒していたと考えられています。生半可な試練など、容易かったに違いありません。人の力が上か？ ポケモンの力が上か？ それを決める戦いが、あの日始まり、そしてその日の内に終わったのです」

「戦闘の結果など、言うまでも無い。ポケモンリーグ側の圧勝だ」

ハンス教授は当たり前の事だと前置きして語ってくれました。酷くアツサリ終わったその事件の流れを。

「先ず先行したヘリ部隊が叩き落とされた。次いで戦車部隊が撃破され、生き残っていた歩兵部隊も包囲、捕縛された。双方の死者数はゼロだ」

「途中でリヴァイアサン号がポケモンリーグ側に付いた事、メタングに乗った御仁……当時最強だったスーパーマサラ人……サツマ人の参戦が決定的だった様だ。武装勢力は総崩れを起こし、会場に一発の銃弾も撃ち込めないまま撃破された」

「現代兵器群の完全敗北だ。これを受けて、人類はポケモンを受け入れていくしかなくなる。大国……ああ、今や形骸と化した国家という枠組み、その頂点立つ者達は『精鋭部隊なら』あるいは『核兵器なら』と考えたらしいがな。しかし、そんな考えにならざるを得ない時点でお察し物だった。あの日、概ねポケモンを受け入れる方向性に入るしなくなっただけの間違いない」

教授が語った事件の全貌。しかし、ジョン氏はそれだけではないと言います。

「ミュウツウの介入があったと考えて良いでしょう。死者が居ないのも、テロリストがレポートで直接会場に入れなかったのもそれが原

因だど。このテレポートの掌握は非常に強力で、この事件に血を残さず、過激な反対活動を行っていた者達も無力化され、次々と捕縛されたそうです」

「そして、初代チャンピオン。不知火白とミュウツーは少ない時間ですが対談したと伝えられています。どんな会話だったのかは不明ですが……きつと、人とポケモンの良き未来について語り合ったのでしよう」

こうして人とポケモンは共に歩む道へと進んで行きます。

そして、その道こそ、私達のいる今へと繋がっているのです。

ポケモン大好きクラブ会長、スキゾー氏は言います。

「ポケモン、好きですねー」

ポケモンを愛する心。それはこのとき既にあり、その流れが加速していく切欠に繋がっていく……そんな事件だったのです。

### 第36話 やせいのミュウツーがあらわれた！

突如として襲撃されたポケモンリーグ会場。今や全ての観客が避難し、誰も居なくなつたそこ——ポケモンバトル用に特別な調整がされた陸上競技場を備えたドーム——に、私はただ一人佇んでいた。

最初こそ大人しく控え室にジツとしていたのだが、ユウカさんやアイドルコンビが避難民の誘導と護衛に行つてしまつた辺りで……まあ、その、暇になつてこちらに来てしまつたのだ。中止になつてしまつたポケモンリーグ、その大舞台に。

爆発音が響く。この連続した爆発は……ロケットポッドの斉射だろうか？ 以前自衛隊の物を見せて貰つた事がある。それにそっくりだ。

——そんな事をして無駄なのに……  
意地なのか？ プライドなのか？ あるいはもつと実利的な話なのか？ 私としてはかなり和解の為の努力をしたつもりだったのが……結局は力のぶつかり合いになつてしまつた。人類史が始まつて何度となく繰り返されたエゴとエゴのぶつかり合いだ。

これでポケモンはその立場を確固たる物にするだろう。……軍事的な意味合いも含めて。ポケモンが負けるはずがないのだから。「ポケモン同士の戦争は、『波動の勇者』でも描写されていけど……」やがてはああなるのだろうか？ いや、ああしたいのなら、これは必要なステップだ。

世界を、変えたいのなら。  
——革命、か。

ある幼女は言った。平和、革命、戦争。それは終わらないワルツ……Endless Waltzなのだ。

今までは間違いなく平和だった。それが上辺だけの、嘘にまみれた物であっても。ならばここから先は革命、そして戦争。激動の炎が燃え盛る時代がやってくる。

「……良かったのかな。これで」

ポチが入っているモンスターボールを撫でながら、私は立場上言つ

てはならない疑問を口にする。

私だって、一応はヒトだ。幾らポケモンが大好きで、彼らと共に在れるならなんでもするとはいえ。それでも迷う事……はあんまりないけれど。それでも良かったのかと疑問を持たない訳じゃなかった。だって私は………異物だから。

好き勝手にポケモンを広めて、世界を変えてしまつて。

それで増えた笑顔もあるけれど、失われた物だつてあるのだ。勿論、後悔なんてしてない。何度やり直したつて、私はポケモンを広めるだろう。布教するだろう。何度だつて世界を書き換える。ポケモンの無い世界に消えてくれと、何度だつて言うだろう。その責任を命で払う覚悟も……一応は出来ている。最終的にそうなるなら仕方ないと、その程度になら。

それでも、私だつて一応はヒトなのだ。流石にこうも強く反発されると思わずにはいられない。私のやってきた事は……

「やっぱり、間違つてたのかな……」

モンスターボールを撫でながら、言つてはならない迷いを口にす。踏み潰したはずの妄言を。誰にも聞かれていないとはいえ。

——それが、切つ掛けになつたのか。

『ならば、終わるか？　ここに』

瞬間、膝が屈しそうになる程の強烈なテレパシーが脳に直接叩き込まれる！　唐突な、それでいて強過ぎる衝撃に思わずうめき声を上げながら頭を押さえた……丁度その時、競技場の中心部にバチリツと紫電が走つた。

一度、二度。紫電は幾度となく空間を引き裂き——そして。

——あれは、あの姿は……!?

私が眩い紫電に目をつむつた一瞬。その一瞬でどこからともなく現れたのは、人型をしたポケモンだった。くすんだ白い身体、紫色の尻尾、鋭い眼光と重さすら感じるサイコパワーに……強烈なまでの「プレッシャー」！　間違いない。あれは、あのポケモンは！

「ミュウツー……!」

ポケモン図鑑ナンバー150。ぶんるい、いでんしポケモン。



一人の科学者が何年も恐ろしい遺伝子研究を続けた結果誕生した、凶暴なポケモン。遺伝子はミュウとほとんど同じだが、大きさも性格も恐ろしいほど違っている……

——それが、今、私の目の前に居る。

フリーザー、サンダー、ファイヤー……三鳥が編隊飛行を披露——映画「ルギア爆誕」の事を思い出して、すわ世界の滅亡かと焦ったのは今では良い思い出——し、ミュウまでもが出て来てしまったとは聞いていた。

ならミュウツウも当然居るだろうと、そう思っただけ……まさか、まさかこうして目の前に出て来てくれるとは！

湧き上がる歓喜。それを口から出してしまわなかったのは、ミュウツウから敵意にも似たプレッシャーが放たれていたからだ。私を試す様な、様子を伺うような、何とも判断つきかねる重苦しいプレッシャーが。

——これが、ミュウツウの力……！

凄まじい、としか言いようがなかった。まさかゲームの中では大して役に立たず、フリーバーテキストにしか過ぎない「プレッシャー」が、こうまで重苦しい物だったとは！ 放っているサイコパワーもかつてない程に圧倒的で、その力強さには息苦しい圧力や重量を感じずにはいられない。

次の瞬間ひねり殺されてもおかしくないというのに……ああ、私は感動すら覚えていた。最強のポケモンは伊達では無かったと。

そうして、暫く。お互いに動かないまま十秒ばかりの時間が過ぎた頃、ミュウツウが再度テレパシーを発する。強烈過ぎるそれを、ダイレクトに。

『ミュウツウ……確かに、私はそう呼ばれる様だ。そして、やはり、わたしを知っているのだな。不知火シロ』

「当たり前、でしょう……！ 貴方を知らないはずがない！」

『わたしでさえ、わたしが分からないというのに』

「それ、は……」

ゆるり、と。首を横に振りながら自分で自分が分からないという

ミュウツーに、私は返す言葉を失ってしまおう。私は誰だ？ と。その問いに答えを返せないから。

思い出すのは、映画『逆襲のミュウツー』だ。

科学者達の狂気の果て、人工的に作られた最強のポケモン、ミュウツー。誕生と同時に研究所を破壊し尽くしたミュウツーはロケット団の手に落ち、酷使され……ついには人間に絶望するに至る。そうして始まるのが、ミュウツーの逆襲だ。

私は誰だ？

何の為に生まれて来た？

そんな問いと共に。

——文字通り、ミュウツーは生まれたばかりで……いや、だからこそ、か。

まだ赤子でしかないミュウツー。その生まれ、育ち、そして問いは、私にはあまりに重すぎた。映画を見た当時ですらテキストな答えが許されない程に。そして今では……言うまでもないだろう。

ああ、ロケット団に拾われたミュウツーは、力が強いだけのゼロ歳児だったんだ。親も無く、その上——端的に言ってしまうえば——虐待されて育った。ああなるのは必然でしかなく。だからこそミュウツーの哲学的問いは、ひたすらに重い。

『緑豊かな森、遙かな霊峰。そして高く青い空。わたしには、わたしのモノでは無い記憶があった。人間に作られたポケモン。いや、ポケモンですらないポケモン……それがわたしだと』

人工的に作られたポケモン、ミュウツー。彼に掛ける言葉が見つからないまま、私はミュウツーの独白を聞くしかない。心のどこかで、親近感を感じながら。

思わず手のひらの中にあるモンスターボールをホルスターまで戻して……瞬間、ミュウツーが握り込んだ拳にバチリツと紫電が走る。だが、と。

『誰が、わたしを作ったのだ？』

「誰って……」

『科学者だと？ なるほど、不知火シロはそう思うか。……確かに、東

西の大陸のあちこちで、あるいはこの島の中ですら、ポケモンの遺伝子研究は行われている。確かにわたしが生まれる土壌はあるのだろう』

「ッ！ そんな、ポケモンの遺伝子研究!? そんな物を許可した覚えは!」

『事実だ。……だが、そのどれもがわたしを作れる程の物では無かった』

ポケモンの遺伝子研究。そんな禁忌の研究を許可した覚えも、許した覚えも私にはない! だが、確かに、それらはあちこちで行なわれているのだとミュウツーはいう。見て来た様に。

……正直な事を言えば、誰かがやるだろうとは思っていた。全く未知の、大いなる存在の遺伝子は研究に値してしまう。論理感を投げ捨ててのソレすら。だからこそ、私はポケモン絡みの案件には神経を尖らせていた。いや、尖らせているつもりだった。

——甘かった……!」

まだ、まだ足りなかつたんだ。監視が、規制が、理解が、許しが、戦力が、抑止力が! 何一つ足りていなかった! 私の努力は、まるで何一つ……!」

不幸中の幸いは、ミュウツーを作れる程の研究はまだ行われていない事だろうか? まだミュウツーを、クローンポケモンを作れていないというなら……! いや、待て。

——なら、このミュウツーは?

この世界のどこにも、ミュウツーを作れる場所は無かつたのだと、当のミュウツーが言っている。

なら、このミュウツーはいつたどこから……?」

『わたしは、誰に作られたのだ。何の為に』

人間に作られたはずなのに、人間が作っていないミュウツー。

自己矛盾を抱え込んだミュウツーが、私に問いを投げ掛けて来る。誰に作られ、何の為に生まれたのだと。

『わたしには、記憶に無い記憶がある。強さの頂きに至った赤い帽子の少年、ピカチュウを連れた心優しき少年、あるいはわたしを作り出

した科学者……実に多くの記憶が、わたしにはある。わたしではない、わたしの話が』

赤い帽子、ピカチュウを連れだした少年。まさか、レッドと、サトシの事だろうか？ それにミュウツーを作り出した科学者……ポケモン屋敷の所有者であるフジ老人の事か？ それともカツラやオーキド博士？

いずれにせよ、このミュウツーはゲーム版の主人公と、アニメと映画の主人公である二人との記憶に加え、更に大きい経験を経験して記憶している……

——目の前のミュウツーが、逆襲のミュウツーよりも大人びている様に感じるのは……そのせい？

それだけの経験を集めれば、否が応でも精神的に成長するだろう。

いや、だとしても……

『誰かがわたしを作った。だが、誰も作っていないという。記憶も、わたしではないわたしの、夢の話ばかりだ。——お前は、何を知っている？ わたしが知らないわたしを知るモノ、不知火シロ……！』  
そう私の名前を呼びながらギツと睨んでくるミュウツーに、思わず後ずさってしまおう。問いに返せる答えを持たない私には、彼の『プレッシャー』に耐えられない。耐えられるはずがない。息が、詰まる。

ミュウツーの『プレッシャー』にのまれ、呼吸を忘れて呆然とミュウツーを見上げ……しかし、窒息する事も、膝を屈する事も無かった。ただならぬ気配を感じたのだろう。今までを沈黙を保っていたポチがモンスターボールから出て来てしまったのだ。

「グレアアアア！」

「——ッ、ポチ……」

助かった。そう頼れる相棒が来てくれた事に安堵したのもつかの間。私は現実に直面する事になる。

ポチの『いかく』が、効いていない。今までどんなポケモンも怯み、『こうげき』を一段階……いや二段階は下げてきたポチの『いかく』が、ミュウツーにはまるで効いていないのだ。

——やっぱり、ゲームと同じ様にはいかない……！

現実化したポケモンバトルでは、ゲームとは同じ様にいかない事が多々あった。それは“わざ”の応用の幅であったり、そもそもの仕様だったり、“とくせい”の強弱だったりと様々だったが……まさか、ここにきて通常ポケモンと、伝説や幻のポケモンとの『格』の違いを思い知る事になるとは。

これは、ポチの初黒星になるかも知れない。そう嫌な汗が頬を伝い、ポチが全身の毛を逆立てながら唸り声を上げる中。当のミュウツーはポチや私を気にする事もなく、独白を続けていた。あるいは、と。

『お前が、わたしを作ったのか』

「……………え？」

『ポケモンは151匹……お前はそう言った。だから、わたしが作られたのではないのか？ 世界が整合性を取る為に、まだ生まれてもな  
いわたしを作った』

何を、言っているのだろうか？ 私がミュウツーを作った？ 世界の整合性？

私を冷たく見下ろしながら語られたミュウツーの問いは、今や哲学的に過ぎて、妄言の域に入ってしまったている。だが、私はそれを笑えなかった。むしろ心臓を掴まれたかの様に硬直してしまう。心当たりが、あるような気がして。

——私が、ミュウツーを……？

不可能だ。私にいでんしポケモン、ミュウツーを作り出す力は無い。遺伝子をどうこうできる知識も技術もありはしないのだ。そもそも当のミュウツーが言っていたではないか。この世界ではわたしを生み出せないと。

なら、私にも不可能だろう。

不可能、のはずだ。切っ掛けさえ、作れるはずが……………

『自覚は無いか。それとも、無関係か。……いずれにせよ、お前には問わねばならない』

ミュウツーを作れない理由を探して思考の深みに入り掛けた私を

引き戻したのは、やはりミュウツウのテレパシーだった。

問いがあると。

ミュウツウの問い。私にとっては最早鬼門にも等しいそれに思わず息を呑み、見上げていれば……やがて、ミュウツウはポツリと眩く様に問いを投げ掛けてくる。

『不知火シロ、お前は……何の為に生きる？』

「――ポケモンの為に」

『……………そうか、狂っているのか』

失礼な。そう反射的にムツとした私の視界に映るのは、やれやれだと首を横に振るミュウツウの姿だ。……誰がどう見ても、明らかに呆れていた。

——失礼な奴……

ポケモンの為に生きて何が悪い！ そう食って掛かろうとした私を遮ったのは、再びのテレパシーだ。問いはまだ終わっていないかったのか、今度はポチに語り掛けていた。お前も、不思議だった。と。

『お前は、何故そのモノを守る。一匹で生きていけるといふのに、何故。義理か？ それとも責務でも感じているのか？ まさか群れのボスとして認めている訳でもあるまい』

「グラフア……」

『……………なるほど。それは確かに、守らなければなるまいな』

むー……私のときは失笑物だったクセに、強者同士何かシンパシーでも感じたのか？ ミユウツウはどこか苦笑する様に納得していた。なるほどと。

ちよっぴりポチに嫉妬仕掛けて――だが、そんな暇は無かった。ミュウツウのサイコパワーが増大し始めたのだ！ 今までが穏やか過ぎる風だったのだと言わんばかりに、ミュウツウのサイコパワーは空間を揺らす程に高まっていく。今やミュウツウの周りには、風が……いや、嵐が吹いている！

「っ、これは……………」

『お前達の事はある程度分かった。その関係性も。わたしが誰なのか？ なぜ生まれたのか？ それもおぼろげながら見えてきた。……』

だが、まだ分からない事がある。知りたい事がある。そして、知る方法はただ一つ』

「グレア……！」

『そうか。ならば、守ってみせろ！』

ミュウツーが勝負をしかけてきた！

### 第37話 戦闘！ ミユウツー

最初の一撃はミュウツーからだった。

高まりに高まったサイコパワーを無造作に私とポチ目掛けて叩き付けてきたのだ！ それは最早「サイコキネシス」の嵐。ポチは四肢を地面にめり込む程に叩き付け、何とか堪えてみせたが……私の方は耐えるどころではない！ 抗う事も出来ず斜め吹き飛ばされる。このままでは壁に激突してしまうが――！

――私だって、少しは鍛えてる！

空中に吹き飛ばされた後、「サイコキネシス」の効果が切れている事を確認した私は、素早く空中で受け身をとって地面へと軟着陸する。ポチが頑張ってるのに、私だけ壁に叩きつけられて気絶してる場合ではないのだ。

そんな思いを知ってか知らずか、ポチも無事に着陸した私をチラリと見ただけで、直ぐにミュウツーに向き直る。指示をくれと、そう言わんばかりに。

「行くよ、ポチ」

「グレア」

私が吹き飛ばされたのは、奇しくも競技場でポケモントレーナーが立つべき場所、その近くだった。……迷う事なんて何も無い。私はポチに声をかけながら位置につく。ポケモンバトルを始めようと。

競技場の中心部から私を見据える最強のポケモン、ミュウツー。彼とのバトルで最初にすべき事は――

「ポチ」とおぼえ」

アオーン、と。ポチの鋭い「とおぼえ」が響く。戦意向上。これでポチの「こうげき」が一段階上がったはずだ。シロ民の誰も耐えれない「こうげき」が、更にもう一段階。

――その上、タイプ相性も完全にこちらが有利。けど……

これがゲームなら、「あく」「タイプ」のポチに「エスパー」タイプのミュウツーは手も足も出ないはずだ。ポチの攻撃はこうかばつぐんで最低でも倍になるが、あちらの攻撃はタイプ相性によって完全に無



効化出来る……ミュウツーはタイプ一致の「エスパーわざ」を封印してサブの「わざ」で戦わざるを得ず、ポチの「こうげき」が上がっている事を踏まえれば、バトルの情勢は圧倒的にこちらが有利だろう。……これがゲームなら。

そう、これはゲームじゃない。現実だ。現実となった今、ゲーム知識を前提とした戦略は信頼出来ない怪しい物になっていると言わざるを得ない。ポケモンは「わざ」を——練度を気にしないのなら——四つ以上覚えれるし、「わざ」そのものも工夫次第でゲーム以上の効果を発揮したりするのだ。ゲーム知識を頼る気には、残念ながらなれなかった。

——しかも、相手は初代最強と呼ばれた、あのミュウツー……！

そう、ミュウツー、あのミュウツーなのだ。私の相手は！ 間違っても油断慢心出来る相手ではなく、能力値のゴリ押しでタイプ相性をひっくり返してくる可能性すら感じてしまうのが正直なところ……いや、むしろそれを期待してしまっているのが本音だ。最強と呼ばれたポケモンの力は、タイプ相性なんかには左右されるはずがないと。

とはいえ、それはそれとして負けて醜態を晒したい訳でも無く。勝負の最善手を打つことに躊躇は無い。

そうなるとミュウツーの高過ぎる能力値を少しでも下げたいところだが……残念な事にポチではミュウツーの強みである「とくこう」を下げれない。「ぼうぎよ」も直ぐには下げれないし、「すばやさ」も……どうなのだろう？

——一応、「こわいかお」なら「すばやさ」を下げれるけど……

ミュウツーに、あのミュウツーに「こわいかお」が通用するだろうか？ 私は試す気にもならない。それにポチは「こわいかお」を修得してはいるものの、その練度はさほど高く無いのだ。よく使う主力級四つの「わざ」と比べれば、その練度は「わざ」として体裁を保てるギリギリのものでしかない。それをミュウツーにぶつけたところで、鼻で笑われるのがオチだろう。なんならポチにため息を吐かれるまでである。何を考えているんだと。

なら、こちらが能力値を上げるしかない……！　　そうもう一度ポチに“とおぼえ”を指示しようとして、気づく。ミュウツーが沈黙を守っている理由に。

——あれは、“めいそう”……!?

もう使った後だと、だからこれだけのサイコパワーを維持出来ているのだと、そう思っていたのだが……どうやらそうではないらしい。場のサイコエネルギーが、増大している。

——まだ、能力値が上がる……!?

既に二度積んだのか、それともまだ一度目が終わっただけなのか、あるいは二度目の途中なのか。

なにせよこのまま能力値の上げ合いをすれば、ミュウツーの方がどんだん有利になってしまう……まだ能力値を上げたかったのだが、これは、切り上げるしかないか。だが……！

「ポチ、”でんこうせっか”！」

先手までくれてやるつもりは無い！

私は威力偵察がてらポチに“でんこうせっか”を指示する。先ずはミュウツーの出方を伺おうと。彼女もこちらの意図をよんで、あえて弧を描く様に遠回りでミュウツーへと接近していく——音を置き去りして、目にも留まらぬ速さで。

『なるほど、疾い。だが……！』

ポチの“でんこうせっか”は果たして、ミュウツーの反応速度を……超えた！　ミュウツーが振り向くより先に、ポチが後ろに回り込んだのだ。これで初撃は貰った——そう、笑みを浮かべた瞬間。ミュウツー目掛けて飛び上がったポチが、空中で静止する。ミュウツーを目前にして、縫い止められるかの様にピタリと動きが固まってしまったのだ。

——何が……!?

思わず目を見開いたのは、ポチも同じ。当のポチすら何が起こっているのか分からない様で……いや、まさか。

「ミュウツーの“サイコキネシス”……!?!　でもタイプ相性は」

『確かに、わたしの“サイコキネシス”は効かない様だ。が、それなら

空間ごと抑え付けてしまえば、何という事はない!』

「そんな——ッ! ポチっ!」

そんな力技が!? そう驚く暇もなくポチが吹き飛ばされる。幸いにも壁に叩き付けられる前にポチが体勢を立て直し、壁を蹴って衝撃を殺したのでダメージは無いが……

——これじゃ「カウンター」も「かげぶんしん」も意味が無い……!」

期待通りと言って良いのか、ミュウツウはタイプ相性を完全に無視して……いや、無視出来る様に「わざ」を工夫してきている! 直接ポチに「サイコキネシス」を撃つのではなく、ポチの周りの空間に「サイコキネシス」を使って吹き飛ばしたのだ。力技にも程があるが、確かにこれならタイプ相性を無視出来る。

——強い……!」

そうとしか、言いようが無かった。ポチがどうこうじゃない、ミュウツウが強過ぎるんだ。手も足も出る気がしない。

けど……!」

「ポチ、もう一度「でんこうせっか」!」

だからって、はいそうですかと白旗を上げれるか! そんな思いを相棒とシンクロさせ、私はポチに突撃を指示する。追撃とばかりにミュウツウがバラ撒いてきた「スピードスター」の雨に突っ込めと。

正気の沙汰じゃない? そうだろうとも。「スピードスター」は必中技、生半可な策では被弾は免れない。だが、ポチとなら!」

「「きりさく」! 踏み台にしちやえ!」

それは、本来ならあり得ない策。だが見たところミュウツウの「スピードスター」は極めて強度が高い様子……ならば、「きりさく」つもりで爪を立てれば、踏みつけて踏み台にする事が出来るはずだ。

そんな思考を言葉にされたポチは一瞬だけこちらを見やり、しかし直ぐに前へと向き直って、「スピードスター」が着弾するギリギリで爪にエネルギーを回し「きりさく」体勢を整え——

「グラアアア!」

気合一閃! 勢いよく振り下ろされた爪は「スピードスター」へ

と突き刺さり、一瞬だけポチを支える土台となった！ 安定した弾道、恐るべき強度の高さ。それらを全て逆手に取ったポチは“スピードスター”を踏み台に、跳躍！ 次なる“スピードスター”を踏みつけ、更に跳躍！ 八艘飛び！

——眼前、ミュウツー……貫つた！

あの至近距離ならポチは負けない！ そう思わず笑みを浮かべながら“かみくだく”を指示しようとして——次の瞬間。いきなりポチが吹っ飛ばされた！

変化は一瞬。見間違いでなければ突如としてミュウツーとポチの間にあつた空間が炸裂したように見えたが……

「まさか、今のは」

『そうだ。“みらいよち”だ。こうなる事は既に予知していた』

知っているのならば、奇策を用いられようとも対処は容易い。そう冷たい目で私を見下ろすミュウツーに、思わず身震いしてしまう。強い、と。興奮から。

——“みらいよち”は未来を予測し、攻撃する“わざ”。確かに、そういう使い方も出来る……！

エスパークタイプのポケモンとの戦闘経験が少ない事を言い訳には……残念ながら出来ないだろう。言われてみれば道理でしかないのだ。“みらいよち”なら未来を予測し、備える事が出来るのは当たり前の話。柔軟な発想があれば予測出来た結末だ。

どうやら、まだ私はゲーム知識に引っぱられ過ぎていているらしい。そう内心で嘆息しつつ、頭では“みらいよち”の攻略法を全力で模索していた。何か手を打たねばと。だが……

——未来予知なんてどうすれば……？

未来予知。それは単純明快で、だからこそ対処出来ない力……ポチと私の手札では、どうにもできそうにない話に思える。

思わずポチに指示する“わざ”を見失う私を余所に、この程度はちよつとした応用でしかない、そう言わんばかりのミュウツーの手は止まる気配が無い。更なる“わざ”を放つつもりなのか、サイコパワーとは別のエネルギーを体内で増幅させ、手のひらに集め出した。

あれは、あの青い光は……！

『来ないのなら、こちらから行くぞ！』

「ッ!? まさか “はどうだん”!?」

放たれたのは凄まじい生命エネルギーを感じる青い球体。間違いない。 “はどうだん”だ。

よりにもよって “かくとう” タイプの “必中わざ” …… “あく” タイプのポチには『こうかばつぐん』な上に必中。避けようのない致命の一撃……！ 幸いにもミュウツーはタイプ不一致の為、そこまで火力は出ないはずだが、ミュウツーの能力値が能力値。しかもこうかばつぐんの “わざ” とあつては、ポチとてただでは済まない……！

「避け——ポチ、 “かげぶんしん”!」

避けて、と。咄嗟にそう言いそうになつたのを押し殺して、私はポチに “かげぶんしん” を指示する。ゲームでは回避率を上げる不確かな “わざ” でしかないが、現実となったここで、しかも修練を積んだポチの “かげぶんしん” は一味違う！

『これは……!?』

流石、というべきか。ミュウツーは気づいたらしい。バババツと一気に十は数を増やしたポチの残像の一つ一つ、その全てに生命エネルギーが込められている事に。

——けど、今更気づいても……！

もう遅い！ そう内心で言い切ると同時、ミュウツーの “はどうだん” は吸い込まれる様にポチの残像へと命中。必中わざはその効果をいかんなく発揮し、残像を消滅させてみせる。波動エネルギーが込められた残像を、本物と誤認したまま。

そうして本体にダメージを与えられなかった “はどうだん” は、地面を爆散させて土煙をもうもうと巻き上げる。やはり威力は凄まじい様だが……

「当たらなければどうという事はありません。……ポチの “かげぶんしん” はフレアと同じ原理を採用した特別製。 “はどうだん” の特性に甘えて、 “みらいよち” を怠りましたね？ ミュウツー！」

『なるほど、やってくれる……!』

戦闘用の航空機等に搭載されているフレアと呼ばれる欺瞞装置。それと同じ工夫が施されたポチの“かげぶんしん”はデコイとして高い性能を持つ。例えば生命エネルギー……つまりは波動エネルギーをデコイである分身が発する事で、波動エネルギー目掛けて猛進する“はどうだん”の特性を逆に利用してみせたりする事も出来るのだ。さしものミュウツーも“みらいよち”を怠った状態では引っ掛かる他に無い……！

——状況次第ではスキを晒した相手に“カウンター”まで叩き込めるのがポチの“かげぶんしん”なんだぞ？ なめて貰っては困る！

そう思わずニンマリとほくそ笑むと同時、“はどうだん”によって巻き上げられた土煙が“かげぶんしん”諸共ポチの本体を覆い隠してしま……狙い通り！

「行って！ ポチ！ “でんこうせっか”！」

『む、奇襲するつもりか……ッ！』

“はどうだん”が巻き上げた土煙に紛れつつ、更に“かげぶんしん”を利用した奇襲。電光石火の速さで行われるそれはミュウツーの焦りを引きずり出してみせ……いや、待て。

——なんだか、土煙が多過ぎるような……？

というか、土煙に白い霧が混じっているように見えるぞ。なんだ、あの白い霧は？

……白い霧？ ……ッ！ マズイ！

「ポチ！ 戻って！」

『遅い！』

これは罠だ！ そう叫ぶ暇もなく、ポチが霧の中から吹き飛んで来る。また“サイコキネシス”で空間ごと投げ飛ばしたらしい……！

「ポチ！」

私の方へと吹き飛んで来るポチに、思わず、身体が動いてしまう。

未だに体勢を立て直せないでいるポチの飛翔経路に割り込み、受け止めようと両手を広げて——瞬間、衝撃。あまりの勢いに踏ん張りは

効かず、衝撃をモロにくらったお腹から全ての空気が吐き出される。受け止めた痛みもあって私の口からぐうつ、と鈍い苦悶の音が漏れ……気づけば、私はポチを抱き締めたまま地面をゴロゴロと転がっていた。

「あ、うう……だ、大丈夫？　ポチ」

「グラア……」

「良かった……」

一先ずポチの無事を確認した私は口に入った土埃をペツと吐き捨て、ミュウツィの方へと注意を向けたまま、改めてポチの状態を確認する。

……大きな傷はないようだが、毛並みの奥に打撲を受けた跡があった。どうやら「ミュウツィはサイコネシス」でポチの動きを止めたあと、ご丁寧な事に打撃を叩き込んで吹き飛ばしたらしい。

——やってくれる……

何で切ったのか頬からツウーと垂れてきた血を手の甲で拭い去り、私は内心で反省する。視界不良を逆手に取られたなど。

今思えば私とポチは視界が効かないが、ミュウツィからすればテレパシーでザックリとした位置は分かっていたのだろう。当然「かげぶんしん」もお見通しという訳だ。そうなると後はゴリ押し「サイコネシス」でどうとでもなる。なってしまう。

迂闊。私のミスだ。

——それに、あの「しろいきり」……

あの白い霧は偶然発生した物ではなく、ミュウツィの「しろいきり」だ。恐らく「みらいよち」で土煙を利用しての奇襲を察知し、それをあえて助長する為に「しろいきり」を展開。その上で演技すらしてみせる事で私とポチを誘い込んだのだろう。

私の判断ミスには違いないが、それを誘われたのも事実。直接的な戦闘能力や能力値のゴリ押しによる力技だけじゃない、巧妙な捌め手まで息を吐く様に使ってくるとは……

——強い、な。

最強の名は伊達では無かった。そう流石だと、それでこそ最強のポ

ケモン、ミュウツーだと、心のどこかで拍手喝采を叫びながら、私はミュウツーを見上げる。キツと、鋭く睨みながら。まだバトルは終わってないと。

そうしてミュウツーを見れば……気のせいだろうか？ ミュウツーの動きが今までより速い気がする。いや、まさか、〴〵そうかいどう〴〵を積んだのか？ 〴〵しろいきり〴〵に紛れて？

——抜け目がない……！

強過ぎる上に、油断も隙もない。

これじゃ勝ち目なんて見えるはずもないじゃないか。そう折れそうになった心をポチを抱き締める事で繋ぎ止め、闘志を燃やしにかかる私を……ミュウツーは冷めた目で見ていた。なんだ、こんな物かと。

『本来なら相容れない、群れるはずのないポケモンすら統率する事が出来るのが、ポケモントレーナーというものだ。いや、むしろそれこそがポケモントレーナー最大の強みといえるだろう……』

お前もポケモントレーナーを名乗っているのだろうか？ ならば二匹目を出して来いと、一対二で構わないと。暗にそうのたまうミュウツーに、私は返す言葉が無い。

ポチが強い事に甘えて、二匹目はゲツトすらしていないのだ。手持ちはポチ一匹だけ。……今日は反省が多い日だな、私。

——けど、何の用意も無い訳じゃない。

ポチ一匹で充分、というのは本音だが、それはそれとして何の用意もしていない訳ではなかった。その一つが、今私がポチの打撲痕に向かってプシユールと噴射しているアイテム……ああ、ミュウツーも気づいたか。良しさ、今更アイテムの使用を妨害してくる奴じゃないだろうし。

『む、それは……』

「〴〵すごいキズぐすり〴〵です。……プロトタイプですけど」

オボンやオレンの実に含まれるきのみ由来の回復成分を特定、抽出、凝縮し、更に回復装置等を参考にしつつ回復効果を高める工夫——勿論、健康に害が無いもの——が幾重にも施されたのがこのプロト



タイプすごいキズぐすりだ。

勿論、その作成は簡単な話ではなく、莫大な資金を湯水の如く消費し、少数生産するのが限界だったスペシャルでもある。とはいえ、それだけのスペシャル品でも残念ながら本家の初代「すごいキズぐすり」程の回復効果は無く、せいぜい「いいキズぐすり」の倍程度ではないが……

——今は、これで充分。

幸いにもポチのダメージはそう深くはなく、この程度のキズぐすりでもイエローゾーンを脱してくれた。万全にはまだ足りないが、それでもミュウツーに一矢報いるには充分だろう。

そんな思考はポチとシンクロしていた様で、彼女との意思疎通はアイコンタクト一つで済んでしまう。このままでは終われない、意地でも最強様を一撃くれてやろうと。

迷う事は、もう何も無かった。

「行って！ポチー！」

『フン、無策の突撃など……ッ!? いや、これは！』

「でんこうせっかア！」

指示した「わざ」は今まで何度となく使ってきた「でんこうせっか」。しかし、そのスピードは今までの比ではない！文字通り電光石火の速さで駆け抜けるポチは、私の勘が確かなら、ミュウツーの「みらいよち」を覆したはずだ！

——プロトタイプ「スピーダー」三個……使うつもりは、無かったけど！

そう、私は「すごいキズぐすり」の影でポチに「スピーダー」を使用したのだ。戦闘中に「すばやさ」を上げれるアイテム、その——やはり完全再現は出来ず、本家よりも性能が劣る——プロトタイプ品を、三個も。

邪道も良いところのドーピング。出来ればやりたくなかった手だが……それでも、このままじゃ終われないんだ！私はア！

「ポチー！　「かみくだく」ッ!!」

『グッ——!?!』

ポチの脈絡なく上がった「すばやさ」はミュウツウの未来予知を……上回った！ポチの鋭い牙が、「かみくだく」がミュウツウの腕に深々と突き刺さる！

残念ながらミュウツウは怯む事なく、「サイコキネシス」のちよつとした応用で即座にポチを引き剥がしてしまったが……こうかばつぐんのおくタイプの「わざ」が決まったのだ。ただでは済んでいないはず……！

——これなら！いくらミュウツウでも………？ いや、あれは……？

「かみくだく」のクリーンヒット、そのダメージはいかほどか！そうミュウツウの様子を窺っていた私は、直ぐに変化に気づけた。気づけてしまった。

なんと、ミュウツウの傷がみるみる塞がっていたのだ。数度まばたきしているうちに「かみくだく」で受けた傷が、殆ど完治してしまう程に早く。あれは、あの「わざ」は！

——「じこさいせい」……ッ！

そういえば、ミュウツウは「じこさいせい」を覚えるんだったな。そう頭のどこかで他人事の様になると同時に、私は膝を屈さない様に意識して足に力を入れなければならなかった。だって、あれ程苦労して、道具を使う事でミュウツウに悟らせずに「すばやさ」を上げるなんていう一度きりの小細工までして、そうしてようやくつけた傷も秒速で無かった事にされる？

駄目だ、考えるな。勝ち目が、無いなんて。そんなはずは……

『——ここまでのようだな』

「ッ………！」

私が逃げに入ったのを、悟られた？ まだだ、違う、まだ私は戦える。まだ私はここに立てる！

一瞬に走った思考は、しかし、直ぐ様ガラスが砕ける様な音と共に否定される。続いて聞こえるのはどこかから迫ってくる歓声と怒声にも似た鬨の声。ふと見上げれば、何かが……いや、会場を覆っていたらしいバリアが砕け散って消滅し始めていた。これは……

「まさか、バリアを張りながら私とポチと、バトルを……!?」

『そうだ。……こうも速く破られるつもりは無かったのだがな』

存外、出来る御仁が居る様だ。そう空を見上げながら感心の声を上げるミュウツーに、私は返す言葉も無く呆然とするしかない。

だって、ミュウツーは私とバトルしていたんだぞ？ にも関わらず、バリアの維持までしていた……つまり、私とのバトルは片手間でしていたに過ぎないのだ。舐め腐ったマネ。だが、それでもなおミュウツーは強く、私はミュウツーを追い込む事すら出来なかった。文字通り一矢報いただけ……

——強過ぎる……！

維持していたのが「リフレクター」か「ひかりのかべ」か、あるいは両方なのか。なんにせよ本来なら自分の周りに展開するはずのそれを、会場を覆うように展開していたのだ。

それはまるで『ミュウツーの逆襲』で島を改造していたミュウツーの様に。会場をバリアで覆いながら、片手間で私とバトルをして……それで、あの強さ？ 強過ぎる。強過ぎるとしか言いようがない！

——それでこそミュウツー……だけど。

もしミュウツーが本気になれば、今の私では手も足も出ないのだろう。ずっとやりたかった本気のポケモンバトルは、しかし、私の力不足を露呈させただけだった。

強さにあぐらをかく暇なんて、最初から無かったんだ。私に。

だけど、いや、だからこそ。

『まあ、良い。『みらいよち』も絶対ではない……それが分かれば充分だ』

「……どこへ行くつもりです。勝ち逃げですか、ミュウツー」

『わたしは引き分けでも構わないが?』

「いえ……そんな事をされても、私が惨めになるだけです。貴方の勝ちですよ、今回は」

『フツ、そうか……』

「ええ」

「グラー」

今回は、今回はミュウツウの勝ちだ。認めよう。ポチが強過ぎた時代は終わり、ミュウツウが強過ぎる時代がやって来た。今回は私とポチの負けだとも。だが、それでも。だからこそ。

そんな私と、鋭い視線を向けるポチに、ミュウツウは一瞬だけ笑みを浮かべて……一拍、眩いばかりの紫電を走らせ、どこかへとテレポートしていった。

「……ポチ」

「グルルウ」

「うん、そうだね」

会場に残された私はポチと短く言葉を交わし、お互いの心情を告白する。ああ、そうだとも。ポケモンバトルとは、こうでなくては。

遠くから駆け寄ってくるお爺ちゃんやシロ民の皆を見ながら、私はそつとポチの背を撫でる。次は勝ちたいね、と。そんな事を呟きながら――

## 掲示板 閉幕、ポケモンリーグ

【戦いは】 お絵描き配信者シロちゃんについて語るスレ part 2

80 【終わった】

240：名無しの犬  
我々の勝利である。

241：名無しの犬

ポケモンリーグ協会の旗の元に、東アジアは統一されつつある。  
戦争の終わりは近い。

243：名無しの犬

バンザアーイ！

246：名無しの犬

大本営発表乙。

249：名無しの犬

勝利、勝利か……？ まあ、勝利か。

250：名無しの犬

>>>249

お、そうだな（無数に発生した所々の問題から目を逸らしつつ）

251：名無しの犬

（目を覆うような惨状から）逃げるんだよおー！

253：名無しの犬

>>>251

貴様ア！ 逃げるな!! 責任から逃げるな!!

255：名無しの犬

アツハイ。

256：名無しの犬

アツハイ。

257：名無しの犬

アツガイ。

258：名無しの犬

アツガイ。

- 260：名無しの犬  
ジオン水泳部が居るぞ！  
261：名無しの犬  
逃がすな！ 捕まえろ！  
268：名無しの犬  
つても実際問題逃げるしかねえだろ、こんな状況じゃ。  
責任取るべき連中とか、真っ先に保身に回ったぞ？  
271：名無しの犬  
回答を差し控えます。  
273：名無しの犬  
調査中の為コメント出来ません。  
274：名無しの犬  
再発防止に努めます。  
275：名無しの犬  
恐らくそういう事もあつたとは思いますが。  
276：名無しの犬  
想定外の事態です。  
277：名無しの犬  
痛恨の極みであります。  
278：名無しの犬  
秘書がやりました。  
279：名無しの犬  
誠に遺憾であります。  
280：名無しの犬  
マニュアルありません。  
283：名無しの犬  
役立たずめ……  
284：名無しの犬  
マニュアル通りにやっていますというのは、アホの言うことだア！  
285：名無しの犬  
利権がそんなに好きかあ！

289：名無しの犬

政府機関に出入りしているとビビるよな、チラホラレベルの低い奴らが議員やってる事に……

290：名無しの犬

政治家と政治屋は違うってそれ一番言われてるから。

292：名無しの犬

政治家じゃなくて政治屋とか声のデカいだけの奴が上に行けちゃうの、民主主義と選挙システムの致命的欠陥よな。

296：名無しの犬

それにしたってだろ。

幾ら無傷な場所を探す方が難しいまであるとはいえだぜ？ 政府機関が軒並みダウンしてるのはどうなのよ。

300：名無しの犬

襲撃事件の間、議事堂は暴徒に取り囲まれて出入りすら出来ず、警察、消防、救急は通報（デマ多数）でパンク状態だったんだっただか？

305：名無しの犬

都庁まで黙らされた辺り、周到に用意された攻撃だよな、これ。

308：名無しの犬

言うに及ばず、だな。

どこもかしこも暴徒とデマで機能麻痺を起こしてたし。

309：名無しの犬

まあそもそも議員や職員がハニトラで落ちてたり、鼻から裏切り者だったりしてるし……こうもなるわ。

310：名無しの犬

うーん、この。

318：名無しの犬

こんな状態なのを目にしてるから、余計にシロちゃんの事を止める気にならないのよな。

何がどうなろうと良いぞもつとやれとしかならん。

322：名無しの犬

止める気にならないというか、鼻から止めるつもりが無いという

か。

323：名無しの犬

元々現代世界自体が革命期の兆しを見せてるからな。変なのに革命されるぐらいなら……こう、ね？

325：名無しの犬

元々シロちゃんは推しだし、シロ民はポケモン化前の敗北者アなので革命上等なものもあるけど……

この程度で壊れるなら、ポケモン化した方が強くなるよね？ 幸せだよね？ つていう。

326：名無しの犬

ラスボス思考乙。

329：名無しの犬

大丈夫大丈夫。反復横跳び並の高速革命は日本のお家芸だから。

330：名無しの犬

一日でも早く全人類にポケモンを布教してスーパーマサラ人化させなきゃ……

331：名無しの犬

人類革新の日ですね分かります。

335：名無しの犬

まあ、その為にも基礎基盤にしてる日本を立て直さないとだろ。俺らだけじゃ困んで棒で叩かれるのがオチだし、仲間は増やさないとな。

338：名無しの犬

ポケモン沼に沈めなきや（使命感）

340：名無しの犬

確認なんだが、現状だとどこか手が空いてるんだ？

自衛隊が辛うじて余裕がある感じか？

343：名無しの犬

いや、自衛隊も余裕が無いな。あと海保も。

海と空の両面で国境侵犯が相次いだらしい。陸自が辛うじて余裕があったけど、今回の一件で独自に即応体制へ入ったから……余裕つ



て余裕は無いな。

346：名無しの犬

ズタズタじゃねえか！

350：名無しの犬

もう何年も前からネタにされてた脆弱性が現実には露呈した形だな。

色んな媒体で脆い脆いとは言われてたのに……

353：名無しの犬

暴徒鎮圧に機動隊が出動するレベルだったからな……さもありな  
ん。

355：名無しの犬

出動（なお到着、展開出来た部隊の数）

360：名無しの犬

右を見ても暴徒、左を見ても暴徒。後ろを振り返ればデマが溢れ返り、前には戦車部隊が勢揃い。更に上空にはテロリストの攻撃ヘリが飛ぶ。

これなーんだ？ ……いや、良く生きてたな？ 俺ら。

363：名無しの犬

我ながら頭おかしい現場に居たんやなって。

365：名無しの犬

いまさら

366：名無しの犬

戦車が出て来た辺りで色々諦めたよね。うん。

367：名無しの犬

俺はヘリが飛んで来た辺りで察したぞ。色々。

369：名無しの犬

ホント、頭おかしい現場だったわ……映画か何かって言いたくない。  
る。

攻撃ヘリと輸送ヘリの群れに突っ込んで行った奴ら、アドレナリン  
ドバドバだったろ。絶対。

372：名無しの犬

楽しかったです（小並）

373：名無しの犬  
ハリウッド映画に出てる気分だったな。

375：名無しの犬

>>373

とびきりのアクション映画にな。

376：名無しの犬

君の力が必要だ！ 的な前フリもあるにはあったので、アクション映画としては実に王道的な展開でしたね。後は核兵器的な何かがあれば完璧でした。

378：名無しの犬

ところがどっこい……………映画じゃありません……………！

現実です……………！　これが現実……………！

379：名無しの犬

ぐにゃあ。

380：名無しの犬

ホント意味不明にも程があるわ。

まあ、乗ってたのが海外の傭兵だったりした辺り、あのヘリだの戦車だのはテロリストの身内外からの戦力なんだろうけど…………

382：名無しの犬

あつちとか、あつちとか、あつちからの戦力でしょうね。威力偵察とか脅しを兼ねつつ、それでいて証拠を残さずに強めに日本やポケモンを殴れるってなると…………まあ、ああなるよなど。

385：名無しの犬

あつち（太平洋の向こう）

あつち（大陸の方）

あつち（大陸北側の方）

さて、どれだろうな？

390：名無しの犬

欧州のどっかと紅茶が抜けてるぞ。

392：名無しの犬

紅茶別枠なのか…………

393：名無しの犬  
だって、ねえ？

395：名無しの犬

まあ、うん（過去の悪行を見つつ）

396：名無しの犬

なんでや！ 紅茶さんはちよつと舌が三枚あるだけやろうが！

397：名無しの犬

三枚舌外交

399：名無しの犬

それもう外交じゃなくて嘘八百並び立ててるだけなんよ。

400：名無しの犬

貫き通せば嘘もまかり通るから……

402：名無しの犬

まかり通つちや駄目なんだよなあ。

405：名無しの犬

余裕を持つて優雅たれ、という事だ。

407：名無しの犬

優雅、優雅……？

408：名無しの犬

後ろから刺されそう。

409：名無しの犬

刺すのは紅茶さんなんだよなあ。

410：名無しの犬

後ろから刺すのがジョンブル流。

411：名無しの犬

背中を見せた方が悪い。

414：名無しの犬

そういう意味だと政府機関が刺されたのは残当でしかないんだよな。

正面切つて殴り合ってたのは、どつかの大馬鹿野郎どもだけだし。

416：名無しの犬

大馬鹿野郎（ポケモントレーナー）

417：名無しの犬

大馬鹿野郎（ポケモンリーグ協会）

420：名無しの犬

あの大混乱の中で統制を保ちつつテロリストに反撃、撃退し。その後もリーダーシップを発揮して問題に対処し続け、事態収拾に多大な貢献を果たした組織があるらしいですよ？

まあ、俺らなんですけどね。

422：名無しの犬

政府機関へ俺ら、とかいう方程式が成り立ってしまう現実。

423：名無しの犬

渦中に居た訳だから、多少はね？

424：名無しの犬

ポケモンに関しては一番詳しいのはうちのトップと俺らだし、細々したのもポケモンパワーでなんとでもなるからな。というかなったからな。

426：名無しの犬

（事態收拾ぐらい）やってみせろよ、シロ民！

427：名無しの犬

（ポケモンなら）なんとでもなるはずだ！

428：名無しの犬

ポケモンだと!?

429：名無しの犬

（テロリストどもめ）逃がすかア！

430：名無しの犬

やっちゃいなよ！ そんな偽物（エセ識者）なんか！

431：名無しの犬

マフティー・ナビユ・エリン……！

432：名無しの犬

敵を抱え込んでいるんだ！ 色々とな！

435：名無しの犬

厄介な物だな、生きるというのは……

436：名無しの犬

ここからが地獄だぞ！

439：名無しの犬

身構えている時に死神は来ないものだ、シロ民……

443：名無しの犬

マフティー構文やめい

446：名無しの犬

便利だよなマフティー構文……

450：名無しの犬

これからシロ民総出で政府機関に反省を促すダンスですね、分かり  
ます。

453：名無しの犬

テロリストに反省を促すダンスでは？

455：名無しの犬

マフティーがテロリストなんだよなあ……

456：名無しの犬

マフティーだからな。

458：名無しの犬

それもマフティーだ。

460：名無しの犬

マフティーとは？

461：名無しの犬

ああ！

462：名無しの犬

マフティーはマフティーだろ。

464：名無しの犬

マフティーはマフティーだからこそ、マフティーなのだ。

468：名無しの犬

マフティーはマフティーとして反省を促さなければならない。

470：名無しの犬

マフティーの持つマフティー性が人をマフティーにするのだ。

475：名無しの犬

やがて人類はマフティーとなり、マフティーはマフティーとしてマフティーになるだろう。

485：名無しの犬

やめろ

500：名無しの犬

最近思うんだよ。今ならクーデターとか革命とかやつても成功するんじゃないかって。

しないけど。

503：名無しの犬

それはそう。

505：名無しの犬

トップが権力に興味無いのでね……

507：名無しの犬

なんなら俺らも言う程興味無いしね……

508：名無しの犬

清廉さを感じる。100マフティーポイントを進呈しよう。

510：名無しの犬

なんの役に立つんだ……

513：名無しの犬

ま、なにはともあれ、だ。

あの混乱を收拾したポケモンリーグ協会、及びその構成員への評判はウナギ登りって訳だ。ポケモントレーナーが子供の成りたい職業ナンバーワンになるのも時間の問題よ。

514：名無しの犬

コイキングがギャラドスに進化するレベルでな。

515：名無しの犬

鯉の滝登りかな？

516：名無しの犬

ぬふふ……

517：名無しの犬  
面白い奴だな、気に入った。殺すのは最後にしてやる。

518：名無しの犬

(。D。)

520：名無しの犬

(。D。)

521：名無しの犬

>>520

コッチミンナ。

522：名無しの犬

こういうケースは前にもあったよな？

524：名無しの犬

いつも平気でやってる事だろうが！ 今更御託を並べるな！

530：名無しの犬

そんなあ……

555：名無しの犬

そういえばさ、ポケモンバトルの時、ポケモントレーナーが立つ席

……あれなんて言うんだろうな？ シロちゃんWikiには特に何

も書かれてないし……

558：名無しの犬

さあ？

559：名無しの犬

知らんな。

560：名無しの犬

私にも分からん。

561：名無しの犬

そのうち名前が付くだろう……たぶん。

563：名無しの犬

マウンドとか？

564：名無しの犬

ボックスとか？

567：名無しの犬  
野球じゃねえか！

569：名無しの犬  
ピッチャーマウンドとバッターボックスか……参考にもならんだろ、それは。

571：名無しの犬

(目逸し)

572：名無しの犬

(目逸し)

601：名無しの犬

ああそうそう、ポケモンバトルで思い出した。

ヤバかったよな？ 記録映像。

604：名無しの犬

ああ、ヤバかった。

607：名無しの犬

ヤバ過ぎだろ、あれは。

610：名無しの犬

シロちゃんが二匹目を探すレベルだからな……

612：名無しの犬

>>610

マジ？

613：名無しの犬

>>612

マジ。

シロちゃん、割とマジで二匹目を探してるらしい。

619：名無しの犬

ミュウツー相手に手も足も出なかったからなあ。

623：名無しの犬

確かに、戦力強化するなら手持ちを増やすのが手っ取り早いしな。

630：名無しの犬

ただなあ。シロちゃんには悪いけど、無理だろ。





へを更に倍にしないと駄目だな。勿論、俺らとポチネキの間にある奴な。

698：名無しの犬

ミュウツターの強さが想像出来んのだが……

702：名無しの犬

ミュウツターがフリーザ様だと置き換えれば……

705：名無しの犬

つまり俺らはヤムチャだった……？

708：名無しの犬

ちよつと人間やめたくらいで調子にのっちはいけないってハツキり分かんかね。

711：名無しの犬

レベル高過ぎんよおー

726：名無しの犬

レベル高過ぎるってのは禿同。ミュウツターは“わぎ”だけみてもヤバいからな。ちな、シロちゃんの体験談と会場の定点カメラに残された映像を解析した結果判明した、ミュウツターが使用したと思われる“わぎ”一覧がコレ。

・サイコキネシス

・スピードスター

・みらいよち

・はどうだん

・しろいきり

・こうそくいどう

・じこさいせい

・リフレクター

・ひかりのかべ

その他にもテレポルトやテレパシーを使用しており、更に“れいとうビーム”や“すなあらし”、何らかの近接わぎや各種バリア系のわぎ等、シロちゃんに気づかれないように使った“わぎ”も多数あると思われる。……どうやって勝てと？

730：名無しの犬  
なあにこれえ。

731：名無しの犬  
意☆味☆不☆明

732：名無しの犬

これの何が恐ろしいって、それ全部が主力級の練度なんだよなあ。

735：名無しの犬

手慰みや牽制用のサブじゃなくて、どれも当たれば必殺級の「わざ

ばかり。不発とかもしてないし……ヤバイよな？

737：名無しの犬

ヤバイ。マジヤバイ。

740：名無しの犬

会場を覆ってたバリアとかガチガチやったんやが？ SATUM

Aおじじが凄まじい音を立てながらナマス切りにしてもヒビが入る  
だけだったんやが??

742：名無しの犬

あれで片手間なんだよなあ。

744：名無しの犬

片手間（片方で全力のシロちゃん&ポチネキとバトルしつつ、片方  
でSATUMA人の鬼気迫る猛攻を耐え凌ぐ）

747：名無しの犬

SATUMA人側しか見てないけど、音が……こう、違ったんだよ  
な。バトル漫画かロボツトアニメみたいな音してたもん。

749：名無しの犬

バキッ！ ガゴッ！ ズドッ！

750：名無しの犬

ギャキーン！ ズゴーン！ ズギューン！

751：名無しの犬

ブツピガン！ ブツピガアアーン！

755：名無しの犬

マジでブツピガンを聞くことになるのは、このエリートシロ民の目

を持ってしても（以下略）

758：名無しの犬

なおブツピガンの連発に長時間耐え抜くミュウツウのバリアよ。  
なお片手間かつサブの“わぎ”な模様。

762：名無しの犬

バケモンかよ……

774：名無しの犬

俺なんてまだ三つしか“わぎ”を主力級に出来てないってのに。

やせいのミュウツウはいったい幾つの“わぎ”を……

775：名無しの犬

ミュウツウヤバすぎワロエナイ。

778：名無しの犬

手際が良いトレーナーと、才能のあるポケモンが組んでも四つから  
そう多くはならないからな。良いとこ六個か七個。

にも関わらず、よ。

781：名無しの犬

ポチネキもいっぱい“わぎ”を覚えている様に見えて、本気のバト  
ルに使える“わぎ”はそう多くないからな。やっぱりだいたい四つ  
ぐらいになる。

“はかいこうせん”とか、威嚇用の魅せ技でしかないし。なおそれ  
で蹴散らされる俺ら。

784：名無しの犬

まあ、時間をかけたりマニユアル化出来たりすればまだ多くなるだ  
ろうけど……

ミュウツウ、ただの野生ポケモンなんだよなあ。

786：名無しの犬

専門の訓練無しに、自己鍛錬だけであのレベルである。

789：名無しの犬

最強のポケモンは伊達は無いという事か……

792：名無しの犬

得意にしてそうな“サイコキネシス”に至ってはちよつとした応

用までしてるからな。

いやホント、タイプ相性をちよつとした応用で無視するのやめちくりー

793：名無しの犬

サイコパワーのちよつとした応用だ……

795：名無しの犬

直接“サイコキネシス”が効かないのなら、周りの空間に“サイコキネシス”をかければいいじゃない。

797：名無しの犬

なぜそうなる

800：名無しの犬

実際有効だからな……なお他のポケモン。

804：名無しの犬

無理ぞ。

エスパタイプポケモンを持つてるニキから言わせれば、明らかに異常なレベルだからな。どう訓練を積んでもサイコパワーが足りないらしい。……元々のパワーが段違いなんだろうな。あれ。

806：名無しの犬

サイコパワーとはいったい……

807：名無しの犬

サイコフレームか何かなんだろう。もしくはゲッター線。

809：名無しの犬

おうオカルトやめーや。

815：名無しの犬

この上、場に居るだけで膝を屈しかける程の“プレッシャー”まであるんだもんな、最強さん。

818：名無しの犬

フフフ、怖かろう。しかも脳波コントロール出来る！

820：名無しの犬

マジだから手に負えねえ……

823：名無しの犬

相棒との絆が無ければヤバかった。

825：名無しの犬

ポケモンへの愛が無ければヤバかった。

827：名無しの犬

シロちゃんへの忠誠心が無ければヤバかった。

829：名無しの犬

シロちゃんとなあ、俺もなあ。

830：名無しの犬

シロちゃんへの愛が無ければヤバかった。

833：名無しの犬

チラホラ変態が混ざってますね……

834：名無しの犬

変態は吊るせ！

835：名無しの犬

豚は処刑だ！ 慈悲を見せるな！

836：名無しの犬

鳥の羽をむしる様に、一センチ四方の肉片にしてくれるわ！

839：名無しの犬

東経一〇五、北緯二〇、地点口のニ。繰り返す、地点口のニ。

842：名無しの犬

神仏照覧……！

847：名無しの犬

来やがれ、ツラ見せろ。出て来い、チェーンガンが待ってるぜ……

850：名無しの犬

いたぞお、いたぞおおおおおおおお！

853：名無しの犬

出て来いクソツタレエエ！ 化け物めえ、チキショー!!

854：名無しの犬

機銃弾200発とチェーンガンを、フルパツク。それでも生きてい

られる動物はいないはずだ……

857：名無しの犬

シロ民は既に既存生物とは違う定期。

860：名無しの犬

精鋭シロ民（スーパーマサラ人）なら、一分間に600発の徹甲弾を発射可能ッ！ 30ミリの鉄板を貫通出来る重機関砲だア！ で撃たれようと、生きていられるからな。

862：名無しの犬

にしたって変態に対しての辺りが強くない……………？

864：名無しの犬

そりや（身内から犯罪者出してれば）そうもなる。

866：名無しの犬

しかも撃つても死なないし、気楽だよねと。

867：名無しの犬

人間やめてるからなあ。

869：名無しの犬

なお人間やめた程度ではポケモンには勝てず、最強さんには近づけない模様。

871：名無しの犬

インフレにも程があんだろ常考。

874：名無しの犬

いつからこの世界はインフレバトル漫画になったんですかねえ……………？

876：名無しの犬

割と最初からの気がする…………

890：名無しの犬

速報。シロちゃんダブルバトルを推奨へ。

892：名無しの犬

マ？

895：名無しの犬

確認した。二匹目に悩んでた理由これか…………

897：名無しの犬

ミュウツーにボコボコにされたの、よっぽど悔しかったんだろう

なあ。

何としても次は勝つという決意を感じる。

900：名無しの犬

困んで棒で叩けば強い奴にも勝てる。人類史にもそう書いてある。

901：名無しの犬

一対一のポケモンバトルで勝てないからといって、一匹のポケモンに拘ってはならぬ。百匹のポケモンをぶつけるのだ。

903：名無しの犬

実際シングルバトルだとトレーナー要らないシーンがちまちなあからなる。特にポケモン側が優秀だと、余計に。

904：名無しの犬

その点、ダブルだと連携とか状況判断とかが一気に難しくなるからなあ。そうなるとトレーナーの指示が必須になってくる。

というか、トレーナーが居ないと同士討ちし始める奴らも居るし。

907：名無しの犬

ダブルバトルこそ、トレーナーとしての真の実力が試されるって訳だ。

910：名無しの犬

まあ、シングルバトルはブリーダーとしての育成の腕前と、後は読み合いぐらいだからな。

真の実力って意味合いならダブルバトル以上じゃないと見せれない力が多い。

913：名無しの犬

やっぱりいつかはやるつもりだったけど、ミュウツーに負けた事を受けて練り上げた……って事なんだろうなあ。

925：名無しの犬

ところでさ、先ずはポケモンリーグスタッフの練度を向上させる事で……ってあるけど、これ俺らの事では？

928：名無しの犬

俺らの事ですね………え？ ミユウツー戦を見越してらっしやいます？



931：名無しの犬

シロちゃんとポケモンバトルするのはご褒美。

そう思ってた時期もありました。

935：名無しの犬

仮想敵がミュウツーなのは良い（良くない）

対ミュウツー対策訓練での仮想敵役をシロ民が引き受ける（??）

940：名無しの犬

死んだな（俺ら）

948：名無しの犬

それでも！ それでもSATUMAおじじと犬兵が何とかしてくれると信じて……！

955：名無しの犬

悲報。SATUMAおじじと犬兵、関西地方のジョウト化進行度調査へ。

960：名無しの犬

終わった……

962：名無しの犬

皆死ぬぞ!?

964：名無しの犬

だが今日じゃない（諦め）

966：名無しの犬

やってみせるしかないか……

968：名無しの犬

やってみせろよ、シロ民！

969：名無しの犬

なんとでもなるはずだ！

970：名無しの犬

ポケモンバトルだど!?

……

……

……